東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 21

東京大学本郷構内の遺跡

法学政治学系総合教育棟地点

2025

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 21

東京大学本郷構内の遺跡

法学政治学系総合教育棟地点

2025

東京大学埋蔵文化財調査室

巻頭図版 1

調査地点全景

SK25_ 土層堆積状況

SK25

SK171_ 土層堆積状況

SK171

SK92_ 遺物出土状況

SK92

SU202・SU366・SU381・SU400

SK42

SK42_ 出土遺物

例　　言

1. 本書は、東京大学法学政治学系総合教育棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本地点は、既出の年報、論文などには、「法学系総合研究棟地点」と記載されている。
3. 本地点の略称は「HLS03」とする。出土遺物への注記は旧略称「LS03」を用いている。
4. 本地点は東京都文京区本郷７丁目３番１号、東京大学本郷構内に所在している。
5. 本地点は「文京区№47 本郷台遺跡群（文京区本郷五丁目・本郷七丁目・弥生二丁目、時代：〔旧石器時代〕〔縄文時代〕〔弥生時代〕〔古墳時代〕〔平安時代〕〔近世〕、種別：包蔵地・集落・貝塚・その他の墓・社寺・屋敷・その他（町屋））」内に位置している。
6. 本地点の調査面積は 946㎡である。
7. 調査期間は、平成 15 年（2003）２月 17 日～同年４月 18 日である。
8. 本地点の事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、成瀬晃司・大成可乃が担当した。
9. 本書の編集は担当者協議の上、大成が行った。
10. 執筆分担は以下の通りである。

    報告編

    第Ⅰ章　大成可乃

    第Ⅱ章　大成

    第Ⅲ章　大成・成瀬晃司

    第Ⅳ章　大貫浩子（人形・玩具類、瓦以外）、小林照子（人形・玩具類）、石井龍太（瓦）、香取祐一（銭）

    小結　大成

    研究編

    阿部常樹、石井、大成、香取、高橋怜土、成瀬、宮崎勝美、湯沢　丈
11. 阿部常樹氏（國學院大學学術資料センター）と高橋怜土氏（八戸市博物館）には動物遺体の分析と同定を、宮崎勝美氏には文献調査を、石井龍太氏（武蔵大学人文学部）には瓦の調査を委託し、玉稿を頂戴した。記して感謝したい。
12. 遺構写真は成瀬・大成が、巻頭図版５は小川祐司が撮影した。
13. 遺物の実測は、今井雅子、坂野貞子、石井が、合成用遺物写真撮影は、青山正昭が、デジタルトレース・写真合成は加藤理香が、遺物図版版組は、相川美香子、今井、加藤が行った。遺構図のデジタルトレース及び図版作成は渡邊法彦が行った。
14. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場 4-6-1）、東京大学工学系研究科附属柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡 414）内にて保管、運用、管理している。
15. 本書（pdf 形式）及び本調査に関わる遺構写真、遺物写真（jpeg 形式）、遺構一覧表、遺物観察表、陶磁器・土器組成表（xlsx 形式）は、東京大学埋蔵文化財調査室公式 Web サイト内「オンライン刊行物」（https://www.aru.u-tokyo.ac.jp/publications.html/）で公開している。
16. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して敬意を表する。（敬称略、五十音順）

    加藤建設株式会社、東京大学施設部

発掘調査支援

　加藤建設株式会社

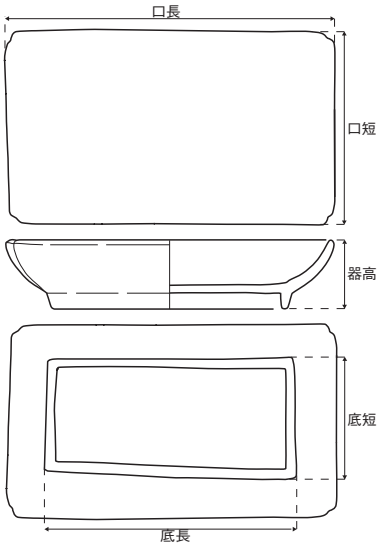
整理作業参加者

　市川ここね（立正大学学生）　相川美香子　阿部常樹　青山正昭　石井龍太　今井雅子　大貫浩子　加藤理香、香取祐一　川原良子　小林照子　坂野貞子　野村遊　渡邊法彦（埋蔵文化財調査室）

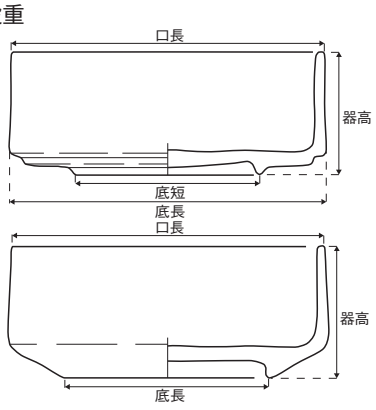
凡　　例

1. 本文中に記載した遺構の略号は以下の通りである。
   SB：建物跡　SD：溝　SE：井戸　SF：炉　SK：土坑　SL：便槽　SP：小穴　SU：地下室　SX：性格不明遺構
2. 遺構実測図の縮尺は、各々の図版に記した。
3. 遺物実測図は基本的に 1/3 であるが、それ以外は個別に示す。
4. 遺構断面図に記載された標高は、東京湾平均海面(T.P.)を基準とし、基標番号「郷(2)」本郷七丁目3　東大赤門前(T.P.:23.4105 m)から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお「郷(2)」の値は、平成 12 年 7 月東京都土木技術センター(現：東京都土木技術支援・人材育成センター)刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。
5. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
   ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
   ・＼――／は、口唇部の口銹を表している。
   ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
   ・－　－は、断面を表している。
6. 本文中に記載した遺物分類のうち、陶磁器・土器類は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」(いわゆる東大分類の最新バージョン(Ver4.1)である『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類(東京大学埋蔵文化財調査室 2016)に、人形・玩具類は「東京大学構内遺跡出土土人形・玩具の分類」(安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012)に、瓦類は「江戸時代の瓦における江戸式の展開」『史学研究集録』(加藤　晃 1989)、「江戸瓦の変遷－加賀藩本郷邸出土の瓦について－」『國學院雑誌』(加藤 1992)に準拠している。
7. 本書では、本地点西側を南北に延びる国道 17 号線について、江戸期は「中山道」、明治期以降は「本郷通り」と呼称する。
8. 本地点の調査で用いたグリッドは、南北軸(X 軸)に算用数字、東西軸(Y 軸)にアルファベットをあて、北西角交点をグリッド名称とする 5m グリッドを設定した。A1 グリッド杭は、X= － 31864.212、Y= － 6667.157 であり、グリッド南北軸は方眼北に一致する。
9. 遺構平面図に記載した方位記号は、平面直角座標系による方眼北を示し、真北より 2 分 35 秒西偏している。

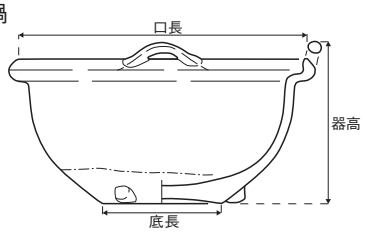
変形皿



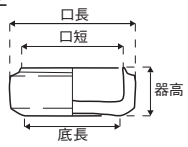
段重



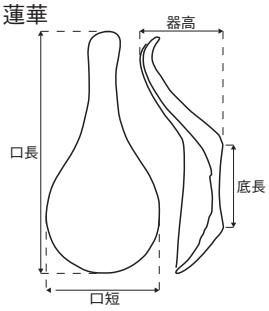
鍋



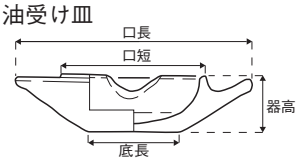
合子



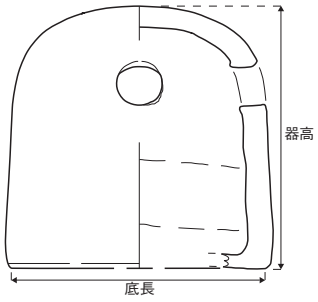
蓮華



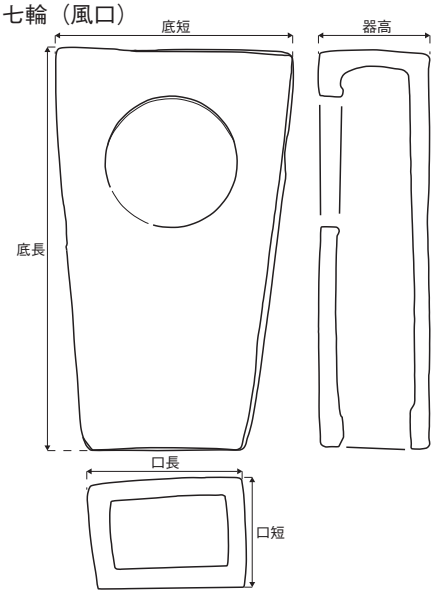
油受け皿



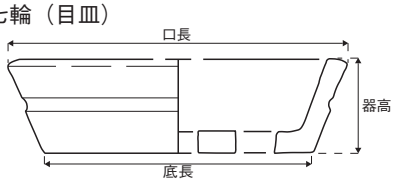
手焙り



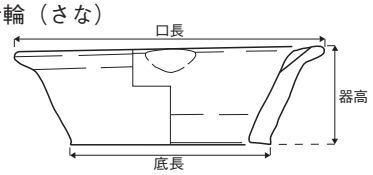
七輪（風口）



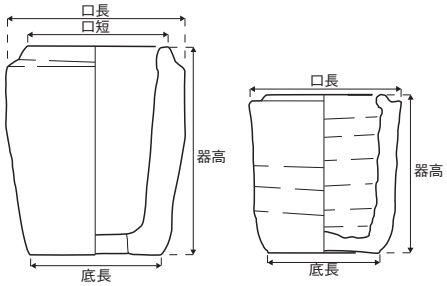
七輪（目皿）



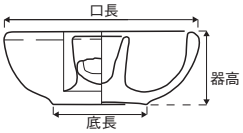
七輪（さな）



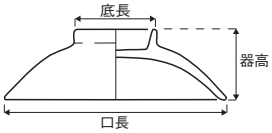
塩壺



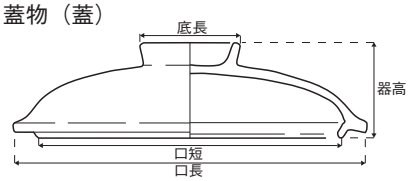
ひょうそく



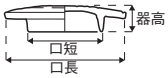
碗（蓋）



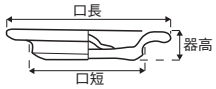
蓋物（蓋）



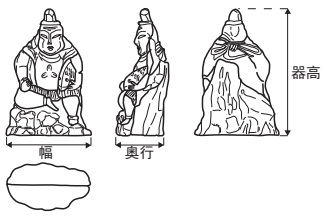
壺・甕（蓋）1

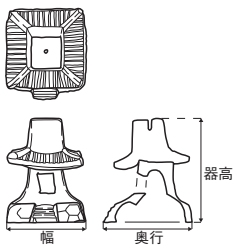


壺・甕（蓋）2

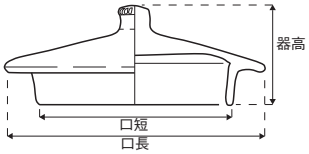


人形・玩具

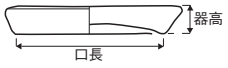




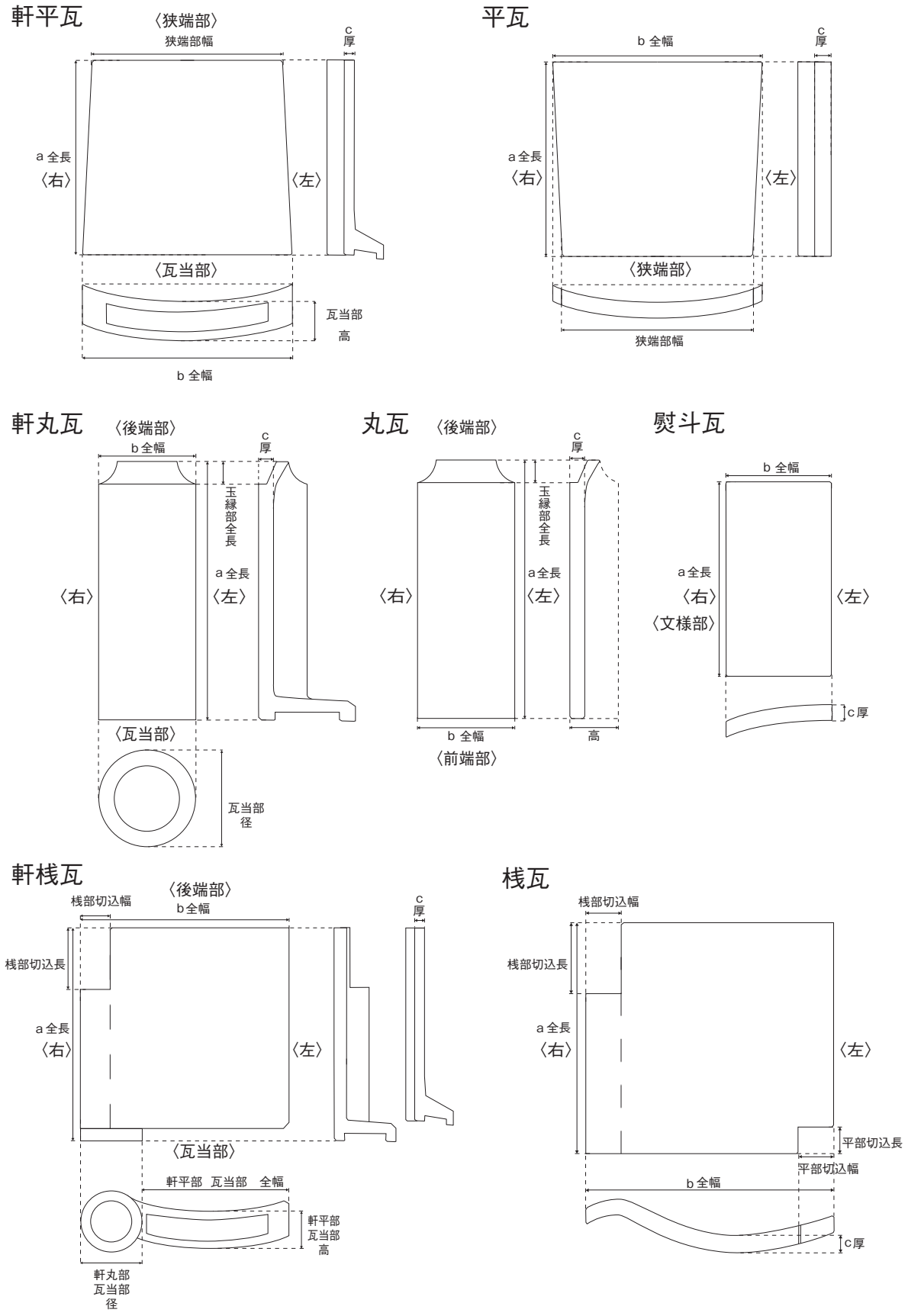
土瓶（蓋）



塩壺（蓋）

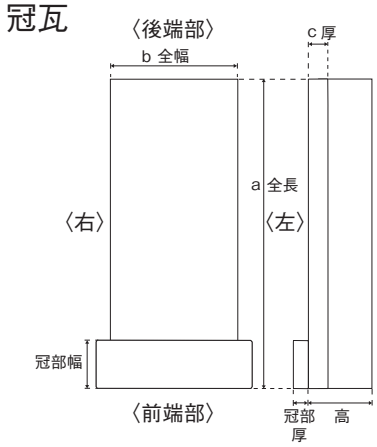


磁器・陶器・土器・人形・玩具　凡例

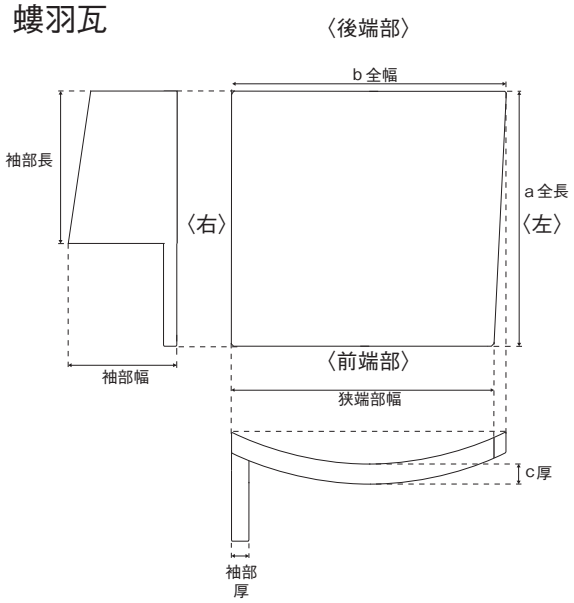


瓦凡例(1)　軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、熨斗瓦、軒桟瓦、桟瓦

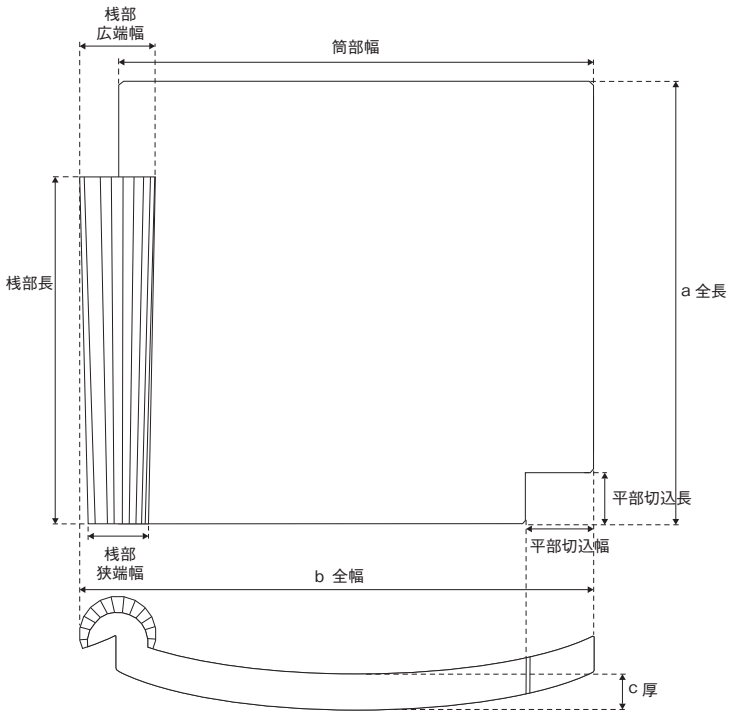
冠瓦



螻羽瓦



蝋燭桟瓦



瓦凡例(2)　冠瓦、螻羽(けらば)瓦、蝋燭桟瓦

東京大学本郷構内の遺跡
法学政治学系総合教育棟地点発掘調査報告書

目　　次

巻頭図版
例　　言
凡　　例
目　　次
遺構一覧表

報 告 編

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　調査地点の位置と周辺調査 ……3
第２節　地理的・歴史的環境 ……4

第Ⅱ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯 …… 10
第２節　調査の方法と経過 …… 10
第３節　調査の概要 …… 10

第Ⅲ章　検出された遺構 ……11

第Ⅳ章　出土遺物 ……56

小　結 ……160

陶磁器・土器、人形・玩具分類コード ……163
参考文献 ……172

研 究 編

研究１　天和３年(1683)本郷森川宿先手組屋敷地の加賀藩への譲渡をめぐって　宮崎勝美 …… 177

研究２　調査地点からみた加賀藩本郷邸北西隅の変遷とその利用　大成可乃 …… 187
追補　加賀藩邸絵図面の補正について　香取祐一 ……216

研究３　SK25 と「西ノ穴」　成瀬晃司 …… 227

研究４　構内遺跡出土「茶道具」の検討　輸入陶磁を対象として　湯沢　丈 …… 245

研究５　瓦資料の分析　石井龍太 …… 255

研究６　法学政治学系総合教育棟地点出土動物遺体　阿部常樹・高橋怜土 …… 263

報告書抄録

遺構一覧表（1）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
欠番	1							
SP	2	B2		1	68		>25	②
SP	3	B2		1	68		>25	②
SK	4	C1・C2		ローム	13		>16・162	②
SK	5	B2	18c	1	14	1	>26・383	①
SP	6	D3		ローム			>7	
SP	7	C3・D3		ローム			6>	
SP	8	C2		ローム			>19	
SP	9	C2・D2		ローム			>17	
SK	10	C4・D4	17c 後葉～ 18c 前葉	ローム	15	1	>81	②
SP	11	C4・D4		ローム			>81	
SP	12	C3・D3		ローム				
SP	13	C2		ローム				
SP	14	C4・D4		ローム	69			①
SP	15	D4		ローム				
SU	16	C1	18c	ローム	73		4>	①
SP	17	C2・D2		ローム			9>	
SP	18	C4		ローム				
SP	19	C2		ローム			8>	
SP	20	C3		ローム			>98	
SX	21	C4		ローム			>32・93	
SK	22	C2	18c	ローム			>24	(①)
SP	23	C2		ローム			>24・34・84	
SP	24	C2	18c 後	ローム			22・23>、>84	
SK	25	A2・B1・B2	Ⅵb	ローム	17	1～28	2・3>、>382・383・488	②
SK	26	A2・A3・B2・B3		1	16		5 > ,>89・90・102･383	
SP	27	C4		ローム				
SP	28	C4		ローム				
SB	29	D5		ローム	2		29-1>82・85 29-2>83・88	②
SP	30	C4	18c	ローム	69		31>	①
SD	31	C3～12	Ⅴb	ローム	4	28～30	>30・33・198・259・289・297・363・385・386・424	①
SP	32	C4		ローム			21>、>93	
SE	33	C3	Ⅲb	ローム	5	31	＞31	
SP	34	C2・C3		ローム			>35・84	
SK	35	C2・C3		ローム			34>、>172	
SK	36	D5	17c	ローム	18			①
SK	37	A3	17c	ローム	19			(②)
SP	38	A3		ローム				
SX	39	A3・A4・A5・B3・B4・B5・B6		1	79	31	87>、>108･119・167・221	
SK	40	C1		ローム			16 の天井上にかかる	
SK	41	D11	18c 後	ローム	22	32		①
SK	42	D10・D11・E10・E11	上層（Ⅵb～Ⅷa）、下層（Ⅵ～Ⅶ）	ローム	22	32～39	80・152・154・277>、>44・138・139・154・250・458	
SP	43	E10		ローム			>154	
SK	44	E10・E11	18c 後～ 19c 初	ローム			42>	
SK	45	E9・D10・E10	18c 後葉	ローム	20	40	>47・48・49・251	
SE	46	E10	17c 後葉～ 18c 初頭	ローム	6	41	>47	
SK	47	E9・E10		ローム			45・46>	
SP	48	D9・D10		ローム			45>	
SP	49	E10		ローム			45>	
SD	50	D14・E14		ローム			56>、>126・127・149	②
SP	51	D14・E14		ローム			>125	
SK	52	E14・E15	18c 前	ローム				
SP	53	D14		ローム	70			
SK	54	D14・D15		ローム				
欠番	55							

遺構一覧表（2）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
SK	56	E14		ローム			>50	
SE	57	F14	18c 前葉	ローム	7	41	58・140>、>324	
SK	58	F14	18c 後葉	ローム	21	42	>57・140・243・244・323・324・354	①
SK	59	F13	17c	ローム	23	42		(①)
SE	60	D13	Ⅲb（近代遺物含）	ローム	8	42、43	>155	
SK	61	E13・F13	17c 中葉～後葉	ローム	24	44	121>、>130・337	
SK	62	E12・F12	18c 前	ローム			>351	
SK	63	F12		ローム				
SP	64	E12	19c	ローム	71	44	76>	
SK	65	F12		ローム				
SP	66	E11・E12	19c	ローム	71			
SP	67	E11		ローム				
SP	68	E12		ローム	71			
SP	69	E11		ローム				
SK	70	D14・D15	17c 前葉	ローム	25	45	71>、>129	
SK	71	D15		ローム	25		>70	
SP	72	E11		ローム				
SP	73	D12		ローム				
SP	74	D12		ローム				
SP	75	D12		ローム				
SK	76	E12		ローム			>64	
SU	77	D12	17c 後葉～ 18c 中葉	ローム	75	45 ～ 47	253・254・273・274・334・336 は天井部で直接切り合ってはいない	②
SP	78	D14		ローム				
SP	79	D14		ローム				
SP	80	E11	18c	ローム	71	48	>42	
SK	81	C4・D4		ローム	26		10・11>、>101	②
SP	82	D5		ローム			29-1>	
SP	83	D5		ローム			29-2>、>88	
SP	84	C2		ローム			23・24・34>	
SP	85	D5		ローム			29-1>	
SK	86	C1	Ⅷb ～Ⅷc	ローム	27	48、49	>382	①
SK	87	B5	Ⅷc	1	28	49、50	>39・221	①
SK	88	D5		ローム			29-2・83>	
SP	89	A3		ローム			26>	
SP	90	A2・A3		ローム			26>	
SP	91	B3・C3		ローム				
SK	92	C5	Ⅷb	ローム	29	50 ～ 53	>233・292	①
SP	93	C4		ローム			21・32>	
SP	94	C4	18c	ローム	69			①
SP	95	B3		ローム				
SP	96	B3		ローム				
SP	97	C6・D6		ローム				
SP	98	C3		ローム			20>	
SP	99	D7		ローム			>100・228	
SP	100	D7		ローム			99>	
SP	101	D4		ローム			81>	
SP	102	B3		ローム			26>	
SK	103	C1・C2		ローム			>382、422	
SP	104	B3		ローム				
SP	105	D6		ローム			>397	
SP	106	D2		ローム			>107	
SP	107	C2・D2		ローム			106>	②
SK	108	A4・B4	17c 後葉	ローム	30	53	39 >	(②)
SK	109	D7	17c 中葉	ローム	31	53	>293・296	②
SK	110	C2・C3	18c 前	ローム				
SP	111	B4		ローム				
SP	112	B3		ローム				
SP	113	D6		ローム			>114	

遺構一覧表（3）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
SP	114	D6		ローム			113>	
SP	115	D2・D3		ローム			>168	
SP	116	D7		ローム			>117	
SP	117	D7		ローム			116>	
SP	118	D6		ローム			>198	
SX	119	A4・B4	17c 後	ローム	80	54	39>	
SP	120	B3		ローム				
SK	121	E12・E13	Ⅵb～Ⅶ	ローム	32	44、54	>61	②
SK	122	D13・E13		ローム			>273	
SP	123	D13		ローム			>153・254	
SP	124	D13・E13		ローム				
SP	125	E14		ローム	70		51>	
SP	126	D14・E14		ローム			50>	
SP	127	D14		ローム			50>	
SP	128	D14		ローム				
SP	129	D14・D15		ローム			70>	
SP	130	E13・F13		ローム			61>	
SP	131	E9		ローム				
SP	132	E9		ローム				
SP	133	E9		ローム				
SP	134	E9		ローム				
SP	135	E13		ローム			>136	
SP	136	D13・E13		ローム			135>、>267	②
SK	137	D13・D14・E13・E14	18c	ローム			>267	
SP	138	D11		ローム			42>	
SK	139	E11		ローム			42>、>250	
SU	140	F14	18c 前葉	ローム	74	55	58>、>57・323・324	①
SK	141	C12		ローム				
SK	142	E9	Ⅷ	ローム	33	55、56		①
SK	143	E9	Ⅷd～Ⅸ	ローム	34	56～58	>496	①
SP	144	D12		ローム				
SK	145	C13・D13	17c	ローム	35			②
欠番	146							
SP	147	D13		ローム	8			②
SP	148	D14		ローム	70			
SP	149	D14		ローム			50>	
SP	150	D14		ローム				
SP	151	C13		ローム	72			
SP	152	E10	19c	ローム			>42	
SK	153	D13	17c、19c（中心は 17c）	ローム	36	58	123・155>、>156・254	
SP	154	E10		ローム			42・43>	
SK	155	D13・D14		ローム	8		60・256>、>153・156	②
SP	156	D13		ローム	8		153・155>	②
欠番	157							
SK	158	E11・E12	18 後	ローム	38	59～62	>334・457	②
SP	159	C10		ローム				
SP	160	D10		ローム				
SP	161	D5		ローム				
SP	162	C1・C2		ローム			4>	
SE	163	B5	17c 中葉	ローム	9	62	>300	
SP	164	C5・C6		ローム			>165・388	
SP	165	C6		ローム			164>、>198・388	
SP	166	C7・D7		ローム			>211・302	
SX	167	A4		ローム			39>	
SK	168	C2・C3・D2・D3	17c 後	ローム	37	63	115>、>176	②
SP	169	D5		ローム				
SK	170	D6・D7	17c 後	ローム	39	63～66	>210・212・281・397	①
SK	171	C8・D8	18c 後	ローム	40	67、68	>312・315・370・392・412・433・492	①
SP	172	C3		ローム			35>	

遺構一覧表（4）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
SP	173	C6		ローム			>429	(①)
SP	174	D5		ローム				
SP	175	D5		ローム				
SP	176	C2		ローム			168>	
SP	177	B5		ローム			>189	
SP	178	D5		ローム				
SP	179	C7		ローム			>211	
SP	180	C7・D7		ローム			>211	
SP	181	D7		ローム			>211・212・376	
SP	182	C4		ローム				
SP	183	C6		ローム			>198	(①)
SX	184	B5・C5		ローム			>231	
SP	185	D5		ローム				
SP	186	D7・E7		ローム			>187・400	
SP	187	D7・E7		ローム			186>、>366・400	
SP	188	B5		ローム			>189	
SP	189	B5		ローム			177・189>	
SK	190	B5・B6・C5・C6	Ⅷ	ローム	41	68、69	>219・231	②
SK	191	B8	18c 中葉	ローム	42	69		②
SX	192	B8		ローム				
SP	193	D7		ローム			366 の天井部上	
SK	194	D6・D7・E7		ローム			>316	(①)
SX	195	C7・D7		ローム			>302	
SP	196	B5		ローム				
SP	197	B5		ローム				
SX	198	C6・D5・D6	17c	ローム	81		31・118・183>、>211・239・240・295・299・301・402・403・429	②
SP	199	D5		ローム			200>	
SP	200	C5・D5		ローム			>199・201	
SP	201	C5		ローム			200>	
SU	202	D7・D8	18c 前	ローム	76	70	>315	①
SK	203	B7・C7	17c	ローム	43	70		
SP	204	B5		ローム				
SP	205	B7		ローム				
SP	206	D9		ローム			>207	
SP	207	D9		ローム			206>	
SP	208	C9・D9		ローム			>229	
SP	209	C7		ローム				
SK	210	D7	Ⅲｂ～Ⅳａ	ローム	44	70	170>、>212・228	
SK	211	C6・C7・D6・D7	17c 中葉	ローム	44	71	166･179・180･181･198>、>212・302・303・376	②
SK	212	D7		ローム	44		170・181・210・211・377 >	
SP	213	D6		ローム				
SP	214	D6		ローム				
SP	215	D6		ローム				
SK	216	C8		ローム	45			
SP	217	B5		ローム			>218・219	
SP	218	B5		ローム			>219	
SK	219	B5・B6		ローム	46		190･217･218>、>287・288	②
SP	220	B6	19c	ローム			>221	
SK	221	B5・B6	17c 中葉	ローム	48	71	39･87･220>	
SE	222	B8	17c 中葉	ローム	10	72		
SP	223	D9		ローム			>224	
SP	224	D9		ローム			223>	
SP	225	C5		ローム				
SP	226	C5・C6		ローム				
SK	227	C7		ローム				
SP	228	D7		ローム			99・210>	
SK	229	C9・D9		ローム			208>	
SP	230	D6		ローム				

遺構一覧表（5）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
SX	231	B5・C5		ローム			184・190>、>288・305	
SP	232	D9		ローム				
SX	233	C5		ローム			92>	
SP	234	C8		ローム				
SP	235	C8		ローム				
SP	236	B6		ローム				
SP	237	B8・C8		ローム			>238	②
SK	238	B8・C8		ローム	47		237>	①
SP	239	D6		ローム			198>	
SP	240	D6		ローム			198>	
SP	241	D11		ローム				
SP	242	D11		ローム				
SK	243	F14	17c	ローム			58>、>244・263	
SK	244	F13・F14	18c	ローム			58>、>243	
SP	245	D11		ローム				
SP	246	D10		ローム				
SP	247	D10		ローム				
SP	248	D10		ローム				
SP	249	D11		ローム				
SK	250	E11		ローム			42・139>	
SP	251	E10		ローム			45>	
SP	252	D13		ローム	8			②
SK	253	D13		ローム			>254、77 の天井部上	
SK	254	D12・D13		ローム			123・153・253>、77 の天井部上	
SK	255	D9	18c 前葉	ローム	49	72	>322	
SP	256	D13・D14		ローム	8		>155	②
SP	257	C13・D13		ローム				
SK	258	E14・E15・F15	18c 後	ローム				
SP	259	C10		ローム			31>	
SP	260	C11		ローム				
SP	261	E11		ローム				
SP	262	E11		ローム				
SK	263	F14		ローム			>243	(①)
SK	264	F13・F14		ローム				
SK	265	F13・F14		ローム	50	72		
欠番	266			ローム				
SK	267	D13	18c 前葉	ローム	51	72	136・137>	
欠番	268							
SP	269	E13		ローム			270>	
SP	270	E13		ローム			>269	
SP	271	E13		ローム				
欠番	272							
SK	273	D12・D13・E12・E13		ローム			122>、77 の天井部上	②
SD	274	D12・E12		ローム			77 の天井部上	②
SP	275	E13		ローム				
SP	276	D10		ローム	3		>279・449	②
SB	277	D10・D11		ローム	3		>42・279・449・450	②
SP	278	D10		ローム			>279	
SK	279	D10		ローム			276・277・278・339>、>280	
SK	280	C10・D9・D10		ローム	52		279>、>331・339	
SP	281	D6		ローム			170>	
SP	282	D6		ローム				
SP	283	B6		ローム				
SP	284	D7		ローム				
SP	285	B7		ローム				
SP	286	B6		ローム				
SX	287	B5		ローム			219>	
SX	288	B5		ローム			219・231>	
SP	289	C8		ローム			31>	
SP	290	D6		ローム				

遺構一覧表（6）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
SP	291	D6		ローム				
SP	292	C5		ローム			92>	
SP	293	D7		ローム			109>	
SP	294	B6・B7		ローム				
SP	295	C6		ローム			198>	
SP	296	D7		ローム			109>	
SK	297	C7		ローム	53		31>、>317	①
SP	298	C5		ローム				
SP	299	D6		ローム			198>	
SX	300	B5		ローム			163>	
SP	301	C6		ローム			198>	
SP	302	C7・D7		ローム			195>、211>	
SP	303	D7		ローム			211>	
SP	304	D6		ローム			>388	
SX	305	B5		ローム			231>	
SK	306	B7・B8		ローム				
SP	307	B7		ローム			>384	
SP	308	B7		ローム				
SP	309	B7		1			>310	
SK	310	B6・B7		ローム			309>	
SK	311	D9	18c	ローム	54	72	>483・484・485	①
SK	312	D8・D9		ローム	55	73	171>、>365・433・496	①
SX	313	D7・E7		ローム			>315	
SP	314	B6		ローム				
SK	315	D7・D8・E8	17c 後葉	ローム	56		171・202・313>	②
SX	316	D7		ローム			194>	
SP	317	C7		ローム			297>	
SP	318	C8		ローム			>406	②
欠番	319							
SP	320	B7		ローム				②
SK	321	C10・C11・D10・D11	18c	ローム			342>、>441・445・446	
SK	322	D9・E9		ローム			255>	
SK	323	F14		ローム			58・140・324>	
SK	324	F14		ローム			57・58・140>、>323	(②)
SP	325	D9・E9		ローム				
SK	326	D11		ローム				
SK	327	D11		ローム				
SP	328	D11		ローム			>333	
SP	329	D11		ローム				
欠番	330							
SP	331	D9		ローム			280>	
SP	332	D11		ローム				
SP	333	D11		ローム			328>	
SK	334	E12		ローム			158>、>336、77 の天井部上	
SP	335	E12	18c 後	ローム				
SP	336	E12		ローム			334>、77 の天井部上	
SK	337	F13		ローム			61>	
欠番	338							
SP	339	D10		ローム			280>、>279	
SK	340	E12・F12		ローム			>343	(②)
SP	341	E12		ローム				
SP	342	C11・D11		ローム			>321	
SP	343	F12		ローム			340>、>344	
SP	344	E12・F12		ローム				
SP	345	D11		ローム				
SP	346	F12		ローム				
SP	347	F12		ローム				
SP	348	E12		ローム				
SP	349	E12		ローム				

遺構一覧表（7）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
SP	350	C11・D11		ローム			>321	
SP	351	F12・F13		ローム			62>	
SP	352	F11		ローム				
SP	353	E12		ローム				
SK	354	F14		ローム			58>	②
SP	355	E14		ローム				
SP	356	D14		ローム			>357	
SP	357	D14		ローム				
SP	358	E12		ローム				
SP	359	E12・F12		ローム				
SP	360	D11		ローム				
SP	361	D7		ローム				
欠番	362							
SK	363	C8	17c 前	ローム	57		31>、>395	
SK	364	B6		1			>310	
SK	365	D9	18c	ローム	58		312>、>404・433・496	②
SU	366	D7・E7		ローム	77		187>	①
SP	367	D6・D7		ローム				
SP	368	D7		ローム				
SK	369	C8		ローム			>370・406	
SK	370	C8		ローム			171>、>421	(①)
SP	371	C5		ローム				
SP	372	C5		ローム				
SP	373	C5		ローム				
SP	374	C5		ローム				
SK	375	D8・D9		ローム	59	73	>412・434・495	
SP	376	D7		ローム			181・211>、>212	
SP	377	D7		ローム			>212	
SK	378	D7		ローム	60			①
SP	379	B7		ローム			>380	
SK	380	B7	Ⅲa	ローム	61	73	379>	
SU	381	D7・D8・E7・E8	Ⅴa	ローム	78	73～76		①
SK	382	B2・C1・C2	17c 後～18c 前（中心は 17c 後か）	ローム	62	77	25・86・103>	②
SK	383	B2	18c 前	ローム	63	77	5・25・26>、>398	①
SP	384	B7		ローム			307>	
SK	385	C8		ローム	64		31>、>386	②
SK	386	C8		ローム	64		31・385>	
SP	387	D7		ローム				
SP	388	C6・D6		ローム			164・389>	
SP	389	D6		ローム			>388	
SP	390	C8		ローム			>391	
SP	391	C8		ローム				
SP	392	D8		ローム			171>、>427	
SP	393	E9		ローム			>394	
SP	394	E8・E9		ローム			>496	
SP	395	C8		ローム			363>	
SP	396	C8		ローム				
SX	397	D6		ローム			105・170>	
SP	398	B2		ローム			383>	
SP	399	B2		ローム				
SU	400	D7・E7	18c 前	ローム	77	77	186・187>	①
SP	401	D9		ローム			>412	
SP	402	C6		ローム			198>、>403	
SP	403	C6		ローム			198>	
SK	404	D9	18c	ローム	65		365>、>433・496	①
SP	405	D9		ローム			>417	
SP	406	C8		ローム			318>	
SP	407	C7		ローム				
SP	408	C7		ローム			>409	

遺構一覧表（8）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
SP	409	C7		ローム				
SP	410	C6		ローム				
SP	411	D9		ローム				
SK	412	D8・D9	17c 前	ローム	66	77	171・375・401>、>434・484	
SP	413	D9		ローム				
SP	414	D9		ローム			>415	
SP	415	D9		ローム			414>	
SX	416	E7・E8		ローム	82			(②)
SP	417	D9		ローム				
SP	418	D9		ローム			>419	
SP	419	D9		ローム			418>	
SP	420	C8		ローム				
SP	421	C8		ローム				
SX	422	B1・C1		ローム			103>、>488	
SP	423	C8		ローム				
SP	424	C8		ローム			31>	
SP	425	C8・C9		ローム				
SP	426	C8・D8		ローム				
SP	427	D8		ローム				
SP	428	C6		ローム				
SP	429	C6		ローム			173・198>	
SP	430	D9		ローム				
SP	431	D9		ローム			>432	
SP	432	D9		ローム			431>	
SK	433	D9		ローム	67		171・312・365・404>、>496	②
SP	434	D8・D9		ローム			412>、375>	
SP	435	B1		ローム			>488	
SP	436	C8		ローム				(①)
SP	437	C8		ローム				
SP	438	C8・D8		ローム			>492・493・494	①
SP	439	D9		ローム			>440	
SP	440	D9		ローム			439>	
SP	441	C11		ローム			321>	
SP	442	D14		ローム				
欠番	443							
SP	444	D14		ローム				
SP	445	C11		ローム			321>	
SP	446	C11		ローム			321>	
欠番	447							
SP	448	D10		ローム				
SP	449	C10・D10		ローム			276・277>	
SP	450	D11		ローム			277>	
SP	451	D14		ローム				
SP	452	D13		ローム				
SK	453	D13・D14		ローム				
SP	454	D14		ローム				
SP	455	D14		ローム				
欠番	456							
SP	457	E12		ローム			158>	
SP	458	D11		ローム			42>	
欠番	459							
欠番	460							
欠番	461							
欠番	462							
欠番	463							
欠番	464							
欠番	465							
欠番	466							
欠番	467							
欠番	468							

遺構一覧表（9）

種別	遺構番号	グリッド	年代	面	遺構図版（Ⅲ-@）	遺物図版（Ⅳ-@）	新旧	主軸
欠番	469							
欠番	470							
欠番	471							
欠番	472							
欠番	473							
欠番	474							
欠番	475							
欠番	476							
欠番	477							
欠番	478							
欠番	479							
欠番	480							
SP	481	C8		ローム				
SP	482	C8		ローム				(①)
SP	483	D9		ローム			311>	
SP	484	D9		ローム			311・412>、>485	
SP	485	D9		ローム			311・484>	
SP	486	C9・D9		ローム			>490	①
SP	487	D9		ローム				
SF	488	B1・C1		ローム	12		25・422・435 >	
SE	489	E9	17c 後葉	ローム	11	78	>496	
SP	490	D9		ローム			486>	
SP	491	D9		ローム				
SP	492	C8・D8		ローム			171・438>	
SP	493	C8		ローム			438>	
SP	494	C8		ローム			438>	
SP	495	D9		ローム			375>	
SX	496	D8・D9・E8・E9		ローム			404・433・489>、143・312・365>	

報　告　編

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第１節　調査地点の位置と周辺調査

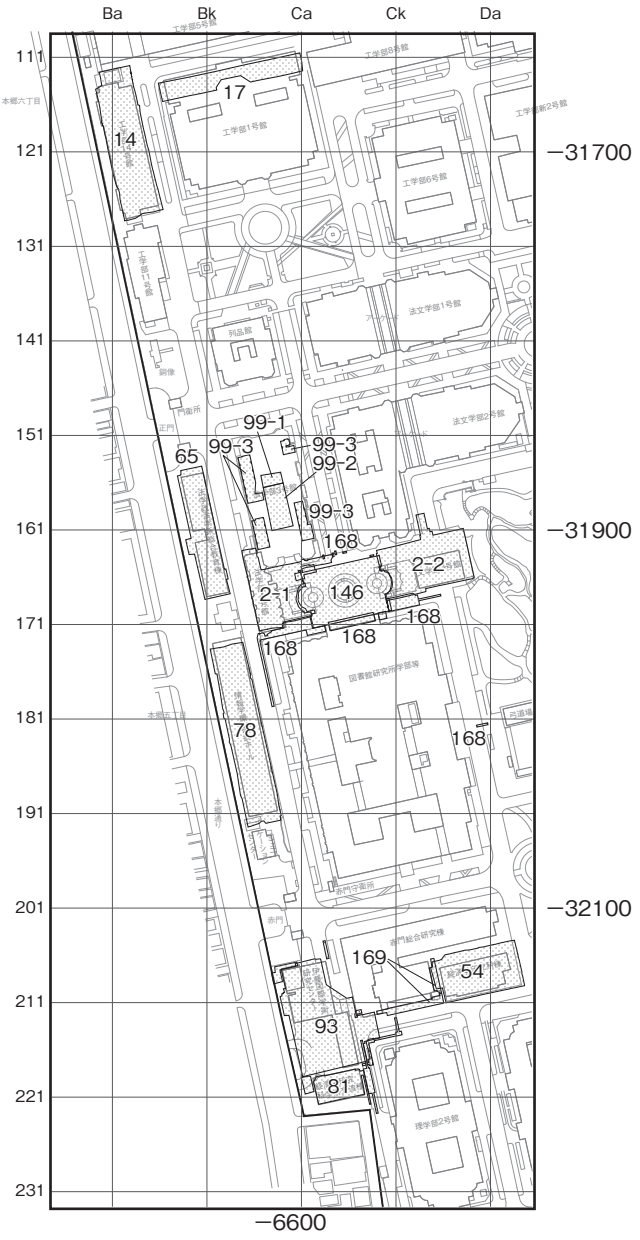
本郷 65 法学政治学系総合教育棟地点は、東京都文京区本郷７丁目３番１号、東京大学本郷構内（以下、本郷構内）の西部、正門の南側に位置し、すぐ西側には本郷通り（中山道）が通る（Ⅰ - １図 65）。

本郷構内は全域を文京区 No.47 本郷台遺跡群として周知の遺跡に登録されており、埋蔵文化財調査室において継続的に発掘調査を実施し、本地点周辺においてもⅠ -1 図、Ⅰ -1 表に示した発掘調査が実施（試掘、立会を除く）され、近年は近代前田邸に関する調査も少しずつ増加している。

以下では、本地点と同じく本郷通りに近接した発掘調査地点の成果に少し触れておきたい。なお他の調査地点の成果についてはⅠ -1 表に、掲載報告書と確認された主な遺構、遺物の時代を示したのでそちらを参照されたい。

正門を挟み本地点北側に位置する工学部 14 号館地点（Ⅰ -1 図 14）は、加賀藩邸ではなく、先手鉄砲組屋敷を調査した地点である。加賀藩邸と組屋敷との地境と考えられる南北方向の塀跡や、組屋敷内の地境施設（東西方向の柱穴列）が検出され、調査地点が屋敷奥側の約 10 間部分にあたり、各屋敷地ともに家屋側には地下室、井戸などの施設が、加賀藩邸側の最奥部には採土坑、廃棄遺構などが、各屋敷地境には長方形土坑などが分布することが明らかとなった。なお、次節で触れるが、本地点も寛永 19 ～ 20 年（1642 ～ 1643）頃から天和２年（1682）の大火までは工学部 14 号館地点と同じ履歴を有し、本地点で確認された 1682 年以前の遺構、遺物については、先手鉄砲組屋敷に伴う可能性がある。

本地点南側に位置する情報学環・福武ホール地点（Ⅰ -1 図 78）は、本郷構内の調査において、本郷六丁目町屋跡の調査をはじめて実施した地点である。加賀藩邸と本郷六丁目町屋との地境石組溝を確認し、東西に延びる地境石組溝（SD8）から南側は、文政９年（1826）の町屋引き払いまで本郷六丁目町屋跡に、文政 10 年以降は、火除地に相当することが明らかとなった。町屋跡からは、地下式麹室をはじめ、町屋の生業を知る上で手掛かりとなりうる遺構、遺物が非常に多く確認された。町屋跡に伴う遺構からの出土遺物は、下限を溶姫が入輿する前年の文政９年（1826）と確定する事が可能な資料である。またこの調査では、千川上水からの引き込みと推定される溝



I-1図　調査地点の位置（1/4000）

（SD79、SD135）も検出されている。

赤門南側、かつての学士会分館建物とその南側の中庭部分を調査した伊藤国際学術研究センター地点（Ⅰ -1 図 93）と経済学研究科学術交流棟地点（Ⅰ -1 図 81）も本郷六丁目町屋跡を調査した地点である。

伊藤国際学術研究センター地点では、情報学環・福武ホール地点 SD50 の延長と想定される石組地境溝（SB60、SD95、SB840）が検出された。また、文政９年以前の町屋との地境として機能したと推定される溝状遺構（SA873）や、その露地に面する猿楽門と推定される門跡

番号	年度	調査名	掲載書名	遺物・遺構の時代			
				旧石器	縄文	江戸	近代
2 － 1	1984	法学部 4 号館	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 2 法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』			●	
2 － 2		文学部 3 号館		●	●	●	
14	1992	工学部 14 号館	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 7 工学部 14 号館地点』			●	
17	1993	工学部 1 号館	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 6 工学部 1 号館地点』		●	●	
54	1999	経済学研究科棟	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 18 経済学研究科棟地点』			●	●
65	2002	**本地点**	本書			●	
78	2006	情報学環・福武ホール	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6 所収			●	
81	2007	経済学研究科学術交流棟	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7 所収			●	●
93	2009	伊藤国際学術研究センター	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 所収	●	●	●	●
99 － 1	2010	法学部 3 号館増築	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 所収			●	
99 － 2					●	●	
99 － 3	2011		『東京大学構内遺跡調査研究年報』9 所収		●	●	
146	2013	アカデミックコモンズ	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10 所収	●	●	●	●
168	2014	アカデミックコモンズ 2 次調査	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10 所収	●		●	●
169	2014	文系総合研究棟	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10 所収		●		

Ⅰ-1 表　周辺調査

(SB659)も検出され、文政 9 年以前の町屋との地境の様相、位置関係なども確認されている。

伊藤国際学術研究センター地点では、近代前田邸に伴う遺構も検出された。明治 6 年(1873)、加賀藩本郷邸の大半が文部省用地となり、藩邸南西隅部分のみが前田邸として利用されるが、その前田邸用地と文部省用地との地境と推測されるロウソク基礎(SB190)や、地境溝(SD235)が検出されている。SB190 は明治期の前田邸絵図にも描かれている塀の基礎であり、その基礎遺構が控えを伴うロウソク地業を採用した堅牢な構造である事が明らかとなった。

経済学研究科学術交流棟地点においても、情報学環・福武ホール地点で検出された SD50 の南側の延長部分が検出されたが、この地点の調査区北端で約 90 度西に折れ、東西に延びる状況が確認された(SD15)。1840 ～ 1845 年頃の藩邸絵図面(江戸御上屋敷惣御絵図)では、表御門北側付近で藩邸地境溝が藩邸西側(中山道側)へ折れるように描かれており、その状況を考古学的に追認することができた。

以上のように、本地点を調査する以前は、本郷通りに近接した調査は 2 地点のみであったが、それ以後は、本地点の南側から懐徳門付近までの調査が年々増加し、大学西側敷地境付近の土地利用の状況や変化が明らかになりつつある。

第 2 節　地理的・歴史的環境

本郷構内の地理的環境については鈴木正章(鈴木 1989)、阪口豊(阪口 1990)、橋本真紀夫(橋本 2009)などに述べられており、詳細はそれらを参照されたい。

本地点付近の概況を述べると、現在の標高は約 23.5m を測るが、本地点北側に位置する正門付近では 23.3m、南側に位置する赤門付近では約 23.8m を測り、南へ向かってわずかに高くなっている。明治 16 年(1883)測量の「参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図」(以下、明治 16 年測量原図、Ⅰ -11 図)によると、正門付近の標高が 22.5m、赤門付近の標高が 23.1m であり、現況と同じく、正門から赤門に向かって緩やかに高くなっている状況が確認できる。本地点で確認された幕末に近い時期に比定される遺構の検出標高は、22.8 ～ 22.9m であり、少なくとも明治 16 年頃までは本地点付近では大きな造成はなく、現在の状況は、明治 16 年以降の大学用地造成に伴うものと推測される。

次に本地点の江戸時代の様子を知るために絵図面との照合を試みた(Ⅰ -2 ～ 16 図、○が本地点付近)。本郷キャンパス西側を通る本郷通り(中山道)を挟み、本地点南西に位置する喜福寺と、その北側を東西に延びる道路は、江戸時代から現在までほぼ同位置に存在することから、絵図面との照合には、これらとの位置関係を利用した。また本地点南に位置する情報学環・福武ホール地点(Ⅰ -1 図 78)では、加賀藩邸と本郷六丁目町屋との地境である石組溝(SD8)が検出され、この地境溝が喜福寺北側の道とほぼ同位置にあることが明治 16 年測量原図との照合で確認されており、絵図面との照合には、この SD8 との位置関係にも留意した。

確認できた絵図面で最も古いものは、「(江戸全図)」(寛永 19 ～ 20 年［1642 ～ 1643］頃)である(Ⅰ -2 図)。この頃の本地点は「矢代越中同心屋敷」内に照合でき、本地点北側を調査した工学部 14 号館地点(Ⅰ -1 図 14)と同じ先手組屋敷内に比定され、大半が加賀藩邸に相当する東京大学本郷構内の調査地点の中では、希有な土地履歴を有す地点である。その後も工学部 14 号館地点の履歴と同じく、明暦 3 年(1657)の「江戸大絵図」(Ⅰ -3 図)では「岡野権左衛門」、寛文 11 年(1671)「新板江戸外絵図(浅草・染井・小石川)」(Ⅰ -4 図)では「中山勘解由組」屋敷内に位置する。「中山勘解由組」屋敷の記載は、延宝 8 年(1680)の「江戸方角安見図鑑」(Ⅰ -5 図)などにも管見され、また隣接する加賀藩や本郷六丁目町屋との境などにも変化がない事から、少なくとも延宝年間までは、本地点は先手組屋敷内であった可能性が高い。

宝永 4 年(1707)の「元禄江戸大繪圖」(Ⅰ -6 図)では、「中山勘解由組」の表記が「クミヤシキ」となり、中山道に面した組屋敷が縮小し、屋敷の南、東、北側が細く黒く塗られ、地境(？)あるいは道のような表現がなされ、加賀藩邸の一部が中山道に張り出す形に表現され、本地点を含む一帯が加賀藩邸内に組み入れられていた可能性が高い。加賀藩邸を描いた屋敷絵図で現存最古として知られる「武州本郷第図」(Ⅰ -7 図)は、添え書きに「元禄戊辰(元年、(1688)臘月初六？」と書かれており、加賀藩が天和 2 年(1682)の大火の翌年に本郷邸を上屋敷とした後の様子を描いたものとされるが、「武州本郷第図」では、藩邸西端の中程部分と北西隅のカギ形部分が西へ張り出し、中山道に面する形で表現されている事から、Ⅰ -6 図の宝永 4 年よりも前に、本地点を含む西側張り出し部分が、加賀藩邸内に組み込まれた状況になっていたと推察される。

「葛巻昌興日記」貞享 2 年(1685) 8 月 23 日条には、藩邸絵図面北西隅のカギ形部分先端に位置する追分口御門より入ったと書かれている[1]事から、天和 2 年の大火後、貞享 2 年 8 月頃には中山道に面した藩邸西側の整備が進み、藩邸絵図のような形となっていた可能性が高い。宮崎勝美氏によると、天和 3 年(1683) 12 月、加賀藩邸西側北よりに隣接していた幕府先手鉄砲組屋敷の一部を加賀藩が内々で買得していると指摘されており(研究編宮崎論考参照)、天和 2 年の大火後、中山道に面した藩邸西側部分の買得や整備が進められる中、本地点付近も加賀藩邸内に組み込まれたのではないだろうか。

その後の様子が描かれた「設彩江戸大絵図」(延享～宝暦頃［1744 ～ 1763］)(Ⅰ -8 図)、「慶応改正御江戸大絵図」(慶応 3 年(1867))(Ⅰ -9 図)などをみると、本地点付近の地境などに変化がなく、17 世紀後葉以降、慶応 4 年(1868)本郷春木町からの出火で加賀藩邸の大部分が焼失するまで、本地点は加賀藩邸内に位置していたと推察される。

慶応 4 年の火災後の加賀藩本郷邸は、藩邸南西隅を除き[2]、明治 4 年(1871)に東京府用地に、明治 6 年(1873)には文部省用地となる。明治 9 年(1876)の明治東京全図(Ⅰ -10 図)をみると、本地点も文部省御用地内に位置している。明治 10 年(1877)東京開成学校と合併し、東京大学となり、本地点は大学医学部用地内に位置する事になるが、明治 16 年測量原図(Ⅰ -11 図)をみると、本郷通り沿いの構内に建物は認められず、構内を南北に延びる道と、「荒」と描かれた場所、それを囲う柵のようなものしか確認できない。本地点も「荒」と書かれた部分に近い淡い緑色で塗られ、建物などは認められず、「荒」と同様の場所であった可能性が高い。

明治 28 年(1895)東京実測全図をみると(Ⅰ -12 図)、赤門付近から本地点南側あたりの大学西側敷地境が直線に変化し、本郷通りの道幅も一定幅に変化していることがわかる。

この大学西側地境の変化は、東京大学施設部に残る構内平面図でも確認できる。明治 19 年(1886)の構内平面図(Ⅰ -13 図、帝国大学平面図)では、赤門(平面図中は「門」)から北側にある「門」(森川町町屋地境付近に描かれた門)までの間は、明治 16 年測量原図と同じく、大学西側地境はクランク形を呈すが、明治 24 ～ 25 年(1891 ～ 1892)の平面図(Ⅰ -14 図)では、直線に変化し、赤門付近の西側地境が本郷通り側へ張り出し、赤門は本郷通りから奥まった位置にある状況となっている。

このような大学西側地境の変化は、2 度の土地移動によって生じたと推定される。1 度目の移動は、経緯は不明だが明治 16 年測量原図と明治 19 年の構内平面図の間に[3](Ⅰ -17 図)、2 度目の移動は、明治 20 年(1887)の市区改正により実施され、本地点付近から赤門付近までの大学西側地境は直線化し、道路幅員も一定幅に変化した可能性が高い[4]。

この大学西側敷地境の移動により、地境塀や門なども整備され、赤門北側の「門」はなくなり、少し南に「仮正門」(Ⅰ -14 図、黒三角で示した部分)が作られるなど、大学西側地境の整備も進んだと推測される。

本郷通りに面する大学敷地境が変化していく中、本地点は、学内を南北につなぐ道路または空白地(空地？)に照合され、その状況は大正 12 ～ 13 年(1923 ～ 1924)の関東大震災直後の平面図(Ⅰ -15 図)まで変わりない。昭和 5 年(1930)の配置図(Ⅰ -16 図)では、本地点を含む正

門から赤門までの本郷通りに面した一帯が植樹帯となり、その中央付近には今も残る藤棚(？)が設置されている。藤棚が設置された場所の東側は図書館前の噴水広場となっており、震災後に完成した図書館とその周辺整備に合わせ、正門から赤門付近の本郷通りに面した構内西側は、緑地帯としての役割を担って整備された可能性が高い。その証拠に、その後の構内平面図を見ると、本地点を含む正門から赤門の間には、恒久的な建物などが建てられることはなく、本地点において、埋設管あるいは防火水槽以外の近代建物基礎が検出されなかったことはそれを裏付けるものである。

本地点を含む本郷通りに面した一帯は、国道との間の緑地帯の役割を果たしていたエリアであったが、本地点に法学政治学系総合教育棟が建築されて以降、情報学環・福武ホール、経済学研究科学術交流棟、伊藤国際学術研究センターなど本郷通り沿いの建築計画が次々と進み、現在に至っている。

【註】

(1) 『加賀藩史料』貞享2年5月15日所収(第4編806頁)

(2) 明治4年の収公後も藩邸南西隅の15078坪は、前田家私邸として利用されていたが、大正15年(1926)年、駒場の農学部敷地4万坪および代々木演習林敷地11543坪と敷地交換した結果、昭和3年(1928)に大学用地に編入された。

(3) 明治16年測量原図(Ⅰ-11図)と明治19年の帝国大学平面図(Ⅰ-13図)を比較すると、明治19年の赤門は、袖塀が本郷通り側へせり出し、さらに北側袖塀が、赤門に直に接続する状況に変化している。

Ⅰ-17図は、東京都公文書館所蔵史料「本郷区本郷本富士町帝国大学敷地の内と道敷の内と交換授受の件(明治20年)」に添付された図面である。図面をみると、「現今ノ境界」(A)と書かれた明治20年当時の大学西側地境と、「旧加州邸境」(加賀藩邸境)の2つの地境が確認でき、明治20年時の西側地境が、すでに加賀藩邸境より本郷通り側へ移動していて(1度目？の移動)、それが明治20年の申請により、「交換ノ上境界線」(B)に移動(2度目の移動)される計画となっている。

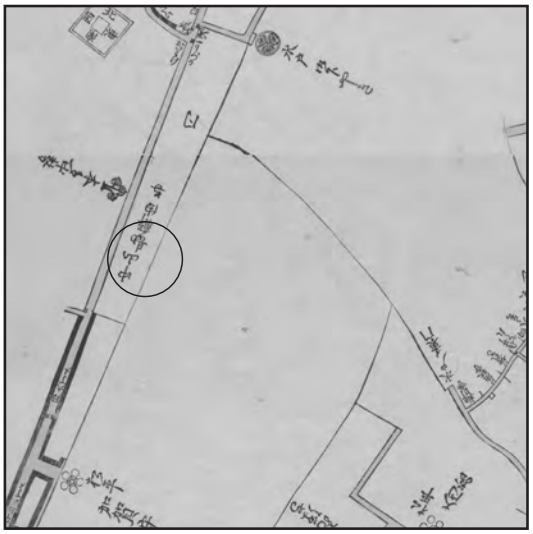
Ⅰ-17図には、明治19年の帝国大学平面図に描かれた赤門北側の袖塀と似た、本郷通り側へ90度折れる塀が「仮塀」として描かれている。ただこの塀は、「現今ノ境界」より本郷通り側に描かれており、明治20年の2度目の移動後に設置される予定の「仮塀」を表現している可能性もある。

(4) 国立公文書館所蔵「公文雑纂・明治二十年・第二十五巻・文部省、農商務省」(https://www.digital.archives.go.jp/item/2465338)の中に「帝国大学表門前地所道路地ト交換授受ノ件」という文書があり、それには「当省所轄帝国大学表門前本郷通り道路は地形広狭均しからす彼是不便に付今般内務大臣へ協議之上別紙絵図面之通道幅を12間と定め帝国大学敷地内黄色の一部と緑色道路地と交換実地授受致し候此段及報告候也」との内容と、交換した土地の図面がおさめられている。この文書に添えられた図面には、旧加州邸境の記載はないが、赤門周辺道路部分と、大学敷地が本郷通り側へ張り出している部分(本地点付近から森川町町屋まで)の一部を敷地交換した事がわかる。

Ⅰ-2 図　寛永 19 ～ 20 年（1642 ～ 1643）
「(江戸全図)」（抜粋）

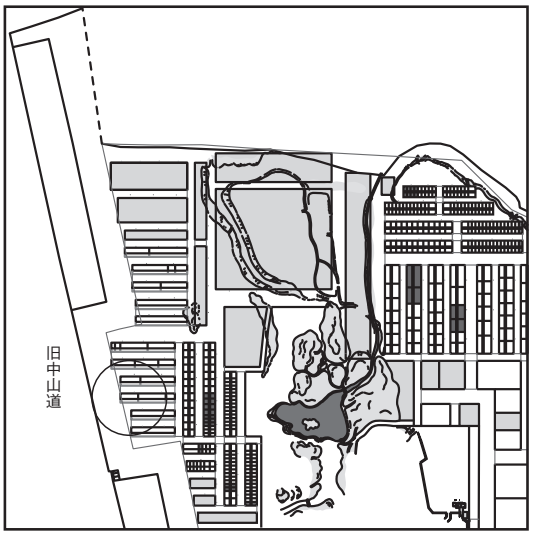
Ⅰ-3 図　明暦 3 年（1657）　江戸大絵図（抜粋）

Ⅰ-4 図　寛文 11 年（1671）
新板江戸外絵図（浅草・染井・小石川）（抜粋）



Ⅰ-5 図　延宝 8 年（1680）　江戸方角安見図鑑（抜粋）

Ⅰ-6 図　宝永 4 年（1707）　元禄江戸大繪圖（抜粋）



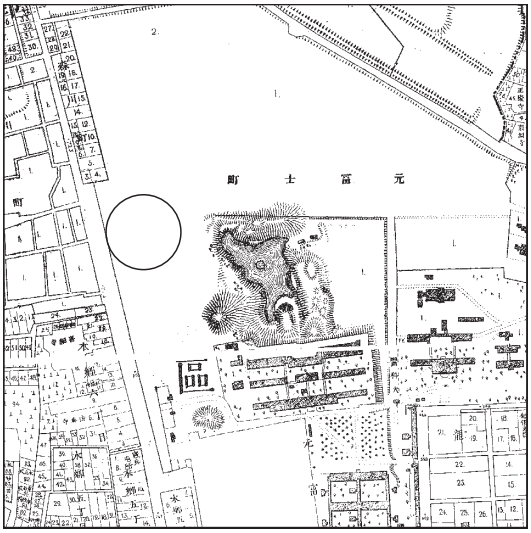
Ⅰ-7 図　元禄元年（1688）　武州本郷第図
（公財）前田育徳会所蔵をトレース、加筆（抜粋）

Ⅰ-8 図　延享～宝暦頃（1744 ～ 1763）年設彩江戸大絵図（抜粋）

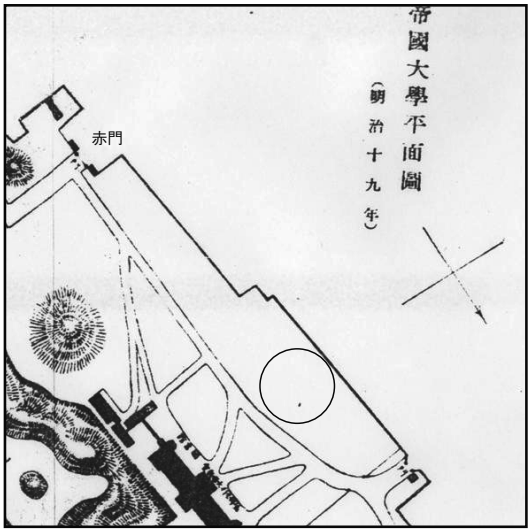
Ⅰ-9 図　慶応 3 年（1867）　慶応改正御江戸大絵図　（抜粋）

Ⅰ-10 図　明治 9 年（1876）　明治東京全図（抜粋）

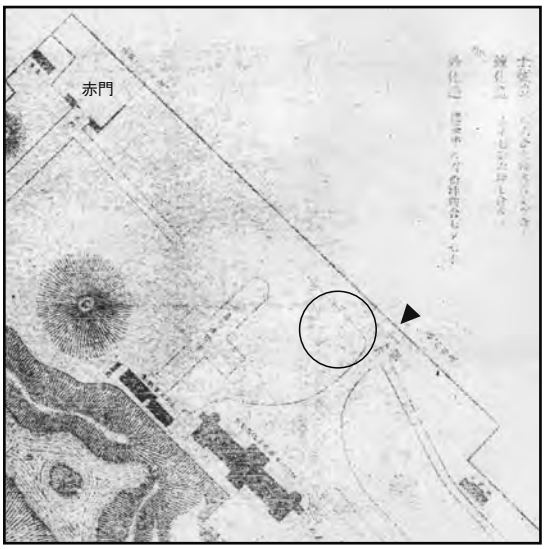
Ⅰ-11 図　明治 16 年（1883）　本郷区本郷元富士町近傍（抜粋）



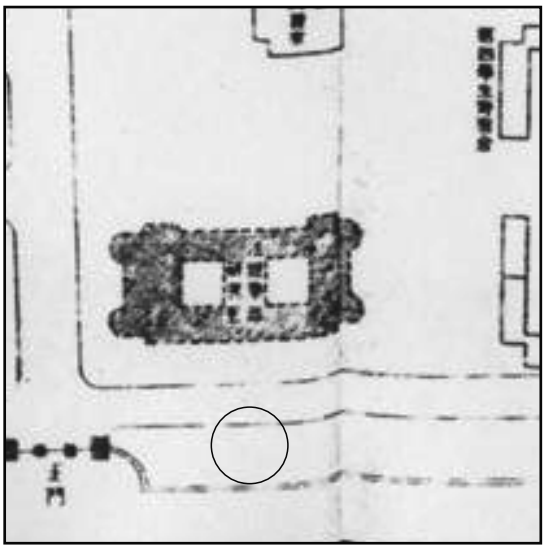
Ⅰ-12 図　明治 28 年（1895）　東京実測全図（抜粋）



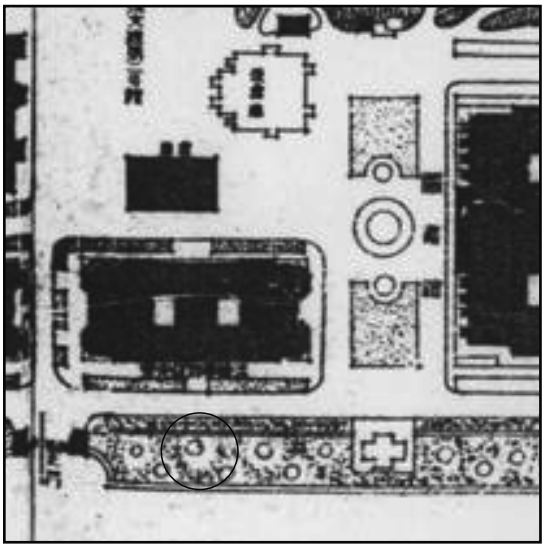
Ⅰ-13 図　明治 19 年（1886）　帝国大学平面図に加筆（抜粋）



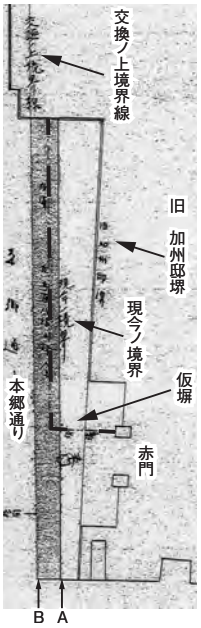
Ⅰ-14 図　明治 24 ～ 25 年（1891 ～ 1892）
東京帝国大学平面図に加筆（抜粋）



Ⅰ-15 図　大正 12 ～ 13 年（1923 ～ 1924）
東京帝国大学平面図（抜粋）



Ⅰ-16 図　昭和 5 年（1930）　東京帝国大学本郷構内
其他建物配置図　（抜粋）



Ⅰ-17 図　明治 20 年（1888）「本郷区本郷本富士町
帝国大学敷地の内と道敷の内と交換授受の件」に加筆

【出典】

2 図　臼杵市教育委員会所蔵

3、10、12 図　柏書房『5 千分の 1 江戸 - 東京市街地図集成　1657 年（明暦 3）～1895 年（明治 28）』地図資料編纂会編

4 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1286188

5 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2575023

6 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2542440

7 図　「武州本郷第図」（公益財団法人　前田育徳会所蔵）トレース図に加筆

8 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/8369288

9 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2543121

11 図　参謀本部陸軍部測量局五千分一東京測量原図

17 図　東京都公文書館所蔵資料「本郷区本郷本富士町帝国大学敷地の内と道敷の内と交換授受の件（明治 20 年）」より抜粋、加筆

第Ⅱ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

平成 14 年(2002)東京大学法学部では、正門南側の緑地帯内に総合研究棟(現・法学政治学系総合教育棟)の建設を計画した。

東京大学本郷キャンパスはいわゆる「周知の遺跡」(文京区 No.47 本郷台遺跡群として遺跡登録)となっており、遺構・遺物の存在が予想されるところである。本調査地点もまた 18 世紀後半以降の絵図面などと対比すると、加賀藩 10 代藩主重教の隠居宅である「西之御殿」、厩、御露地役所といった江戸時代の遺構の存在が予想されたため、法学部より依頼された東京大学埋蔵文化財調査室は、遺構遺存状態の確認を目的として同年 3 月 18 ～ 20 日に 136㎡の試掘調査を実施した。

試掘調査は建築予定範囲内に 8 箇所の試掘坑を設定して実施した。その結果、明瞭な江戸時代の生活面を確認することはできなかったが、現地表面下約 80cm で江戸時代の盛土層を確認するとともに、現地表面下約 300cm で坑底が確認される大形遺構が遺存している状況が確認されたことから、大学施設部と埋蔵文化財調査室が協議し、平成 15 年(2003) 2 月 17 日～同年 4 月 18 日の約２箇月間で 946㎡の本調査を実施した。

第２節　調査の方法と経過

(1)調査の方法

発掘調査時は建築工事を行う範囲に平面直角座標系(日本測地系)第Ⅸ系を基準としたグリッドを 5 m毎に設定したが、平成 23 年(2011)に本郷構内の遺跡全体に共通グリッドを設定した際、本調査地点についても補正を行なった。それにより本報告では、現在の世界測地系に基づき補正、再配置を実施している(詳細は東京大学構内遺跡調査研究年報 10 参照)。A1 の座標は世界測地系に換算して X= － 31864.212、Y= － 6667.157 であり、グリッド南北軸は方眼北に一致する。グリッドは調査区北西隅を基準点として、西から東へ A ～ F のアルファベット、北から南へ 1 ～ 6 の数字を組み合わせ、各グリッドの名称は 5m 四方桝の北西角を交点とする英数字で表している。

(2)調査の経過

発掘調査は平成 15 年(2003) 2 月 17 日より調査区北側から調査を開始、調査対象面まで重機により近代以降の盛土層を機械掘削し、3 月 3 日からは近代以降の盛土層を掘削した調査区北側から随時、人力による遺構確認調査を開始した。3 月 11 日に調査区全体の近代以降の盛土層の掘削が終了し、調査区の北と南両側から人力による遺構確認調査を行った。近代以降の盛土層下では、近世の盛土層は 19 世紀代の遺物を含む盛土層(1 層)が局所的に検出されたのみで、調査区全体は、ほぼ関東ローム層(地山)が検出される状況であり、遺構確認は概ね関東ローム層上(ローム面)で実施した。人力による遺構調査終了後、重機によって井戸 5 基(SE33、SE46、SE60、SE163、SE489)の断ち割り調査を実施、可能な限り覆土の写真記録と遺物の取り上げを行い、4 月 18 日に全ての発掘調査を終了した。

第３節　調査の概要

本地点では、重機による近代盛土層掘削後、ほぼ関東ローム層(地山)が検出される状況であった。1 層の遺存範囲は、B ラインより西側、7 ラインより北側に概ね限定される。

検出された遺構は 460 基、出土遺物はコンテナ 310 箱(陶磁器･土器 209 箱、瓦 86 箱、金属製品(銭も含む)10 箱、石製品 3 箱、人形 2 箱)を数え、出土遺物から江戸時代以前に帰属すると推定される遺構は認められなかった。

検出遺構で年代比定が可能であった遺構は 86 基あり、17 世紀代の遺構が 29 基、18 世紀代の遺構が 45 基、19 世紀代の遺構が 12 基であり、18 世紀代に比定される遺構が最も多く、本地点の利用が最も活発であった時期は 18 世紀代であることが推測される。

前述した 1 層を切り込んで確認される遺構(1 面の遺構)はピットや土坑など 8 基のみである。主な遺構には、坑底に杭穴が確認される方形土坑 SK87、被熱した瓦が細かく砕かれ、大量に廃棄されていた SX39 などがある。

関東ローム面上で検出された遺構(ローム面の遺構)は、5 ラインから南側で、C ライン付近を南北に延びる溝 SD31 から東側に多く検出された。主な遺構は、建物基礎 2 基、溝 3 基、井戸 7 基、炉跡 1 基、土坑 105 基、ピット 308 基、地下室 7 基、性格不明の遺構 19 基などである。

第Ⅲ章　検出された遺構

最も多く検出された遺構はピットであり、その大半が単独で検出されるものであった。Ⅲ-70 図 SP53、SP125、SP148 や、Ⅲ-71 図 SP64、SP66、SP68、SP80 のように、東西または南北にピット列として検出されるものも確認されたが、対応するピット列がないものが大半である。ピットについで多く検出された土坑は、形状や出土遺物などから大きく 5 つのタイプが認められた。すなわち 1. SK42（Ⅲ-22 図）や SK382（Ⅲ-62 図）のように平面形状が不整形を呈し、壁面や坑底の凹凸が顕著、いわゆる採土坑と推定されるもの、2. SK86（Ⅲ-27 図）、SK92（Ⅲ-29 図）のように平面形状は方形を呈し、坑底に複数の杭穴が確認されるもの、3. SK171（Ⅲ-40 図）、SK158（Ⅲ-38 図）のように平面形状は方形を呈し、覆土に大量の瓦が廃棄されているもの、4. SK108（Ⅲ-30 図）、SK380（Ⅲ-61 図）のように平面形状は円形を呈し、掘方壁面が鉄分などの沈着により変色しているもの、5. 平面形状は円形ないし不整形を呈し、掘方坑底などの凹凸が顕著、いわゆる植栽痕（注：植栽痕は規模あるいは形状などから SP や SX とされているものもある）と判断されるものである。

本地点で検出された遺構には、元禄 16 年（1703）火災以前の御殿空間および詰人空間の建物配置軸（N-0° ～ 2° -E、主軸①）、元禄 16 年以降の御殿空間の建物配置軸（N-7° ～ 12° -W、主軸②）、そして、それらと異なる軸の、3 つの主軸方向角が確認されている。

以下、遺構種別順に各遺構の内容を記載する。

SB29（Ⅲ-2 図）

D5 グリッドに位置する 2 基の礎石列で、ローム面で検出された。西側に 1、東側に 2 の枝番を振った。1 は重複する SP82、SP85 より新しい。2 は重複する SP83、SP88 より新しい。ともに掘方平面形は不整円形を呈し、坑底に無加工川原石の礎石を置いている。根石は認められない。礎石間は芯々で 210cm を測り、主軸はほぼ②と直交するが、本遺構南北の撹乱のため、性格は不明である。

遺物は出土していない。重複遺構にも遺物はほとんどなく帰属年代は不明。

SB277、SP276（Ⅲ-3 図）

D10 ～ 11 グリッドに位置する、ローム面で検出された基礎遺構である。新旧は SP276 は SK279、SP449 より新、SB277 は SK42、SK279、SP449、SP450 より新である。主軸方向角は N-12° -W を測り、主軸②とほぼ同じである。

調査当初、両遺構は新旧のある遺構として調査を始めたが、規模、覆土の堆積状況などから 1 遺構として構築された可能性が高いと判断した。SB277 は南北 356cm、東西 64cm、確認面からの深さ 70cm の長方形を呈し、南、北両端に不整方形のピットが伴い、その北端のピット SP276 は、長軸（東西）100cm、短軸（南北）80cm、確認面からの深さは、84cm を測る。

南北両端のピット覆土中の石は、ほぼ同じレベルで検出され、石下は硬化している状況が確認されている事から、根石を伴う基礎遺構として構築された可能性がある。

遺物は陶磁器・土器類が少量出土しているが細片のみで、年代は不明である。

SD31（Ⅲ-4 図、Ⅳ-28 ～ 30 図）

C3 ～ 12 グリッドに位置する溝で、ローム面で検出された。重複する SP30、SE33、SX198、SP259、SP289、SK297、SK363、SK385、SK386、SP424 より新しい。主軸はほぼ①を示す。北端は C3 グリッドで確認されたが、南端は C12 グリッドで調査区外へ延び、調査区内全長は 45.55m を測る。断面形は逆台形を呈し、壁面、溝底ともに緩やかな凹凸が顕著である。溝底幅は概ね 40cm を測る。確認面からの深さは最大 80cm、溝底標高は 21.8 ～ 21.9m を測り、概ね平坦である。覆土はローム粒を含む暗褐色土を基調とし、上層（2 層）にはマガキ、ハマグリなどの貝類が含まれる。溝底直上に水性堆積が認められないこと、溝底標高がほぼ平坦であることから、境界施設と考えられる。

遺物は東大編年Ⅴb 期の陶磁器・土器類などコンテナ 5 箱が出土した。

SE33（Ⅲ-5 図、Ⅳ-31 図）

C3 グリッドに位置する井戸で、ローム面より検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸 128cm、短軸 110cm を測る。確認面下約 200cm まで調査を実施した。覆土はほぼ水平堆積を呈し、1 層からはマガキ、5 層からはアカガイが多量に出土した。ローム主体土で埋め戻された 3 層はしまりが強く、食物残滓廃棄後のパック層と推測される。調査範囲（掘削深度）からは井戸側の痕跡は認められなかったが、7 層と 6 層のつながりが急傾斜

を呈していることから、7層は井戸側掘方覆土の可能性がある。

遺物は東大編年Ⅲb期の陶磁器・土器類、剣梅鉢文軒丸瓦、金属製品、木製品などコンテナ約1箱が出土した。

SE46（Ⅲ-6図、Ⅳ-41図）

E10グリッドに位置する直径約130cmを測る井戸である。東側が大きく撹乱されていたことから、安全上、確認面下126cmにて調査を中止した。ローム面で検出され、重複するSK47より新である。覆土には、焼土粒、ブロックを多く含むが、被熱した遺物はあまり多くはない。調査終了時、地上から3～4mまで深掘り調査を実施し、その間の覆土にも焼土が多く含まれる状況が確認されたが、出土遺物は多くなく、坑底も未確認である。

遺物は17世紀後葉から18世紀初頭に比定される陶磁器・土器類、金属製品、石製品、動物遺体(貝)が出土しており、C3グリッドのSE33、D13グリッドのSE60出土遺物と遺構間接合する遺物も1、2点確認されている。

SE57（Ⅲ-7図、Ⅳ-41図）

南側は調査区外に拡がる、F14グリッドに位置するローム面で検出された井戸である。重複するSK58・SU140より旧であり、SK324より新である。遺存する平面形は、東西116cm、南北100cm以上を測る不整円形を呈す。安全上の理由から確認面下176cmにて調査を中止した。全体的な堆積状況は不明だが、下位層は南から北へ、上位層はフラットに堆積し、3層には瓦片を多く含むしまりの弱い覆土が認められる。

遺物は18世紀前葉に比定される陶磁器・土器類、瓦、金属製品、石製品などが出土した。いずれも破片であるが、Ⅳ-41図1の瓦燈はほぼ完形状態で出土した。

SE60、SK155、SP147、SP156、SP252、SP256（Ⅲ-8図、Ⅳ-42、43図）

D13～14グリッドに位置し、ローム面で検出された周辺施設を有す井戸である。直径150cm前後を測る不整円形の掘方(SE60)と、それを取り囲む南北に長軸を有す不整長方形の浅い土坑(SK155)と、4基のピット(SP147、SP156、SP252、SP256)で構成される。

SK155は、四隅がやや突出した形状を呈し、規模は南北240cm、東西180cm、確認面からの深さは30cm前後を測る。平面形態からSK155はSE60を囲う井桁の掘方で、東西南北各辺中央に配置された4基のピット(SP147、SP156、SP252、SP256)は、井戸を覆う東屋に伴うピットである可能性が高い。SP256とSK155は重複し、SP256が新であることから、井桁を埋めた後、東屋を設置した可能性もある。

SE60は、安全上の理由から確認面下190cm程までは人力掘削を実施し、その後、調査終了時に重機によって確認面下4～5mまで深掘り調査を実施したが、坑底は確認されず、またその付近の覆土中から江戸時代の遺物と混在して、レンガ片や近代の瓦片なども出土しており、江戸時代に構築された井戸が、最終的に近代以降に埋め戻されたと推定される。

本遺構から出土遺物としてⅣ-42、43図に、遺存状態が比較的良好であった東大編年Ⅲb期に比定される陶磁器・土器類、瓦、金属製品、石製品などを中心に掲載したが、実際には、遺存状況が不良のため掲載しなかったコバルト顔料を使用した磁器や、レンガなどの幕末から明治期にかけての遺物が同時に出土している。またⅢb期以降、18世紀代の様相を示す遺物は出土しておらず、本遺構が17世紀後葉から長期間開口していたとは考えにくく、掲載した遺物の一群は、幕末頃、本遺構を埋める際、客土とともに持ち込まれ、混入した可能性が高い。

SE163（Ⅲ-9図、Ⅳ-62図）

B5グリッドに位置する井戸で、ローム面で検出された。重複するSK300より新しい。平面形は楕円形を呈し、長軸85cm、短軸75cmを測る。長軸方向はほぼ南北軸を示す。壁面には南北方向に足掛かりと考えられる一対の孔が上下50cm間隔でほぼ同レベルに穿たれている。覆土はほぼ水平堆積を呈し、1～3層はロームブロック、ローム粗粒を含む黒褐色土を基調とするが、確認面下約100cmで非常にしまりの強い淡褐色砂質粘土層に変化する。

遺物は17世紀中葉に比定されるかわらけなどの陶磁器・土器類が少量出土した。

SE222（Ⅲ-10図、Ⅳ-72図）

B8グリッドに位置する井戸で、ローム面で検出された。概ね西半分が調査区外に延びるため詳細は不明である。現状で最大径135cmを測る。覆土は調査範囲内で7層に区分できる。3層中にはV字状に堆積した灰白色粘土ブロックが認められる特異な堆積をしている。粘土ブロックは1層下部にも認められるが、5層以下はローム粒を含む褐色土へ変化する。断面観察からは井戸側は認められない。

遺物は17世紀中葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品、石製品などが少量出土した。

SE489（Ⅲ-11 図、Ⅳ-78 図）

E9 グリッドに位置する井戸で、ローム面で検出された。重複する SX496 より新しい。平面形は不整円形を呈し、直径約 125cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、確認面下約 30 ～ 50cm からやや拡がり工具痕も顕著に認められる。覆土はほぼ水平堆積を呈し、4、5 層に灰褐色粘土ブロックが認められる。

遺物は覆土最上層を中心に 17 世紀後葉に比定される陶磁器・土器類、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品などがコンテナ約 1 箱出土した。

SF488（Ⅲ-12 図）

B ～ C1 グリッドに位置する遺構で、ローム面で検出された。遺構北半は調査区外へ延び未調査である。重複する SK25、SX422、SP435 より旧い。平面形は不整形を呈し、残存長は東西 165cm、南北 110cm、確認面からの深さ 68cm を測る。覆土は 5 層に区分できる。1 層は焼土粒主体の橙褐色土だが、直下の 3 層に被熱痕跡が認められないことから二次堆積と推定される。2 ～ 5 層はソフトローム主体層である。性格は不明。

遺物は出土していない。

SK4（Ⅲ-13 図）

C1 ～ 2 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸はほぼ②を示す。重複する SU16、SP162 より新しい。平面形は溝状の不整長方形を呈し、長辺 390cm、短辺 58cm、確認面からの深さ 20cm を測る。坑底はやや凹凸があり、南側に浅い落ち込みを有す。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主体とする。

遺物は 1 点出土したのみである。

SK5（Ⅲ-14 図、Ⅳ-1 図）

B2 グリッドに位置する土坑で、1 面で検出された。主軸はほぼ①を示す。西側を撹乱され遺存状態は悪い。重複する SK26、SK383 より新しい。平面形は方形ないし長方形と推測され、南北 98cm、東西残存長 60cm、確認面からの深さ 30cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底ともにやや凹凸を有する。覆土の主体を占める 2 層は被熱桟瓦片を多量に含む焼土層である。坑底直上と壁面に炭化した板材の一部が遺存し、また壁際から先端を上に向けた釘が 5 本検出され、箱状の板枠が埋設されていたと考えられる。炭化材及び覆土の状況から、明和 9 年（1772）の火災を契機に廃絶されたと考えられる。

遺物は瓦、鉄釘の他、18 世紀代に比定される陶磁器・土器類が少量出土した。

SK10（Ⅲ-15 図、Ⅳ-1 図）

C ～ D4 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸は②を示す。重複する SK81 より新しい。平面形は不整隅丸長方形を呈し、長軸 172cm、短軸 102cm、確認面からの深さ 28cm を測る。坑底は皿状を呈し、壁も緩やかに立ち上がる。覆土は 2 層に区分され、灰白色粘土ブロックを含む粘質土である。

遺物は 17 世紀後葉から 18 世紀前葉に比定される陶磁器・土器類が少量出土した。

SK25（Ⅲ-17 図、Ⅳ-1 ～ 28 図）

A ～ B、1 ～ 2 グリッドに位置する遺構で、ローム面で検出された。重複する SP2、SP3 より旧く、SK382、SK383、SF488 より新しい。本遺構は調査区北西端部で検出され、大半が調査区外に延びているため形態、規模は不詳である。調査区内での平面形は不整四角形状で南壁は主軸②と直交する方向を示し、東西壁は逆ハの字状に拡がり北方へ延びる。調査区内最大規模は東西 525cm、南北 375cm、確認面からの深さ 370cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体的に著しい工具痕が認められる。坑底はほぼ平坦であるが、工具痕と観られる凹凸が全体に拡がる。調査区内の覆土は 18 層に区分され、坑底付近の 14 ～ 18 層はローム粒を含み各層厚は約 10cm でほぼ水平堆積を呈している。4 ～ 13 層は人工遺物、自然遺物を多量に含み、南から北へ緩やかに傾斜する。本遺構がゴミ捨て場として利用されたことが窺われる。また 12 層、7 ～ 8 層の無遺物層を挟むことから、ゴミ廃棄層をパックしつつ若干のインターバルを持って廃棄・埋め戻し行為が行われたと推測される。

遺物は陶磁器・土器類を中心にコンテナ 45 箱が出土した（Ⅳ-1 ～ 28 図）。磁器では、肥前系半球碗（JB-1-f、1 ～ 12）、小丸碗（JB-1-j、17 ～ 27）、筒形碗（JB-1-l、28 ～ 36）、望料碗（JB-1-q、3、7、38）、蛇ノ目凹形高台（低）皿（JB-2-j、57 ～ 63）。陶器では瀬戸・美濃系灰釉丸碗（TC-1-c、101 ～ 111）、有段碗（TC-1-f、112 ～ 119）、柳茶碗（TC-1-g、120、121）、刷毛目碗（TC-1-s、124 ～ 126）、油皿（TC-2-o、149 ～ 154）、半胴甕（TC-15-a、182 ～ 186）、灰釉片口鉢（TC-23-b、196 ～ 198）、油受け皿（TC-40-c、212 ～ 216）、京都・信楽系半球色絵碗（TD-1-b、131 ～ 134）、小杉碗（TD-1-d、141 ～ 143）、鉄釉土瓶（TZ-34-l、209）、鉄釉鍋（TZ-33-a、205）。土器では土師質丸火鉢（DZ-31-a、261 ～ 268）、硬質瓦質火鉢（DZ-

31-d、271 ～ 274)、無脚施釉油受け皿(DZ-40-b、277 ～ 281)、ロクロ成形塩壺(DZ-51-w、299 ～ 306)など 38 器種、最少個体数 634 個体が確認された。その他、人形・玩具類(325 ～ 331)、11 波寛永通宝四文銭(343)、煙管(344 ～ 349)、金具類(350 ～ 360)などの金属製品、硯(366 ～ 369)、火打石(377)などの石製品などが認められる。

動物遺体ではヤマトシジミ、ハマグリを主体とする貝類が最も多く、その他タイ、ヒラメなどの魚類、キジ、ガン・カモ、ツルなどの鳥類、ネコ、イヌ、シカなどの哺乳類が少量出土している。こうした様相から、工学部 1 号館地点 SK01（東京大学埋蔵文化財調査室 2005)のような藩邸内全体の日常的なゴミ集積廃棄場所と推定される。陶磁器類の年代観より 1740 ～ 60 年代を中心とした東大編年Ⅵ b 期に比定される。

遺物年代に対応する調査区は、本郷邸が唯一中山道に面する張り出し部の北半に位置し、1760 年代の本郷邸全体図とされる「前田家本郷御屋鋪図」（三井文庫所蔵）では「西ノ穴」と書かれた空閑地に比定される。当該地は明和 8 年(1771)に普請が始まった 10 代藩主重教の隠居宅「西之御殿」内に位置するが、同御殿は翌年の火災（目黒行人坂火事)で建設中に焼失した。本地点 SX39、SK171 や法学部 4 号館地点 F7-3 号土坑、G7-3 号土坑(東京大学遺跡調査室 1990a)出土被災瓦がそれに対応すると考えられる。本遺構は、覆土に焼土が含まれていないこと、被災遺物が出土していないことから、西之御殿建設時には完全に埋め戻されて更地になっていたと考えられ、絵図上の「西ノ穴」に対応する遺構と考えられる。

SK26（Ⅲ -16 図）

A ～ B、2 ～ 3 グリッドに位置する土坑で、1 面で検出された。重複する SK5 より旧く、SP89、SP90、SP102、SK383 より新しい。SK25 とは撹乱を挟んでいるため新旧関係は不明。西側は調査区外へ延び詳細な形態は不明であるが、調査区内では不整形を呈す。規模は調査区内現存値で東西 481cm、南北 505cm、確認面からの深さ 45cm を測る。坑底は根の影響を受け凹凸が著しい。覆土は焼土粒を多量に含む暗褐色土の単一層で短期間に埋め戻された様相を示す。こうした状況から採土坑もしくは焼土整理坑と推定される。

遺物は出土していない。

SK36（Ⅲ -18 図）

D5 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸はほぼ①を示す。平面形は長方形を呈し、南北 144cm、東西 68cm、確認面からの深さ 30cm を測る。坑底はほぼ平坦で、壁はやや蛇行しながら直線的に立ち上がる。覆土は坑底直上の黒褐色土を除き、南から北へ傾斜している。

遺物は 17 世紀代に比定される陶磁器・土器類が少量出土した。

SK37（Ⅲ -19 図）

A3 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。西側は調査区外に延びるため詳細な形態は不明であるが、調査区内では平面形不整円形、断面形皿形を呈する。壁面から坑底にかけて厚さ約 2cm のロームが貼り付けられている。貼付ロームはやや白色化しているが、直上の 3 層には水性堆積を示す痕跡は認められず性格は不明である。現存値の掘方規模は南北 67cm、東西 52cm、確認面からの深さ 25cm を測る。貼付ローム内の覆土は 3 層に区分され、ほぼ水平堆積を呈している。

遺物は 17 世紀代に比定される陶磁器・土器類が少量出土している。

SK41、SK42（Ⅲ -22 図、Ⅳ -32 ～ 39 図）

D ～ E、10 ～ 11 グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。また SK42 は SK44、SP138、SK139、SP154、SK250、SP458 よりも新で、SP80、SP152、SP154、SB277 より旧である。

SK41 の平面形は不整形を呈し、規模は長軸 120cm、短軸 116cm、確認面からの深さは最深で 42cm を測る。坑底直上から桟瓦片が平面的にまとまって出土したが、転圧された状況は認められず、廃棄されたものである可能性が高い。

SK42 の平面形は南側が半円状に張り出した不整方形を呈し、東西 794cm、南北 650cm、確認面からの深さは 190 ～ 236cm を測り、全体的には北側ほど深く、特に坑底北西隅から中央部分は歪な小判形に掘削され、全体より一段低くなっている。壁面、坑底には工具痕状の凹凸が顕著で、東壁と北壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、西壁から南壁は緩やかな螺旋状に立ち上がる。以上の様子から、採土坑として掘削され、その後、廃棄坑として二次利用された遺構と推定される。

北、南側ともに坑底付近には、ロームブロックを主体とする層がレンズ状に堆積し(11 ～ 15 層。以下、下層)、その上に遺物を比較的多く含む層が(5 ～ 10 層。以下、上層)がやはりレンズ状に堆積しているが、北側上層だけに版築状の堆積が認められる(a ライン)。北側坑底が全体より一段深く掘削されていたために、その部分が窪まないように局所的に叩きしめた可能性もある。

覆土の堆積状況に違いが認められた事から、南側上層、南側下層、北側上層、北側下層、一括と層位上げを実施したところ、遺物出土量は南側上層が圧倒的に多いが、南、北での様相さは認められなかった。しかし上層と下層では陶磁器・土器類に年代差が認められ、上層からは東大編年Ⅵｂ～Ⅷａ期(Ⅳ-32図1～Ⅳ-35図38)に比定されるものが、下層からはⅥ～Ⅶ期に比定されるものが(Ⅳ-35図39～46)が出土している。

出土した陶磁器・土器類にⅣ-36図47～Ⅳ-38図61に掲載した二次的な熱を受けた一群が認められるが、SK42覆土中に焼土層は確認されておらず、また、これらが全層位から出土し、上層と下層で接合している例もあることから、下層を埋め戻す際の客土とともに持ち込まれ、さらに上層を埋め戻す際、下層を撹拌するなどして上層にも含まれたのではないかと推定される。SK42上層に19世紀初頭に比定される遺物が含まれるのは、19世紀初頭頃、SK41と重複しない部分のSK42に、再び客土とともに芥が持ち込まれた結果とも考えられる。

SK45（Ⅲ-20図、Ⅳ-40図）

D～E、9～10グリッドに位置する、ローム面で検出された遺構である。SK47、SP48、SP49、SP251と重複し、いずれよりも新である。平面形は歪な小判形を呈し、長軸(東西）260cm、短軸(南北）204cm、深さは確認面から最深で72cmを測る。坑底や壁面は凹凸を有し、壁は東壁のみが他より緩やかに立ち上がる。覆土は灰色土主体であり、遺物は中層あたりからまとまって出土した。

遺物は18世紀後葉に比定される陶磁器･土器類､瓦片、金属製品、石製品、動物遺体(骨)などが出土している。

SK58（Ⅲ-21図、Ⅳ-42図）

F14グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。SE57、SU140、SK243、SK244、SK323、SK324、SK354などの複数の遺構と重複しており、いずれよりも新である。西側は撹乱、南側は調査区外まで延び、平面形は不明である。規模は南北330cm以上、東西270cm以上、確認面からの深さは北側では30cm、南側では60cmを測り、北側はテラス状を呈す。覆土中より、赤色の漆膜片がまとまって確認されたが、何に伴うものかは不明である。

遺物は18世紀後葉に比定される陶磁器・土器類、瓦、金属製品、動物遺体が出土している。

SK59（Ⅲ-23図、Ⅳ-42図）

F13グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。東側立ち上がりは調査区外へ延び、南、北立ち上がりは撹乱によって壊され、平面形は不明である。規模は東西150cm、南北140cm、確認面からの深さは最深で60cmを測る。西から東へ緩やかに段切りされた斜面に一辺30～40cmの方形ピットと、一辺10cm弱の方形ピットが南北方向に並んで検出された。最も深い東側掘方は、南北に延びる溝状を呈し、その坑底や壁面には工具痕と思われる凹凸が認められる。限定的な確認にとどまるが、以上のような検出状況から、土地造成に伴う段切り状の遺構と推定される。

遺物は17世紀代に比定される陶磁器・土器類の破片、金属製品、木製品がごく少量出土している。

SK61（Ⅲ-24図、Ⅳ-44図）

E～F13グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。SK121とSP130、SK337と重複しており、新旧はSK121より旧で、SP130、SK337より新である。南側は撹乱され、遺存する平面形はやや歪な長方形を呈し、その規模は長軸(東西）184cm、短軸(南北）115cm以上、確認面からの深さは最深で100cmを測る。覆土は全体的にしまりがやや弱く、上層付近ではかわらけが重ねて廃棄された状況が認められた。

遺物はⅣ-44図に掲載した遺物を含め17世紀中～後葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品、動物遺体(骨)が出土した。なお重複するSK121からは東大編年Ⅵｂ～Ⅶ期に比定される遺物が出土しており、SK121と同時に半截した際の陶磁器・土器類(Ⅳ-44図SK61・SK121)の大半が、SK61と同じく17世紀中～後葉に比定されるものであることから、SK61・SK121として取り上げた遺物の大半は、本来はSK61の遺物であった可能性が高い。

SK70、SK71（Ⅲ-25図、Ⅳ-45図）

D14～15グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。SK70とSK71は重複し､SK71が新である。

SK70の西側立ち上がりは撹乱され、平面形は歪な長方形を呈し、規模は長軸212cm、短軸178cm、確認面からの深さは最深で50cmを測る。壁面、坑底は凹凸を有し、壁は坑底から開きながら立ち上がる。掘方形状から植栽痕である可能性が高い。

SK71の南側立ち上がりは、調査区外に延びる。遺存する平面形は半円形を呈し、規模は長軸(東西）90cm、短軸(南北）64cm以上、確認面からの深さは70cmを測

る。壁面、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。

遺物はSK70からは17世紀前葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品が出土し、SK71からは陶磁器・土器類がごく少量出土している。

SK81（Ⅲ-26図）

C～D4グリッドに位置する土坑で、ローム面より検出された。主軸は②にほぼ直交する。重複するSK10、SP11より旧く、SP101より新しい。また南東部が撹乱によって消失している。平面形は不整長方形を呈し、長軸421cm、短軸最大216cm、確認面からの深さ最大47cmを測る。坑底は凹凸が著しく数箇所のテラス状段差が認められるが、覆土堆積状況から単一遺構と考えられる。覆土はロームブロックを含む黒褐色土を主体として、ほぼ水平堆積を呈している。こうした様相から採土坑と推定される。

遺物は瓦片が少量出土している。

SK86（Ⅲ－27図、Ⅳ-48、49図）

C1グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸はほぼ①を示す。重複するSK382より新しい。平面形は隅丸長方形を呈し、東西124cm、南北107cm、確認面からの深さ32cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底もほぼ平坦に整形されている。坑底四隅には直径約10cmの柱痕を有する小穴が存在する。木材は遺存していなかったが、断面観察から柱痕外側に板材が組まれていたことが確認された。板枠内は東西87cm、南北69cmを測る。

遺物は板枠内より瀬戸・美濃系灰釉瓶など東大編年Ⅷb～c期に比定される陶磁器・土器類、金属製品、石製品がコンテナ2箱出土している。

本遺構は、主軸方向、遺物年代より溶姫御殿北側の「御守殿前三番御貸小屋」に関するゴミ溜の可能性が考えられる。

SK87（Ⅲ-28図、Ⅳ-49、50図）

B5グリッドに位置する土坑で、1面で検出された。主軸はほぼ①を示す。重複するSK39、SK221より新しい。大半は調査区外に延びているため詳細は不明であるが、平面形は方形ないし長方形と考えられる。南北167cm、確認面からの深さ68cmを測る。坑底東壁際に芯々57cm間隔で3基の小穴が存在する。それらは坑底下数10cmまで略方形に掘り込み、そこからさらに直径7～8cmの杭を打ち込んでいる。覆土観察では板材痕が確認できなかったが、南北コーナー杭痕外側の距離から板枠幅は121cmと推定される。覆土は暗褐色土の単一層で、短期間に埋め戻された様相を呈す。また壁面下部のロームが全体的に黄灰褐色に変色していることから、滞水の影響も考えられる。

遺物は、瀬戸・美濃系灰釉瓶を中心に東大編年Ⅷc期の陶磁器・土器類、瓦、金属製品、石製品がコンテナ2箱出土した。

本遺構は、主軸方向、遺物年代より溶姫御殿北側の「御住居附壱番」に関するゴミ溜の可能性が考えられる。

SK92（Ⅲ-29図、Ⅳ-50～53図）

C5グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸はほぼ①を示す。重複するSX233、SP292より新しい。平面形は長方形を呈し、南北170cm、東西100cm、確認面からの深さ42cmを測る。坑底北寄りに6基の杭痕が検出された。土層観察から杭痕外側に板枠痕跡が確認され、南北120cm、東西60cmを測る板枠で四辺が囲われていたと考えられる。また板枠内掘方坑底はテラス状に盛り上がり、その上にローム主体土で貼床が形成されていた。貼床のローム土はやや黄白色に変色し、滞水の影響が推測される。

遺物は3層から東大編年Ⅷb期の陶磁器･土器類、瓦、金属製品、石製品がコンテナ4箱、ハマグリ、ヤマトシジミなどの貝類がコンテナ1箱出土した。

本遺構は、主軸方向、遺物年代より溶姫御殿北側の「御住居附壱番」に関するゴミ溜の可能性が考えられる。

SK108（Ⅲ-30図、Ⅳ-53図）

A～B4グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSX39より旧い。平面形は直径約70cmを測る不整円形を呈する。確認面からの深さ34cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦に整形されている。覆土は3層に区分されるが、3層は壁際に貼り付けられた黄白色粘土である。また坑底ロームも黄灰白色に変質していることから、継続的に滞水していた可能性が高い。粘土内の覆土は2層に区分され、水平堆積を呈している。2層は暗灰褐色を呈し、坑底などの状況も合わせて便槽の可能性が高い。

遺物は、17世紀後葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品、石製品が少量出土した。

SK109（Ⅲ-31図、Ⅳ-53図）

D7グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸は②とほぼ直交する。重複するSP293、SP296

より新しい。平面形は楕円形を呈し、長軸 147cm、短軸 110cm、確認面からの深さ 55cm を測る。壁は逆ハの字状に立ち上がり、断面形は擂鉢状を呈する。覆土は 4 層に区分され、3 層を除き水平堆積を呈する。性格は不明。

遺物は、17 世紀中葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品がコンテナ 1 箱出土した。

SK121（Ⅲ -32 図、Ⅳ -44、54 図）

E12 ～ 13 グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。SK61 と重複しており、本遺構が新である。東、南側は撹乱され、遺存する平面形は、南北に長軸を有す長方形と、不整方形が組み合わさった形状を呈す。掘方平面形状から 2 ないし 3 基の遺構の重複が想定されたが、覆土の堆積状況から 1 遺構と判断した。規模は長軸（南北）570cm、短軸（東西）140（南側）～ 260（北側）cm、確認面からの深さは 20 ～ 30cm を測る。壁面、坑底は凹凸を有し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は東大編年Ⅵｂ～Ⅶ期に比定される陶磁器・土器類を中心に、瓦、金属製品、動物遺体が出土している。

SK142（Ⅲ -33 図、Ⅳ -55、56 図）

E9 グリッドに位置するローム面で検出された長方形土坑で、主軸は①とほぼ平行する。東側立ち上がり部分は撹乱され、遺存する規模は、長軸（東西）118cm 以上、短軸（南北）86cm、確認面からの深さは 34cm を測る。壁面には細長い工具痕状の痕跡が確認されるが、坑底は比較的平坦に整形され、四隅に方形の掘方と角柱状の痕跡が検出される。北、東側の壁際と坑底には、しまりの弱いロームを主体とする黄褐色土が、その内側に遺物を多く含む灰褐色土が確認される。以上のような覆土の堆積状況から、本遺構は長方形の掘方に箱状のものを設置していた遺構と推測される。

遺物は瀬戸・美濃系陶器瓶を中心に東大編年Ⅷ期に比定される陶磁器・土器類、瓦が出土しているが、陶器瓶以外はほぼ破片である。

本遺構は、主軸方向、遺物年代より溶姫御守殿北側の「御守殿前壱番御貸小屋」に関するゴミ溜の可能性が考えられる。

SK143（Ⅲ -34 図、Ⅳ -56 ～ 58 図）

E9 グリッドに位置するローム面で検出された遺構で、主軸方向角は E-2° -N を測り、ほぼ①と平行する。SX496 と重複し、本遺構が新である。本遺構は二重の掘方を有す。すなわち開口部は長軸（東西）168cm、短軸（南北）152cm の隅丸方形を呈し、確認面から深さ 50cm 程で東西 80cm、南北 50cm の長方形の掘方に変化する。長方形の掘方は、壁面、坑底ともにほぼ平坦に整形され、それより上位の隅丸方形の掘方は、壁面の凹凸が著しく、坑底からやや開きながら立ち上がる。

最上層の覆土（1 層）以下は、壁際にややしまりの弱いローム主体の黄褐色土（6 層）、その内側は坑底から順次埋められた様子が確認される。長方形の掘方内側の覆土は、上位よりしまりが弱く、出土遺物がやや多い状況が認められる。掘方や覆土の違いから、元々は長方形の掘方であったものを隅丸方形の掘方に変更し、箱状のものを埋め、その周囲にローム主体の黄褐色土を充填し、そこに割れた陶磁器・土器類などの芥を廃棄し、埋め戻した可能性が考えられる。

遺物は東大編年Ⅷｄ～Ⅸ期に比定される陶磁器・土器類、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品などが出土しているが、土瓶や急須、瓶などはほぼ完形で出土している。Ⅳ -58 図に掲載した隅巴瓦（鬼瓦？）は、現在の赤門の瓦として使用されている状況が確認できる。

SK145（Ⅲ -35 図）

C ～ D13 グリッドに位置するローム面で検出された遺構であり、主軸は②とほぼ平行する。撹乱坑底で検出された遺構であり、北、西側立ち上がりは大きく削平されているが、西側は調査区外へ延びる状況が確認される。規模が長軸（南北）186cm、短軸（東西）150cm を測る長方形と、長軸（南北）84cm、短軸（東西）26cm 以上を測る不整形で構成され、壁面や坑底には細かな凹凸が目立ち、遺存状況の比較的よい南、東壁は、坑底からやや開きながら立ち上がる。南西で検出された不整形部分は、別遺構の可能性もあるが、断面観察で埋積は同時であり、1 遺構とした。

遺物は 17 世紀代に比定される陶磁器・土器類がわずかに出土している。

SK153（Ⅲ -36 図、Ⅳ -58 図）

D13 グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。重複する SP123、SK155 より旧、SP156、SK254 より新である。西側が大きく撹乱され、平面形は不明だが、規模は長軸（南北）270cm、短軸（東西）190cm 以上、確認面からの深さは 50cm を測る。壁面、坑底は凹凸を有し、壁は坑底から緩やかに開きながら立ち上がる。覆土や掘方の状況などから植栽痕である可能性が高い。

遺物は 17 世紀代と 19 世紀代に比定される陶磁器・土器類が出土しているが、中心は 17 世紀代にある。

SK158（Ⅲ-38 図、Ⅳ-59 ～ 62 図）

E11 ～ 12 グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。主軸方向角は N-11° -W を測り、概ね②と一致する。SK334、SP457 と重複しており、新旧はいずれより新である。平面形は長方形を呈し、規模は長軸（南北）364cm、短軸（東西）240cm、確認面からの深さは 230cm を測る。壁面には横位の工具痕状の凹凸が多数確認され、坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土上位（1、2 層）には瓦を主体とする層が、下位（3 ～ 7 層）にはロームブロックを多く含む層が観察され、坑底には壁際を巡るピットが検出された。ピットは一辺が 30cm 程の不整方形のものが、東西 4 基、南北 6 基確認され、東壁際中央付近のものは、布掘り状の掘方を有す。ピットの深さは一定しないが、四隅のピットが他のものよりやや深い。ほとんどのピットに、柱痕（a 層）が観察され、それらがローム主体のしまりのやや強い覆土で埋められている状況であることが判明した。以上のような状況から本遺構は、本来は上屋構造を有す長方形土坑であったが、廃絶時、地中に柱を残したまま上屋を撤去し、その上をローム主体土で埋め、そこに瓦を廃棄した事が想定される。

廃棄されていた瓦は全点採取は困難であったため、最低 3 辺以上が遺存するものを選択し、コンテナで約 50 箱採取した。その中心は桟瓦であり、刻印のあるものも多く、18 種類が確認された。なお本遺構から出土した瓦については、研究編において石井氏が分析されており、そちらを参照されたい。

瓦以外の遺物は、18 世紀後半に比定される陶磁器・土器類を中心に、金属製品、石製品、動物遺体（貝）がコンテナ 2 箱出土している。下位層からは、ごく少量の陶磁器・土器類の破片が出土しているのみであり、上位層との年代差は不明である。なお、本遺構北側に隣接する SK42 南側下層から出土した、京都・信楽系花生（Ⅳ-38 図 60）と同一と思われる破片が本遺構からも出土しており、SK42 と同時期に埋め戻された可能性もある。

SK168（Ⅲ-37 図、Ⅳ-63 図）

C ～ D、2 ～ 3 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸は②とほぼ直交する。重複する SP115 より旧く、SP176 より新しい。平面形は不整楕円形を呈し、長軸 173cm、短軸 124cm、確認面からの深さ 60cm を測る。坑底は凹凸を有し、壁はやや膨らみ袋状を呈している。覆土は南から北方向へ流れる。5 層には焼土粒が多量に含まれ、火災関連の瓦礫破棄と推定される。

遺物は 17 世紀後半に比定される陶磁器・土器類、金属製品がコンテナ 1 箱出土した。

SK170（Ⅲ-39 図、Ⅳ-63 ～ 66 図）

D6 ～ 7 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸はほぼ①を示す。北壁は撹乱によって一部消失している。重複する SK210、SK212、SP281、SX397 より新しい。平面形は略長方形を呈し、長辺最大 317cm、短辺 90 ～ 100cm、確認面からの深さ 36cm を測る。坑底には凹凸が認められ、壁はやや逆ハの字状に立ち上がる。坑底上から東壁際に 5 基、西壁際に 9 基杭痕が検出された。杭痕平面は方形、長方形、円形と各種存在する。西壁際の杭痕は複数基が集中して存在している箇所もあり、基本的には東壁際の 5 箇所に対応すると考えられる。土層断面から杭痕外側位置に板材痕が確認され、その位置を基準にすると長辺 256cm、短辺 68cm の板枠が復元される。覆土は 3 層に区分され、1、2 層が覆土、3 層が掘方埋土である。同一形態の医学部附属病院入院棟 A 地点 D1 面帰属長方形土坑群（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）のように坑底上に砂を敷き詰める行為は認められなかった。

遺物は 17 世紀後半に比定される陶磁器・土器類、石製品が少量出土したほか、坑底直上より古寛永、新寛永通宝、文銭を含む銭貨 73 枚のさし銭が出土した。

SK171（Ⅲ-40 図、Ⅳ-67、68 図）

C ～ D8 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸はほぼ①を示す。重複する SK312、SK315、SK370、SP392、SP412、SK433、SP492 より新しい。平面形は長方形を呈し長辺 437cm、短辺 284cm、確認面からの深さ 110cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、坑底ともに未調整で全体に工具痕が認められる。覆土全体に大量の瓦、焼土が廃棄されている。瓦は被熱瓦を含み多くが細かく砕かれている。焼土は 2、3 層で特に多い。

遺物は 18 世紀後半に比定される陶磁器・土器類、金属製品、石製品がコンテナ 1 箱、瓦は軒瓦など同 5 箱を採取した。

陶磁器の年代観と多量の被災瓦資料から、明和 9 年（1772）の火災によって建設中に被災した西之御殿に関する資料と考えられる。

SK190（Ⅲ-41 図、Ⅳ-68、69 図）

B ～ C、5 ～ 6 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。主軸は②よりやや西へ振れる。遺構南半が撹乱によって消失し形態・規模の詳細は不詳である。

重複するSK219、SX231より新しい。平面形は隅丸長方形を呈すると推測され、長辺残存長167cm、短辺最大長155cm、確認面からの深さ49cmを測る。壁はやや開き気味に立ち上がり、坑底ともに工具痕による凹凸が認められる。覆土は5層に区分され、東からの流れ込みの様相が認められる。遺物は1層より多く出土し、廃絶後の廃棄と考えられる。

遺物は東大編年Ⅷ期に比定される陶磁器･土器類、瓦、金属製品、石製品がコンテナ1箱出土した。出土瓦のうち三つ葉葵軒丸瓦(6)、本瓦(7)、熨斗瓦(8、9)などは、溶姫御殿に関する廃棄資料と考えられる。またSK219出土遺物と接合資料が認められる。

SK191（Ⅲ-42図、Ⅳ-69図）

B8グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。遺構の大半が調査区外に延びるため詳細は不明である。また北東部で重複するSX192とは遺構上部を通る撹乱溝の影響で新旧は確認できなかった。主軸はほぼ②を示す。平面形は方形を呈すると推測され、調査区内での計測値は南北180cm以上、東西33cm以上、確認面からの深さ120cm以上を測る。壁面はほぼ平坦に整形され、やや開き気味に立ち上がる。覆土は3層に区分され、ほぼ水平堆積を呈している。

遺物は18世紀中葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品、動物遺体がコンテナ1箱出土している。

SK203（Ⅲ-43図、Ⅳ-70図）

B～C7グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。平面形は円形を呈し、直径約95cmを測る。上部は大きく削平されており、確認面からの深さは10cmである。坑底壁際には幅10cm弱の溝が巡り、土層断面にも立ち上がりが確認されることから桶枠が埋設されていたと考えられる。覆土からは用途は窺えない。

遺物は17世紀代に比定される陶磁器・土器類、新寛永通宝文銭(Ⅳ-70図1)などが少量出土している。

SK210（Ⅲ-44図、Ⅳ-70図）

D7グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSK170より旧く、SK212、SP228より新しい。平面形は楕円形を呈し、長軸120cm、短軸106cm、確認面からの深さ45cmを測る。坑底、壁ともに凹凸が著しく、壁は逆ハの字状に立ち上がる。覆土はローム粒を含む黒褐色土を主体とする。

遺物は高台内に二重圏線が施された肥前染付碗(JB-1-c)を含む東大編年Ⅲb～Ⅳa期に比定される陶磁器・土器類、金属製品が少量出土している。

SK211（Ⅲ-44図、Ⅳ-71図）

C～D、6～7グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSP166、SP179、SP180、SP181、SX198より旧く、SK212、SP302、SP303、SP376より新しい。主軸は②とほぼ平行である。平面形は不整長方形を呈し、長軸440cm、短軸60～100cm、確認面からの深さ40cmを測る。断面形は蒲鉾状を呈し、坑底、壁面ともに凹凸が著しい。覆土はローム粒を含む黒褐色土を主体とする。性格は不明

遺物は17世紀中葉に比定される陶磁器・土器類、銭貨(新寛永)が少量出土している。

SK212（Ⅲ-44図）

D7グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSK170、SP181、SK210、SK211、SP377より旧い。複数の遺構に切られているため詳細は不詳だが、平面形は不整楕円形と考えられ、長軸144cm、短軸84cm、確認面からの深さ24cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに丸味を帯びて立ち上がる。性格は不明。

遺物は陶磁器・土器類が少量出土している。

SK216（Ⅲ-45図）

C8グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸87cm、短軸72cm、確認面からの深さ12cmを測る。坑底には細かい凹凸が顕著で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高より、上部が大きく削平されていると推定される。覆土はローム粒を含む黒褐色土が水平堆積している。性格は不明。

遺物は出土していない。

SK219（Ⅲ-46図）

B5～6グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSK190、SP217、SP218より旧く、SX287、SX288より新しい。南東部をSK190によって削平され詳細は不詳であるが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。主軸は②に平行と推定される。規模は長軸144cm、短軸127cm、確認面からの深さ45cmを測る。断面形は逆台形を呈し、坑底、壁面ともに凹凸が著しい。覆土はローム粒を含む黒褐色土を主体として、緩やかな凹レンズ状堆積を呈す。

遺物は陶磁器･土器類、金属製品が少量出土している。

SK221（Ⅲ-48 図、Ⅳ-71 図）

B5 ～ 6 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。西半が調査区外へ延び、詳細は不詳である。重複する SX39、SK87、SP220 より旧い。調査区内での平面形は不整形を呈し、長軸最大 421cm、短軸最大 132cm、確認面からの深さ 132cm を測る。北壁には壁面に沿った三日月形のテラスを有し、坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が著しい。その様相から植栽痕または採土坑と推定される。覆土は 10 層に区分され、概ね凹レンズ状に堆積する。8 ～ 10 層にはローム粒が多量に含まれる。また 2 層には黄褐色粘土ブロックが多量に含まれる。

遺物は 17 世紀中葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品がコンテナ 1 箱出土した。特に平底のほうろく(DZ-47-b、6 ～ 8)がまとまって廃棄されていたことが特筆される。

SK238（Ⅲ-47 図）

B ～ C8 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SP237 より旧い。主軸はほぼ①を示す。平面形は方形を呈し、1 辺約 60cm、確認面からの深さ 38cm を測る。坑底、壁面ともに細かな凹凸が著しい。覆土は 2 層に区分され、ほぼ水平堆積を呈す。覆土断面観察では板枠痕など付随施設は認められなかった。

遺物は出土していない。

SK255（Ⅲ-49 図、Ⅳ-72 図）

D9 グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。SK322 と重複しており、新旧は本遺構が新ある。平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸 180cm、短軸 114cm、確認面からの深さは 64cm を測る。壁面、坑底には工具痕状の細かい凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。

遺物は 18 世紀前葉に比定される陶磁器・土器類、瓦、石製品などが出土している。

SK265（Ⅲ-50 図、Ⅳ-72 図）

F13 ～ 14 グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。北側は撹乱され、遺存する平面形は不整形を呈し、規模は長軸（東西）150cm、短軸（南北）119cm、確認面からの深さは最深で 80cm を測る。壁面、坑底は工具痕状の凹凸を有し、壁は坑底から緩やかに開きながら立ち上がる。

遺物は陶磁器・土器類破片がごく少量と、銅製の雁首銭が出土している。

SK267（Ⅲ-51 図、Ⅳ-72 図）

D13 グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。重複する SP136、SK137 より旧い。平面形は概ね方形を呈し、規模は長軸（南北）128cm、短軸（東西）108cm、確認面からの深さは最深で 40cm を測る。坑底は凹凸が顕著であり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は 18 世紀前葉に比定される陶磁器・土器類の細片、熨斗瓦片が出土している。

SK280（Ⅲ-52 図）

C ～ D、9 ～ 10 グリッドに位置するローム面で検出された遺構である。西、北側は撹乱されている。重複する SP331、SP339 より新しく SK279 より旧い。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸（南北）296cm、短軸（東西）272cm、確認面からの深さは最深で 50cm を測る。覆土はローム粒やブロックをやや多く含む暗褐色から黒褐色土主体である。壁面や坑底は凹凸を有し、根穴状のものも多数確認されることから、植栽痕と推定される。

遺物は陶磁器・土器類細片、金属製品がごく少量出土している。

SK297（Ⅲ-53 図）

C7 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SD31 より旧く、SP317 より新しい。主軸はほぼ①を示す。平面形は長方形を呈し、長軸 150cm、短軸 131cm、確認面からの深さ 65cm を測る。坑底はほぼ平坦に整形され、壁は垂直に立ち上がる。覆土の大半が粘土ブロック主体の粘質土で形成されている。

遺物は出土していない。

SK311（Ⅲ-54 図、Ⅳ-72 図）

D9 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SP483、SP484、SP485 より新しい。主軸はほぼ①を示す。確認面での平面形は不整長方形を呈し、南北 170cm、東西 143cm を測る。確認面下約 65cm で直径約 120cm を測る円形に変化し坑底に至る。その結果、坑底上約 20cm にテラスを有した形態を呈す。このテラス部は南東、南西部では直角三角形状を呈すが、北東、北西部は円形部に四角形の張り出しが接合した様相を示す。即ちこのテラスが長方形部から円形部への変化による形状ではなく、意識的に方形平坦部を形成したことを示している。円形部の覆土は粘性の強い暗灰褐色土(5 層)で、その直上にローム主体の暗黄褐色土(4 層)が水平堆積している。この 4 層中より北東部を除き水平に

置かれた切石が検出された。切石は円形部上にもかかり5層よりやや浮いた状態で検出され、4層を埋めながら設置されたと考えられる。切石設置状況から円形土坑から方形土坑へ造り替えられた可能性も指摘できる。

遺物は18世紀代に比定される陶磁器・土器類、銭貨が少量出土している。

SK312（Ⅲ-55図、Ⅳ-73図）

D8～9グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。南西部は撹乱によって消失し、重複するSK171より旧く、SK365、SK433、SX496より新しい。主軸はほぼ①を示す。平面形は不整長方形を呈し、長軸最大153cm、短軸最大117cm、確認面からの深さ90cmを測る。坑底は北に向けて緩やかに傾斜し、南壁に鎚形を呈すテラスを有す。壁面は遺存状況の良好な北西角ではやや開きながら直線的に立ち上がっている。その状況から柱の抜き取り痕の可能性が考えられる。

遺物は陶磁器・土器類が少量出土している。

SK315（Ⅲ-56図）

D～E、7～8グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSK171、SU202、SX313より旧い。平面形は複数遺構が重複したような複雑な不整形を呈す。相対的な主軸はほぼ②を示す。規模は南北394cm、東西449cm、確認面からの深さ170cmを測る。北東部から南西にかけてらせん状に廻るスロープを有し坑底に移行するが、全体的に未整形で工具痕による凹凸が著しい。覆土は東西方向からの埋め戻しによる凹レンズ状堆積を呈し、重複関係は認められない。こうした様相から採土坑と考えられ、スロープは作業用施設と推定される。

遺物は17世紀後葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品が少量出土している。

SK363（Ⅲ-57図）

C8グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSD31より旧く、SP395より新しい。平面形は不整形を呈し、長軸223cm、短軸134cm、確認面からの深さ66cmを測る。断面形は鍋形を呈し、全体的に工具痕が認められるが、凹凸は著しくない。覆土は5層に区分され、黒色土を主体としている。採土坑もしくは植栽痕か。

遺物は17世紀前半に比定される陶磁器・土器類、金属製品が少量出土している。

SK365（Ⅲ-58図）

D9グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSK312より旧く、SK404、SK433、SX496より新しい。西側は撹乱の影響で消失し詳細は不詳であるが、現存部から平面形は不整長方形と推定される。主軸はほぼ②を示す。残存値は長軸194cm、短軸73cm、確認面からの深さ36cmを測る。坑底には凹凸があり、南に向けて緩やかに傾斜している。坑底直上より切石、破砕川原石が接して検出された。根石の可能性も考えられる。

遺物は18世紀代に比定される陶磁器・土器類が少量出土している。

SK375（Ⅲ-59図、Ⅳ-73図）

D8～9グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSK412、SP434、SP495より新しい。平面形は直径約90cmを測る略円形を呈する。確認面からの深さ42cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。坑底、断面観察ともに桶枠は確認されなかった。覆土はローム粒を含む黒褐色土を主体とし、東から西に向けて緩やかに傾斜している。

遺物は陶磁器･土器類、金属製品が少量出土している。

SK378（Ⅲ-60図）

D7グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSU366とはSU366の天井崩落のため新旧は不明である。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺120cm、短辺88cm、確認面からの深さ36cmを測る。主軸はほぼ①を示す。坑底はほぼ平坦で壁は緩やかに丸味を帯びて立ち上がる。覆土はロームブロック主体の褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

SK380（Ⅲ-61図、Ⅳ-73図）

B7グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複するSP379より旧い。平面形は不整円形を呈し、直径80～83cmを測る。坑底は中央部がやや低い断面ソーサー状を呈している。壁はハの字状に内傾し、断面形は袋状を呈す。壁面は滞水の影響で灰白色～黄白色を呈し、非常にしまっている。また中位には鉄分の酸化と考えられる茶褐色に変色した部分が帯状に巡る。覆土は4層に区分され、最下層(4層)は黄白色砂粒を多く含む。これらの状況より、水溜または便槽の可能性がある。

遺物は東大編年Ⅲa期に比定される陶磁器・土器類、金属製品、石製品が少量出土している。

SK382（Ⅲ-62 図、Ⅳ-77 図）

B ～ C、1 ～ 2 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SK25、SK86、SK103 より旧い。平面形は不整形を呈し、長軸最大 597cm、短軸最大 366cm、確認面からの深さ 122cm を測る。坑底は東西 2 箇所の掘り込みを繋ぐように中央にテラス状の一段を有す。覆土は 6 層に区分され、上層(1 ～ 4 層)のロームブロック主体層、下層(5、6 層)の黒褐色土層に大別される。平面形からは一見すると複数遺構の重複状態に観られるが、覆土断面観察から一度に埋め戻されたことが確認され、採土坑と考えられる。

遺物は 17 世紀後半を中心とした陶磁器・土器類、金属製品、石製品が少量出土している。

SK383（Ⅲ-63 図、Ⅳ-77 図）

B2 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SK5、SK25、SK26 より旧く、SP398 より新しい。平面形は長方形を呈し、長辺 170cm、短辺 147cm、確認面からの深さ 103cm を測る。主軸はほぼ①を示す。坑底はほぼ平坦で壁はやや開き気味に立ち上がる。全体的に工具痕が認められる。西壁際に長辺 30cm、短辺 17cm の小穴が認められるが、性格は不明である。

遺物は 18 世紀前半に比定される陶磁器・土器類が少量出土している。

SK385（Ⅲ-64 図）

C8 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SD31 より旧く、SK386 より新しい。平面形は長方形を呈し、長辺 62cm、短辺 49cm、確認面からの深さ 80cm を測る。主軸はほぼ②を示す。坑底はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。全体に工具痕が残存する。覆土は 4 層に区分され、ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。

SK386（Ⅲ-64 図）

C8 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SD31、SK385 より旧い。平面形は不整円形を呈し、南北 98cm、東西残存値 75cm、確認面からの深さ 41cm を測る。断面形は擂鉢状を呈し、壁面は凹凸が著しい。覆土は 2 層に区分され、凹レンズ状堆積を呈する。

遺物は出土していない。

SK404（Ⅲ-65 図）

D9 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SK365 より旧く、SK433、SX496 より新しい。確認面での平面形は不整楕円形を呈し、長軸 110cm、短軸 68cm を測る。主軸はほぼ①を示す。南北各壁面にはテラス状の平坦部を有す。坑底は不整円形を呈し、長軸 54cm、短軸 46cm を測る。確認面からの深さ 90cm を測る。全体的に工具痕による凹凸が認められる。覆土は 4 層に区分され、ほぼ水平堆積を呈する。その状況から柱の抜き取り痕の可能性が考えられる。

遺物は 18 世紀代に比定される陶磁器・土器類が少量出土している。

SK412（Ⅲ-66 図、Ⅳ-77 図）

D8 ～ 9 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SK171、SK375、SP401 より旧く、SP434、SP484 より新しい。北半は SK171 に削平され残存していない。平面形は不整円形と推定され、直径約 190cm、確認面からの深さ 77cm を測る。坑底は不整楕円形を呈し、長軸 86cm、短軸 76cm を測る。壁は中位に一段稜を有す逆ハの字状を呈し、凹凸が著しい。それに対し坑底は比較的平坦である。覆土は 4 層に区分され、黒褐色土とロームブロック層で形成される。

遺物は 17 世紀前半に比定される陶磁器・土器類、金属製品、石製品が少量出土している。陶磁器では高台脇を再加工した円盤状底部製品が 2 点出土している。

SK433（Ⅲ-67 図）

D9 グリッドに位置する土坑で、ローム面で検出された。重複する SK171、SK312、SK365、SK404 より旧く、SX496 より新しい。平面形は南西部に半円状の張り出しを有す不整長方形を呈す。主軸はほぼ②を示す。規模は長軸 230cm、張り出し部を除く短軸 60cm、確認面からの深さ 60cm を測る。全体的に工具痕による凹凸が著しい。坑底はほぼ平坦で、南北壁際に深さ約 25cm を測る落ち込みを有す。南北掘り込み間は芯々約 160cm を測る。こうした長軸両端に掘り込みを有す長方形遺構は、法学部 4 号館地点の B9-4 号土坑から F9-1 号土坑へ続く一連の遺構(東京大学遺跡調査室 1990a)や、医学部附属病院外来診療棟地点 SA155（東京大学埋蔵文化財調査室 2005)など控え柱を有する塀基礎に類似するが、本遺構周辺には関連遺構が認められないことから、門柱のような 2 本単独で機能する遺構と推定される。また南西部の半円状張り出しは南側の掘り込みに接続するように傾斜していることから、柱ないし礎石抜き取り時の掘削痕

と推定される。

遺物は陶磁器・土器類、石製品が少量出土している。

SP2、SP3（Ⅲ-68 図）

B2 グリッドに位置する小穴で、1 面で検出された。SK25 埋没後に構築されている。西側の SP2 は、平面形不整楕円形を呈し、長軸 66cm、短軸 58cm を測る。坑底はほぼ平坦で壁は垂直に立ち上がる。確認面からの深さ 30cm を測る。覆土は暗褐色を基調としてほぼ水平堆積を呈す。東側の SP3 は、平面形不整円形を呈し、直径約 58cm を測る。壁は逆ハの字状に立ち上がる。覆土は 2 層に区分されるが、1 層は堆積状況及び西側壁面の様相から、掘り返された可能性がある。両遺構の 1 層は共通し、同時期に埋め戻された可能性があるが、共伴関係、機能は不詳である。

SP14、SP30、SP94（Ⅲ-69 図）

C ～ D4 グリッドに位置する小穴で、ローム面で検出された。SP14 は平面形不整長方形を呈し長軸 58cm、短軸 48cm、確認面からの深さ 38cm を測る。坑底形状から造り替えが行われたと考えられる。SP30 は東側で SD31 と重複しそれより旧い。平面形は方形を呈すると推定され残存値で南北 52cm、東西 43cm、確認面からの深さ 40cm を測る。SP94 は平面形長方形を呈し長軸 33cm、短軸 27cm、確認面からの深さ 36cm を測る。覆土はやや灰色を帯びた暗褐色土を主体とし柱痕は認められない。これらの遺構は SP14 の坑底西側方形部を基準にするとほぼ芯々 180cm で並び、柵列の可能性が指摘できる。また覆土の様相から廃絶時に柱が抜き取られたと考えられる。SP30 が 18 世紀前葉下限の SD31 に切られていることから、それ以前の区画と考えられ、SP30、SP94 に 18 世紀代の遺物が共伴することから、本小穴列から SD31 へは比較的短時間で移行したと考えられる。

SP53、SP125、SP148（Ⅲ-70 図）

D ～ E14 グリッドに位置し、東西方向に 3 基のピットが芯々約 245cm 間隔で並ぶ。主軸方向角は E-13° -S を測り、ほぼ②と直交する。ローム面で検出され、平面形は SP53、SP125 は楕円形を呈し、SP148 は不整円形を呈す。各ピットの規模は、SP53 は長軸 44cm、短軸 36cm、確認面からの深さは 26cm、SP125 は長軸 48cm、短軸 36cm、確認面からの深さは 34cm、SP148 は長軸 38cm、短軸 32cm、確認面からの深さは 30cm を測る。掘方断面形状は、いずれも上方へやや開く箱形を呈す。北側は撹乱、南側にも相対する柱列が未確認であることから塀列か。

遺物は SP53、SP125 からごく少量の陶磁器・土器類が出土している。

SP64、SP66、SP68、SP80（Ⅲ-71 図、Ⅳ-44、48 図）

E11 ～ 12 グリッドに位置し、南北方向に 4 基のピットが並ぶ。各ピットは一直線上に概ね並ぶが、芯々の間隔は一定ではない。主軸方向角は N-2° -W を測り、ほぼ①と直交する。ローム面で検出され、いずれも平面形は不整方形、掘方断面形は長方形を呈す。規模は、SP64 は長軸 70cm、短軸 52cm、確認面からの深さは 92cm、SP68 は長軸 49cm、短軸 40cm、確認面からの深さは 68cm、SP66 は長軸 66cm、短軸 62cm、確認面からの深さは 80cm、SP80 は長軸 68cm、短軸 66cm、確認面からの深さは 60cm を測る、比較的に深いピットである。周囲には相対する柱列が未確認であることから塀列か。

遺物は SP64、SP66 からはごく少量の陶磁器･土器類、金属製品、石製品が、SP80 からは陶磁器・土器類がごく少量出土しているのみである。

SP151（Ⅲ-72 図）

C13 グリッドに位置する調査区西壁際で検出された小ピットである。平面形は不明であるが、東西断面形状は逆台形を呈す。北側ほど深く、確認面からの深さは 30cm を測る。検出時に獣骨が確認されていたが、調査を進めたところ、坑底付近まで獣骨が拡がっている状況であった。分析した結果、獣骨はイヌ 1 頭分の全身骨であったことが判明した(研究編阿部論考参照)。

遺物は獣骨以外、検出されなかった。

SU16（Ⅲ-73 図）

C1 グリッド、調査区北東角に位置する地下室で、ローム面で検出された。南東角に重複する SK4 より旧い。本地下室は断面凸形を呈する形態と考えられるが、天井がほとんど崩落しているため、開口部の形状は不明である。床面北側は調査区外に延びるため詳細形状は不詳であるが、近隣調査地点事例から正方形を呈すると推定される。東西軸は 223cm を測り、確認面からの深さは 244cm を測る。床面はほぼ平坦に整形され、壁は垂直に立ち上がり工具痕が確認される。調査区外の北壁を除く三方へのオーバーハングが確認される。壁面の主軸はほぼ①を示す。覆土は東西方向では中央がやや饅頭状に盛り上がる水平堆積を呈しており、全層に渉りロームブロック・ローム粗粒を含むことから、地下室の造り替え時に埋め戻された可能性がある。

遺物は 18 世紀代の陶磁器・土器類、金属製品が少量出土した。陶磁器の一部には被熱痕が認められる。またほとんどの遺物が覆土上層から出土しており、天井崩落後の凹地に廃棄された可能性がある。

SU77（Ⅲ -75 図、Ⅳ -45 ～ 47 図）

D12 グリッドに位置するローム面で検出された地下室である。北側は撹乱され、遺存する開口部形状は不整長方形を呈し、規模は長軸（南北）180cm、短軸（東西）148cm、検出面から床面までの深さは 382cm を測る。検出面から 110cm 下方で、西から東、北から南へ傾斜するアーチ形の天井を確認した。床面は開口部直下からさらに東、南側に拡がり、平面形は南北に長い半楕円形を呈し、規模は長軸（南北）390cm、短軸（東西）330cm を測る。床面南端から立ち上がる壁面は湾曲し、工具痕が顕著であるが、それ以外の壁面および床面は丁寧に整形され比較的に平坦である。床面は鬼板化し、直上層はシルト質層がほぼ水平に堆積していたことから、埋め戻されるまでに開口期間があった事が想定される。

遺物は 17 世紀後葉から 18 世紀中葉に比定される陶磁器・土器類と、瓦、金属製品、石製品、動物遺体（貝）などが出土しているが、6 層に天井が崩落したと推定されるロームブロックが多量に確認されており、天井崩落時に、本遺構周辺の堆積土や遺構に含まれていた遺物が落ち込み、出土遺物に年代幅が生じた可能性が高い。

焼土を主体とする 7 層からは、二次的な熱を受けた 17 世紀後葉に比定される陶磁器・土器類が出土しており、この焼土層が天和 2 年（1682）の火災に由来した焼土である可能性が高い。なお二次的な熱を受けた遺物は少量であり、焼土とともに持ち込まれたと推測される。

SU140（Ⅲ -74 図、Ⅳ -55 図）

F14 グリッドに位置するローム面で検出された地下室である。SE57、SK58、SK323、SK324 と重複し、新旧は SK58 より旧、SE57、SK323、SK324 より新である。開口部形状は南側 2/3 が半円形、北側 1/3 が方形を呈す。床面は隅丸長方形を呈し、規模は長軸（南北）196cm、短軸（東西）160cm を測り、確認面からの深さは最深で 118cm を測る。断面形状は、東側立ち上がりが緩やかにオーバーハングする台形を呈す。壁面や床面壁際には工具痕による凹凸が確認されるが、床面中央付近は、わずかに平坦になっており、使用した事で平坦化した可能性もある。

遺物は 18 世紀前葉に比定される陶磁器・土器類、金属製品、石製品、動物遺体（貝）などが出土している。

SU202（Ⅲ -76 図、Ⅳ -70 図）

D7 ～ 8 グリッドに位置する地下室で、ローム面で検出された。開口部の主軸はほぼ①を示す。重複する SK315 より新しい。開口部の平面形は長方形を呈し、南北 143cm、東西 116cm を測る。縦坑西壁南半から東壁にかけて SK315 と重複しているためか、重複部壁際に東壁 3 基、西壁 2 基の平面方形状の小穴が確認された。また東壁では床面上 130cm、西壁では床面上 100cm に奥行数 cm のテラスが設けられている。その様相から SK315 の覆土崩落を防ぐための柱と梁と推定される。室部は開口部北半にあり、北壁と西壁北半が各々約 50cm オーバーハングしている。壁面のオーバーハングは確認面下約 60cm で確認され、天井部は傾斜をして奥壁に向かう。床面は東西方向に長い長方形を呈し、東西 132cm、南北 110cm、奥壁高 75cm、確認面から床面までの深さ 180cm を測る。床面、壁面ともに平滑に整形されている。覆土は 3 層に区分され、ほぼ水平堆積を呈している。2 ～ 3 層にかけて灰褐色粘土ブロック、砂質粘土ブロックが含まれる。本遺構周辺には SU366、SU381、SU400 と地下室が集中しており、一空間内で造り替えられた結果と推測される。

遺物は 18 世紀前半に比定される陶磁器・土器類、瓦、金属製品、石製品がコンテナ 1 箱出土している。

SU366、SU400（Ⅲ -77 図、Ⅳ -77 図）

SU366 は D ～ E7 グリッドに位置する地下室で、ローム面で検出された。重複する SP187 より旧いが、SK378、SU400 とは天井部の崩落により新旧は捉えられなかった。開口部は天井部崩落のため、西壁の一部が遺存しているにすぎず、形態、規模は不詳である。室部床面は隅丸方形を呈し、南北 170cm、東西 150cm、確認面からの深さ 210cm を測る。主軸はほぼ①を示す。床面はほぼ平坦に整形されているが、一部に工具痕が残存する。また SU400 床面に接する部分では SU400 の床面が削り取られた様相を呈している。

遺物は出土していない。

SU400 は D ～ E7 グリッドに位置する地下室で、ローム面で検出された。重複する SP186、SP187 より旧い。東側は調査区外に延び、詳細は不詳である。天井部の崩落により開口部は確認されなかった。調査区内での室部平面形は（長）方形を呈し、南北 239cm、東西最大 62cm、確認面からの深さ 160cm を測る。床面、壁ともに比較的丁寧に仕上げられ、SU366 床面より約 50cm 高い。西壁にはわずかに天井部崩落の痕跡が認められるが、

詳細は不明である。

遺物は 18 世紀前半に比定される陶磁器・土器類、石製品が少量出土している。

土層観察断面は、両遺構の接続部に位置したため、各層の帰属を把握することは難しいが、3 層は堆積レベルより SU366 に伴う可能性が高い。

両遺構接続部には、土留め用の柱穴が認められないことから、単一遺構の可能性も考えられる。

SU381（Ⅲ -78 図、Ⅳ -73 ～ 76 図）

D ～ E、7 ～ 8 グリッドに位置する地下室で、ローム面で検出された。開口部の平面形は長方形を呈し、長辺 111cm、短辺 82cm を測る。主軸はほぼ①を示す。確認面下約 70cm で天井に移行し室部は四方へ拡がる。床面は東壁北部が調査区外に延びているが、平面形は方形を呈し、1 辺約 150cm を測る。奥壁高は 125cm を測り、断面形はなで肩の凸形を呈している。壁面、床面ともに比較的に平滑に仕上げられているが、部分的に工具痕が残存する。また床面には南壁から東壁にかけて幅約 20cm、深さ約 4cm を測る壁溝が巡る。壁溝内は工具痕による凹凸が顕著に認められる。覆土は 5 層に区分され、東西方向では凸レンズ状堆積を呈し、特に 1 層中より多量の遺物が出土している。

遺物は東大編年Ⅴａ期に比定される陶磁器・土器類、瓦、金属製品、石製品がコンテナ 5 箱出土した。陶磁器・土器類には被熱製品も含まれているが、覆土に焼土が認められないので、二次廃棄と考えられる。

SX39（Ⅲ -79 図、Ⅳ -31 図）

A ～ B、3 ～ 6 グリッドに位置する遺構で、1 面で検出された。全体的に撹乱を受け、詳細は不明であるが、残存部での平面形は不整形を呈し、南北最大 12.0m、東西最大 387cm、確認面からの深さ 50cm を測る。重複する SK87 より旧く、SK108、SX119、SX167、SK221 より新しい。覆土は 3 層に区分され、1 層には被熱瓦、焼土粒が多量に含まれ、火災後の瓦礫廃棄の様相を示す。従って明和 9 年（1772）の目黒行人坂火事を原因とする西之御殿罹災資料の可能性が高い。被熱瓦の多くは拳大以下で、意図的に割って廃棄したと考えられる。その様相は SK171 出土被災瓦と類似する。また 2、3 層は非常にしまりが強く、火災以前の整地面の可能性もある。

遺物は、瓦の他、陶磁器・土器類、石製品が少量している。

SX119（Ⅲ -80 図、Ⅳ -54 図）

A ～ B4 グリッドに位置する遺構で、ローム面で検出された。重複する SX39 より旧い。西半は調査区外に延びる。調査区内での平面形は不整形を呈し、南北最大 195cm、東西最大 88cm、確認面からの深さ 22cm を測る。坑底は凹凸が著しく、北側には緩やかなテラス状の高まりがある。また全体的に根痕が認められる。その様相から植栽痕と推定される。

遺物は 17 世紀後半に比定される陶磁器・土器類が少量出土している。

SX198（Ⅲ -81 図）

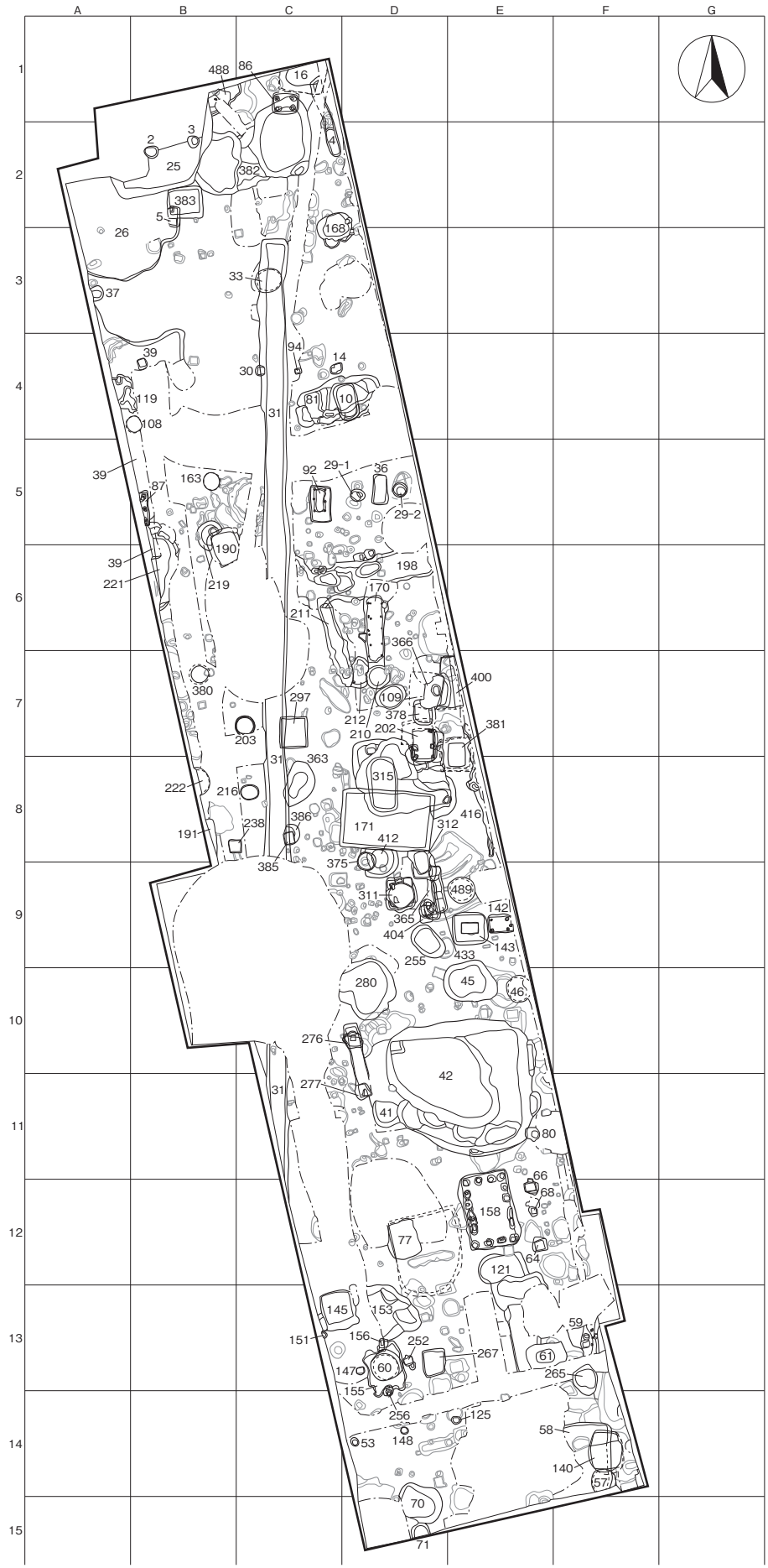
C ～ D、5 ～ 6 グリッドに位置する遺構で、ローム面で検出された。主軸はほぼ②を示す。重複する SD31、SP118、SP183 より旧く、SK211、SP239、SP240、SP295、SP299、SP301、SP402、SP403、SP429 より新しい。西側は SD31 に削平され、東側は調査区外に延びるため詳細は不明である。調査区内での平面形は不整長方形を呈し、長軸 640cm 以上、短軸 192cm 以上、確認面からの深さ 35cm を測る。その形状から溝の可能性もある。坑底は凹凸が著しく、壁は緩やかに丸味を帯びて立ち上がる。坑底には長軸約 130cm、短軸約 70cm を測る不整楕円形ピットが 2 基存在する。覆土は 5 層に区分され、ローム粒を含む黒褐色土を基調とする。形態、規模が北側約 850cm に位置する SK81 と類似性が認められるが、性格は不明。

遺物は 17 世紀に比定される陶磁器・土器類、石製品が少量出土している。

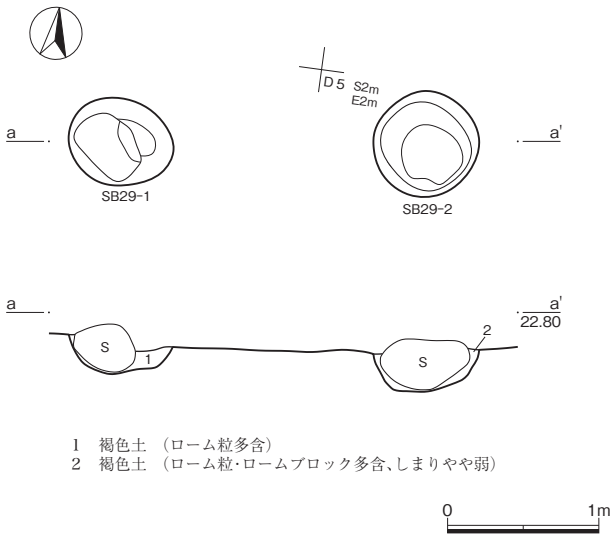
SX416（Ⅲ -82 図）

E7 ～ 8 グリッドに位置する遺構で、ローム面で検出された。調査区東際で検出され、ほぼ壁面を調査したに過ぎない。主軸はほぼ②を示す。壁面は凹凸が著しく斜行する。覆土はローム粒を含む黒褐色土を基調とする。その様相から採土坑もしくは生垣痕と考えられる。

遺物は出土していない。


A
B
C
D
E
F
G
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
488
86
16
2
3
25
382
383
5
26
168
33
37
39
94
14
30
119
81
10
108
31
39
92
29-1
36
87
163
29-2
39
190
198
221
219
170
211
366
400
380
297
109
378
212
202
381
203
210
31
363
315
222
216
386
416
238
171
312
191
412
385
375
311
489
142
365
404
143
433
255
280
45
46
276
42
277
31
41
80
66
68
158
77
64
121
145
153
59
151
156
252
267
61
147
60
265
155
256
125
58
53
148
140
57
70
71
0
5m

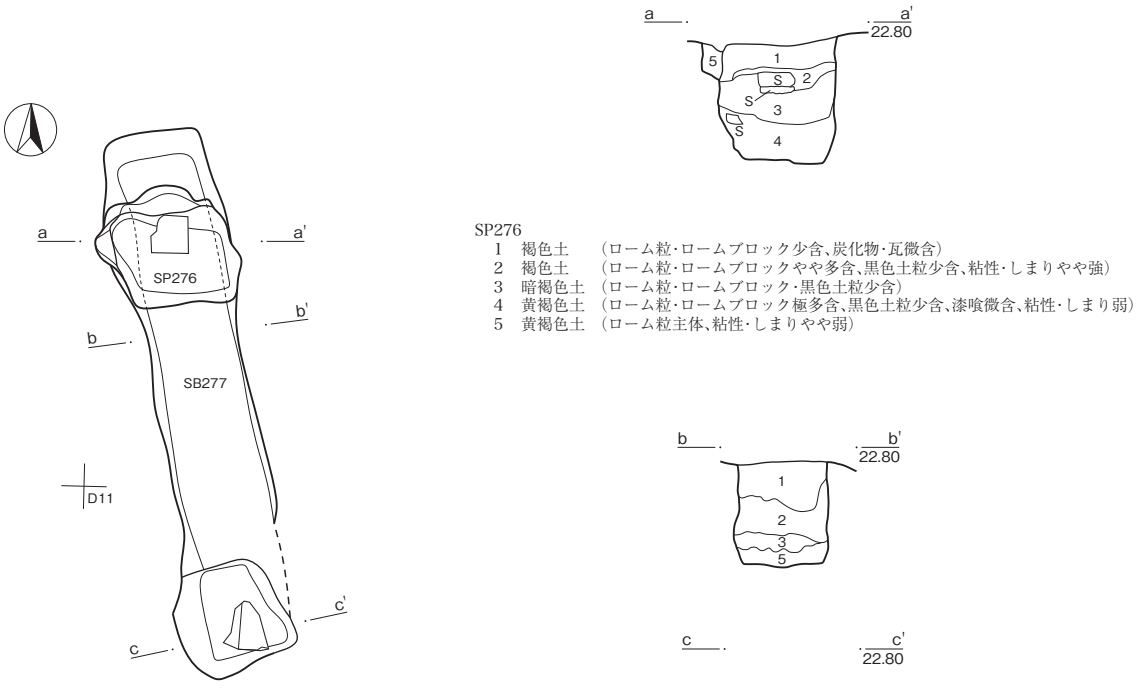
Ⅲ-1図　遺構配置図



1　褐色土　（ローム粒多含）
2　褐色土　（ローム粒･ロームブロック多含、しまりやや弱）

0　1m

Ⅲ-2図　SB29

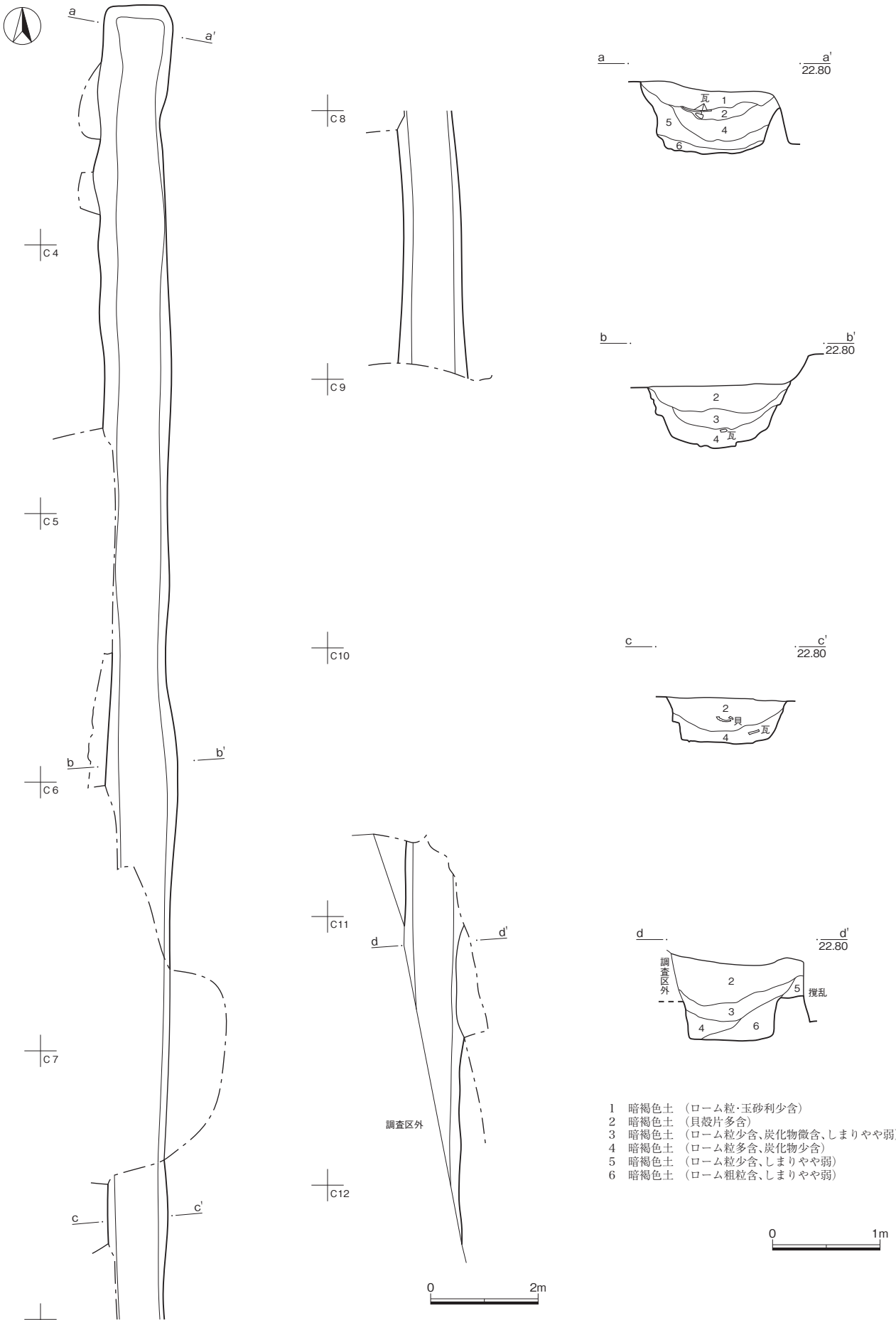


SP276
1　褐色土　（ローム粒･ロームブロック少含、炭化物･瓦微含）
2　褐色土　（ローム粒･ロームブロックやや多含、黒色土粒少含、粘性･しまりやや強）
3　暗褐色土　（ローム粒･ロームブロック･黒色土粒少含）
4　黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック極多含、黒色土粒少含、漆喰微含、粘性･しまり弱）
5　黄褐色土　（ローム粒主体、粘性･しまりやや弱）

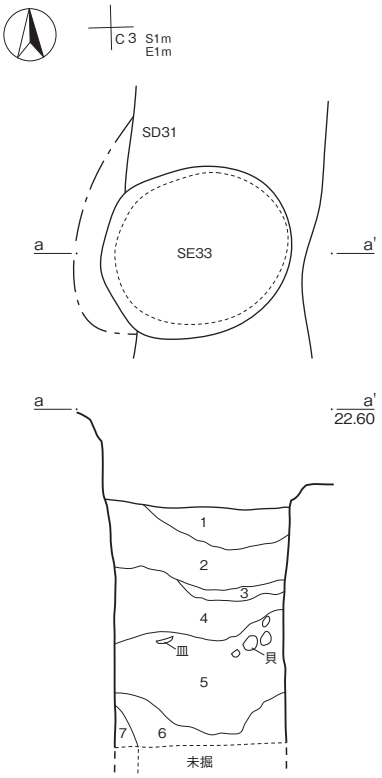
SB277
1　暗黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック多含、黒色土粒･小石少含、粘性･しまり弱）
2　黄褐色土　（ローム主体、黒色土粒少含）
3　褐色土　（ローム粒･ロームブロックやや多含、黒色土粒少含、粘性･しまりやや弱）
4　黄褐色土　（ローム粒多含、黒色土粒少含、粘性･しまりやや弱）
5　黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック極多含、黒色土粒少含、粘性･しまり弱）
6　黄褐色土　（ローム主体、黒色土粒少含、粘性･しまりやや強）

0　1m

Ⅲ-3図　SB277、SP276


a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
C4
C5
C6
C7
C8
C9
C10
C11
C12
調査区外
0
2m
22.80
瓦
貝
調査区外
攪乱
1 暗褐色土 （ローム粒・玉砂利少含）
2 暗褐色土 （貝殻片多含）
3 暗褐色土 （ローム粒少含、炭化物微含、しまりやや弱）
4 暗褐色土 （ローム粒多含、炭化物少含）
5 暗褐色土 （ローム粒少含、しまりやや弱）
6 暗褐色土 （ローム粗粒含、しまりやや弱）
0
1m

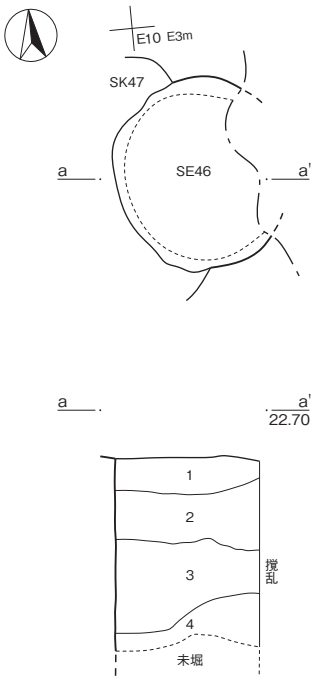
Ⅲ-4図　SD31



1　暗褐色土　（やや灰色を帯びる。炭化物含、貝殻少含、しまりやや弱）
2　茶褐色土　（ローム粒含、しまりやや弱）
3　暗黄褐色土　（ロームの埋土、粘性やや強、しまり強）
4　暗褐色土　（ローム粒含、しまり弱）
5　暗褐色土　（自然遺物（赤貝中心）多含、粘性やや強、しまり弱）
6　暗褐色土　（ロームブロック・黄白色粘土ブロック多含）
7　暗褐色土　（ローム粒・黒色土粒多含、しまりやや弱）

0　1m

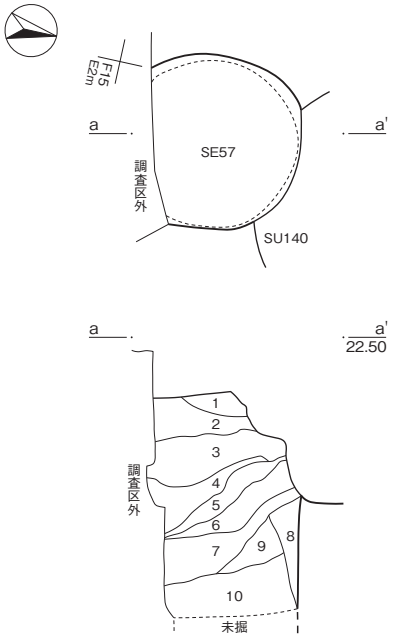
Ⅲ-5図　SE33



1　灰褐色土　（ローム粒・焼土粒・炭化物少含）
2　褐色土　（焼土粒・焼土ブロックやや多含、ローム粒・炭化物少含、粘性・しまりやや弱）
3　赤褐色土　（焼土粒・焼土ブロック極多含、炭化物少含、粘性なし、しまり極弱）
4　赤褐色土　（焼土層、焼土粒極多含、炭化物少含、粘性・しまりなし、3層より焼土粒が多い）

0　1m

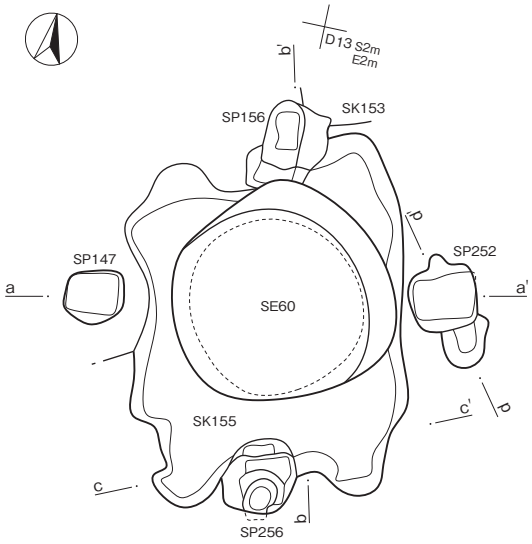
Ⅲ-6図　SE46

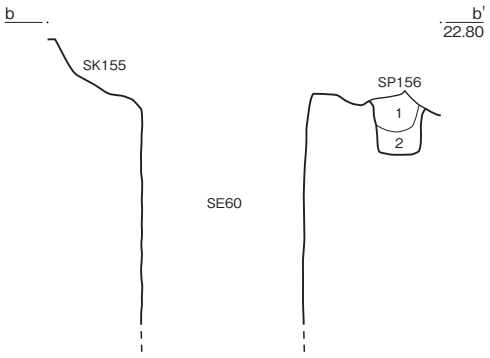


1　褐色土　（ローム粒少含、焼土粒微含）
2　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒微含）
3　灰褐色土　（瓦片多含、ローム粒微含、粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　（ロームブロックやや多含、粘性・しまりやや強、6層と似る）
5　明灰色土　（ローム粒少含、ややシルト質、粘性やや強、しまりやや弱）
6　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、焼土粒微含、粘性・しまりやや強、4層と似る）
7　灰褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりやや弱）
8　灰褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりやや弱、井戸枠か？）
9　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、黒色土粒少含、粘性・しまりやや強）
10　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含）

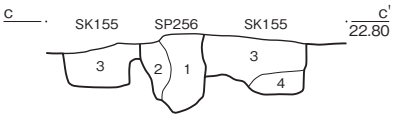
0　1m

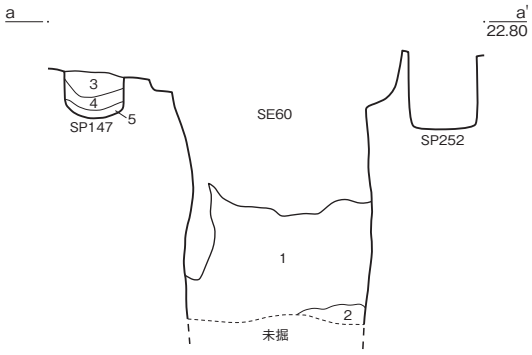
Ⅲ-7図　SE57





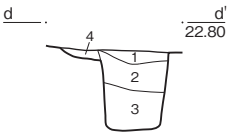
SP156
1 灰黄褐色土 （ローム粒･ロームブロック多含、粘性･しまりやや強）
2 黄褐色土 （ローム主体）





SP256
1 褐色土 （ロームブロック少含、粘性･しまりなし）
2 暗褐色土 （SK155 の 3 層と極似。ロームブロック･黄白色粘土ブロックやや多含）

SK155
3 暗褐色土 （ロームブロック･黄白色粘土ブロックやや多含、焼土粒･炭化物微含、粘性･しまりやや強）
4 灰色土 （ローム粒･炭化物･瓦片少含）

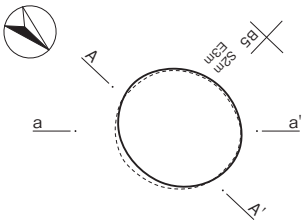


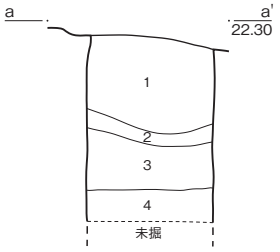
SE60
1 明灰色土 （炭化物少含、ややシルト質、しまり強）
2 明灰色土 （ローム粒･ロームブロックやや多含、粘性･しまりやや強）

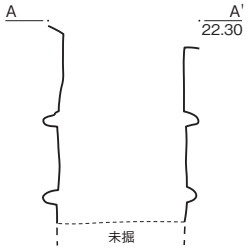
SP147
3 暗褐色土 （ローム粒･ロームブロックやや多含、焼土粒微含、粘性･しまりやや強）
4 灰褐色土 （ローム粒･ロームブロック少含）
5 暗黄褐色土 （ローム粒･ロームブロック多含、黒色土粒少含、しまりやや弱）

SP252
1 褐色土 （小石やや多含、ローム粒少含、粘性･しまりなし）
2 灰褐色土 （ローム粒少含、粘性･しまりやや弱）
3 褐色土 （ローム粒少含、粘性･しまりやや弱）
4 灰黄褐色土 （ローム粗粒やや多含）

Ⅲ-8図 SE60、SK155、SP147、SP156、SP252、SP256

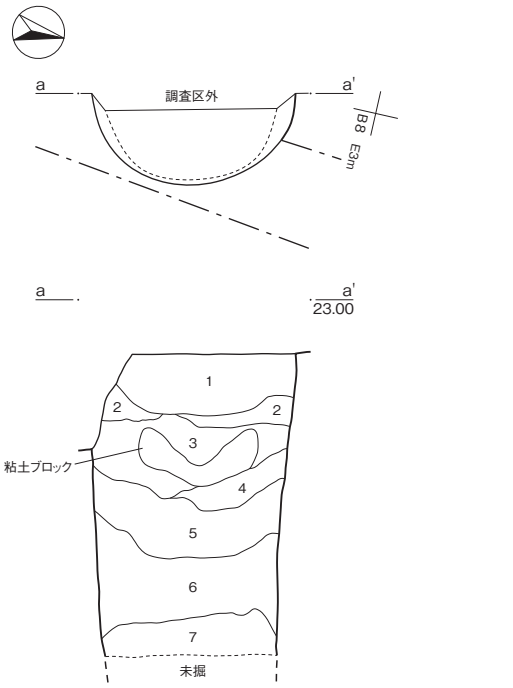






1 暗褐色土 （ローム粒･ロームブロック多含、しまりやや弱）
2 黒褐色土 （ローム粒少含、しまりやや弱）
3 暗褐色土 （灰白色粘土粗粒多含、しまりやや強）
4 淡褐色砂質粘土 （灰白色粘土粗粒含、しまり強）

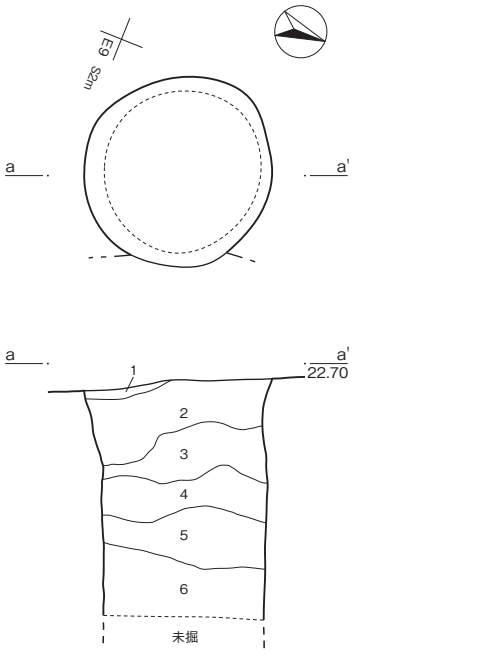
Ⅲ-9図 SE163



1　暗褐色土　（ロームブロック・灰白色粘土粒少含、粘性やや弱、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粒少含、灰白色粘土粒含、しまりやや弱）
3　暗褐色土　（灰白色粘土粗粒多含、ローム粒少含、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（炭化物・黄白色粘土ブロック少含、しまりやや弱）
5　暗褐色土　（ローム粗粒多含）
6　褐色土　（ロームブロック極多含）
7　褐色土　（しまりやや強）

0　1m

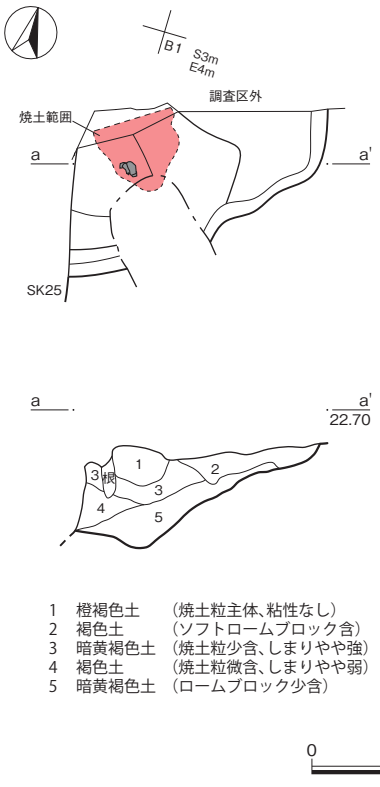
Ⅲ-10図　SE222



1　暗褐色土　（ローム粒含）
2　暗褐色土　（ローム粒少含、しまり弱）
3　茶褐色土　（ロームブロック含、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（灰褐色粘土ブロック含）
5　暗茶褐色土　（ローム粗粒・灰褐色粘土粗粒極多含、粘性・しまりやや強）
6　暗褐色土　（ロームブロック含、しまり強）

0　1m

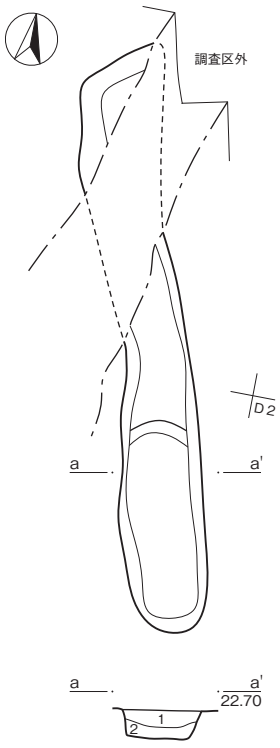
Ⅲ-11図　SE489



1　橙褐色土　（焼土粒主体、粘性なし）
2　褐色土　（ソフトロームブロック含）
3　暗黄褐色土　（焼土粒少含、しまりやや強）
4　褐色土　（焼土粒微含、しまりやや弱）
5　暗黄褐色土　（ロームブロック少含）

0　1m

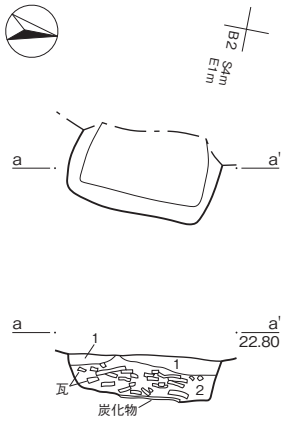
Ⅲ-12図　SF488



1　黒褐色土　（ローム粒微含、しまりやや弱）
2　黒褐色土　（ローム粗粒多含、しまりやや弱）

0　1m

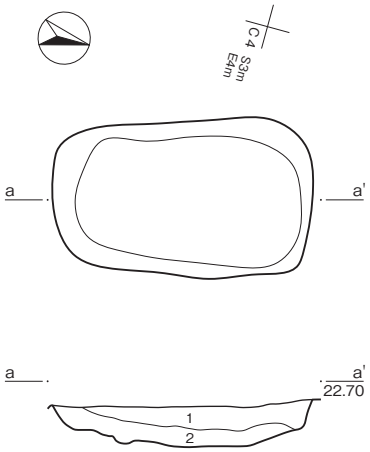
Ⅲ-13図　SK4



1　暗褐色土　（焼土粒微含、しまり弱）
2　橙褐色焼土（瓦片多含、粘性・しまりなし）

0　1m

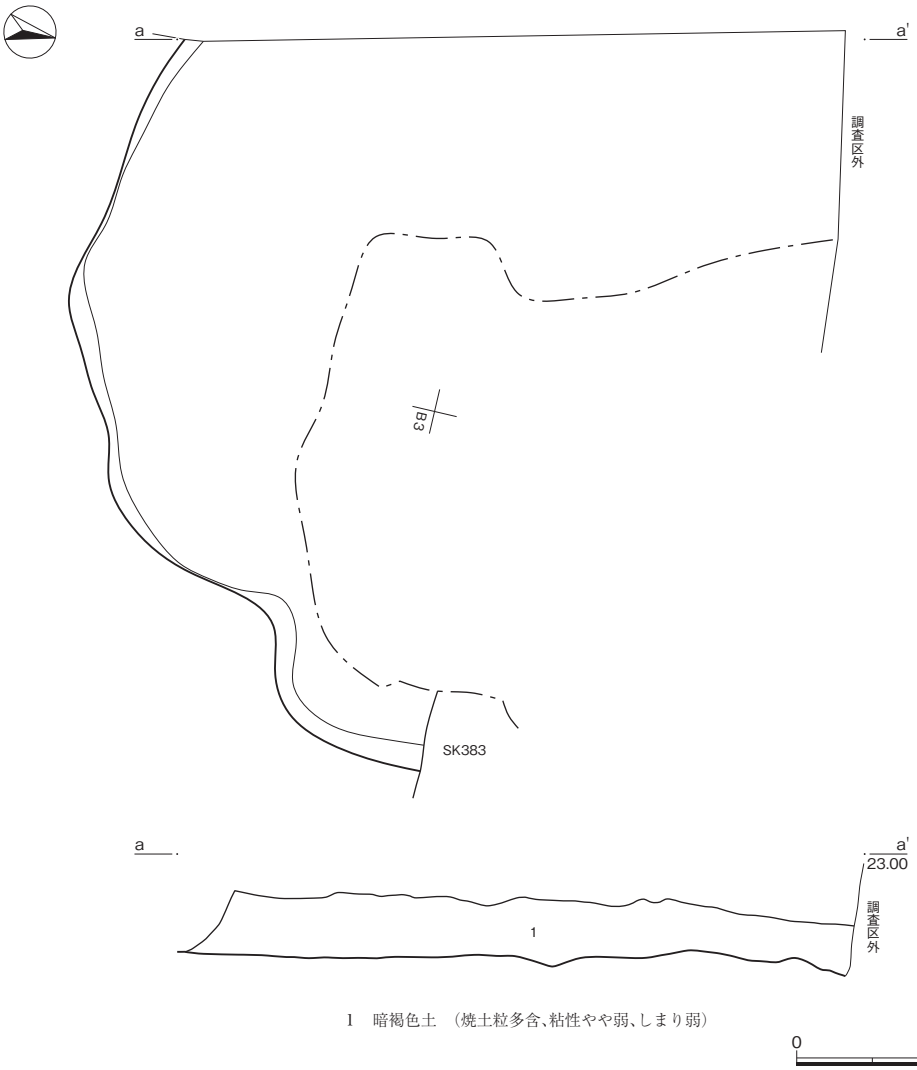
Ⅲ-14図　SK5



1　暗褐色土　（ローム粒含、しまりやや弱）
2　暗灰褐色土（灰色粘土ブロック多含、ローム粒・焼土粒少含、しまり弱）

0　1m

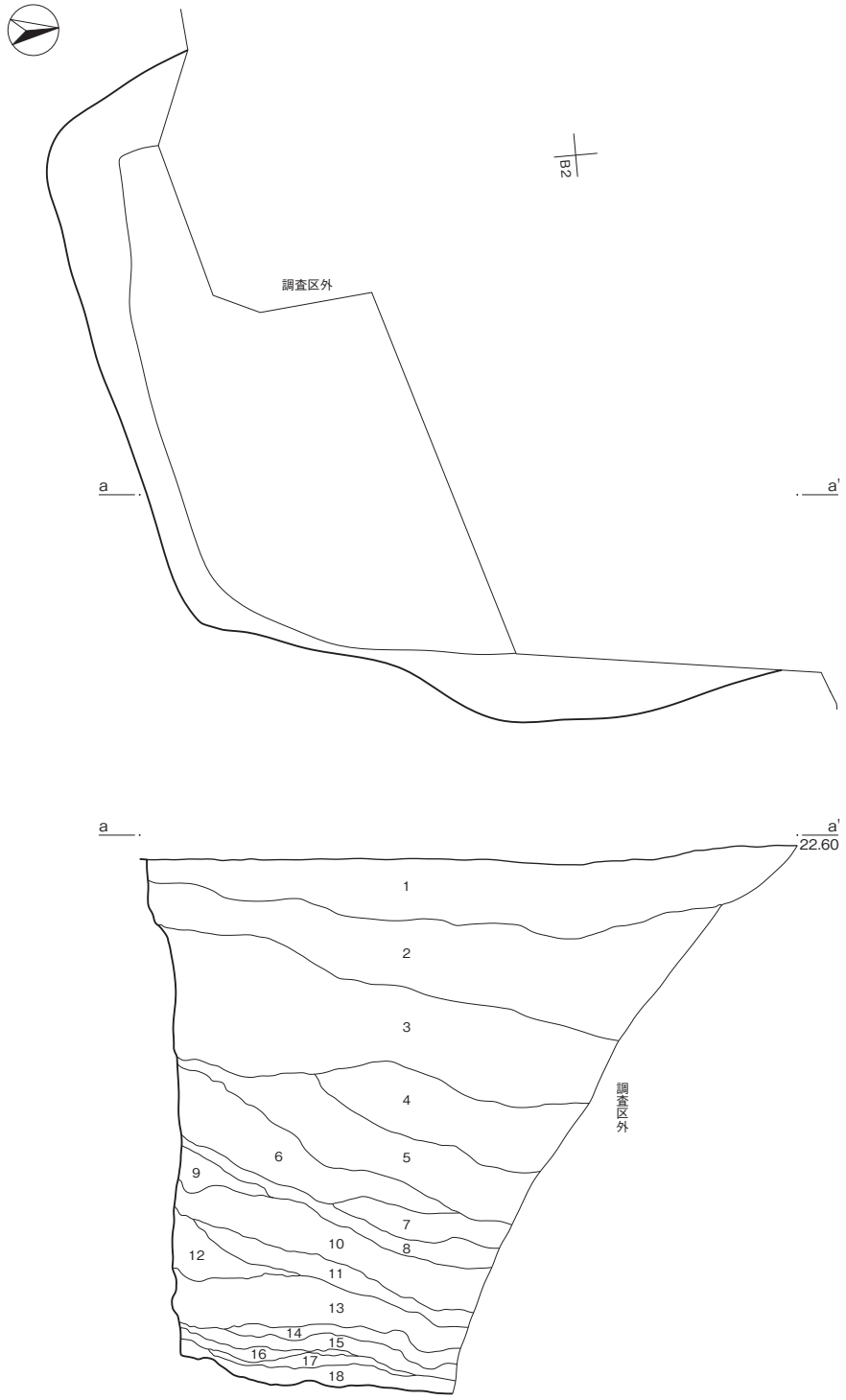
Ⅲ-15図　SK10



1　暗褐色土（焼土粒多含、粘性やや弱、しまり弱）

0　1m

Ⅲ-16図　SK26

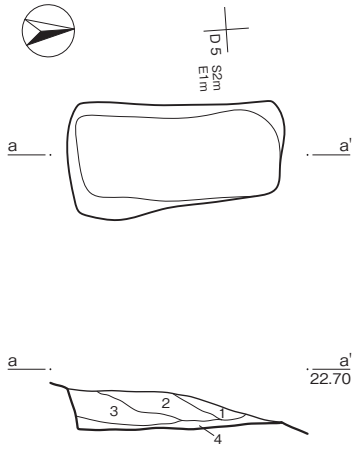


1　暗褐色土　（ローム粒･焼土粒少含、しまり極強）
2　暗褐色土　（焼土粒･玉砂利含、しまりやや強）
3　暗褐色土　（炭化物･焼土粒多含、ローム粒･玉砂利少含、自然･人工遺物含、しまり強）
4　暗褐色土　（炭化物･自然遺物（アサリ）多含、ローム粒･焼土粒少含、しまり強）
5　暗褐色土　（ローム粒･炭化物･焼土粒含、遺物少含、しまり強）
6　暗褐色土　（ローム粒･炭化物･焼土粒･自然遺物（貝）多含、しまりやや強）
7　暗褐色土　（ローム粒･焼土粒少含、炭化物微含、しまり強）
8　暗褐色土　（ローム粒･炭化物多含、しまり強）
9　褐色土　（ロームブロック極多含、しまりやや強）
10　暗褐色土　（自然遺物（アサリ？）多含、炭化物含、焼土粒少含、しまりやや強）
11　暗褐色土　（ローム粒･炭化物多含、粘性やや弱、しまりやや強）
12　褐色土　（ローム粒極多含、しまりやや強）
13　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒･玉砂利少含、粘性やや弱、しまり強）
14　褐色土　（ローム粒多含、粘性やや弱、しまり強）
15　暗褐色土　（ローム粒少含、炭化物･焼土粒微含、粘性やや弱、しまり強）
16　褐色土　（ローム粒極多含、粘性やや弱、しまりやや強）
17　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性弱、しまり極強）
18　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性弱、しまり強）

※　4･5･6･10･11･13 層は人工遺物多含

0　1m

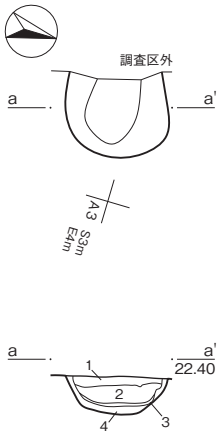
Ⅲ-17図　SK25



1　黒褐色土　（ローム粗粒多含）
2　暗褐色土　（ローム粒微含、しまりやや弱）
3　暗褐色土　（ローム粒・灰色粘土粒含、しまりやや弱）
4　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含）

0　1m

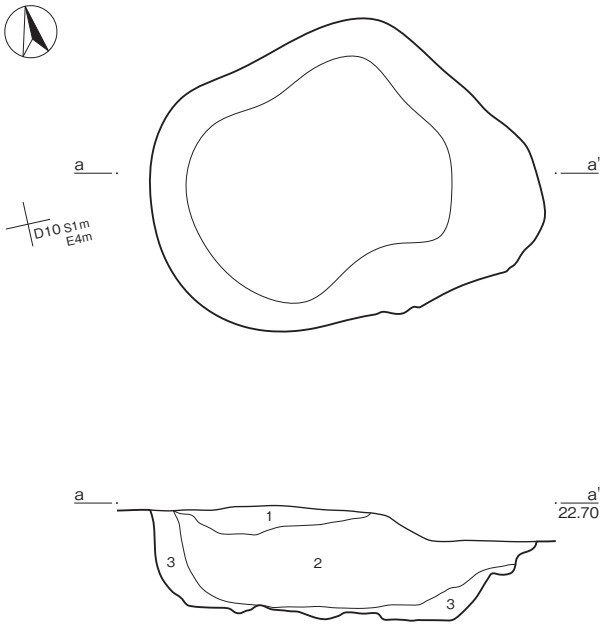
Ⅲ-18図　SK36



1　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、黒色土粒少含）
2　暗灰褐色土　（黒色土粒・黒色土ブロック・ローム粒・ロームブロック少含）
3　黒色土　（黒色土粒・黒色土ブロック多含、ローム粒・ロームブロック少含）
4　暗黄褐色土　（粘性やや強、しまり極強、ロームによる貼床？）

0　1m

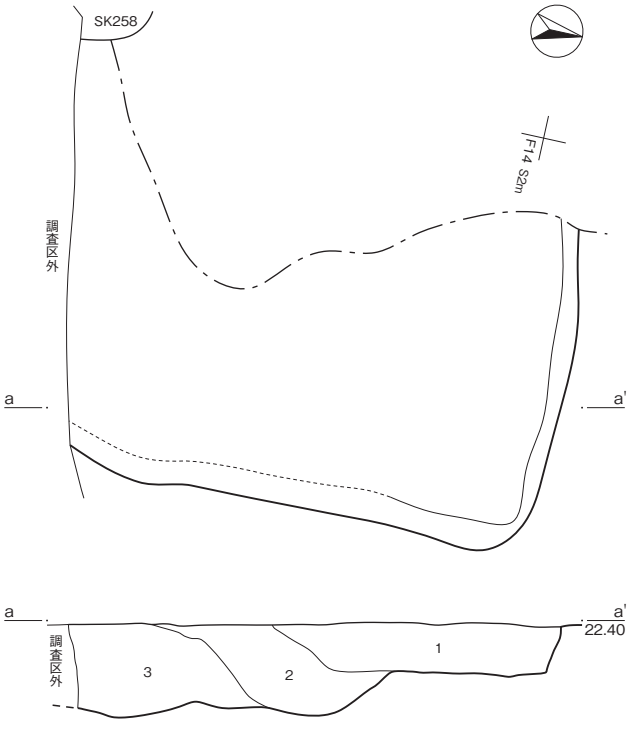
Ⅲ-19図　SK37



1　灰褐色土　（ローム粒・ロームブロック・炭化物・小石少含、焼土粒微含）
2　灰色土　（瓦片・炭化物やや多含、ローム粒・ロームブロック少含、焼土粒微含、粘性・しまりやや弱、遺物集中）
3　灰色土　（ロームブロック多含、炭化物やや多含）

0　1m

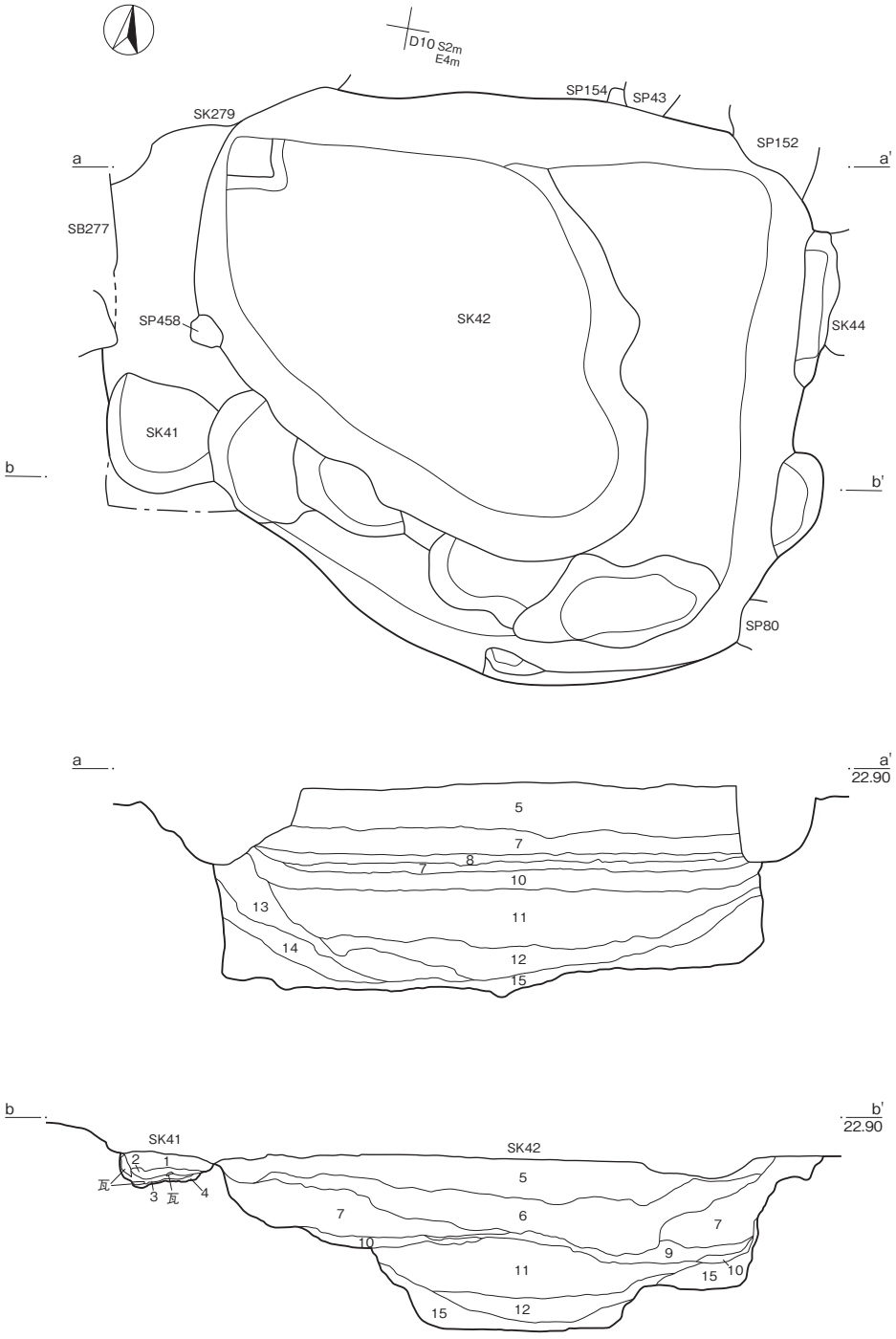
Ⅲ-20図　SK45



1　灰褐色土　（ローム粒・ロームブロック・炭化物少含、焼土粒・赤漆片微含）
2　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、黒色土粒・黒色土ブロック少含、炭化物・焼土粒微含）
3　灰褐色土　（ローム粒・焼土粒少含）

0　1m

Ⅲ-21図　SK58

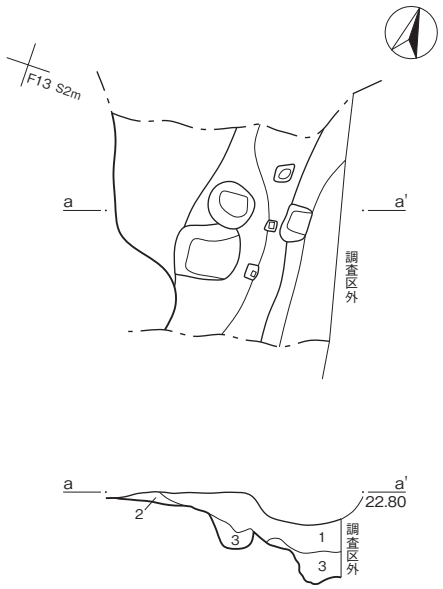


SK41
1　暗褐色土　（ローム粒･ロームブロック少含）
2　暗黄褐色土　（ロームブロックやや多含）
3　赤褐色土　（ローム粒･ロームブロック･ベンガラ粒･ベンガラブロックやや多含、灰白色粘土ブロック少含、砂質やや強、粘性弱）
4　黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック多含、ベンガラ粒少含、粘性･しまりやや弱）

SK42
5　暗灰褐色土　（ローム粒･ロームブロック･焼土粒･焼土ブロック･黄白色粘土ブロック･漆喰･瓦片･炭化物少含）
6　暗灰色土　（炭化物やや多含、ローム粒･ロームブロック･小石･瓦片少含）
7　明灰色土　（ロームブロック･漆喰･瓦片やや多含、炭化物少含、粘性やや強）
8　黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック多含、焼土粒･焼土ブロック少含、炭化物微含、しまりやや強）
9　灰褐色土　（炭化物やや多含、ローム粒･ロームブロック少含、焼土粒微含、粘性･しまりやや弱）
10　黄褐色土　（ローム粒･ロームブロックやや多含、炭化物･焼土粒微含）
11　暗褐色土　（小石やや多含、ローム粒･ロームブロック少含、炭化物･焼土粒･焼土ブロック微含、本層上面が一部鬼板化）
12　暗黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック極多含、黒色土粒･黒色土ブロック少含、炭化物微含）
13　黄褐色土　（ロームブロック主体、焼土ブロック微含）
14　灰色土　（ローム粒･ロームブロック少含、炭化物･焼土粒微含）
15　黄褐色土　（ローム粒主体、ロームブロック少含、粘性･しまりやや弱）

0　（S=1/80）　2m

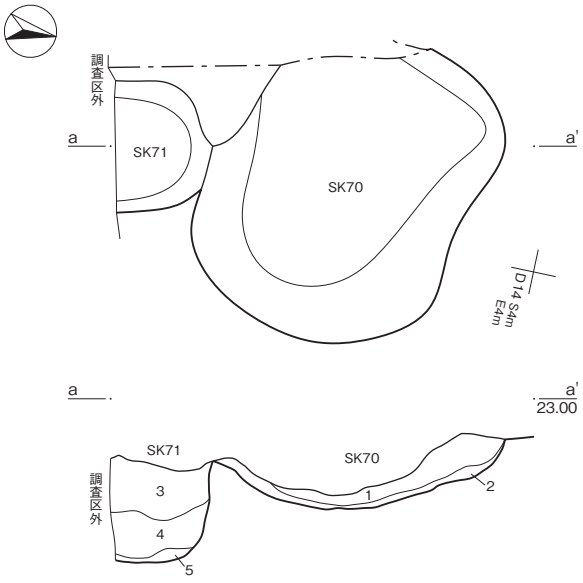
Ⅲ-22図　SK41、SK42



1 灰褐色土 （ローム粒・ロームブロック少含、焼土粒・焼土ブロック・灰白色粘土ブロック微含）
2 黄褐色土 （ロームブロック主体、黒色土粒・黒色土ブロック少含）
3 褐色土 （ローム粒やや多含、黒色土ブロック少含）

0 1m

Ⅲ-23図 SK59

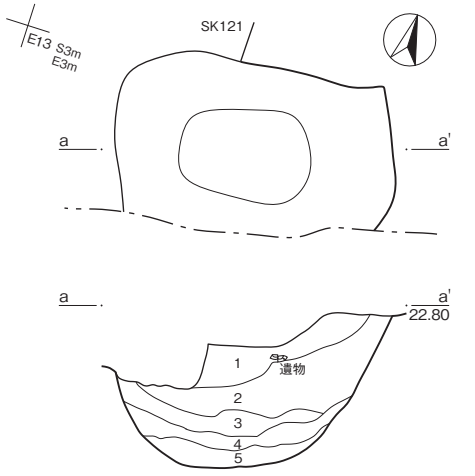


SK70
1 灰褐色土 （ローム粒・ロームブロック少含）
2 黄褐色土 （ローム粒・ロームブロック多含、黒色土粒・黒色土ブロック少含）

SK71
3 暗灰色土 （ローム粒少含）
4 暗灰色土 （ローム粒微含）
5 黒色土 （ローム粒・ロームブロック多含、黒色土粒・黒色土ブロックやや多含）

0 1m

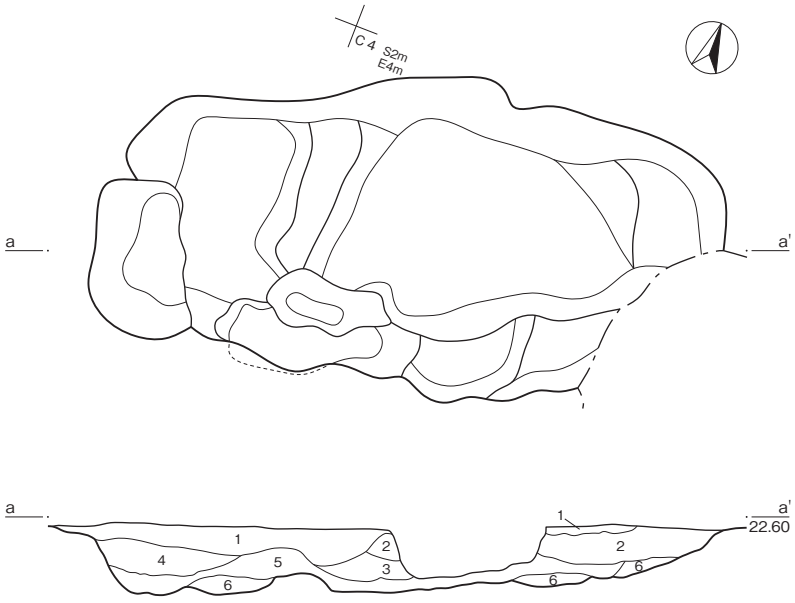
Ⅲ-25図 SK70、SK71



1 灰褐色土 （ローム粒・ロームブロック少含、焼土粒・焼土ブロック・炭化物微含）
2 灰褐色土 （明灰白色粘土粒・明灰白色粘土ブロック・小石やや多含、ローム粒・焼土粒微含、粘性・しまりやや弱）
3 明灰白色土 （明灰白色粘土粒・明灰白色粘土ブロック極多含、ロームブロック・焼土ブロック微含、やや砂質強）
4 明灰色土 （ローム粒・ロームブロックやや多含、炭化物微含、粘性・しまりやや弱）
5 黄褐色土 （ローム粒・ロームブロック多含、しまりやや弱）

0 1m

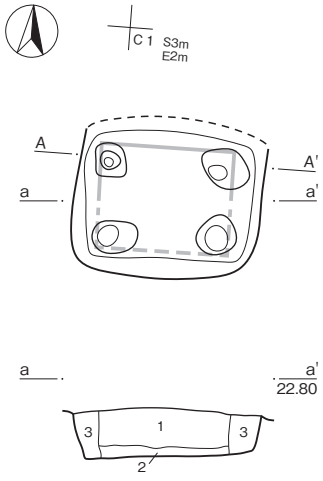
Ⅲ-24図 SK61



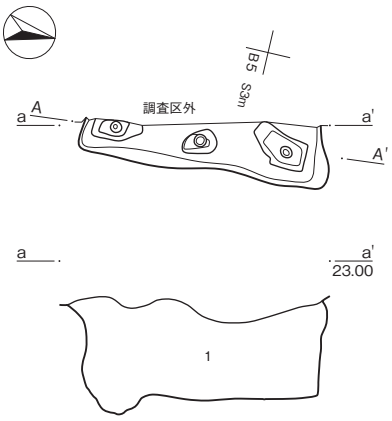
1 黒褐色土 （ロームブロック極多含）
2 黒褐色土 （ローム粒少含）
3 黒褐色土 （灰白色粘土ブロック多含、粘性・しまりやや弱）
4 黒褐色土 （ローム粒・ロームブロック多含）
5 黒褐色土 （ローム粒極多含、ロームブロック少含）
6 暗黄褐色土 （ロームブロック主体、粘性やや強、しまりやや弱）

0 1m

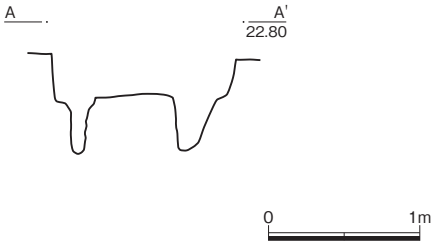
Ⅲ-26図 SK81



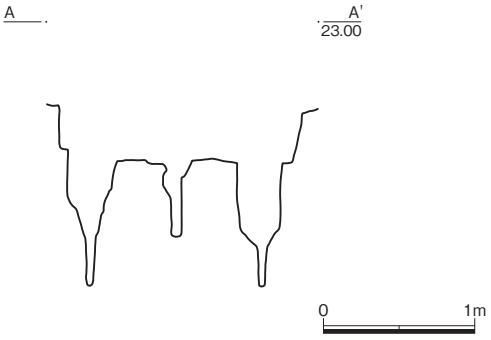
1　暗灰褐色土　（炭化物少含、ローム粒微含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　　（ローム粒含）
3　暗褐色土　　（ローム粒多含、しまり強）



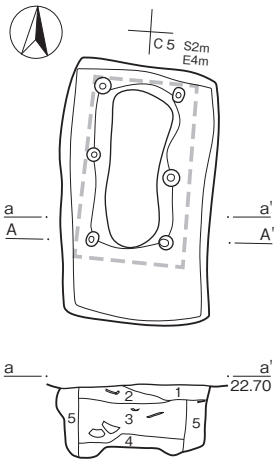
1　暗褐色土　（灰褐色砂質粘土･焼土粒微含、粘性やや弱、しまり弱）



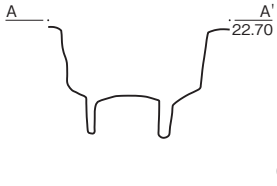
Ⅲ-27図　SK86



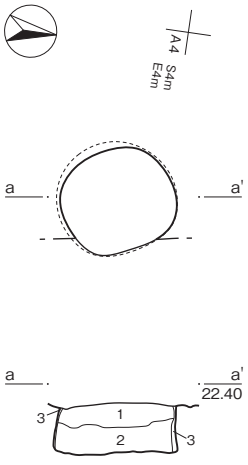
Ⅲ-28図　SK87



1　暗褐色土　　（ローム粒少含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　　（ローム粒･炭化物微含、しまりやや弱）
3　暗灰褐色土　（人工･自然遺物多含、ローム粒･炭化物含、しまり弱）
4　暗黄褐色土　（ローム粒主体、しまりやや強）
5　暗褐色土　　（ローム粒極多含）

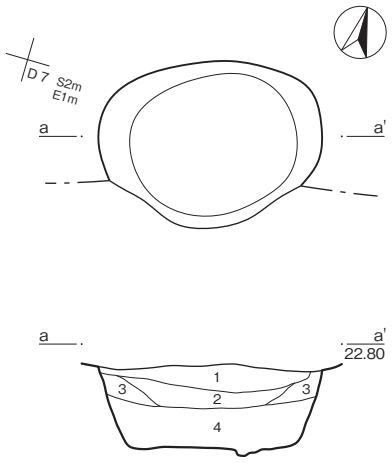


Ⅲ-29図　SK92



1　黒褐色土　　（ローム粗粒多含）
2　暗灰褐色土　（ローム粒多含、焼土粒少含、粘性弱、しまり極弱）
3　黄白色土　　（焼土粒少含、粘性やや強、しまり極強、粘土層の貼付）

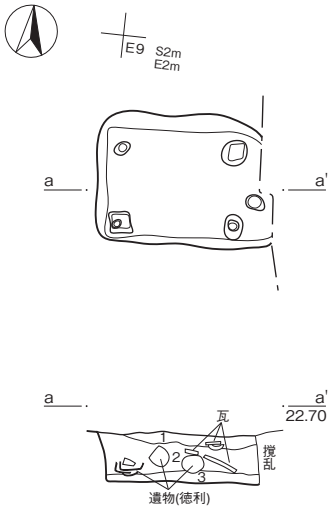
Ⅲ-30図　SK108



1　暗褐色土　（ローム粒少含）
2　褐色土　　（ロームブロック極多含、しまりやや弱）
3　暗褐色土　（ローム粒含、しまり弱）
4　暗褐色土　（ローム粒・炭化物粒・貝殻片含、しまり弱）

0　1m

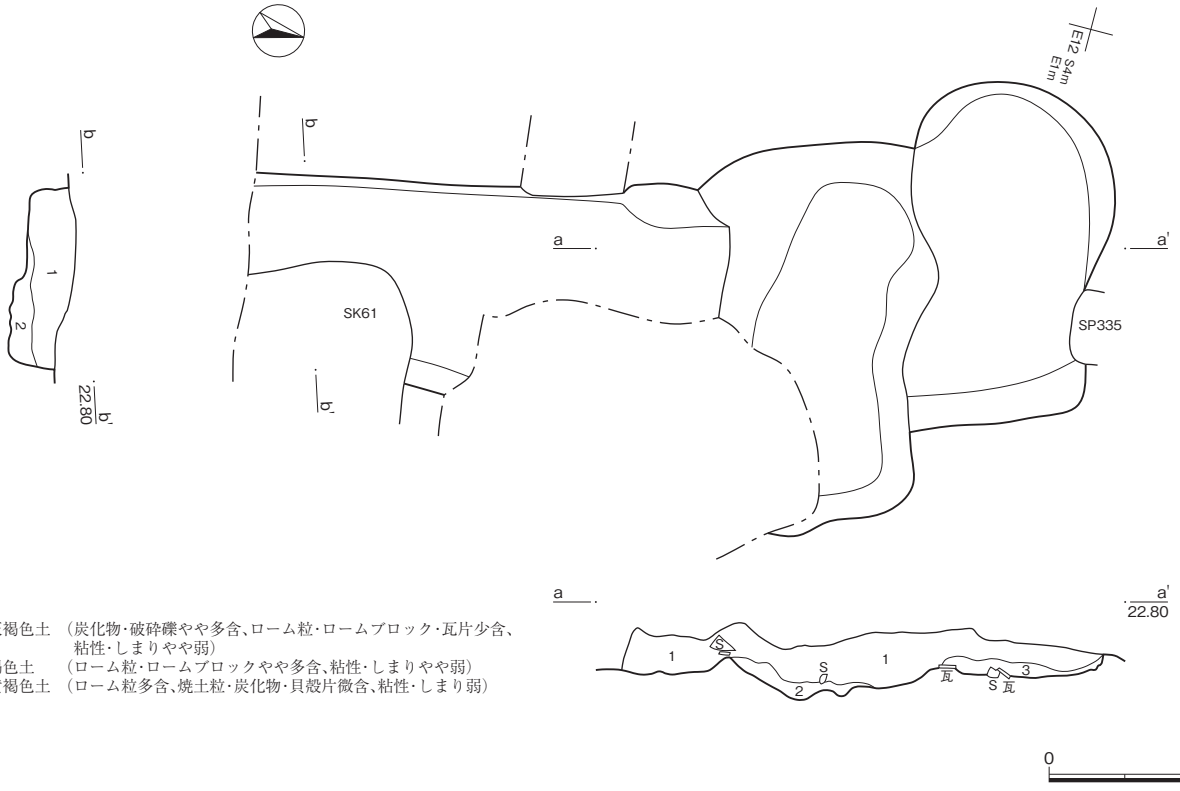
Ⅲ-31図　SK109



1　灰褐色土　（ローム粒・ロームブロック・灰白色粘土ブロックやや多含、
　　焼土粒・炭化物少含、しまりやや弱）
2　灰褐色土　（ローム粒・炭化物・焼土粒少含、粘性・しまりなし）
3　黄褐色土　（ローム主体、粘性やや強、しまりやや弱）

0　1m

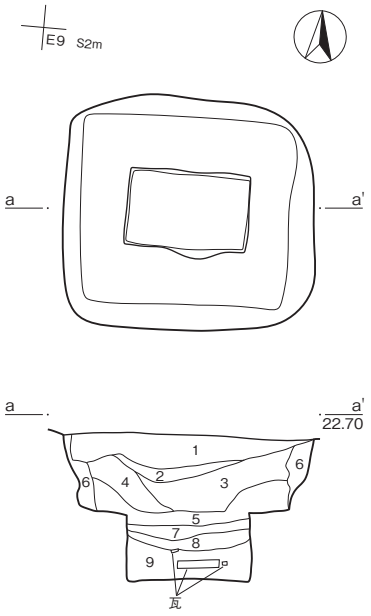
Ⅲ-33図　SK142



1　灰褐色土　（炭化物・破砕礫やや多含、ローム粒・ロームブロック・瓦片少含、
　　粘性・しまりやや弱）
2　褐色土　　（ローム粒・ロームブロックやや多含、粘性・しまりやや弱）
3　黄褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・炭化物・貝殻片微含、粘性・しまり弱）

0　1m

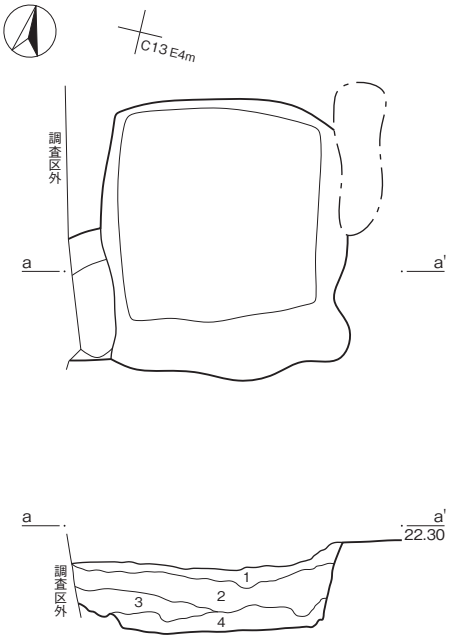
Ⅲ-32図　SK121



1　暗褐色土　（ローム粒･ロームブロック･小石少含、焼土粒微含）
2　明灰褐色土（明灰白色粘土ブロックやや多含、ローム粒･炭化物少含、粘性やや強）
3　灰褐色土　（ローム粒･ロームブロック･炭化物少含、焼土粒微含、粘性･しまりやや弱）
4　暗褐色土　（ローム粒･ロームブロックやや多含、炭化物微含、粘性やや弱）
5　黒褐色土　（ローム粒･ロームブロック･炭化物やや多含）
6　黄褐色土　（ローム粒主体、ロームブロックやや多含、黒色土粒少含、粘性･しまりやや弱）
7　褐色土　　（ローム粒･黒色土粒やや多含、ロームブロック少含、粘性･しまりなし）
8　暗灰色土　（黒色土粒多含、炭化物やや多含、ローム粒微含、粘性･しまりなし）
9　暗黄褐色土（ローム粒･黒色土粒･瓦片やや多含、粘性･しまりなし）

0　1m

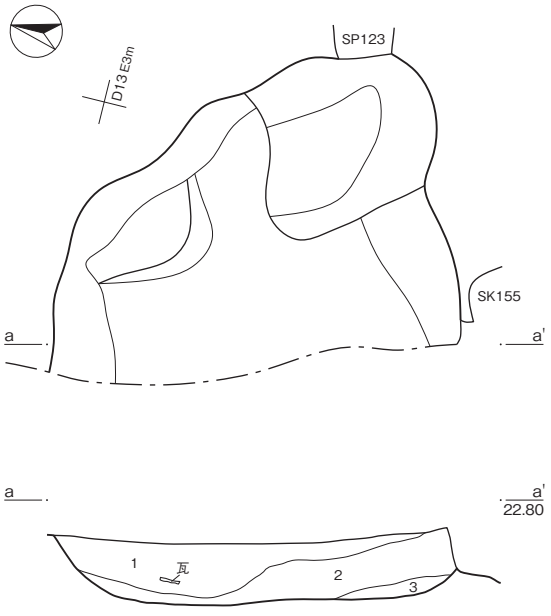
Ⅲ-34図　SK143



1　黒褐色土　（黒色土主体、ローム粒･ロームブロックやや多含）
2　暗黄褐色土（ローム粒･ロームブロック多含、黒色土粒･黒色土ブロック少含）
3　暗褐色土　（ローム粒やや多含、ロームブロック微含）
4　暗黄褐色土（2層よりやや明、ロームブロック多含、黒色土粒少含）

0　1m

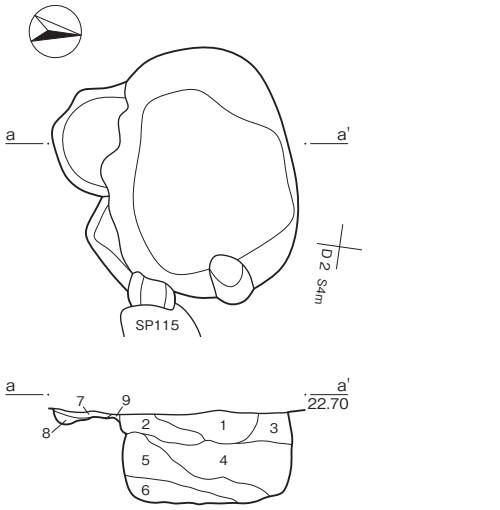
Ⅲ-35図　SK145



1　暗褐色土　（ローム粒･ロームブロックやや多含、黄白色粘土ブロック･瓦片少含、炭化物微含）
2　黒褐色土　（黒色土主体、ローム粒･ロームブロック少含）
3　暗黄褐色土（ローム粒･ロームブロック多含、黒色土粒･黒色土ブロックやや多含）

0　1m

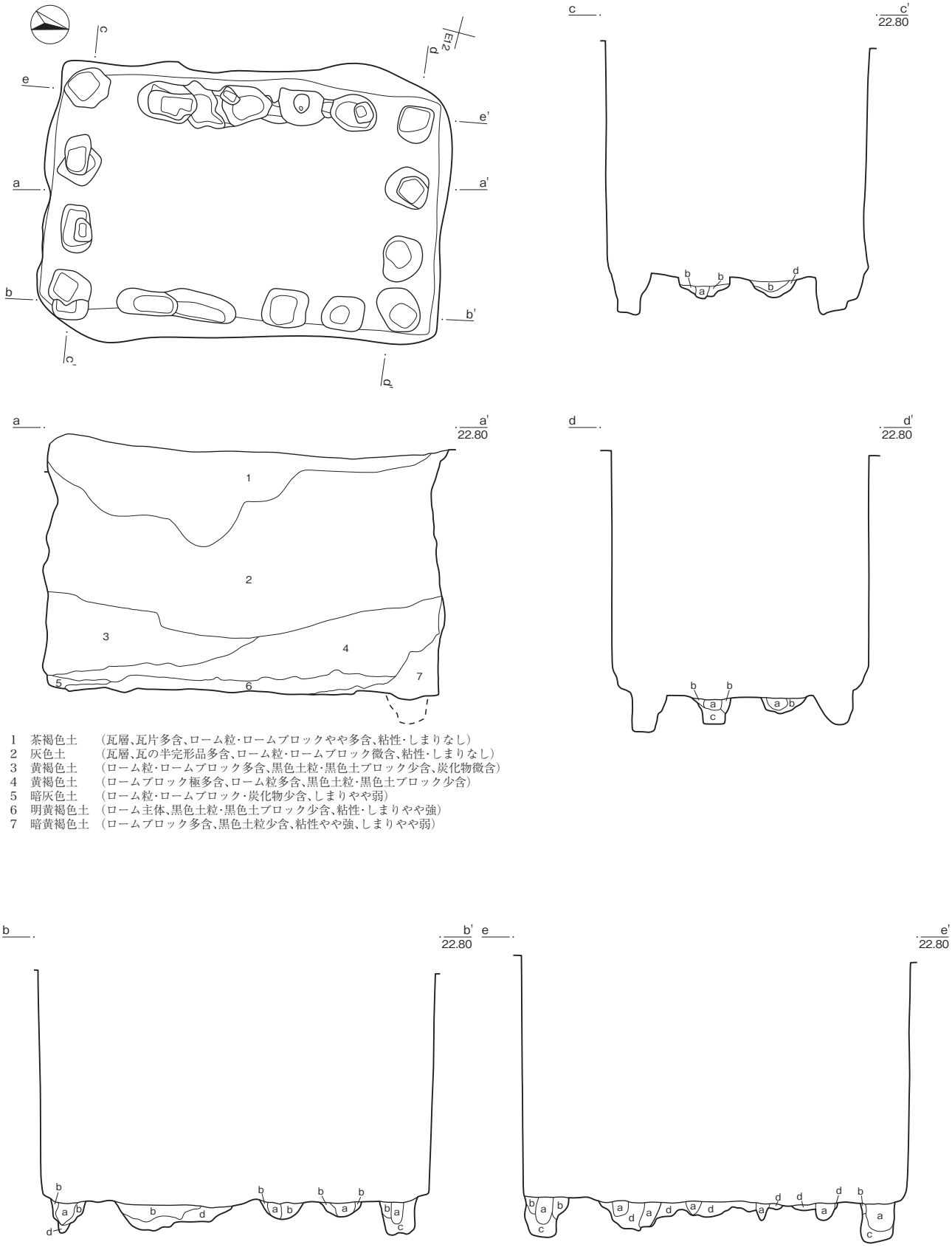
Ⅲ-36図　SK153



1　暗黄褐色土（ロームの埋土、粘性･しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒少含）
3　褐色土　　（ローム粒含）
4　暗褐色土　（ローム粒少含、しまりやや弱）
5　暗褐色土　（焼土粒多含、しまり弱）
6　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒少含、しまり弱）
7　茶褐色土　（焼土粒･炭化物多含）
8　褐色土
9　暗褐色土　（ローム粒少含、しまり強）

0　1m

Ⅲ-37図　SK168

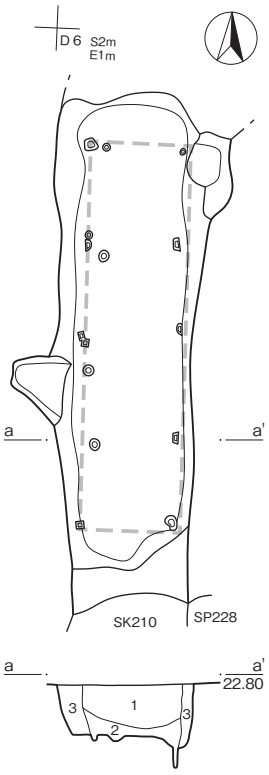


1　茶褐色土　（瓦層、瓦片多含、ローム粒・ロームブロックやや多含、粘性・しまりなし）
2　灰色土　（瓦層、瓦の半完形品多含、ローム粒・ロームブロック微含、粘性・しまりなし）
3　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、黒色土粒・黒色土ブロック少含、炭化物微含）
4　黄褐色土　（ロームブロック極多含、ローム粒多含、黒色土粒・黒色土ブロック少含）
5　暗灰色土　（ローム粒・ロームブロック・炭化物少含、しまりやや弱）
6　明黄褐色土　（ローム主体、黒色土粒・黒色土ブロック少含、粘性・しまりやや強）
7　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、黒色土粒少含、粘性やや強、しまりやや弱）

a　褐色土　（ローム粒・ロームブロック・黒色土粒・黒色土ブロックやや多含、粘性・しまりなし）
b　黄褐色土　（ロームブロック極多含、焼土粒微含）
c　灰黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含）
d　黄褐色土　（ローム主体、黒色土粒微含、粘性・しまりやや強）

0　1m

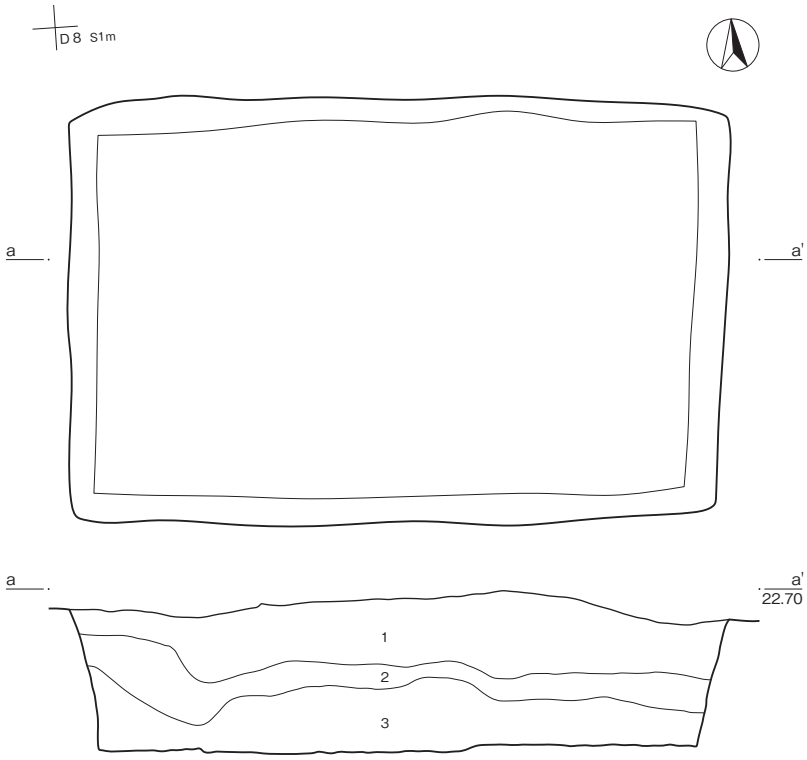
Ⅲ-38図　SK158



1　暗灰褐色土　（ローム粒微含、粘性やや強）
2　暗褐色土　　（ローム粒多含、しまりやや強）
3　褐色土　　（ローム粒多含、焼土粒微含）

0　1m

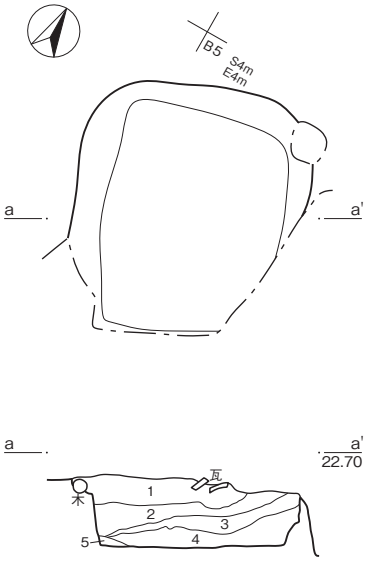
Ⅲ-39図　SK170



1　暗赤褐色土　（瓦片・焼土粒極多含、粘性弱、しまりなし）
2　暗赤褐色土　（焼土粒主体、瓦片極多含、粘性・しまりなし）
3　暗赤褐色土　（瓦片・焼土粒極多含、粘性・しまりなし）

0　1m

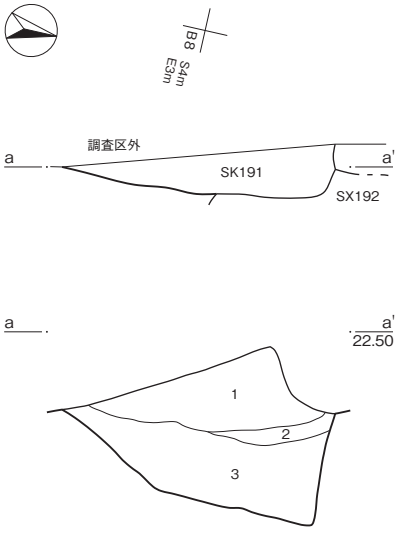
Ⅲ-40図　SK171



1　暗灰褐色土　（ローム粒・玉砂利・炭化材・瓦片含）
2　暗褐色土　　（ローム粒少含、しまりやや弱）
3　暗褐色土　　（ローム粒多含、しまりやや弱）
4　暗褐色土　　（ローム粒少含、しまりやや弱）
5　褐色土　　（ローム粒極多含、しまり弱）

0　1m

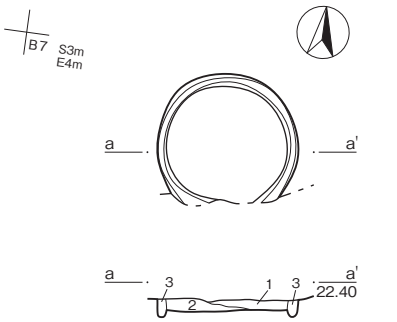
Ⅲ-41図　SK190



1　暗灰褐色土　（炭化物・砂利多含、ローム粒少含）
2　暗褐色土　　（ローム粒少含、しまりやや強）
3　暗褐色土　　（ローム粒極多含、炭化物少含、しまりやや弱）

0　1m

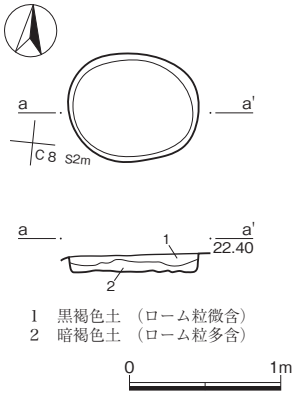
Ⅲ-42図　SK191



1　暗褐色土　（ローム粒少含）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒少含）
3　褐色土　　（ローム粒多含、しまりやや弱）

0　1m

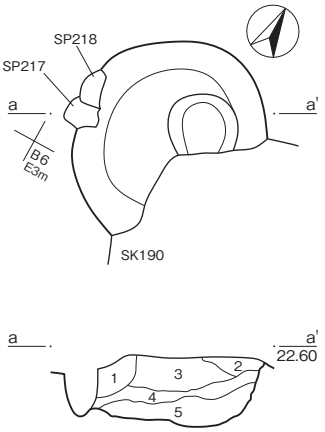
Ⅲ-43図　SK203



1　黒褐色土　（ローム粒微含）
2　暗褐色土　（ローム粒多含）

0　1m

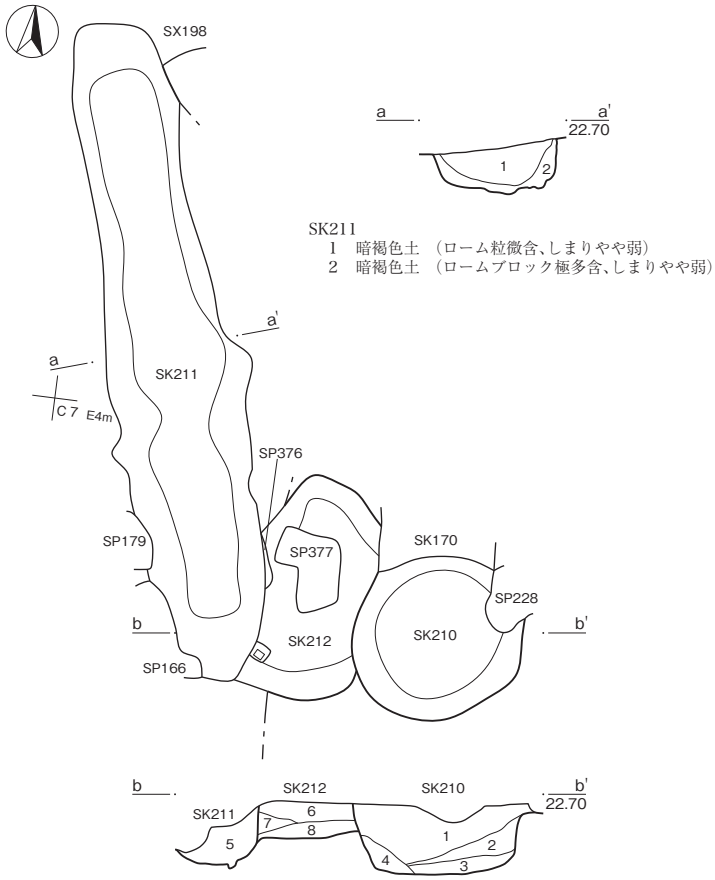
Ⅲ-45図　SK216



1　暗褐色土　（ローム粒多含）
2　黒褐色土　（ロームブロック多含、しまりやや弱）
3　黒褐色土
4　黒褐色土　（ローム粒少含）
5　黒褐色土　（ローム粒多含、焼土粒少含、しまりやや弱）

0　1m

Ⅲ-46図　SK219



SK211
1　暗褐色土　（ローム粒微含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ロームブロック極多含、しまりやや弱）

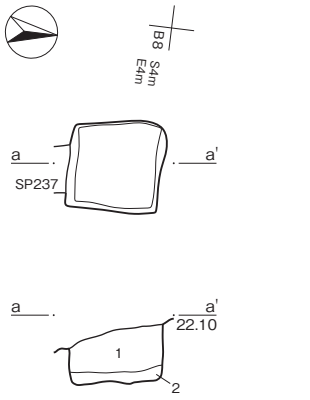
SK210
1　暗褐色土　（ローム粒少含、炭化物・焼土粒微含）
2　暗褐色土　（ローム粒微含）
3　褐色土　　（ローム粒少含）
4　褐色土　　（ローム粒極多含、しまりやや弱）

SK211
5　黒褐色土　（ローム粒少含）

SK212
6　暗褐色土　（ローム粒含）
7　暗褐色土　（ロームブロック多含）
8　褐色土　　（ローム主体）

0　1m

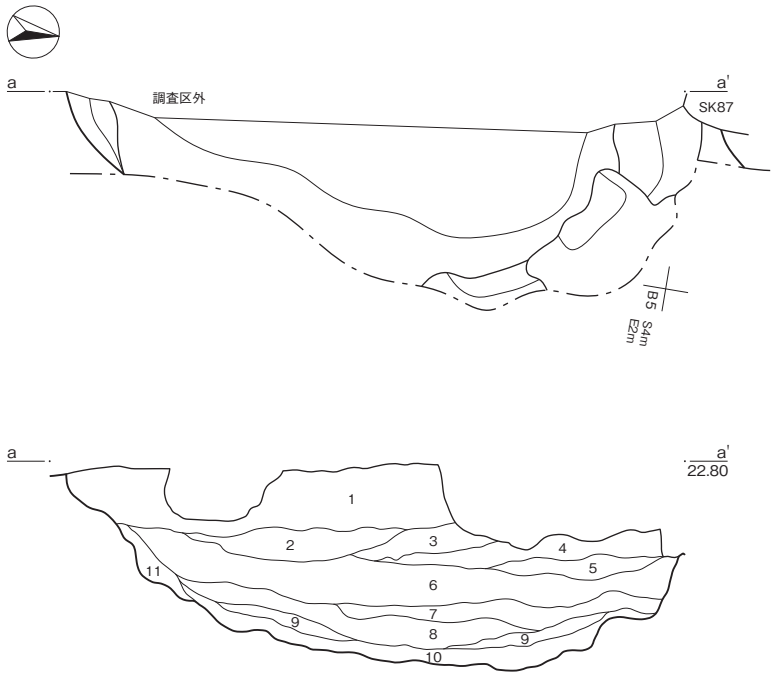
Ⅲ-44図　SK210、SK211、SK212



1　暗褐色土　　（ローム粒少含、しまり弱）
2　暗黄褐色土　（ローム粒極多含）

0　1m

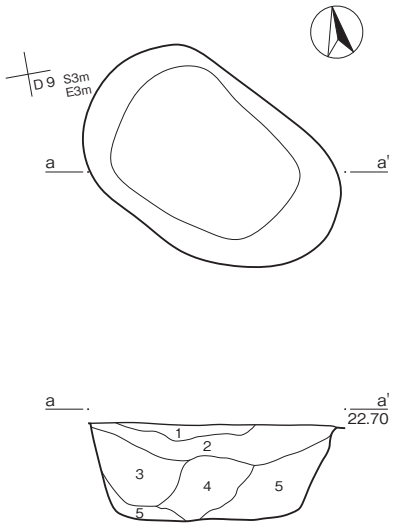
Ⅲ-47図　SK238



1　暗褐色土　（ローム粒多含、炭化物少含、焼土粒微含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（黄白色粘土ブロック多含）
3　暗褐色土　（ローム粒微含）
4　茶褐色土　（ローム粒多含、しまりやや弱）
5　暗褐色土　（ローム粒多含、ロームブロック少含）
6　暗褐色土　（ローム粒少含）
7　暗褐色土　（ローム粒多含、ロームブロック少含）
8　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含）
9　暗褐色土　（ローム粒多含）
10　暗褐色土　（ローム粒極多含）
11　褐色土　（ローム微細粒極多含）

0　1m

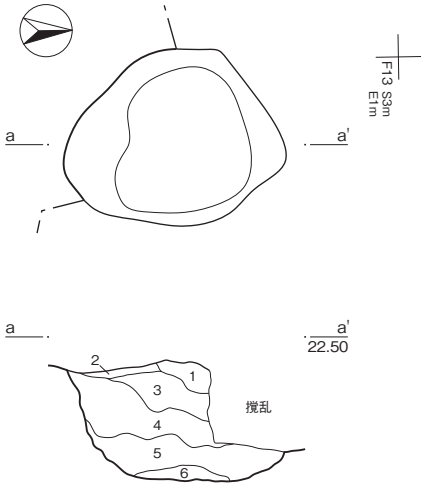
Ⅲ-48図　SK221



1　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりやや強）
2　褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、炭化物・瓦片微含、粘性・しまりやや強）
3　褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、炭化物微含、しまりやや弱）
4　褐色土　（ローム粒・炭化物微含、粘性・しまりやや強）
5　褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、炭化物微含）

0　1m

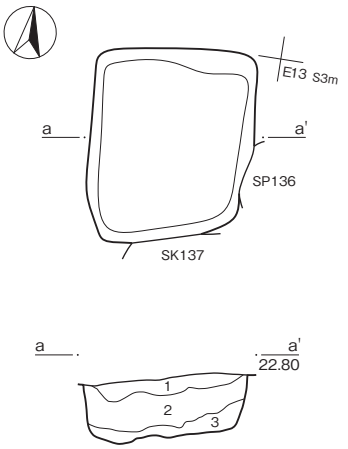
Ⅲ-49図　SK255



1　淡褐色土　（黄白色粘土ブロックやや多含、ローム粒・ロームブロック少含、炭化物微含、粘性・しまりやや強）
2　褐色土　（ローム粒少含、炭化物微含、粘性・しまりやや強）
3　褐色土　（ローム粒やや多含、ロームブロック少含、黒色土粒微含）
4　褐色土　（ローム粒少含）
5　灰褐色土　（4層より明、ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりやや弱）
6　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、しまりやや弱）

0　1m

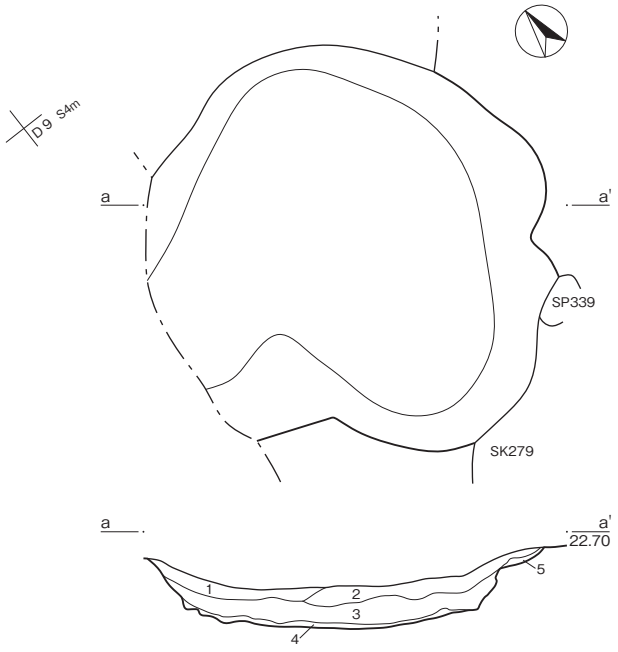
Ⅲ-50図　SK265



1　淡褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、黄白色粘土ブロック微含）
2　灰褐色土　（ローム粒・焼土粒・焼土ブロック少含、黄白色粘土ブロック微含）
3　黄褐色土　（ローム粒主体、黒色土粒少含）

0　1m

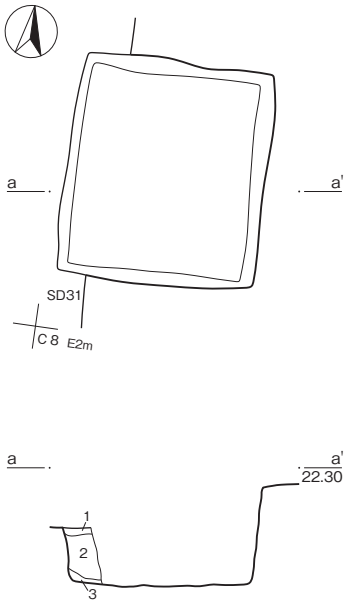
Ⅲ-51図　SK267



1　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック・黒色土ブロック多含、粘性・しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、焼土粒微含）
3　黒褐色土　（黒色土主体、ローム粒・ロームブロック微含）
4　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、黒色土粒・黒色土ブロックやや多含）
5　黄褐色土　（ローム主体、黒色土粒・黒色土ブロック少含）

0　1m

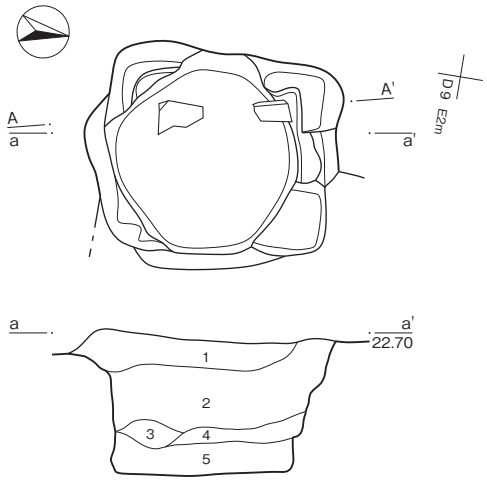
Ⅲ-52図　SK280



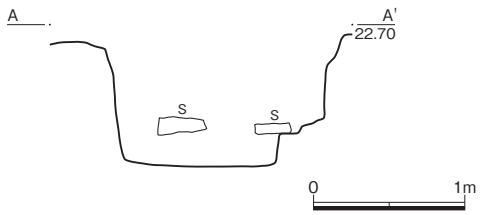
1　暗褐色土　（ローム粗粒含）
2　暗灰褐色土　（灰褐色粘土ブロック主体、ローム粒少含、粘性極強）
3　茶褐色土　（ローム粒多含、粘性強）

0　1m

Ⅲ-53図　SK297

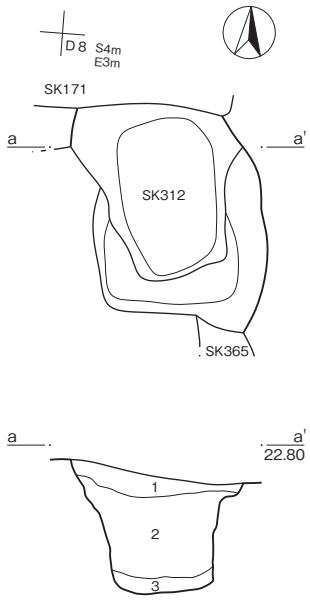


1　暗褐色土　（ローム粒多含、ロームブロック少含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ローム粗粒極多含、ロームブロック少含）
3　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりやや強）
4　暗黄褐色土　（ローム粒主体、粘性やや強、しまりやや弱）
5　暗灰褐色土　（ローム粒・炭化物含、粘性・しまり強）



0　1m

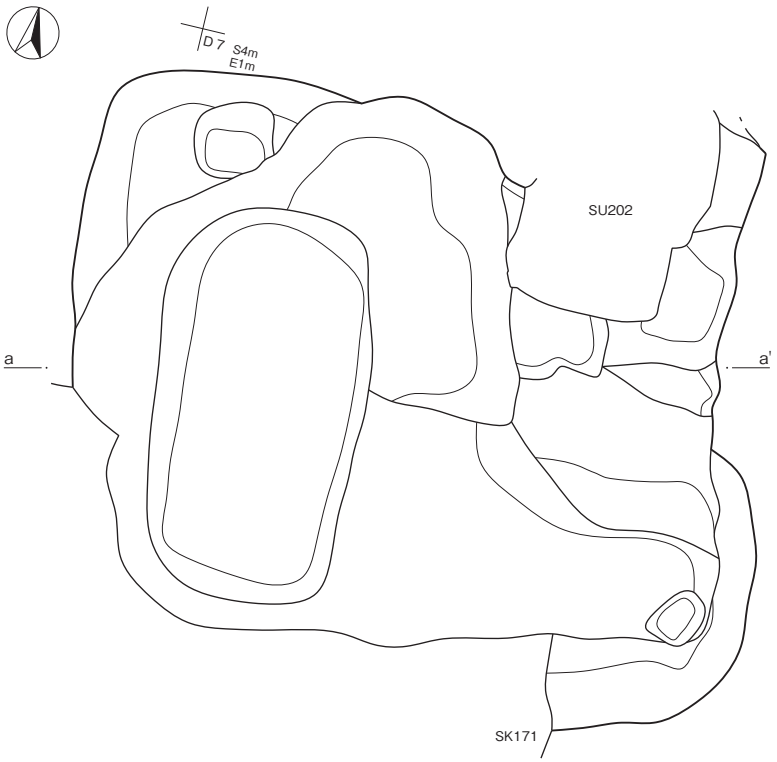
Ⅲ-54図　SK311

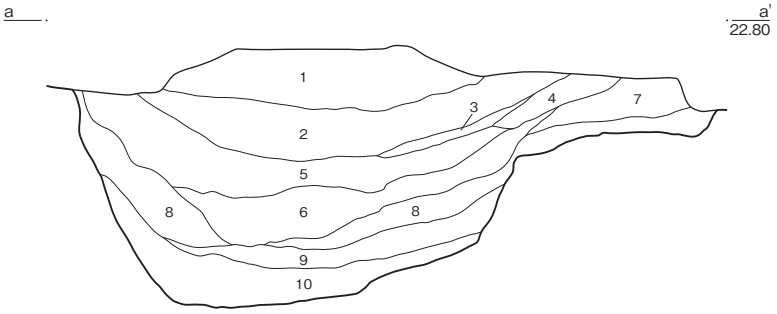


1　暗褐色土　（ローム粒少含、しまり弱）
2　黒褐色土　（ローム粒少含、ロームブロック微含、しまり弱）
3　暗褐色土　（ローム粒極多含、しまり極弱）

0　1m

Ⅲ-55図　SK312

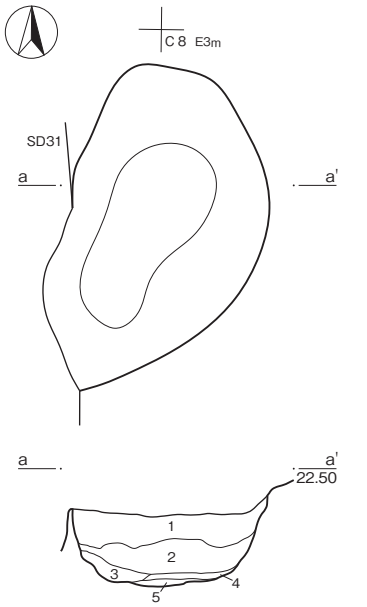




1　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒含、炭化物少含）
2　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、しまりやや弱）
3　暗褐色土　（焼土粒極多含、炭化物微含、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（ローム粒・炭化物微含、しまりやや弱）
5　褐色土　　（ローム粒極多含、ロームブロック多含、しまりやや弱）
6　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、黄白色砂質粘土粒含）
7　暗褐色土　（4層より暗、ローム粗粒・炭化物微含）
8　暗褐色土　（ローム粒含）
9　暗褐色土　（ローム粗粒極多含、炭化物微含、粘性・しまり強）
10　暗褐色土　（灰白色砂質粘土極多含、ローム粒多含、炭化物微含、粘性強）

0　1m

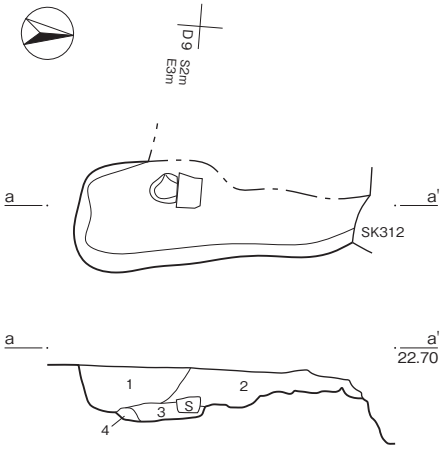
Ⅲ-56図　SK315



1　黒褐色土　（ローム粒極多含）
2　黒褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりやや強）
3　黒褐色土　（ロームブロック少含、粘性やや強、しまり極強）
4　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、しまり極弱）
5　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性・しまり強）

0　1m

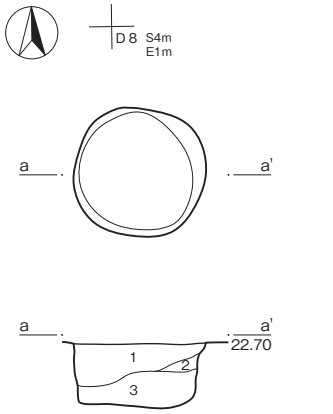
Ⅲ-57図　SK363



1　暗褐色土　（ローム粒多含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粗粒多含、ロームブロック含、しまり弱）
3　暗褐色土　（ローム粒含、粘性やや強、しまり極強）
4　暗褐色土　（ローム粒少含、しまり弱）

0　1m

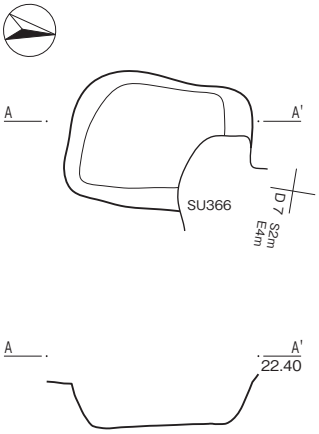
Ⅲ-58図　SK365



1 黒褐色土 （ローム粒微含、しまりやや弱）
2 黒褐色土 （しまりやや弱）
3 暗褐色土 （ローム粒極多含、しまりやや弱）

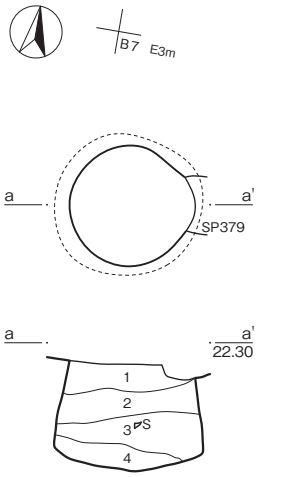
0 1m

Ⅲ-59図 SK375



0 1m

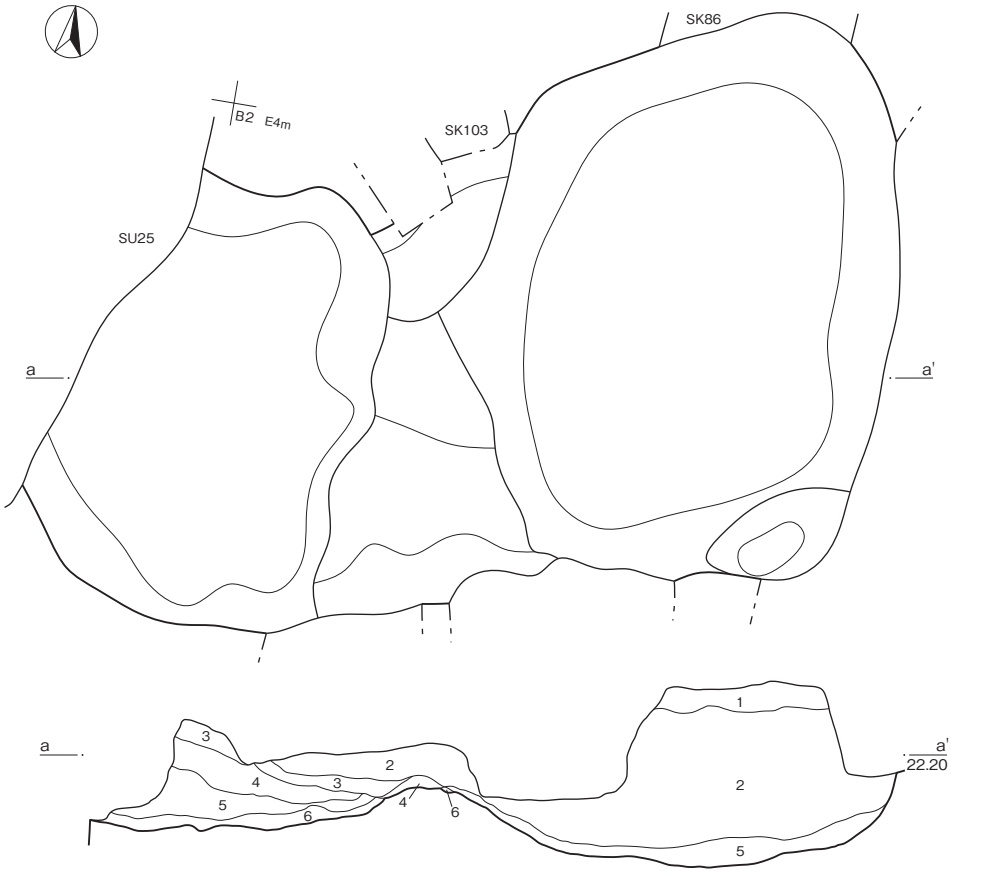
Ⅲ-60図 SK378



1 黒褐色土 （ローム粒微含）
2 黒褐色土 （ローム粒含）
3 暗褐色土 （ローム粒･砂粒少含、しまり弱）
4 暗褐色土 （黄白色砂粒極多含、しまり弱）

0 1m

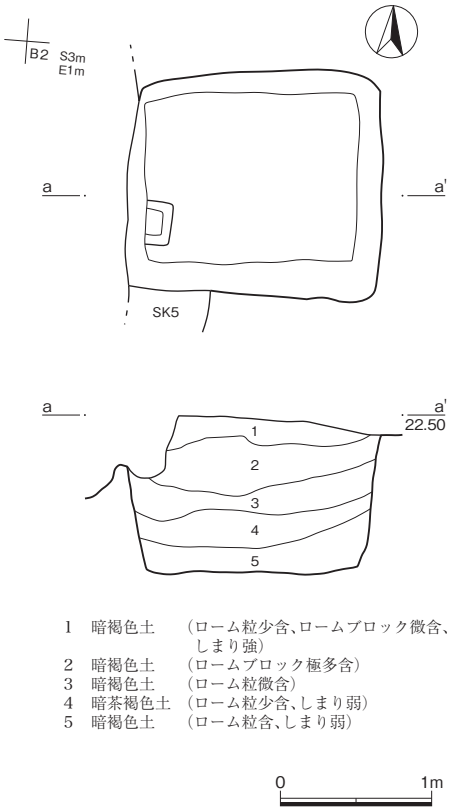
Ⅲ-61図 SK380



1 黒褐色土 （ローム粒微含、しまりやや弱）
2 暗黄褐色土 （ロームの埋土、粘性･しまりやや弱）
3 黒褐色土 （ローム粒少含、しまり弱）
4 暗黄褐色土 （ローム粒･ロームブロック主体、しまりやや弱）
5 黒褐色土 （ローム粒含、しまりやや強）
6 暗褐色土 （ローム粗粒極多含、粘性やや強、しまり強）

0 1m

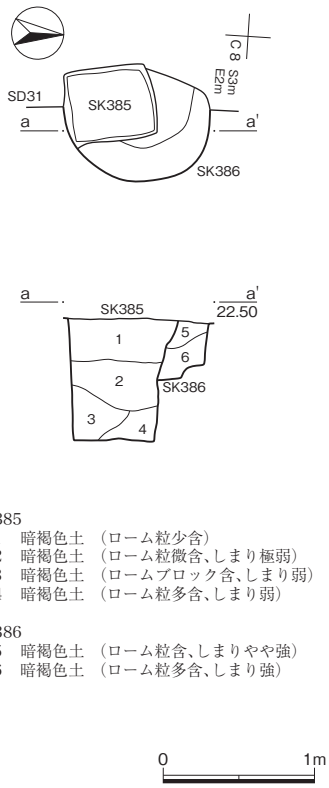
Ⅲ-62図 SK382



1　暗褐色土　（ローム粒少含、ロームブロック微含、しまり強）
2　暗褐色土　（ロームブロック極多含）
3　暗褐色土　（ローム粒微含）
4　暗茶褐色土（ローム粒少含、しまり弱）
5　暗褐色土　（ローム粒含、しまり弱）

0　1m

Ⅲ-63図　SK383

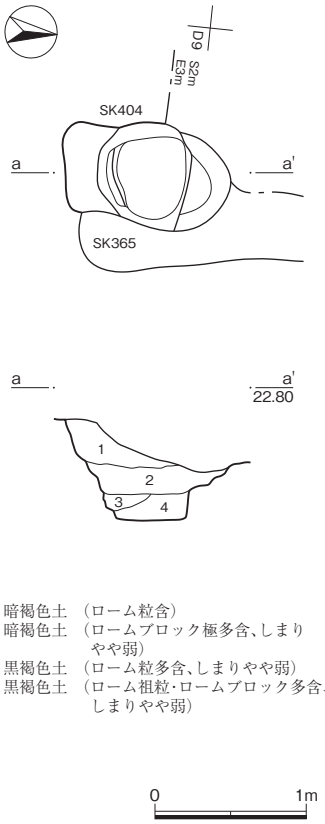


SK385
1　暗褐色土　（ローム粒少含）
2　暗褐色土　（ローム粒微含、しまり極弱）
3　暗褐色土　（ロームブロック含、しまり弱）
4　暗褐色土　（ローム粒多含、しまり弱）

SK386
5　暗褐色土　（ローム粒含、しまりやや強）
6　暗褐色土　（ローム粒多含、しまり強）

0　1m

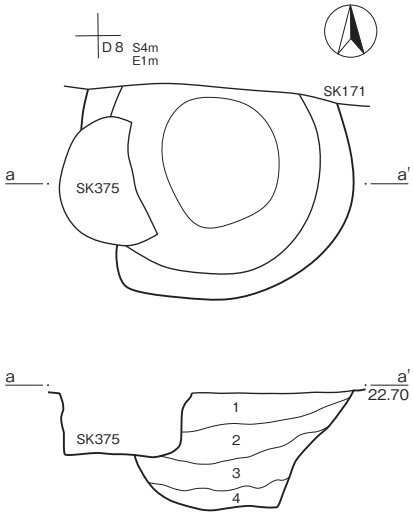
Ⅲ-64図　SK385、SK386



1　暗褐色土　（ローム粒含）
2　暗褐色土　（ロームブロック極多含、しまりやや弱）
3　黒褐色土　（ローム粒多含、しまりやや弱）
4　黒褐色土　（ローム粗粒・ロームブロック多含、しまりやや弱）

0　1m

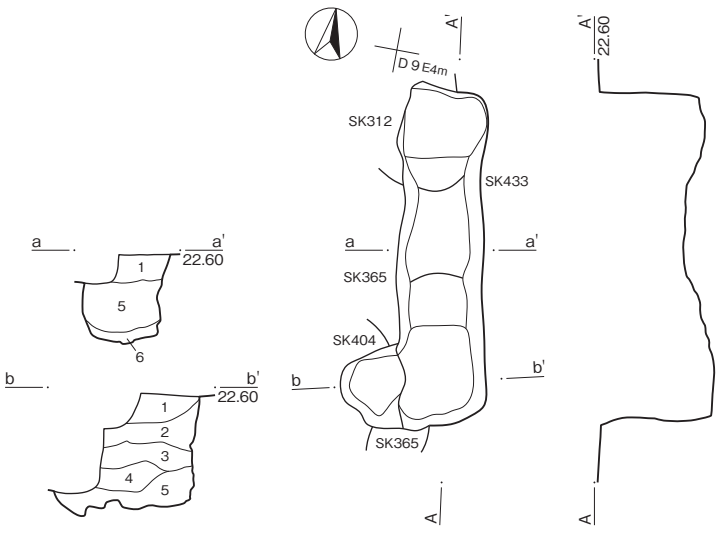
Ⅲ-65図　SK404



1　暗褐色土　（ロームブロック極多含）
2　茶褐色土　（ローム粒多含）
3　黒褐色土　（ローム粗粒含）
4　褐色土　　（ローム粒極多含、粘性やや強）

0　1m

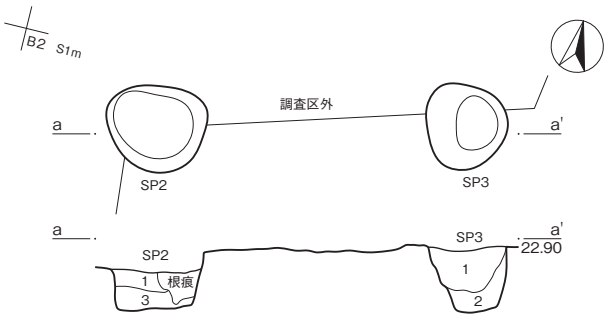
Ⅲ-66図　SK412



1　暗褐色土　（ローム粒多含、ロームブロック少含）
2　暗褐色土　（1 層より暗、ローム粒含、しまりやや弱）
3　茶褐色土　（ローム粗粒多含、しまり弱）
4　暗褐色土　（ローム粒微含、しまり弱）
5　褐色土　　（ロームブロック極多含、粘性やや強、しまり弱）
6　暗黄褐色土（ローム粒・ロームブロック主体、粘性やや強、しまり弱）

0　1m

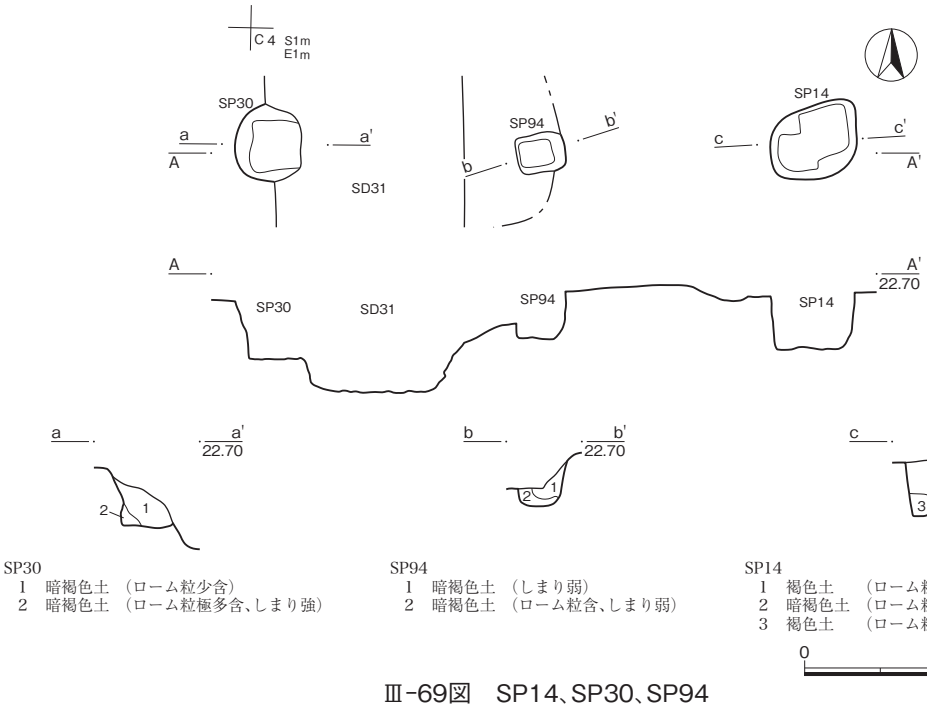
Ⅲ-67図　SK433



1　暗褐色土　（ローム粒多含、ロームブロック含、しまり弱）
2　暗褐色土　（ローム粒含、しまり弱）
3　暗褐色土　（ローム粒少含、焼土粒微含）

0　1m

Ⅲ-68図　SP2、SP3



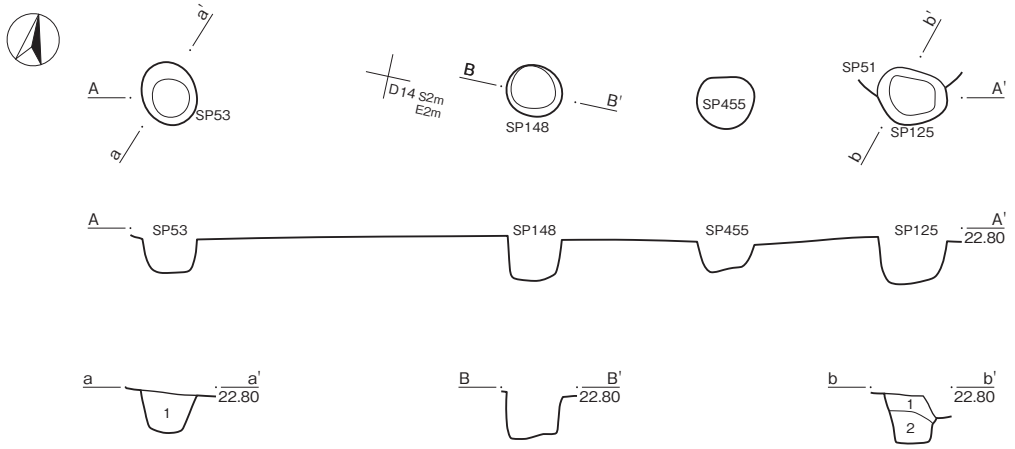
SP30
1　暗褐色土　（ローム粒少含）
2　暗褐色土　（ローム粒極多含、しまり強）

SP94
1　暗褐色土　（しまり弱）
2　暗褐色土　（ローム粒含、しまり弱）

SP14
1　褐色土　（ローム粒含、粘性やや強、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ローム粒少含、しまりやや弱）
3　褐色土　（ローム粒多含、しまりやや弱）

0　1m

Ⅲ-69図　SP14、SP30、SP94

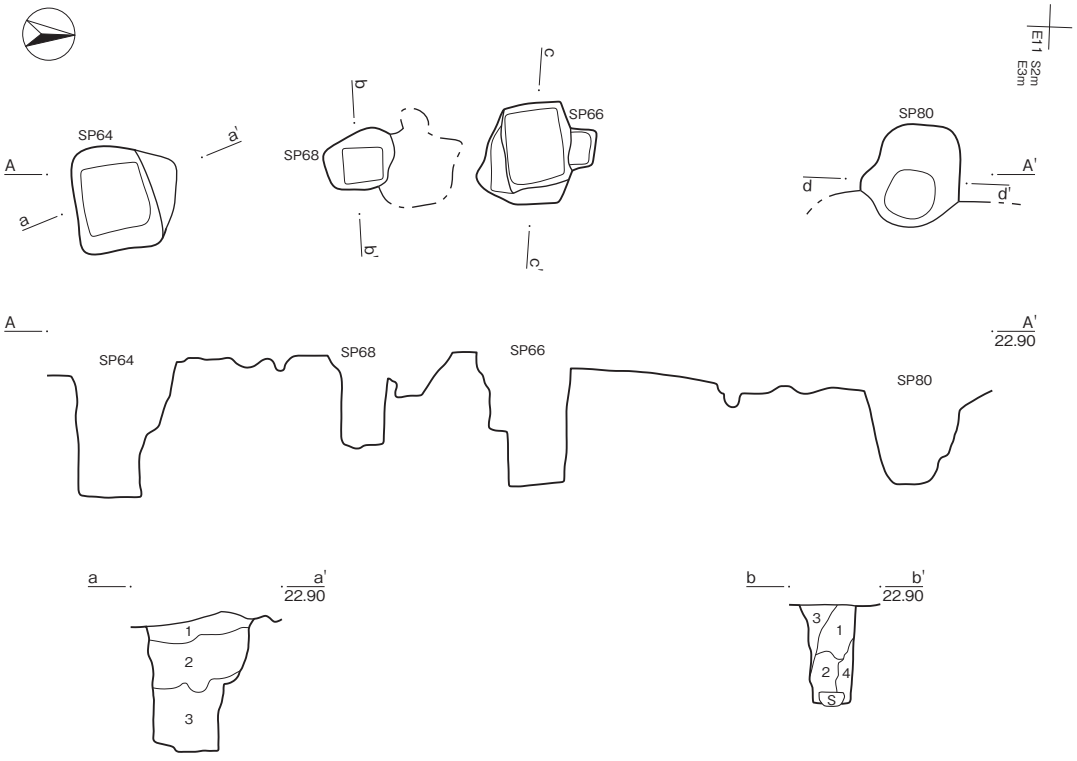


1　褐色土　（ローム粒･ロームブロック･黒色土粒少含）

1　褐色土　（ローム粒･ロームブロック少含）
2　褐色土　（ローム粒やや多含、ロームブロック少含、炭化物微含）

0　1m

Ⅲ-70図　SP53、SP125、SP148



SP64
1　灰褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、焼土粒微含）
2　灰色土　（瓦片やや多含、ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまり弱）
3　灰色土　（ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまり弱）

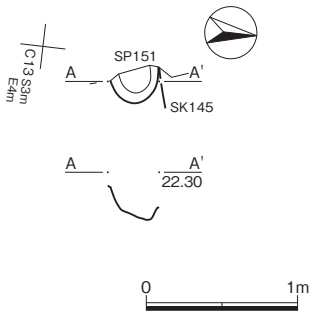
SP68
1　暗黄褐色土　（小石やや多含、ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりなし）
2　褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりなし）
3　淡褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含）
4　淡褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、粘性・しまりやや弱）

SP66
1　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含）
2　灰褐色土　（瓦片やや多含、ローム粒・ロームブロック少含、粘性・しまりやや弱）
3　黄褐色土　（ローム粒主体、粘性・しまりやや弱）
4　灰黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまり弱）

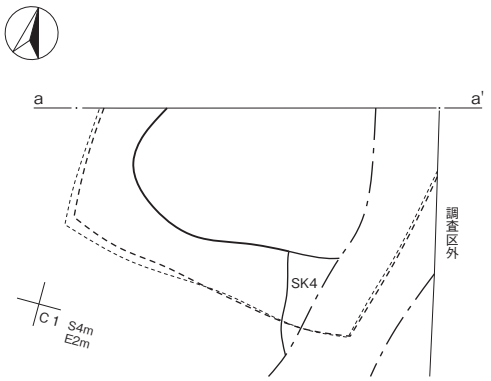
SP80
1　灰黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック・炭化物やや多含、瓦片少含）
2　灰黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック・黄白色粘土ブロック・炭化物やや多含）
3　明灰黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりやや強）
4　灰黄褐色土　（斑状に黄白色粘土ブロック多含、斑状にローム粒・ロームブロックやや多含、炭化物少含、やや砂質、粘性・しまりやや強）
5　灰色土　（ローム粒・ロームブロック・炭化物少含）
6　黄褐色土　（ローム主体、炭化物少含、粘性・しまりやや強）

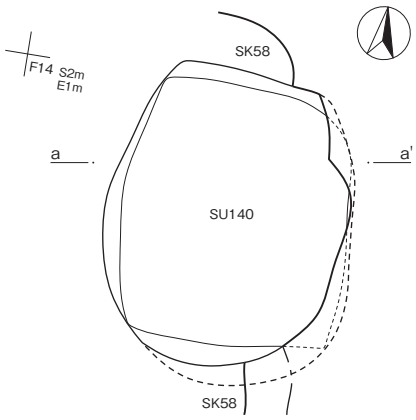
0　1m

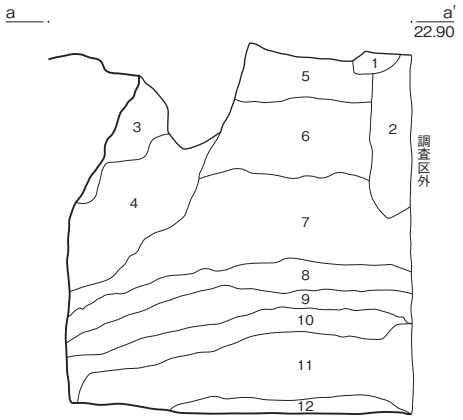
Ⅲ-71図　SP64、SP66、SP68、SP80

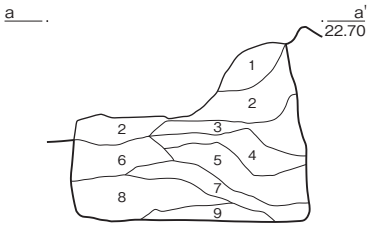


Ⅲ-72図　SP151









1 暗褐色土 （ローム粒含、しまり強）
2 茶褐色土 （ローム粒多含、ロームブロック少含、しまりやや強）
3 暗褐色土 （ロームブロック・玉砂利・砂粒含、しまり弱）
4 黒褐色土 （ロームブロック主体、しまり弱、天井の崩落土）
5 暗褐色土 （ローム粒多含、しまり弱）
6 暗褐色土 （ローム粗粒・ロームブロック極多含、しまりなし）
7 暗黄褐色土 （ローム粗粒・ロームブロック主体、しまりなし）
8 褐色土 （ローム粗粒極多含、しまりなし）
9 暗黄褐色土 （ローム粗粒・ロームブロック主体、粘性やや強、しまりなし）
10 褐色土 （ローム粗粒・ロームブロック主体、粘性やや強、しまりなし）
11 暗黄褐色土 （ローム粗粒主体、ロームブロック多含、粘性やや強、しまりなし）
12 暗黄褐色土 （ローム粗粒含、粘性強）

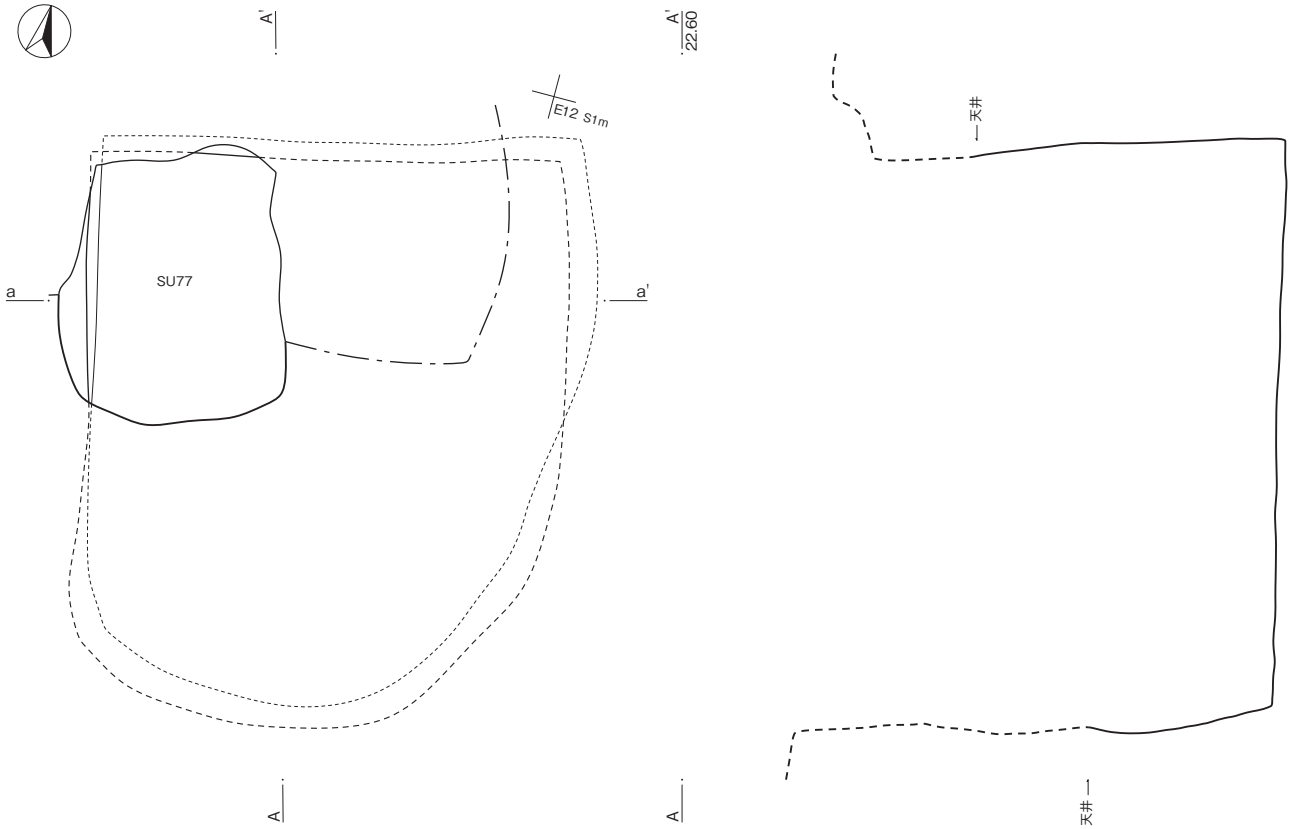
0 1m

Ⅲ-73図 SU16

1 黄褐色土 （ローム粒・ロームブロック多含）
2 褐色土 （ローム粒・ロームブロックやや多含、焼土粒・炭化物少含）
3 灰褐色土 （ローム粒・ロームブロックやや多含、炭化物ブロック含、焼土粒微含、粘性・しまり弱）
4 黄褐色土 （ローム粒・ロームブロックやや多含、黄白色粘土ブロック・焼土粒・炭化物少含、層上部西側に小石やや多含、粘性・しまりやや弱）
5 明灰色土 （灰白色粘土粒・灰白色粘土ブロック・ローム粒・ロームブロックやや多含、しまりやや弱）
6 黄褐色土 （ローム粒・ロームブロック多含、黒色土粒微含）
7 黄褐色土 （ローム粒主体、しまりやや弱）
8 褐色土 （ローム粒・ロームブロックやや多含、黒色土粒微含）
9 黄褐色土 （ロームブロック主体、黒色土粒少含、しまりやや弱）

0 1m

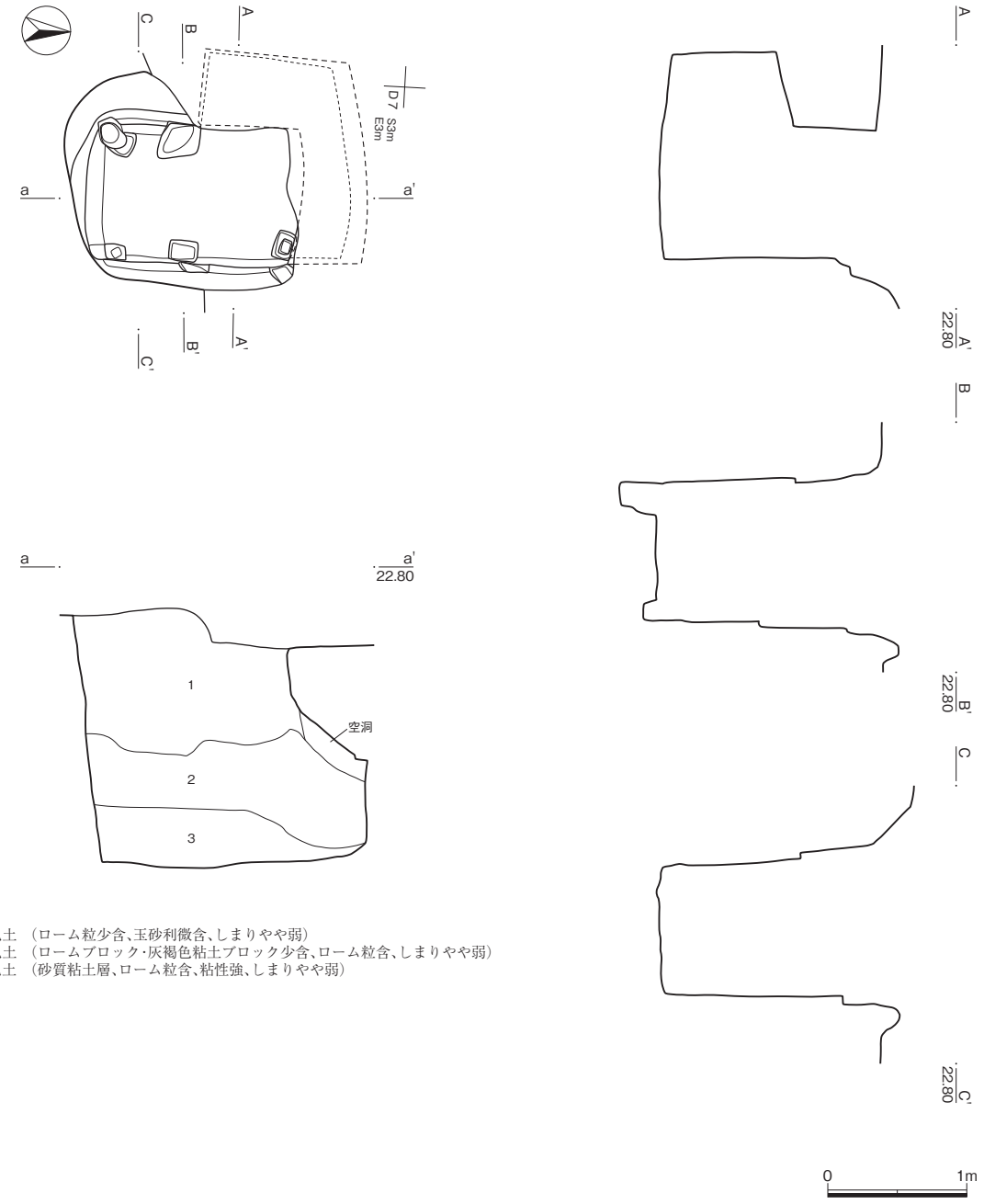
Ⅲ-74図 SU140



1　褐色土　（瓦片少含、ローム粒・ロームブロック・炭化物微含）
2　灰褐色土　（瓦片・小石少含、ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物微含）
3　褐色土　（炭化物やや多含、ローム粒・焼土粒・焼土ブロック・小石少含、下部中央に灰状のものが堆積）
4　褐色土　（ローム粒・ロームブロック・黒色土粒少含、炭化物・焼土粒微含）
5　褐色土　（3層よりやや明、ローム粒・漆喰ブロック少含、焼土粒・炭化物微含、しまりやや強）
6　黄褐色土　（天井が崩落したと思われるロームブロック多含、しまりやや弱）
7　赤褐色土　（焼土主体、粘性なし、しまりやや弱）
8　褐色土　（ローム粒・ロームブロック・焼土粒・瓦片少含、炭化物微含、しまり強）
9　褐色土　（8層より明、焼土粒少含、しまり強）
10　淡褐色土　（ローム粒・焼土粒少含、しまり強）
11　明灰色土　（ローム粒・瓦片少含、ややシルト質）
12　黄褐色土　（ローム粒主体、黒色土粒少含、ややシルト質、粘性・しまりやや強）

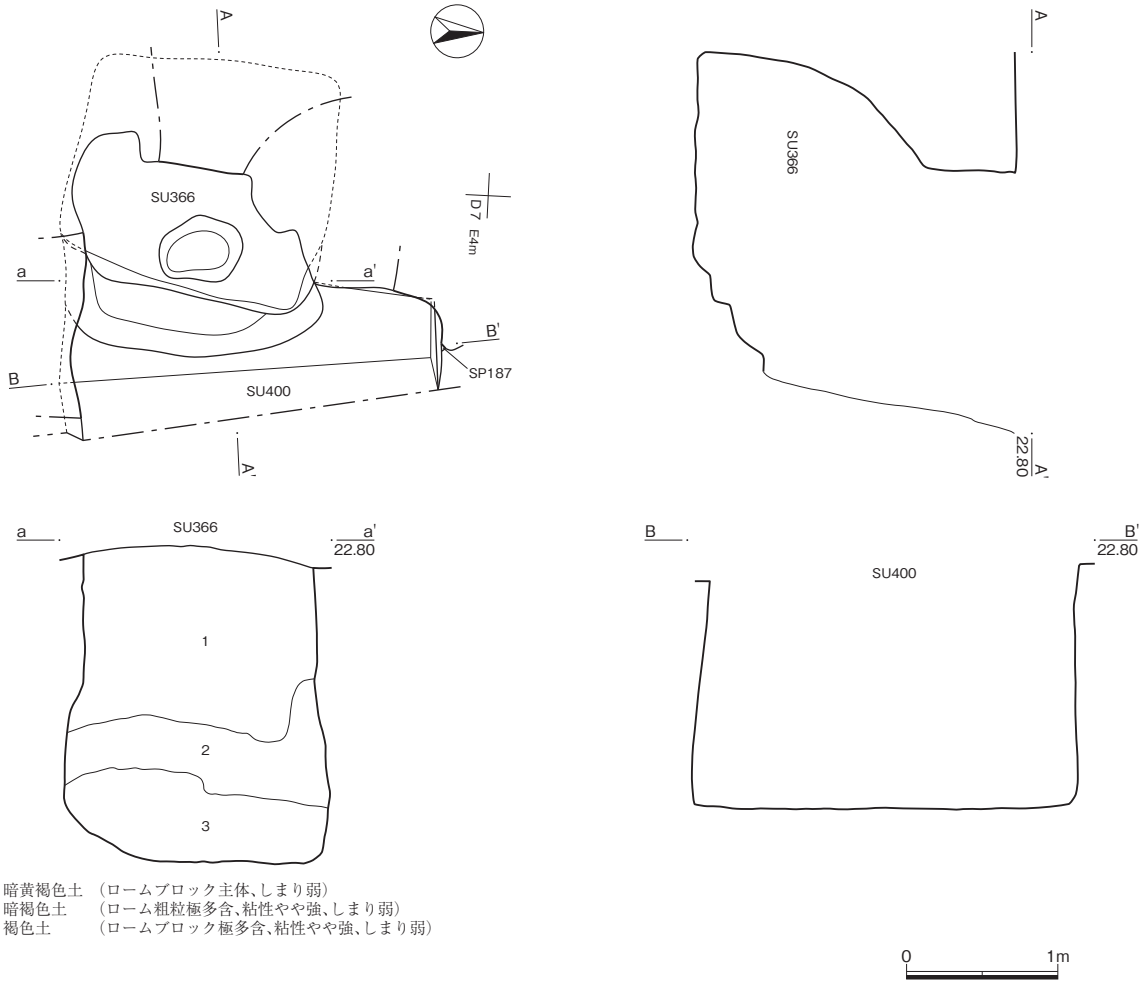
0　1m

Ⅲ-75図　SU77



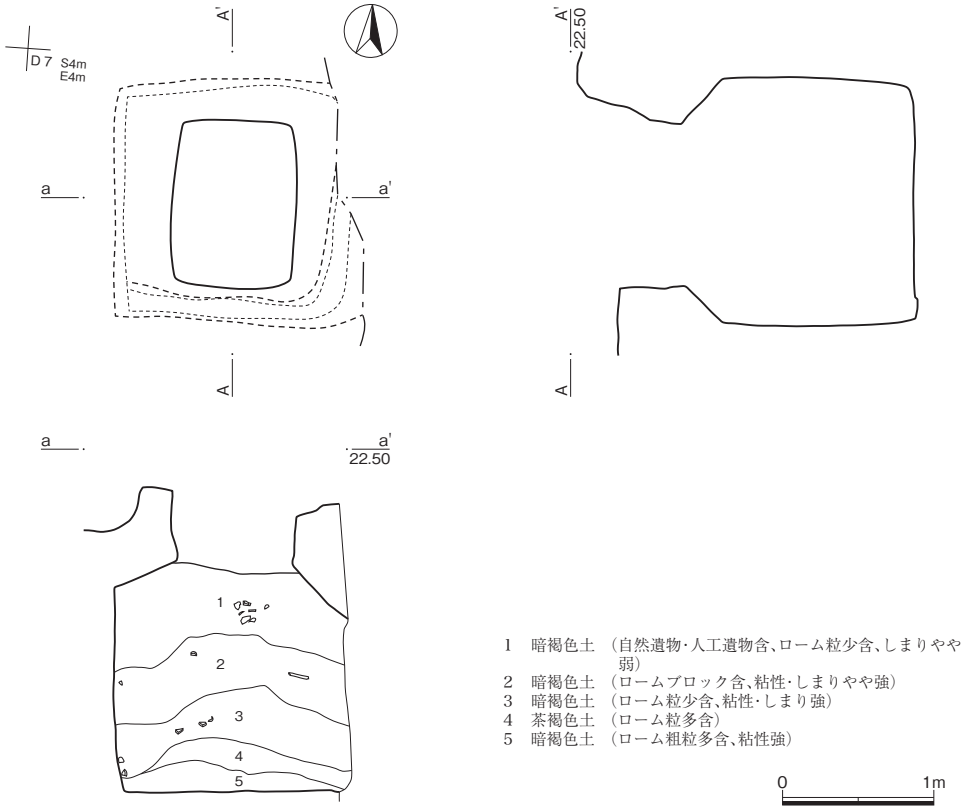
1　暗褐色土　（ローム粒少含、玉砂利微含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ロームブロック･灰褐色粘土ブロック少含、ローム粒含、しまりやや弱）
3　灰褐色土　（砂質粘土層、ローム粒含、粘性強、しまりやや弱）

Ⅲ-76図　SU202



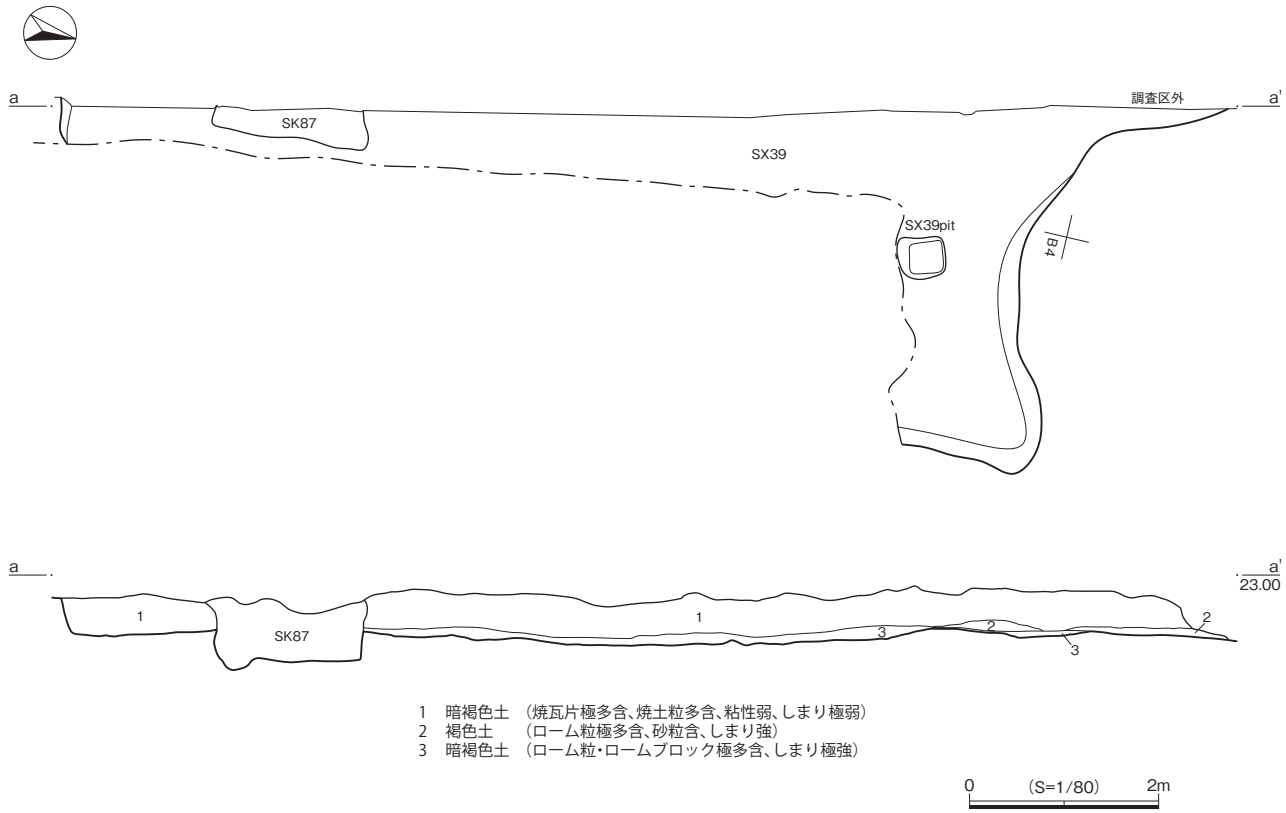
1　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、しまり弱）
2　暗褐色土　　（ローム粗粒極多含、粘性やや強、しまり弱）
3　褐色土　　（ロームブロック極多含、粘性やや強、しまり弱）

Ⅲ-77図　SU366、SU400



1　暗褐色土　（自然遺物・人工遺物含、ローム粒少含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ロームブロック含、粘性・しまりやや強）
3　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまり強）
4　茶褐色土　（ローム粒多含）
5　暗褐色土　（ローム粗粒多含、粘性強）

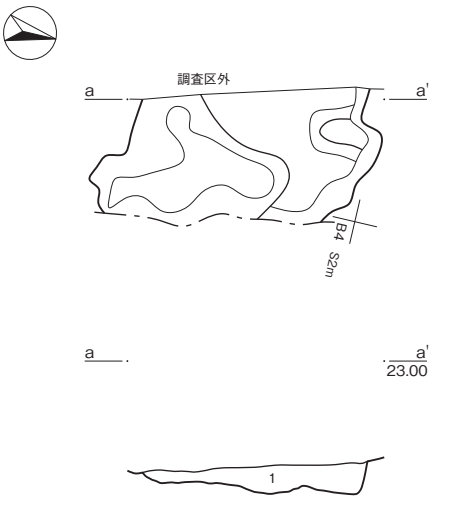
Ⅲ-78図　SU381



1　暗褐色土　（焼瓦片極多含、焼土粒多含、粘性弱、しまり極弱）
2　褐色土　　（ローム粒極多含、砂粒含、しまり強）
3　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含、しまり極強）

0　（S=1/80）　2m

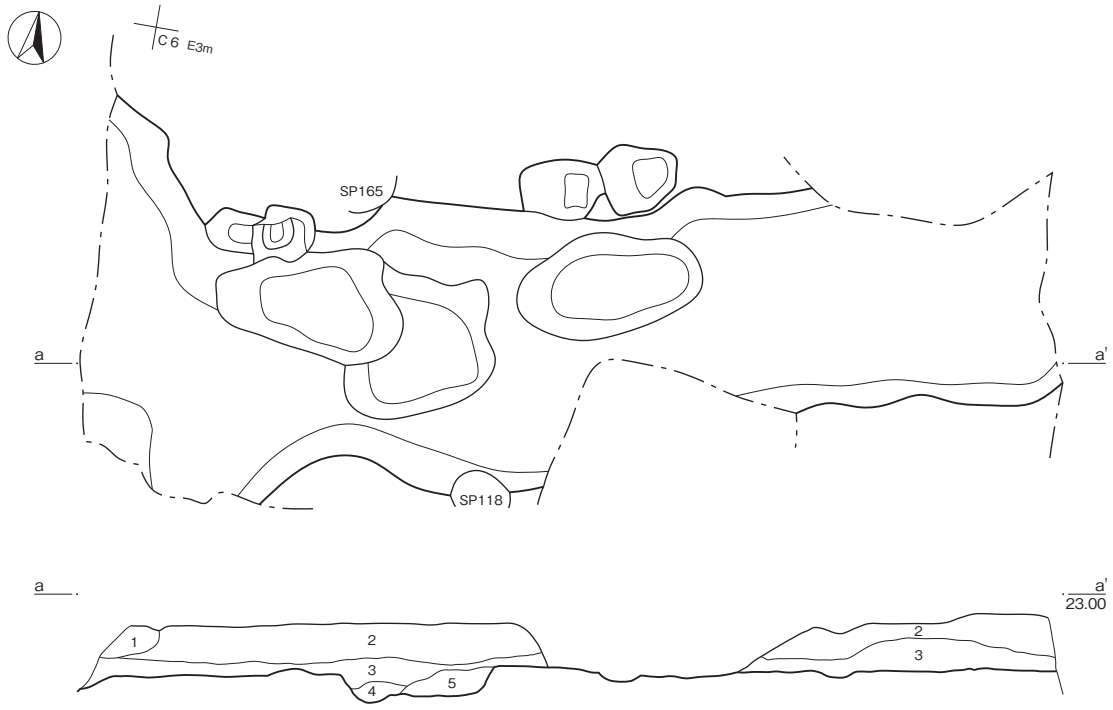
Ⅲ-79図　SX39



1　黒褐色土　（ロームブロック極多含、しまりやや強）

0　1m

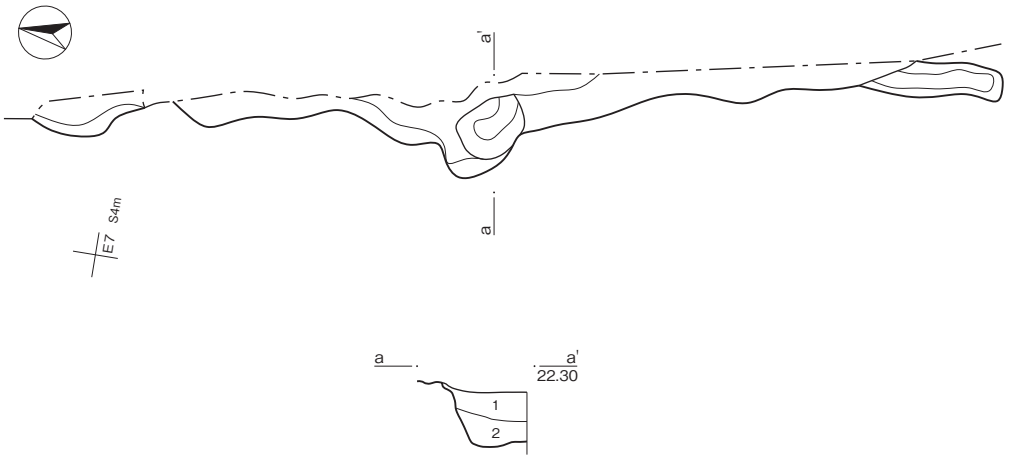
Ⅲ-80図　SX119



1　暗褐色土　（ローム粒多含）
2　黒褐色土　（ローム粒微含）
3　黒褐色土　（ローム粗粒多含）
4　黒褐色土　（ローム粒極多含、しまりやや弱）
5　褐色土　　（ローム粒･ロームブロック極多含、しまりやや弱）

0　1m

Ⅲ-81図　SX198



1　黒褐色土　（ロームブロック多含、しまりやや弱）
2　黒褐色土　（ローム粒極多含、しまり弱）

0　1m

Ⅲ-82図　SX416

第Ⅳ章　出土遺物

出土遺物の概要

本地点からはコンテナ総数、約 310 箱の遺物(磁器・陶器・土器・瓦・金属・その他)が出土している。陶磁器・土器が 209 箱、瓦は 86 箱である。

SK42 からは茶道具や文房具として収集された唐物などが火災で一括廃棄され、その後にその他のものと二次廃棄され出土している。SK158 は瓦の出土量が多く、刻印も多く確認することができた。

SK5（Ⅲ -14 図、Ⅳ -1 図）

1 ～ 3 は金属製品である。鉄製の和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。小形で長さ二寸である。

SK10（Ⅲ -15 図、Ⅳ -1 図）

1 ～ 3 は陶器である。1 は瀬戸・美濃系灰釉丸碗で TC-1-c に分類される。見込みには擦痕が観られる。2 は肥前系皿・平鉢。灰釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎで TB-2-a に分類される。内野山指標。蛇ノ目釉剥ぎ部分に橙色の発色が観られる。胎土目痕も残る。3 は瀬戸・美濃系鉄釉灰釉掛瓶で TC-10 に分類される。底部穿孔されており、植木鉢として二次利用されたのであろう。底部脇はヘラケズリされている。

4 は軒桟瓦である。軒丸部のみ残存している。瓦当文様は巴文である。

SK25（Ⅲ -17 図、Ⅳ -1 ～ 28 図）

本遺構は 100 個体以上の遺物が出土しているため数量分析が行われている。碗、皿・平鉢で全体の 53. 9％を占めている。これらを中心に分類分析したところ、東大編年Ⅴb ～Ⅵb 期(1730 年代～ 1770 年代)を中心として、一部、東大編年Ⅶ期前半(1780 年代)の遺物も含まれることが解った。茶道具や儀礼に使われたと思われる磨きかわらけ等が出土している。

1 ～ 99 は肥前系磁器である。1 ～ 11 は高台径の小さい半球形の薄手碗で JB-1-f に分類される。染付。比較的器高の高い全面に草花文などが描かれたものから、東大編年Ⅵb 期(1770 年代)以降は器高が低く繰り返し文様の描かれるものに変化する。1 ～ 6 は比較的高台の高い全面に草花文などが描かれたものである。5 は生け垣と朝顔。6 はやや腰が張り、あっさりと文様が描かれている。7 ～ 10 は器高が低く繰り返し文様の描かれるものである。7、8 は外面菊文様。9 は内外面菊文様。10 は花唐草文。11 は小振りである。12 は半球形碗に近い形態であるが、高台高が高く、口縁部がわずかに外反するもので JB-1 に分類される。内外面に染付で丸文が施される。13 は高台断面がシャープな「U」字状。JB-1-e に分類される。見込み環状松竹梅文。内面口縁四方襷文。高台内中央に銘有り。14 ～ 16 は絵付けや作りが下手ないわゆるくらわんか碗で JB-1-g に分類される。全体的に厚手でぼってりしている。高台内中央に銘有り。14 は青磁染付。外面青磁。見込み中央菊文。15、16 は外面二重網目文。内面網目文。16 は腰が張り器高が低い。17 ～ 27 は高台径の小さい腰の張る碗で JB-1-j に分類される。いわゆる小丸碗 である。東大編年Ⅵa 期(1750 年代～ 1760 年代)頃は見込み中央は五弁花文が多いが、次第に他の文様が多くなり、器高も低くなってゆく。26、27 以外は染付。17 ～ 21 は見込みは二重圏線と手描き五弁花文。22 ～ 27 は見込みに二重圏線と環状松竹梅文。21 以外は見込み中央に五弁花文や環状松竹梅文が描かれ、口縁部内面四方襷文で和文様のパターンを踏襲している。23、24 は濃みを使わず空間を線書きで充填させている。26、27 は色絵染付。26 は上絵(金、赤、黄、黒)。細かい描き込みがされている。27 は上絵(金、赤、黒)。口唇部金彩。28 ～ 36 は染付筒形碗で JB-1-l に分類される。時代が下がるにつれ小振りになって体部が内傾化する傾向がある。見込み中央には五弁花文が描かれているものが多い。28 は見込み中央に文様有り。大振りで、全体的にぼってりしている。焼成はあまり良好ではない。高台内は深く彫り込まれている。29、34 ～ 36 は見込み二重圏線、中央に手描き五弁花文。30 は見込みは二重圏線、中央に「∧」の下に「渦福」。31 ～ 33 は見込みは二重圏線、中央にコンニャク印判五弁花文。34、35 は文様が同じで、セットであったものであろうか。小丸碗と比べて内面口縁部は四方襷文ではない図柄が多く混じる。30 ～ 32 は底部付近に文様が観られる。37、38 は高台が「ハ」の字状に開き、大振りで腰の張る碗。JB-1-q に分類される。口縁部内面四方襷文。37 は外面花唐草文。見込みは二重圏線環状松竹梅文。高台内銘「富貴長春」。39、40 は外面に梅樹文が描かれた粗製の碗で JB-1-v に分類される。全体的に厚手でぼってりしている。40 は高台内銘有り。41 は JB-1 に分類される。線で文様が描かれている。42 は高台高の高い碗で JB-1-i に分類される。いわゆる小広東碗である。見込み中央手描き五弁花文。体部は丸みを帯

びている。43 ～ 50 は坏である。43、44 は、体部が半球形で JB-6-f、45 ～ 48 は体部が丸形で JB-6-a に分類される。43 は内外面上絵(朱、黒)。44、45 は染付。46､47 は白磁。48 は内外面上絵染付。上絵(朱､金､黒)。内面口縁部は四方襷文。見込みは二重圏線環状松竹梅文。49 は筒形で JB-6 に分類される。体部はやや内傾している。内外面染付。内面口縁部は四方襷文。見込み中央に文様あり。50 は型作りで外面にしのぎが観られる坏。いわゆる紅皿。JB-6-e に分類される。51 ～ 55 は絵付けや作りが雑で下手な皿。JB-2-g に分類される。見込みには扇面文様などが施されるものが多い。見込み二重圏線、中央にコンニャク印判五弁花文である。高台内銘は「渦福」。染付。51 は、比較的丁寧に描かれているがなぜか扇が横を向いている､不思議なモチーフである。52 は崩れた扇面文。高台内の「渦福」がまだ判別できる。53 ～ 55 は扇面文が花のようなものに置き換わっている。56 はやや器高が深く、腰が張り口縁部が輪花に成形されている皿で、JB-2-f に分類される。扇面文がきれいに描かれている。高台内銘は「渦福」。見込み二重圏線、中央にコンニャク印判五弁花文である。高台断面はきれいな「U」字状。57 ～ 63、68 は蛇ノ目凹形高台で高台高が低い皿。JB-2-j に分類される。57 ～ 60 は見込みは二重圏線で区画されて文様が描かれている。60 は二重圏線内側の白い部分の幅が広くなっており 57 の簡略化されたものであろう。61、62 は青磁染付で 61 は内側面に青磁が、62 は外面に青磁が掛けられている。外面は 57 ～ 61 は如意頭唐草文。高台内中央に銘がある。57、59、62 は二重角枠内「渦福」。58 は二重角枠内「筒江」。武雄市の筒江窯で生産された製品と考えられる。63 は青磁である。68 は小皿。腰が張り口縁部が輪花に成形されている皿で見込みは二重圏線で区画されている。外面は如意頭唐草文。64 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ、底部無釉の皿で JB-2-k に分類される。釉剥ぎされた周囲に染付で文様が描かれている。高台断面は逆台形である。同分類の中では古手のタイプである。65 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ、高台径の小さい皿で JB-2-l に分類される。見込みには斜格子文が描かれている。66、67 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ、高台径の大きい皿で JB-2-m に分類される。内面には梅花繋ぎ文が描かれている。見込み中央はコンニャク印判五弁花文である。69 ～ 71 は高台断面「U」字状。JB-2-e に分類される。69 の口唇部は玉縁状になっている。底部二重圏線。見込み中央に銘「壽」。高台内中央部にハリ支え痕有り。70、71 は口縁部が輪花に成形されている。染付。70 は見込みは二重圏線で区画され中央は手描き五弁花文である。周辺部は 6 区画に区切られて四方襷文と草花文が交互に描かれている。71 は見込み全面 1 枚絵で､口唇部口銹である。高台内銘「成化年製」。72、74 は底部が欠損している染付鉢で JB-5 に分類される。72 は内面口縁部四方襷文。見込みは二重圏線で区画され中央は環状松竹梅文。外面全面松竹梅文。74 の口縁は輪花に成形されている。内外面に文様が施されている。漆継ぎの痕が残る。73 は高台断面が「U」字状の鉢で JB-5-b に分類される。染付。見込み一枚絵。75 は蛇ノ目凹形高台状の鉢。JB-5-d に分類される。染付。口縁は輪花に成形されている。わずかに墨書痕跡あり。区画され、蛸唐草文と草花文が交互に描かれている。漆継ぎの痕が残る。76、77 は底部が輪高台の猪口で JB-7-b に分類される。76 は染付。77 は白磁。小振り。坏として使われた可能性もある。78、79 は脚部の畳付け部分が浅く削り込まれ、その外周が面取りされている仏飯器で JB-8-c に分類される。染付。79 は口径が狭く深い。焼成不良。80、81 は頸部が鶴首状の瓶で JB-11-b に分類される。82 は胴部のみではあるが、頸部が狭く油壺と思われる。JB-12 に分類される。釉が均一に掛けられておらず、斑になっている。油壺は胴部が算盤玉の形状から次第に丸みを帯びてくる。染付で、丸みを帯びていることから、東大編年Ⅴa 期(1710 年代～ 1720 年代)以降に位置づけられるものであろう。83 ～ 88 は蓋物である。染付。83 ～ 86 は体部が丸形で JB-13-a に分類される。83 は大振り。84、85 は大小の揃いか。86 は小振り。87 は体部が筒形で JB-13-b に分類される。底部高台内中央銘、二重角枠内「渦福」。高台はシャープな「U」字状。88 は体部に段のある筒形で JB-13-b に分類される。漆継ぎの跡が観られる。花唐草文。89 は水滴。JB-19 に分類される。陽刻。菊。90 ～ 99 は蓋である。90、91 は丸碗の蓋。白磁。摘みの先端は真っ直ぐに切られている。92、95 は「ハ」の字状高台の碗の蓋。摘みは逆「ハ」の字状に開いている。見込みは二重圏線環状松竹梅文。端部内面四方襷文。92 は摘み中央に銘「富貴長春」。93 は朝顔形碗の蓋。摘み中央に銘、二重角枠内「渦福」。見込みは二重圏線手描き五弁花文。口唇部四方襷文。94 は碗の蓋。96 ～ 99 は蓋物の蓋。98 は橋状摘み。

100 ～ 235、316、317 は陶器である。100 は肥前系内面主文様の碗で TB-1-c に分類される。京焼風陶器。高台内の抉りが深く、高台畳付けが面取りされている。鉄絵。101 ～ 128、130、134 は瀬戸・美濃系碗である。101 ～ 111 は灰釉が薄く施釉された丸碗で TC-1-c に分類される。底部は無釉。大振りのものから次第に小振りになる。いずれも見込みにはわずかに擦痕が観ら

れる。102、106、110 の胎土は淡黄色。他は灰白色。101 は大振りの碗。体部はやや内傾して立ち上がる。器高は高い。106 は高台にスス付着。107 は高台内墨書。111 は底部近くにわずかに鉄釉が観られる。112 ～ 119 は腰が張り二段の段を有する碗で TC-1-f に分類される。灰釉鉄釉流しで、渦巻き高台。112 は口縁部に鉄釉の丸文様が対になっている。117 は渦巻き高台ではない。120、121 は外面に鉄で柳文が描かれている碗で、TC-1-g に分類される。121 は高台内墨書「令」または「分」。122、123 は漆黒釉に長石釉を散らし体部数箇所に凹みを有する碗で TC-1-p に分類される。いわゆる拳骨茶碗。幅広高台で、畳付けに一箇所押印が入る。高台内施釉。124 ～ 126 は内外面に刷毛目が施された碗で TC-1-s に分類される。高台脇が平らに削り込まれている。次第にこの削り込みは無くなっていく。内外面とも打ち刷毛目。古い段階に多く認められる。高台無釉。127 は内面及び外面上半に灰釉、下半に錆釉が施釉された碗で TC-1-u に分類される。いわゆる腰錆碗である。高台内施釉。小振り。大振りのものから小振りになり、口縁は真っ直ぐ立ち上がるようになる。128 は筒形。口縁部に漆黒釉、体部に銹釉が掛分されている碗で TC-1-ad に分類される。高台内施釉。129 は灰釉碗。TC-1 に分類される。呉器手碗に近い形をしている。胎土に鉄分が多いためか表面に胡麻状の茶色い点が多く観られる。また、底部近くの釉際の胎土に明褐色の発色が観られる。他の灰釉丸碗(TC-1-c)よりも薄手で、高台脇に削り込みが入る。また、器形も口縁部がやや開いている。130 は色絵の小丸碗で TC-1 に分類される。上絵(緑、赤)。134 は京焼風半球色絵碗で TC-1-m に分類される。上絵はほぼ剥がれてしまっており、わずかに色味が残る。上絵(赤､緑)。131 ～ 133､135 ～ 143 は京都･信楽系碗である。131 はやや大振り。高台畳付け面取り。TD-1 に分類される。132、133 は高台径が小さい半球形碗で TD-1-b に分類される。底部無釉。色絵。132 は上絵(金、赤、緑)。見込みに目跡。目跡を隠すために上絵が施されている。高台面取り。133 は上絵(金、赤、緑)。135 は小福茶碗で TD-1-o に分類される。口縁部下でやや窄まり、体部は丸い。灰釉内外面掛分。内面白。高台内施釉。136 は TD-1 に分類される。体部はやや腰が張り口縁部に向かって逆「ハ」の字状に開く。高台内に「瀬戸助」の刻印有り。高台内施釉、畳付けのみ無釉。137、138 は平碗で TD-1-h に分類される。底部無釉。口縁部はやや内湾している。無文 。高台畳付け面取り。139、140 は外面カンナ削り、内外面釉掛分の腰が張る碗で TD-1 に分類される。見込みに目跡 3 箇所あり。幅広高台で、高台内施釉。高台畳付け面取り。釉の掛分方などが瀬戸・美濃系のいわゆる腰錆碗(TC-1-u)に近い。140 は口縁部欠損。141 ～ 143 は外面に鉄と呉須で若松文が描かれている杉形の碗で TD-1-d に分類される。小杉碗。高台畳付け面取り。絵付けは丁寧である。143 は文様部分は欠損しているものと思われる。144 は瀬戸・美濃系小坏で TC-6 に分類される。灰釉。丸碗形。145 は京都･信楽系小坏で TD-6 に分類される。色絵。上絵(赤、緑)。笹文。半球形。高台畳付け面取り。見込みに目跡 1 箇所あり。見込みの傷や目跡に傷隠しの色絵が描かれている。高台畳付け面取り。146 ～ 160 は瀬戸･美濃系の皿・平鉢である。146、147 は鉄や呉須で摺絵が施された灰釉皿で TC-2-e に分類される。いわゆる御深井である。146 は見込みに目跡が 2 箇所あり。148 は内側面に鉄で扁平な渦巻き文が施文された皿で TC-2-g に分類される。いわゆる馬目皿。幅広高台。149 ～ 154 は柿釉が施釉された油皿で TC-2-o に分類される。見込みや底部に直重ねの痕が観られる。149、150 は見込みから体部に掛けての立ち上がりがはっきりしている。151 ～ 154 は緩やかに立ち上がる。154 は小振り。155 は灰釉の皿で TC-2 に分類される。碁笥底。おそらく油皿であろう。見込みに無釉部分が観られる。156、158 は灰釉が施釉された輪禿皿・平鉢で TC-2-u に分類される。156 の体部は直線的に開いている。158 の高台内墨書「安永六年(1777)　河村所持」。157 は口縁部内側付近に波状の櫛描文を有し、灰釉に緑釉が流し掛けられた皿・平鉢で、TC-2-w に分類される。体部は高台から直線的に開き、口縁で外反する。見込みに菊花の押印がされているものもある。159 は鉄絵の掛分の皿・平鉢。TC-2 に分類される。白化粧による掛分。幅広高台。160 は 灰釉の皿・平鉢。TC-2 に分類される。高台無釉。高台内施釉。体部は直線的に開き口縁部は緩やかに立ち上がっている。161、162 は口縁部に凹みを持つ灰釉鉢で TC-5-f に分類される。いわゆる水盤。碁笥底。底部無釉。161 は小振り。162 は大振り。碁笥底内墨書。見込み目跡 4 箇所。163 は鉢。TC-5 に分類される。灰釉鉢。底部無釉。口唇部比厚。164 は鉢。TC-5 に分類される。錆釉などが、まだらに施釉されている。体部上半に横方向の沈線が入る。碗に同様の仕様のものがある。胎土は緻密な茶褐色。165 は瀬戸・美濃系の香炉・火入れで TC-9 に分類される。灰釉で内面無釉。わずかに、鉄絵文様が入る。高台に 3 箇所指で押してスリットを入れている。口唇部に敲打痕。166 は京都・信楽系香炉・火入れ。型作りで TD-9-a に分類される。上絵(青、白)エナメル質で厚みがかっている。高台付近は橙色に発

色。167 ～ 176 は 瀬戸・美濃系灰釉瓶。167 ～ 170 はなで肩で底部釉拭き取りの二合半徳利。TC-10-a に分類される。167 は間隔の広い釘書きで「＃」内に「サ」。168 はほぼ線状になっている釘書き「∧」「十」。169 は線状になっている釘書き「お」。171 は底部つけ掛けの二合半徳利。TC-10-c に分類される。釘書き「∧」「川」「甲」。172 ～ 174 は五合徳利。TC-10-d に分類される。172 は肩部より上が打ち欠かれている。二次加工。173 は線状になっている釘書き「一」「△」。174 は線状になっている釘書きあり。「万」。175、176 は一升徳利。TC-10-e に分類される。175 はなで肩。線状になっている釘書き「○」の中に「い」。176 は、ほぼ線状になっている釘書き「久○」。本遺構の中で釘書きが確認できた瓶は全部で 30 本あった。「久○」は五合が 3 本。一升が 5 本。「＃」内に「サ」は二合半が 5 本。「∧」「十」は二合半が 2 本、一升が 3 本であった。177 は瀬戸・美濃系柿釉で備前写しのぺこかん徳利。TC-10-g に分類される。胴部に 3 箇所凹みを有する。178 は備前系陶器の瓶で糸目の付いた胴部に 3 箇所凹みを有する。TE-10 に分類される。凹みには福の神の布袋が貼り付けられている。型がシャープで細かく、表情まで読み取れる。いわゆる「布袋徳利」。「布袋徳利」には布袋、大黒、恵比寿、寿老人などの福の神が貼り付けられている。貼り付けられている福の神は大きく意匠の細かいものから次第に小さく意匠の粗い物になるとされている。底部に窯印の刻印あり。179、180 は志戸呂系陶器瓶で TF-10 に分類される。砲弾形。179 は底部墨書「久○」、180 は体部に釘書きがある。墨書のあるものは多く見受けられるが、釘書きのものは少ない。釘書き「久○」。底部墨書「久○」。181 は京都・信楽系蓋物で TD-13-b に分類される。色絵（金、赤、白、緑）。竹、梅 の文様。182 ～ 191 は瀬戸・美濃系壺・甕である。182 ～ 185 は口縁部が平坦で寸胴。柿釉が施され、底部露胎。TC-15-a に分類される。182 は器高 26.6cm の大形の半胴甕。底部釉拭き取り。見込みに目跡あり。口唇部は内側に張り出す。古手の半胴甕。183 は器高 20.5cm の中形の半胴甕。胴部上端に 5 箇所、口唇部に 4 箇所目跡が付く。184 は器高 16.2cm の中形の半胴甕。口唇部は内外両側に張り出す。口唇部に目跡が 2 箇所残存する。底部穿孔。植木鉢として使われたものであろう。185 は器高 11.7cm の小形の半胴甕。口唇部は内外両側に張り出す。底部穿孔。植木鉢として使われたものであろう。186 は口縁部は外反。柿釉。甕。TC-15-b に分類される。底部露胎。甕としては寸胴。見込みに目跡が 3 箇所ある。187 は外面に流水状の文様や刺突文が施される甕で TC-15-c に分類される。鉄釉、緑釉流し掛け。見込みに 1 箇所、畳付けに 2 箇所目跡が認められる。188 ～ 190 は肩の張る二耳壺。高台がある。TC-15-f に分類される。灰釉。高台無釉。189 は被熱して表面の釉が溶けている。191 は TC-15 に分類される。鉄で花文が描かれている。水差しなどとして使われたものであろう。192 は京都・信楽系合子で TD-18 に分類される。灰釉。底部際は面取りが施されている。193 は瀬戸・美濃系合子で TC-18 に分類される。灰釉。194 は瀬戸・美濃系水滴で TC-19 に分類される。空気孔は 1 箇所残存。195 ～ 198 は瀬戸・美濃系片口鉢で TC-23-b に分類される。195 は注口部欠損。内面施釉。196 は内面無釉。見込みには重ね焼きの痕が残る。197 は注口部欠損。内面施釉。二次加工で 5 × 5cm の四角い窓が開けられている。下半は細かく加工した痕跡が観られる。見込みに目跡あり。内側に油皿を入れるなどして、明かり採りに使うなどしたのであろうか。198 は底部欠損。199 は鬢水入れで TC-25 に分類される。灰釉。鉄で両面に摺絵が描かれている。200 は水注で体部がらっきょう形をしており、橋状の把手を持つ。褐釉。TC-27-a に分類される。内面には茶褐色のものが全面に付着しており、鉄漿壺として使われたものであろう。201 は瀉瓶で TC-28 に分類される。底部から胴部中央にかけて直線的に立ち上がる。202 は瀬戸・美濃系灰釉餌入れで TC-30 に分類される。把手は欠損。底部は縁が削られて平底が作られている。203、204 は京都・信楽系の柄杓で TD-32 に分類される。高台は面取りが施されている。内面中央には沈線が付けられている。約一合。203 は 鉄釉。柄の接合部分は欠損。204 は 灰釉。205 は紐状把手が付く柿釉の鍋で TZ-33-a に分類される。底部にススが付着している。206 は鉄釉が施された土瓶で TZ-34-e に分類される。S 字状注口が付く。茶漉し穴は 6 箇所穿たれている。底部欠損。胴部下半にス ス付着。207 は鉄釉が施された土瓶で TZ-34-e に分類される。底部のみ。ス ス付着。脚は 2 脚残存。208 は糸目を有する土瓶で TZ-34-d に分類される。内面は茶褐色のものが全面に付着しており、鉄漿壺として使われたものであろう。209 は草文などが彫られ鉄釉が掛けられている土瓶で TZ-34-l に分類される。210 は灰釉鉄絵土瓶で TZ-34 に分類される。S 字状注口が付く。茶漉し穴は 4 箇所穿たれている。底部にススが付着している。211 はノミ状のもので草文などが彫られ鉄釉が掛けられている。その上から灰釉が流し掛けられている土瓶で TZ-34-i に分類される。底部に刻印「雲光山」。ススが付着している。腰から底部にかけて強く曲がる。212 ～ 216 は瀬戸・美濃系油受け皿。錆釉、無脚で TC-40-c

に分類される。重ね焼きの痕が残る。217 は瀬戸・美濃系油徳利で TC-41 に分類される。把手部欠損。こぼれた油を戻すための小孔あり。錆釉。218 は行平鍋で TZ-42-a に分類される。灰釉。底部スス付着。脚 1 箇所残存。把手部欠損。219 ～ 235 は蓋である。219 は瀬戸・美濃系水注の蓋である。灰釉。220 は京都・信楽系。格子状のシノギに梅花文が描かれている蓋物の蓋である。灰釉、白土、鉄、呉須。橋状の摘み。221 は京都・信楽系袋物の蓋である。灰釉、鉄。222 ～ 224 は瀬戸・美濃系壺・甕の蓋である。橋状摘み。225 は壺・甕の蓋である。全面鉄泥。226 は瀬戸・美濃系汁次の蓋である。鉄釉。釦状摘み。227 ～ 231 は鉄釉土瓶の蓋である。釦状摘みの形態は数種類に分けられる。232 は薩摩系土瓶の蓋である。233 は灰釉土瓶の蓋である。釦状摘み。234 は行平鍋の蓋である。軟質施釉陶。部分的に鉄分により橙色に発色。235 は土瓶の蓋である。軟質施釉陶。鉛釉。316 は蓋である。TZ に分類される。中央部分は穿孔されている。他の素材の摘みが後付されていた可能性もあるが、使用痕は認められず、孔のまま使用されたものと考えている。胎土は粗い明褐色で雲母粒子、白色粒子含む。胎土の上ににぶい橙色の下地材が塗られ、その上に黒色が塗られ漆が塗られている。317 は鼓形をした軟質施釉陶である。TZ に分類される。茶道に使う蓋置き。千切(ちきり)蓋置きと呼ばれている。化粧掛けして素焼きし、釉薬を掛けて低火度焼成している。胎土は粒子が比較的細かく黄橙色。赤色粒子、白色粒子を含む。両端は平らに整形されている。釉が白色化して下地の赤が全面に残る。

236 ～ 315 は土器である。236 ～ 258 は皿。236 ～ 245、249 は器壁はやや内湾しており底部に左回転糸切り痕がある。DZ-2-b に分類される。底裏には溝状の筋がみられ、内面は立ち上がり際に圏線を持つ。胎土は燈色。いわゆる江戸式と思われる。236 は大形のかわらけで、内面立ち上がり際の圏線は顕著に認められるが外面は滑らかである。240 ～ 242 は底部に墨書が認められる。「大」「中」「小」の文字が書かれることが多い。240 は「大」。241 は「中」。246 ～ 248 は DZ-2 に分類される。246 は内面立ち上がり際に圏線を持つが、底部が小さく溝状の筋もはっきりしない。247 は底裏には溝状の筋はみられるが内面は滑らかである。248 は丸みを帯びて立ち上がり内面も滑らかである。244 ～ 246 はススが付着しており油皿として使われたものであろう。250 は底部が穿孔された皿で DZ-2-i に分類される。見込みの孔周辺部はわずかに剥離している。251 ～ 256 は底部が平滑ないわゆる磨きかわらけである。251、252、254 ～ 256 は DZ-2-d に分類される。251、252、256 は厚手。251、256 は見込みが滑らかに立ち上がっている。252 はいわゆる江戸式と同じように見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。口縁部がやや比厚している。251、256 と比較すると胎土もやや粗い。253 は見込み中央に「福」字の陽刻文が施されており、DZ-2-j に分類される。また、253、254 は見込み、底部ともに黒くなっている。祝い事の席で使う内ぐもりのかわらけである。254 は口縁部が口唇部に向かって薄くなっている。255 は半分に切られて二次加工されている。茶道で風炉の火窓からの火気を防ぐために立てる「前かわらけ」として使われたものかもしれない。257、258 は 透明釉のかわらけで DZ-2-h に分類される。259 は香炉・火入れで DZ-9 に分類される。外面は磨かれ、底部は中央が一段凹められている。260 は土師質の植木鉢で DZ-21-a に分類される。261 ～ 269 は土師質丸火鉢で DZ-31-a に分類される。261 ～ 265、267 は口唇部に敲打痕が観られる。263、266、267 は胴部が磨かれている。横位の沈線が巡り、その間に回転押型文が施されている。268、269 は硬質瓦質丸火鉢で DZ-31-d に分類される。胴部は磨かれている。269 は横位の沈線が 3 本巡り、その間に回転押型文が施されている。口唇部に敲打痕がみられる。270 は土師質筒形火鉢で DZ-31-l に分類される。回転押型文で地文様を付けた上に工具で縦方向の曲線を刻んでいる。表面はきれいに磨かれている。271 ～ 273 は風炉で DZ-31-h に分類される。硬質瓦質である。271、273 は筒形で窓が切られている。273 には内側に調理具を支えるための突起がとれた痕が残る。272 は丸形で内側に角状突起が 2 箇所付されている。274 は硬質瓦質筒形火鉢で DZ-31-j に分類される。口唇部に敲打痕が観られる。胴部は磨かれている。横位の沈線が巡り、回転押型文が施されている。275 は手あぶりで DZ-38 に分類される。斜めに切られている窓の下半分に敲打痕が観られる。276 は脚付き施釉油受け皿 で DZ-40-a に分類される。277 ～ 281 は透明釉が施釉された無脚の油受け皿で DZ-40-b に分類される。受け部が口縁より高いものから次第に低くなり、色調も明るくなる。279 は受け部が口縁より低くなり新しい様相を持つ。282 ～ 284 は無釉・無脚の油受け皿。DZ-40-d に分類される。282 は底部から体部に掛けて緩やかである。285、286 は透明釉無脚のひょうそくで DZ-44-b に分類される。丸碗形。285 は底部中央部に孔が穿たれている。287 ～ 289 は無釉、無脚のひょうそくで、DZ-44-c である。小振りである。体部はあまり丸みを帯びず、直線的である。290 ～ 292 は

ほうろく。在地系の丸底ほうろくで立ち上がりはやや内湾し低い。DZ-47-a に分類される。290 は団子状の内耳が 2 箇所付く。291 の内面には「○」に「一」の刻印が付されている。292 は壊れた内耳部分に穴を開け別のもので代用していた痕がある。293 は瓦燈の蓋部の皿状突起で DZ-45 に分類される。294 は涼炉。DZ-49 に分類される。高台部分は 3 箇所をアーチ状に抉り、脚を作っている。底部脇は面取りが施されている。上部及び内部構造は欠損。内面には部品が外れた痕が残る。底部に渦巻きが刻まれている。小形。墨書「カ□」「廿」。295 ～ 306 は塩壺である。295 は板作成形で「泉湊伊織」の刻印があり、DZ-51-g に分類される。受け部は短く形骸化している。底部から粘土塊を押し込んでいる。胎土には雲母粒子を多く含む。296 は板作成形で大枠に「泉州麻生」の刻印がある。DZ-51-i に分類される。胎土はにぶい黄橙。肩部付近にわずかに条線が観られる。297、298 は板作成形で無印。DZ-51-ab に分類される。受け部は短く形骸化している。底部から粘土塊を押し込んでいる。内面下方に一段段があり、形態は「泉湊伊織」の刻印をもつ DZ-51-g に近い。胎土にも雲母粒子を含む。299 ～ 306 はロクロ成形筒形で無印の塩壺で DZ-51-w に分類される。器高が 6 ～ 7cm の大形のものである。内面のロクロ痕が顕著で、受け部もほとんど認めれない。306 は二次的に底部が穿孔されている。植木鉢に使ったのだろうか。307 ～ 314 は凹形で無印の塩壺の蓋である。DZ-00-c に分類される。307 の胎土はにぶい黄橙。308、309、311 は胎土に雲母粒子を含む。311 は内側中央部に棒で突いたような痕がある。315 は火消し壺の蓋である。

318 ～ 331 は人形・玩具である。318 ～ 324 は円盤状製品で JB_4008_A に分類される。318 は白磁皿、319 ～ 324 は染付皿の転用品である。周囲を打ち欠き円盤状に加工している。いずれも径は 18 ～ 22㎜である。325 はミニチュアの陶器碗で TD_2001_W に分類される。けずり高台で高台脇から高台まで無釉。内面と外面一部に白土を施す。非常に丁寧な作りである。326 は碁石状製品で DQ_4004_H に分類される。胎土は橙色で表面に指紋が残る。327 は面模で DQ_4005_M に分類される。モチーフは大黒である。328 はうさぎで DQ_1209_M2_e に分類される。左右で接合しており片側を欠損している。ヘラで顔、足を描いており、上部に耳を差し込んだと思われる孔が認められる。うさぎは繁殖力が強いことから子孫繁栄の寓意とされる。329 は七輪で DQ_2014_M に分類される。サナと風口は別作り。330 は蓋で DQ_2013_M に分類される。摘まみを中心に 5 枚の花びらを描く。裏面に掌痕があり、雲母が目立つ。331 は釜で DQ_2011_W に分類される。羽釜形。ろくろ成形で平底。口縁部は直立する。

332 ～ 339 は瓦である。332、333 は軒丸瓦である。332 は瓦当部は完形だが筒部の大半を欠損している。瓦当文様は剣梅鉢文である。筒部左右端には漆喰が付着している。筒部の凹面側には布目の転写と棒状の圧痕が確認される。333 は瓦当部は完形だが筒部を欠損している。瓦当文様は連珠巴文で、16 個の珠文が巡る。筒部との接合面にはカキヤブリが確認される。334、335 は軒桟瓦である。334 は軒丸部の右端、軒平部の中央付近から左端、筒部の大半を欠損する。瓦当文様は軒丸部が巴文、軒平部は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類（加藤 1989）に従えば唐草は J、子葉は a に分類される。335 は軒平部左端が残存するのみだが、左の周縁上角に三角形の面取りが施されることから軒桟瓦と判断した。中心飾りは左の一部のみ残存しているが、先端が三又の葉状を呈しており、類例の確認されない珍しい文様である。また唐草は一対のみであり、「大坂式」の文様構成に類似するといえる。唐草、子葉は、加藤晃氏の分類に従えばそれぞれ F、k に分類される。また左の周縁に四つ菱の刻印が押される。336、337 は熨斗瓦である。336 は文様部中心付近のみ残存している。文様は加藤晃氏の分類に従えば 18 類 -3 に分類される。337 は文様部中心付近のみ残存している。表面は一部褐色になっており、被熱した可能性がある。文様は加藤晃氏の分類に従えば 17 類 -1 に分類される。338 は円盤状製品。平瓦を打ち欠いている。339 は丸瓦である。玉縁部よりに釘孔が設けられている。釘孔の凹面側の縁は意図的に打ちかかれており、開きかけた穴の径を拡張した形跡と推察される。凹面には横方向のコビキ痕、布目の転写、棒状工具による押し引きの痕跡が順に重なって確認される。

340 ～ 343 は銭である。340 は古寛永通宝で、錆のためやや銭文が不鮮明であるが、仙台跛宝の可能性が考えられる。341 は新寛永通宝文銭で正字背文型である。342 は背面に「足」が鋳られ、銭譜では下野国阿蘇郡足尾村で鋳銭され、初鋳年は寛保元年（1741）または、寛保 2 年（1742）が考えられる。343 は明和期四文銭で、初鋳年は明和 5 年（1768）と考えられる。 色調は黄色で、背面に 11 波が鋳られ、銭文「永」がやや俯くことから、俯永型に類すると考えられる。

344 ～ 365 は金属製品。344 ～ 360 は銅合金。344 ～ 346 はキセルの雁首である。344 は肩はなく、火皿との接合部は太い。継ぎ目の蝋付けは左側である。345

は火皿は碗形で器高は低い。火皿との接合部は太く、脂返の湾曲はない。継ぎ目の蝋付けは左側である。346は肩あり。火皿は小さい碗形。火皿との接合部は太い。継ぎ目の蝋付けは左側である。線彫りで草花文が描かれている。347 ～ 349はキセルの吸い口である。347は細く長い。348は太く短い。349は細い。350 ～ 352は飾り金具。350はひょうたん形でくびれ部分に紐状の部品が添付されている。351、352は鍍金。表面に唐草文様が線彫りされている。353、354は火箸。355は灯芯押さえ。356は環。把手として使われたものか。357は不明。358、359は釘である。頭は不整円形で平坦。360は2枚の板状のものを釘で留めている。用途不明。361 ～ 365は鉄製品である。361は鎌と思われる。362は腐食が激しく、はっきりしないが刀の鍔であろう。363は棒状製品。断面は四角である。364、365は和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。

366 ～ 379は石製品である。366 ～ 368は硯である。頁岩。366は四寸半×二寸。367は中央部分だけが摩耗している。368は内側の四隅が丸く削り込まれている。小振り。内側に朱墨の痕が残る。369 ～ 374は砥石である。369 ～ 372は頁岩である。369は表面のみを使用している。右手前から左奥に向かって摩滅している。373は1箇所のみタガネ痕が残る。4面使用。374は砂岩。部材。工具痕が大きく残る。375は温石である。滑石。円孔が上端中央に穿たれている。376は印。滑石。花押か。377は火打ち石。玉ずい。378は碁石状製品。砂岩。遊戯具の駒のような使われ方をしたのかもしれない。379は不明。中央穿孔。

SD31（Ⅲ-4図、Ⅳ-28 ～ 30図）

1 ～ 6は磁器である。肥前系染付皿。1は高台断面がシャープな「U」字状でJB-2-eに分類される。口縁が輪花に成形される。裏銘残存部「太明成」。2 ～ 4はやや器高が深く腰が張り、口縁が輪花に成形される皿でJB-2-fに分類される。2は見込み手描き五弁花文。裏銘角枠内「渦福」。3は花唐草文。裏銘二重角枠。4は青磁。5は見込みが蛇ノ目釉剥ぎされる皿で底部無釉。JB-2-kに分類される。6は見込み蛇ノ目釉剥ぎ、高台径の大きな皿でJB-2-mに分類される。見込みコンニャク印判五弁花。扇面文。見込み蛇ノ目釉剥ぎで扇面文の文様が付くものはあまり多くない。

7 ～ 21は陶器である。7は瀬戸・美濃系灰釉碗でTC-1-cに分類される。底部無釉。体部はわずかに内傾している。8、9は京都・信楽系碗。8は半筒形で、TD-1-iに分類される。幅広高台で、高台畳付けは面取りが施されている。体部の屈曲は大きく口縁部に向かってやや外反している。9は腰の張る碗でTD-1に分類される。高台は大きめで、高台畳付けは面取りが施されている。10 ～ 14は瀬戸・美濃系である。10は見込みに呉須で摺絵が施された灰釉皿でTC-2-eに分類される。高台内施釉。11は輪剥げ平皿でTC-2-uに分類される。底部無釉。13は底部が拭き取られた灰釉二合半徳利でTC-10-aに分類される。12、14は五合徳利でTC-10-dに分類される。12は雨滴形の底部である。胴部底部際と高台内に墨書が書かれている。14は頸部から肩に掛けてうのふが流し掛けられているが、やや肩が張り釘書きが線彫りされている。15は肥前系。刷毛目が施された蓋物でTB-13-bに分類される。筒形。底部欠損。本遺跡内での類例は少ない。16、17は瀬戸・美濃系壺・甕。16はTC-15-fに分類される。灰釉。17はTC-15に分類される。灰釉。底部穿孔。植木鉢として二次利用している。見込み目跡3箇所。18は肥前系の壺・甕でTB-15に分類される。見込みには撒き砂が残されており、重ね焼きが行われていたことが分かる。高台は畳付け脇が削り取られ段差になっている。底部穿孔。植木鉢として二次利用している。19は堺系擂鉢でTL-29に分類される。擂目は1単位11条から成る。底部穿孔。植木鉢として二次利用している。20は瀬戸・美濃系鬢水入れ、TC-25に分類される。鉄による摺絵。21は脚部を有するひょうそくでTC-44-aに分類される。飴釉。芯立て上端を残しスリットが入れられている。同様のものは東大編年Ⅵa期（1750 ～ 1760年代）の遺構から出土している。

22 ～ 31は土器である。22 ～ 24は皿である。22は底部が平滑されたいわゆる磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。23、24は器壁がやや内湾しており外面立ち上がり際に溝状の筋が観られ、立ち上がり際に圏線を持つ。DZ-2-bに分類される。底裏に左回転糸切り痕がある。胎土は燈色。いわゆる江戸式と思われる。25は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。高さが約16cmで、外面には縄の結節や指で付けたと思われる文様と横方向の沈線が付されている。口唇部には朱色が残る。漆か。26は火窓が開けられている風炉でDZ-31-hに分類される。横方向の沈線が付されている。27は土師質無釉の油受け皿でDZ-40-dに分類される。受け部が口縁部より高い。28は十能の把手。DZ-43に分類される。土師質。29は瓦燈の身の皿状突起DZ-45に分類される。土師質。裏側中央付近には製作時に付けられた深さ7mmほどの孔が見受けられる。30は板作成形の塩壺。「泉湊伊織」の刻印が付されている。DZ-51-gに分類される。体部は直線的に立ち上がり、蓋受けはしっかりとしている。底

部中央部欠損。31 は土師質の鉢形容器である。底部は平底、体部は粘土紐を数段重ねて成形し、底部から垂直に立ち上がる。口唇部は平らで幅広くやや内側につまみ出している。体部外面はミガキ調整されており櫛状工具で緩やかな波状文が施されている。底部外面の体部との境に幅 5mm ほどのケズリがみられる。体部の 3/4 を欠損しているが、残存部端の内面に一部縦にナデ調整がみられる箇所があり、ナデの周囲がわずかに隆起しているため、仕切盤の可能性が高い。DQ_3012 に分類する。

32、33 は瓦である。32 は海鼠瓦。壁に固定するための釘穴部がある。33 は軒丸瓦である。瓦当部の左半分と筒部を欠損している。瓦当文様は剣梅鉢文である。

34 は金属製品である。鉄製。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。

35、36 は石製品である。35 は硯。頁岩。陸の部分は大きくすり減っている。36 は砥石。頁岩。表面と側面 1 面には使用痕が観られる。

SE33（Ⅲ -5 図、Ⅳ -31 図）

1 ～ 4 は肥前系染付磁器である。1、2 は高台断面が三角形を呈する碗で JB-1-c に分類される。1 は高台内銘「太明成化年製」。2 は見込み二重圏線内手描き五弁花。高台内銘「大明嘉靖年製」。3、4 は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた皿で、底部無釉、高台断面逆台形で JB-2-k に分類される。3 は口縁部が外反している。JB-2-k で口縁部が外反しているものは東大編年Ⅲ期（1650 年代～ 1682 年）に確認されている。

5、6 は陶器である。5 は瀬戸・美濃系鉄釉坏で TC-6 に分類される。丸碗形で高台無釉。6 は京都・信楽系の腰白茶壺で TD-15-a に分類される。上半は鉄釉、下半は灰釉。耳は 2 箇所残存。胎土は白色粒子を多く含む。

7 ～ 10 は土器である。7 ～ 9 は皿。器壁がやや内湾しており内面立ち上がり際に溝状の筋がみられ、内面立ち上がり際に圏線を持つ。DZ-2-b に分類される。底裏に左回転糸切り痕がある。胎土は燈色。いわゆる江戸式といわれる。8、9 は口縁部にススが付着し、油皿として使われている。10 は塩壺の蓋。DZ-00-c に分類される。

11 は軒丸瓦である。筒部を欠損するが軒丸部は完形である。瓦当文様は剣梅鉢文である。

12 は骨角製品である。櫛払いの柄。化粧道具の櫛の歯を掃除する道具。大形家畜の四肢骨骨幹。基部欠損、2 列の植毛孔を僅かに残す柄である。先端に向かってわずかに細くなり、一旦やや広くなる。その部分から片側を薄く成形しておりヘラのようになっている。全面を丁寧に研磨している。表面には植毛孔の位置決めをするための「×」が刻まれている。

SX39（Ⅲ -79 図、Ⅳ -31 図）

1 は土器である。硬質瓦質火鉢。DZ-31 に分類される。口縁部のみ。外面に突起が一箇所認められる。

2 は鬼瓦である。左端部のみ残存したものと推察され、全形を窺うことはできない。文様部表面は銀色を呈する。

SK41（Ⅲ -22 図、Ⅳ -32 図）

1、2 は磁器である。1 は肥前系染付小丸碗で JB-1-j に分類される。内面口縁部二重圏線。見込み手描き五弁花。2 はシャープな「U」字高台を持つ鉢で JB-5-b に分類される。焼成不良で文様が不鮮明である。高台は高い。

3 は瀬戸・美濃系灰釉陶器碗で TC-1 に分類される。

SK42（Ⅲ -22 図、Ⅳ -32 ～ 39 図）

覆土の堆積状況に違いが認められた事から、層位上げ（上層、下層）を実施した。1 ～ 38、47、48、50 ～ 54、59、62、63、65 ～ 73 は上層から、39 ～ 46、49、55 ～ 58、60、61、64 は下層から出土したものである。ただし、後述する 47 ～ 61 の茶道具関連の遺物は、上層、下層、両層から出土し、さらに接合する状況も認められた事から、一括廃棄された資料と推定された（Ⅲ章参照）。そこで茶道具関連の遺物は、出土点数の多かった下層にまとめて報告する。

上層　1 ～ 8 は磁器である。1 ～ 3 は肥前系染付碗。1 は小丸碗で JB-1-j に分類される。見込みに文様あり。2 は絵付けや作りが下手ないわゆるくらわんか碗の底部である。大振り。JB-1-g に分類される。見込みに文様あり。3 は端反碗。JB-1-n に分類される。焼成不良で白濁している。4 は瀬戸・美濃系端反碗で JC-1-d に分類される。5 ～ 8 は肥前系皿・平鉢。5 は蛇ノ目凹形高台を有し、高台高が高い皿で JB-2-i に分類される。楼閣山水文。外面の文様無し。6 ～ 8 は蛇ノ目凹形高台を有し、高台高が低い皿で JB-2-j に分類される。6、7 は外面青磁の青磁染付。高台内二重角枠内渦福。6 は口縁部に段あり。7 は口唇部が玉縁状になっている。8 は内側面牡丹唐草文。見込み環状松竹梅文。外面唐草文。高台内二重角枠内「筒江」。武雄市の筒江窯で生産された製品と考えられる。

9 ～ 26 は陶器である。9 ～ 11、14 ～ 24 は瀬戸・美濃系。9 ～ 16 は碗。9、10 は灰釉碗で TC-1-c に分類される。口縁部が内湾している。9 は小振り。高台内墨書。「五」「七ノ十二日」。10 の高台内墨書は、「文化」または「分左」。11 は鉄で柳が描かれた灰釉碗。いわ

ゆる柳茶碗。TC-1-g に分類される。12、13 は体部が「ハ」の字状に開き、中ほどに凹みを持つ京都・信楽系灰釉碗で TD-1-k に分類される。全面に貫入が入る。底部渦巻き高台。高台内墨書。13 は「勘」。14 はいわゆる拳骨茶碗。漆黒釉に長石釉を散らし体部に凹みを持つ碗で TC-1-p に分類される。口縁部欠損。15 は口縁部に瑠璃釉、体部に灰釉が掛分られた碗で TC-1-ae に分類される。16 は内面白化粧、外面白土と鉄で折枝梅花文が描かれた広東碗で TC-1-af に分類される。17 は柿釉が施された油皿。TC-2-o に分類される。見込み、底部共に直重痕が残る。18 ～ 21 は灰釉瓶。18 は一升徳利で TC-10-e に分類される。19 ～ 21 は二合半徳利でつけ掛け TC-10-c に分類される。釘書きあり。22 は火鉢でいわゆる瓶掛け。TC-31-a に分類される。緑釉。陽刻文。底部に 2 箇所穿孔が認められる。23 は脚無し油受け皿。TC-40-c に分類される。24 は丸碗形の片口鉢で TC-23-b に分類される。見込みには目跡が 3 箇所みられる。高台内墨書「頭」。25 は紐状把手付き柿釉鍋で TZ-33-a に分類される。底部にはススが全面に付着している。26 は堺系擂鉢で TL-29 に分類される。擂目は 8 条 1 単位で施されている。見込みの擂目は三角形に交差している。口縁断面は長方形である。

27 ～ 36 は土器である。27 は透明釉が施釉された皿で DZ-2-h に分類される。28 は鉢で DZ-5 に分類される。底面はきれいに磨かれている。29 ～ 31 は土師質丸火鉢で DZ-31-a に分類される。底部に墨書あり。29 は「九月」。30 は口縁部に敲打痕あり。31 は口唇部外側に敲打痕あり。 32 ～ 34 は硬質瓦質丸火鉢で DZ-31-d に分類される。口唇部外側から強く何度も敲いており、口唇部の形が解らないほどになっている。35 は透明釉、脚付きの油受け皿で DZ-40-a に分類される。36 は透明釉で脚無しの油受け皿。DZ-40-b に分類される。受け部は皿の口縁部と同じ高さである。

37、38 は人形・玩具である。37 はミニチュアの白磁碗で JB_2001_M に分類される。型成形で高台は小さく、施釉にムラがあり、内部に釉垂れがみられる。完形である。38 は泥面子で DQ_4006_M に分類される。筒のような物で抜いて成形したと思われ、側面は平坦で底面には縮れがみられる。モチーフは表は網目文、裏は無文である。胎土は精緻で、赤褐色土と淡黄褐色土がマーブル状になっている。

62、63、65 ～ 67 は瓦である。62 は軒平瓦である。瓦当部は完形だが筒部の大半を欠損している。瓦当文様は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅣFi に分類される。63、65 は軒桟瓦である。63 は瓦当部は完形だが筒部の大半を欠損している。瓦当文様は軒丸部が巴文、軒平部は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅠ Kg に分類される。65 は軒平部左端、筒部の大半を欠損している。瓦当文様は軒丸部が巴文、軒平部は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅢ Ke に分類される。66 は軒丸部のみ残存している。瓦当文様は連珠巴文で、11 個の連珠が囲む。67 は熨斗瓦である。文様部は中心飾りから右側と、左端を欠損している。色調は赤褐色を呈し、被熱したものと推察される。文様は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えば 18 類に分類される。

68 は新寛永通宝で藤沢・吉田島銭類の縮字型に比定される。初鋳年は元文 4 年(1739)が考えられる。

69 ～ 71 は金属製品。69、70 は銅合金。69 は目貫。親子の虎。70 は矢立の蓋。軸で開閉ができるようになっている。71 は鉄製品。鏃。

72、73 は石製品。砥石。72 は頁岩。大振りの道具類を磨いだ物であろう。右下から左上に向かって摩滅している。かなり薄くまで使用している。表面のみ使用。73 は菫青石(きんせいせき)ホルンフェルス。大振りの道具類を磨いだ物であろう。表裏面使用。

下層　39 は高台断面形がシャープな「U」字状を呈する肥前系染付磁器碗で JB-1-e に分類される。40 は染付磁器碗の蓋である。摘まみ内「富貴長春」、内面中央手描き五弁花。

41 ～ 45 は瀬戸・美濃系陶器である。41 ～ 43 は陶器碗。41 は灰釉碗で TC-1-c に分類される。高台内墨書。「源」。42 は口縁部に瑠璃釉、体部に灰釉が掛分される碗で TC-1-ae に分離される。43 は刷毛目碗で TC-1-s に分類される。大振り。44 は二合半徳利でつけ掛け TC-10-c に分類される。釘書き。「∧」「二」。45 は灰釉蓋物で TC-13 に分類される。口唇部無釉。

46 は土器である。透明釉が施された皿で DZ-2-h に分類される。

47 ～ 61 は茶道具などとして収集されたものが、罹災して一括廃棄された資料である。修復が不可能なほど被熱しており、ほとんどの遺物の釉は溶けている。本遺構の他の遺物は被熱しておらず、火災を受けた直後の廃棄ではなく二次廃棄と考えている。同様の遺物は、看護職員等宿舎 1 号棟地点の天和 2 年(1682)の火災に伴う廃棄と考えられる SK299 から出土している。47、48 は胎土がやや軟質である。福建等の南方ではないかと推定される。磁器。白磁香炉で JA9-9 に分類される。47 は身で器高は推定復元を行った。1 脚のみ残存。口縁部脇には左右に短冊状の耳が付けられ、蓋の抉り部分に、はめ

込まれるようになっていた。内面は部分的に釉が観られ、外面は底部中心部のみ無釉。48 は蓋で中心よりややずれたところに穿孔が認められる。上部には装飾が施されていたと思われる痕が残る。脇には抉りが認められ、身の耳がはまるようになっている。裏面は無釉。49、50 は龍泉窯系青磁香炉で JA4-9 に分類される。南宋～元。13 ～ 14 世紀。49 は上を向いた魚が把手になっている鯱耳か。やや青味がかっている。造形はあまり鮮明ではない。被熱して表面の釉がざらついている。50 は筒形の香炉で口唇部がやや比厚している。沈線が 2 条巡る。千鳥香炉か。51 は龍泉窯系青磁水滴で JA4-19 に分類される。元末～明初。14 世紀。船形で、欄干と二人の人物が造作されており、屋形部分もあったと考えられる。平底、底部無釉。船倉部分は中空で間に孔の穿たれた間仕切りの板が入る。 52、53 は中国景徳鎮窯系水注で JA1-27 に分類される。52 は色絵瓢箪形。金襴手。六角形。型作り。4 個のパーツを組み合わせている。横方向のつなぎ目を 3 箇所確認でき、赤い矢印で示した。外面文様は上下 6 箇所の区画に分けられ、その中を窓で区切り他の部分を地文で充填している。胴部下半中央の穿孔は、穿孔部にも釉が認められ 1 次穿孔であることがわかる。穿孔部周辺の赤褐色に塗られた部分にわずかに擦痕が観られ、また穿孔部に塗られた釉も部分的でそのままの状態で使用されたのではないと考えられる。おそらく金属製の注口が付けられていたと想定される。中国景徳鎮窯の金属製注口付き水注は輸出品として生産されていたと考えられ、トルコのトプカプ宮殿などでも確認されている。二次焼成を受け表面の釉が溶けている。53 は青磁。清朝。全面に花唐草文がヘラ彫りされている。把手は中空になっており、内側に小さな穿孔が 1 箇所みられる。注口部欠損。胴部に方形の窓が開いており、断面長方形の注口が付けられていたと思われる。口縁部は把手に向かって斜めになっている。二次焼成を受け表面の釉が溶けている。高台は畳付けの脇がきれいに面取りされている。高台内中央に 2 重圏線角枠内に銘有り。「年製」のみ残存。54 ～ 56 は龍泉窯系青磁香炉で JA4-9 に分類される。接点はないが同一の破片と考えている。鳥頭部くちばしが穿孔されており、煙が出るようになっている。頭部は細かく造形され、毛の流れまで線彫りされている。55 は体部。羽の一部が取り外せるようになっており、蓋になっていると思われる。56 は足の付け根部分か。毛の流れが線彫りされている。57 は動物形磁器製品の部分。JA に分類される。動物の脚の部分と考えている。毛の流れまで線彫りされている。毛の部分は部分的に上絵付けされ金泥で縁取られている。58、59 は龍泉窯系青磁硯屏。JA4-66 に分類される。58 は片面に座った獣文が陽刻され、もう片面には筆管と言われる筒状のものが 2 箇所付く。両側は下で獅子が支え、その上には魚文が付けられている。上半部欠損。59 は片面には筆管と言われる筒状のものが 2 箇所付く。もう片面は二次焼成を受け、表面の釉が溶け不鮮明である。両側は下で獅子が支えその上には魚文が付けられている。上半部欠損。60 は京都・信楽系陶器釣瓶車花入。TD-22 に分類される。色絵草花文。錆絵で同様の形のものが伝世している。釣瓶の滑車部分を模している。上方には掛け花生けとして使用されたと思われる穿孔が認められる。61 は産地不明輸入陶磁器。注口が付いているので水注として使われたのであろう。TA-27 に分類される。焼締まった硬い胎土で白色粒子混入。表面には単節縄目文が押圧されている。

64 は軒桟瓦である。軒平部中央付近から左半分、筒部の大半を欠損している。瓦当文様は軒丸部が巴文、軒平部は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えば、唐草は F、子葉は i に分類される。

SK45（Ⅲ -20 図、Ⅳ -40 図）

1 は肥前系染付磁器猪口。輪高台で JB-7-b に分類される。内外面文様あり。見込み中央に膨らみを持つ。小振りである。

2 ～ 6 は瀬戸・美濃系陶器である。2 ～ 4 は灰釉碗で TC-1-c に分類される。口縁部に向けてやや内湾している。2 は高台内の抉りが浅い。高台内に墨書「惣右」。5 は鉄で柳が書かれた灰釉碗。いわゆる柳茶碗で TC-1-g に分類される。体部はハの字状に開く。6 は灰釉二合半つけ掛け徳利で TC-10-c に分類される。肩が張り、首が短い。釘書き「久〇」。

7 ～ 9 は土器である。7 は油受け皿で DZ-40-d に分類される。受け部が口縁より高いものから次第に低くなり、色調も明るくなる。7 は受け部分は口縁部とほぼ同じ高さである。8 は土師質丸火鉢で DZ-31-a に分類される。小振り。9 は丸底のほうろくで DZ-47-a に分類される。江戸在地系で、口縁部は内湾し立ち上がりは低い。小さい内耳が 3 個付く。内耳はドーム状に張られた粘土を棒状工具で両端から刺突して押し込んでいる。底部外面にはチヂレ目が観られる。

10、11 は瓦である。10 は軒桟瓦である。右桟になり、軒丸部以外は欠損している。瓦当文様は巴文である。色調は橙色を呈し、一部黒色であることから被熱した可能性がある。11 は軒桟瓦あるいは軒平瓦である。瓦当部中央付近から右端までと筒部を欠損している。瓦当文様

は「大坂式」に該当する。唐草、子葉は加藤晃氏の分類に従えばFiに該当する。

12、13は金属製品である。鉄製。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。12は一寸釘である。13は先端部欠損。

14、15は石製品である。砥石。14は流紋岩。中砥。表裏面と側面1箇所を使用している。右下から左上に向かって摩滅している。15は流紋岩。大振りの道具類を磨いだ物であろう。

SE46（Ⅲ-6図、Ⅳ-41図）

1は肥前系磁器染付碗。高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し高台高が高い碗でJB-1-eに分類される。高台内に圏線が1本巡る。

2は瀬戸・美濃系陶器片口鉢。丸碗形でTC-23-aに分類される。灰釉。被熱しており、部分的に釉がくすんでいる。見込みには目跡が2箇所確認できる。

3は土器である。燭台でDZ-52に分類される。蝋燭を立てるための棒を差し込むための穴が開けられている。

4は鉛か。白い粉が吹いている。素材として持ち込まれた物か。

SE57（Ⅲ-7図、Ⅳ-41図）

1、2は土器である。1は瓦燈の身でDZ-45に分類される。受け部に舌状の立ち上がりが認められる。2は丸底のほうろくでDZ-47-aに分類される。江戸在地系で、型ロクロで成形されている。口縁部の立ち上がりは高く、古い様相を示す。

3～6は瓦である。3は軒丸瓦である。瓦当部の周辺上部、筒部を欠損する。瓦当文様は剣梅鉢文である。中心から剣菱が延び、花弁は断面ドーム形を呈する。4は軒丸瓦である。瓦当部の左上部と筒部の大半を欠損する。瓦当文様は剣梅鉢文である。中心から剣菱が延び、花弁は断面ドーム形を呈する点で3と共通するが、3と比べ小形であり、互換性はないと推察される。5は軒桟瓦あるいは軒平瓦である。瓦当部中央付近から左端と筒部の大半を欠損している。瓦当文様は「江戸式」に分類されるが、中心飾り・左右四対の唐草・左右一対の子葉という「江戸式」に一般的な文様構成をとらず、中心飾りの左右に一対の重線の唐草が配置され、その横に先端の屈曲する単線の唐草が左右一対配置される。加藤晃氏の分類に従えば、中心飾りはⅠ、単線の唐草はGに分類される。重線の唐草には該当する分類が無い。6は丸瓦である。玉縁部の大半と前端部、右半分を欠損する。凸面は縦ナデ整形が施され、また釘穴を二つ設けている。凹面は横方向のコビキ痕が観られ、さらに布目が転写され、棒状工具で整形した痕跡が確認される。

7～9は金属製品である。銅合金。7は匙。先端後端欠損。8は金具。1寸のところで曲げられている。9は鋲。頭部径1cm。10は石製品。砥石である。流紋岩。持ち砥として使われたか。右下から左上に向かって摩滅している。表面は劣化してぼそぼそになっている。

SK58（Ⅲ-21図、Ⅳ-42図）

1は肥前系染付磁器皿。蛇ノ目凹形高台で高台高が低い皿でJB-2-jに分類される。高台内二重角枠内「渦福」。

2は瀬戸・美濃系陶器灰釉碗でTC-1-cに分類される。大振りで口縁部は直立する。底部欠損。

3～5は瓦である。3は軒丸瓦である。瓦当部下端と筒部玉縁付近を欠損する。瓦当文様は剣梅鉢文である。筒部は凸面に縦方向のナデが全面に施される。裏面は横方向のコビキ痕が全面に認められ、コビキ痕を切って布目の転写された痕跡、さらに棒状工具の痕跡が認められる。玉縁寄りに釘穴を有する。穿孔は凸面側からなされている。4は軒桟瓦である。軒丸部と軒平部左端、筒部を欠損する。軒平部瓦当文様は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅣFaに該当する。文様は崩れ不明瞭である。5は桟瓦あるいは平瓦である。角部のみの小破片であるため実測図は省略した。角部付近に右に倒した「)」と、その下に点を打った文様が描かれる。刻印に準じる記号だと推察される。

6～8は金属製品である。銅合金。6、7はキセルの吸口である。6は肩はない。7は肩もはっきりはしていないが、口付に向かって窄まっている。8は柄。長さ12cm。

SK59（Ⅲ-23図、Ⅳ-42図）

1は銭文が不鮮明であるが、新寛永通宝と考えられる。

SE60（Ⅲ-8図、Ⅳ-42、43図）

1～4は肥前系磁器である。1は碗で底部欠損。JB-1に分類される。2は糸切り細工によって高台が貼り付けられた皿でJB-2-rに分類される。型皿。高台は隅丸方形。揃いで三枚出土している。3は高台内が蛇ノ目釉剥ぎされている大皿でJB-3-cに分類される。鍔皿。青磁。見込みは陰刻されている。高台内の蛇ノ目釉剥ぎ部分には鉄漿が塗られ、チャツ痕も残る。4は仏飯器。脚部の畳付け部分が浅く削り込まれ、外周が面取りされている。JB-8-cに分類される。口縁部欠損。

5～11は陶器である。5は肥前系。外面に主文様の

山水文が描かれた碗でいわゆる京焼風陶器。TB-1-b に分類される。高台内に銘あり。6 は瀬戸・美濃系灰釉碗で TC-1-c に分類される。やや大振り。7、8 は肥前系。青緑釉が施され見込みが蛇ノ目釉剥ぎされた皿で TB-2-a に分類される。内野山窯製品を指標とする。8 は部分的に赤い発色が観られる。9 は瀬戸・美濃系型皿。輪高台。TC-2-i に分類される。付け高台になっている。10 は肥前系皿・平鉢。いわゆる京焼風陶器。TB-2-c に分類される。見込みには鉄で絵が描かれている。高台内蛇ノ目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分には鉄漿が塗られ、チャツ痕も残る。口縁部に 3 箇所凹みが施される。11 は瀬戸・美濃系丸碗形片口鉢で TC-23-a に分類される。

12 は土器でかわらけである。DZ-2-b に分類される。いわゆる江戸式。内面立ち上がり際に圏線はあるが底裏の溝状の筋はあまりはっきりしない。見込み中央には凹がある。底裏糸切り痕は左回転である。

13 は人形・玩具。鳥居の脚か。

14 ～ 16 は瓦である。14 は軒丸瓦である。瓦当部の一部と筒部を欠損している。瓦当文様は剣梅鉢文である。筒部との接合部にはカキヤブリが確認される。15 は鬼瓦の一部と推察される。長方形を呈し、中心に曲線を描く帯部が配置される。単体で使われるのではなく、組み合わせて使う飾り瓦の一部品だと推察される。左上と右端下に四角形の孔が設けられており、右端下の孔付近には赤錆が付着していることから、鉄釘を通し固定するための釘孔だと推察される。16 は鬼瓦の一部と推察される。先端に二つの切込みが入り、緩やかに丸い鰭状を呈する。全体に横ナデが施されており、破面にはカキヤブリが確認される。

17、18 は石製品である。17 は砥石である。粘板岩。仕上げ砥。厚さ 0.6cm。両面とも平らに摩滅している。18 は温石。粘板岩。幅 7.1cm。円孔が上端中央に穿たれている。大形である。

SK61（Ⅲ -24 図、Ⅳ -44 図）

1 は肥前系磁器染付皿。絵付けや作りが粗雑な皿で JB-2-s に分類される。2 は土器でかわらけである。器壁は厚手でやや内湾しており底裏に左回転糸切り痕がある。DZ-2-b に分類される。内面立ち上がり際に圏線がみられ、底裏には溝状の筋がみられる。胎土は燈色。いわゆる江戸式。口縁部には灯芯痕が付く。小皿。

SK61・121（Ⅲ -24、32 図、Ⅳ -44 図）

1 は肥前系磁器染付皿。絵付けや作りが粗雑な皿で JB-2-s に分類される。2 は京都・信楽系陶器灰釉碗で TD-1 に分類される。腰部はやや膨らみ、口縁部はやや外反する。高台内無釉。

3 ～ 16 は土器である。3 ～ 5、7 は DZ-2-a に分類される。底裏糸切り痕は左回転である。3、4 は見込みには渦巻き状の調整がみられる。3 は内面立ち上がり際の圏線はあるが底裏の溝状の筋がない。4 は溝状の筋ははっきりせず、器高が高い。5 は内面立ち上がり際の凹みはない。7 は見込み中央に膨らみを持つ。6、8 ～ 15 は器壁はやや内湾しており底裏に左回転糸切り痕がみられる。DZ-2-b に分類される。内面立ち上がり際に圏線がみられ、底裏には溝状の筋がみられる。胎土は燈色。いわゆる江戸式である。16 はほうろくである。DZ-47 に分類される。底部から口縁部が丸く立ち上がる。口縁部下に一段凹みを持つ。外面には口縁部から底部にかけて、右上がりの平行タタキ調整。底部は薄い。胎土は橙白色で金雲母、白色粒子少量混入。大坂城下町跡（大阪市文化財協会 2004）などで認められ、17 世紀前半に比定されている遺構から出土している播磨、堺系とされている関西系半田ほうろくに類似している。橙白色の胎土などから模倣品である可能性もある。本遺跡では御殿下・山上会館地点の 627 号遺構で出土している。茶道の灰器として使用されたものと考えている。胴下半部から底部にかけてススが付着している。

SP64（Ⅲ -71 図、Ⅳ -44 図）

1 は軒桟瓦である。軒平部と筒部の大半を欠損している。軒丸部瓦当文様は巴文である。

SK70（Ⅲ -25 図、Ⅳ -45 図）

1 ～ 4 は陶器である。1 は瀬戸・美濃系碗。TC-1 に分類される。高台を削りだしている底部削り整形。2 は肥前系皿で TB-2 に分類される。鍔皿。絵唐津。鉄絵。口縁部には内面から 1 箇所凹みが付けられている。見込みには胎土目が 4 箇所。高台は削り出し高台。16 世紀末から 17 世紀初頭。3 は瀬戸・美濃系灰釉緑釉流しのいわゆる黄瀬戸鉢で TC-3-b に分類される。口縁部内側付近に波状の櫛描文を有する。高台脇が削り出されておらず、畳付けから体部に繋がっている。見込み中央の文様は印花文ではなく、5 本 1 単位の櫛描きで丸い文様が描かれている。見込みには団子状トチ痕が 1 箇所認められる。4 は瀬戸･美濃系陶器擂鉢で TC-29 に分類される。柿釉。擂目は櫛による 15 条 1 単位。胎土は白色である。口縁部は外反し口縁内面に段が観られる。口縁部のみの破片である。

5 はかわらけで DZ-2-k に分類される。黄白色。胎土

が粗く赤色粒子と黒色粒子を含む。厚手で小振りの皿。内面は口縁から見込みにかけて緩やかな曲線を描く。内面に指頭圧痕がわずかに残る。底裏糸切り痕は左回転である。東上野から北武蔵北部に掛けて出土しているかわらけの胎土に近い。

SU77（Ⅲ-75 図、Ⅳ-45 ～ 47 図）

1 ～ 5 は肥前系染付磁器である。1、2 は高台断面がシャープな「U」字状を呈し高台高の低い碗で、JB-1-e に分類される。3 は絵付けや作りが粗雑な皿で JB-2-g に分類される。見込み二重圏線、中央にコンニャク印判五弁花である。小皿。外面は松葉文。4 は壺である。JB-15 に分類される。内面無釉。胎土は灰白色。5 は体部が丸形を呈する蓋物である。JB-13-a に分類される。蛇ノ目高台。

6 ～ 19 は陶器である。6 ～ 11 は碗である。6、7 は肥前系である。6 は体部に渦巻き状の刷毛目が施された丸碗で TB-1-d に分類される。腰の張った丸碗形。7 は文様部は欠損しているが外面に主文様の山水文が描かれた、いわゆる京焼風陶器で、TB-1-b に分類される。高台内刻印あり。8 ～ 10 は瀬戸・美濃系。8、9 は灰釉碗で TC-1-c に分類される。8 は大振り。体部は直立。東大編年Ⅴ期（1710 年代～ 1740 年代）以降徐々に小形化し体部が内傾化してゆく。9 は小振りで体部が内傾化している。10 は外面渦巻き刷毛目、内面打刷毛目の施された碗で TC-1-s に分類される。底部欠損。体部は浅い半球形。11 は京都・信楽系。杉形碗。TD-1-d に分類される。高台脇面取り。高台内に「暁山」の刻印あり。粟田焼系。正徳年間（1711 ～ 1715）に京都府今道町に開窯、明治十年に廃業。12 は瀬戸・美濃系灰釉坏で TC-6 に分類される。杉形。口縁部がやや外反している。高台内の削り込みは浅く、中央はふくらんでいる。被熱しており釉が光沢を失っている。13 は長石釉が施釉された瀬戸・美濃系丸皿で TC-2-c に分類される。高台内目跡 1 箇所残存。14 は瀬戸・美濃系鉄絵蘭竹文皿。TC-2-j に分類される。灰釉。見込みに 2 重圏線。底部高台内と見込みに目跡が 2 箇所ずつあり。高台断面三角形の削り出し高台である。15 は瀬戸・美濃系鉄釉香炉で TC-9-b に分類される。2 脚残存。口縁部に敲打痕。16 は瀬戸・美濃系五合灰釉徳利で TC-10-d に分類される。肩の張る寸胴形。線彫りと烈点の混じった釘書きで「高サキ」と描かれている。肩部で打ち欠かれ、二次利用されている。17 は瀬戸・美濃系丸碗形の片口鉢で TC-23-b に分類される。外面は鉄釉。内面は灰釉で口縁から鉄釉流し掛け。胎土にも鉄分と思われる黒色粒子多量混入。内面の灰釉にも、ごま塩状の暗褐色の粒が多く観られる。18 は瀬戸・美濃系擂鉢で TC-29 に分類される。柿釉。擂目は櫛による 8 条 1 単位。胎土は白色である。口縁部は「く」の字状に外反している。小振り。19 は鉄釉土瓶の蓋である。

20 ～ 26 は土器である。20 ～ 24 はかわらけで、器壁はやや内湾しており底裏に左回転糸切り痕がみられる。DZ-2-b に分類される。内面立ち上がり際に圏線がみられ、底裏には溝状の筋がみられる。胎土は燈色。いわゆる江戸式である。20 は内外面ともスス付着。外面に激しくススの付着が観られることから、特別な使われ方をしたものと思われる。21 は口縁部にススが 1 周付着。22、23 は口縁部にススが部分的に付着。25 は土師質丸火鉢で DZ-31-a に分類される。口縁部に敲打痕が 1 周巡る。2 脚残存。26 は塩壺の蓋で DZ-00-c に分類される。DZ-51-i（「泉州麻生」）の蓋であろう。

27 は碁石状製品で DQ_4004_H に分類される。胎土は橙色で指紋がみられる。

28 ～ 43 は瓦である。28 ～ 32 は軒丸瓦である。28 は筒部の大半を欠損しているが、瓦当部はほぼ完形である。中心に剣菱は観られない。また筒部に対して瓦当文様が右回りにややずれて接合されている。29 は筒部の大半を欠損しているが、瓦当部はほぼ完形である。瓦当文様は剣梅鉢文で、中心から外周に向かって延びる剣菱が配置される。30 は筒部を欠損しているが、瓦当部は全形の窺える資料である。瓦当部と筒部の接合面にはカキヤブリが認められる。中心と花弁をつなぐ軸が花弁と同じ高さとなるやや特異な梅鉢文である。31 は瓦当文様の約 2/3 と筒部を欠損している。瓦当文様は連珠巴文であり、珠文が巡る。橙色を呈し軟質であることから、被熱した可能性がある。32 は瓦当部の一部のみの破片資料だが、梅鉢文の花弁とおぼしき断面ドーム状の丸が配置されている。小さな破片資料だが、この丸い文様部の径は 33mm を測り他の梅鉢文より大きいことから、かなりの大形品であった可能性がある。33 は軒桟瓦である。軒平部の中央から左半分と筒部の大半を欠損している。軒丸部は巴文、軒平部は「江戸式・大坂式折衷文様」に分類される。唐草、子葉は La に分類される。34 ～ 40 は軒桟瓦あるいは軒平瓦である。34 は瓦当部右端と筒部の大半を欠損するが、軒平部瓦当文様は完形である。瓦当文様は「江戸式・大坂式折衷文様」に分類される。唐草、子葉は Ga に分類される。35 は瓦当部左右と筒部の大半を欠損し、瓦当部中央付近のみ残存している。文様は「大坂式」に分類される。なお瓦当部左側の確認できる同笵資料が同じ SU77 から出土しており、唐草は I、子葉は f に分類される。36 は瓦当部右側と筒

部の大半を欠損している。文様は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅠ Ag に該当する。周縁右側に二つ引き文の刻印が押されている。筒部表面には縦方向の調整痕跡が認められる。37 は瓦当部中央付近から左側と筒部の大半を欠損している。文様は中心飾りが欠損しているため分類できない。唐草は K に分類されるが、子葉は加藤晃氏の分類の中で l に近いものの、二股に分かれた先端が長く延びる特異な形態を呈する。38 は瓦当部は右側の唐草と子葉を残すのみであり、筒部は大半を欠損している。唐草、子葉は Ka に分類される。39 は瓦当部中央付近から右側と周縁左端、筒部の大半を欠損している。文様は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅢ Kg に該当する。40 は瓦当部の中央部から右側と筒部の大半を欠損する。唐草、子葉は Ja に分類される。なお周縁左端に幅 11mm の縦長の面取りが施される。41、42 は熨斗瓦である。41 は左右と後端部を欠損している。文様は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えば 16 類に該当する。42 は中央から右と左端、後端部を欠損している。文様は中心飾りが残存せず、全形が窺えないためどの分類に該当するか判然としない。43 は鬼瓦である。下半の一部と思われる文様部を残すのみの破片資料であり全形を窺うことはできない。文様は鱗ないし花弁を表現したと思われる重層的な表現がなされている。内面には横ナデ整形の痕跡が認められる。

44 は新寛永通宝文銭である。型式は不明である。

45 ～ 47 は金属製品である。銅合金製。45 はキセルの吸口である。小振り。46 は径 1.2cm の玉。47 は皆折釘。断面正方形の角釘の上部を直角に曲げ頭を作っている釘。長さ 5 寸。

48 ～ 51 は石製品である。砥石である。48 は流紋岩。表面、裏面を使用している。49、50 は流紋岩。51 は流紋岩（トラジマ・スフェルライト）。

SP80（Ⅲ -71 図、Ⅳ -48 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器灰釉碗で TC-1-c に分類される。器高は低くなり、腰が張っている。

SK86（Ⅲ -27 図、Ⅳ -48、49 図）

1 は瀬戸・美濃系磁器。口縁部が外反する端反碗で JC-1-d に分類される。見込み二重圏線、中央花文。口縁部帯文。

2 ～ 12 は陶器である。2 は瀬戸・美濃系陶器。太白手皿で輪高台。見込みに呉須による絵付けが施されている。TC-2-h に分類される。同様の絵付けで高台が蛇ノ目高台のものもある。3 ～ 12 は瀬戸・美濃系灰釉瓶である。3 ～ 7 は底部釉つけ掛けの二合半徳利で TC-10-c に分類される。肩が張り頸部は短い。口縁は折り返し口縁。胴部には点刻の釘書きが施されている。3、6、7 は「一」「△」。5 は「天」「内」のように観えるが類例もなく不明。8 ～ 10 は五合徳利で TC-10-d に分類される。8 は頸部欠損。二次加工されている。点刻の釘書きは「∧」「川」、裏側は「ツ」？。9 は「高サキ」。10 は「一」「△」、裏側は「ツ」？ 11、12 は一升徳利で TC-10-e に分類される。12 の点刻の釘書きは「一」「△」、裏側は「ツ」？。

13、14 は土器である。13 はかわらけで、器壁はやや内湾しており、底裏に左回転糸切り痕がみられる。DZ-2-b に分類される。内面立ち上がり際に圏線がみられ、底裏には溝状の筋がみられる。胎土は燈色。いわゆる江戸式である。口縁部にスス付着。14 は瓦質植木鉢。DZ-21-b に分類される。東大編年Ⅷ a 期（1800 年代～ 1810 年代）以降に認められる。

SK87（Ⅲ -28 図、Ⅳ -49、50 図）

1、2 は磁器である。1 は瀬戸・美濃系。口縁部が外反する端反碗で JC-1-d に分類される。見込み圏線、中央に文様あり。外面コウモリ文。2 は肥前系。染付。体部が丸形の坏で JB-6-a に分類される。高台がやや高い。外面には福寿草が描かれている。高台には鋸歯文が巡る。

3 ～ 6 は瀬戸･美濃系陶器である。3 は口縁部は外反、内面は白化粧。外面は白土と鉄で折枝梅花文が絵付けされた碗で TC-1-z に分類される。小振り。折枝梅花文の枝部分はほとんど省略されて描かれていない。4 は太白手皿で輪高台。見込みに呉須による絵付けが施されている。TC-2-h に分類される。同様の絵付けで高台が蛇ノ目高台のものもある。5 は燗徳利で TC-4 に分類される。外面を縦方向に削って薄く整形している。底部脇面取り。6 は合子で TC-18 に分類される。大振り。7 は白土染付土瓶の蓋である。8 ～ 11 は瀬戸・美濃系陶器灰釉瓶である。8 はつけ掛けの二合半徳利で TC-10-c に分類される。肩が張り頸部は短い。口縁は折り返し口縁。胴部には点刻の釘書きが施されている。「一」「△」。9、10 は五合徳利で TC-10-d に分類される。肩が張り頸部は短い。胴部には点刻の釘書きが施されている。「一」「△」。裏側は「ツ」？。11 は一升徳利で TC-10-e に分類される。頸部欠損。二次加工されている。

12 ～ 14 は土器である。12 は土師質の鉢。DZ-5 に分類される。13 は香炉・火入れで DZ-9 に分類される。花の陰刻文の中には赤色が残っているが、横方向の糸目

の中には赤色が観られない。花の陰刻文を入れてからベンガラなどの赤色顔料で磨きを掛けている。おそらくその後に横方向の糸目文様を入れている。底面には小槌の中に「や」の文字の入る刻印が押されている。産地は特定できていない。口唇部敲打痕。内面スス付着。 14 は硬質瓦質丸火鉢で DZ-31-d に分類される。外面には回転工具による押文様が施される。細かい縦筋文。1 脚残存。

SK92（Ⅲ -29 図、Ⅳ -50 ～ 53 図）

1 ～ 11 は磁器である。1 ～ 10 は瀬戸･美濃系である。1 ～ 5 は口縁部が外反する端反碗で JC-1-d に分類される。口径が 11cm 前後の大振りのものは徐々に減少していくが、本遺構には大振りのものはない。1、2 は内外面仙芝祝寿文。3､4 は内面の帯文様は墨弾きによる文様。5 は焼成不良で釉が均一ではない。内面の帯文様はなくなっている。3 は銘有り。6、7 は腰の張る体部が直立する小振りの碗で JC-1-e に分類される。8 は器厚が極めて薄い坏で JC-6-d に分類される。外面は無文様。内面は上絵。鉄、金。口唇部は金。9 は蛇ノ目凹形高台皿で JC-2-a に分類される。10 は燗徳利で JC-4 に分類される。非常に薄手である。11 は肥前系。体部が丸形を呈する蓋物で JB-13-a に分類される。焼継がされ、底部中央に焼継印が入る。

12 ～ 29 は陶器である。12 ～ 14 は碗である。12 は瀬戸・美濃系灰釉碗で TC-1-c に分類される。13 は京都・信楽系杉形碗で外面に若松文が描かれている。TD-1-d に分類される。若杉文はかなり省略されている。14 は TZ-1 に分類される。軟質施釉陶。内外面ともに横方向の削りが入る。胎土は暗褐色土。白色粒子を多く含む。高台脇には高台を削り出す際の工具痕が多く残る。薄手。15 は柿釉が施釉された瀬戸・美濃系油皿で TC-2-o に分類される。内面には直重ね痕が残る。16 ～ 21 は瀬戸・美濃系灰釉瓶である。16、17 は二合半徳利で TC-10-c に分類される。釘書きが施されている。点刻。16 は「久〇」裏面も同様の「久〇」。18 は五合徳利で TC-10-d に分類される。釘書きが施されている。点刻。おそらく「一」「△」。19 ～ 21 は一升徳利で TC-10-e に分類される。釘書きが施されている。点刻。19 は「久〇」。裏面も同様の「久〇」。20 は「入山」「三」。21 は「一」「△」。また、肩上部で二次加工されており、容器として二次利用されたのであろう。22 は柿釉が施釉された瀬戸・美濃系備前写しの瓶。TC-10-g に分類される。胴部に凹みを有するいわゆる「ぺこかん」徳利である。23 は瀬戸･美濃系丸碗形片口鉢。TC-23-b に分類される。灰釉。24 は京都・信楽系油受け皿で TD-40-b に分類される。灰釉。25 は瀬戸･美濃系油受け皿。TC-40-c に分類される。錆釉。26 は灰釉土瓶で TZ-34-g に分類される。茶漉し穴は 3 箇所。底部には炭化物が付着している。3 脚。27 は鮫釉の土瓶で TZ-34-f に分類される。茶漉し穴は 2 箇所。底部には層状の炭化物が付着している。28 は灰釉土瓶の蓋である。29 は灰釉行平鍋の蓋である。

30 ～ 35 は土器である。30、31 は土師質植木鉢で DZ-21-a に分類される。口縁部はやや外反している。32、33 は器形は近いが、32 は土師質、33 は瓦質である。底部の穿孔は 32 は二次穿孔であるが、33 は一次穿孔である。口径は 13.7cm、12.3cm で中形の植木鉢に分類される。34 は土師質丸火鉢で DZ-31-a に分類される。小振り。3 脚。35 は塩壺の蓋で DZ-00-d に分類される。

36、37 は瓦である。36 は軒桟瓦である。軒丸部のみ残存している。瓦当文様は巴文である。他の軒丸瓦、軒桟瓦資料の巴文と比べ、巴の尾が長い特徴的な資料である。37 は軒平瓦である。瓦当部は全形を保つが平部のほとんどを欠損している。瓦当文様は「江戸式」に分類され、加藤氏の分類うちⅠ Aa に該当する。

38 は金属製品である。十能の把手か。金属に木部がはまっている。

SK108（Ⅲ -30 図、Ⅳ -53 図）

1、2 は肥前系染付磁器である。1 は JB-1 に分類される。大振りな碗である。底部欠損。2 は蓋である。圏線が 1 条巡る。釦状の摘まみが付く。

3 は肥前系陶器。TB-2 に分類される。鉄絵草花文。見込みには全面に灰降りがみられる。

4 はかわらけである。DZ-2-a に分類される。見込みには凹凸が観られ、体部立ち上がり際が滑らかである。いわゆる江戸式と呼ばれるかわらけの前段階に位置するかわらけである。

5 は古寛永通宝で、Ⅰ a 期に属する仙台正永型と考えられる。

6 ～ 8 は金属製品である。銅合金。6 は座金。7 は金具。8 は把手。

9 は火打ち石である。脈石英。使用痕が残る。10 は黒碁石。頁岩。径 2.1cm。

SK109（Ⅲ -31 図、Ⅳ -53 図）

1 は肥前系染付磁器坏。口縁部はわずかに外反している。外面は区画に分かれ文様が描かれている。

2 は肥前系陶器碗。大振りのいわゆる呉器手碗で TB-1-a に分類される。

3は土器。瓦燈でDZ-45に分類される。蓋部のみで縦方向のスリットが4箇所認められる。

SX119（Ⅲ-80図、Ⅳ-54図）

1は瀬戸・美濃系陶器灰釉丸皿で、見込みにはピン痕が残る。TC-2-aに分類される。ピン痕は1箇所のみ残存。17世紀前半に多く認められる。

SK121（Ⅲ-32図、Ⅳ-44、54図）

1は肥前系染付磁器。蛇ノ目凹形高台で高台高が高い皿。JB-2-iに分類される。見込みは楼閣山水文の一枚絵。体部は輪花に成形されている。

2～8は陶器である。2～7は瀬戸・美濃系。2～4は灰釉丸碗でTC-1-cに分類される。4は口縁部がわずかに内側に入る。5は外面に鉄で柳文が描かれた灰釉碗でTC-1-gに分類される。体部は「ハ」の字状に開く。6は袴腰の鉄釉香炉でTC-9-fに分類される。脚は2箇所残存。底部脇には溶着痕が付く。7は二合半灰釉徳利で底部釉つけ掛け。TC-10-cに分類される。8は堺系擂鉢でTL-29に分類される。擂目は7条1単位で施されている。見込みはあまり残存していないが、すり減ってつるつるになっている。口縁断面は長方形である。口は幅7cmほど口縁部を内側から窪ませて作られている。

9、10は人形・玩具である。9は獅子頭でDQ_1303_M2eに分類される。型成形で無釉、底部に穿孔がある。内面は指状に凹み、指紋が残る。10は碁石状製品でDQ_4004_Hに分類される。胎土は橙色で掌痕がみられる。

11～13は軒桟瓦である。11は軒丸部と軒平部の一部を除き欠損している。軒丸部瓦当文様は巴文を呈する。12は軒平部の中央付近から左側、軒丸部、筒部のほとんどを欠損する。軒平部瓦当文様は「江戸式」に分類され、加藤氏の分類のうちⅢKgに該当する。13は軒平部の中央付近から左側、軒丸部、筒部のほとんどを欠損する。軒平部瓦当文様は「江戸式」に分類され、加藤氏の分類のうちⅠKgに該当する。

SU140（Ⅲ-74図、Ⅳ-55図）

1、2は肥前系染付磁器である。1は高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す碗でJB-1-uに分類される。コンニャク印判。2は絵や作りが粗雑な皿でJB-2-gに分類される。見込み中央コンニャク印判五弁花。扇面文の構成と同じであるが、扇が花になっている。

3は肥前系陶器。大振りの呉器手碗でTB-1-aに分類される。口縁部欠損。

4～6は土器である。4はかわらけで、器壁はやや内湾しており底裏に左回転糸切り痕がみられる。DZ-2-bに分類される。内面立ち上がり際に圏線がみられ、底裏には溝状の筋がみられる。胎土は燈色。いわゆる江戸式である。口縁部にはススが付着している。5は土師質火消し壺。DZ-31-iに分類される。口縁部が内湾、比厚している。器高は高い。胴部上半に対になる耳が付く。1箇所残存。体部内面指頭圧痕あり。脚はやや高めで3脚付く。本遺跡の他地点からは口縁部の形や耳の形がやや異なるが類似のものが出土している。医学部附属病院中央診療棟地点F33-3（東大編年Ⅴa期）、御殿下記念館地点678号遺構（東大編年Ⅲa期）、医学部附属病院入院棟A地点SK2965（東大編年Ⅲ期）などである。本遺構を含め17世紀後半から18世紀初頭にかけて認めれる。6は凹形、無印の塩壺の蓋である。DZ-00-cに分類される。胎土は黄燈色。内側布目痕あり。

7は石製品。砥石である。頁岩。側面と裏面の5面に成形時の工具痕の痕が残る。小振り。

SK142（Ⅲ-33図、Ⅳ-55、56図）

1～10は陶器である。1は京都・信楽系陶器である。灰釉。櫛目のない油皿でTD-2-bに分類される。見込みにはピン痕が3箇所みられる。口縁部外面にはスス付着。2は壺である。TZ-15に分類される。肩から下に灰黄褐色の化粧釉を掛けている。この化粧によって表面にざらつきを出している。表面の釉は部分的に青白く発色している。碁笥底状の高台に3箇所抉りが入っている。3～10は瀬戸・美濃系灰釉瓶である。3～6はつけ掛けの二合半徳利でTC-10-cに分類される。肩が張り頸部は短い。口縁は折り返し口縁。胴部には点刻の釘書きが施されている。3、5は「高サキ」。4は「一」「△」。7は五合徳利でTC-10-dに分類される。肩が張り頸部は短い。胴部には点刻の釘書きが施されている。「一」「△」。8、9は一升徳利でTC-10-eに分類される。胴部には点刻の釘書きが施されている。8は頸部欠損。二次加工されている。釘書きは「○」の中に「福」。9は二次加工で胴部に四角い窓が開けられている。内面には使用痕は観られないため、どのような使われ方をしたのかは不明であるが、火もらいなどの用途が想定される。胴部には点刻の釘書きが施されている。「一」「△」。右上にも点刻されている。「ツ」。この徳利は製作時に底部に穴が空いてしまい外側から粘土を貼り付け補修した痕が残る。10は柿釉の施された備前写しの瓶でTC-10-gに分類される。胴部に凹みのあるいわゆる「ぺこかん」徳利である。小振り。

11 は人形・玩具。碁石状土製品で DQ_4004_H に分類される。胎土は橙色で指紋や掌痕がみられる。

12 は桟瓦である。左角部を残し欠損している。平部切込の長さは 28mm であり、「江戸式」桟瓦の規格と一致する(石井 2008：5)。中央から前端部付近にかけ、斜めに炭化物が付着しており、その周囲が黒色化している。

SK143（Ⅲ -34 図、Ⅳ -56 ～ 58 図）

1、2 は瀬戸・美濃系磁器。1 は口縁部が外反している端反碗で JC-1-d に分類される。2 は胎土はやや粘りけのあるガラス質でいわゆる関西系と言われてる一群に属すると思われる。JC に分類される。口唇部に立ち上がりが観られ、懐石道具の一種で盃を載せる盃台であろう。本来は木製であった。陶磁器の盃台は様々な意匠を凝らしたものが多い。口縁部は輪花に成形され、体部には 5 箇所凹みがみられる。底部は渦巻き高台になっている。刻印あり。

3 は高台の高い丸碗形の坏で TZ-6 に分類される。高台脇が面取りされている。4 ～ 6 は瀬戸・美濃系灰釉瓶である。4、5 はつけ掛けの二合半徳利で TC-10-c に分類される。肩が張り頸部は短い。口縁は折り返し口縁。胴部には点刻の釘書きが施されている。「一」「△」。6 は五合徳利で TC-10-d に分類される。肩が張り頸部は短い。胴部には点刻の釘書きが施されている。「一」「△」。裏側は「ツ」。7 ～ 11 は急須で TZ-16 に分類される。7、8 は灰釉。白土鉄絵。胴部は腰と肩の張る箱形。茶漉し穴 6 箇所。9 は青緑釉。胴部は算盤玉形。握り手はラッパ状。茶漉し穴 2 箇所。10、11 は灰釉流し掛け。胴部は丸く、円盤状の貼り付けが 2 箇所。握り手はラッパ状。茶漉し穴 3 箇所。つまみの周りにのみ灰釉が掛けられる。釉の周辺は赤褐色に変色している。12 は土瓶である。灰釉。白土鉄絵。TZ-34 に分類される。腰張り形。鉄砲口。13 は行平鍋で TZ-42-c に分類される。丸形。胴部にはカンナ痕が巡る、カンナ痕の上には薄く鉄釉が掛けられ、口と把手部分のみ厚く 2 度掛けされている。内面施釉。2 度目の釉が掛けられた後、逆さにおいて乾燥させたためか口縁部の折返し部分に釉が溜まっている。中空の団子状の把手が付けられている。14 は急須の蓋である。焼締まった胎土で器壁は薄い。無釉。裏面に刻印「龍山」。15 は行平鍋の蓋である。平たい笠形。カンナ痕が巡る。イッチン掛けで秋草文。内面のみ施釉。中形。

16、17 は土器。16 は透明釉が施釉された皿で DZ-2-h に分類される。中央二次穿孔。17 はロクロ成形の小形の鉢で DZ-5 に分類される。口唇部は外反し薄くなっている。内外面に布目と思われる圧痕が観られる。

18 ～ 20 は瓦である。18 は軒丸瓦である。瓦当部左下のみ残存している。瓦当文様は梅鉢文と推察される。19 は鬼瓦である。輪郭は三角形を呈する。各辺は波うち、丸い谷と尖った山を形成する左右両端は反り上がっている。中央上部に平坦な珠文が配置され、そこから斜め上方向に一対の花弁状文様、斜め下方向に唐草文様、下方向に先端の尖る細長い花弁状の文様が延びる。裏には筒部がはがれた痕跡が認められ、接合部にはカキヤブリが施されている。20 は桟瓦である。前端部左角のみ残存している。平部切込の長さは 25mm を測り、これは「江戸式」桟瓦の規格とほぼ一致する(石井 2008：5)。

21 は石製品。硯である。粘板岩。陸部欠損。

22 はガラス瓶の底部。ヒールと呼ばれる部分である。緑色透明。全面に気泡が入る。縁は欠損している。

SK153（Ⅲ -36 図、Ⅳ -58 図）

1 ～ 3 は瀬戸・美濃系陶器皿である。1 は鍔皿で TC-2 に分類される。見込みには渦巻き状の鉄絵と重ね焼きの痕が残る。高台は付け高台。2 は長石釉が施された丸皿で TC-2-c に分類される。高台は高台脇がわずかに削られて作り出されている。底部には目跡が 2 箇所残る。3 は灰釉皿。TC-2-a に分類される。高台は碁笥底。

4、5 は土器である。かわらけである。4 は口縁部がやや外反し、口唇部は「コ」の字状になっている。胎土がにぶい燈のかわらけで DZ-2-a に分類される。見込みは渦巻き状に整形されている。底部糸切り痕は右回転である。口縁部には灯芯痕が認められる。5 は器壁はやや内湾しており底裏に糸切り痕があるがはっきりしない。胎土が浅黄橙色のかわらけで DZ-2-k に分類される。胎土が粗く、赤色粒子、黒色粒子、白色粒子を含む。厚手、小振り。見込みには凹凸がある。灯芯痕が認めれる。東上野から北武蔵北部に分布するかわらけの胎土に近い。

SK158（Ⅲ -38 図、Ⅳ -59 ～ 62 図）

多量の被熱していない瓦が廃棄されている遺構である。コンテナで 44 箱取り上げられている。

1 ～ 3 は瀬戸・美濃系陶器である。1、2 は碗である。1 はいわゆる拳骨茶碗で TC-1-p に分類される。漆黒釉に長石釉を散らし体部数箇所に凹みを有する。幅広高台。畳付けに刻印の押されているものが多いが本製品には認められない。2 は灰釉丸碗で TC-1-c に分類される。小振りで体部はやや内湾している。3 はつけ掛けの二合半徳利で TC-10-c に分類される。肩が張り頸部は短い。口縁は折り返し口縁。胴部には点刻の釘書きが施されている。「久」「上」か。底部欠損。

4 ～ 6 は土器である。4 は鉛釉が施釉された皿で DZ-2-h に分類される。口縁部にはススが付着している。5、6 は土師質丸火鉢で、DZ-31-a に分類される。脚部は 3 箇所。

7 は人形・玩具の人物で DQ_1100_Hf に分類される。手、足先、頭部を欠損している。手は肩部からのひねり出し、差首の一部が胴部に残存している。意匠は前面のみで、下部には掌握痕が残る。上半身は衣服を付けておらず、胴部に帯状の紐を貼りつけている。力士か。首は差し込み式。帯は貼り付けられている。

8 ～ 33 は瓦である。8、9 は軒丸瓦である。瓦当文様は丸に剣梅鉢文である。8 は筒部の玉縁側を欠損しており、全長は不明である。筒部凹面には横方向のコビキ痕と、コビキ痕を切る布目が転写された痕跡が観られる。右端よりは布目が途切れ、型の地肌と思しき痕跡が認められる。9 の筒部は一部しか残存していないが、端面を意図的に打ち欠いており、残存部の全面に及ぶ。何らかの理由で他の軒丸瓦と規格が合わず、消費の場で加工されたものと推察される。筒部凹面には横方向のコビキ痕と、コビキ痕を切る布目が転写された痕跡が観られる。右端よりは布目が途切れ、型の地肌と思しき痕跡が認められる。10 は軒平瓦である。狭端部を欠損しており、全長は不明である。瓦当文様は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅠ Bd に該当する。凹面、凸面ともに横ナデ調整が施される。凹面左端に縦に細長く、また周縁左端及び上面に 3 箇所、灰色に変色した部位が確認される。11 は軒螻羽瓦である。螻羽瓦とは屋根の端に並べて葺く瓦で、袖瓦とも呼ばれる。そのうち瓦当部を有し軒先に吹かれるものを軒螻羽瓦とした。平瓦状の筒部の右側ないし左側に板状の袖部が付いた形状を呈する。この資料は左袖であり、後端部まで残存しており、全形を窺うことができる。但し袖部分は欠損している。瓦当文様は「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅣ Gi に該当する。12 ～ 20 は軒桟瓦である。12 は瓦当部は完形だが筒部の後端側ほとんどを欠損し、全形は不明である。後端部寄りに釘穴が設けられ、穴付近には赤い錆が付着する。鉄釘を用いて屋根に固定したことを示していると推察される。瓦当文様は、軒丸部が巴文、軒平部が「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅠ Fj に該当する。13 の瓦当部は完形だが、筒部は桟部切込の一部を残し欠損している。瓦当文様は軒丸部が巴文、軒平部は「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅠ Ki に該当する。14 は桟部切込を意図的に打ち欠いて深くしている。加工によって切り込みは 42mm 延び、計 122mm の長さとなる。また平部左角も意図的に打ち欠いて、底辺 38mm、高さ 139mm の直角三角形を切り取っている。こうした作業は何れも屋根に葺く際に、他の瓦と規格を合わせるために消費の場で行われたものだと推察される。後端部から 40mm 離れたところに釘孔が設けられており、屋根に固定するためのものと推察される。瓦当文様は、軒丸部が巴文、軒平部は「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅡ Kj に該当する。15 は瓦当部は完形だが筒部の右半分を欠損し、全形は不明である。瓦当文様は、軒丸部が巴文、軒平部が「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅢ Ki に該当する。16 は瓦当部は軒平部の左半分を欠損している。筒部はほぼ全てを欠損しており、全形は不明である。瓦当文様は、軒丸部が連珠巴文であり、10 個の珠文が巡る。軒平部は「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅢ Kj に該当する。17 は後端部寄りの右側を大きく欠損するが、後端部の一部は残存しており、全形を窺うことができる資料である。後端部寄りに釘穴を設ける。瓦当文様は、軒丸部が巴文、軒平部が「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅣ Ga に該当する。18 は瓦当部は完形だが後端部を欠損し、全形は不明である。瓦当文様は、軒丸部が巴文、軒平部が「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅣ Ga に該当する。軒平部左端に「〇に源」刻印が押されるが、天地逆になっている。また桟部切込部を意図的に打ち割り、約 40mm 深さを増している。19 は瓦当部は軒平部の左半分を欠損し、筒部は後端側半分を欠損しており、全形は不明である。瓦当文様は、軒丸部が巴文で、他の軒桟瓦軒丸部の巴文より大きく、また巴の周りを一条の圏線が巡る。軒平部は「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えば Ga に該当する。20 は筒部は後端側半分を欠損しており、全形は不明である。瓦当文様は、軒丸部が巴文、軒平部は「江戸式・大坂式折衷文様」である。中心飾りの中央部文様は瓢箪形を呈する点、その下に小さな点珠が配置される点、左右に唐草が、左右端には一対の子葉が配置される点は「江戸式」に認められる特徴である。加藤晃氏の分類に従えば、中心飾りはⅢやⅣ、唐草は F、子葉は i に該当する。しかし中心飾りの左右脇の飾りは先端が二股に分かれる点、また点珠から横へ小さな子葉が配置される点、唐草が二対ではなく一対のみの点は、「大坂式」に認められる特徴だといえる。21 は軒桟瓦、または軒平瓦である。筒部は後端側ほとんどを欠損しており、全形は不明である。また右側を欠損しているため、軒桟瓦か軒平瓦か検討できない。瓦当文様は軒平部のみで「江戸式・大坂式折衷文様」である。中心飾りの中央部文様は上下端の尖る楕円形を呈する点、その下に小さな点珠が配置される点、左右に唐草が、左

右端には一対の子葉が配置される点は「江戸式」に認められる特徴である。加藤晃氏の分類に従えば、中心飾りはⅢ1やⅢ2、唐草はF、子葉はiに該当する。しかし中心飾りの左右脇の飾りは先端が二股に分かれる点、また点珠から横へ小さな子葉が配置される点、唐草が二対ではなく一対のみの点は、「大坂式」に認められる特徴だといえる。22～24は丸瓦である。22は完形資料である。凸面側には玉縁の段から筒部前端付近にかけ、縦に長い灰色の変色部分が左右に認められる。筒部凹面には横方向のコビキ痕と、コビキ痕を切る布目が転写された痕跡が観られ、さらに布目を切って縦方向の棒状工具によるナデと、玉縁裏側に径30mmほどの凹みが観られる。布目は繊維が太い。また右端寄りは布目が途切れ、型の地肌と思しき痕跡が認められる。右端にはまた布目が観られる。凸面部の中央からやや玉縁寄りに「丸に二つ引き」の刻印が押される。23は前端部右角を欠損するがほぼ全形を窺える資料である。凸面側には玉縁の段付近に灰色に変色した部分が左右一対認められる。筒部凹面には横方向のコビキ痕と、コビキ痕を切る布目の転写が観られ、さらに布目を切って縦方向の棒状工具によるナデと、玉縁裏側に径30mmほどの凹みが観られる。ヘラナデは右側に特に集中して観られる。布目は繊維が太い。凸面部の中央からやや玉縁寄りに「丸に二つ引き」の刻印が押される。24は玉縁部を欠損するため全形を窺うことはできないが、他の丸瓦資料より全長は長い。凸面側には玉縁寄りから筒部前端付近にかけ、縦に長い灰色の変色部分が左右に認められる。筒部凹面には横方向のコビキ痕と、コビキ痕を切る布目の転写が観られる。右端は布目が途切れ、型の転写が観られる。縦方向の棒状工具によるナデは認められない。布目は繊維が太い。25、27、29は桟瓦である。但し25は桟部と前端部右角を意図的に打ち欠いた加工品で、平瓦として使用された可能性がある。前端部に「〇に升」の刻印が押される。また上面側左端に一部灰色に変色した部分が観られる。27は、ほぼ全形が窺える資料である。上面側は一部変色しており、葺き足を示唆する風化の痕跡だと推察される。また前端部右側が一部欠けているが、あるいは葺くための意図的な加工である可能性もある。前端部に「やまに庄」の刻印が押される。29は全形の窺える他の桟瓦資料と比べ大形だが、幅は他とほぼ等しく、細長いというべきだろう。後端側に桟部切込は無い。前端部を欠損するため、平部切込の有無は判然としない。後端部より中央付近に釘穴が設けられ、銅線が通されている。金子智氏から、塀に用いられる桟瓦であろうとのご教示を受けた。26、28は平瓦である。ほぼ全形が窺える資料である。広端部左角は一部欠けているが、約30mm（一寸）の深さであることから意図的に打ち割った可能性がある。狭端部に「〇に庄」の刻印が押される。28は完形資料である。凸面側は横ナデ調整されている。凹面側狭端部付近に風化変色した部分が観られ、屋根上に露出していた範囲だと推察される。また凹面側の後端部左角から左側面に沿って浅い沈線が延びる。狭端部に「太」の刻印が押される。30は螻羽瓦（袖瓦）である。屋根の端に並べて葺く瓦である。平瓦の右側ないし左側に板状の袖部が付いた形状を呈する。SK158からは多く出土しており、残りのよいものを図示した。前端、右半分を欠損するため全長、全幅は不明である。袖部は全形が確認できる。袖部が左側に付いていることから、棟から見下ろしたとき屋根の左側に用いられる螻羽瓦であることが分かる。袖部は前端側の辺が後端側より長く、平部に垂直に取り付いて下がる。全体に横ナデ調整が施されている。なお後端面には、おはじき状の粘土塊が付着している。こうした粘土塊が付着する例は、平瓦でもしばしば確認される。31、32は熨斗瓦である。31は前端部左角のみの破片資料で全形を窺うことはできない。文様は「江戸式」に分類される。加藤晃氏の分類のうち、15ないし16類に該当する。側面に黒灰色の表面色が縞状に抜け、内面色の灰色が観える変色部分が確認される。窯で焼成した際に他の瓦と重なり合っていた部分だと推察される。変色部分の幅は10mm前後で、熨斗瓦より薄手の製品と重ね焼きされたものと推察される。32は中央よりやや右側のみの破片資料で全形を窺うことはできない。文様は「江戸式」に分類される。加藤晃氏の分類のうち、15ないし16類に該当する。33は鬼瓦である。波文様を表現している。確認されるのは図示した1点のみだが、この資料は組み合わせ式の鬼瓦だと推察され、他にも鬼瓦の部品が存在していたと推察される。向かって左側は文様が途切れ、横ナデが施された滑らかな曲面になっている。他の部品と組み合わせるために整形された接合面だと推察される。この面には長さ61mm、幅13mmの細長い孔が設けられている。鬼瓦の他の部品と組み合わせるためのものだと推察されるが、具体的な用途は不明である。また上面と下面には直径20mm程の丸い孔が設けられている。これらは他の瓦と組み合わせる、あるいは屋根に固定するために設けられたものと推察される。裏面端部には漆喰が付着している。孔を用いるだけでなく、屋根と接する面を漆喰で埋めて固定されていたと推察される。内側は中空になっており、横ナデ整形が施される。また内面端部よりには指頭押捺痕が2列認められる。

34 は古寛永通宝で、「寶」貝足接合部分が大きく後ろに後退していることから、小字建仁寺型に分類されると考えられる。

35 は金属製品である。銅合金。キセルの雁首である。継ぎ目の蝋付けは左側である。

36、37 は石製品、砥石である。頁岩。36 の右側面は表裏面から溝状に彫り込んだ後に割って小さく加工した痕が残る。37 は 5 面に成形時の工具痕が残る。使用面はやや斜めにすり減っている。

SE163（Ⅲ -9 図、Ⅳ -62 図）

1 はかわらけである。器壁はやや内湾しており底裏に糸切り痕があるがはっきりしない。胎土が浅黄橙色のかわらけで DZ-2-k に分類される。胎土は粗く、赤色粒子、黒色粒子、白色粒子を含む。厚手、小振り。見込みには凹凸がある。全体的に歪んでいる。東上野から北武蔵北部に分布するかわらけの胎土に近い。

SK168（Ⅲ -37 図、Ⅳ -63 図）

1 ～ 3 は肥前系磁器である。1 は鉢である。JB-5 に分類される。口縁部がわずかに外反している。おそらく上絵があったと思われる。腰折れ。二次焼成を受け、表面の釉がわずかに溶けている。2 は丸碗形の坏である JB-6-a に分類している。見込みは二重圏線内手描き五弁花文。非常に丁寧で、輪郭を描き中を濃みで埋めている。高台内は二重圏線内「大明嘉靖年製」銘。3 は瓶である。二次焼成を受け、釉がわずかに溶けている。JB-10 に分類される。

4 は京都・信楽系陶器碗である。平椀で TD-1-h に分類される。灰釉。見込みに鉄絵。体部に凹みを持つ。高台内刻印「清閑寺」。5 は肥前系陶器碗で TB-1 に分類される。灰釉。見込みに鉄絵。口唇部口錆。

6 は土器である。火もらいなどの頭部か。DZ に分類される。内面は中空で、中央部に絞ったような皺が入っている。おそらくこの部分のみを別に作成し、後付けした物であろう。4 本 1 単位の櫛状のもので頭頂部から下に向かって文様を入れている。

7 ～ 12 は金属製品である。7 ～ 11 は銅合金。7 はキセルの吸口。11 は円筒形で棒状の木製品などにはめられていた物であろう。12 は鉄。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。小形。4cm。

SK170（Ⅲ -39 図、Ⅳ -63 ～ 66 図）

1、2 は土器である。1 は丸底のほうろくである。DZ-47-a に分類される。団子状の取っ手が付く。胎土は橙色で江戸在地系と思われる。2 は塩壺の底部で、DZ-51 に分類される。輪積成形。

3 は石製品である。砥石である。頁岩。

4 ～ 76 は溶着した状態で検出されており、緡銭と考えられる。緡銭の綴り順の表、裏また銭種には規則性は見いだせない。観察表には表裏、綴り順を記載した。線種の判別には「古寛永銭志(改訂版)」(増尾 1976)、「新寛永通宝図会」(工藤 1998)を参考にした。また様式の画期については川根氏の研究に準じている(川根 2001)。

銭種の構成は古寛永通宝が 10 枚、新寛永通宝文銭が 17 枚、新寛永通宝が 45 枚、渡来銭・模鋳銭が 1 枚である。最も新しい線種はⅢａ期(1697 ～ 1707)と考えられ、Ⅳ期(1714 ～ 1732)以降の銭は含まれていなかった。

4 ～ 13 は古寛永通宝で、4 ～ 10 はⅠａ期に属し 1636 ～ 1640 年の鋳銭、11 ～ 13 はⅠｂ期に属し、1656 ～ 1659 年鋳銭と考えられている。14 ～ 19 はⅡａ期に属する新寛永通宝文銭である。19 には背「文」がわずかであるが遺存している。20 は背面の「文」が確認されておらず「縮字勁文無背型」の可能性が考えられる。21 ～ 29 は銭文の書風が文銭に類似するが、背「文」は鋳られていないことから、宝永期の鋳銭の可能性が指摘されている丸屋銭類と考えられる(工藤 1998)。31 ～ 60 は四ツ宝銭類、61 ～ 68 は旧猿江銭類で、近世遺跡の出土状況からⅢａ期元禄期の鋳銭と考えられる。69 ～ 74 は所謂「マ頭」が鋳られ「不旧手」と称されるものに属する一群である。「不旧手」は川根氏の研究から(川根 2009、2012)、関西方面での出土例が多いことが指摘されている。76 は渡来銭または模鋳銭で宋通元寶で、初鋳年は建隆元年(960)である。

SK171（Ⅲ -40 図、Ⅳ -67、68 図）

本遺構の覆土はほとんどが瓦である。この瓦は安永元年(1772)に消失した「西之御殿」の後始末に伴う焼け瓦と考えられている。陶磁器･土器には被熱は観られない。

1 ～ 4 は瀬戸・美濃系陶器である。1 は灰釉二合半徳利。肩が張り頸部は短い。口縁は折り返し口縁。底部は欠損しているが、器形からつけ掛けで TC-10-c に分類される。胴部には点刻の釘書きが施されている。「久」「イ」か。2 は口縁部欠損。一升の灰釉徳利で TC-10-e に分類される。3 は鉄釉の香炉で TC-9-b に分類される。輪高台。4 は灰釉植木鉢で TC-21 に分類される。底部中央に一次穿孔。高台の 4 箇所にスリットが入る。

5 は土器である。鍔付の硬質瓦質角火鉢で DZ-31-g に分類される。鍔部分は面取りが施され、四隅の角は切り落とされている。

6 ～ 24 は瓦である。6 は軒桟瓦である。筒部の大半を欠損するが、瓦当部はほぼ完形を留める。軒丸部が巴文、軒平部は「江戸式」に分類され、加藤晃氏の分類に従えばⅢ Lg に該当する。全体に褐色を呈し、一部は黒色の部位も観られることから被熱した可能性もある。7 ～ 20 は軒桟瓦ないし軒平瓦である。7 は瓦当部中央付近から右半分と筒部の大半を欠損する。瓦当文様は「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅢ Kg に該当する。全体に褐色を呈することから、被熱した可能性がある。 8 は瓦当部中央付近のみ残存している。瓦当文様は「江戸式」であり、加藤晃氏の分類に従えばⅣ、唐草は L に該当する。子葉は破損のため認められない。全体に褐色を呈することから、被熱した可能性がある。9 は瓦当部中央付近から右半分と筒部の大半を欠損する。瓦当文様は「江戸式」に近いが、中心飾りは中央が輪郭のみの「８」字形をなすもので加藤晃氏の分類には認められない。唐草、子葉は Aa に該当する。全体に褐色を呈し、一部は黒色の部位も観られることから、被熱した可能性がある。10 は瓦当部中央付近のみ残存している。瓦当文様は本地点出土瓦の中で特異なものである。中心飾りは、中央に先端の尖った蕾状の文様が配置され、左右に外反する花弁状の文様が重線で表現される。その下には下、左右に向かう三つのやや縦長の文様が配置される。左右には、「江戸式」における A に該当する唐草が配置される。また瓦当文様だけでなく、周縁が上縁 12mm、下縁 6mm と大きな差がある点も特徴的といえる。色調は灰色だが、一部褐色の部位も観られることから被熱した可能性がある。11 は軒平部左端と筒部の一部のみ残存している。唐草・子葉は加藤晃氏の分類に従えば Fb に該当する。全体に赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。12 は軒平部左側の一部のみ残存している。唐草が長く直線的に延びることから「大坂式」ないし「江戸式・大坂式折衷文様」に該当する可能性があるものの中心飾りが欠損しているため不明である。唐草・子葉は加藤晃氏の分類に従えば Fl に該当する。全体に暗赤色を呈し、被熱した可能性がある。13 は軒平部右端と筒部の一部のみ残存している。唐草・子葉は加藤晃氏の分類に従えば Ga に該当する。灰色を呈し、やや風化しているものの、共伴した他の瓦資料と異なり赤色あるいは黒色に変色した様子は無い。14 は軒平部右側の一部のみ残存している。唐草・子葉は加藤晃氏の分類に従えば Lb に該当する。全体に赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。15 は瓦当部中央付近から右側と、筒部の大半を欠損している。中心飾りの全形は窺えないものの、中心飾り脇の文様から判断すると瓦当文様は「江戸式」であり、唐草・子葉は加藤晃氏の分類に従えば Lj に該当する。全体に赤褐色を呈し、一部は黒色の部位も観られることから被熱した可能性がある。16 は瓦当部中央付近から右側と、筒部の大半を欠損している。瓦当文様には笵傷の転写と思われる横方向に延びる凸線が何条も確認され、木笵を用いたものと推察される。中心飾りの全形は窺えないものの、中心飾り脇の文様から判断すると瓦当文様は「江戸式」であり、唐草・子葉は加藤晃氏の分類に従えば Lj に該当する。全体に赤褐色を呈し、一部は黒色の部位も観られることから被熱した可能性がある。17 は軒平部左端と筒部の一部のみ残存している。瓦当文様は子葉のみ確認され、加藤晃氏の分類に従えば a に該当する。全体に赤褐色、一部黒色を呈し、被熱した可能性がある。18 は軒平部左端と筒部の一部のみ残存している。瓦当文様は子葉のみ確認され、加藤晃氏の分類に従えば a に該当する。全体に赤褐色、一部黒色を呈し、被熱した可能性がある。19 は瓦当部右半分と左端、筒部の大半を欠損する。瓦当文様は「江戸式」に近いが、中心飾りは上下二つに分かれ、下の珠文から唐草が延びるもので加藤晃氏の分類には認めれない。全体に黒褐色を呈する。20 は瓦当部中央付近右寄りのみ残存している。瓦当文様は「江戸式」に近いが、中心飾りの左右脇が唐草のような形態をなすもので加藤晃氏の分類には認められない。唐草、子葉は欠損している。全体に褐色を呈し、一部は黒色の部位も観られることから、被熱した可能性がある。21 は丸瓦である。前端部側、全形のおよそ半分を欠損する。凸面左側に縦に延びる灰色の変色部分があり、重ね焼きの痕跡と推察される。また右側面の一部には鉄錆が付着している。凹面には横方向のコビキ痕、布目が転写された痕跡、棒状工具で押し引いた痕跡が順に重なり合って確認される。玉縁は短く 20mm を測る。黒灰色を呈し、共伴した他の瓦資料と異なり赤色あるいは黒色に変色した様子は無い。22 は桟瓦である。前端部側、後端部左角を欠損している。表面は横ナデ、裏面は縦ナデ整形が施される。桟部切り込みは 82mm を測る。全体的に赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。23、24 は熨斗瓦である。23 は中央付近から右側を欠損している。文様は加藤晃氏の分類に従えば 18 類に該当するが、中心飾りが欠損しているため細分はできない。全体に赤褐色を呈し、被熱した可能性がある。24 は左右両端を欠損している。文様は加藤晃氏の分類に従えば 18 類 -3 に該当する。全体に赤褐色、一部黒色を呈し、被熱した可能性がある。

25 は古寛永通宝と考えられるが、銭文が不鮮明のため型式は不明である。

26 ～ 33 は金属製品である。鉄。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。

SK190（Ⅲ -41 図、Ⅳ -68、69 図）

1 ～ 4 は陶器である。1、2 は瀬戸・美濃系。1 は灰釉二合半徳利つけ掛けで TC-10-c に分類される。肩が張り頸部は短い。口縁は折り返し口縁。胴部には点刻の釘書きが施されている。「坂」「一」。2 は火鉢で TC-31 に分類される。外面は灰釉、内面は螺旋状に薄く鉄釉が施釉される。2 脚残存。風炉等の可能性もある。3 は京都・信楽系油受け皿。脚無し。灰釉。TD-40-b に分類される。4 は行平鍋の蓋である。内面鉄釉。

5 は土器である。鉛釉。油受け皿で DZ-40-b に分類される。

6 ～ 9 は瓦である。6 は軒丸瓦である。瓦当部は完形、筒部は後端部を欠損する。破損のため正確な計測はできないが、筒部に径約 5mm の釘孔が設けられている。瓦当文様は葵文である。瓦当部と筒部との接合角度が正位置から右回りに 28 度ずれて接合されている。製作時の誤りなのか、あるいは掛瓦（破風に用いる瓦）の可能性もある。7 は丸瓦である。玉縁部を欠損する。凸面側には縦方向のナデ調整が施される。凹面側には横方向のコビキ痕、布目の転写、棒状工具による押し引き痕が順に重なって確認される。左右縁部は平坦に整形される。8 は熨斗瓦である。右端角を欠損するが、ほぼ完形の貴重な資料である。文様は、加藤氏の分類に従えば 18 類 -2 に該当する。9 は熨斗瓦である。文様部中央付近から左半分が欠損している。文様が上下逆に施文されている。文様は「江戸式」に分類され、加藤氏の分類に従えば 20 類に該当する。

10 ～ 12 は金属製品。10 は鉄製。十能。11、12 は銅合金製で調度に付けられていた金具。11 は把手の一部か。

13、14 は石製品である。砥石。13 は粘板岩。仕上げ砥。5 面に成形時の工具痕が残る。表面には放射状に使用痕が残る。14 は頁岩。

SK191（Ⅲ -42 図、Ⅳ -69 図）

1、2 は瀬戸・美濃系陶器である。1 は大平鉢のいわゆる笠原鉢で TC-3-a に分類される。体部は「ハ」の字状に立ち上がっている。2 は鉄で摺絵の施された水注で TC-27-c に分類される。輪高台。

3 ～ 5 は土器である。3 はかわらけで器壁はやや内湾しており底裏に左回転糸切り痕がみられる。DZ-2-b に分類される。内面立ち上がり際に圏線がみられ、底裏には溝状の筋がみられる。胎土は燈色。いわゆる江戸式である。4 は油受け皿で DZ-40-d に分類される。5 は土師質の鉢で DZ-5 に分類される。底部欠損。体部はやや外反している。

6、7 は金属製品である。6 は銅合金製。キセルの吸口。7 は鉄製。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。

SU202（Ⅲ -76 図、Ⅳ -70 図）

1 ～ 3 は陶器。1 は肥前系灰釉碗で TB-1-a に分類される。大振りのいわゆる呉器手碗。口縁部欠損。2 は鉄絵の瀬戸・美濃系灰釉香炉で TC-9 に分類される。口縁部は内湾し、底部は高台内が緩やかに削られている。底部墨書「刀？藤忠」。3 は志戸呂系瓶で TF-10 に分類される。胴部は鉄泥が施され寸胴形。口縁部欠損。

4、5 は瓦。4 は軒丸瓦である。瓦当部上半、筒部を欠損する。瓦当文様は剣梅鉢文である。5 は丸瓦である。筒部には二つの孔が設けられている。孔は左右並行ではなく、真中でくびれる特異な断面形を呈する。筒部の内外両面から穿孔して設けたものと推察される。凹面側には一面に布目の転写と棒状工具による押し引きの痕跡が確認される。

6 は金属製品である。鉄製。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。尖端部欠損。

7、8 は石製品である。砥石。7 は頁岩。右下から左上に向かって擦痕が付く。工具痕が側面 3 箇所につく。8 は珪長岩（沼田砥・トラ砥）。中砥。

SK203（Ⅲ -43 図、Ⅳ -70 図）

1 は新寛永通宝文銭で、正字背文型に比定される。

SK210（Ⅲ -44 図、Ⅳ -70 図）

1 ～ 3 は肥前系磁器である。1 は高台断面の形状が三角形を呈する碗で JB-1-c に分類される。高台内二重圏線。2 は高台断面の形状がシャープな「U」字状で、高台高の低い碗。JB-1-e に分類される。外面に紅葉の文様が描かれ、見込みにも同様の文様が描かれている。高台内銘「太明年製」。3 は丸碗形で口唇部が外反する坏で JB-6-b に分類される。

4、5 は肥前系陶器碗である。4 は外面に主文様の描かれたいわゆる京焼風陶器で TB-1-b に分類される。大振りな丸碗形。5 はいわゆる呉器手碗で TB-1-a に分類される。口径が 10 ～ 11cm の中法量のものである。底部欠損。

6、7 はかわらけである。器壁がやや内湾しており底裏に溝状の筋がみられ、見込みは立ち上がり際に圏線を

持つ。6には口唇部から6mmほどの所に沈線が入る。意識的に入れられた線ではなく、工具などの痕ではないかと考えている。口唇部にはススが付着している。二次焼成を受け、表面が剥落している。DZ-2-bに分類される。底部糸切り痕左回転。

SK211（Ⅲ-44図、Ⅳ-71図）

1は瀬戸・美濃系陶器皿で、見込みに鉄絵蘭竹文が描かれている小皿である。TC-2-jに分類される。見込みには3箇所目跡が残る。高台内にも2箇所目跡が残り1箇所は円錐ピンが残る。

2は新寛永通宝と考えられるが、型式は判断できない。

3は金属製品である。銅合金製。キセルの雁首である。火皿は大振りな碗形。脂返しの湾曲は大きく補強帯を有する。

SK221（Ⅲ-48図、Ⅳ-71図）

1～3は瀬戸・美濃系陶器である。1は長石釉緑釉流し掛け皿。TC-2-cに分類される。付け高台。見込み、高台内目跡あり。2は坏でTC-6に分類される。丸碗形。灰釉。碁笥底。内外面貫入が入る。3は鉄釉瓶でTC-10に分類される。肩が張り、体部外面にはロクロ目が観られる。

4～8は土器である。4はかわらけでDZ-2-aに分類される。胎土は橙色。赤色粒子、黒色粒子、白色粒子を含む。底部糸切り痕がはっきりしている。5は土師質の筒形火鉢でDZ-31-lに分類される。体部にはハケ又は木端状工具により縦方向のナデが施され、その後で横方向のナデが施されている。逆台形の脚が1脚残存している。6～8は底部が平らなほうろくでDZ-47-bに分類される。土師質。底部際は削られて底部の形態が丸平底である。体部外面には指頭圧痕が観られる。外面は黒く煤けている。胎土は6は明褐色、7はにぶい黄橙色、8は橙色。口唇部は6、7は丸みを帯びているが、8は「コ」の字状になっている。底部際は6、7は何度も削って曲面を作り出そうとしている。底面には板目が観られる。8は削りが一定の幅で施されており、ハケ又は木端状工具によるナデが施されている。このナデは体部にもなされており縦方向のナデの後で横方向のナデが施されている。内耳は団子状のものを棒状工具でくり抜いて作られている。6、7は棒状工具が深く入っているが、8はやや浅めに入っている。いずれも内耳を貼り付ける際に強く押さえたためか表面が大きく歪んでいる。6のみが3箇所すべて残存している。2箇所が近い場所にあり、それに対するところに1箇所付けられている。7、8は2箇所残存している。江戸在地系といわれている丸底ほうろくの底部が非常に薄手であるのに対し、丸平底の底部は厚い。6、7と8は形態は似ているがナデの有無などが異なり区別される。それぞれに特徴はあるが、江戸在地系と思われる画一的なほうろくが出現する以前の東関東系のほうろくであろう。5と8はいずれも表面にハケ又は木端状工具によるナデが施されており、特徴的である。

9は金属製品である。鉄製。なんらかの角の部分に当たるものであろう

SE222（Ⅲ-10図、Ⅳ-72図）

1は肥前系磁器青磁碗。底部無釉でJB-1-bに分類される。

2は瀬戸・美濃系陶器灰釉香炉である。TC-9-aに分類される。緑釉流し掛け。逆台形の脚が貼り付けられている。

3はかわらけである。DZ-2-aに分類される。見込み中央が膨らみ、緩やかに立ち上がる。底部糸切りは離れ糸切り。底部と口径の差が小さい。

4、5は金属製品である。4は銅線。5は鉄製。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。

SK255（Ⅲ-49図、Ⅳ-72図）

1～3は土器である。1はかわらけで、DZ-2に分類される。底部墨書。2は底部が丸形を呈するほうろくである。DZ-47-aに分類される。江戸在地系ほうろくである。口縁部が直立し、立ち上がりが高い。底部厚4mm。3は土師質丸火鉢である。DZ-31-aに分類される。敲打痕がみられる。1脚残存。

4、5は瓦である。4は丸瓦である。玉縁部付近のみ残存している。筒部凸面側には縦ナデの痕跡が明瞭に確認される。凹面側には布目が転写された痕跡が全面に確認される。凹面側縁部には縦方向の筋が認められ、ヘラによる整形痕跡と推察される。5は熨斗瓦である。文様部の中心から左側と右端を欠損している。文様は、加藤氏の分類のうち18類に該当する。

6は砥石である。頁岩。

SK265（Ⅲ-50図、Ⅳ-72図）

1は金属製品である。雁首銭と考えられる。

SK267（Ⅲ-51図、Ⅳ-72図）

1は熨斗瓦である。文様部の中央付近右側のみ残存している。文様は「江戸式」に分類され、加藤氏の分類のうち20類に該当する。

SK311（Ⅲ -54 図、Ⅳ -72 図）

1 は銭文が不鮮明であるが、古寛永通宝と考えられる。

SK312（Ⅲ -55 図、Ⅳ -73 図）

1 は瀬戸･美濃系陶器灰釉丸皿で TC-2-a に分類される。見込み、高台内に目跡。

SK375（Ⅲ -59 図、Ⅳ -73 図）

1 は金属製品である。銅合金製の鉢形容器。口唇部はわずかに折り返されている。推定長径は 8.5cm。汐留遺跡Ⅱ（東京都埋蔵文化財センター 2000）では、同様の形態のものが鬢水入れとして記載されている。

SK380（Ⅲ -61 図、Ⅳ -73 図）

1 は肥前系染付磁器坏である。わずかではあるが口縁部が外反しており JB-6-b に分類される。腰折れ。底部無釉。

2 ～ 6 は土器である。2 ～ 5 はかわらけである。2 ～ 4 は DZ-2-a に分類される。見込みには渦巻き状の調整がみられ緩やかに立ち上がる。底部糸切りは離れ糸切り。底部と口径の差が小さい。3 は内面全面にスス付着。外面には全く付着しておらず、特殊な使われ方をしたのであろう。4 は底部に放射状に線刻され、穿孔された痕も見受けられる。用途不明。5 は底部と口径の差が大きい。DZ-2 に分類される。高温を受け、焼締められたようになっている。6 は塩壺である。輪積成形。表面が剥落しており、刻印などは不明。DZ-51 に分類される。

7 は瓦から硯に転用。縁などには切り離した痕が残る。又、装飾的な刻み目が観られる。

SU381（Ⅲ -78 図、Ⅳ -73 ～ 76 図）

1 ～ 4 は肥前系磁器。1 は外面に梅樹文が描かれた粗製の碗で JB-1-v に分類される。高台内銘あり。2 は見込み蛇ノ目釉剥ぎ底部無釉の皿で、JB-2-k に分類される。高台断面の形状は逆台形。3 は口縁部が外反する坏で JB-6-b に分類される。4 は油壺で JB-12 に分類される。赤絵。頸部は長め。頸部は次第に短くなる。小振り。

5 ～ 16 は陶器である。5 ～ 8 は肥前系碗である。5 は外面に主文様の描かれたいわゆる京焼風陶器碗で天目形を呈する製品である。TB-1-b に分類される。高台内のケズリはやや浅い。高台内に銘「清水」。6、7 は内面に主文様の描かれたいわゆる京焼風陶器碗で TB-1-c に分類される。高台内銘は 6 は「富永」、7 は「中村金」。8 は陶胎染付の碗で TB-1-f に分類される。全面に貫入が入る。胴部中央に 1 箇所凹みが入る。比較的丁寧に描かれた楼閣山水文。9、10 は瀬戸・美濃系灰釉碗で TC-1-c に分類される。9 は大振りで体部は真直に立ち上がる。10 は小振りで体部はやや内湾して立ち上がる。高台内墨書「ヨシムラ」「清エモン」。11 は文様が白土で象嵌されたいわゆる三島手の肥前系平鉢で TB-2-h に分類される。口縁は鍔状になっている。高台畳付けが面取りされている。12 は瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利底部釉拭き取りで TC-10-a に分類される。13 は瀬戸・美濃系五合徳利で TC-10-d に分類される。頸部から肩に掛けてうのふ釉が流しかけられている。胴部割れ口は、少し凹凸はあるが作為的に打ち欠かれており、逆さにして漏斗のように二次利用したものではないかと考えられる。14 ～ 16 は志戸呂系瓶で TF-10 に分類される。14 は釣り鐘形の様相を残すが 15、16 は寸胴形になっている。16 は底部墨書。「伊□□弥兵衛」。「伊勢屋」の可能性もある。

17 ～ 35 は土器である。17 ～ 29 はかわらけ。17 ～ 19 は大形の 5 寸皿で DZ-2-a に分類される。見込みには渦巻き状のナデ調整がみられる。器壁はやや内湾しており底裏には溝状の筋がみられる。スス付着。17 は底部回転糸切り痕左回転。18、19 は不明瞭。20、22 ～ 26 は内面立ち上がり際に圏線がみられる。22 は見込みに渦巻き状の調整がみられ、23、24 は器高が高く、24、25 は底部径が大きい。DZ-2-a に分類される。底部回転糸切り痕は左回転。21、29 は厚手の磨きかわらけである。DZ-2-d に分類される。内面は立ち上がり際に凹みがみられる。21 は内外面共に劣化しており、磨いている箇所を確認できる部分は少ない。口縁部にはススが付着している。29 は底部穿孔しており、蝋燭立てのようなものとして利用されたのであろう。27 は薄手の磨きかわらけで DZ-2-d に分類される。見込みに黒く 3 箇所の丸が浮かび上がる内ぐもりのあるかわらけである。祝い事の席で使う。28 は耳かわらけ。DZ-2-e に分類される。30 は油受け皿で DZ-40-d に分類される。31 は瓦燈の身で DZ-45 に分類される。32 は底部が丸形を呈するほうろくである。DZ-47-a に分類される。口縁部が直立し、立ち上がりが高い。内耳は粘土板から作られた中がわずかに中空になるタイプである。2 箇所残存。残存底部厚 4mm。いわゆる江戸在地系ほうろくである。33、34 は塩壺である。33 は板作成形「御壺塩師堺湊伊織」の刻印がある。DZ-51-f に分類される。34 は板作成形。大枠に「泉州麻生」の刻印がある。DZ-51-i に分類される。受け部の立ち上がりが大きく、断面形は長方形を呈する。35 は塩壺の蓋である。DZ-00-c に分類される。

36 は人形・玩具である。円盤状製品で JB_4008_A に分類される。青磁皿の転用品である。周囲を打ち欠き円盤状に加工している。

37 は軒桟瓦である。軒丸部のみ残存している。瓦当文様は連珠巴文であり、8 個の珠文が巡る。

38 ～ 41 は金属製品である。38 ～ 40 は銅合金製。38、39 はキセルの雁首である。38 の火皿は大振りな碗形。脂返しの湾曲は大きく補強帯を有する。肩部は八角形。継ぎ目の蝋付けは左側である。39 の火皿は碗形。脂返しの湾曲は小さく補強帯は無い。継ぎ目の蝋付けは左側である。40 は金具。41 は鉄。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘。小形。

42、43 は石製品。砥石である。42 は頁岩。43 は珪長岩(沼田砥・トラ砥)。中砥。

SK382（Ⅲ -62 図、Ⅳ -77 図）

1 は肥前系陶器である。外面に主文様の描かれたいわゆる京焼風陶器碗である。TB-1-b に分類される。高台内のケズリは浅い。

2 は土器である。底部が丸形を呈するほうろくである。いわゆる江戸在地系ほうろくである。DZ-47-a に分類される。口縁部は内傾して立ち上がり、器高は高い。立ち上がり際には調整痕が観られる。

3 は寛永通宝と考えられるが、新古を含め型式は定かではない。

4 は金属製品。銅合金製。把手。

5 は石製品である。頁岩。硯である。縁は欠損している。背面には文字のような意匠が刻まれている。

SK383（Ⅲ -63 図、Ⅳ -77 図）

1 は陶器である。瀬戸・美濃系灰釉碗で TC-1-c に分類される。大振り。

2 は土器。塩壺の蓋である。DZ-00-c に分類される。

SU400（Ⅲ -77 図、Ⅳ -77 図）

1 は磁器である。肥前系染付皿である。絵付けや作りが粗雑な皿で JB-2-g に分類される。焼成不良で全体的に釉が白濁している。

2 は陶器である。京都・信楽系で鉄絵が施された筒形碗。TD-1-j に分類される。

3 は土器である。七輪の風口である。上面には沈線が 2 本刻まれている。

SK412（Ⅲ -66 図、Ⅳ -77 図）

1、2 は陶器である。瀬戸・美濃系灰釉碗の底部で、TC-1-c に分類される。周囲を打ち欠いて円盤状にしている。蓋、栓などとして二次利用したものであろうか。

3 は土器である。かわらけで DZ-2-a に分類される。口縁部内湾。底部糸切り左回転。糸切り痕が深い。赤色粒子、黒色粒子混入。

4 は人形・玩具である。小形の碗。灰釉で緑釉流し。体部下半から高台裏までは無釉。見込みは調整が粗く突起があり釉が溜まっている。実用ではなく玩具と判断したため TC_2001_W に分類する。

5 は金属製品である。鉄製。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘である。

SE489（Ⅲ -11 図、Ⅳ -78 図）

1 は磁器である。肥前系染付碗。高台断面の形状が三角形で JB-1-c に分類される。高台内二重圏線。

2 ～ 4 は陶器である。2 は瀬戸・美濃系灰釉丸碗で TC-1-c に分類される。底部のみ残存。3 は肥前系青緑釉皿。見込み蛇ノ目釉剥ぎで TB-2-a に分類される。内野山窯指標。高台内のケズリは浅い。高台断面は逆台形。底部無釉。4 は瀬戸・美濃系灰釉瓶で TC-10 に分類される。

5 は丸瓦である。玉縁部付近のみ残存している。内側には全面布目が転写された痕跡が認められる。

6 ～ 8 は金属製品である。6、7 は銅合金製。6 は鍍金。線彫りにより花唐草文が彫り込まれている。飾金具か。7 は鋲。8 は鉄製。和釘。角釘の頭を平らにして巻いた頭巻釘である。

9 は石製品である。砥石。頁岩。

包含層（Ⅳ -78 図）

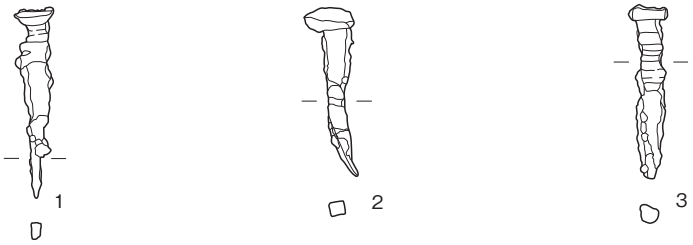
1、2 は軒丸瓦である。1 は瓦当部下半のみ残存している。瓦当文様は梅鉢文である。表面は褐色を呈し、被熱した可能性がある。2 は瓦当部上半のみ残存している。瓦当文様は葵文である。3 は軒平瓦と推察される。軒平部の右端のみ残存する。瓦当文様は「江戸式」に分類され、加藤氏の分類に従えばⅠ Aa に該当する。4 は軒桟瓦ないし軒平瓦である。瓦当部中央付近のみ残存し、左右両端に配置される子葉は欠損している。瓦当文様は「江戸式」に分類され、加藤氏の分類に従えば中心飾りはⅡ、唐草はＫに該当する。5 は熨斗瓦である。文様部左角のみ残存している。文様は唐草と子葉の先端部しか確認されない。加藤氏の分類に従えば 20 類に分類されると推察される。6 は鬼瓦である。左端の一部だと推察される。雲文と思しき渦巻き文が貼り付けとヘラ描きで表現されている。この他、軒桟瓦の軒丸部(巴文、珠文を伴うも

のを含む)、軒桟瓦ないし軒平瓦の軒平部(「江戸式」)が出土している。

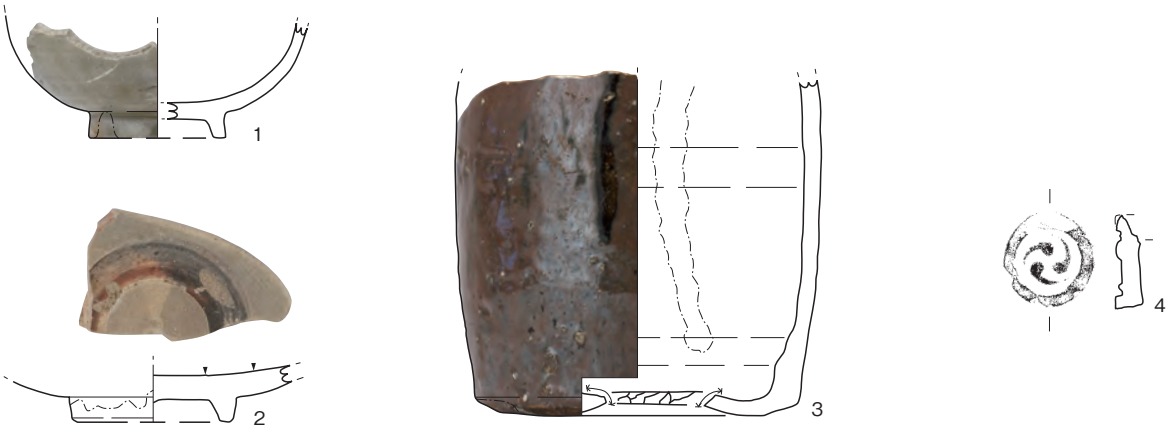
遺構外(Ⅳ -78 図)

1 は土器である。花焼塩壺の蓋である。身は浅い鉢形。蓋の中央に二重角枠内「七度本 / 屋き塩」の刻印を持つ。刻印は右端が深く入っている。胎土は淡橙白色で、部分的にマーブル状になっている。表面には型離れしやすいようにするためか、キラが付着している。裏面には作成時の指紋が残る。金沢で類例があり、石川県木ノ新保遺跡(石川県埋蔵文化財センター 2002)、石川県下本多町遺跡(金沢市埋蔵文化財センター 1999)、石川県広坂Ⅲ遺跡(金沢市埋蔵文化財センター 2006)等で出土している。京都系のものを真似て能登周辺で作られたものではないかと指摘されている。同様の形態の中で、刻印の枠が大枠(長辺 2.7cm)か小枠(長辺 2.3cm)か、蓋の厚みが厚いか、薄いかで三種類に分類されている。本蓋は刻印の枠が大枠、厚みが薄いタイプ(Ⅴ a-2)である。年代は 18 世紀末に多く認められるとされている(奥田 1995)。国元から持ってきたものであろう。

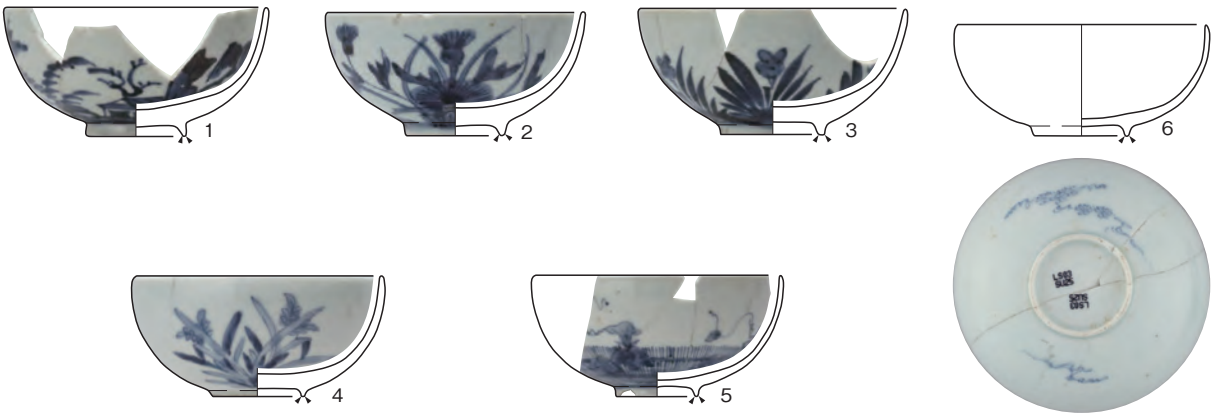
2、3 は瓦である。2 は軒丸瓦である。筒部は玉縁側が欠損しているが、瓦当部は完形である。瓦当文様は葵文である。一部細長い白灰色の変色部がある。凹面にはコビキ痕、布目の転写、棒状工具のナデ痕がこの順に切りあって確認される。布目は左側が切れており、型の地肌が転写された部分が確認される。この他に巴文、葵文の軒丸瓦、軒桟瓦の無文の軒丸部が出土している。3 は桟瓦である。後端部裏面に突出部が設けられたいわゆる「引っ掛け桟瓦」に該当する。裏面には櫛目が施されており、9 本一組で 4 組確認される。また前端部寄りに刻印が押されており、「深川扇橋全右ヱ門　新田四拾五番地　田村新太郎製造」とある。



SK5

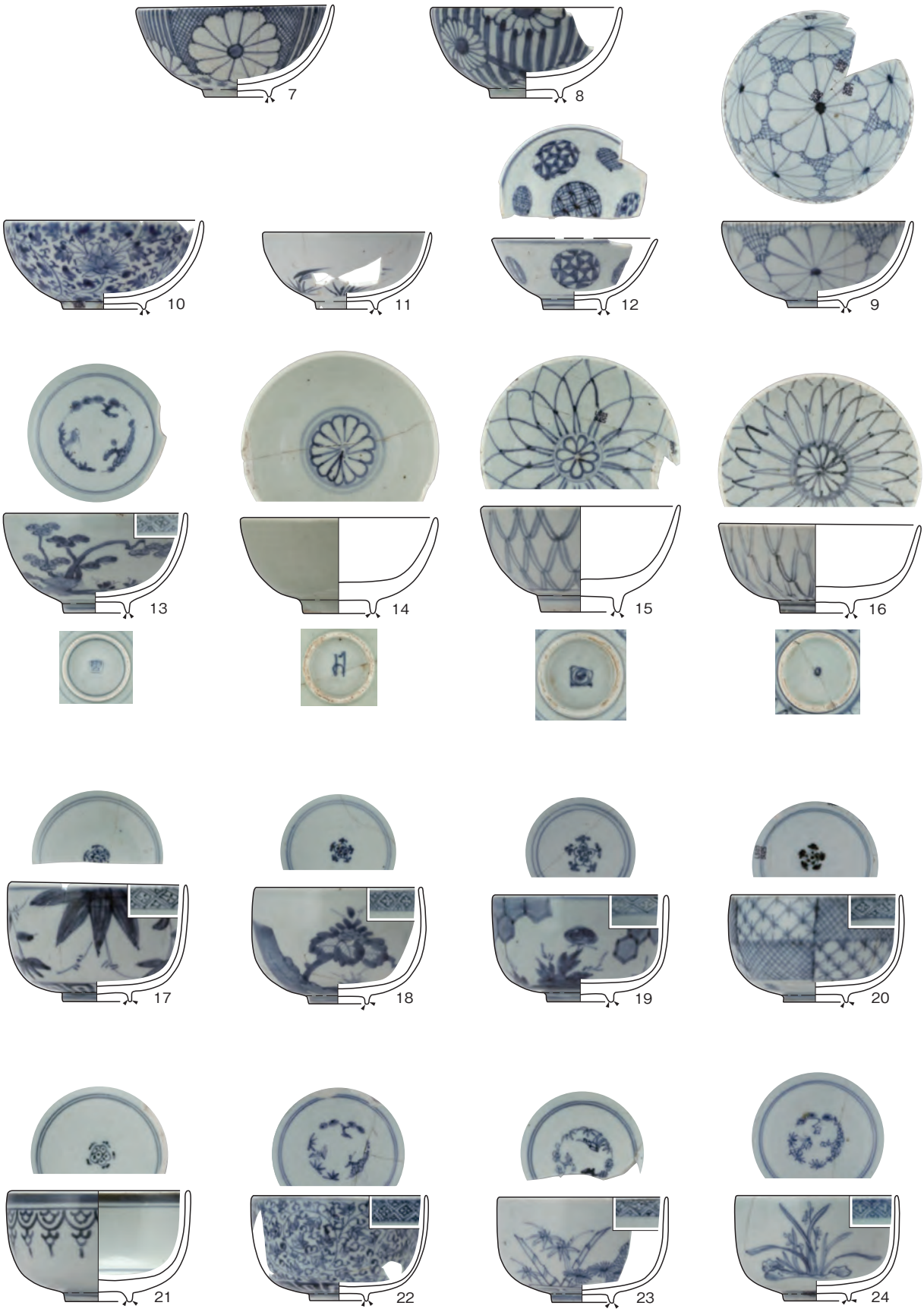


SK10

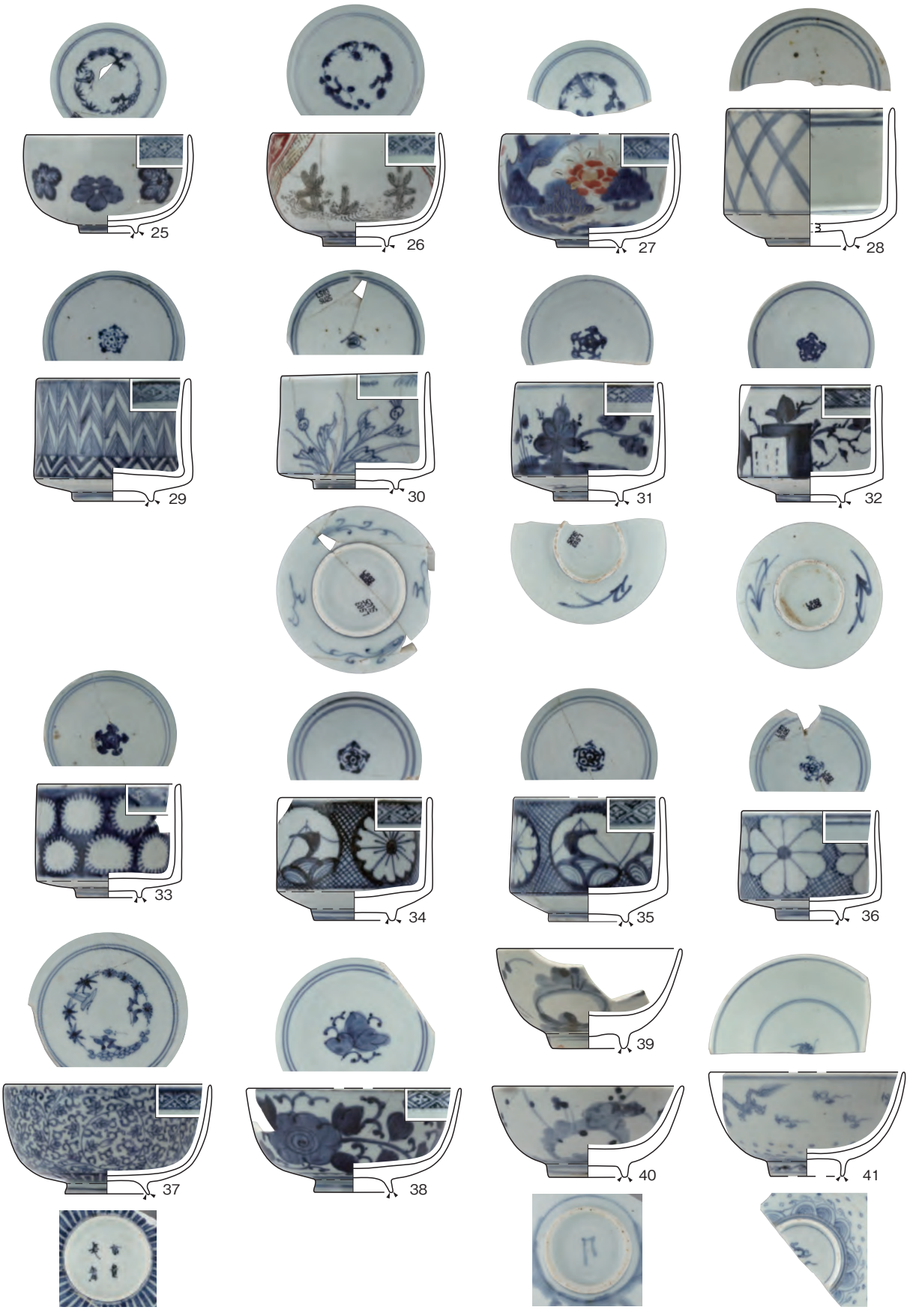


SK25(1)

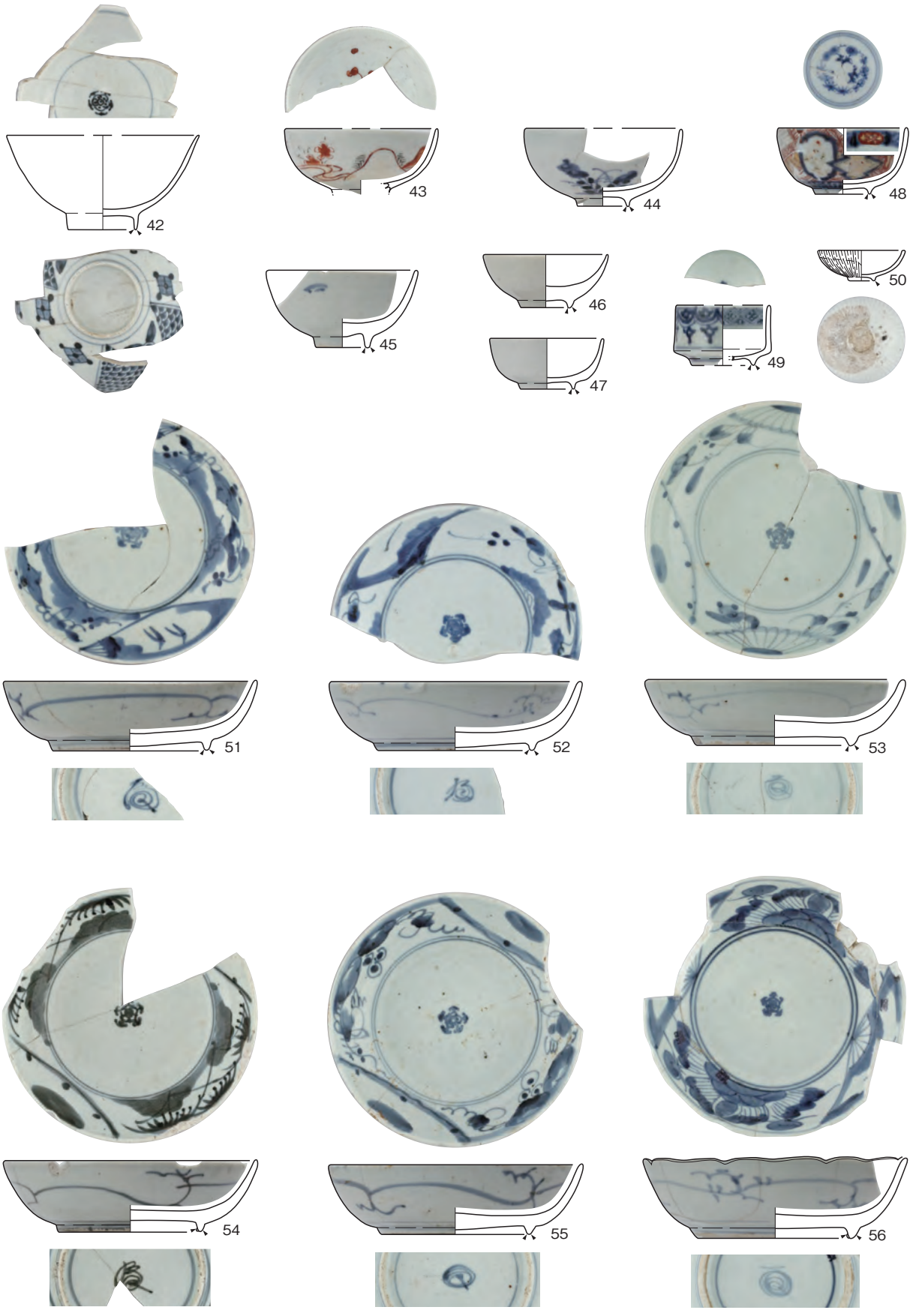
Ⅳ-1図　SK5、SK10、SK25(1)出土遺物



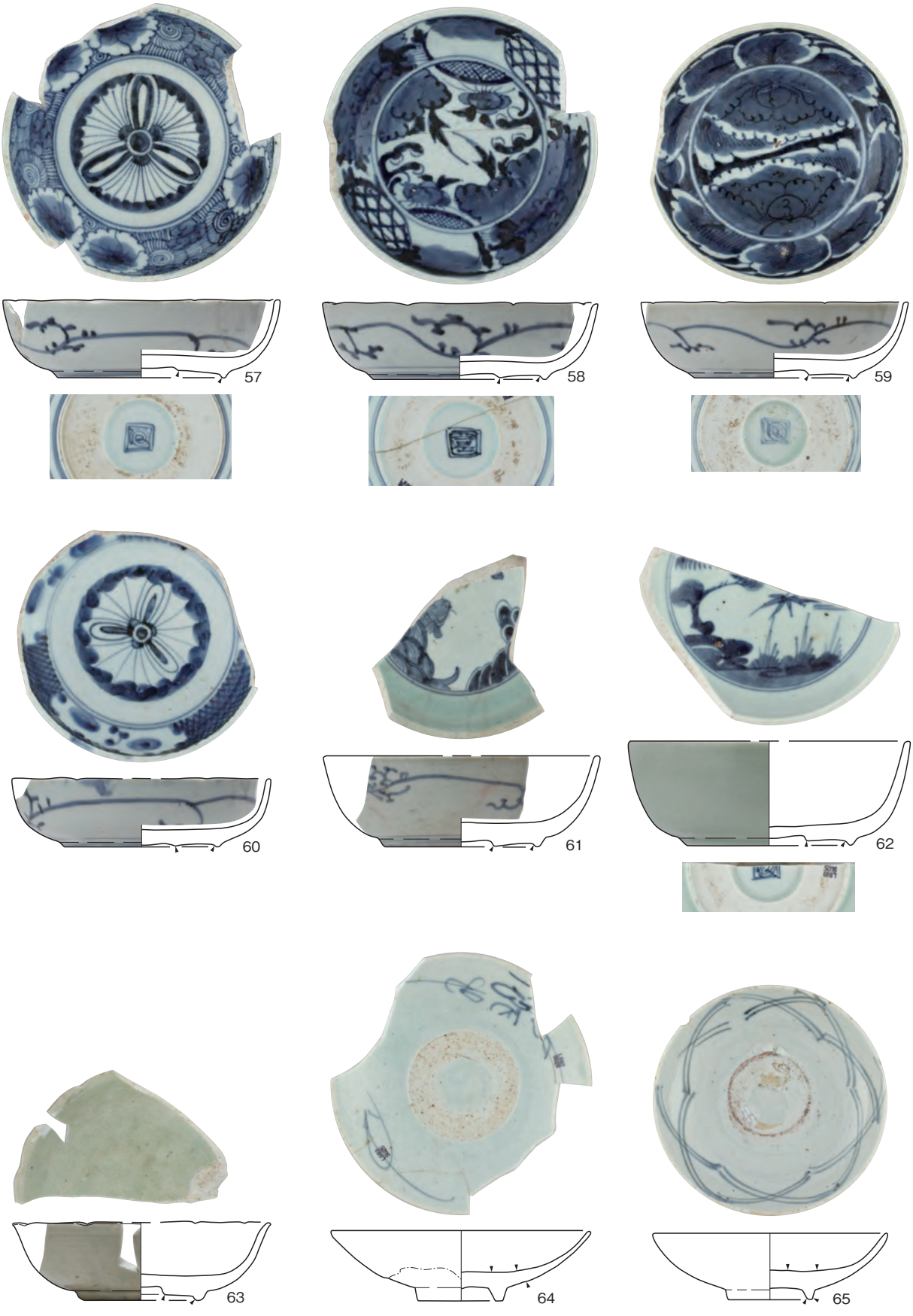
Ⅳ-2図　SK25(2)出土遺物



Ⅳ-3図　SK25(3)出土遺物

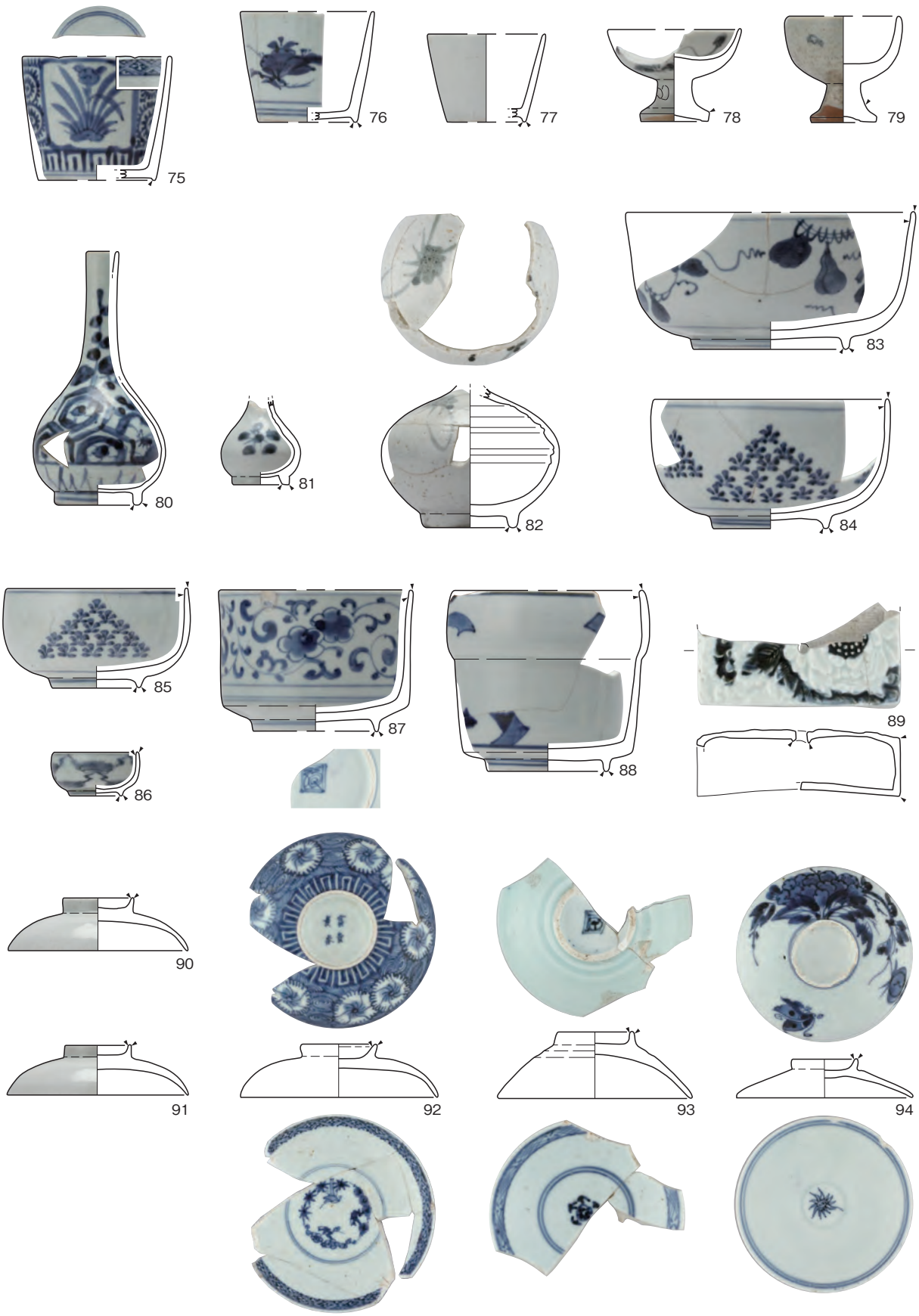


Ⅳ-4図　SK25(4)出土遺物



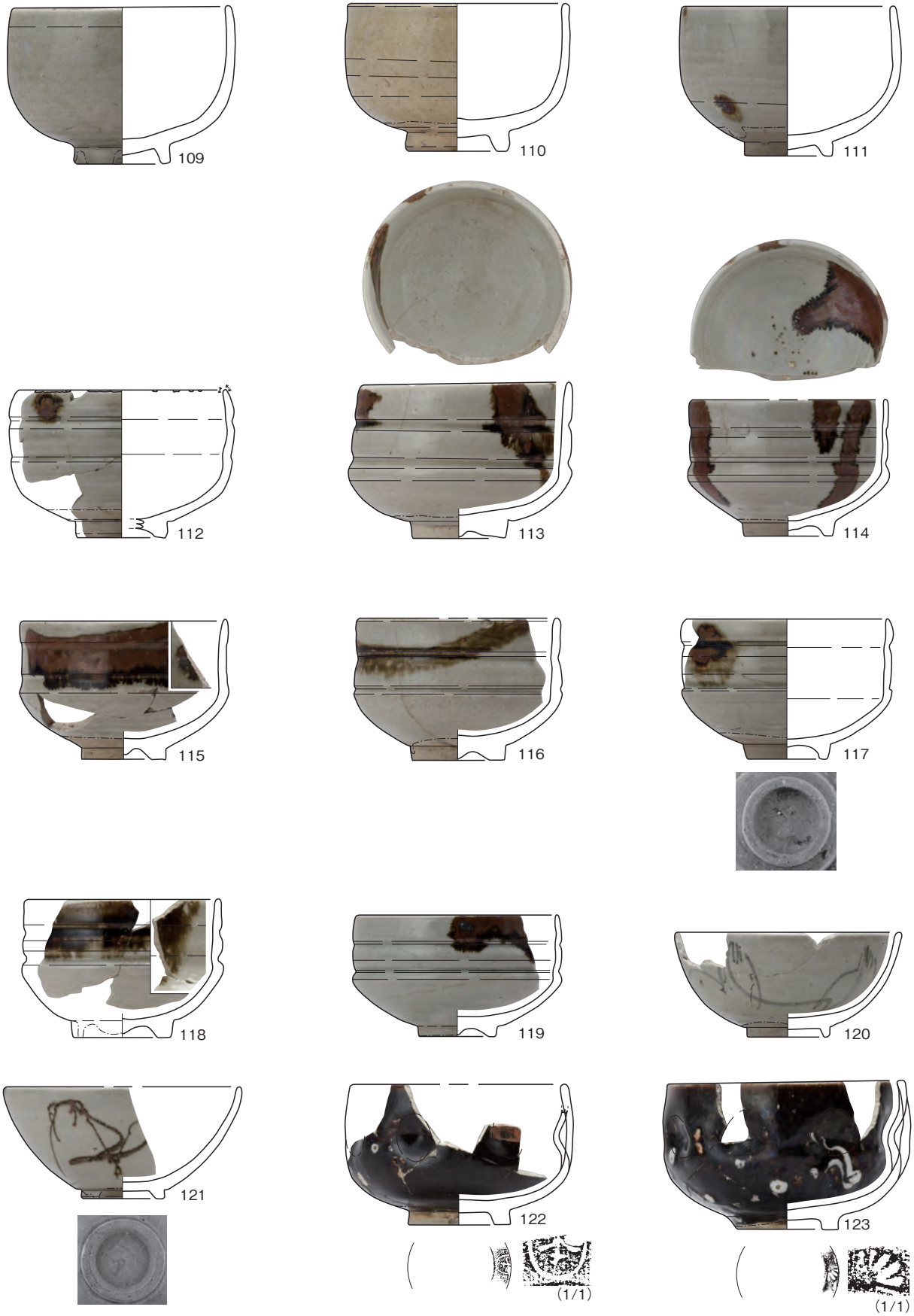
Ⅳ-5図　SK25(5)出土遺物

Ⅳ-6図　SK25(6)出土遺物

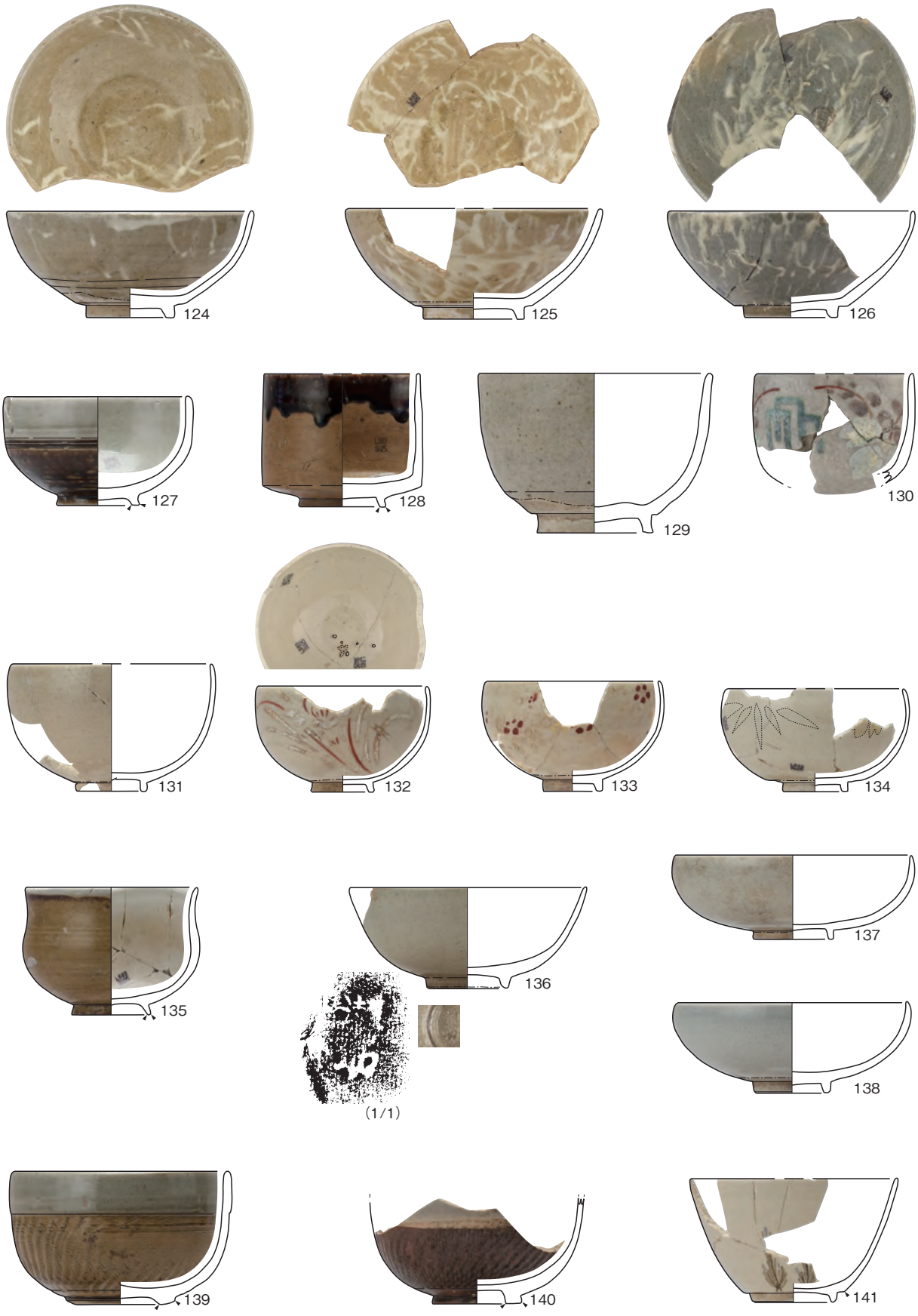


Ⅳ-7図　SK25(7)出土遺物

Ⅳ-8図　SK25(8)出土遺物

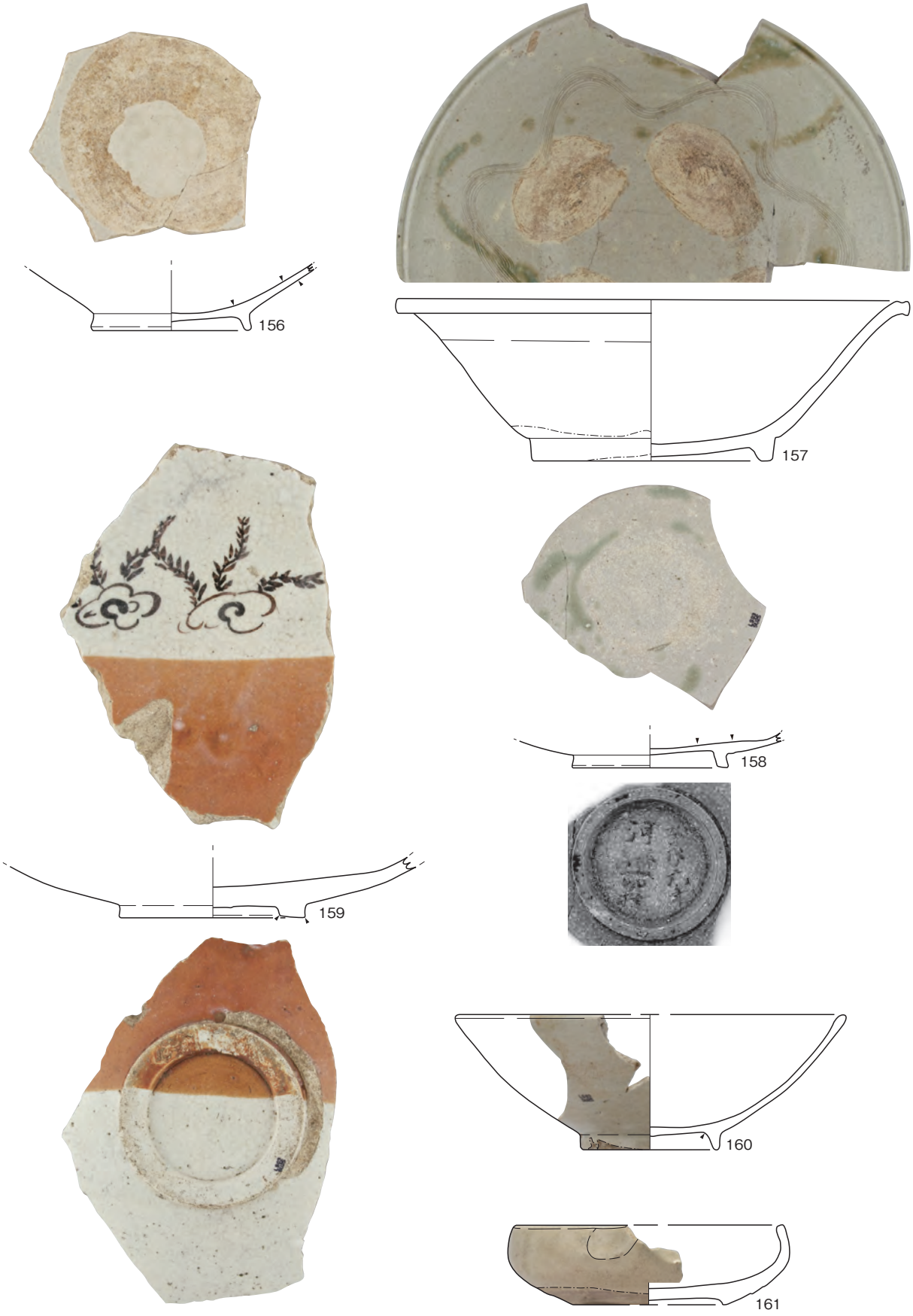


Ⅳ-9図　SK25(9)出土遺物



Ⅳ-10図　SK25(10)出土遺物

Ⅳ-11図　SK25(11)出土遺物



Ⅳ-12図　SK25(12)出土遺物

Ⅳ-13図　SK25(13)出土遺物

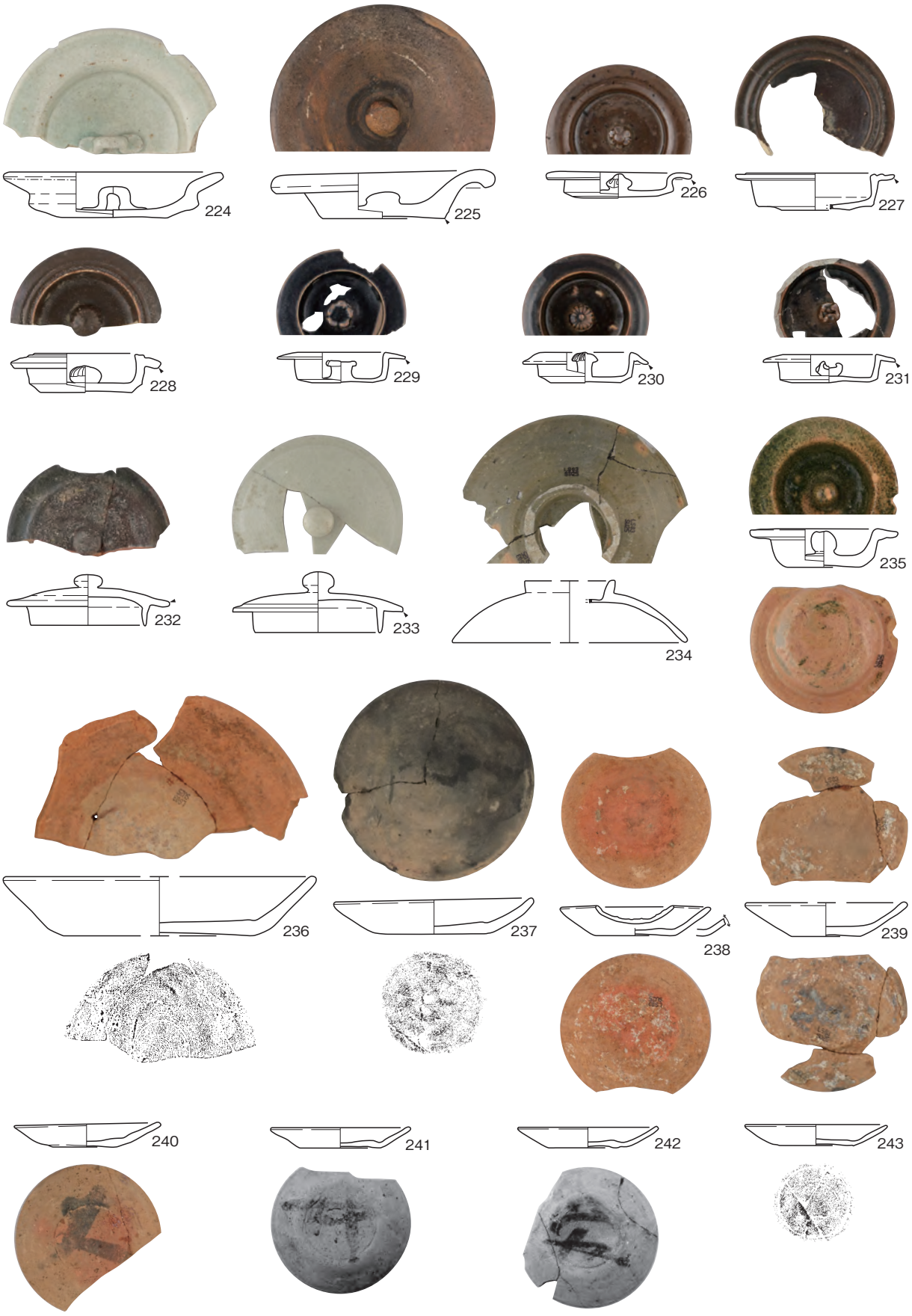
Ⅳ-14図　SK25(14)出土遺物

Ⅳ-15図　SK25(15)出土遺物

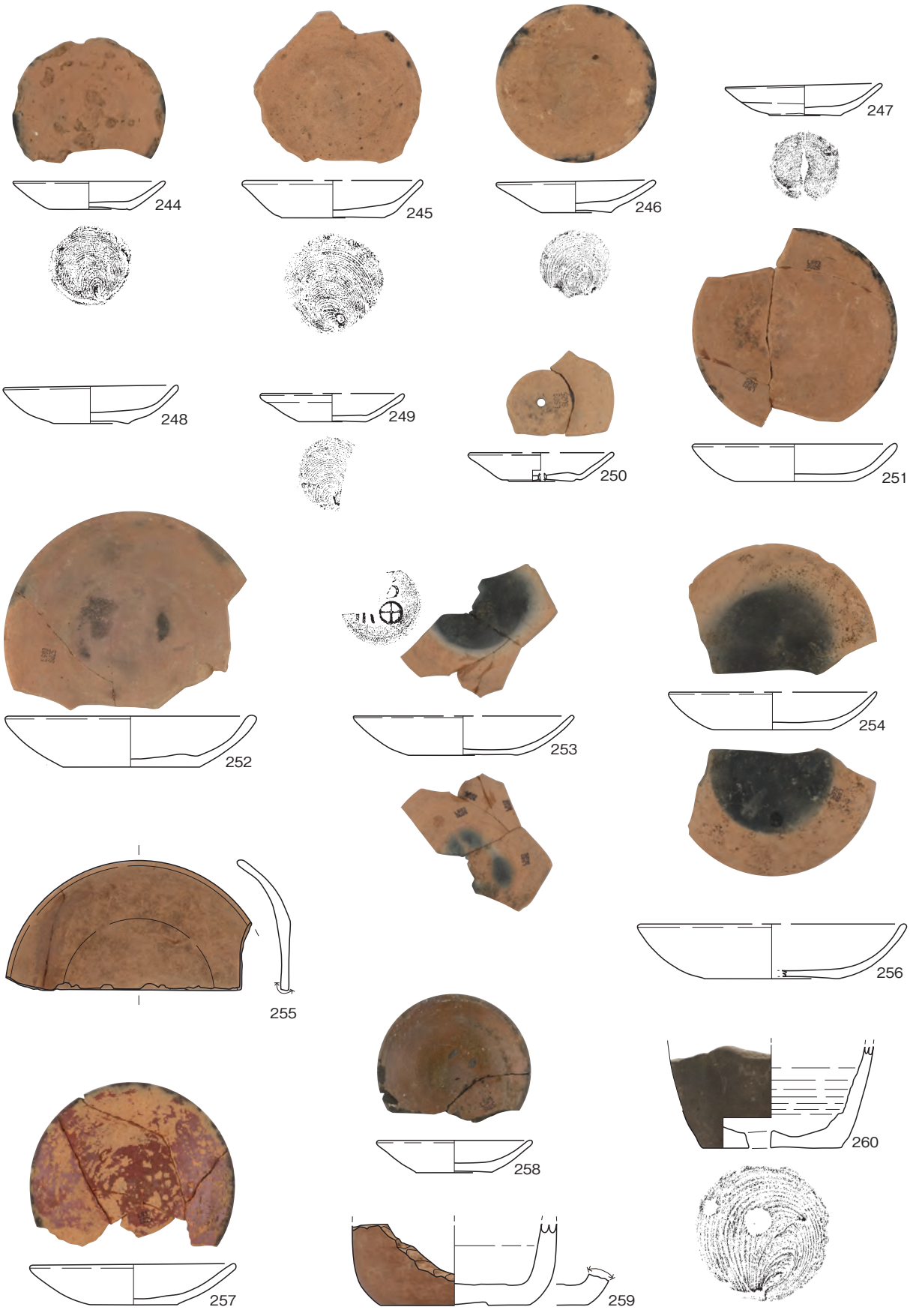
Ⅳ-16図　SK25(16)出土遺物

Ⅳ-17図　SK25(17)出土遺物

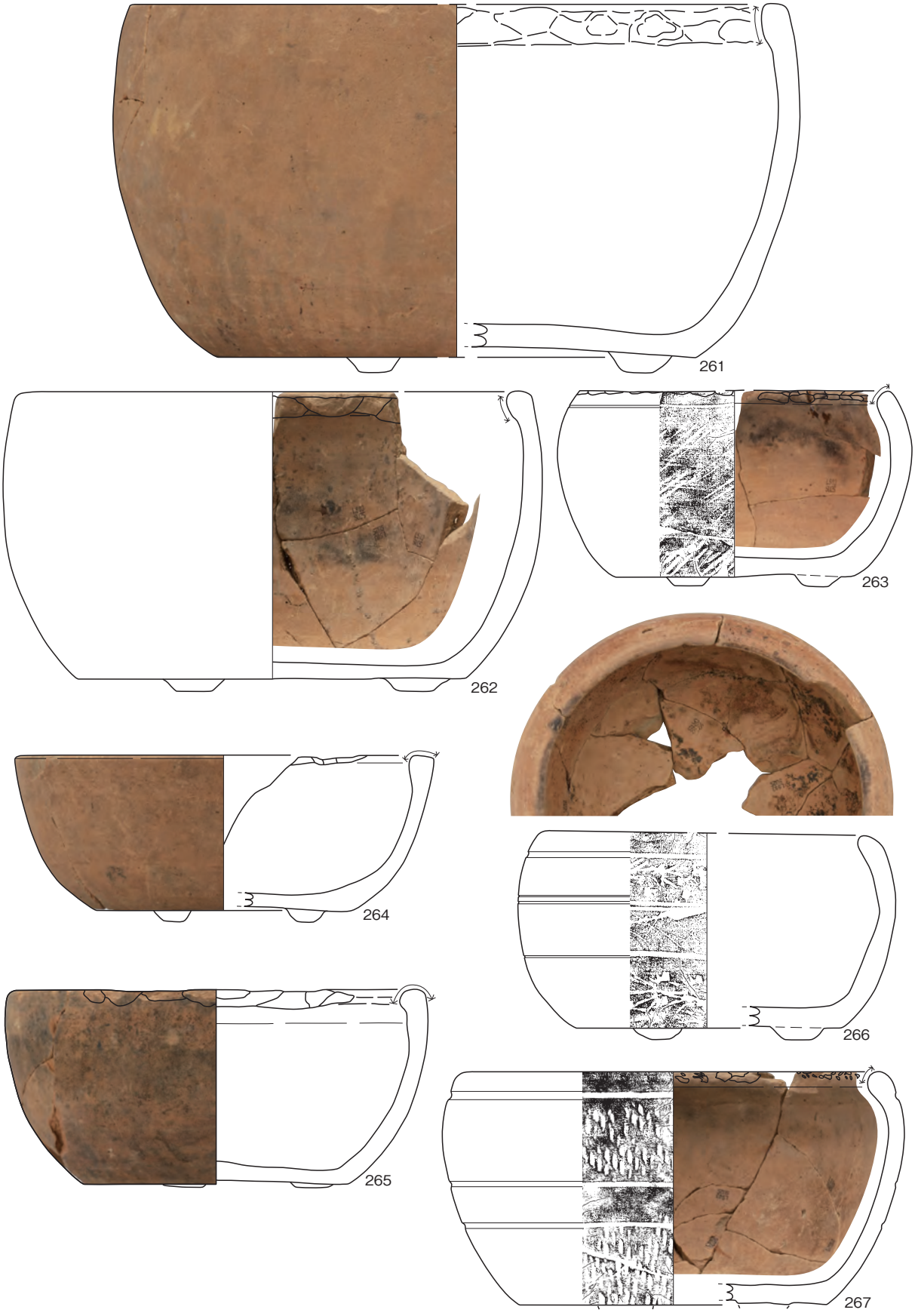
Ⅳ-18図　SK25(18)出土遺物



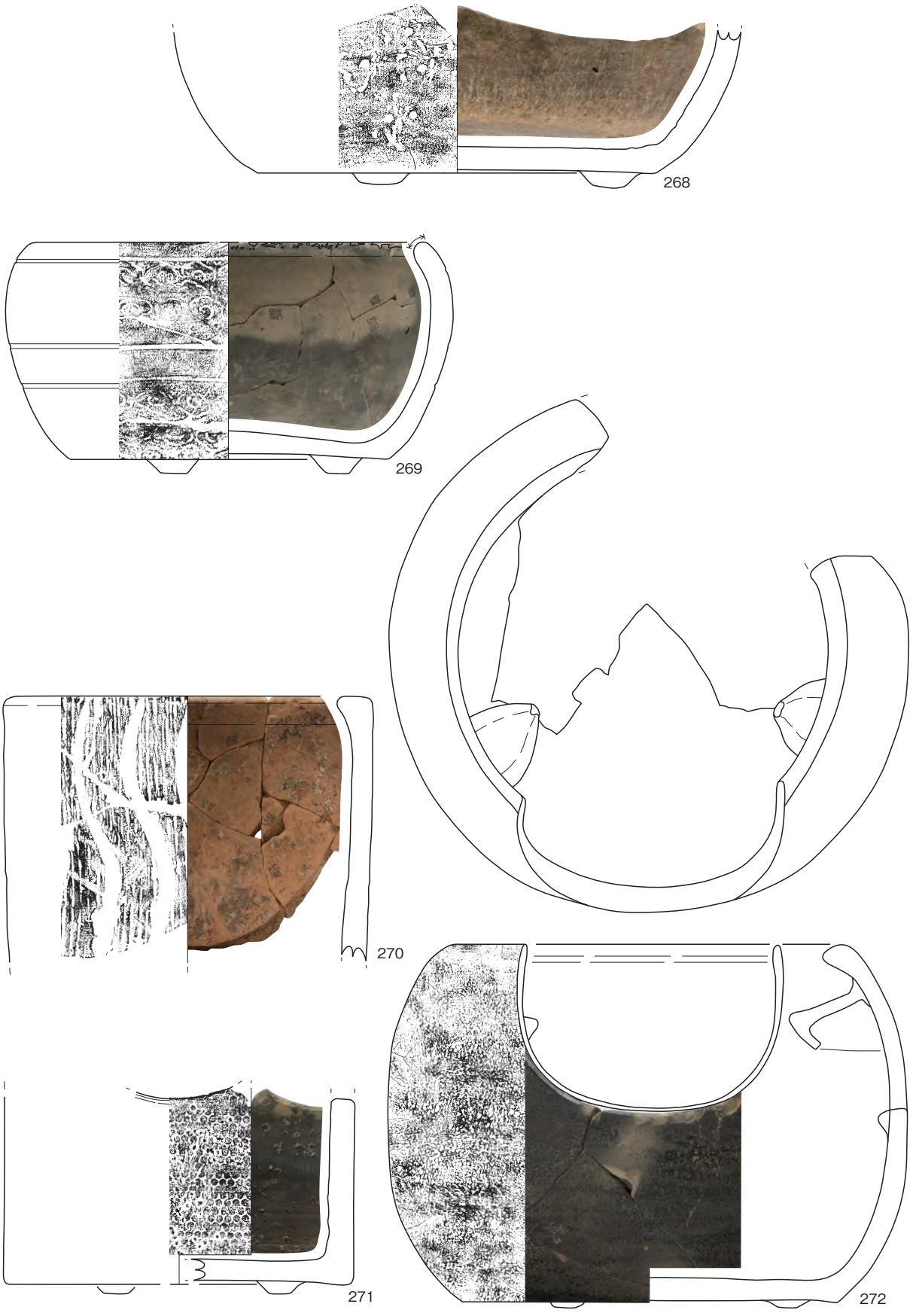
Ⅳ-19図　SK25(19)出土遺物



Ⅳ-20図　SK25(20)出土遺物

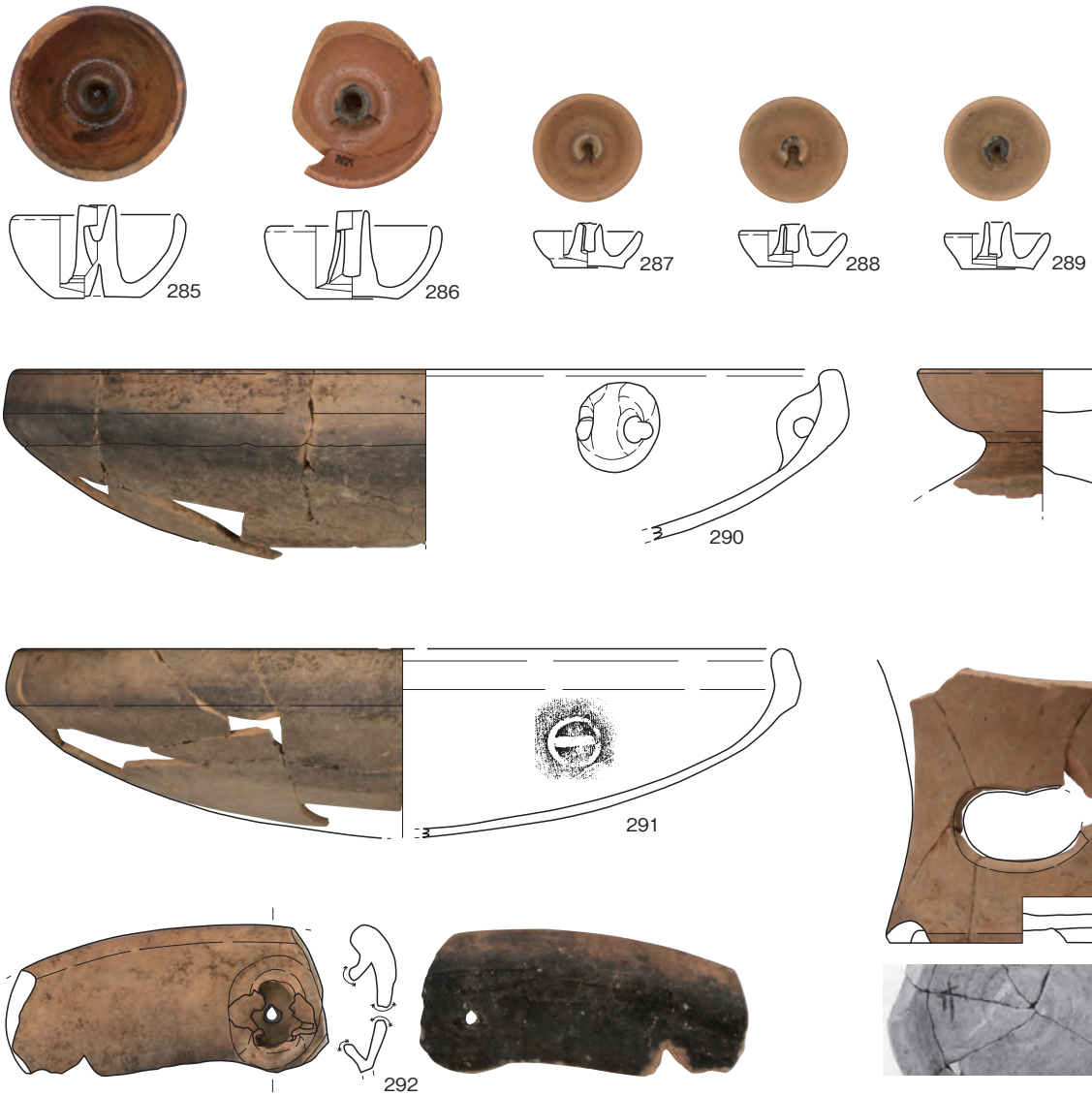


Ⅳ-21図　SK25(21)出土遺物

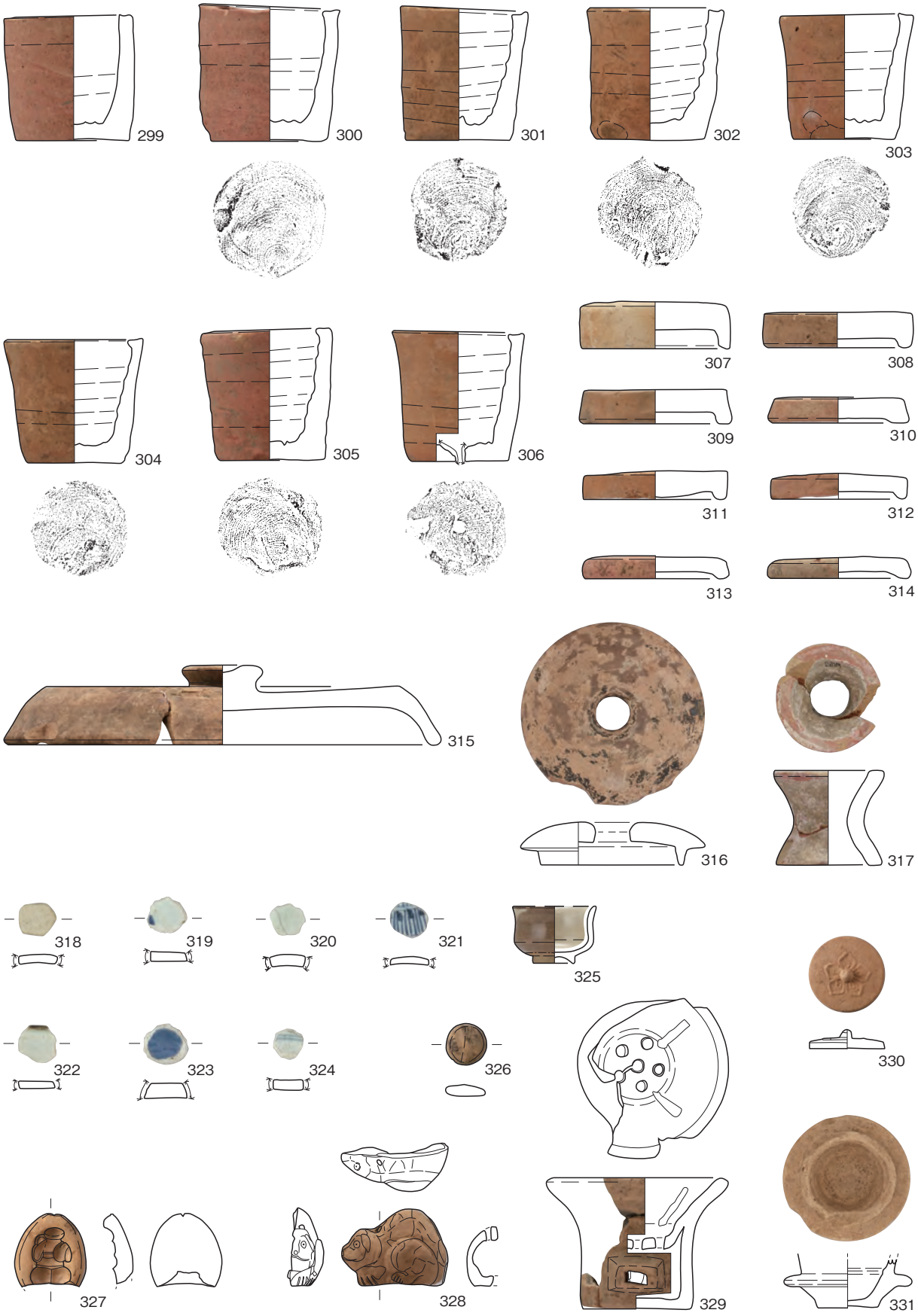


Ⅳ-22図　SK25(22)出土遺物

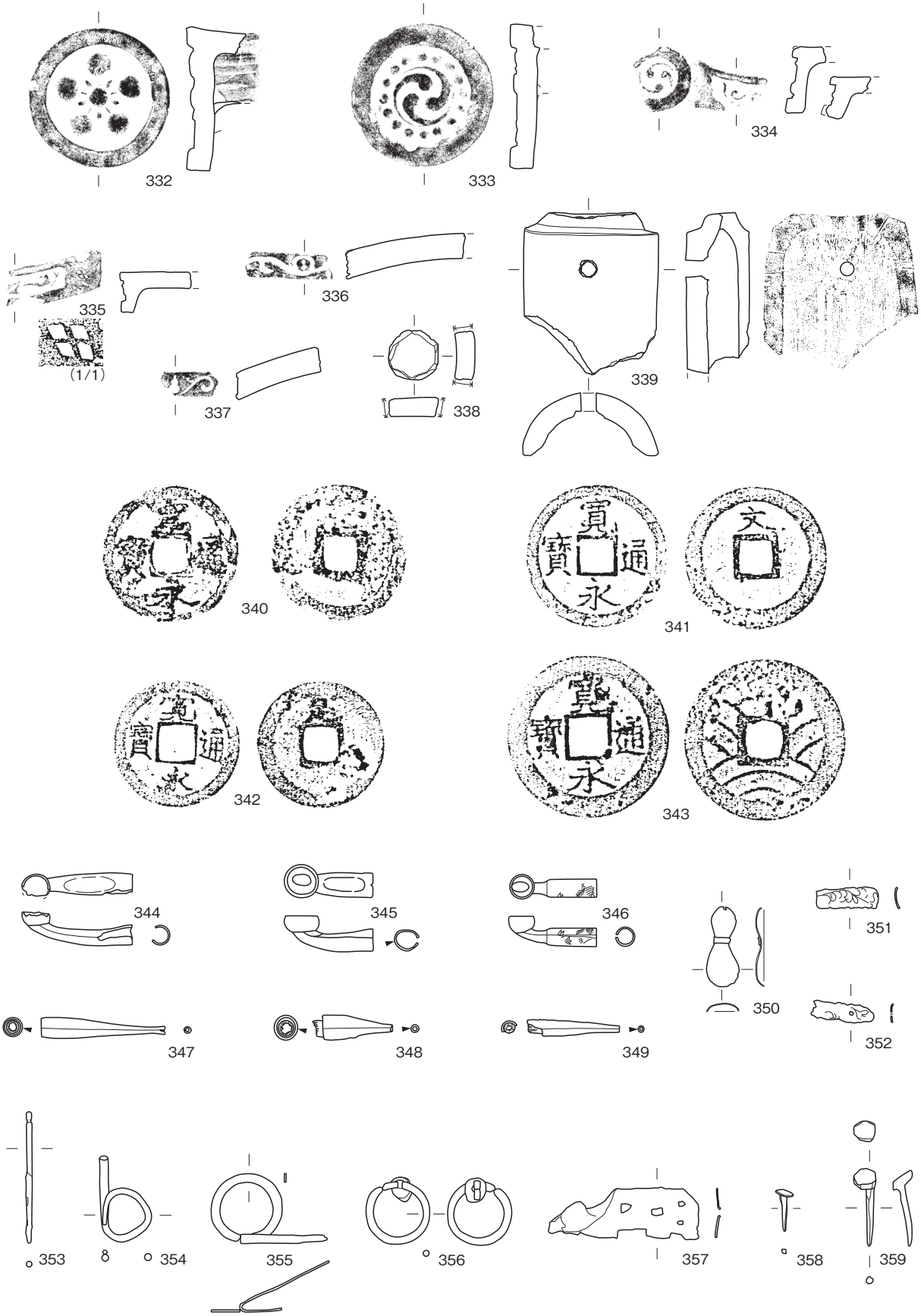
Ⅳ-23図　SK25(23)出土遺物



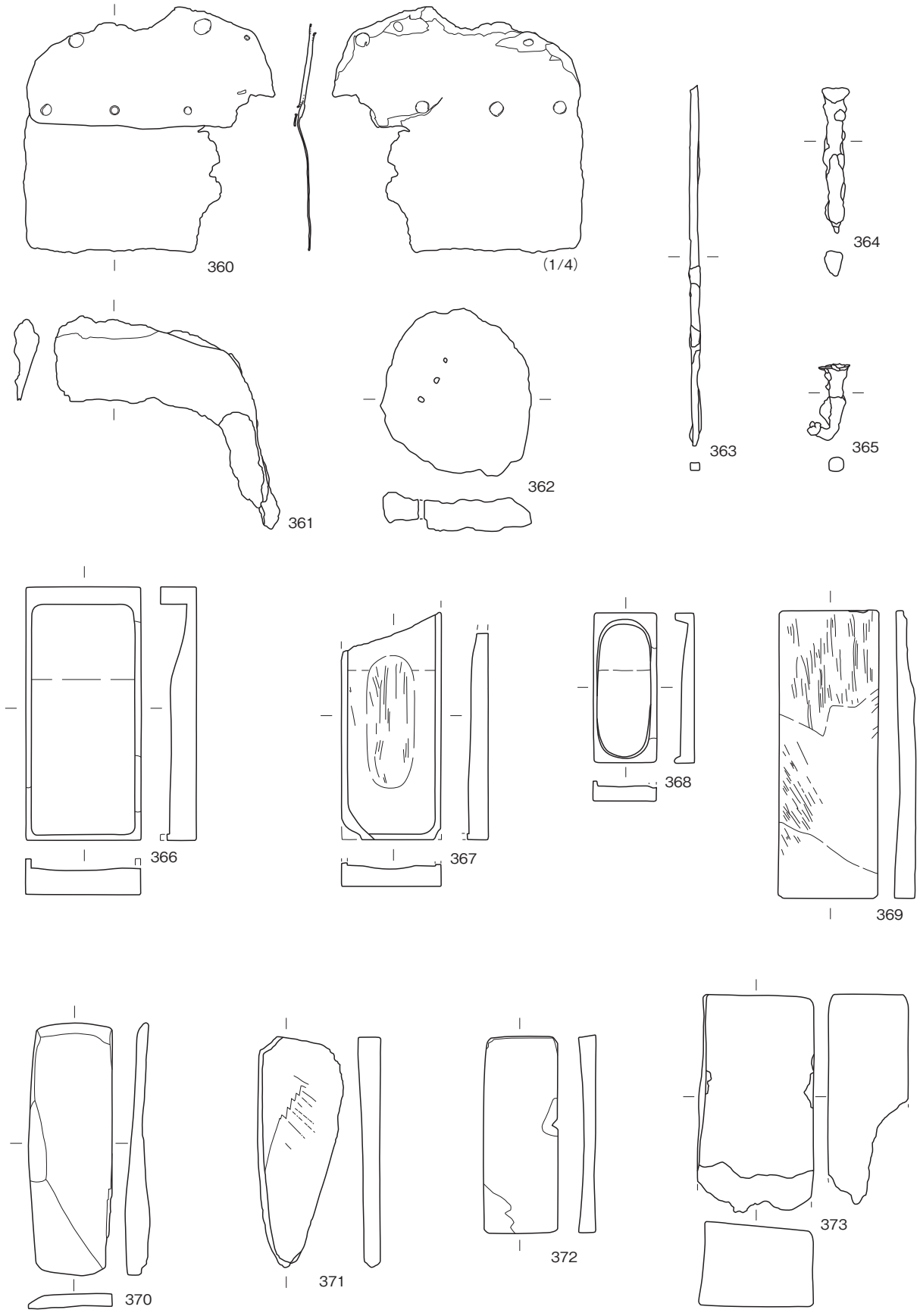
Ⅳ-24図　SK25(24)出土遺物



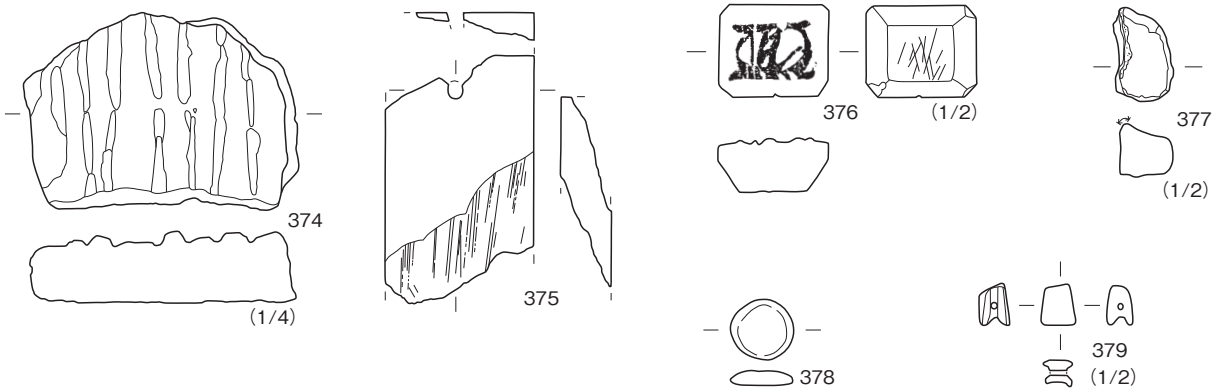
Ⅳ-25図　SK25(25)出土遺物



Ⅳ-26図　SK25(26)出土遺物



Ⅳ-27図　SK25(27)出土遺物



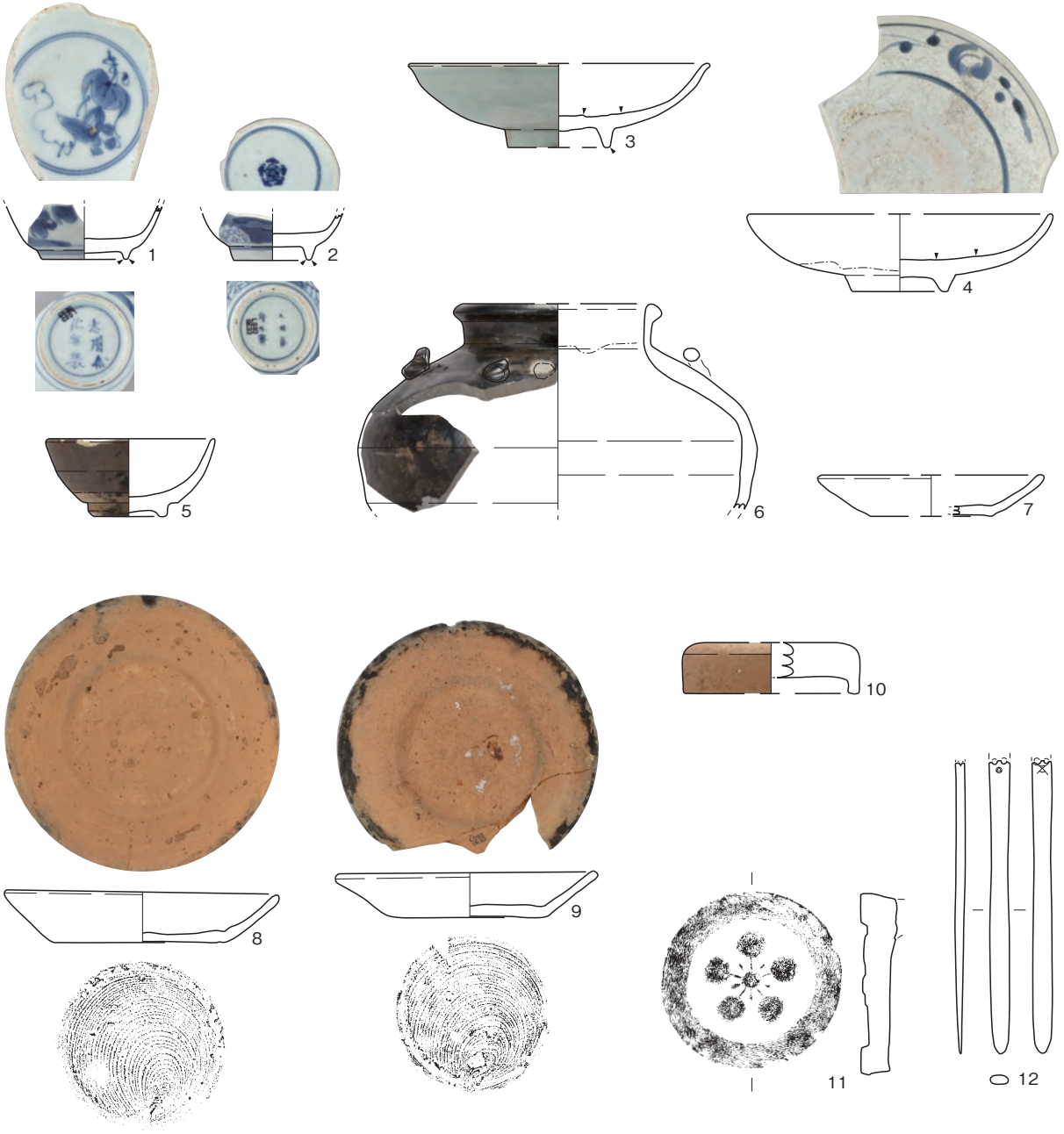
SK25(28)

SD31(1)

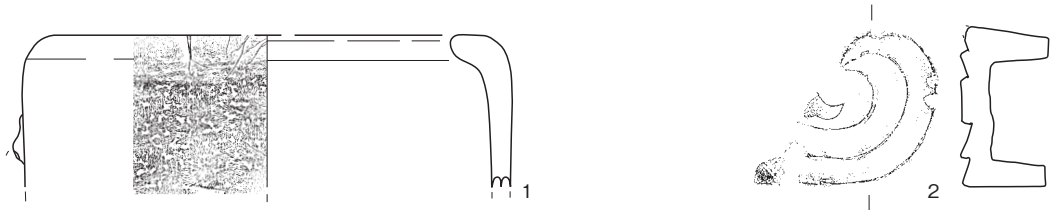
Ⅳ-28図　SK25(28)、SD31(1)出土遺物

Ⅳ-29図　SD31(2)出土遺物

Ⅳ-30図　SD31(3)出土遺物



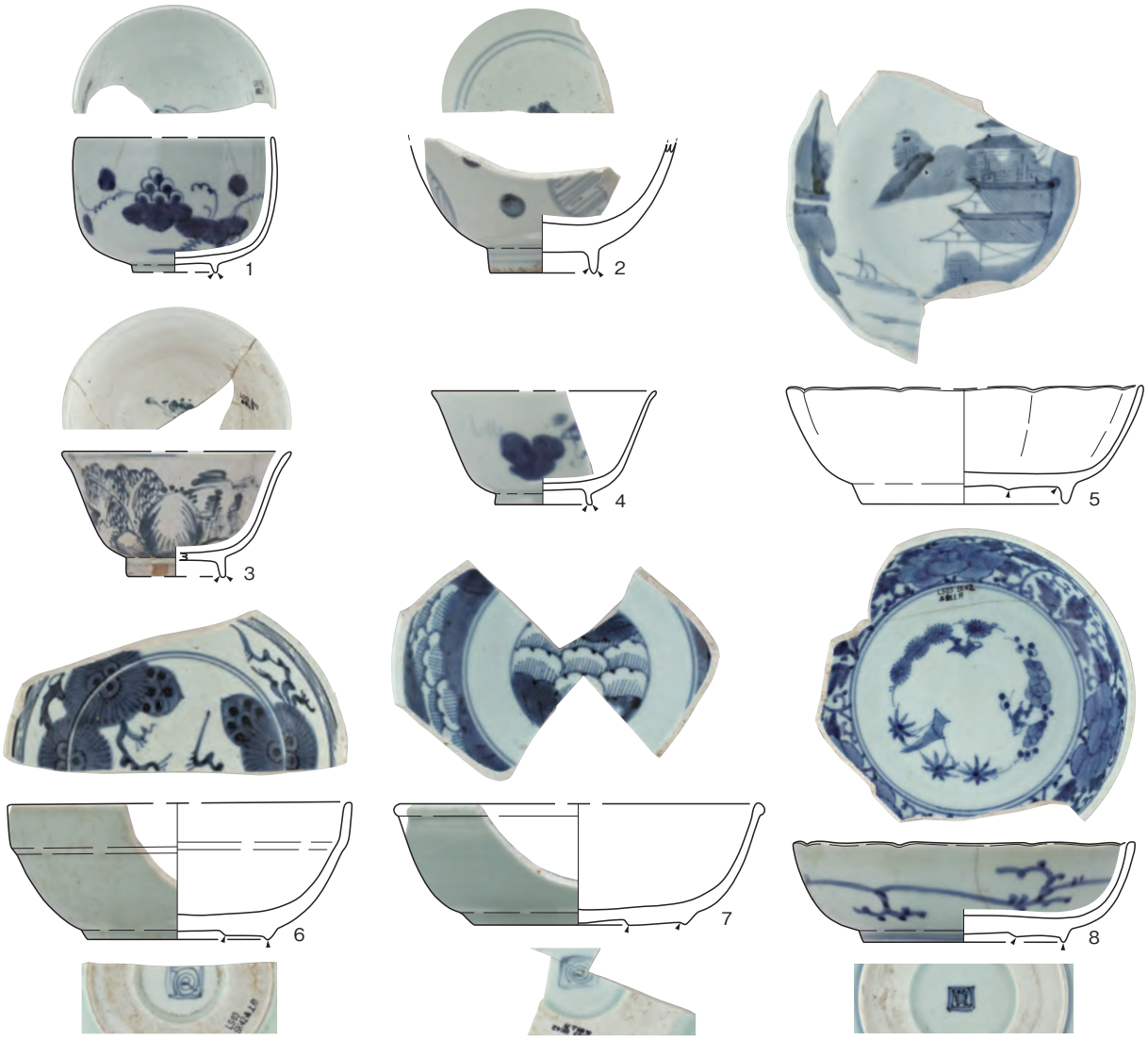
SE33



SX39

Ⅳ-31図　SE33、SX39出土遺物

SK41



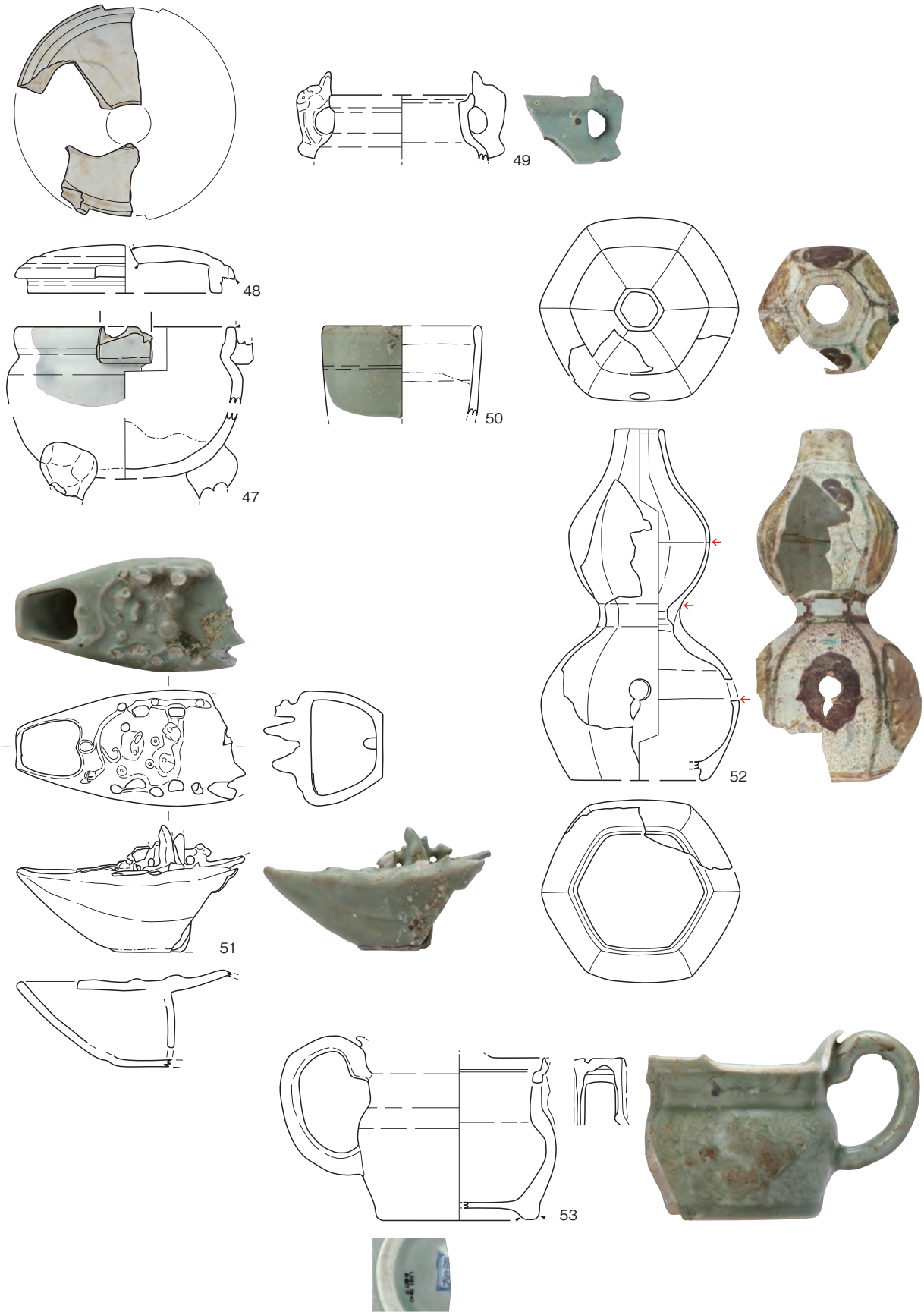
SK42(1)

Ⅳ-32図　SK41、SK42(1)出土遺物

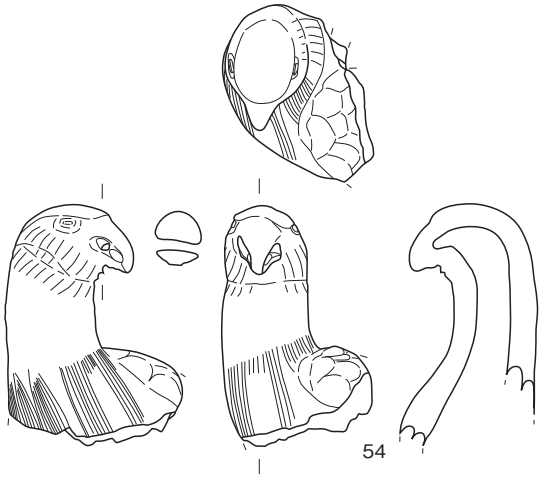
Ⅳ-33図　SK42(2)出土遺物

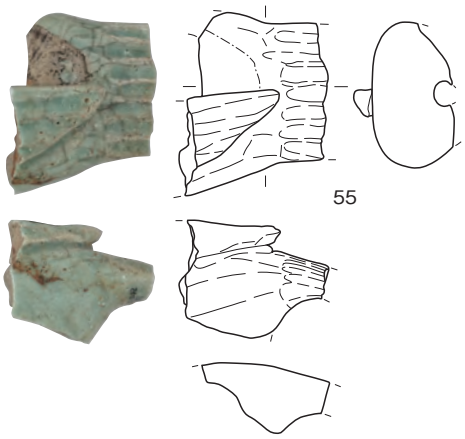
Ⅳ-34図　SK42(3)出土遺物

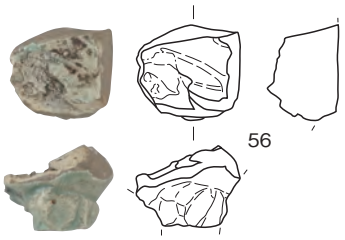
Ⅳ-35図　SK42(4)出土遺物

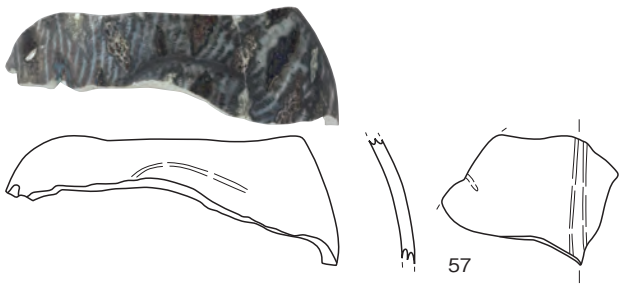


Ⅳ-36図　SK42(5)出土遺物

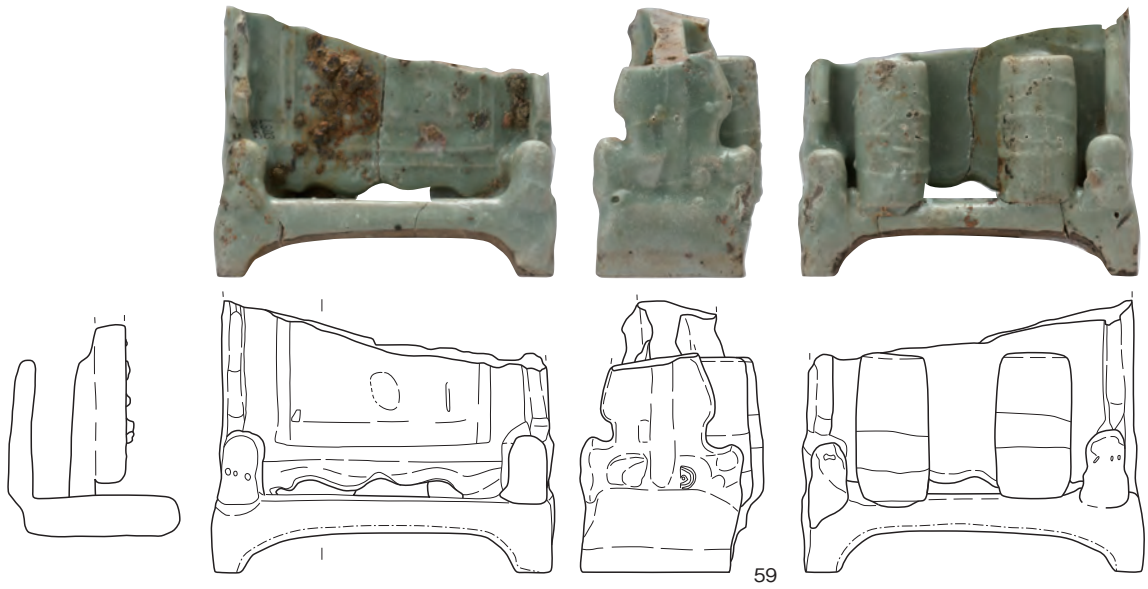


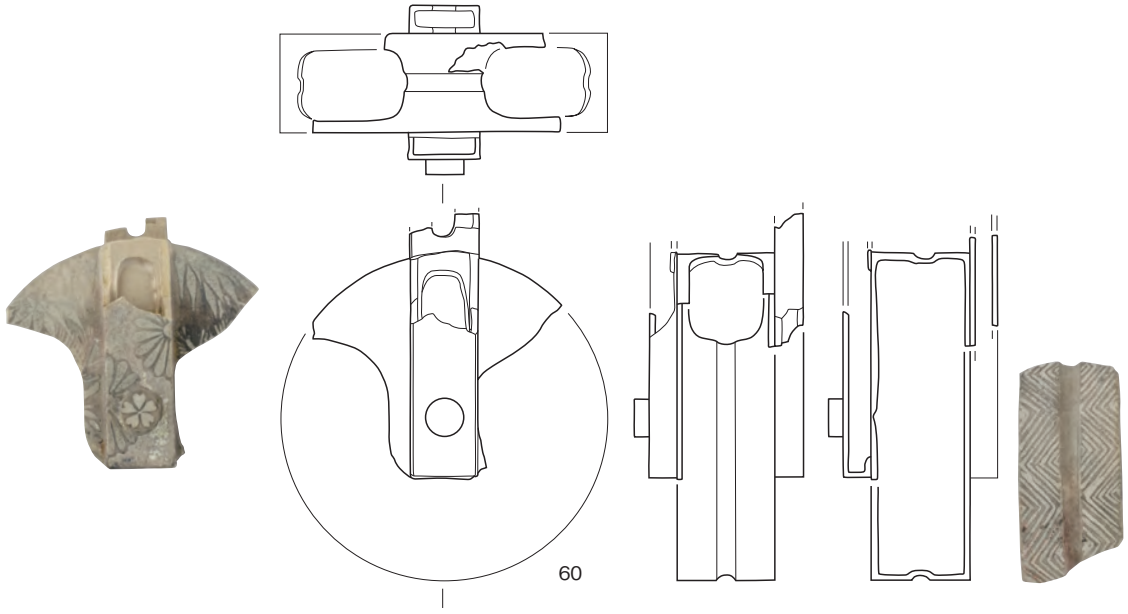


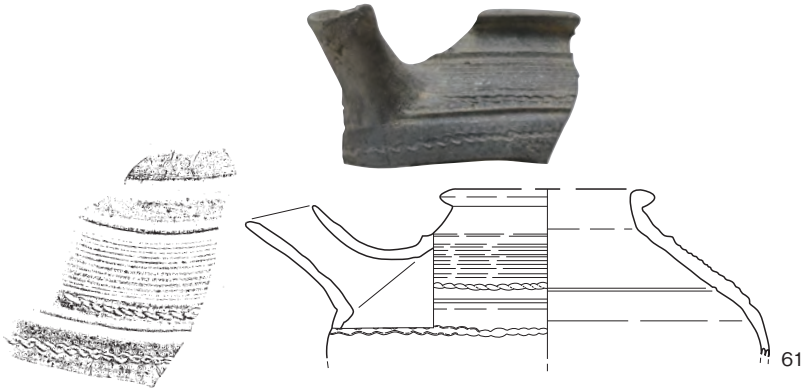




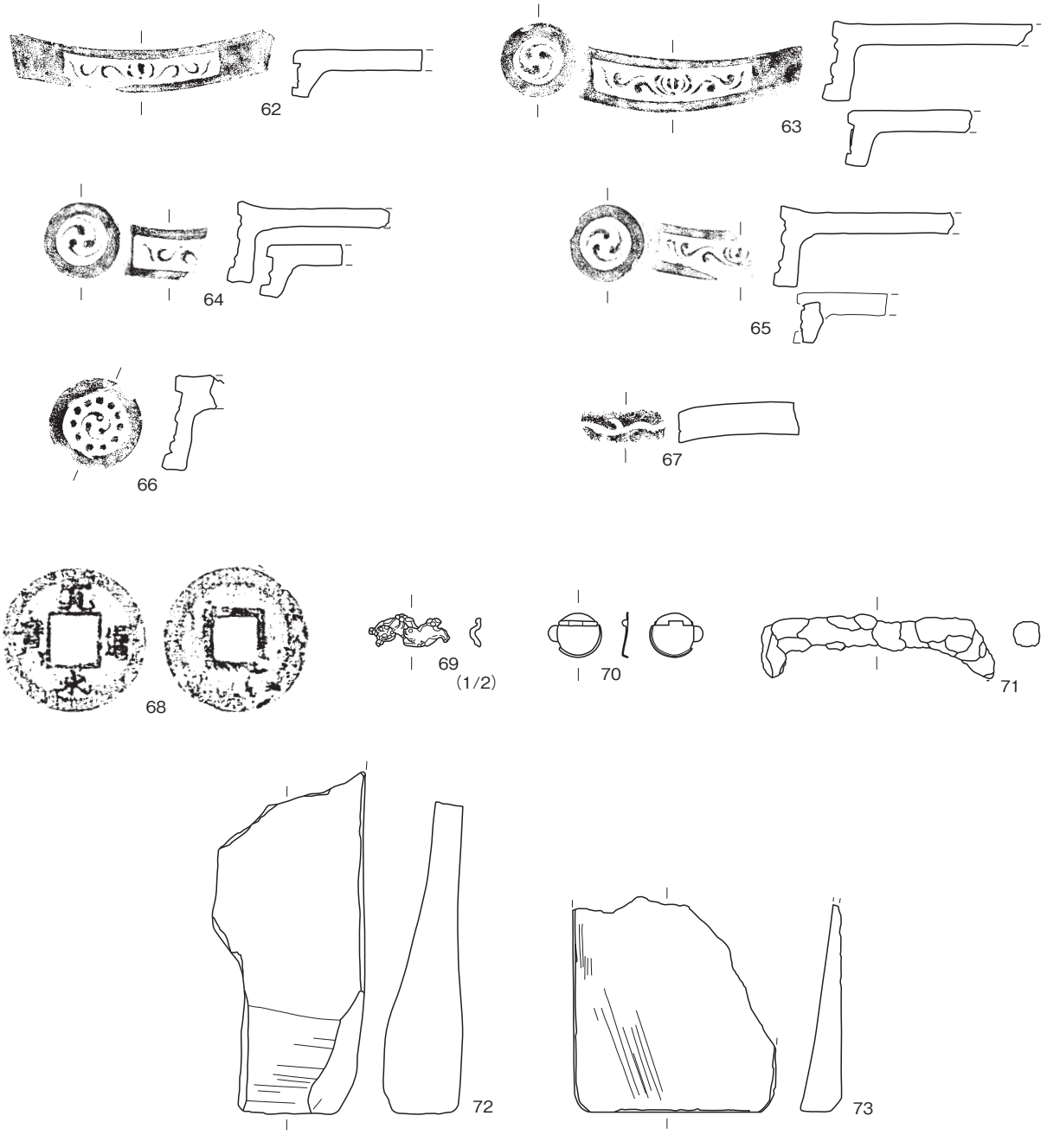
Ⅳ-37図　SK42(6)出土遺物





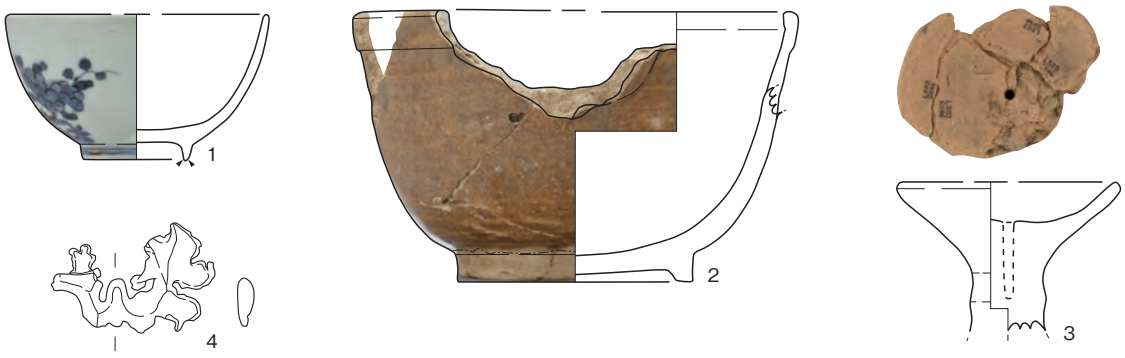


Ⅳ-38図　SK42(7)出土遺物

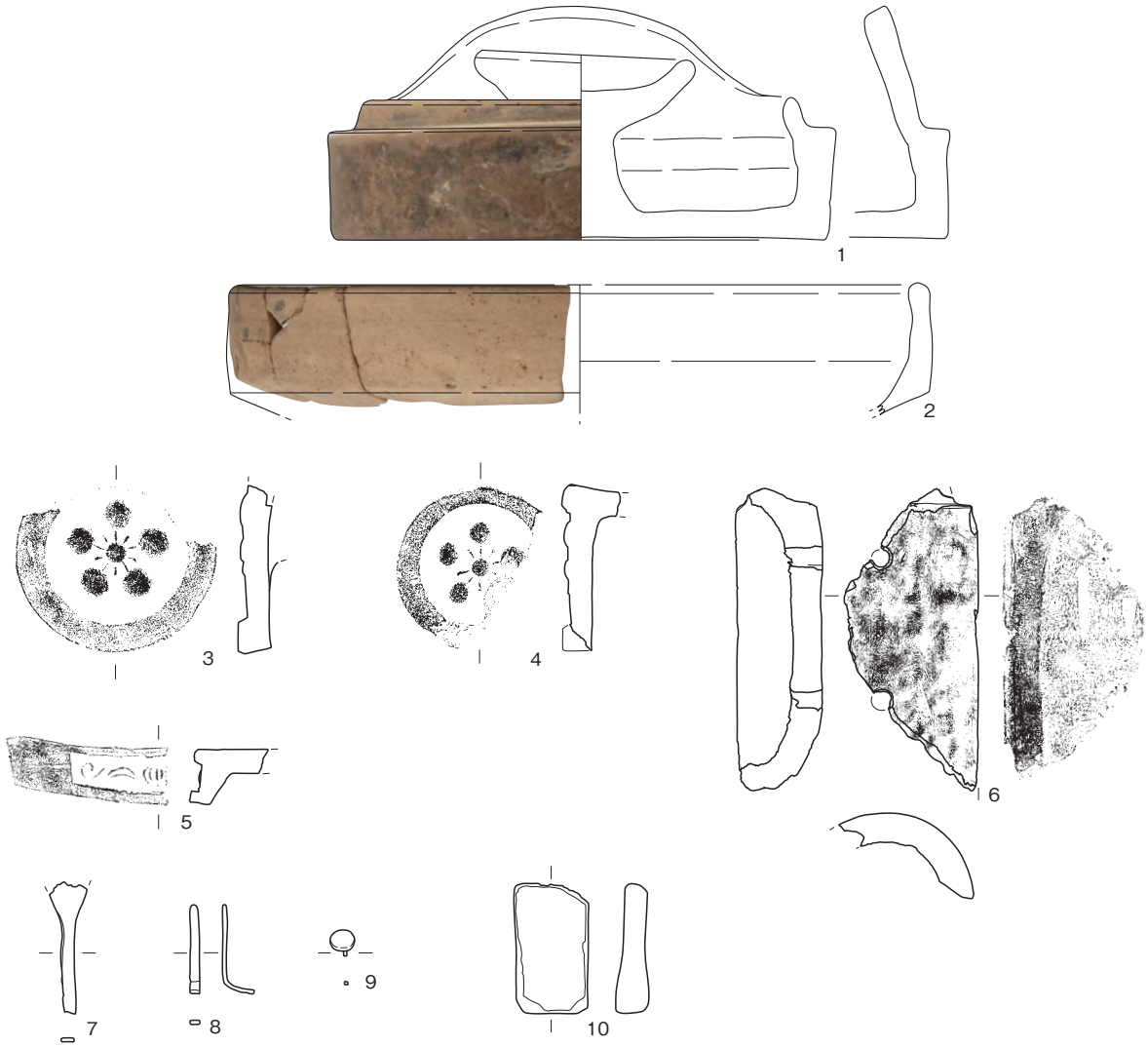


Ⅳ-39図　SK42(8)出土遺物

Ⅳ-40図　SK45出土遺物

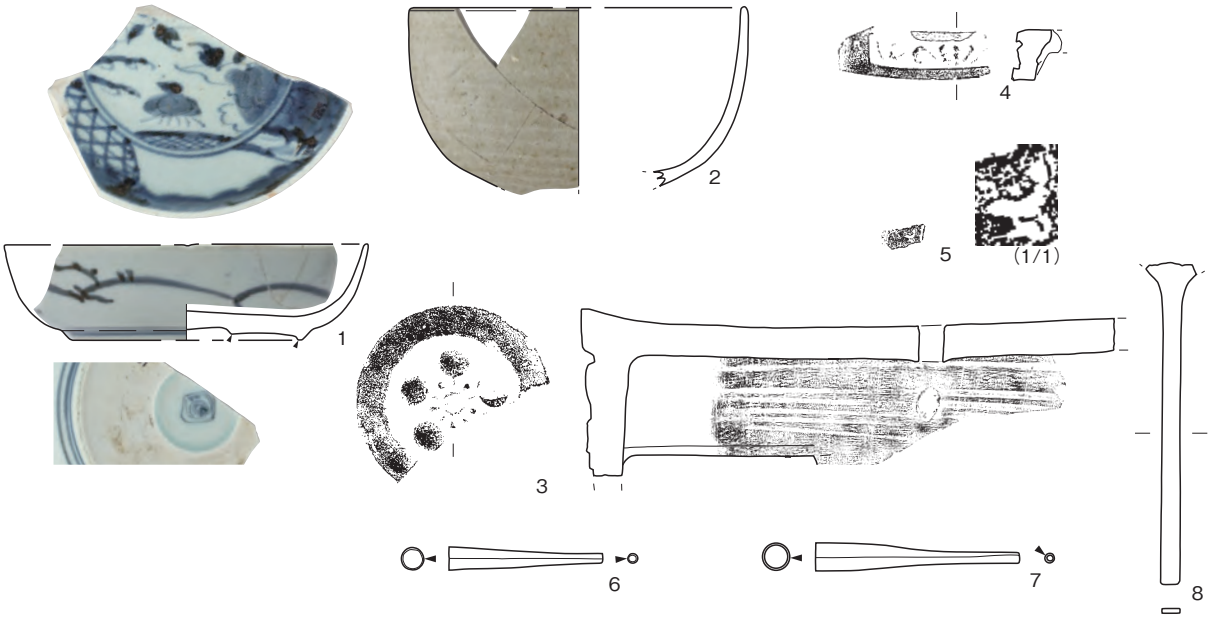


SE46

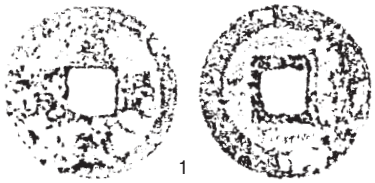


SE57

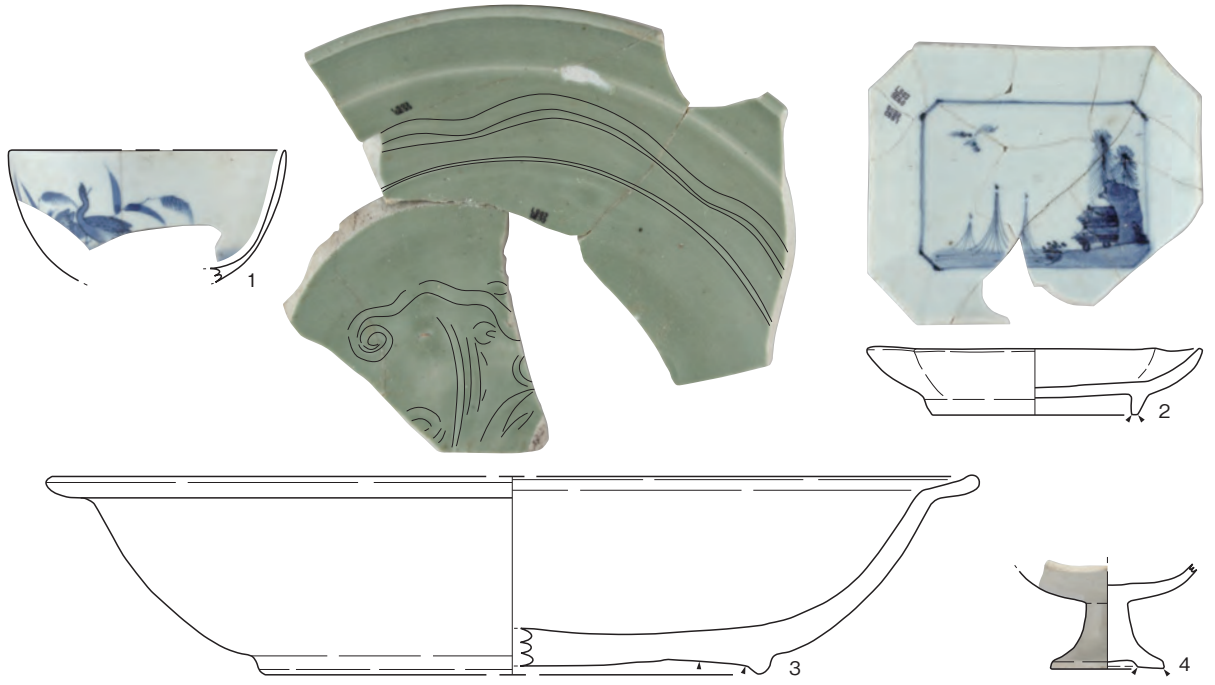
Ⅳ-41図　SE46、SE57出土遺物



SK58

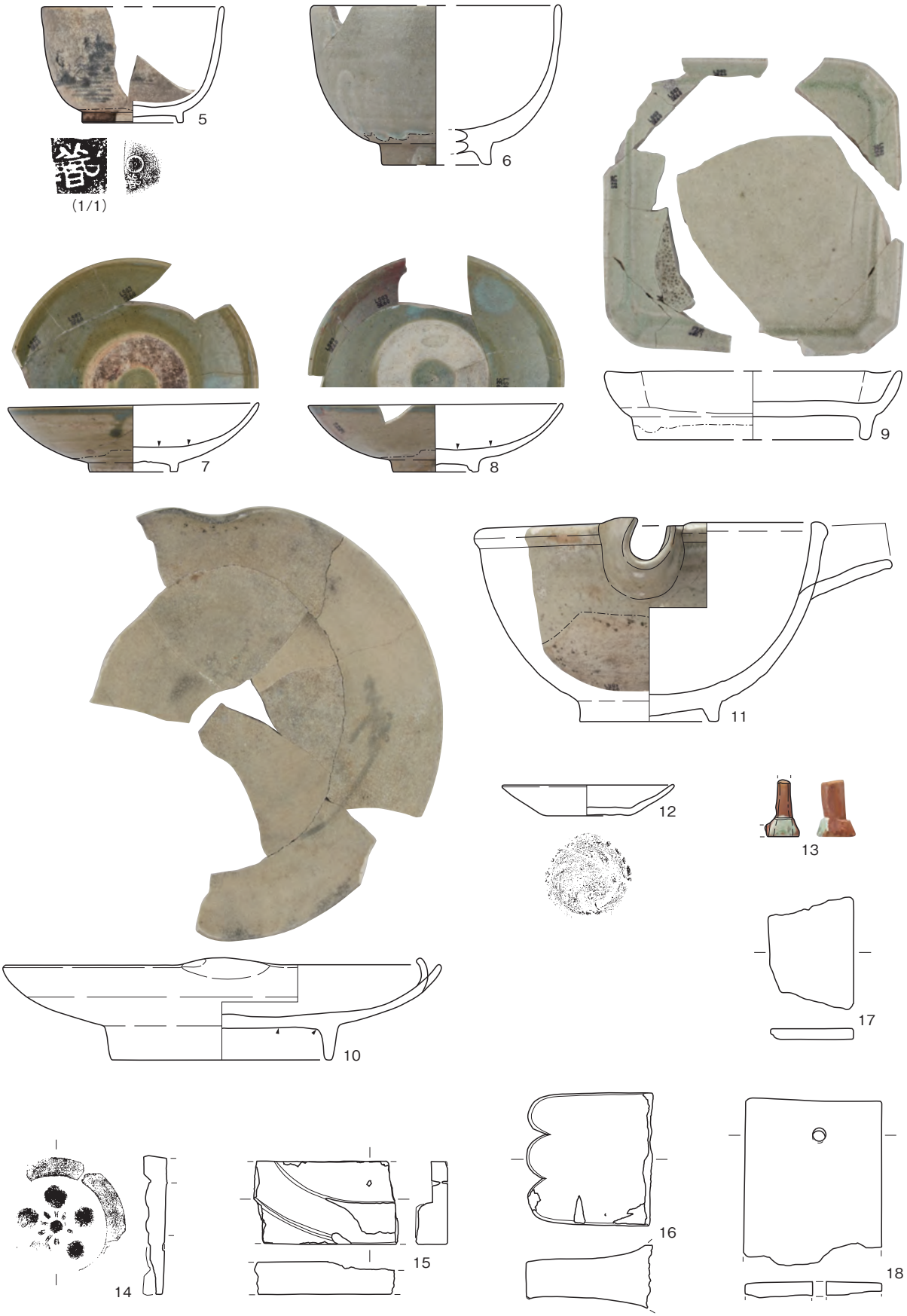


SK59

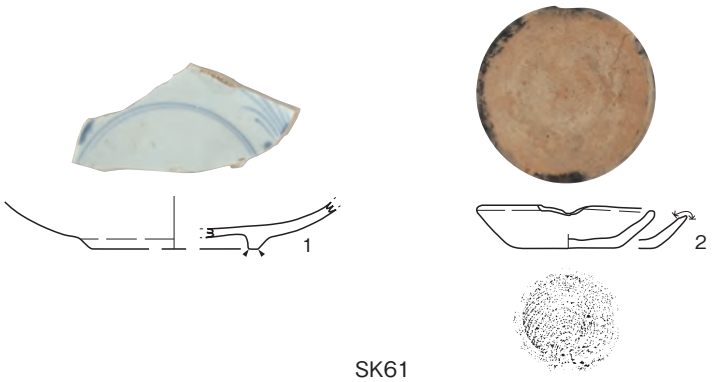


SE60(1)

Ⅳ-42図　SK58、SK59、SE60(1)出土遺物



Ⅳ-43図　SE60(2)出土遺物



SK61

SK61・121　　SP64

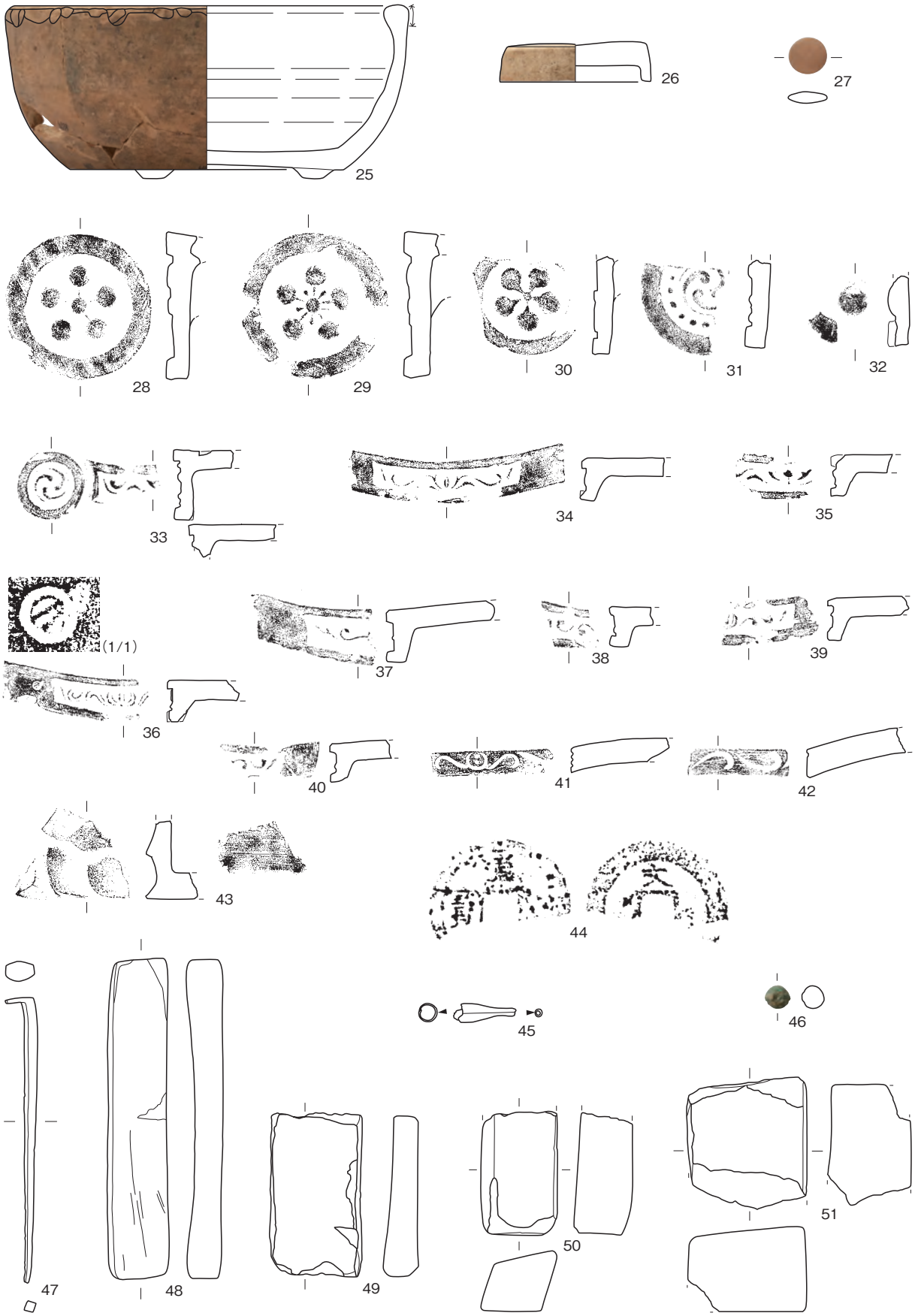
Ⅳ-44図　SK61、SK61・121、SP64出土遺物

SK70

SU77(1)

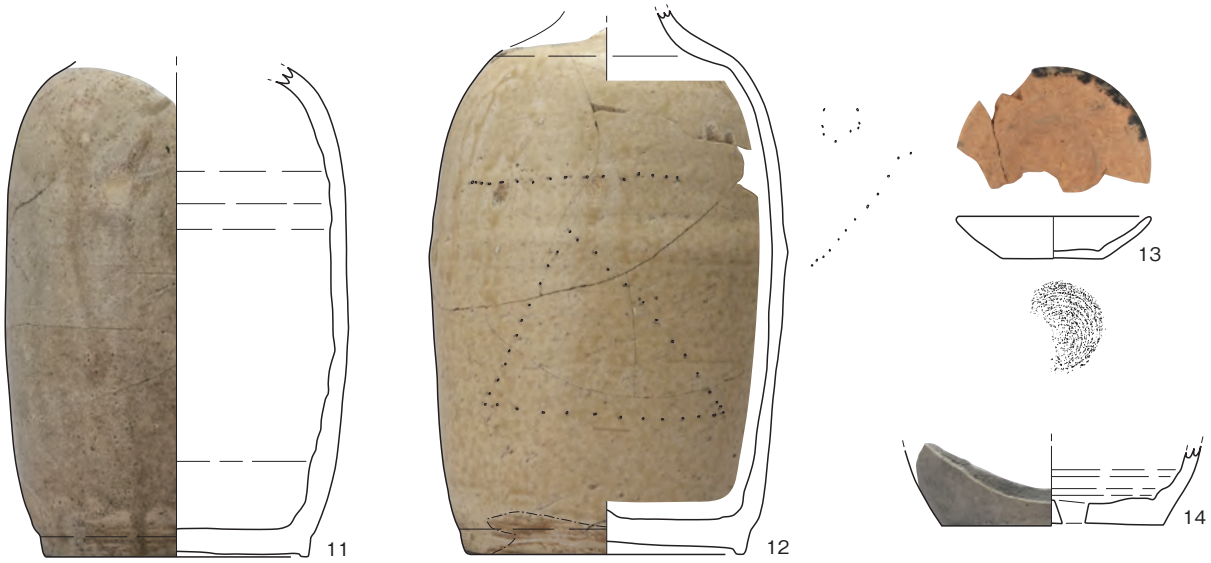
Ⅳ-45図　SK70、SU77(1)出土遺物

Ⅳ-46図　SU77(2)出土遺物



Ⅳ-47図　SU77(3)出土遺物

Ⅳ-48図　SP80、SK86(1)出土遺物



SK86(2)

SK87(1)

Ⅳ-49図　SK86(2)、SK87(1)出土遺物

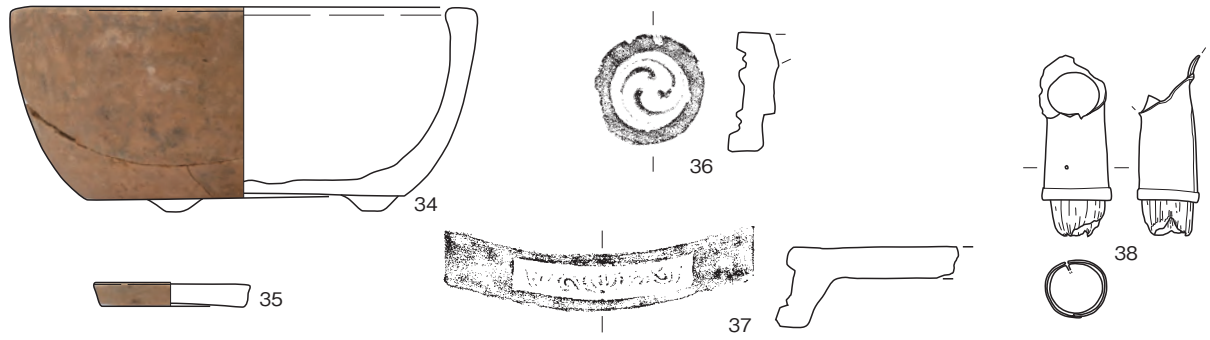
SK87(2)

SK92(1)

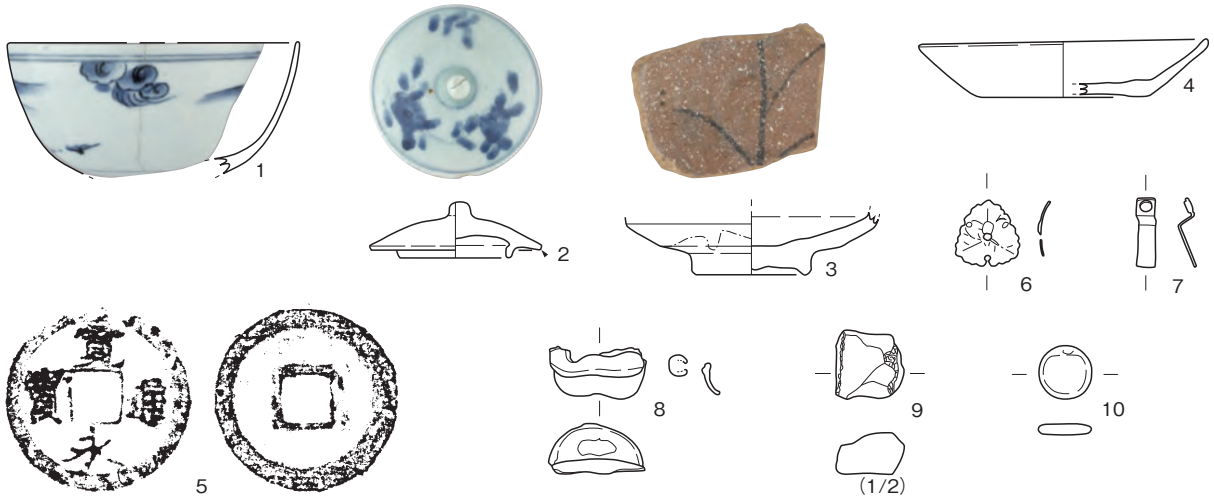
Ⅳ-50図　SK87(2)、SK92(1)出土遺物

Ⅳ-51図　SK92(2)出土遺物

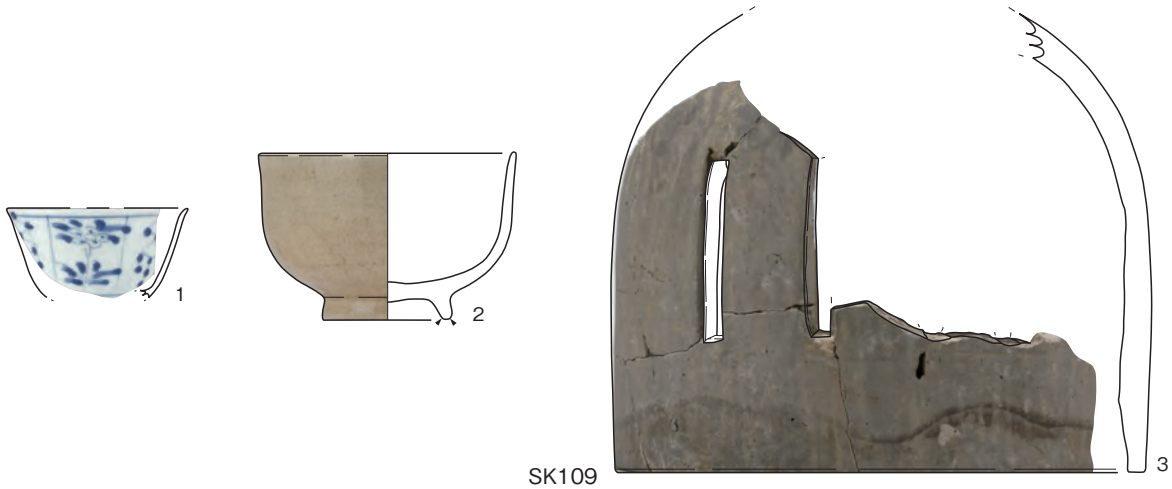
Ⅳ-52図　SK92(3)出土遺物



SK92(4)

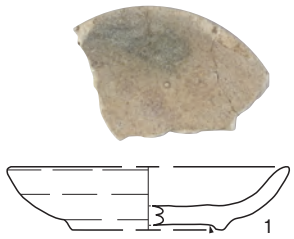


SK108



SK109

Ⅳ-53図　SK92(4)、SK108、SK109出土遺物



SX119

SK121

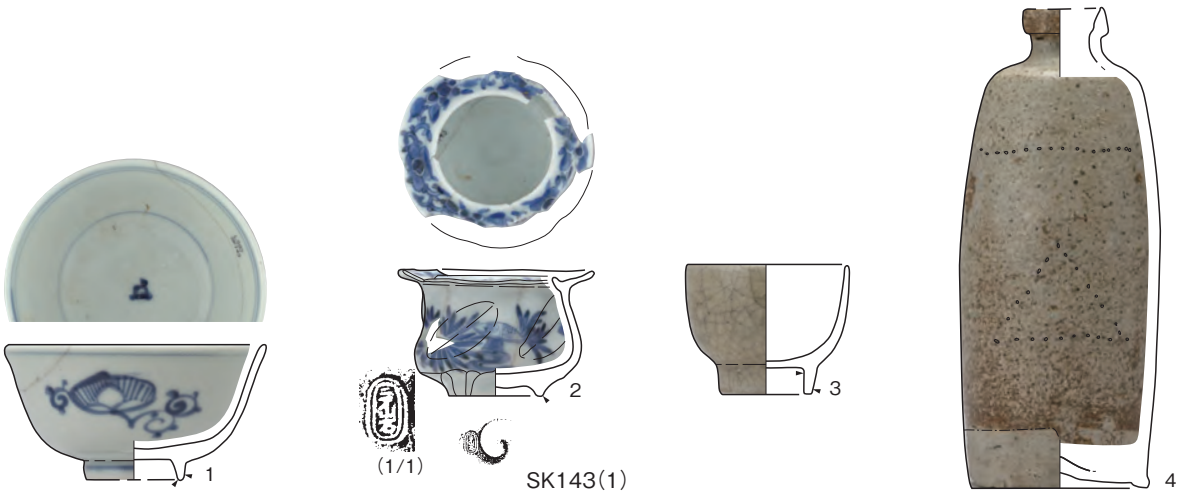
Ⅳ-54図　SX119、SK121出土遺物

SU140

SK142(1)

Ⅳ-55図　SU140、SK142(1)出土遺物

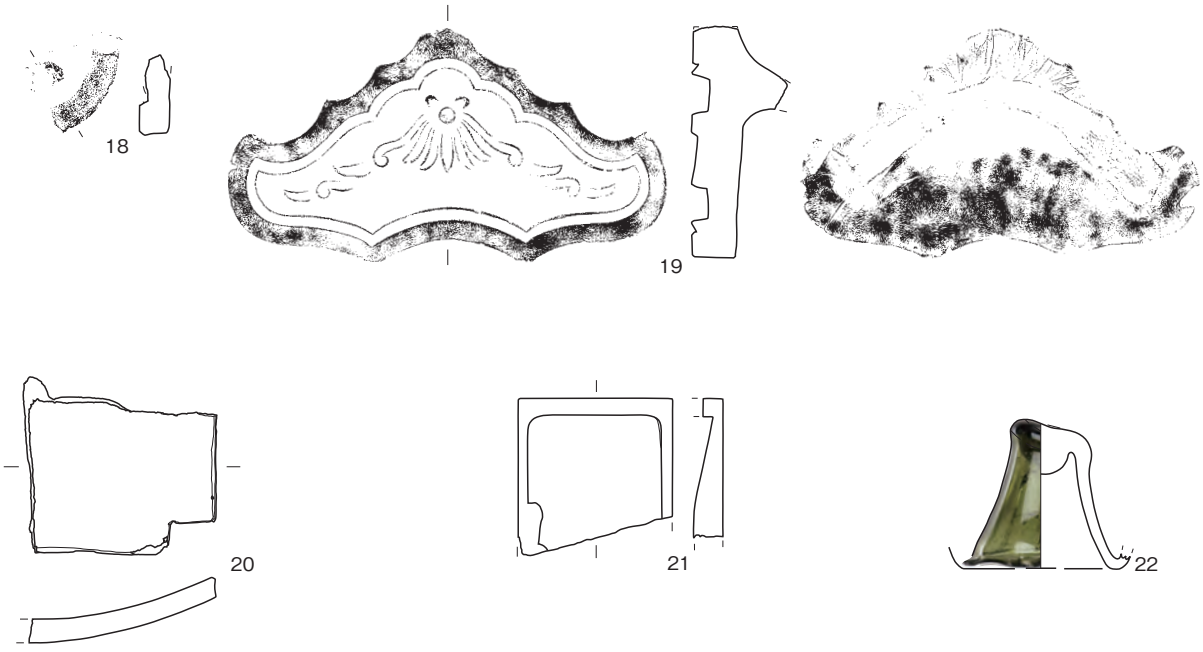
SK142(2)



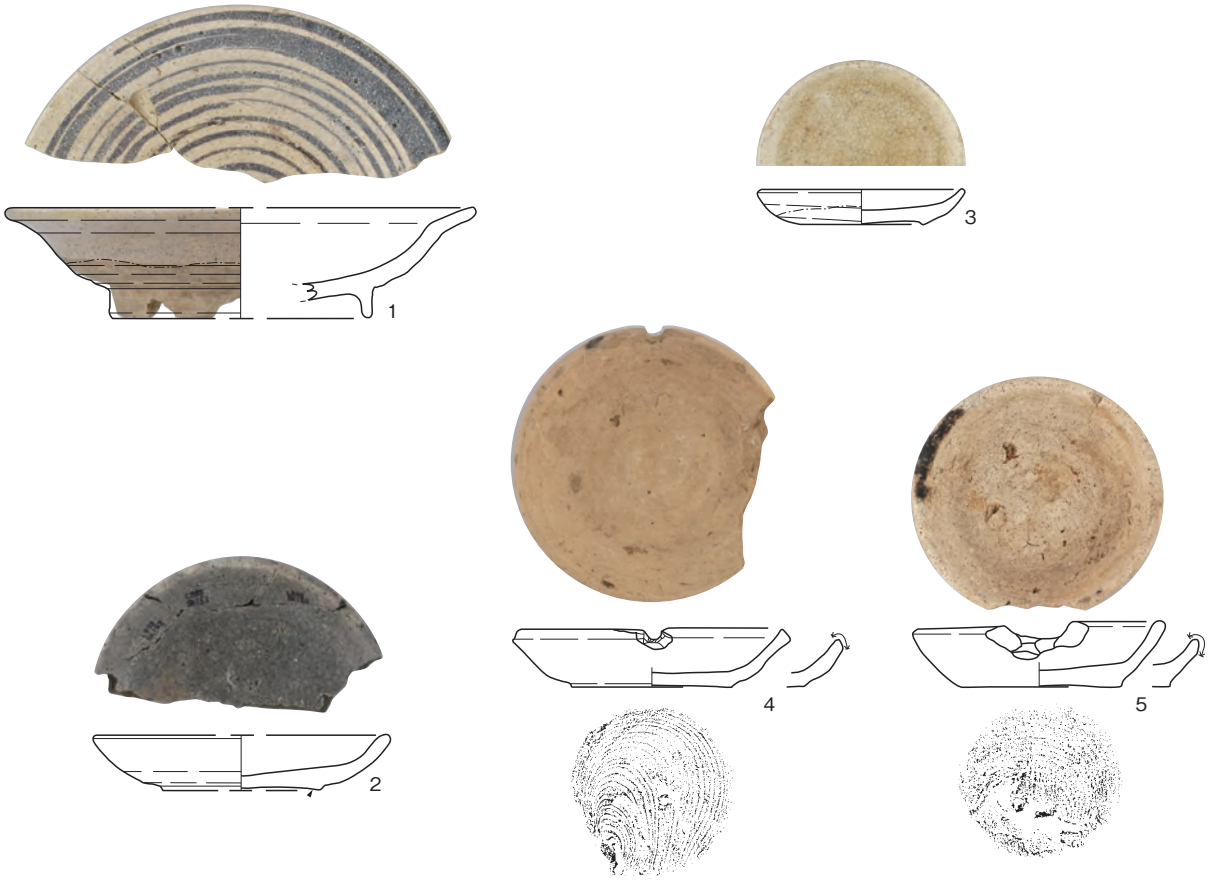
SK143(1)

Ⅳ-56図　SK142(2)、SK143(1)出土遺物

Ⅳ-57図　SK143(2)出土遺物



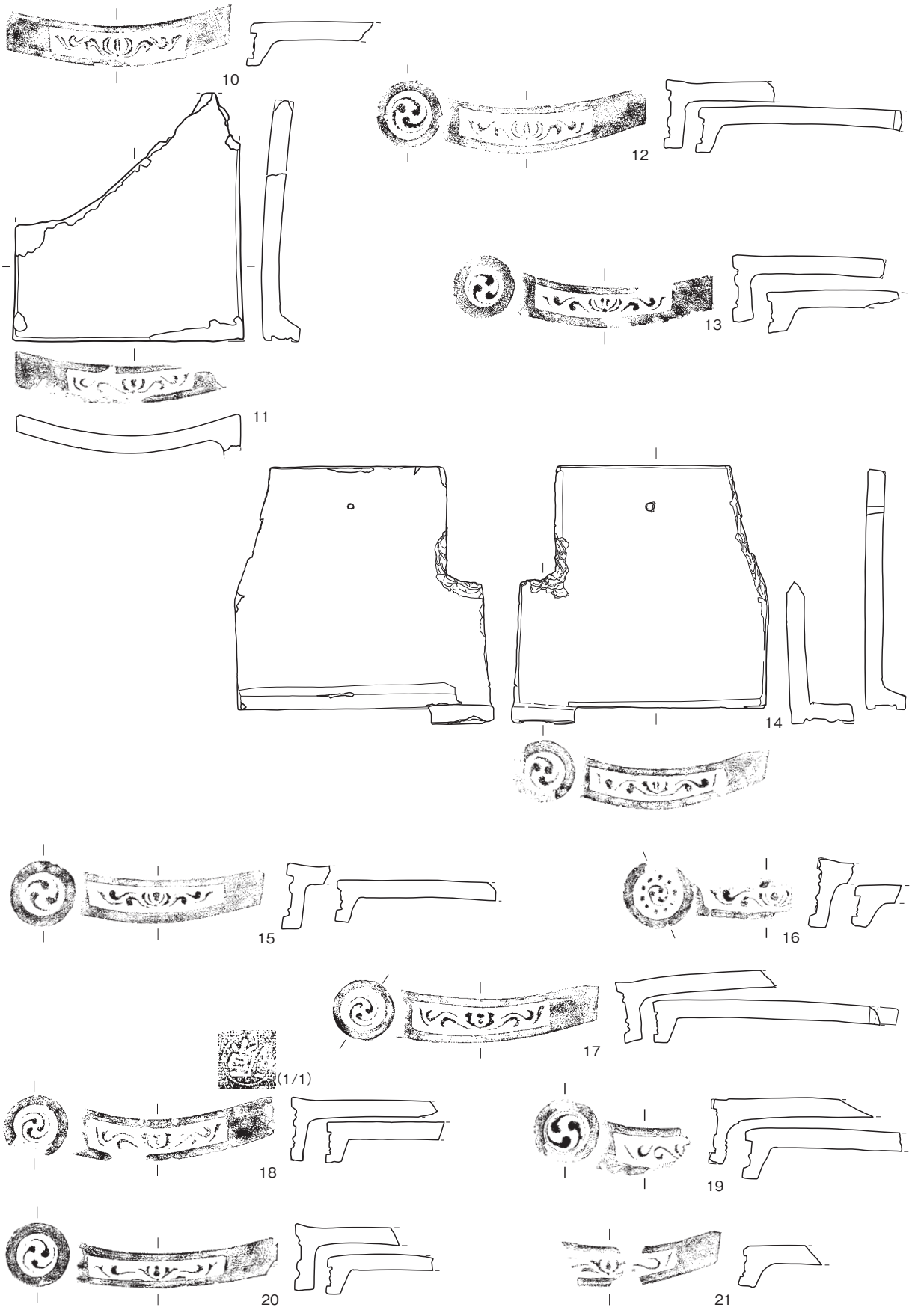
SK143(3)



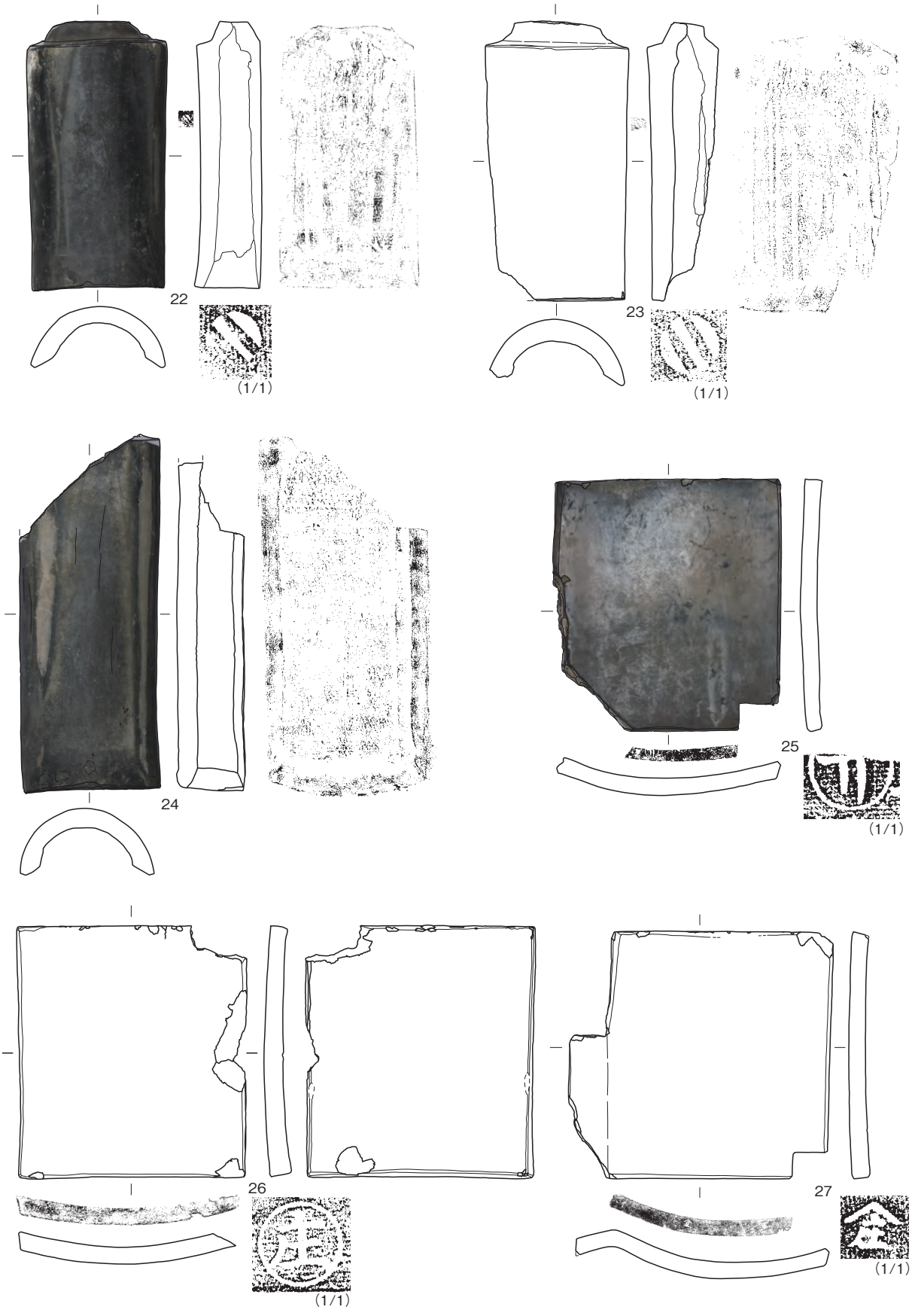
SK153

Ⅳ-58図　SK143(3)、SK153出土遺物

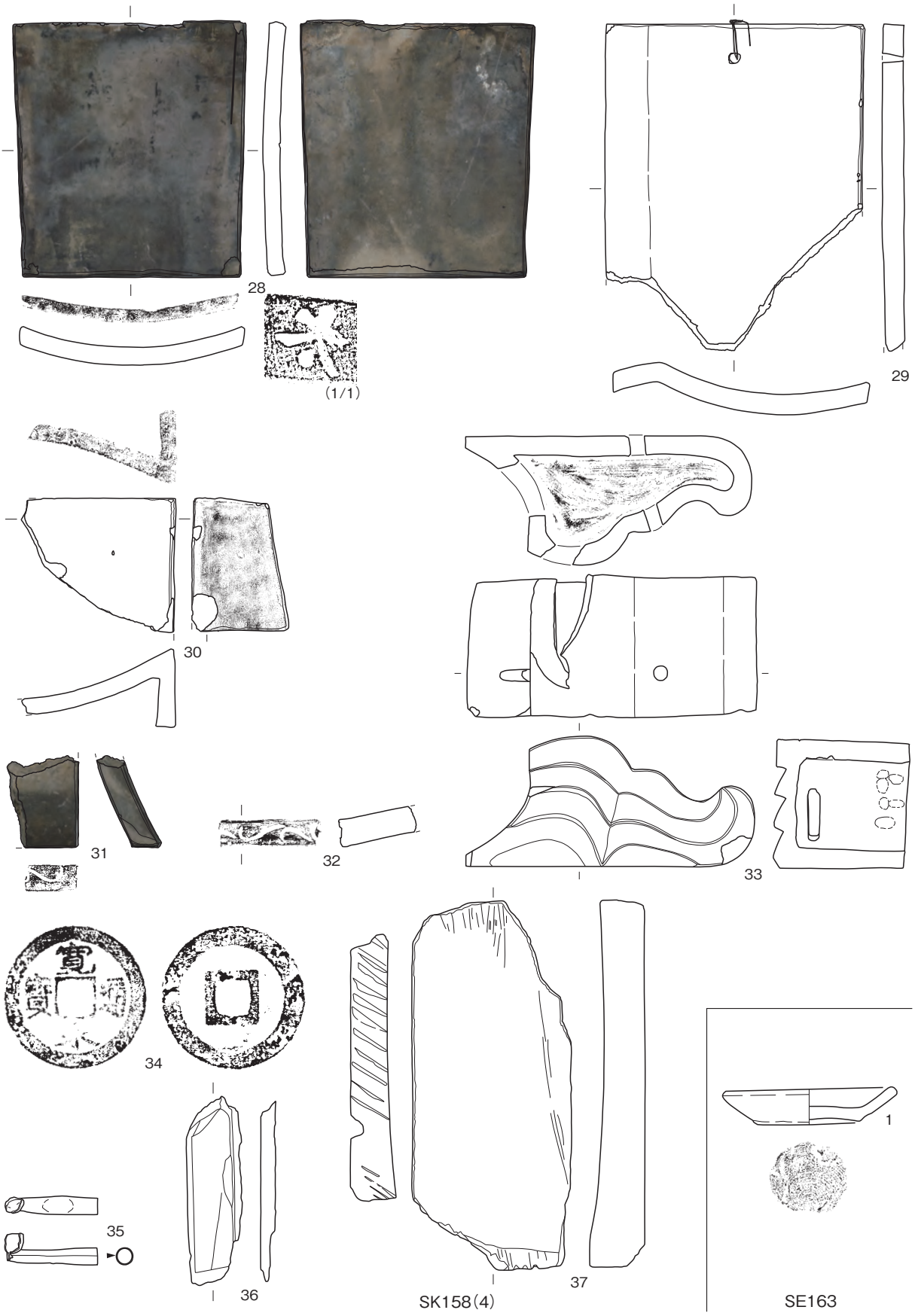
Ⅳ-59図　SK158(1)出土遺物



Ⅳ-60図　SK158(2)出土遺物

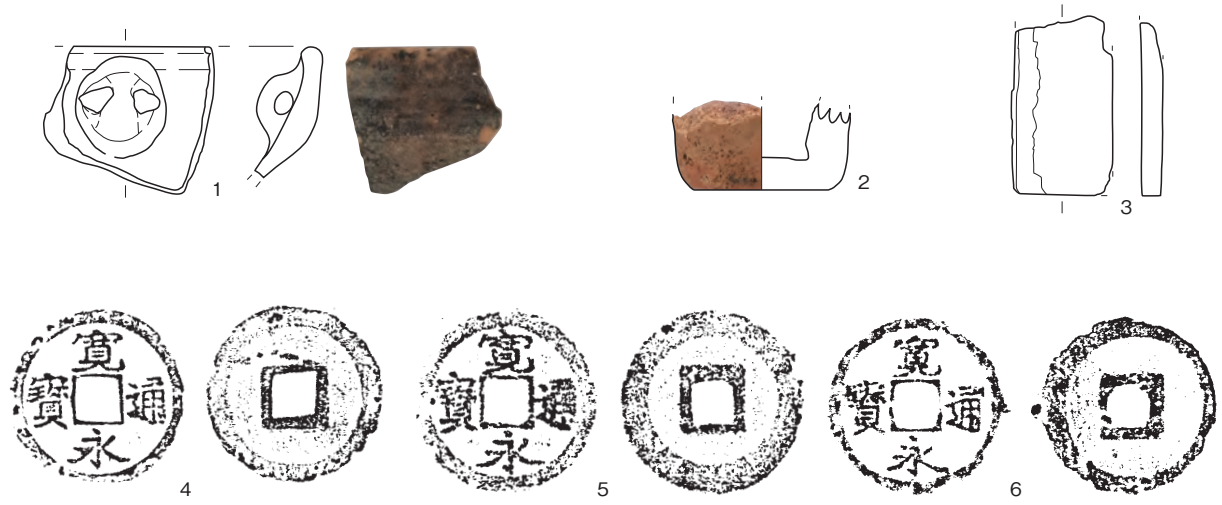


Ⅳ-61図　SK158(3)出土遺物



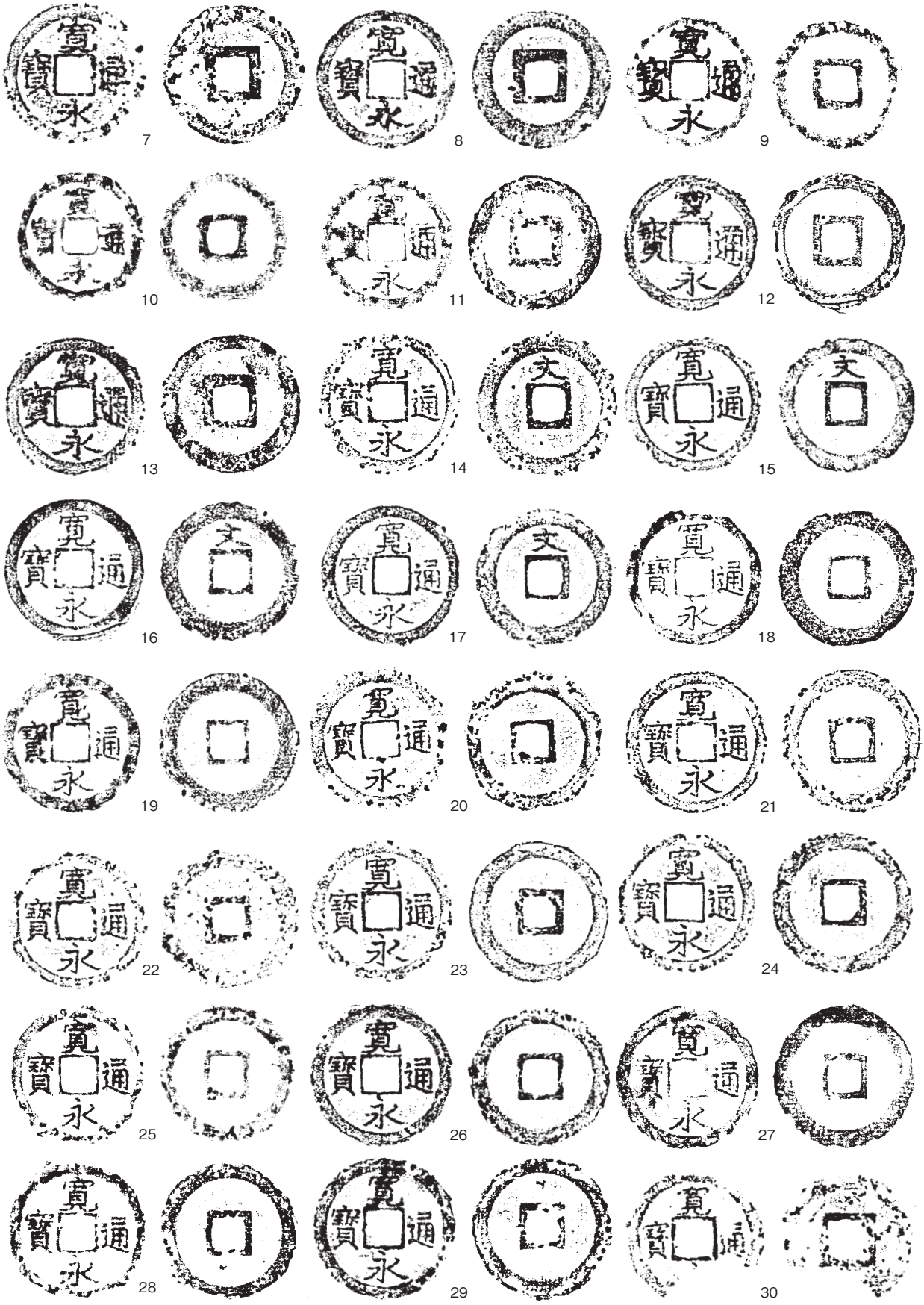
Ⅳ-62図　SK158(4)、SE163出土遺物

SK168

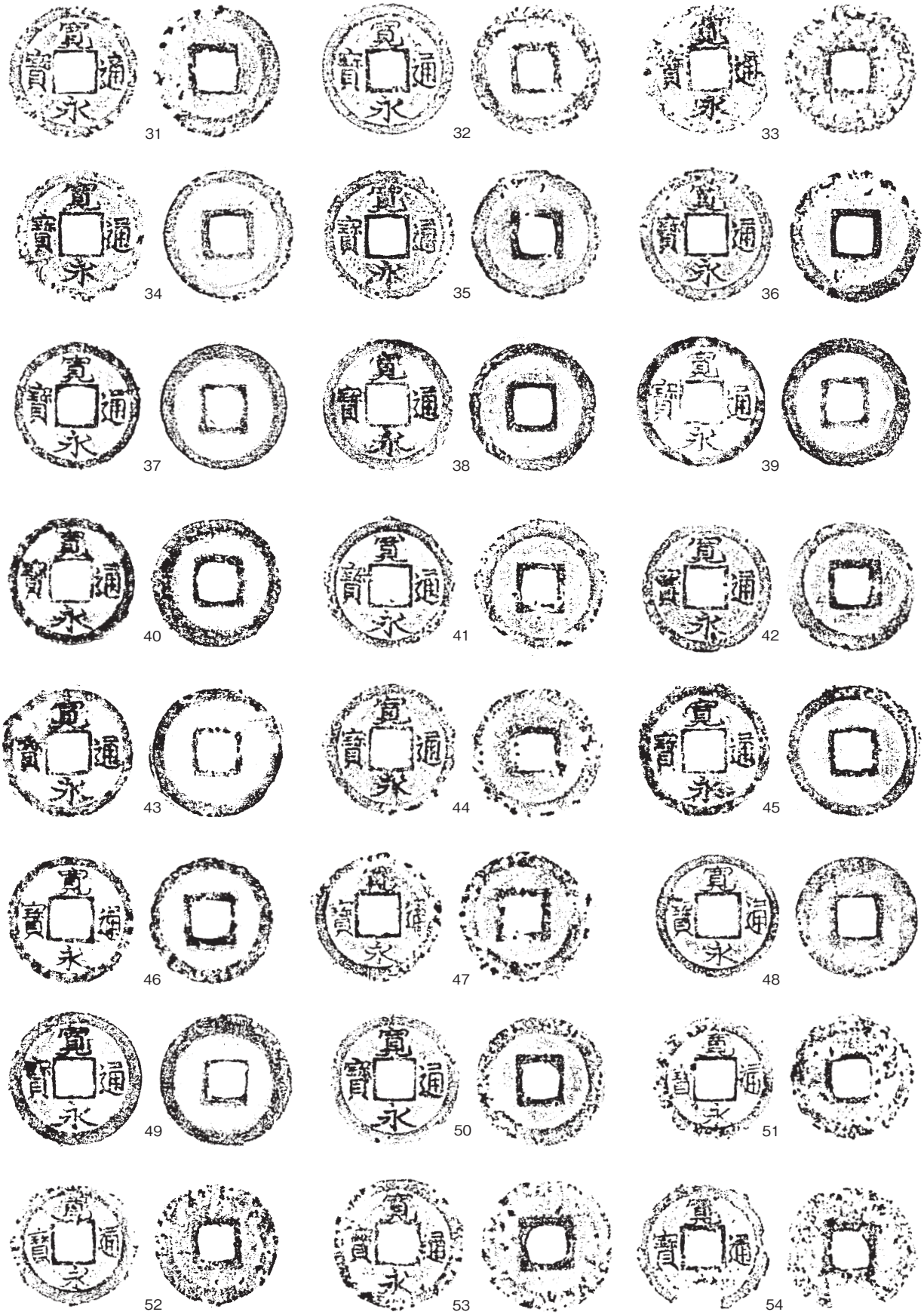


SK170(1)

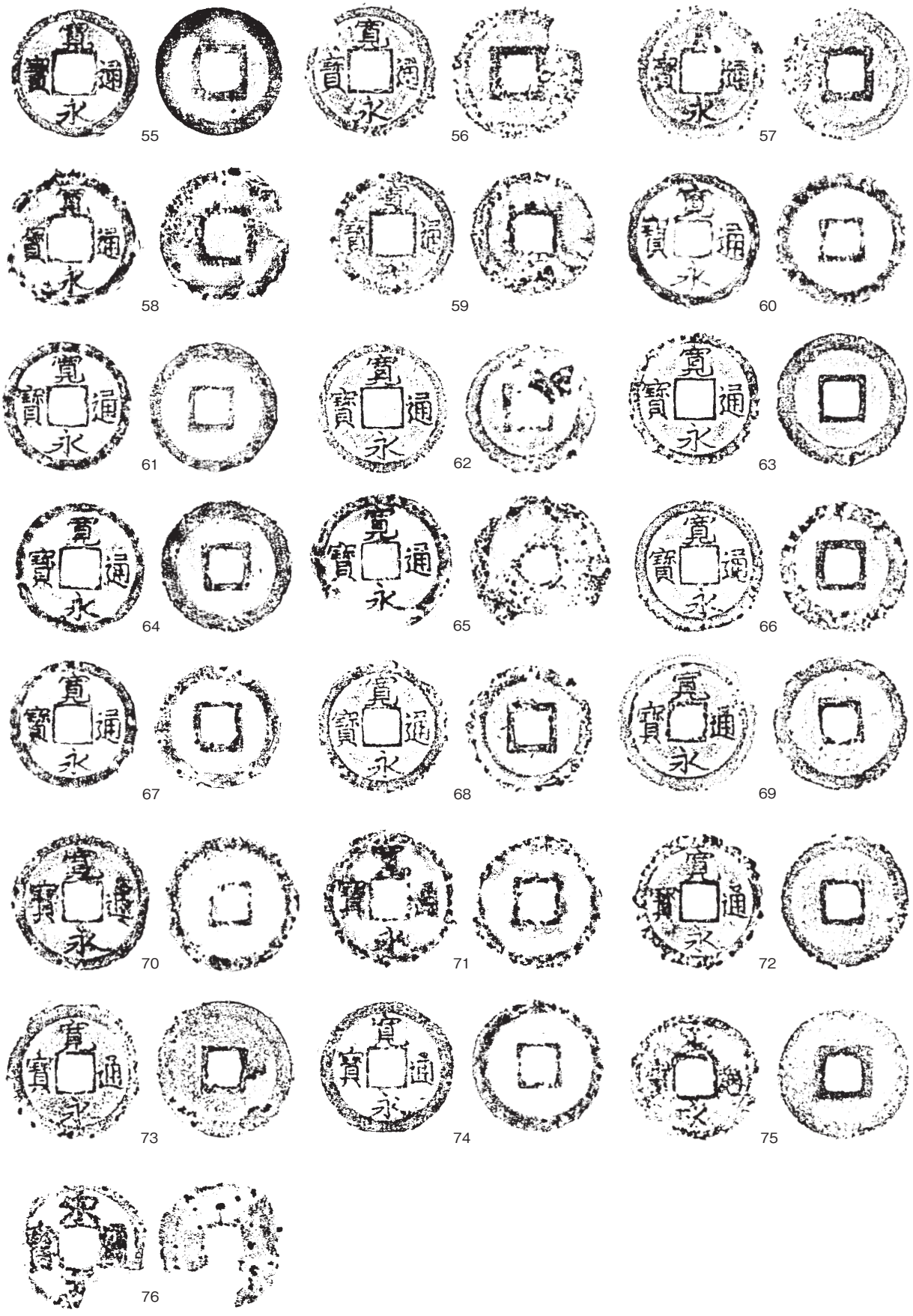
Ⅳ-63図　SK168、SK170(1)出土遺物



Ⅳ-64図　SK170(2)出土遺物

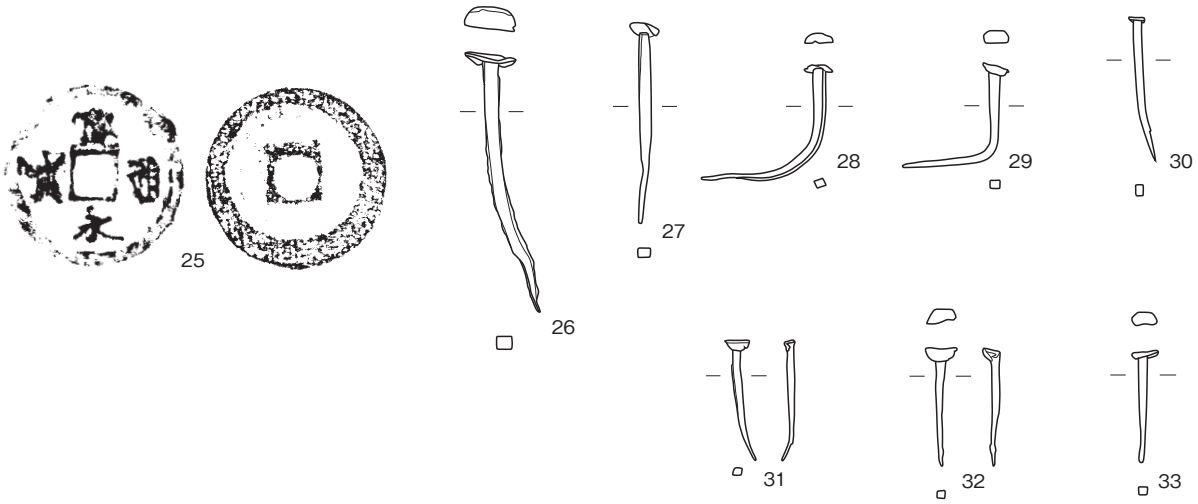


Ⅳ-65図　SK170(3)出土遺物



Ⅳ-66図　SK170(4)出土遺物

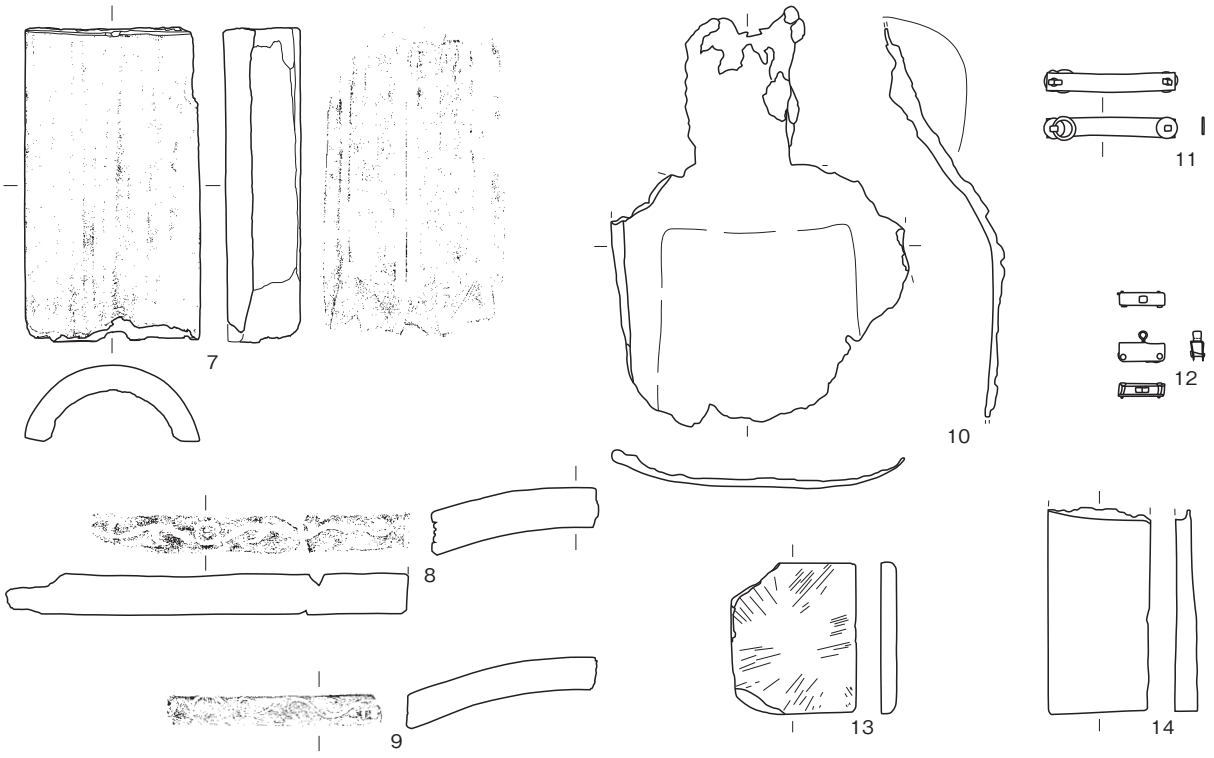
Ⅳ-67図　SK171(1)出土遺物



SK171(2)

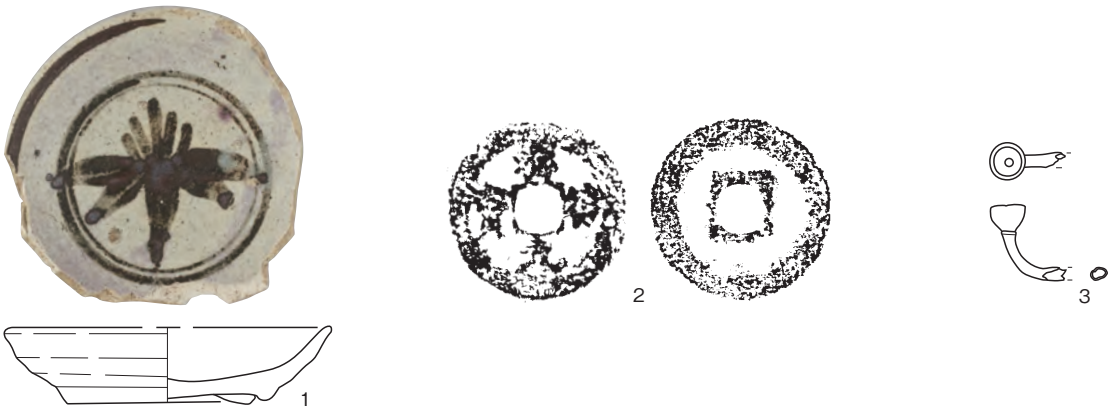
SK190(1)

Ⅳ-68図　SK171(2)、SK190(1)出土遺物

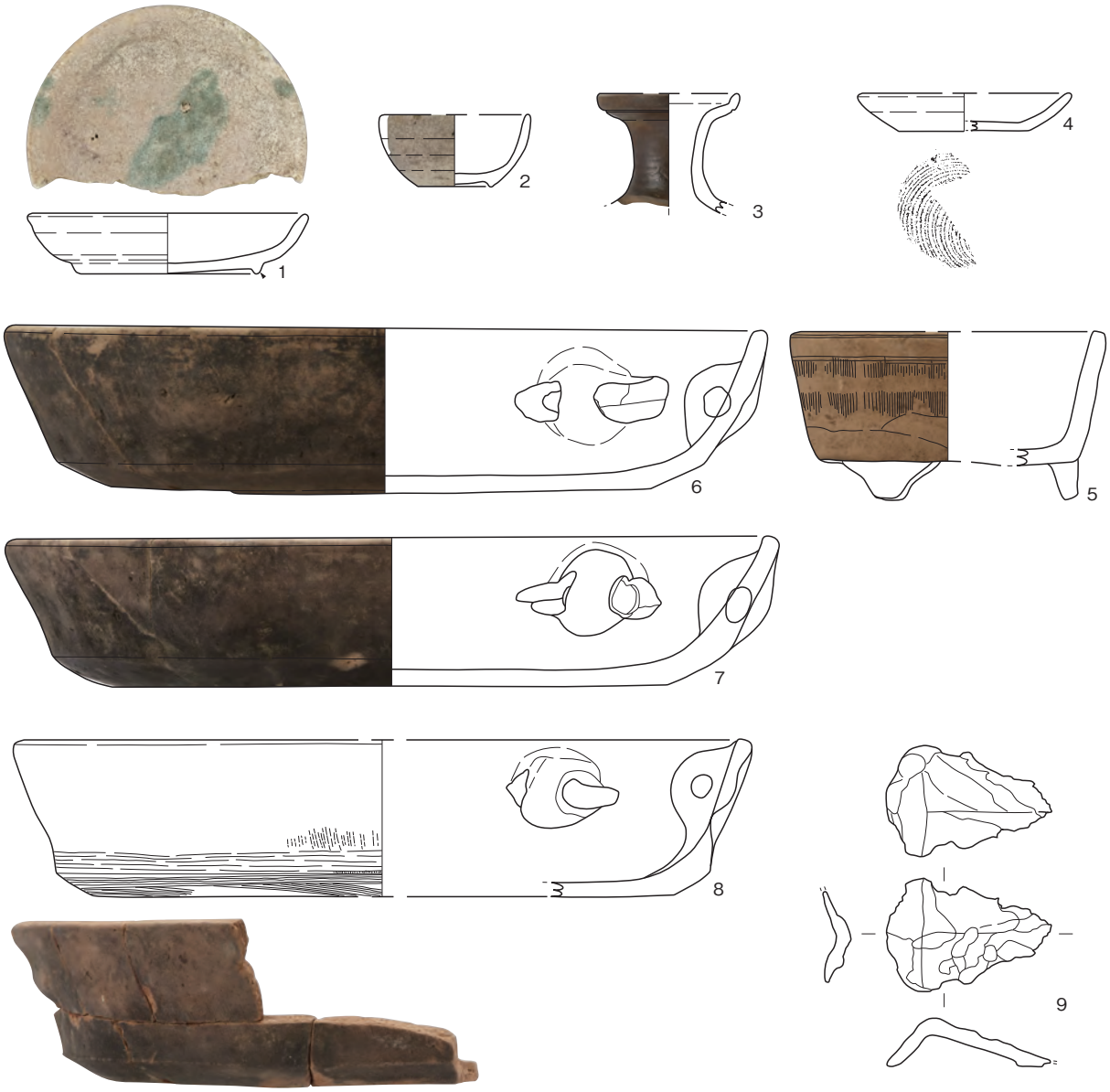


Ⅳ-69図　SK190(2)、191出土遺物

Ⅳ-70図　SU202、SK203、SK210出土遺物

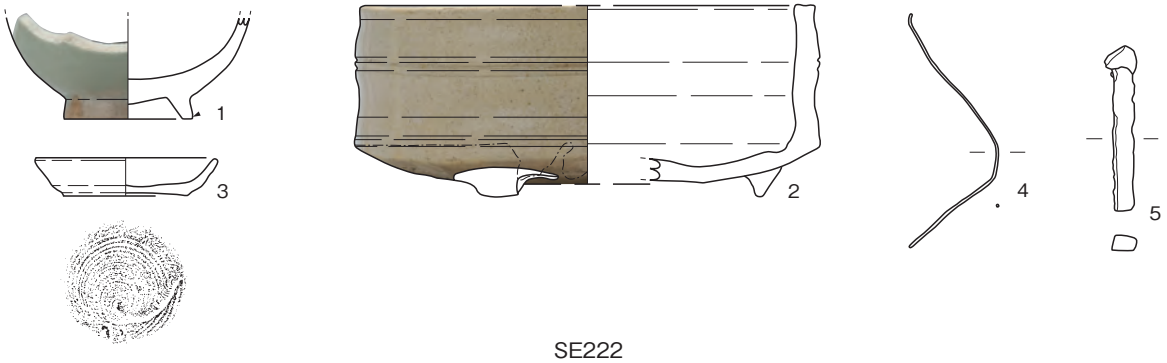


SK211



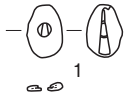
SK221

Ⅳ-71図　SK211、SK221出土遺物

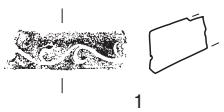


SE222

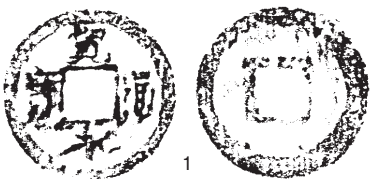
SK255



SK265

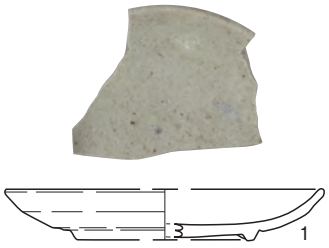


SK267

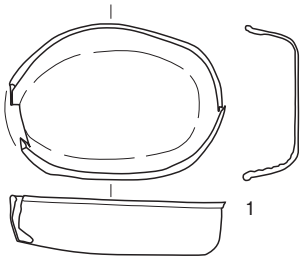


SK311

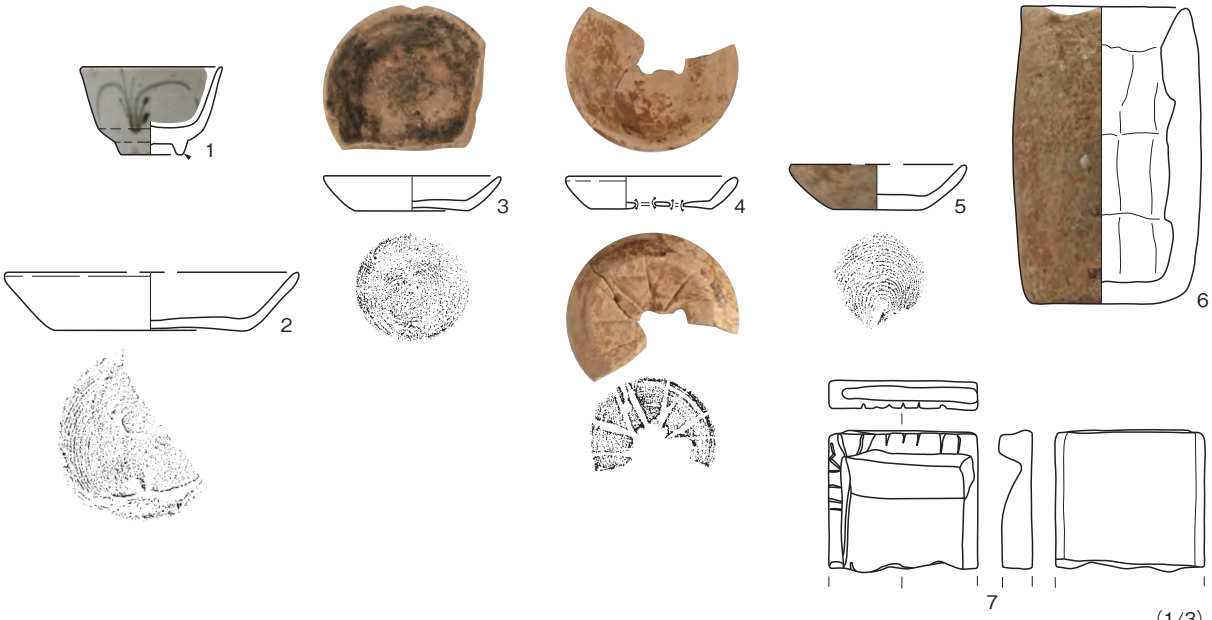
Ⅳ-72図　SE222、SK255、SK265、SK267、SK311出土遺物



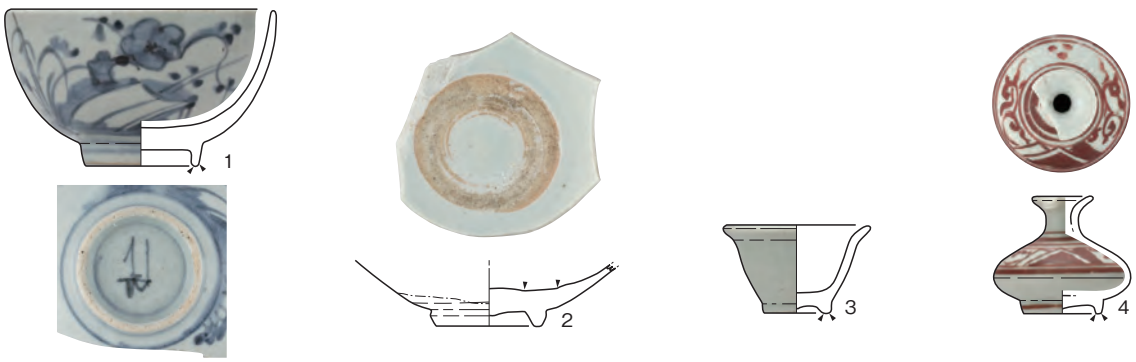
SK312



SK375



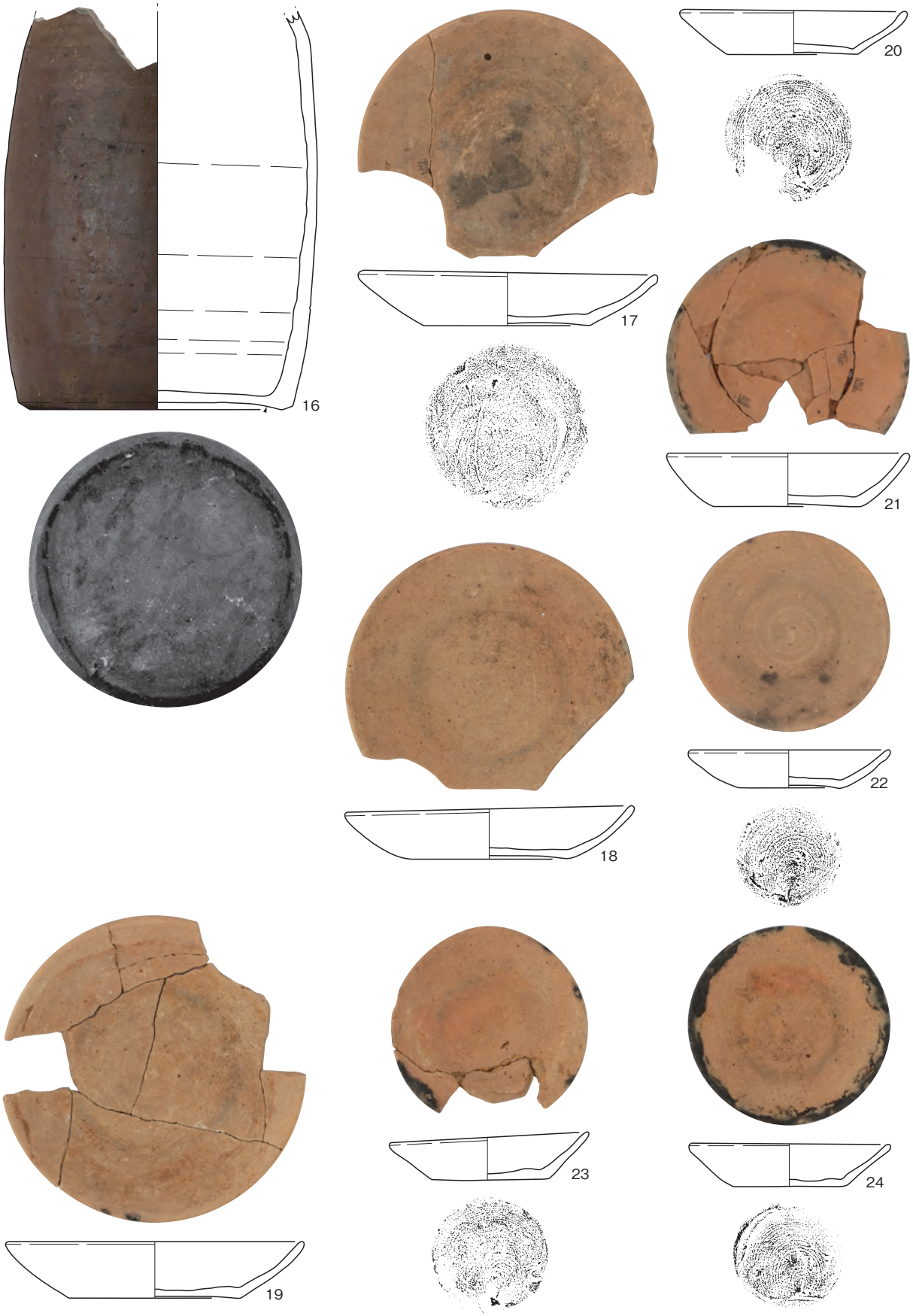
SK380 (1/3)



SU381(1)

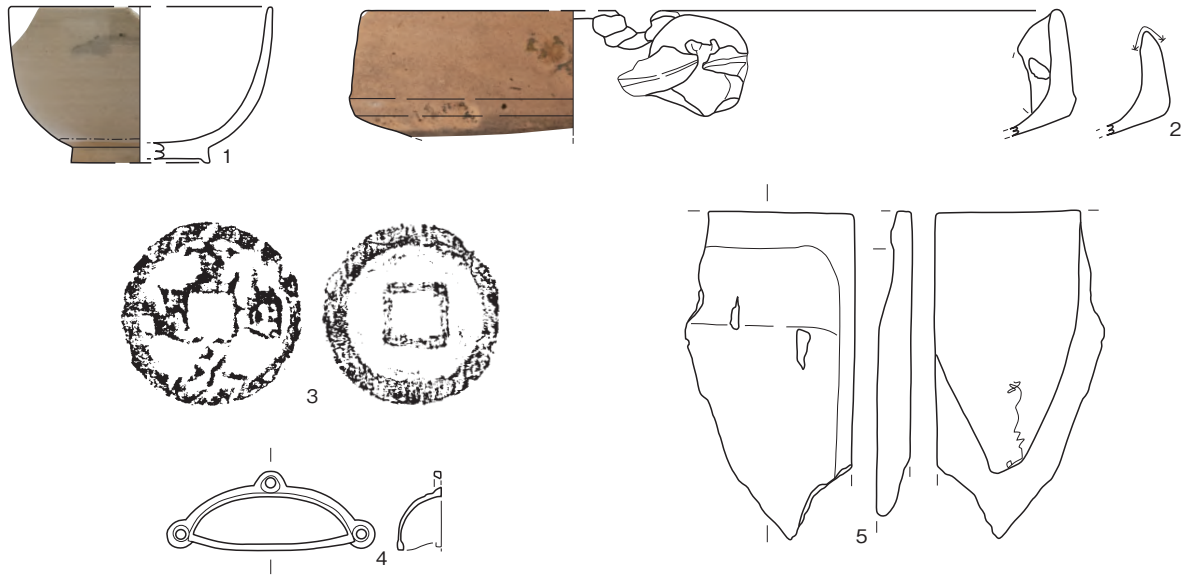
Ⅳ-73図　SK312、SK375、SK380、SU381(1)出土遺物

Ⅳ-74図　SU381(2)出土遺物

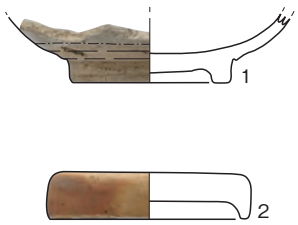


Ⅳ-75図　SU381(3)出土遺物

Ⅳ-76図　SU381(4)出土遺物

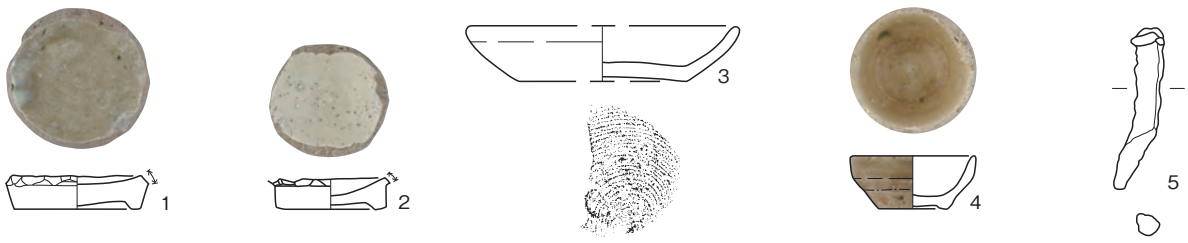


SK382



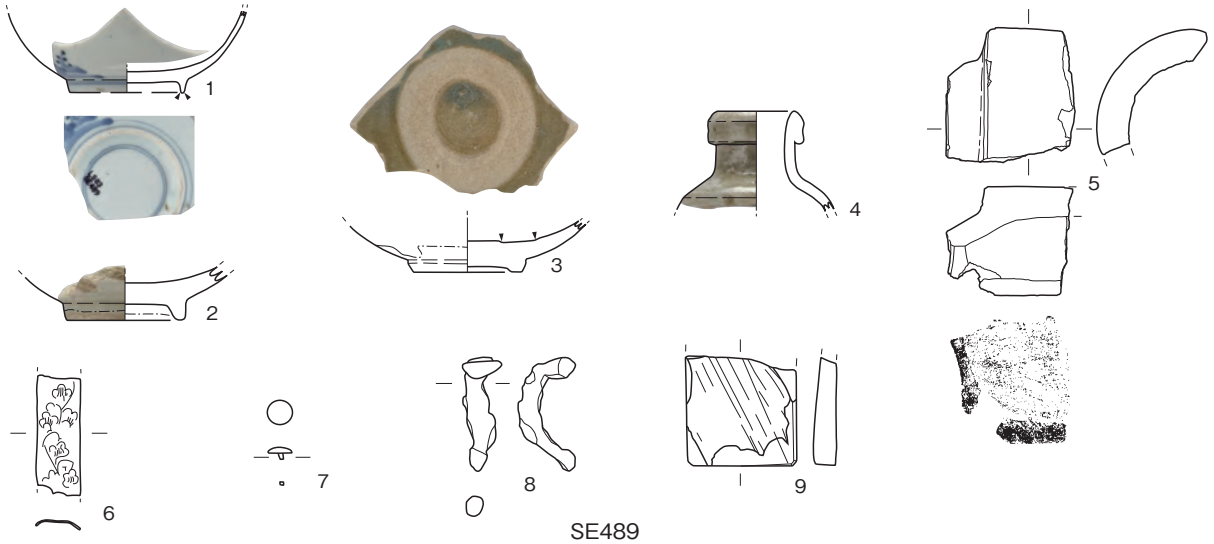
SK383

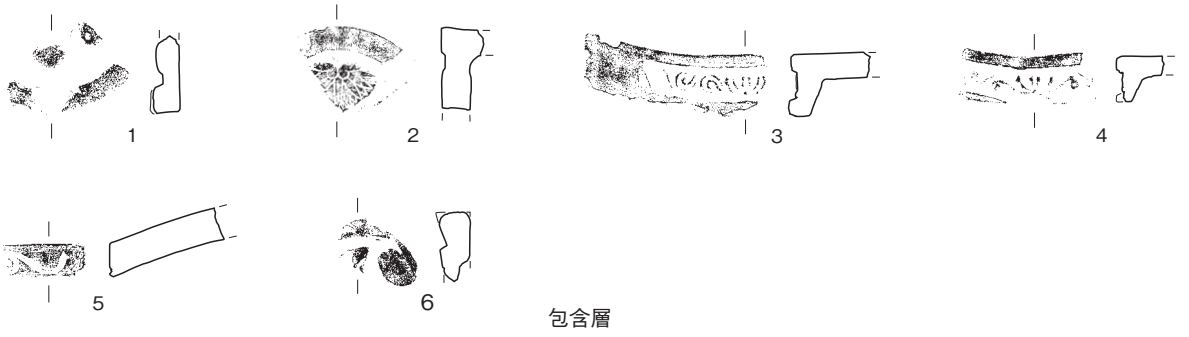
SU400

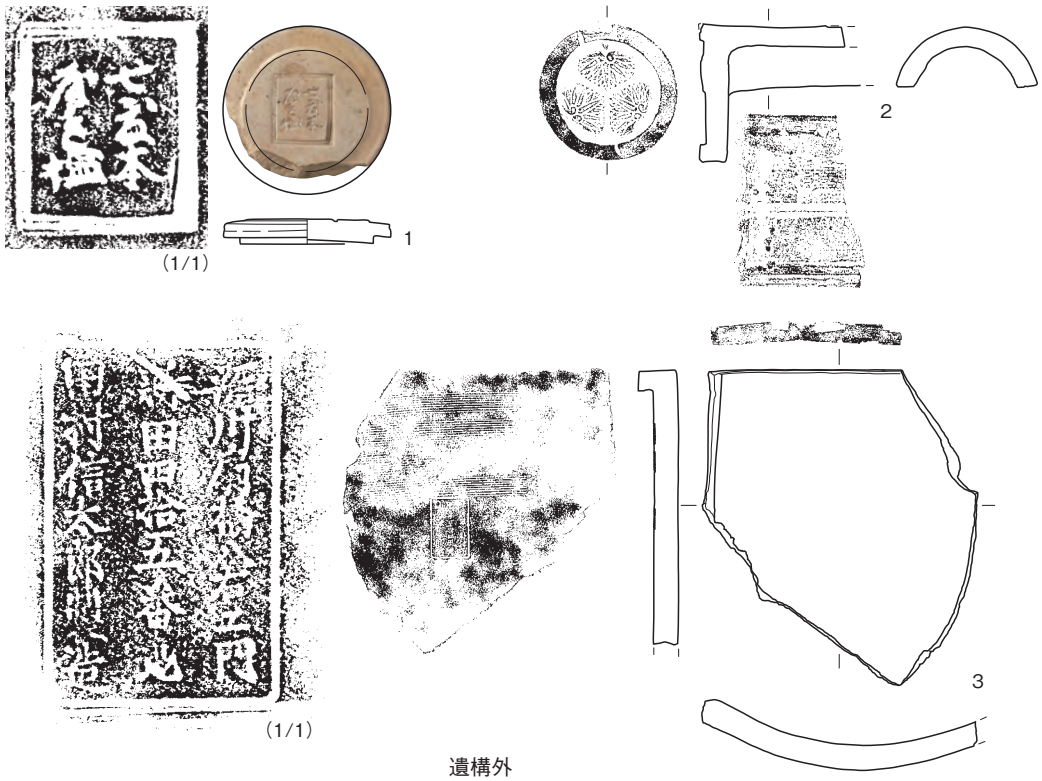


SK412

Ⅳ-77図　SK382、SK383、SU400、SK412出土遺物







Ⅳ-78図　SE489･包含層･遺構外出土遺物

小 結

2002年、法学政治学系総合教育棟(旧・法学系総合研究棟)地点を調査した当時は、周囲の調査事例は法学部4号館・文学部3号館地点と工学部14号館地点のみであり、発掘成果から得られる加賀藩邸西域部の様子も限定的なものであったが、近年の開発事業の増加に伴い、本郷通り沿いの調査事例も増加する中、加賀藩邸西域部の様相、そこに近接する本郷六丁目町屋の屋敷地裏手空間の様相、加賀藩邸から近代前田邸への変遷、さらには前田邸の様子なども明らかになりつつある。

なお本地点では、文学部3号館地点で検出されているような江戸時代以前の遺構は検出されなかった。Ⅰ-1表に示したように、江戸時代以前の遺構、遺物が確認されたのは、2-2文学部3号館地点、93伊藤国際学術研究センター地点、99-3法学部3号館増築地点、146・168アカデミックコモンズ地点のみであり、伊藤国際学術研究センター地点以外は、いずれも本地点東側に位置する三四郎池に続く傾斜面上に位置する地点である。

以下では、本調査で明らかになった事柄や、略報で課題とした部分を中心にまとめたい。

本地点は、天和2年(1682)の火災を契機として、それ以前は工学部14号館地点と同じ先手組屋敷に、以後は加賀藩邸に帰属する事が文献史料調査によって明らかとなった(詳細は研究編宮崎氏論考を参照)。よって今回検出された17世紀前半代の遺物が出土した遺構は、先手組屋敷に伴う可能性が高い。略報刊行時は、そのような知見はなく、加賀藩邸が上屋敷となる以前の下屋敷時代の遺構か、あるいは加賀藩邸となる以前の遺構と考えており、大きな成果であった。

近代以前の包含層(1層)は、調査区北西部付近にのみ遺存している状況が確認され、1層を切り込んで検出される遺構(1面の遺構)は、わずか8基にとどまり、ほぼ全ての遺構が関東ローム層(地山)上で検出されている。検出された460基のうち、出土陶磁器・土器類の年代から年代比定が可能であった遺構は91基あり、それらは17世紀前半から19世紀前半と推定され、本地点が江戸時代を通じて利用されていた場所であったことが確認された。中でも18世紀代に比定される遺構が最も多く、当概期の利用が最も活発であった事が推測される。

検出された遺構は、5ラインから南側、Cライン付近を南北に延びる溝SD31から東側に集中する。第Ⅲ章でSD31は18世紀前～中葉(東大編年Ⅴb期)に比定される遺構で、本地点が加賀藩上屋敷となって比較的早い段階に、何らかの地境(境界)として構築された遺構と推察したが、前述したような遺構の分布状況は、やはりSD31が地境として機能し、溝を挟んで異なる土地利用状況であった事を裏付けるものであろう。

1面で確認された遺構8基は、小ピットと土坑のみであり、出土遺物から年代比定が可能であった6遺構の廃絶年代は、18世紀後半から19世紀前半代に限定される。その中には、明和9年(1772)の目黒行人坂火事を原因とする廃棄遺構と推定されるSX39や、主軸方向、出土遺物の年代観から溶姫御殿北側の「御住居附長屋」に関するゴミ溜の可能性が窺われるSK87、SK92も確認されている。

ローム面で検出された遺構452基のうち、もっとも多く確認されたのはピットの308基であり、それに土坑の105基(年代が推定できる土坑は55基。17世紀代25基、18世紀代23基、19世紀代が7基)が続く。また数は多くはないが、1面では確認されなかった地下室や井戸、溝なども確認されている。

年代比定が可能であったピットの大半は、18世紀後半から19世紀代に比定され、その多くは単独で検出され、重複して確認されるものは僅かであった。以上の事から、17世紀代、先手組屋敷であった頃は、建築物が建つような空間あるいは利用状況にはなかった可能性がある。また天和2年の火災後、加賀藩邸に取り込まれてからも、建物のスクラップアンドビルドが繰り返される場所ではなく、建物密度も余り高くない空間であった事が推測される。

ピットについで多く確認された土坑は、第Ⅱ章でも述べたように、形態や遺物の出土状況などから大きく5つのタイプに分類されるが、以下では、タイプ毎に年代や構築場所に偏りがないかを確認した。

1. 平面形状は不整形を呈し、遺構壁面や坑底の凹凸が顕著であり、いわゆる採土坑と推定されるもの。

このような特徴を有す遺構は6基(SK42、SK81、SK221、SK315、SK363、SK382。SK221、SK363は植栽痕の可能性も指摘されている)確認されている。SK42を除けば、本地点北寄りに位置し、17世紀代に比定される遺構が半数以上を占めることから、採土坑と推定される遺構の多くは、本地点が先手組屋敷であった頃に構築されたものか、あるいは、天和2年の火災後、本地点が加賀藩邸に組み入れられるタイミングと前後して構築された可能性が考えられる。

2. 平面形状は方形を呈し、壁が坑底からほぼ垂直に近い形で立ち上がるもの。坑底に複数の柱穴を伴うものと、ないものとが確認される。

柱穴をともなうタイプは4基(SK86(19c)、SK92(19c)、SK142（19c)、SK170（17c後～18c))確認され、SK170以外は、19世紀代に比定される。また柱穴を伴わないタイプは10基(SK143(19c)、SK145(17c？)、SK190(19c)、SK238(？)、SK267(18前)、SK297(？)、SK311(18c？)、SK378（？)、SK383（18前？)、SK385（？))確認され、年代比定が可能な6基をみると、17世紀代が1基、18世紀代が3基、19世紀代が2基となっている。よって2の多くは、加賀藩邸に取り込まれてから構築された可能性が高く、中でも坑底に柱穴を伴うタイプは、主として19世紀代に構築されたと推測される。また坑底に柱穴を伴う方形土坑は、9ラインより北側のみに分布し、柱穴を伴わない方形土坑は、調査区全域に分布する。

3. 平面形状は長方形を呈し、覆土に大量の瓦が廃棄されているもの(SK158、SK171)。

調査時は、平面形状、大量の瓦で埋められている事、廃絶年代が18世紀後半代であるなど、共通点が多いと感じていたが、調査研究を進めると、異なる点もある事が明らかとなった。すなわち、1. 遺構の主軸方向角が異なる。SK158は主軸②と、SK171は主軸①と一致する。2. 出土した際の瓦の状態、またその内容が異なる。SK158出土の瓦は、ほぼ二次的な火熱を受けておらず、完形ないし半完形のものが多いが、SK171のそれは、ほぼ二次的な火熱を受け、破片が多い。瓦の種類も、SK158は軒桟瓦、桟瓦が中心ではあるが、その他にも様々な種類の瓦(丸、平、熨斗、鬼、けらば瓦など)を確認する事ができる。一方、SK171も軒桟瓦、桟瓦が中心であるが、それについで熨斗瓦が多く、多種類の瓦が確認されたSK158とは様相を異にする。さらに言えばSK171は、瓦とともに、釘も多く出土しており、釘の頭部をカウントしたところ、70本以上を数えた。瓦を葺く時に使用されていた釘も一緒に廃棄した可能性がある。

なおSK158の瓦は二次的な火熱は受けていないが、未使用瓦ではなく、本地点あるいは別の場所で使われていたものが、SK158に客土とともに廃棄されたと推測される。

4. 平面形状が円形を呈す土坑。

覆土の堆積状況などから、便槽または水溜と判断されたもの(SK108、SK380)、坑底に埋桶状の痕跡が確認されたもの(SK203)などがある。5基のうち、4基がSD31より西側で検出され、うち3基が17世紀代に比定されている。数は少ないが、円形土坑の多くは、加賀藩邸以前の先手組屋敷に伴う可能性が高い。

5. 平面形状は円形ないし不整形を呈し、掘方坑底、壁などの凹凸が顕著であり、いわゆる植栽痕と判断される遺構。

25基確認されており、うち年代比定が可能な6基(SK70（17c前）、SK110（18c前）、SX119（17c？)、SK153（17c、19c。中心17c）SK221（17c前)、SK363(17c？))の大半は、17世紀代に比定されるものであり、それらは本地点が先手組屋敷であった時期に帰属するものであろう。また植栽痕と判断された遺構の多くは、SD31の周囲か、8ライン以北では、調査区西壁寄りに南北に分布する状況が確認された。藩邸内の地境に伴う植栽か、または中山道との地境、生け垣などに利用された植栽であろうか。

土坑についてまとめると、本地点で検出された不整形や円形を呈す採土坑や植栽痕、円形を呈す水溜あるいは便槽と推定される土坑は、本地点が先手組屋敷であった17世紀代に、方形を呈す土坑(瓦が大量廃棄される方形土坑も含)は、加賀藩邸に組み入れられた18世紀代に主に確認される土坑である事が推測される。また19世紀代に比定される土坑は、数は少ないが、坑底に柱穴を伴う方形土坑が中心であり、それらの検出範囲はC～Dグリッドライン、1～7グリッドライン内に限定されそうである。

以上のように検出数の多い遺構のみに注目しても、本地点が先手組屋敷であった時期と、加賀藩邸に組み入れられてからの時期とで、土地利用に変化があったことは容易に想像できる。さらに加賀藩邸に組み入れられてからも、土坑の数が19世紀代に大きく減少するなど、藩邸内での本地点の利用状況に変化があった事が予想される。同年代の藩邸絵図面をみると、これまで建物がほぼ皆無であった本地点に「御露地役所」が建てられたり、あるいは南側に隣接して溶姫御殿が建築されるなど、それまでの「空地」や「ハタ」「ヤブ」などのように、比較的自由度の高い場所から、何らかの規制がかかる場所に変化した事が推測される。

略報において、本地点では3つの主軸方向角(1. 本郷通りと同軸(主軸②)、2. 春日通りと同軸(主軸①)、3. 両軸とは異なる)が、17世紀～19世紀のいずれの年代においても確認されることから、主軸方向角の違いは年代差によるものではない可能性を指摘した。今回改めて確認したところ、主軸①と一致する38遺構中、18世紀代の遺構が16基と最多であり、19世紀代の遺構は5基、17世紀代の遺構は2基であった。主軸②と一致する43遺構中、17世紀代の遺構が11基と最多であり、18世紀

代の遺構が7基、19世紀代の遺構が1基であった。また両軸以外の主軸方向角を有す遺構は8基確認され、17世紀代の遺構が3基で最多であり、18世紀は1基、19世紀は1基であった。以上をまとめると、主軸方向角が主軸①と一致するものは18世紀代の遺構が圧倒的に多く、17世紀代はごく少ない。一方、主軸②と一致するものは、17世紀代の遺構が多く、19世紀代の遺構はごく少ない。また両軸と異なる主軸方向角を有すものは、全体数は圧倒的に少ないが、17世紀代の遺構に多い傾向が看取される。

以上の状況から、遺構の主軸方向角の違いは、空間利用の変化と無関係ではなさそうである。すなわち本地点が先手組屋敷であった17世紀段階に構築された遺構の主軸方向角は主軸②に、加賀藩邸に取り込まれた18世紀段階に構築された遺構の主軸方向角は、主軸①と一致するものが多い事が指摘できよう。ただし、主軸②と一致する主軸方向角をもつ遺構も一定数は確認され、それらは18世紀中葉以降に比定されるものが多い(SK25は東大編年Ⅵb期、SK121は東大編年Ⅵb～Ⅶ期、SK158は18世紀後葉、SK191は18世紀中葉)。当概期の藩邸絵図面をみると、本地点付近に何かしらの構築物が描かれるようになり、これまでより活発な利用がなされるようになった事が容易に想起されるが、それは藩邸内での本地点の空間的な位置づけが変化した事によって起こった事象であり、それに伴って検出される遺構の主軸方向角も変化した可能性が高い。

遺物についても少し触れておく。特徴として挙げられるのが、1つの遺構からの遺物量の少なさと、瓦が占める割合の高い事である。しかし、その中でも例外であったのがSK25であり、陶磁器・土器類を中心にコンテナ45箱ほど出土している。陶磁器・土器類を中心とする人工遺物に加え、貝類を中心とした動物遺体も出土しており、陶磁器類の年代観から、18世紀中葉頃までの藩邸全体の日常的な廃棄行為に伴う遺物群である可能性が推測される。

本地点で検出されたピットの規模は小さく、また、大半は単独で検出されるものであった事から、出土した瓦の多くは、藩邸内の別の場所から持ち込まれ、廃棄された可能性が高い。SK158からはコンテナに約50箱、ついでSK171からはコンテナに約5箱、SK25からはコンテナに約2箱、SU77、SK190からはコンテナに約1箱出土している。陶磁器類の年代観から、SK190以外は、いずれも18世紀中葉から後葉の遺構である。さらに付け加えると、SK171から出土した瓦は大半が二次的な被熱を受けているが､それ以外の遺構から出土した瓦は、二次的な被熱を受けたものは少ないという違いも認められる。

巻頭図版5に掲載したSK42から出土した輸入陶磁器類も注目される。二次的な火熱を受けた茶陶または文房具のみで構成され、出土状況から、加賀藩邸内において、このようなものが保管・収蔵されていた場所(蔵？)が被災し、それが客土ともに本地点へ持ち込まれた可能性が高い。なお、富山藩邸内を調査した医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点のSK299からも、同じく火熱をうけた茶道具類がまとまって出土しているが、それらには国産陶器類が含まれ、SK42ほど文具類が多くはないという違いも確認される(詳細は研究編湯沢論考を参照)。

小結としては、やや雑駁になった感が否めないが、調査成果を受けたより詳細な分析については、研究編の各論考に委ねる。

○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

○生産地

A－輸入陶磁器

- A1　景徳鎮窯系
- A2　漳州窯系
- A3　徳化窯系
- A4　龍泉窯系
- A5　宜興窯系
- A6　朝鮮
- A7　ベトナム
- A8　ヨーロッパ
- A9　福建・広東系
- A10 西アジア

B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－万古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－江戸在地系*
R－三田系
S－飯能系
T－薩摩系
Z－不明

○器種

1. 碗	2. 皿･平鉢	3. 大皿･大皿鉢	4. 燗徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉･火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺･甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 漫瓶	29. 擂鉢	30. 餌入れ
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	
63. あんか	64. 煙硝擂鉢	65. 乳棒	66. 硯屏	67. 釜

* 本報告では人形・玩具のみで使用

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類

東大陶磁器・土器分類 Ver.4.1（■は新規、▲は Ver.4 で修正を加えたもの。各分類の詳細は年報 10 参照）

◎ＪＡ１－－景徳鎮窯系
◎ＪＡ２－－漳州窯系
◎ＪＡ３－－徳化窯系
◎ＪＡ４－－龍泉窯系
◎ＪＡ６－－朝鮮
◎ＪＡ８－－ヨーロッパ
■◎ＪＡ９－－福建・広東系

◎ＪＢ群－－肥前系磁器
○１－－碗
・ＪＢ－１－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（底部無釉）
・　〃　ｃ（高台断面三角の製品、長吉谷窯指標）
・　〃　ｄ（高台断面シャープな「Ｕ」字状で高台高が高い、蓋付有、高尾窯Ⅳ～Ⅵ層指標）
・　〃　ｅ（高台断面シャープな「Ｕ」字状で高台高が低い、蓋付有）
・　〃　ｆ（高台径が小さい半球形の薄手碗）
・　〃　ｇ（絵付・作りの粗雑な碗）
・　〃　ｉ（高台高が高、慣用名：小広東碗）
・　〃　ｊ（高台径が小さい腰の張る碗、慣用名：小丸碗）
・　〃　ｋ（大振りの筒形碗、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｌ（筒形碗）
・　〃　ｍ（慣用名：広東碗、蓋付有）
・　〃　ｎ（端反形碗、蓋付有）
・　〃　ｏ（腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗）
・　〃　ｐ（高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有）
・　〃　ｑ（高台が「ハ」の字状に開く碗、大振りで腰が張る、蓋付有）
・　〃　ｒ（朝顔形、蓋付有）
▲　・　〃　ｓ（丸碗形、幅広高台）
・　〃　ｔ（体部が直線的に開く大振りの碗、内側に主文様、慣用名：うがい茶碗）
・　〃　ｕ（JB- 1 - ｄのやや小振りの碗形、コンニャク判が多い）
・　〃　ｖ（梅樹文が描かれた粗製の碗）
・　〃　ｗ（高台径が大きく腰の張る碗、コンニャク判が多い）
・　〃　ｘ（見込み蛇ノ目釉剥ぎ、粗製）
▲　○２－－皿・平鉢
・ＪＢ－２－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（高台断面三角で高台径が小さい、ダンバギリ窯指標）
・　〃　ｃ（高台断面三角で高台径が大きい、柿右衛門Ｂ窯など指標）
・　〃　ｄ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状で上質の製品、南川原窯ノ辻窯指標）
・　〃　ｅ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状）
・　〃　ｆ（やや深く、腰が張る、多くは輪花に成形）
・　〃　ｇ（絵付・作りが粗雑な皿、扇面文様が多い）
・　〃　ｈ（蛇ノ目高台、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｉ（蛇ノ目凹形高台で高台高が高い）
・　〃　ｊ（蛇ノ目凹形高台で高台高が低い）
・　〃　ｋ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで底部無釉）
▲　・　〃　ｌ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小）
▲　・　〃　ｍ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大）
・　〃　ｎ（鍋島）
・　〃　ｏ（器高が低く腰が張る皿）
・　〃　ｐ（浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標）
・　〃　ｑ（高台断面が「Ｕ」字状、輪花に成形、見込み全面に一枚絵）
・　〃　ｒ（糸切細工の貼付高台）
■　・　〃　ｓ（初期伊万里の系統で内山の影響を受けた外山で作られた粗製品、広瀬向窯など指標）
■　・　〃　ｔ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ）
▲　○３－－大皿・大平鉢
▲　・ＪＢ－３－ａ（いわゆる初期伊万里）
▲　・　〃　ｂ（「Ｕ」字状の高台）
・　〃　ｃ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ）
・　〃　ｄ（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　ｅ（浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標）
■　・　〃　ｆ（高台断面が三角形や逆台形）
○４－－燗徳利
▲　○５－－鉢
・ＪＢ－５－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状）
・　〃　ｃ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ、青磁に多い）
・　〃　ｄ（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　ｅ（慣用名：八角鉢）
・　〃　ｆ（高台断面三角形）
■　・　〃　ｇ（鍋島）
■　・　〃　ｈ（見込み蛇ノ目釉剥ぎ）
○６－－坏
・ＪＢ－６－ａ（丸形）
・　〃　ｂ（端反形）
・　〃　ｃ（極めて薄手）
・　〃　ｄ（腰折れ直立形）
・　〃　ｅ（型作り、慣用名：紅皿）
・　〃　ｆ（高台径が小さい半球形の薄手坏）
○７－－猪口
・ＪＢ－７－ａ（底部蛇ノ目凹形高台状）
・　〃　ｂ（底部輪高台状）
○８－－仏飯器
・ＪＢ－８－ａ（脚部のえぐりが深い）
・　〃　ｂ（脚部のえぐりが浅い）
・　〃　ｃ（脚部のえぐりが浅く、畳付外周面取り）
○９－－香炉・火入れ
・ＪＢ－９－ａ（底裏に円盤状の露胎部）
・　〃　ｂ（底部蛇ノ目釉剥ぎ）
・　〃　ｃ（高台状の露胎部）
・　〃　ｄ（べた底）
■　・　〃　ｅ（蛇ノ目凹形高台）
■　・　〃　ｆ（蛇ノ目高台）
■　・　〃　ｇ（底部・高台内無釉）
○10－－瓶
・ＪＢ－10－ａ（大型長頸瓶）
・　〃　ｅ（いわゆる初期伊万里、口縁部が朝顔形に開く）
○11－－御神酒徳利
・ＪＢ－11－ａ（瓶子形）
・　〃　ｂ（鶴首形）
・　〃　ｃ（筒形）
○12－－油壺
○13－－蓋物
・ＪＢ－13－ａ（丸形）

・　〃　b（筒形）
・　〃　c（段重）
■　・　〃　d（型作）
○15－－壺・甕
○16－－急須
○18－－合子
・ＪＢ－18－ａ（扁平な球形）
・　〃　b（筒形）
○19－－水滴
○20－－蓮華
○21－－植木鉢
○22－－花生
■　○23－－片口鉢
○24－－灰落し
○27－－水注
・ＪＢ－27－ａ（銚子形、釣手）
○29－－擂鉢
■　○30－－餌入れ
○35－－戸車
■　○52－－燭台

◎ＪＣ群－－瀬戸・美濃系磁器
○1－－碗
・ＪＣ－１－ａ（丸碗、蓋付有）
・　〃　b（筒形碗）
・　〃　c（蓋付有、慣用名：広東碗）
・　〃　d（端反形碗、蓋付有）
・　〃　e（腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗）
・　〃　f（高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有）
■　・　〃　g（慣用名：小丸碗）
▲　○2－－皿・平鉢
・ＪＣ－２－ａ（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　b（輪高台）
・　〃　c（蛇ノ目高台）
・　〃　d（そり皿、木型打込など）
・　〃　e（陽刻）
・　〃　f（陰刻）
○4－－燗徳利
▲　○5－－鉢
○6－－坏
・ＪＣ－６－ａ（丸形）
・　〃　b（端反形）
・　〃　c（筒形）
・　〃　d（極めて薄手）
・　〃　e（寿文坏）
・　〃　f（体部が直線的に開く）
・　〃　g（型作り、慣用名：紅皿）
○7－－猪口
○8－－仏飯器
○9－－香炉・火入れ
○10－－瓶
○11－－御神酒徳利
・ＪＣ－11－ａ（瓶子形）
・　〃　b（鶴首形）
○12－－油壺
○13－－蓋物
○15－－壺・甕
○16－－急須
○18－－合子
○19－－水滴
○20－－蓮華
○21－－植木鉢
○22－－花生
○34－－土瓶
■　○36－－ちろり

◎ＪＮ群－－九谷系磁器
○1－－碗
▲　○2－－皿・平鉢
○6－－坏

■◎ＪＲ－－三田系磁器
■　○2－－皿・平鉢
■　○5－－鉢
■　○13－－蓋物
■◎ＪＺ群－－生産地不明
○1－－碗
○2－－皿・平鉢
○6－－坏

陶器分類
◎ＴＡ５－－宜興窯系
◎ＴＡ６－－朝鮮
◎ＴＡ７－－ベトナム
◎ＴＡ８－－ヨーロッパ
■◎ＴＡ９－－福建・広東系
■◎ＴＡ10－－西アジア

◎ＴＢ群－－肥前系陶器
○1－－碗
・ＴＢ－１－ａ（大振りの丸碗、慣用名：呉器手）
・　〃　b（外面主文様、慣用名：京焼風陶器）
・　〃　c（内面主文様、慣用名：京焼風陶器）
・　〃　d（刷毛目丸碗、渦巻状の刷毛目）
・　〃　f（陶胎染付）
・　〃　g（刷毛目丸碗、打・波状・鋸歯状の刷毛目）
・　〃　h（刷毛目端反形碗）
▲　・　〃　i（青緑・灰釉、丸形碗、内野山窯指標）
■　・　〃　j（卵手）
■　・　〃　k（象嵌の施された碗、慣用名：三島手）
▲　○2－－皿・平鉢
▲　・ＴＢ－２－ａ（青緑・灰釉、輪剥、内野山窯指標）
▲　・　〃　b（灰・青緑釉砂目）
・　〃　c（慣用名：京焼風陶器）
・　〃　d（透明釉砂目、内野山窯指標）
・　〃　e（胎土目）
・　〃　f（陶体染付）
■　・　〃　g（刷毛目）
■　・　〃　h（白土・鉄などで象嵌の施された皿・平鉢、慣用名：三島手）

■ ・ 〃 i（いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す）
■ ○3－－大皿・大平鉢
■ ・TB－3－a（刷毛目）
■ ・ 〃 b（白土･鉄などで象嵌の施された大皿･大平鉢、慣用名:三島手）
■ ・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
■ ・ 〃 d（内野山窯指標）
▲ ○5－－鉢
・TB－5－a（刷毛目鉢）
・ 〃 b（白土・鉄などで象嵌の施された鉢、慣用名：三島手）
・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
▲ ・ 〃 d（青緑・灰釉、内野山窯指標）
■ ・ 〃 e（いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す）
○6－－坏
■ ○8－－仏飯器
○9－－香炉・火入れ
・TB－9－a（陶胎染付）
・ 〃 b（慣用名：京焼風陶器）
・ 〃 c（刷毛目）
■ ・ 〃 d（青緑釉）
○10－－瓶
○13－－蓋物
・TB－13－a（陶胎染付）
・ 〃 b（刷毛目）
■ ・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
○15－－壺・甕
■ ・TB－15－a（ロクロ成形）
■ ・ 〃 b（タタキ成形）
■ ○22－－花生
○23－－片口鉢
・TB－23－a（深いタイプ、刷毛目、底部鉄釉）
・ 〃 b（浅いタイプ、刷毛目、蛇ノ目釉剥ぎ）
■ ○27－－水注
○29－－擂鉢
・TB－29－a（内外面全釉）
・ 〃 b（口縁部のみ施釉）
■ ○31－－火鉢

◎TC群－－瀬戸・美濃系陶器
○1－－碗
・TC－1－a（天目碗）
・ 〃 b（白天目）
・ 〃 c（灰釉薄掛け丸碗）
・ 〃 d（灰釉に簡略な山水の呉須絵、慣用名：御室碗）
・ 〃 f（腰が張る二段の段を有する碗、渦巻高台、灰釉鉄釉流し）
・ 〃 g（灰釉、「ハ」の字状に開く、柳文の鉄絵が多い）
・ 〃 h（丸碗、慣用名：太白手）
・ 〃 i（筒形碗、慣用名：太白手）
・ 〃 j（慣用名：広東碗、太白手）
・ 〃 k（体部中位に大きな凹み有、灰釉）
・ 〃 l（半筒形碗、慣用名：せんじ）
・ 〃 m（半球形の小振りの碗、笹文など多い、京焼風）
・ 〃 n（平碗、見込みに文様、京焼風）
・ 〃 o（慣用名：尾呂茶碗）
・ 〃 p（漆黒釉に長石釉散らし、慣用名：拳骨茶碗）
・ 〃 q（錆釉斑状、横位や波状の沈線が多い）
・ 〃 r（トビガンナ状の押形文、掛分け、慣用名：鎧茶碗）
・ 〃 s（刷毛目）
・ 〃 u（内面・外面上半灰釉、外面下半錆釉、慣用名：腰錆碗）
・ 〃 v（半筒形碗、灰釉柿釉掛分け）
・ 〃 w（杉形碗、若松文、慣用名：小杉茶碗）
・ 〃 x（緑釉丸碗）
・ 〃 y（口縁部端反、蓋付有、白化粧に鉄絵など、慣用名:奈良茶碗）
▲ ・ 〃 z（端反形碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵）
・ 〃 aa（灰釉丸碗）
・ 〃 ab（慣用名：小丸碗、太白手）
・ 〃 ac（灰釉錆釉掛分け、長石釉散らし、体部に凹み有）
・ 〃 ad（筒形碗、漆黒釉錆釉掛分け）
・ 〃 ae（体部灰釉、口縁部緑釉・瑠璃釉などの掛分け）
▲ ・ 〃 af（慣用名：広東碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵）
■ ・ 〃 ag（鉄釉丸碗）
■ ・ 〃 ah（鉄釉平碗）
■ ・ 〃 ai（鉄釉筒形碗）
■ ・ 〃 aj（長石釉丸碗）
■ ・ 〃 ak（長石釉平碗）
■ ・ 〃 al（長石釉筒形碗）
■ ・ 〃 am（高台高が高、高台断面は台形を呈す、窯ヶ根窯など指標）
■ ・ 〃 an（沓茶碗）
▲ ○2－－皿・平鉢
・TC－2－a（灰釉丸皿、ピン痕有）
・ 〃 b（灰釉丸皿、輪状直重ね痕有）
・ 〃 c（長石釉丸皿）
・ 〃 e（灰釉摺絵皿、鉄絵、白泥による施文、慣用名：御深井）
・ 〃 f（幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿）
・ 〃 g（内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿）
・ 〃 h（染付皿、輪高台、慣用名：太白手）
・ 〃 i（型皿、高台有）
▲ ・ 〃 j（鉄絵皿、ピン痕多）
・ 〃 k（菊皿、外面しのぎ有、黄瀬戸釉緑釉流し）
・ 〃 l（菊皿、外面しのぎ無、黄瀬戸釉緑釉流し）
▲ ・ 〃 m（輪禿皿）
▲ ・ 〃 n（口縁部または体部をひだ状成形、ヒダ皿）
▲ ・ 〃 o（油皿、直重ね）
・ 〃 p（把手付油皿、口縁部内側把手貼付）
・ 〃 q（灰釉丸皿、高台無）
・ 〃 r（見込み沈線･圏線文様､緑釉沈線文皿､ピン痕､慣用名:総織部）
・ 〃 s（鍔縁、口縁部施釉、鉄絵文様、直重ね、慣用名：志野織部）
・ 〃 t（染付皿、蛇ノ目凹形高台、慣用名：大白手）
■ ・ 〃 u（輪禿平鉢、口縁部折縁状多）
■ ・ 〃 v（鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢）
■ ・ 〃 w（灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名：黄瀬戸鉢）
■ ・ 〃 x（型皿、脚付）
■ ・ 〃 y（端反皿、ピン痕多）
■ ・ 〃 z（鉄釉丸皿、ピン痕多）
■ ○3－－大皿・大平鉢
■ ・TC－3－a（鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢）
■ ・ 〃 b（灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名：黄瀬戸鉢）
■ ・ 〃 c（幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿）
■ ・ 〃 d（内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿）

○4－－燗徳利
▲ ○5－－鉢
▲ ・　〃　f（水盤、灰釉、口縁部一箇所凹み）
・　〃　h（手鉢）
・　〃　j（長石釉）
・　〃　k（緑釉、鉄絵、元屋敷窯、窯ヶ根窯など指標）
・　〃　l（こね鉢）
■ ・　〃　m（刷毛目）
○6－－坏
○8－－仏飯器
○9－－香炉・火入れ
・TC－9－a（灰釉）
・　〃　b（鉄釉）
・　〃　c（灰釉、摺絵、慣用名：御深井）
・　〃　d（褐釉、半菊状のしのぎ）
・　〃　e（鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ）
▲ ・　〃　f（袴腰）
・　〃　g（筒形）
○10－－瓶
・TC－10－a（二合半灰釉徳利、底部釉拭取り）
・　〃　c（二合半灰釉徳利、つけ掛け）
・　〃　d（五合徳利）
・　〃　e（一升徳利）
・　〃　f（舟徳利、漆黒釉または柿釉）
・　〃　g（柿釉徳利、献上備前写し）
・　〃　h（らっきょう形）
・　〃　k（織部徳利）
○12－－油壺
○13－－蓋物
○15－－壺・甕
・TC－15－a（柿釉、底部及び器面下端露胎、平縁、慣用名:赤津半胴･銭甕）
・　〃　b（柿釉灰釉流し、底部及び器面下端露胎、口縁部外反）
・　〃　c（水甕、灰釉に鉄釉や緑釉を流す、流水状の文様、斑状の刺突）
・　〃　d（緑釉、貼付文）
■ ・　〃　e（ベタ底）
■ ・　〃　f（高台有、肩衝、有耳多し）
○18－－合子
○19－－水滴
○21－－植木鉢
○22－－花生
・TC－22－a（盤口形）
・　〃　b（朝顔形）
○23－－片口鉢
・TC－23－a（筒形）
・　〃　b（丸碗形）
・　〃　c（「ハ」の字状に開く）
○24－－灰落し
・TC－24－a（鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ）
・　〃　b（長筒形）
○25－－鬢水入れ
○26－－茶入れ
○27－－水注
・TC－27－a（褐釉、底部露胎、らっきょう形、橋状把手）
・　〃　b（円筒形の体部に注口、取手、蓋付、慣用名：汁次）
・　〃　c（灰釉、摺絵、慣用名：御深井）
■ ・　〃　d（灰釉、らっきょう形、橋状把手）
○28－－漫瓶
○29－－擂鉢
○30－－餌入れ
○31－－火鉢
・TC－31－a（瓶掛）
・　〃　b（風炉）
○34－－土瓶
○38－－手焙り
○39－－おろし皿
○40－－油受け皿
▲ ・TC－40－b（脚付）
・　〃　c（脚無、錆釉）
・　〃　d（脚無、灰釉）
・　〃　e（高い受付）
○41－－油徳利
○44－－ひょうそく
・TC－44－a（脚付）
■ ○64－－煙硝擂
■ ○67－－釜

◎TD群－－京都・信楽系陶器
○1－－碗
・TD－1－b（高台径が小さい半球形の碗、薄手）
▲ ・　〃　c（丸碗）
・　〃　d（杉形碗、鉄または呉須で若杉文、慣用名：小杉茶碗）
・　〃　e（端反形、口縁部緑釉体部灰釉の掛分け）
・　〃　g（端反形、小振りで器面には細かい貫入）
・　〃　h（平碗、多くは見込みに銹絵染付）
▲ ・　〃　i（半筒形）
・　〃　j（筒形、多くは鉄絵で文様）
・　〃　k（体部中位に大きな凹み有、灰釉）
・　〃　l（軟質施釉）
■ ・　〃　n（胴締め、慣用名：大福）
■ ・　〃　o（慣用名：小福）
■ ・　〃　p（天目形）
▲ ○2－－皿・平鉢
・TD－2－a（見込み蛇目有、灯明皿、多くは三箇所のピン痕）
・　〃　b（見込み蛇目無、灯明皿、多くは三箇所のピン痕）
・　〃　c（輪高台）
○4－－燗徳利
▲ ○5－－鉢
○6－－坏
○9－－香炉・火入れ
・TD－9－a（型作り）
・　〃　b（蛇ノ目高台、灰釉、体部に強いロクロ目、口縁部内折）
・　〃　c（筒形）
○10－－瓶
○13－－蓋物
・TD－13－a（丸碗形の身）
・　〃　b（段重）
・　〃　c（半筒形の身）
・　〃　d（格子状のしのぎ、梅花文）
○14－－筆立
○15－－壺・甕

・ＴＤ－15－ａ（慣用名：腰白茶壺、三耳壺、鉄釉灰釉掛分け）
○18－－合子
・ＴＤ－18－ａ（扁平な球形）
・　〃　ｂ（筒形）
○19－－水滴
○22－－花生
■ ○23－－片口鉢
○24－－灰落し
○25－－鬢水入れ
■ ○26－－茶入れ
○27－－水注
・ＴＤ－27－ａ（銚子形、釣手）
・　〃　ｄ（筒形）
○32－－柄杓
▲ ○34－－土瓶
■ ・ＴＤ－34－ａ（鉄砲口）
■ ・　〃　ｂ（Ｓ字状注口）
○36－－ちろり
・ＴＤ－36－ａ（長筒形、横手）
・　〃　ｂ（段筒形、横手）
○40－－油受け皿
・ＴＤ－40－ａ（脚付、灰釉）
・　〃　ｂ（脚無、灰釉）
○46－－カンテラ

◎ＴＥ群－－備前系陶器
■ ○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ・ＴＥ－２－ａ（ロクロ成形）
■ ・　〃　ｂ（型皿）
▲ ○5－－鉢
○10－－瓶
▲ ・ＴＥ－10－ａ（かま形、薄作、鶴首）
■ ・　〃　ｂ（底部付近に最大径を有す、体部三角形）
○12－－油壺
○15－－壺・甕
○22－－花生
○29－－擂鉢
○37－－薬研
○40－－油受け皿
○41－－油徳利
■ ○65－－乳棒

◎ＴＦ群－－志戸呂系陶器
○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ○9－－香炉・火入れ
○10－－瓶
○13－－蓋物
○15－－壺・甕
○29－－擂鉢
○40－－油受け皿

◎ＴＧ群－－常滑系陶器
○15－－壺・甕

◎ＴＨ群－－萩系陶器
○1－－碗
・ＴＨ－１－ａ（藁灰釉開口碗、渦巻高台）
・　〃　ｂ（ピラ掛け、渦巻高台）

◎ＴＩ群－－万古系陶器
○1－－碗
○16－－急須
○34－－土瓶

◎ＴＪ群－－大堀・相馬系陶器
○1－－碗
○6－－坏

◎ＴＫ群－－丹波系陶器
■ ○5－－鉢
○15－－壺・甕
○29－－擂鉢

◎ＴＬ群－－堺系陶器
○29－－擂鉢

◎ＴＭ群－－笠間・益子系陶器
○29－－擂鉢

■◎ＴＮ群－－九谷系陶器
○2－－皿・平鉢

◎ＴＯ群－－壺屋系陶器
○10－－瓶
○15－－壺・甕

■◎ＴＰ群－－淡路系陶器
○2－－皿・平鉢
○6－－坏
○20－－蓮華

■◎ＴＳ群－－飯能系陶器
○42－－行平鍋

■◎ＴＴ群－－薩摩系陶器
○1－－碗
○34－－土瓶

◎ＴＺ群－－生産地不明
○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ○4－－燗徳利
▲ ○5－－鉢
○6－－坏
○9－－香炉・火入れ
■ ○10－－瓶
■ ○15－－壺・甕
○16－－急須
○17－－燗鍋

○20－－蓮華
○21－－植木鉢
■　・ＴＺ－21－ａ（軟質施釉）
■　○22－－花生
■　○25－－鬢水入れ
■　○27－－水注
■　○31－－火鉢
○29－－擂鉢
○33－－鍋
・ＴＺ－33－ａ（紐状把手貼付、柿釉）
■　・　〃　ｂ（軟質施釉）
○34－－土瓶
・ＴＺ－34－ａ（青緑釉）
・　〃　ｂ（白土染付）
・　〃　ｃ（三彩）
・　〃　ｄ（糸目）
・　〃　ｅ（鉄釉）
・　〃　ｆ（鮫釉）
・　〃　ｇ（灰釉）
・　〃　ｉ（イッチン）
・　〃　ｋ（うのふ釉、やや紫色に発色する）
・　〃　ｌ（しのぎ、鉄釉）
■　・　〃　ｎ（軟質施釉）
○42－－行平鍋
・ＴＺ－42－ａ（灰釉）
・　〃　ｃ（トビガンナ）
■　・　〃　ｄ（軟質施釉）
○53－－蒸し器

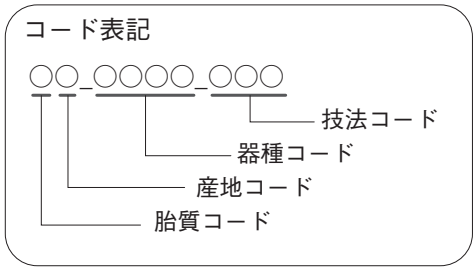
土器分類

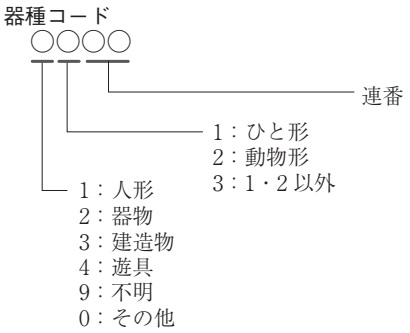
■◎ＤＤ群－－京都・信楽系土器
○16－－急須
○49－－涼炉
○50－－五徳

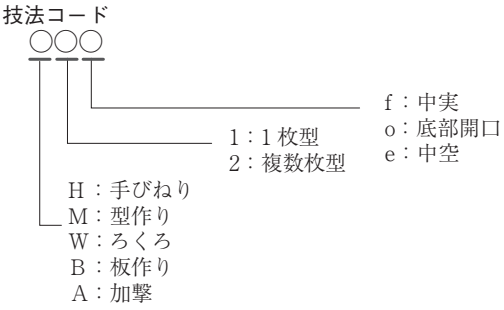
◎ＤＺ群－－生産地不明
▲　○２－－皿・平鉢
▲　・ＤＺ－２－ａ（小林Ｃ類・Ｅ類、梶原Ⅱｂ群）
▲　・　〃　ｂ（小林Ｆ類、梶原Ⅱｃ群）
・　〃　ｃ（磨きかわらけ、底部に渦巻状の沈線）
・　〃　ｄ（磨きかわらけ、底部平滑）
・　〃　ｅ（耳かわらけ）
・　〃　ｆ（へそかわらけ）
・　〃　ｇ（手づくね）
・　〃　ｈ（透明釉）
・　〃　ｉ（底部穿孔）
▲　・　〃　ｊ（見込みに浮文）
■　・　〃　ｋ（底径大、器壁厚、小林Ｂ類、梶原Ⅱａ群を含む）
▲　○５－－鉢
・ＤＺ－５－ａ（土師質、端反）
・　〃　ｄ（えぐり）
○９－－香炉・火入れ
○15－－壺・甕
■　・ＤＺ－15－ａ（硬質瓦質蓋付壺）
○21－－植木鉢
・ＤＺ－21－ａ（土師質）
・　〃　ｂ（瓦質）
■　○24－－灰落し
○31－－火鉢
・ＤＺ－31－ａ（土師質丸火鉢）
・　〃　ｂ（軟質瓦質丸火鉢）
・　〃　ｃ（鍔付角火鉢、掘炬燵）
・　〃　ｄ（硬質瓦質丸火鉢）
・　〃　ｅ（土師質角火鉢）
・　〃　ｆ（軟質瓦質角火鉢）
・　〃　ｇ（硬質瓦質角火鉢）
・　〃　ｈ（風炉）
・　〃　ｉ（火消壺）
・　〃　ｊ（硬質瓦質筒形火鉢）
・　〃　ｋ（カマド）
・　〃　ｌ（土師質筒形火鉢）
○38－－手焙り
○40－－油受け皿
・ＤＺ－40－ａ（透明釉、脚付）
・　〃　ｂ（透明釉、脚無）
・　〃　ｃ（無釉、脚付）
・　〃　ｄ（無釉、脚無）
・　〃　ｅ（透明釉、長脚付）
○43－－十能
○44－－ひょうそく
・ＤＺ－44－ａ（無釉、脚付）
・　〃　ｂ（透明釉、脚無）
・　〃　ｃ（無釉、脚無）
・　〃　ｄ（ろうそく状）
・　〃　ｅ（透明釉、そろばん玉形）
・　〃　ｆ（施釉、脚付）
■　・　〃　ｇ（鉢形、蓋付、舌付。把手付もあり）
○45－－瓦燈
○46－－カンテラ
▲　○47－－ほうろく
・ＤＺ－47－ａ（丸底）
・　〃　ｂ（平底）
○48－－七輪
▲　・ＤＺ－48－ａ（内部施設を持たない七輪）
▲　・　〃　ｂ（内部施設を持つ七輪）
■　・　〃　ｅ（内底部に壁状凸帯を有す。コンロ）
○49－－涼炉
○51－－塩壺
・ＤＺ－51－ａ（輪積成形、ミなと藤左衛門）
・　〃　ｂ（　〃　、一重枠天下一堺ミなと藤左衛門）
・　〃　ｃ（　〃　、二重枠天下一堺ミなと藤左衛門）
・　〃　ｄ（　〃　、天下一御壺塩師堺見なと伊織）
・　〃　ｅ（　〃　、御壺塩師堺湊伊織）
・　〃　ｆ（板作成形、御壺塩師堺湊伊織）
・　〃　ｇ（　〃　、泉湊伊織）
・　〃　ｈ（　〃　、小枠　泉州麻生）
・　〃　ｉ（　〃　、大枠　〃　）
・　〃　ｊ（　〃　、泉州磨生）
・　〃　ｋ（　〃　、サカイ　泉州磨生　御塩所）

・　〃　l（　〃　、泉州麻玉）
・　〃　m（　〃　、泉川麻玉）
・　〃　n（　〃　、御壺塩師難波浄因）
・　〃　o（　〃　、難波浄因）
・　〃　p（　〃　、摂州大坂）
・　〃　q（　〃　、イ津ミ　つた　花塩屋）
・　〃　r（ロクロ成形、御壺塩）
・　〃　s（板作成形、大上々）
・　〃　t（ロクロ成形、三なと久左衛門）
・　〃　u（　〃　、播磨大極上）
・　〃　v（　〃　、大極上壺塩）
・　〃　w（　〃　、筒形、無印）
・　〃　x（鉢形、内湾）
・　〃　y（　〃、直立）
・　〃　z（　〃、碁笥底）
・　〃　aa（輪積成形、無印）
・　〃　ab（板作成形、無印）
・　〃　ac（ロクロ成形、壺形、無印）
・　〃　ad（板作成形、いつミや　宗左衛門）
・　〃　ae（　〃　、堺本湊吉右衛門）
・　〃　af（　〃　、堺湊塩濱長佐衛門）
・　〃　ag（　〃　、泉川麻生）
・　〃　ah（輪積成形、袋状）
■　・　〃　ai（ロクロ成形、三なと作左衛門）

○52－－燭台
・ＤＺ－52－ａ（筒形）
・　〃　ｂ（薄形、扁平）
○54－－懐炉
■　○63－－あんか
▲　○00－－蓋
・ＤＺ－00－ａ（ドーム形、無印）
・　〃　ｂ（凹形、御壺塩師難波浄因）
・　〃　ｃ（　〃、無印）
・　〃　ｄ（断面逆台形、無印）
・　〃　ｅ（断面長方形、イツミ　花焼塩　ツタ）
・　〃　ｆ（　〃　、深草砂川権兵衛）
・　〃　ｇ（断面長方形、無印）
・　〃　ｊ（ドーム形、いつミや　宗左衛門）
・　〃　ｋ（凸形、無印）
・　〃　ｌ（凸形、なんばん七度　本やき志本）







胎質コード

J：磁器（磁質）
T：陶器（陶質）
D：土器（土師質）
R：瓦　（瓦質）

産地コード

A：輸入陶磁
B：肥前系
C：瀬戸･美濃系
D：京都･信楽系
E：備前系
Q：江戸在地系
Z：不明

器種コード (詳細）

1000	人形								
1100	ひと形								
1101	天神	1102	恵比寿	1103	大黒	1104	福禄寿・寿老人	1105	布袋
1106	不動明王	1107	地蔵菩薩	1108	猩々	1109	西行	1110	衿人形
1111	力士	1112	朝鮮通信使	1113	蹴鞠人形	1114	坊主人形	1115	虚無僧
1116	猟師	1117	猿曳き	1118	福助	1119	笛吹き	1120	若衆
1121	姉様	1122	太夫（花魁）	1123	お多福	1124	三味線弾き	1125	裸婦
1126	おぼこ・禿	1127	唐子	1128	ぶら人形	1129	這子	1130	狆抱き童子
1131	亀乗り童子	1132	狆乗り童子	1133	面持ち童子	1134	金太郎	1135	桃持ち童子
1136	獅子舞	1137	鯛抱き童子						
1200	動物形								
1201	狛犬	1202	獅子	1203	猿	1204	犬	1205	馬
1206	狐	1207	牛	1208	猫	1209	兎	1210	鼠
1211	狸	1212	虎	1213	象	1214	鳩	1215	鶏
1216	鴛鴦	1217	木菟	1218	亀	1219	蛙	1220	鯉
1221	鯛・鯛車	1222	金魚	1223	蝉				
1300	その他（1100･1200以外）								
1301	達磨	1302	首人形	1303	獅子頭	1304	面	1305	陽物
2000	器物								
2001	碗	2002	皿	2003	鉢	2004	銚子	2005	瓶
2006	壺	2007	片口鉢	2008	急須	2009	土瓶	2010	鍋
2011	釜･茶釜	2012	擂鉢	2013	蓋	2014	七厘・焜炉	2015	石臼
2016	竈	2017	器台	2018	硯	2019	水滴	2020	銭貨
2021	五鈷鈴	2022	柚でんぼ	2023	香炉・風炉				
3000	建造物								
3001	祠	3002	塔	3003	城郭	3004	橋	3005	塀・袖垣・石段
3006	民家・庵	3007	灯籠	3008	鳥居	3009	御輿	3010	舟
3011	庭園・背景	3012	仕切り盤						
4000	遊具								
4001	土鈴	4002	独楽	4003	笛	4004	碁石状製品	4005	面模
4006	泥面子・芥子面	4007	土玉	4008	円盤状製品	4009	車輪状製品		
9000	不明								
0000	その他								

人形・玩具分類コード

【参考文献】

安芸毬子・小林照子・堀内秀樹　2012「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8：259-288　東京大学埋蔵文化財調査室

石井龍太　2008「溶姫御殿と幕末近世瓦～瓦文化と近世アジア世界～」『江戸遺跡研究会会報』112:2-13

石川県埋蔵文化財センター　2002『金沢市木ノ新保遺跡』

大阪市文化財協会　2004『大坂城下町跡Ⅱ』

大成可乃　2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7：223-313　東京大学埋蔵文化財調査室

奥田　尚　1995「北陸の焼塩壷―金沢城下出土の鉢形焼塩壷を中心に－」『石川考古学研究会々誌』第38号：95-119　石川考古学研究会

加藤　晃　1989「江戸時代の瓦における江戸式の展開」『史学研究集録』第14号：43-61　國學院大學日本史学専攻大学院会

加藤　晃　1992「江戸瓦の変遷　－加賀藩本郷邸出土の瓦について－」『國學院雑誌』第九十三巻第十二号：78-97　國學院大學

加藤　晃・金子　智　1990「御殿下記念館・山上会館地点検出の瓦について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点　第3分冊』東京大学埋蔵文化財調査室：140-148

金沢市埋蔵文化財センター　1999『下本多町遺跡』『金沢市文化財紀要』153

金沢市埋蔵文化財センター　2006『石川県金沢市広坂遺跡（1丁目）Ⅲ（近世編1)』『金沢市文化財紀要』228

金沢市埋蔵文化財センター　2022『金沢城下町遺跡（飛梅町3番地点）Ⅱ』『金沢市文化財紀要』325

金子　智　1990「第2章　御殿下記念館地点，山上会館地点検出の瓦について　8．道具瓦」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館･御殿下記念館地点』：174-183　東京大学埋蔵文化財調査室

川根正教　2001「寛永通宝銅銭の様式分類」『出土銭貨研究』出土銭貨研究会

川根正教　2009「元禄期寛永通寶の流通動態」『東京工芸大学芸術学部紀要』15、東京工芸大学芸術学部紀要編集委員会編

川根正教　2012「江戸における元禄期寛永通寶の様相」『宮田進一氏追悼集』出土銭貨研究会・北陸信越出土銭貨研究会

工藤裕司　1998『新寛永通宝図会』（株）ハドソン・東洋鋳造貨幣研究所

古板江戸図集成刊行会　1958『古板江戸図集成』

阪口　豊　1990「東京大学の土台－本郷キャンパスの地形と地質」『東京大学史紀要』第8号：1-34　東京大学史史料室

鈴木正章　1989「第3章　遺跡の層序と地質学的調査･分析」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1　東京大学本郷構内の遺跡　理学部7号館地点』：9-20　東京大学遺跡調査室

東京大学百年史編集委員会　1984『東京大学百年史』

東京帝国大学　1932『東京帝国大学五十年史』

東京都埋蔵文化財センター　2000『汐留遺跡Ⅱ』

地図資料編纂会　1988『江戸 - 東京市街地図集成』柏書房

テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部　2014『東京都文京区　本郷六丁目遺跡』

成瀬晃司　1994「江戸藩邸の地下空間－東京大学本郷構内の遺跡を例に－」『武家屋敷　空間と社会』：93-121　山川出版社

成瀬晃司　2006「工学部14号館地点の空間構成」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7　東京大学本郷構内の遺跡　工学部14号館地点』：465-478　東京大学埋蔵文化財調査室

西秋良宏編　2000『加賀殿再訪』東京大学出版会

橋本真紀夫　2009「東京大学浅野地区の方形周溝墓における土壌分析」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9　東京大学本郷構内の遺跡　浅野地区Ⅰ』：223-230　東京大学埋蔵文化財調査室

藤井恵介　1997「東京大学本郷キャンパスの歴史と建築」『東京大学創立120周年記念東京大学展－学問の過去・現在・未来－』：43-57　東京大学出版会

細川　義　1990「加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点　第3分冊』：24-46　東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1：279-305　東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹・西秋良宏編　2017『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』東京大学出版会

増尾富房篇　1976『古寛永銭志（改訂版)』穴銭堂

本郷區役所　1937『本郷區史』

宮崎勝美　2008『大名屋敷と江戸遺跡』日本史リブレット87　山川出版社

森下　徹　1990「育徳園」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点　第3分冊』：47-59　東京大学埋蔵文化財調査室

●東京大学埋蔵文化財調査室関連刊行物

東京大学遺跡調査室　1990a『東京大学遺跡調査室発掘調査報

告書 2　東京大学本郷構内の遺跡　法学部 4 号館・文学部 3 号館建設地遺跡』

東京大学埋蔵文化財調査室　1990b『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 3　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1990c『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2004『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

東京大学埋蔵文化財調査室　2005a『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 5　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院外来診療棟地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2005b『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 6　東京大学本郷構内の遺跡　工学部 1 号館地点

東京大学埋蔵文化財調査室　2006『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 7　東京大学本郷構内の遺跡　工学部 14 号館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2008『東京大学構内遺跡調査研究年報』6

東京大学埋蔵文化財調査室　2011『東京大学構内遺跡調査研究年報』7

東京大学埋蔵文化財調査室　2012『東京大学構内遺跡調査研究年報』8

東京大学埋蔵文化財調査室　2013『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13　東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2015『東京大学構内遺跡調査研究年報』9

東京大学埋蔵文化財調査室　2017『東京大学構内遺跡調査研究年報』10

研　究　編

天和３年(1683)本郷森川宿先手組屋敷地の加賀藩への譲渡をめぐって

宮崎　勝美

はじめに

東京大学本郷構内法学政治学系総合教育棟地点は、江戸時代初頭以来幕府先手鉄炮組の大縄拝領組屋敷の一部であったが、天和３年(1683)加賀藩前田家に譲渡されて同藩の上屋敷本郷邸に含み込まれ、その後明治維新を経て東京(帝国)大学の用地となった。本稿では組屋敷地譲渡の経過に焦点を当て、先手組屋敷の性格や先手頭の活動の実態についても考察を加えたい。

天和２年末から３年にかけて江戸では大きな火事が相次いだ。とくに同２年12月28日に駒込大円寺に発した火事は、折柄の強風に煽られて本郷･湯島一帯から神田･日本橋周辺まで焼き尽くし、隅田川の川向こうにも飛び火して本所・深川地域に被害を及ぼした。天和の大火、またはその後間もなく生み出された逸話によって八百屋お七火事とも呼ばれている。加賀藩は本郷邸のほか外堀内にあった上屋敷筋違邸と湯島の切通邸が類焼の被害に遭い、本郷邸に隣接していた先手組屋敷も同じく焼失した。火災後の市街地再編の中で筋違邸と切通邸は上地され、本郷邸が新たな上屋敷となった。先手組屋敷地の譲渡はその本郷邸の再整備の過程でおこなわれたものである。

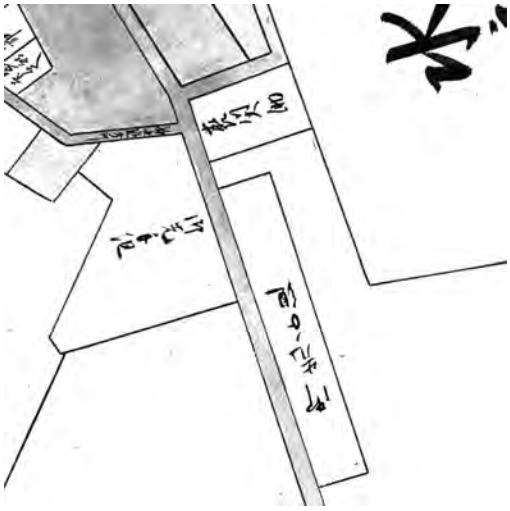
加賀藩の藩政史料は加越能文庫(金沢市立玉川図書館所蔵)を筆頭として豊富に伝存しているが、役職ごとの系統的な職務日記はほとんど失われており、とくに江戸時代前期については不明な点が多い。また先手組屋敷はさらに関係史料がごくわずかしか残っていない。そのため断片的な記事や周辺史料からの推定に多く頼らざるを得ないが、できるだけ当時の状況を把握できるよう務めることにする。

1. 先手組屋敷地譲渡の経過

加賀藩本郷邸は天和２年末の大火類焼後、その北西部に隣接していた先手鉄炮組屋敷地の一部を譲り受けて邸内に取り込んだ。１図は大火前、２図が大火を経て敷地を拡張した後の時期の絵図である。組屋敷は１図では「屋代越中　同心」、２図では「御先手組」と記されている。本郷邸の西側は元々本郷四～六丁目の町屋と先手組屋敷によってほとんどふさがれていたが、この拡張により西側を南北に通る中山道への出入りが容易になり、邸地の

１図「(江戸全図)」(部分)
(臼杵市教育委員会所蔵、寛永 19 ～ 20 年 [1642 ～ 43])

２図 (A)「安永江戸手書大絵図」(部分)
(港区立郷土歴史館所蔵、安永８年 [1779] 頃、
出典：デジタル版『港区史』資料編 2-1 近世付録)



２図 (B) 同上拡大

北西端には新たに追分口門が設けられた。

4代加賀藩主前田綱紀の近習衆による記録の中に、その敷地譲渡の経過を示す記事が残されている。

【史料1】「松雲院様御近習向留帳抜粋」上編巻十[1]

(A)

天和三年四月廿九日前田又兵衛(孝矩)殿御口上、壱岐覚書(奥村惠輝、加賀藩若年寄)之写

一、先頃中山勘解由(直守、先手頭)被申候ハ、組同心屋敷之内弐三拾間計、火除之ため加賀守(前田綱紀)様替屋敷御望候ハヽ、替可申旨被仰渡候、弐三拾間ハ少之義ニ候、今少多ハ御替被成間敷哉と被申候間、此旨可達御聴置旨御申候、

右火除之屋敷之義、最前村金左衛門同意ニ而堀田(正俊、老中)殿へ参り申入候処、能御請被成候、大久保(忠朝、大老)殿へ某申達候へハ、御相対替ニ而御替之儀は格別之旨御申候、御両方ともニ組々同心可致迷惑候哉と御申候よし、重而大久保殿へ被参、切通御屋敷之替地右之組屋敷ニ而可有之哉と申候所、此義一円御請無之様子ニ候、然ハ最前之趣ニ早達上聞候躰、筑前(堀田正俊)殿も右之趣ニ候へハ、とかく先達に達上聞ニ候と、又兵衛殿被致推量候、其上平尾御屋敷ヲ御上屋(筋違邸)敷・切通御屋敷と御替地ニ可被(ママ)遂と、公儀向ハ相極有之躰ニ御察候旨、又兵衛殿被申候、此段々ニ付、事之外入組たる義も有之候間、御直ニも可被聞召哉と言上、依之畢竟御合点被遊之旨御意なり、

(B)

天和二(三)年十二月九日

一、森川宿同心地三千両ニ可指上旨、渡部助大夫・原田七内以判、伊兵衛(野村、加賀藩士)迄書付指越候、伊兵衛方よりも、本郷六丁目木戸際より此御屋敷切、幅ハ本多中務(忠国、郡山藩主)殿前通迄加賀守様御望ニ付、金子三千両ニ相究候、組中右之趣令承知、相違無之旨書付越候様と助大夫・七内申候旨、依之弥右絵図も仕立越候様ニ野村伊兵衛へ申遣、右入御覧候処、公儀江被仰立ためニ候間、二三十間幅ニ而ハ却而組中同心無之候哉との趣、且又金子三千両之外ハ何之構も無之筈との趣、今一往聞届可申候、最前二三十間幅ニ御望被成候へとも、右組中勝手ニ宜との事、又ハ少分ニ而ハ難上との趣、最前御老中江被仰達、首尾合候様ニ可被仰遣との御事なり、

同廿二日(天和三年十二月)

一、森川宿同心地屋敷指上候ニ付、南ハ本郷六丁目木戸際より、北ハ森川(氏知、旗本)殿屋敷境、西ハ往還道ヲ限、東ハ御屋敷通水戸様御屋敷へかけ組屋敷ニ候処、森川殿屋敷之方八間隔、幅ハ往還より東へ廿間、長サハ南之方へ百五拾間、坪数三千坪組屋敷ニ相残シ、本郷六丁目木戸際より今般組屋敷ニ罷成申境迄九拾壱間余、其外組屋敷に成候裏通不残、北之方八間幅共ニ御屋敷ニ指上、則別紙絵図之通ニ御座候、右為引料金子三千両相極メ申候、組中何も相違無御座候、為後日証文如此之旨、渡部助大夫・原田七内書付以印判、野村伊兵衛へ指越、右之文言ヲ請、伊兵衛方よりも証文遣之也、則右証文并案紙入御覧、

上の(B)は天和2年の記事とされているが、これは写本の誤写であり同3年が正しい[2]。(A)は大火後4か月ほど経った天和3年4月末の記事である。事の発端や詳しい経過は不明であるが、加賀藩が本郷邸の火除けのため隣接する先手組屋敷のうち間口20～30間分の譲渡を希望し、それに対して先手頭の中山勘解由は譲渡するなら対象面積をもっと広くしてほしいと応答したことが窺える。火除けのためというのであるから、加賀藩は本郷邸内の中心殿舎に近い、組屋敷の南端部分を希望したものと思われる。延焼防止というよりも火災時の避難経路の確保が当初の目的だったのであろう。

史料には前田利家の孫で旗本になっていた前田孝矩[3]を通じて、幕府老中や大老に取得の可否を打診したことが記されている。大火で類焼被害を受けた大名・旗本らの屋敷地の多くは幕命によって移動・再配置されていき、加賀藩は上屋敷であった筋違邸と湯島の切通邸が上地され、本郷邸を新たな上屋敷としていた。両屋敷の上地に伴ってその代替地をどう手当てするかは、幕府側でも懸案事項となっていた。取次を務めた前田孝矩は、先手組屋敷の譲渡や平尾(板橋)下屋敷の添地拝領がその代替措置とどう関わるのかということも探り出そうとしている。

(B)の記事によると、譲渡交渉はその後半年以上かかって決着し、先手組屋敷は南北150間・東西20間、面積にして3000坪を残し、その他の部分(屋敷絵図による概算で約5000坪分)を3000両で加賀藩に有償譲渡することになった。1図から2図への変化にみられるように、組屋敷に残された南北に長い長方形の部分は、加賀藩が取得したカギ型の敷地によって挟み込まれるような形に変わっている[4]。

将軍から拝領した屋敷地は建前としては売買が禁じられていたが、実際には双方が所持する拝領地の交換(相対替)の体裁を取りつつ、引料(移転料)という名目で代価を支払う実質的な売買がおこなわれており、幕府側もその行為を黙認していた(宮崎 1989、同 1994)。しかしこの先手組屋敷の譲渡は、上の史料を見る限りでは加賀藩側から代地(交換対象の拝領地)が提供されておらず、単純な売買行為のように見える。また先手組などの組屋

敷は大名・旗本らが単独で拝領した屋敷地とは違って集団にいわば貸し与えられた屋敷地であり、先手頭やその配下の与力・同心らがその所持者として譲渡・売却することは通常では考えにくい。ところがおそらくは幕閣もこれを容認していたとみられ、拝領地譲渡(実質売買)の行為の中でも特殊な事例となっている。

しかもこの先手組が組屋敷地を有償で割譲したのはこれが初めてではない。前掲1図にみられるように同組は道路をはさんで西側にも広い敷地をもっていたが(図中の「屋代越中　与力・同心」の部分)、寛文10年(1670)に郡山藩主本多政勝が黒田勘解由からそのうちの2万3200坪余を代金4500両で買い求めたと伝えられている[5]。黒田勘解由は先手頭中山勘解由を誤伝したものと考えられる。1図および2図で確認すると、前者で「屋代越中　与力・同心」と記されている中山道西側の組屋敷は、後者ではその半分以上が「本多中務大輔下屋鋪」に変わり、その北側に「御先手組」を一部残すのみとなっている。本多家の屋敷地はその後ほぼ変化がなく、幕末期の屋敷地書上にはその面積2万3273坪余と記されている。先手組の方も同様で、中山道の東西合わせて6997.206坪であった。東側は天和期の譲渡の際に残された3000坪がそのまま存続したので、西側の面積は差し引き約4000坪だったことになる[6]。

なお、2図には東側の組屋敷の北隣りに森川大助の屋敷が描かれている。これは最初の先手頭であった森川氏の子孫の屋敷であるが、その部分もはじめは先手組屋敷の一部であったと判断される。その点を考慮して当初の面積を推計してみると、幕末期まで存続した6997坪余に本多家屋敷の2万3273坪余と森川家屋敷の1131坪[7]、それに天和3年に加賀藩に譲渡した敷地約5000坪(絵図上での推計)を合わせて、総計3万6000坪余にも及ぶ。幕末期の例でいうと先手組屋敷の標準的な面積は1組あたり7000～8000坪程度であり、とくに広い組でも1万9000坪台までであったから[8]、それと比べると破格の広さである。郡山藩や加賀藩に分割譲渡することができたのも、敷地に十分過ぎる余裕があったからである。

2. 森川宿先手組屋敷の特殊性

先手組は戦時には先鋒を務め、平時には江戸城門や将軍他出の際の警備に当たった。弓組と鉄炮組からなり、年代によって異なるが前者は10組程度、後者は20組程度で、ほかに西の丸付きの組が置かれることもあった。各組の頭は中上級の旗本(享保期以降は役高1500石)が務め、配下に与力5～10騎(給地200石～現米80石程度)と同心30～50人(足軽、30俵2人扶持程度)が附属した。先手頭は旗本として単独で屋敷地を拝領し、与力・同心らは組ごとにひとまとまりの屋敷地(大縄拝領組屋敷)を与えられて集団居住した。

森川金右衛門氏俊は姉川・三方原などの戦いで度々戦功を挙げて徳川家康に重用され、天正9年(1581)に足軽20人、文禄元年(1592)には同じく50人を預けられるとともに2000石の知行地を与えられた。氏俊はまた義弟を含む親族6人を与力として配下に置くことを許された。これが後の先手頭森川氏の起点となっている[9]。

後に引用する『御府内備考』の記事によると、氏俊は天正18年(1590)の奥州陣のあと家康から三河島に屋敷地を与えられたが、江戸城まで遠かったため願いにより本郷追分の地に移されたという。三河島に配置されたのはおそらく奥州押さえのため、そして本郷追分も中山道と旧奥州街道(後の日光御成道、別名岩槻街道)とが分岐する要衝の地であった。本郷追分の屋敷は後年には先手組の与力・同心組屋敷として扱われていくが、当初は要衝地の守衛を任された森川氏俊自身に与えられた拝領屋敷だったのである。

氏俊が致仕した後は、その子氏信が代わって寛永13年(1636)まで先手頭を務めた。氏俊から2代40年以上にわたって先手頭ないしそれに相当する任務に就いていたことになる。氏信は父の代から配下に置いていた親族与力6人を旗本として取り立てるよう幕府に願い出て、寛永10年(1633)にそれが認められた。先手頭が親族を与力として抱えたことも、さらにその全員を旗本に格上げするのに成功したことも稀な事例に属している[10]。

氏信は寛永13年に先手頭から百人組之頭に転任し、その後の先手頭は1表に示したようにほとんどが在任数年から十数年ほどで入れ替わった。森川家と親族与力のような直接的な姻戚関係や主従関係による強い紐帯はなくなり、先手頭の職は中上級旗本の出世の一階梯として位置付けられるようになっていったものと思われる。

しかし本郷追分の組屋敷周辺は父子2代にわたる森川家の記憶が後々まで残り、里俗の通称として森川宿と呼び続けられた。主要街道の分岐点に位置しており、日本橋を起点として最初の一里塚が築かれていたこともあって、宿場に準ずる立場(たてば)のような様相を呈していたため宿と呼ばれたのであろう。一里塚を表す榎の木は、道をはさんで西側は駒込片町の町地内に、東側は森川家の屋敷内に植えられていた(3図)。

寛永13年に氏信が他職に転任したことにより森川家は本郷追分の組屋敷とは直接関係がなくなったはずであり、その後の時期の江戸図でも同家の屋敷が残ったようには描かれていないが、史料1(B)の記述からも知られ

1表　森川氏系統の先手頭(江戸時代前期)

先手頭名	在任期間
(森川金右衛門氏俊)	
森川金右衛門氏信	(慶長元年[1596])～寛永13年(1636)9月10日
屋代越中守忠正	寛永15年(1638)2月8日～慶安4年(1651)6月18日
岡野権左衛門英明	慶安4年(1651)6月18日～寛文3年(1663)8月25日
中山勘解由直守	寛文3年(1663)9月1日～貞享3年(1686)12月3日
井戸新右衛門幸弘	貞享3年(1686)12月5日～同5年(1688)5月6日
能勢半左衛門頼平	貞享5年(1688)6月9日～元禄5年(1692)2月5日
近藤五左衛門用高	元禄5年(1692)2月23日～同7年(1694)正月11日
大久保勘三郎忠行	元禄7年(1694)正月11日～同16年(1703)正月11日
佐野与八郎政信	元禄16年(1703)正月11日～宝永5年(1708)6月23日

東京大学史料編纂所編『大日本近世史料　柳営補任』第3冊34～35頁より作成、一部『新訂寛政重修諸家譜』により補訂。

3図「江戸方角安見図」乾(部分)
国立国会図書館デジタルコレクションより

るように少なくとも天和期には組屋敷東側の北隣りにその屋敷地が存在していた。森川家は寛永期以降もそこを非公式な下屋敷として使用し続け、天和大火後の武家地再編の際に幕府によってその存在が追認された可能性がある[11]。

江戸幕府官撰の地誌『御府内備考』(文政12年[1829]年成立)には、森川宿について詳しく説明した箇所がある。長文ではあるが次にその全文を掲げておく。

【史料2】『御府内備考』巻32　本郷之一[12]

森川宿　本郷六町目の続き、御先手御鉄炮頭松平弥九郎の組屋鋪辺の呼名なり、此組屋敷は昔森川金右衛門氏俊に預られし与力・同心の大縄屋敷にて、氏俊の屋敷もその内に賜はり、〔今も組屋敷の西(内の誤か)に森川美濃守屋敷あり、美濃守は則氏俊の子孫なり、されど当時氏俊が住居の地は、今の本多中務大輔屋敷の辺なるべしといふ、〕(筆者注－カッコ内割書、以下同じ)且与力は皆氏俊の親属にして森川氏なれば森川宿の名はおこりしならんと云、宿と唱ふる故は、当所古より中山道の往来にして、建場となりし所なればならん、今此組にて伝ふる説を聞に、昔森川金右衛門氏俊、参州に於て自分の子弟をひき御奉公致し、〔【寛永系譜】森川譜に、金右衛門氏俊、天正十二年長久手合戦の時、親戚を集て尾州比良の古城を守べきの仰を蒙るとあり、〕年月しらず足軽三十人を預られ、〔系譜云、同二十年足軽五十人を預り、又武州に於て二千石の地を給る、此時氏俊が親戚六人、比良の郷に於て召出され、即氏俊が与力となるとあり、〕小田原御陣にも御供し、又奥州御陣にも供奉し、還御の時三河島にて宅地を賜はり、〔今も当組にて尾久八幡を鎮守とし、鉄砲見分年には必ず額を奉納せるも、昔三河島に住せしゆへといふ、〕その後御城遠の地なれば、願上て今の六町目木戸際より追分にて両頬一円に賜ひしかば、東側は子弟六人の与力にあたへ、西側を足軽屋敷と定め、頭と共に森川氏七家並び住せし故、おのづから地名と成りしなり、その後寛永十年、森川氏を称せる与力六人みな大御番に召出されしかば、その跡へ自分抱の与力十人を補して今に至ると云々、〔系譜云、慶長元年氏俊病気に依て、親戚与力六騎、足軽五十人を氏俊の子金右衛門氏信支配すべきの仰を蒙る、寛永十年先にあづかる処の与力六騎親戚たるに由て、大御番中にいれしめんと奉願す、将軍家其請にしたがひ給ひ、別に与力十騎をあずけらるとあり、〕

かつては組屋敷の中に頭である森川金右衛門と親族与力6人、合わせて「森川氏七家」が並び住んでいたという記述は興味深い[13]。本来先手頭と与力の間には厳然たる身分差があったが、この6人は親族として並の与力以上の待遇を与えられていたと推測される。ただしかれらが寛永10年に旗本に取り立てられて大番組に編入されたあと、森川氏信が自分の家臣(「自分抱」)10人をその跡役として補充して、その系譜が『御府内備考』が編纂された江戸時代後期にまで続いているという記述は、割書に引用された系譜の記事とも違っており、他の史料による確認が必要である。

なお江戸時代初期には、森川家のほかにも親子数代の長期にわたって先手頭を務めた家がある。そのうち坪内家は慶長15年(1610)から貞享5年(1688)まで80年近く、玄蕃家定からその孫惣兵衛定長まで3代にわたって先手鉄炮頭の職を継承した[14]。1図「(江戸全図)」以降の江戸図では、配下の与力・足軽の組屋敷が麻布に置かれていたことが確認される。ただしその規模は森川宿と比べ

るとそれほど大きくはないように思われる[15]。

また近藤家は慶長7年(1602)から承応3年(1654)まで50年余りの間、石見守秀用と孫の登助貞用が先手鉄炮頭を務めた[16]。1図「(江戸全図)」によると同家は加賀藩本郷邸の南側に屋敷を構え、配下の者たちの住居はその隣接地に配置されていた。その状況からすると、森川家と同様に当初は近藤家に与えられた広い屋敷地の中に与力・同心らが居住していて、その後組屋敷の部分が本体から分離されていったとも考えられる。そして貞用が百人組之頭に転任すると、隣接していた組屋敷は後任の先手頭の管理下に移行した。その点でも森川宿の組屋敷と共通性がある。しかし近藤家の屋敷地と組屋敷とを合わせてもせいぜい1万坪程度であったと推定され、やはり森川宿の広さは際立っている。

坪内家や近藤家も長年にわたって職務を継承する中で、配下の与力らと私的な主従関係や姻戚関係を結んだ可能性はあるが、森川家のように親族である与力を旗本に昇格させたというところまでの事実はない。いずれにしても森川家の事例は特殊であったというべきであろう[17]。

3. 先手頭中山勘解由直守の行動と人物像

先手頭が体制整備された幕府組織の中で官僚化して在任期間が短くなるにつれて、与力・同心らとの関係はやや希薄になっていったものと推測されるが、在任中は組の職務遂行だけでなく配下の者たちの生活維持にも配慮することが求められた。先手組に限らず番方諸組の与力・同心は小禄であったため生活に困窮する者が多く、幕府から救済金が支給されることがあった。先手頭の中にはそれをただちに組内に分配するのではなく、将来のより大きな出費に備えるため運用に回す者もいた。そのことに関する記事が旗本天野弥五右衛門長重が書き残した「思忠志集」の中にある[18](氏家 1996、同 2014・2015)。

長重は延宝4年(1676)から元禄2年(1689)まで先手鉄炮頭を務めたが、着任した際に前任者から救済金の残り500両を引き継ぎ、それを「組付之金」として運用・利殖に回し始めた。「思忠志集」には、他の旗本に貸し付けていた金の返済が滞った時、相手の親族に送った長文の督促状が書き写されている。そこではこの「組付之金」の融資は組の職務と与力・同心らの生計維持を考慮しつつ、将来の出費に備えておこなったものと主張されている。

長重は融資を始める際、同役の中山勘解由と同道して老中らに伺いを立てに行き、よい心懸けであると褒められて許可を得ている。勘解由もその後同様の融資を始めたのであろう。勘解由の組は与力10騎・同心50人という「大組」であったため、救金は1000両も残っていたという[19]。

この中山勘解由というのは史料1(A)や1表にみえるように、寛文～貞享期に先手鉄炮頭を務め、森川宿の組屋敷を管轄した中山直守のことである。その在任中に森川家の代から継承された組屋敷地の半分以上が郡山藩と加賀藩に有償譲渡されたが、いずれも「組付之金」の運用と同じく勘解由が先手頭として主導的に行った行為と考えられる。前後2度の敷地譲渡によって得られた収入は合計7500両に達していた。譲渡の経緯は幕閣も承知していたとみられるので、そのうちの相当部分は幕庫に収められ、一部は礼金として幕閣に配られた可能性があるが、残りは組の資金に加えられたのではなかろうか。

先手頭の別の一面として、藩と幕府上層部との間を仲介する御用頼みという役割を果たしていたことが挙げられる(次田 2005、荒木 2017)。これは先手頭の本来的な職制に基づくものではなく、江戸時代初頭からの習慣の中で次第に形成されていった、他の番方諸組の頭とは異なる特別な役割であった。複数の先手頭と御用頼みの関係を取り結ぶ藩も多く、また先手頭の方も複数の藩に出入りして、幕閣への願意を取り次いだり藩邸でおこなわれる儀礼や接待の場に「取持」として陪席したりした。中山直守がどの藩の御用頼みを務めていたかは定かでないが、他組の先手頭と情報交換するなどして、郡山藩や加賀藩と敷地譲渡の交渉を始めやすい立場にあったと思われる。

しかも直守は先手頭の中でもとくに行動力があり、豪腕ともいえる人物であった。天和大火の翌3年(1683)正月23日、直守は老中から与力・同心とともに市中を巡回し、放火犯など不審者を捕縛するよう命ぜられた[20]。先手頭が時限的に兼務する職務として盗賊改はそれ以前からあったが、火付改が新たに加わったのはこの時であり、それが後に火付盗賊改として体制強化されていったといわれている。しかしこの時点では、職務内容も権限もとくに明示されていない。江戸市中では大火後も治安状態が悪い状態が続いていたから、放火犯にしろ盗賊にしろ、とにかく不審者を摘発して一掃せよというのが老中の指示だったのだと思われる。

直守は着任後間もない同年3月2日に、放火犯を多数捕らえた褒美として金5枚を与えられている[21]。同年中には以前から強盗・放火事件を繰り返していた鶉権兵衛一味と呼ばれる盗賊集団を捕縛して、権兵衛ら4人を火罪に処した[22]。越えて貞享3年(1686)には大小神祇組と称するかぶき者(旗本奴)の集団200人余りを検挙して、

首領ら 11 人を斬罪に処した[23]。その間にも旗本奴や町奴を数多く摘発しており、それにより寛永期頃から長く続いていたかぶき者の乱暴狼藉は終熄するにいたった。

直守の配下として捕縛の任務に当たったのは、森川宿の組屋敷に住む与力・同心たちであった。同時代の歌学者戸田茂睡はその著書『御当代記』に、直守は放火犯を摘発するため与力・同心らを様々に変装させて市中に潜ませたと記している。茂睡はまた、直守は手当たり次第に不審者を捕まえて拷問によって自白を強要したため、無実の者も数多く処刑されたとして、その強引な手法を批判している[24]。

後年伝えられた逸話には尾鰭が付いていてどこまでが事実なのか判然としないが、人々が直守を「鬼勘解由」と呼んで恐れたという話も残っている。しかし幕府上層部は江戸の治安状態を改善させた功績を高く評価して、貞享 3 年(1686) 12 月、直守を先手頭から旗本の最高職のひとつである大目付に昇任させた。

儒者荻生徂徠は著書『政談』で、中山勘解由のように捕まえては殺すという手荒なやり方は戦国の遺風というべきものであるが、それによって盗賊の犯罪は収まった、幕政の風儀が変わって勘解由のような人物がいなくなり、刑罰も軽くなった状況のもとでは、役所の少ない人数だけで広大な江戸の治安を守り切ることはできないと述べている[25]。直守の行き過ぎを批判する一方で、盗賊や放火犯が多数跋扈する状況下ではやむを得ない手段であったとも考えていたのであろう。

直守が火付改として思い切った行動を取ることができた背景としては、中山家が元来勇猛果敢の家系として尊重され、一族から幕府上層部に影響力をもつ人物を輩出して来たことも見逃せない[26]。直守の曾祖父家範は天正 18 年(1590)豊臣秀吉の八王子城攻めの時、城主北条氏輝の宿老として籠城し徹底抗戦した。結局城は陥落し家範は自刃するが、その戦いぶりは秀吉をはじめ豊臣方の武将らに強い感銘を与えた。徳川家康が生き残った家範の長男照守を召し出して旗本としたのもそのためである。照守は馬術を善くし、徳川秀忠に高麗八条流の奥義を伝えた。この流派は直守ら同家の直系のほか、分家の子孫にも伝承されている(長塚 2022)。

また家範の二男信吉(直守の大叔父)は家康の命によって初代水戸藩主徳川頼房に附属し、庶子であった光圀の才能を見出して 2 代藩主に推挙した。以後信吉の子孫は幕末まで同藩の附家老を務めた。家老とはいえ大名並みの 1 万 5000 石、のち 2 万 5000 石の知行を与えられている。また信吉の二男吉勝(信久)は旗本となり、直守と同時期に先手頭を務めて盗賊改を兼務したのち、天和 2 年(1682) 11 月に勘定頭(勘定奉行)の要職に栄進した。これらの人々の功績も直守を支える強力な後ろ盾になっていたものと思われる。火付改として強引な捜査を続けたり、拝領組屋敷の有償譲渡という型破りな行為を幕閣に容認させたりしたのも、直守の個人的な資質に加えて中山一族に対する信用があったからと考えることができよう。

むすびにかえて

ここまで森川宿の組屋敷や先手頭中山直守の行動を中心にして述べて来たが、組屋敷譲渡の一件を天和の大火前後の市街地再編の経過と突き合わせてみると、また違った一面を見出すことができる。

江戸最大の火災であった明暦の大火(1657 年)の後には大規模な市街地再編が実行されたが、その頃はまだ江戸の周縁部に空閑地や強制退去を命じやすい田畑が多く残っており、それらを中心部からの移転先として利用することができた。上屋敷しか所持していなかった大名らには一斉に下屋敷が与えられ、追加拝領が望めない多くの大名・旗本らは独自に抱屋敷の買得を進めていった。その結果江戸の都市域は急速に拡大し、20 年余り経った天和の大火の時点では市街地の再編を進めようにもその余地が少なくなっていた。加えて大火より前、天和 2 年 3 月には開発途中であった本所地区から幕臣屋敷の大規模な撤退・移動も始まっていた[27]。江東一帯は低湿地であり、開発当初から水害に悩まされていたためである(岩本 2012)。

幕府はそれより前から面積過剰と判断される大名・旗本屋敷の削減縮小策を始めていたが、大火を機にそれをさらに推し進め､不足する移転用地を確保しようとした。延宝 6 年(1678)尼崎藩主青山幸利の青山下屋敷のうち 3 万 5000 坪余を返上させて出来た明地には、大火のあと本所地区から撤退した幕臣 55 人が転入した[28]。その同族宗家の浜松藩主青山忠雄が隣接地に所持していた下屋敷の一部も大火後に接収され、被災した本郷地区から下級幕臣百数十人の拝領町屋敷が移されて青山五拾人町など 4 か町が開かれた[29]。また旗本内藤重頼の千駄ヶ谷下屋敷は 3 万坪分が上地され、幕臣ら多数の屋敷が新たに配置された[30](黒木 1990、同 1999)。青山両家と内藤家の下屋敷は、それぞれの先祖青山忠成と内藤清成が天正 18 年(1590)の江戸入部直後に家康から拝領した広大な屋敷地であった。両人ともに家康に従って鷹狩りに出た時に、周辺を好きなだけ馬で乗り廻した範囲すべてを与えられたという逸話が残っている[31]。その頃はまだ青山も千駄ヶ谷も江戸城から遠く離れた郊外の地であり、

望むがままに広い屋敷地を獲得することができたが、それから100年近く経った天和期にはその辺りまでが江戸の都市域に飲み込まれようとしていたのである。

大火後は町地や寺社の移動も少なくなかったが、とくに件数が多かったのは幕臣の屋敷地であった。大名や幕臣の拝領屋敷を管轄していた普請奉行は職務繁忙を極め、それを助けるため２人の旗本に加役が命ぜられている(32)。本所の幕臣屋敷の撤退事業がほぼ終了したのは開始から２年経った貞享元年(1684)年のことであった。森川宿組屋敷の加賀藩への譲渡交渉は、そのような大火後の混乱状況の中でおこなわれた。決着までに半年以上かかったのは、幕府側の方針が定まらず関係役人が職務に忙殺されていたことも関係していよう。

本稿冒頭に引用した史料を読み直してみると、天和３年４月の時点ではまだ有償で譲渡するという話は出ていない。既に経験のある先手組側にはその意図があったのかもしれないが、加賀藩側は「替屋敷」、つまり上地された屋敷地の代地としてとらえ、同藩の意向を幕閣に取り次いだ前田孝矩も、筋違・切通両屋敷の代替措置になるのかどうかを聞き出そうとしている。その後代地の件は両屋敷に加え駒込中屋敷の一部を返上して、平尾下屋敷に付随していた14万坪余の抱地(年貢地)を拝領屋敷に振り替えることで決着をみた。複数の要素が絡んでいて手間がかかったのか、処理が済んだのは天和３年11月のことであった(33)。その結果組屋敷はそれとは別個の扱いを受けることになり、加賀藩がほかに相対替に使える屋敷地をもっていなかったため、代価を支払って譲り受けるという形で処理されることになったと考えられる。

面積過剰な屋敷地の削減縮小策に関連していうと、この時だけでなく江戸時代中後期にもたびたびその措置が取られている。森川宿の先手組屋敷も３万数千坪という異例の広さであり、いずれは上地・移転を命ぜられる可能性があった。有償譲渡という拝領屋敷の原則から逸脱した方法を取ったものの、結果だけをみると屋敷地の面積を適正化して他に転用するという幕府の方針に合致していたことになる。また見方を変えれば、いつかは上地を命ぜられる可能性があったから、そうなる前に幕府上層部の内々の了解を得て有力藩に有償譲渡したのは、先手組にとっても幕府にとっても得策であったということもできる。加賀藩が当初間口20～30間幅を要望したのに対し、先手組側がより広い敷地の譲渡を申し出た理由も、そうした状況を考え合わせれば理解しやすくなるであろう。

以上わずかな事例からであるが、天和の大火前後の状況と突き合わせて森川宿組屋敷地譲渡のもつ意味を考えてみた。本格的に考察を加えるにはより多方面から検討しなければならない。そのほかにも解明すべき課題が多く残っているが、今はそのための用意がない。すべて後考に俟ちたい。

【注】

(1)　金沢市立玉川図書館所蔵加越能文庫。

(2)　筆者は以前、史料の記載のままに敷地譲渡は天和２年の出来事と述べたが(宮崎 2008)、それを訂正する。(B)の文中に名前がみえる野村伊兵衛は、大火のあと江戸駒込屋敷作事奉行を命ぜられて天和３年正月20日に金沢を出立した(「菅君雑録」十二、金沢市立玉川図書館所蔵加越能文庫)。その後作事が終了して同年12月６日に帰国の暇を与えられたが(「葛巻昌興日記」同日条、同上所蔵)、(B)に記されているような残務が生じたため、しばらくの間江戸に留まっていたとみられる。

(3)　前田利家の五男利孝は徳川家に仕えて元和２年（1616）に上野七日市１万石の大名に取り立てられ、その二男孝矩は承応３年（1654）に幕府から廩米2000俵を与えられて旗本となり別家を立てた（『新訂寛政重修諸家譜』第17冊、290・293頁)。

(4)　先手組が通りに面した部分を残したのは、主要街道につながる重要な道路を東西両側からはさんで監視するという防衛・治安対策的な意味もあったであろうが、そこはまた商売に適した場所でもあったから、与力・同心らが内々に町人らに貸して地代収入を得るためであったとも考えられる。

(5)　「子爵本多家回答」(『東京市史稿　市街篇』第８冊､835頁)。本多家の居城は郡山のあと福島・姫路などを経て岡崎に移された。何度も転封が続いたため藩政文書はほとんど伝存しておらず､この件に関する一次史料も現在確認できない。同家は寛文10年当時既に複数の拝領屋敷を所持しており、追加拝領を望むのは難しかった。明暦の大火後10年余りの間に都市域が拡大し、江戸城に比較的近い場所には抱屋敷とするのにふさわしい百姓地も得られなかったため、禁を犯して拝領組屋敷を内々に買得することにしたのであろう。同家はこのあと寛文12年にも神田お玉が池にあった井上河内守(正利か)の拝領屋敷を買い取ったと伝えられている(「本多家記録」､『東京市史稿　市街篇』第49冊467頁)。

(6)　本多家は国立公文書館所蔵「諸向地面取調書」第３冊本多中務大輔の項、先手組は同書第22冊御先鉄炮内藤甚左衛門組の項参照。

(7)　森川家屋敷は同上書第19冊小普請組森川富之助の項参照。

(8)　同上書第 22 冊。組によって異なるが、与力は 1 人当たり 200 ～ 300 坪前後、同心は 100 坪前後の敷地を貸し与えられていた。森川宿の先手組屋敷は、与力 10 人で 1 人当たり 200 坪ずつ、同心は 50 人で 1 人当たり 80 坪から 109.3 坪まで、ほかに道敷分が 293.7 坪、角場(射撃場)が 585 坪あり、組屋敷全体の面積は東側と西側合わせて 6997.206 坪であった。

(9)　氏俊はじめ一族の履歴は『新訂寛政重修諸家譜』第 7 冊 85 ～ 114 頁参照。

(10)　森川家の一族には旗本として後年まで存続した家が多い。途中の分知などによりその数は江戸時代中後期には十数家に達している。また氏俊の三男重俊は徳川秀忠に重用され、たびたび知行を加増された末に下総生実 1 万石の大名に取り立てられた。

(11)「慶長江戸絵図」(東京都立中央図書館ほか所蔵、慶長 13 年 [1608] 頃)や「(江戸全図)」(臼杵市教育委員会所蔵、寛永 19 ～ 20 年 [1642 ～ 43] 頃)では、江戸城北の丸(通称代官町)に森川金右衛門の屋敷がみえる。その後数度の変遷を経て、幕末期の森川家は本郷森川宿 1131 坪を居屋敷(大名等でいう上屋敷)とし、ほか麻布三葉坂上に 300 坪の拝領屋敷を所持していた(前注 7)。

(12)　大日本地誌大系版第 2 巻 80 頁。

(13)　同じ記事の前段には、森川氏俊の住居は「今の本多中務大輔屋敷の辺」、つまり中山道の西側にあったという説が引かれているが、後年の伝承であり定かでない。付言すると江戸時代前期に与力・同心の住居が組屋敷内の東側・西側どちらに配置されていたのかも、1 図に掲げた「(江戸全図)」などごく一部の江戸図に記載されているだけであり、確証を欠いている。

(14)『柳営補任』第 3 冊 26 頁。

(15)　幕末期の屋敷地書上のうち、先手鉄炮頭本多左京組の組屋敷麻布谷町 1 万 5 坪余がそれに該当するとみられる(「諸向地面取調書」第 22 冊)。なお、先手頭と組屋敷の対応関係は途中で入れ替わっており、本多左京は『柳営補任』では坪内家定に始まる系統ではなく後述する近藤秀用からの系統とされている(第 3 冊 32 冊)。

(16)『新訂寛政重修諸家譜』第 13 冊 384 ～ 387 頁。秀用の嫡男季用は父に先立って死去した。『柳営補任』では秀用のあと、その弟用義が寛永 2 年(1625)に先手頭の職を継いだとされているが(同書第 3 冊 30 頁)、「寛政重修諸家譜」にはその記述がなく、事実かどうか確認できない。用義は翌寛永 3 年に死去している。

(17)　先手頭が与力・同心の新規抱え入れの時に礼金を受け取るという行為は早くからあったとみられる。これも双方の関係性や先手頭の配下の組に対する意識を考える際に重要な要素であるが、ここではそうした事実があったことを指摘するにとどめる。

(18)　天和 2 年 2 月朔日「仙石氏就金之非道同姓江送状」(「思忠志集」巻 12、通番 1364、国立公文書館所蔵)。

(19)「大組」については「思忠志集」の別の項に、坪内惣兵衛・中山勘解由および自分の 3 組が当時 34 組あった先手組の中で最大であり、その頭というのは武士がみな望む役職だとする記述がある(天和 2 年 5 月 27 日「顧身」、同書巻 8、通番 1118)。なおこのほか「思忠志集」には、先手組の与力・同心らの職務や生活などに関する記事もあり参考になる。

(20)　直守は同年 9 月晦日にも同内容の下命を受けている。「年録」巻 85 天和 3 年正月 23 日条、巻 88 同年 9 月晦日条(国立国会図書館所蔵)。

(21)「年録」巻 86 天和 3 年 3 月 2 日条。なお「寛政重修諸家譜」には、直守の息子直房も父とともに不審者捕縛の幕命を受け、褒美金を下賜されたという記事があるが(『新訂寛政重修諸家譜』第 11 冊 89 頁、中山直房譜)、幕府側の記録では確認できない。ただし後述する戸田茂睡『御当代記』には、直守父子に火付探索が命ぜられたと記されている(後注 24、51 頁)。

(22)「御仕置裁許帳」六(『近世法制史料叢書』第 1、191 頁)。

(23)『新訂増補国史大系　徳川実紀』第五篇 586 頁、貞享 3 年 9 月 27 日条。

(24)『御当代記』一、東洋文庫版 51 ～ 54、57 ～ 58 頁、平凡社、1998 年。

(25)『政談』巻一、東洋文庫版 22 ～ 23 頁、平凡社、2011 年。

(26)　中山一族の事績については『新訂寛政重修諸家譜』第 11 冊、87 ～ 105 頁参照。

(27)『東京市史稿　市街篇』第 9 冊 771 ～ 1173 頁。

(28)　同上 521 ～ 522 頁。

(29)　同上第 10 冊 75 ～ 76 頁。

(30)　同上 108 ～ 113 頁。上地された面積は 3 千坪とも伝えられるが、転入した幕臣屋敷の多さからみると 3 万坪がより事実に近い数字と思われる。なお内藤重頼は幼少時に家督を継いだため減封されて旗本となっていたが、のち大名に復帰している。

(31)　同上第 2 冊 441 ～ 449 頁。

(32)『新訂増補国史大系　徳川実紀』第五篇 474 頁。天和 3 年 3 月 7 日条。

(33)　富田景周「東邸沿革図譜」(金沢市立玉川図書館所蔵加越能文庫)、『景周先生小著集』(石川県図書館協会、1938 年)に翻刻所収。

【参考文献】

荒木裕行　2017『近世中後期の藩と幕府』東京大学出版会

岩本　馨　2012『江戸の政権交代と武家屋敷』吉川弘文館

岩本　馨　2021『明暦の大火』吉川弘文館

氏家幹人　1996『元禄養老夜話　旗本天野弥五右衛門の晩節』新人物往来社（のち『江戸老人旗本夜話』と改題して復刊、講談社文庫、2004 年）

氏家幹人　2014･2015「『思忠志集』件名細目（上）」･「同（下）」『北の丸』46・47 号

黒木　喬　1990「天和の大火と江戸の都市改造」『史潮』新 27 号

黒木　喬　1999『江戸の火事』同成社

次田元文　2005「「先手御用頼」と「御用頼」」『岡山地方史研究』107 号

長塚　孝　2022「八条流馬術の成立と展開」『馬の博物館研究紀要』23 号

宮崎勝美　1989「江戸の武家屋敷地」高橋康夫･吉田伸之編『日本都市史入門　Ⅰ空間』東京大学出版会

宮崎勝美　1994「江戸の土地－大名・幕臣の土地問題」吉田伸之編『日本の近世　第９巻　都市の時代』中央公論社

宮崎勝美　2008『大名屋敷と江戸遺跡』山川出版社

若林由美・西木浩一　1994「江戸の組屋敷について－南町遺跡検討のために－」新宿区南町遺跡調査団編『東京都新宿区南町遺跡』

調査地点からみた加賀藩本郷邸北西隅の変遷とその利用

大成　可乃

はじめに

東京大学本郷キャンパス正門の南に位置する法学政治学系総合教育棟地点は、東京大学本郷構内の遺跡の中でも、先手組屋敷から大名屋敷（加賀藩邸）に利用が大きく変わる希有な場所である。藩邸絵図面で本地点付近を概観すると、多くの絵図面で空白あるいは緑で彩色されていたり、「ヤブ」「ハタ」などと描かれ、あたかも現在のグリーンベルトのように描かれている事に気がつく。時代を経て、藩邸内に多くの建物が増えていく中、本地点付近は建物らしい建物がない状況が続き、本地点付近に建物が認められるようになるのは、18 世紀後半段階からである。

本郷構内の他の調査地点と比較すると、遺構の重複が少なく、また御殿空間ではないにも関わらず、遺構から出土する遺物量も少ない事が本地点の特徴といえる。これはいったい何に起因するのか、比較的多く残る加賀藩邸の絵図面と、本地点の遺構検出状況などを対照し、さらに本地点東側に隣接する法学部４号館地点の調査成果も加える事で、本地点が藩邸内でどのような場所（空間）であったのかを考察してみたい。

調査成果と藩邸絵図面との対照には、今回、QGIS という GIS（地理情報システム）ソフトを使用したが、そのデータの作成は、当調査室室員である香取祐一に依頼した。なお QGIS ソフトや、絵図面との照合方法などについては、本稿末尾に香取の報告を掲載しており、そちらを参照されたい（『追補　加賀藩邸絵図面の補正について』）。

1. 調査地点の位置と歴史的変遷

１～８図は、江戸時代の絵図面上に本地点のおおよその位置を示したものである（各絵図面○）。１図「（江戸全図）」（寛永 19 ～ 20 年［1642 ～ 1643］頃）では、「矢代越中同心屋敷」内に照合でき、その後、延宝８年（1680）「江戸方角安見図鑑」の絵図面までは、隣接する加賀藩や本郷六丁目町屋との境などにも変化がなく、少なくとも延宝年間までは、本地点は先手組屋敷内であった可能性が高い（２～４図）。しかし宝永４年（1707）の「元禄江戸大絵図」（５図）では、中山道に面した組屋敷が縮小し、加賀藩邸の一部が中山道に張り出す形に表現されており、宝永４年頃には、本地点を含む一帯が、加賀藩邸内に組み入れられていた事が判る。

現存する加賀藩本郷邸を描いた屋敷絵図面で最古の絵図面として知られる「武州本郷第図」（公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵をトレース、６図）は、天和２年（1682）の大火の翌年に、加賀藩が本郷邸を上屋敷とした後の様子を描いたものである。「武州本郷第図」では、５図と同じく、本地点を含む藩邸西端の中程部分と北西隅のカギ形部分が西へ張り出し、中山道に面する形で表現されており、天和２年の大火後、中山道に面した藩邸西側の整備が進み、藩邸絵図面のような形となったと推測される[1]。以上のことから、本地点で検出される 17 世紀代の遺構の多くは、先手組屋敷に伴う遺構であり、1682 年の大火以後、18 世紀以降の遺構は、加賀藩邸に伴う遺構である可能性が高い。

加賀藩邸内に組み込まれて以降は、幕末まで本地点付近一帯に変化はなく（７、８図）、慶応４年（1868）本郷春木町からの出火により、加賀藩邸の大部分が焼失するまで、本地点は加賀藩邸内に位置していたと推察される。

（1）天和２年 12 月の火災以前

天和２年の火災以前、本地点が組み入れられていた先手組屋敷について少し触れると、拝領当初は、１図のように中山道を挟む両側に計３万 6000 坪余りの広大な屋敷を拝領していたが、寛文 10 年（1670）、中山道の西側組屋敷のうち２万 3200 坪余は郡山藩本多家に譲渡し、天和２年の火災後、天和３年には、中山道東側の組屋敷も、中山道に面した南北 150 間、東西 20 間、面積として約 3000 坪余りを残し、5000 坪余りを加賀藩邸に譲渡し（6 図赤枠。詳細は研究編宮崎論考参照）[2]、６図のような三方を加賀藩邸に囲まれた屋敷地となり、幕末に至る。

平成４年度（1992）に調査を実施した、工学部 14 号館地点の報告では、明治 16 年作成の参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図と、調査で検出された加賀藩邸との地境塀跡や井戸との対比から、先手組屋敷間口が、現在の本郷通りのセンターライン付近に復元される事、間口（南北）10 間、奥行き（東西）20 間の 200 坪の区画が、組屋敷の１地割りに割り当てられていた事、などが指摘されている（成瀬 1992）。

本地点が先手組屋敷であった天和２年の火災以前、先手組屋敷と加賀藩との明確な地境の位置は不明であるが、1 ～ 4 図の江戸時代前半期の絵図面から推定すると、おおよそ駒込追分の少し北側あたりから、まっすぐ南側に延長したラインが加賀藩邸との地境ラインに推定できる。また、工学部 14 号館地点で指摘されているように、9 図に赤破線で示したラインが現在の本郷キャンパス範囲であり、中山道に面した先手組屋敷西端が、現在の本郷通りの中ほどに復元される。また先手組屋敷の北端は、天和２年の火災後の森川氏屋敷地付近[3]（5 図参照）と推測されるが、町地になっていたその一部が、明治８年(1875)、陸軍省によって買い上げられ、現在のキャンパスにまで引き継がれたようである[4]。以上のように推定された、天和２年の火災以前の中山道東側の先手組屋敷範囲(9 図水色)は、QGIS データ上で計測したところ、9100 坪余りであった。

(2)天和３年(1683)以降

天和３年以降、加賀藩に組み入れられた後、本地点が加賀藩邸内のどのような場所に位置していたのか、QGIS データにも使用している、精度の高い２枚の絵図面で確認してみた(10、11 図)。

絵図面の詳細については後で触れるが、10 図は「上屋敷殿閣図」(尊経閣文庫所蔵)のトレース図であり、藩邸の 17 世紀後葉から 18 世紀初頭の様子を描いたものである。11 図は「江戸御上屋敷絵図」(金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫)のトレース図であり、藩邸の 19 世紀中葉ごろの様子を描いたものである。ともに赤丸が本地点のおおよその位置を示す。両絵図面ともに上が北であり、本地点は藩邸内の北西付近に照合される。

２枚の絵図面を比較すると、一見して 11 図の方が建物が増加し、密集した状態である事がわかる。ただし御殿空間に位置する育徳園に加え、先手組屋敷や水戸藩邸と接する北部、本郷五丁目町屋と接している南西部は、緑色に塗られている。このような藩邸周縁の緑地は、あたかも現代の緩衝緑地帯としての役割を担っているようにもみえる。対外的な威圧感を与えすぎず、かつ、きちんと境界は示しておきたいという加賀藩の意図があったのであろうか。11 図で本地点を確認すると、御殿空間の北西部に隣接し、建物があまりなく、緑地化されたような場所に位置していた事がわかる。

一方、10 図では、御殿空間の周囲は 11 図と同じく空白域があるものの、緑地帯のような表現は確認できない。単に表現されていないだけなのか、それとも緩衝緑地帯のような意識が無かったのか、あるいは意識する必要がなかったのか、推測の域を出ない。

藩邸内の様子が変化する要因となりうる出来事を年表にまとめてみた(1 表。1990『山上会館・御殿下記念館地点第３分冊 pp.10 ～ 11、『赤門展』pp.248 ～ 250 より抜粋)。すると、藩邸内の様子を変化させる、３つの要因が見えてくる。1. 火事や地震などの災害(それを原因とした建物の損壊や消失など)、2. 藩主の代替わりや、それに伴う先代、その夫人などが移り住むための整備(建築用地確保に伴う建物移転や解体、御居宅の建築など)、

1 表　加賀藩邸の主な出来事

年号	西暦	出来事
天和3	1683	本郷邸が上屋敷に
貞享4	1687	本郷邸殿舎完成（貞享2年から建設）。5代綱紀が駒込邸（中屋敷）から移転
元禄15	1702	将軍綱吉、本郷邸に御成
元禄16	1703	水戸藩上屋敷から出火、本郷邸全焼（水戸様火事、宝永8年再建）
宝永5	1708	本郷邸に松姫「御守殿」造営開始
宝永5	1708	松姫、本郷邸内「御守殿」に入輿
享保5	1720	松姫死去
享保6	1721	松姫「御守殿」解体。牛込木津屋町より出火、邸内北端の「追分御門」など焼失
享保15	1730	下谷七軒町からの火事で本郷邸ほぼ全焼（同年最小限で再建）
元文元	1736	隅之御居宅（御居宅）建設
明和8	1771	西之御殿手斧式、上棟式
明和9	1772	本郷丸山からの出火、本郷邸内北西が類焼（目黒行人坂火事）、竣工間近の10代重教隠居所「西御殿」や、邸内北側長屋を焼失
寛政元	1789	11代藩主治脩の世子となった斉敬の「居宅」を御居宅（隅之御居宅）西隣に建設
寛政8	1796	斉敬急死後、弟の斉広が世子（12代）となり、新御居宅へ入ることに。その際、「北御居宅」に改称
享和2	1802	内馬場・厩跡地に10代重教正室寿光院の居所「梅之御殿」を新築
享和3	1803	3月指谷町より出火、中山道沿いの「物見」類焼
文政8	1825	7月本郷邸に溶姫「御住居」造営開始、これに先立ち「梅之御殿」を解体
文政8	1825	12月本郷邸「北御居宅」内から出火、隣接する富山邸など焼失
文政9	1826	幕府が火防のため「御住居」に近い本郷五丁目、六丁目町屋を収公
文政10	1827	溶姫、本郷邸内「御住居」に引移り婚礼
文政11	1828	将軍家斉、本郷邸御成（御通抜）
文政12	1829	大聖寺藩上屋敷新広敷建設のため、邸内東側「御作事所」周辺942坪余りを大聖寺藩へ「貸地」
天保11	1840	慶寧の元服後の住まい「東御居宅」の造営開始（翌年6月転居）
嘉永3	1850	将軍家慶、本郷邸通抜、御成
安政2	1855	安政江戸地震、邸内全体が被害
安政4	1857	御守殿表御門前に「御物見」が移転
文久2	1862	御本宅御広敷（前田家の奥御殿）や家中長屋の一部を撤去
慶応4	1868	本郷春木町からの出火で本郷邸大部分を焼失

3. 徳川将軍家の御成、将軍家からの姫君の輿入れ（御成御殿、御住居の建築、それに伴う建物移転や解体など）などである。また、このような不定期な変化に加え、17世紀から19世紀の長きにわたり、同じ場所に藩邸を維持する中、建物自体の老朽化に伴う整備なども常態的に行われていた事は想像に難くない。

次節以降、先のような要因で藩邸内が変化する事を踏まえ、本地点の遺構の変遷を確認してみたい。

2. 検出遺構からみる調査地点の変遷

報告編でも述べたように、本地点から出土した遺物はあまり多くなく、まとまって遺物が出土する遺構自体も多くは無かった事から、年代比定が可能であった遺構は、460遺構中76遺構にとどまる。

17世紀代（17c末から18c初は17cとした）に比定される遺構は31遺構、18世紀代に比定される遺構は35遺構、19世紀代に比定される遺構は10遺構であった。偏りはあるが、ほぼ江戸時代を通じて遺構を確認することができ、本地点が継続的に利用されていた事がわかる。

以下では、本地点の年代比定が可能であった遺構について、遺構や遺物の検出状況、分布などについて確認をしてみた。なお2、3節中の主軸方向角は、報告編と同じく、元禄16年（1703）火災以前の御殿空間および詰人空間の建物配置軸（N-0° ～ 2° -E）は主軸①、元禄16年以降の御殿空間の建物配置軸（N-7° ～ 12° -W）は主軸②と表記した。

（1）17世紀（12図）

一見して南北10ラインから12ラインの間には、SE46以外遺構がなく、大半の遺構はSE46より北側に分布している事が判る。南側には、近代以降の大きな撹乱や、18世紀後半に比定されるSK42やSK158などの大形遺構があり、それらに削平された可能性もあるが、17世紀代の空間利用を反映している可能性もある。なおSE46より北側も、南北4ライン以北は、遺構が散見される程度である。17世紀代に比定された遺構には、地境となるような溝や柱穴列などは確認されなかったが、前述したような遺構の分布状況から、4つの区画（a ～ d）が想定された。

a区の様相

概ね南北4ラインより北側の範囲である。南北約15m、東西約15mの狭い範囲であるためか、検出された遺構は、土坑3基、井戸1基である。

C ～ D・2 ～ 3グリッドに位置するSK168は、覆土に焼土粒が多量に含まれるが、遺物は被熱しておらず、焼土のみを廃棄した遺構の可能性がある。B2・C1・C2グリッドに位置するSK382は、掘り方や覆土の堆積状況から採土坑と判断される遺構である。C3グリッドに位置するSE33は、長軸128cm、短軸110cmを測る比較的小形の井戸であるが、a区の中では一番多くの遺物が出土した遺構である。遺物収納箱1箱ほどの陶磁器・土器類に加え、アカガイやマガキなどの貝類を主体とする食物残滓も出土している。なおSE33と、c区のSE46、d区のSE60は、それぞれ遺構間接合する事が確認されている。

b区の様相

概ね南北4ラインから10ラインの間、南北約30m、東西約15mの範囲である。4つの区画の中で一番大きく、検出された遺構数も最多であるが、遺構の重複が多く確認される状況ではない。検出された主な遺構は、土坑13基、井戸3基である。D6・D7グリッドに位置するSK170は、北壁は撹乱により一部消失しているが、平面形は長方形を呈し、板枠の痕跡が確認された遺構である。本遺構からは少量の陶磁器・土器類、石製品が出土したほか、坑底直上より古寛永、文銭を含む銭貨73枚のさし銭が出土している。D7・D8・E8グリッドに位置するSK315は、螺旋状に廻るスロープを有し、掘り方全体に工具痕による凹凸が確認される採土坑である。B7・C7グリッドに位置するSK203は、平面形は円形を呈し、坑底壁際には幅10cm弱の溝が巡り、土層断面にもその痕跡が確認されることから、桶枠が埋設されていたと考えられる遺構である。A4・B4グリッドに位置するSK108、B7グリッドに位置するSK380は、ともに平面形は不整円形を呈し、壁面の変色や覆土の状況から、水溜または便槽の可能性が推定される遺構である。B5・B6グリッドに位置するSK221は、平面形は不整形を呈し、坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が著しく、その様相から植栽痕または採土坑と推定される遺構である。遺物は収納箱に1箱と多くはないが、平底のほうろく（DZ-47-b）がまとまって廃棄されていたことが特筆される。

b区では、B5グリッドに位置するSE163、B8グリッドに位置するSE222、E9グリッドに位置するSE489の計3基の井戸が検出されたが、出土遺物の年代観から、廃絶時期は異なり、SE222、SE163、SE489の順に廃絶した可能性が高い。SE222は全体像は不明であるが、SE163、SE489は、直径（長軸）が100cm前後の素掘りの井戸であり、SE163には壁面に足掛かりと考えられる一対の孔が穿たれていた。

c 区の様相

概ね南北 10 ～ 12 ラインの範囲で、南北約 10m、東西約 15m の狭い範囲である上、東側 1/4 は撹乱され、さらに 18 世紀代の遺構 SK42 が、その範囲内中央に構築されたためか、検出された遺構は、井戸 1 基のみである。E10 グリッドに位置する SE46 は、直径約 130cm を測る井戸である。東側が大きく撹乱されていたことから全体像は不明である。覆土には、焼土粒・ブロックを多く含むが、出土遺物は少なく、また二次的な火熱を受けた遺物もあまり多くはない。なお本遺構と a 区の SE33、d 区の SE60 とは遺構間接合が確認されている。

d 区の様相

概ね南北 12 ラインより調査区南端までの範囲で、南北約 15m、東西約 15m の範囲である。本区画内も撹乱が多いためか、検出された遺構は少なく、主な遺構は土坑が 6 基、井戸 1 基、地下室 1 基などが散在する。D12 グリッドに位置する SU77 は、北側は撹乱され、遺存する開口部形状は不整長方形を呈し、検出面から坑底までの深さは 382cm を測る。検出面から 110cm 下方で、西から東､北から南へ傾斜するアーチ形の天井を確認した。坑底平面形は、南北に長い半円形を呈す。坑底南端から立ち上がる壁面は湾曲し、工具痕が顕著であるが、それ以外の壁面および坑底は丁寧に整形され、比較的平滑にされている。坑底は鬼板化し、直上層はシルト質層がほぼ水平に堆積していた状況であり、埋め戻されるまでに開口期間があった事が想定される｡天井崩落土の直下に、焼土主体層や、瓦片などを含む覆土が流し込まれる状態で堆積していた。遺物収納箱 6 箱分の遺物が出土しており、その中に、二次的な火熱を受けた陶磁器・土器類も確認され、それらは天和 2 年の火災に伴う遺物に比定されるものである｡恐らく SU77 の覆土中の焼土とともに、SU77 内へ流し込まれたものであろう。D14･D15 グリッドに位置する SK70､D13 グリッドに位置する SK153 は、覆土や掘り方の状況などから植栽痕である可能性が高い。E13・F13 グリッドに位置する SK61 は、南側は撹乱され、遺存する平面形は、やや歪な長方形を呈し、確認面からの深さは最深で 100cm を測る。覆土は全体的にしまりがやや弱く、上層付近には、かわらけが重ねて廃棄された状況が認められた。F13 グリッドに位置する SK59 は､北､南は撹乱され､東は調査区外へ延びるため、平面形は不明である。西から東へ緩やかに段切りされた斜面に、一辺 30 ～ 40cm の方形ピットと、一辺 10cm 弱の方形ピットが南北方向に並んで検出された。最も深い東側掘り方は、南北に延びる溝状を呈し、その坑底や壁面には工具痕と思われる凹凸が認められる。限定的な確認にとどまるが、以上のような検出状況から、土地造成に伴う段切り状の遺構の可能性もある。D13 グリッドに位置する SE60 は、井戸を覆う東屋や、井桁を伴う井戸である。本地点で検出された井戸は 7 基あり、うち 6 基が 17 世紀代に比定されるものであるが、いずれも直径 100cm 前後の素掘りの井戸であり、SE60 のように直径 150cm 程と比較的大きく、また井桁や東屋を伴う井戸ではない。

区画毎に 17 世紀代に比定される遺構の様相を確認したが、SU77 を除き、遺物が収納箱 1 箱分以上出土する遺構は確認されなかった。また、加賀藩邸に取り込まれるきっかけとなった、天和 2 年大火の火災瓦礫が大量に廃棄された遺構も検出されなかった。b 区の SE46 や d 区の SU77 で､天和 2 年の火災層と推測される焼土層が、遺構の覆土として確認されてはいるが、その中に火熱を受けた遺物が多量に含まれてはおらず、いわゆる火災瓦礫は別途廃棄された可能性が高い。

いずれの区画でも最も多く確認されるのは土坑である。掘り方や覆土の堆積状況などから、植栽痕(SK70、SK153)や、水溜あるいは便槽(SK108、SK203、SK380)と推測される遺構は、いずれの区画においても中山道に近い側に位置し､採土坑(SK315､SK382)や､芥溜(SK61、SK168 など)と推測される遺構は、中山道から離れた位置で確認されている。土坑についで多く確認された井戸は、いずれの区画にも少なくとも 1 基は確認される。 a 区の SE33 は調査区中程に、 b 区の SE163、SE222 は調査区西側中山道寄りに、SE489 は調査区東寄りに、 c 区の SE46 は調査区東寄りに、 d 区の SE60 は調査区西側中山道寄りに位置するなど、設置場所に規則性は認められない。

なお工学部 14 号館地点で指摘されているように、本地点においても、組屋敷で検出される「短冊形地割」を確認することはできず、17 世紀代は別の地割りがあり、それに基づく屋敷利用がなされた事が推測される。

最後に組屋敷全体の中での本地点の位置を確認してみたい。16 図は 9 図に示した先手組屋敷範囲を拡大トレースし､先手組屋敷を調査した地点と照合したものであり、北から工学部 14 号館地点、本地点、情報学環･福武ホール地点の位置関係となっている。赤いドットは、各地点の天和 2 年の火災またはそれ以前に廃絶した 17 世紀代の遺構を示している。先手組屋敷東側に隣接する加賀藩との地境は、判然としないため破線で示しているが、3 地点は、概ね南北に細長い屋敷地の中央から南端に位置し、中山道からは少し奥まった場所にある事が判る。また出土遺物から年代比定が可能な遺構のみを示している

が、遺構は、屋敷地の南側ほど密集しているようにみえる。

正門を挟み、本地点北側に位置する工学部 14 号館地点において、前述した条件に比定される 17 世紀代の遺構は３基のみである。本地点や後述する情報学環・福武ホール地点と異なり、天和２年の火災後も先手組屋敷内に位置しており、そのような敷地利用の継続性も影響してか、遺構から出土する一括資料の年代幅が長期にわたるものが多い。そのような長期使用が窺われる遺構は除外したことも、３基という遺構の少なさに繋がっている可能性はある。３基の遺構のうち、２基は性格不明の土坑、１基は井戸であり、遺物は、いずれの遺構からも十数点出土しているのみである。井戸は本地点で検出されている井戸と同じく、直径 100cm 強の小形の井戸である。

本地点南側に位置する情報学環・福武ホール地点の北側部分も、天和２年大火以前は先手組屋敷であり、南北約 13m、東西約 17m の範囲に、17 世紀代に比定される遺構が 15 基確認されるが[5]、本地点と同じく、遺構が重複して確認される状況はないが、本地点よりも密に確認される。15 基の遺構をみると、土坑が 10 基と最も多く、他に溝や地下室などが確認されるが、本地点で多数確認された井戸は全く確認されていない。また、最も異なるのは、１遺構からの遺物出土量であり、遺物収納箱に４箱以上の遺物が出土している遺構が３基確認されている。またフイゴの羽口や碗形鉄滓、鉄釘などの生産関連遺物がまとまって出土する遺構も確認されるなど、遺構密度と合わせ、本地点と様相が大きく異なる。

３地点ともに、東は加賀藩邸と隣接する場所であるが、唯一異なるのは、情報学環・福武ホール地点は先手組屋敷の南端であり、しかも南側隣接地が本郷六丁目町屋であるという点である。芥の廃棄場所として、なるべく屋敷地の端部に、大名藩邸側ではなく、町屋側を選択した可能性も考えられる。ただし、情報学環・福武ホール地点は整理途中であり、詳細な分析は報告書の刊行に譲りたい。

(2) 18 世紀前半(13 図)

18 世紀代前半に比定された遺構は 12 基と少なく、最も多く確認されたのは土坑の６基であり、地下室４基(SU140、SU202、SU381、SU400)がそれに続く。他に、溝が１基(SD31)、井戸が１基(SE57)確認された。C3 グリッドを北端とする南北溝(SD31)を境として、その東側に遺構が集中して確認され、SD31 北端より北側では、その西側部分に遺構が確認される事から、SD31 が 18 世紀前半の何らかの境となっていた可能性が高い。SD31 の主軸方向角は、ほぼ南北軸(主軸①)を示す。北端は C3 グリッドで確認されたが、南端は C12 グリッドで調査区外へ延び、調査区内での全長は 45.55m を測る。断面形は逆台形を呈し、壁面、溝底ともに緩やかな凹凸が顕著である。確認面での立ち上がり幅は約 130cm、溝底幅は約 40cm を測る。確認面からの深さは最大 80cm、溝底標高は 21.8 ～ 21.9m を測り、概ね平坦である。覆土はローム粒を含む暗褐色土を基調とし、上層(２層)にはマガキ､ハマグリなどの貝類が含まれる。報告編には、溝底直上に水性堆積が認められないこと、溝底標高がほぼ平坦であることから、境界施設と考えられるとある。遺物は、陶磁器・土器類などを中心に遺物収納箱に５箱出土した(Ⅳ-28 ～ 30 図)。

遺構の分布は散漫で、東西３ラインから７ラインの間では分布は認められず、意図的？に未利用地とされていたのであろうか。遺構が比較的まとまって確認されたのは、赤丸で囲った部分(①～③)である。

①には土坑が２基確認されているが、掘り方や覆土の状況から性格が異なる遺構と推測される。SK383 は、平面形は長方形を呈し、坑底はほぼ平坦、壁はやや開き気味に立ち上がり、西壁際に小穴が認められる。SK110 は、平面形は不整形を呈し、掘り方坑底や壁面の凹凸が顕著であることなどから、植栽痕と推定される遺構である。

②には地下室が３基(SU202、SU381、SU400)検出されている。SU202、SU381 は、本郷キャンパス内で検出される２類に分類される地下室[6]であり、藩邸周縁や詰人空間で検出される事が多いとされるものである。SU202 は、開口部の平面形は長方形を呈し、室部は開口部北半にあり、北壁と西壁北半が各々約 50cm オーバーハングしている。床面は東西方向に長い長方形を呈し、東西 132cm、南北 110cm、奥壁高 75cm を測る。遺物収納箱約１箱分の遺物が出土している。SU400 の東側は、調査区外に延び、詳細は不詳である。天井部の崩落により開口部は確認されていない。確認された室部平面形は方形を呈し、南北 239cm、東西最大 62cm、確認面からの深さ 160cm を測る。出土遺物は少量である。SU381 は、開口部の平面形は長方形を呈し、確認面下約 70cm で天井が確認され、室部は四方へ拡がる。床面は東壁北部が調査区外に延びている。平面形は方形を呈し、１辺約 150cm を測る。奥壁高は 125cm を測り、断面形は、なで肩の凸形を呈す。遺物収納箱５箱分の遺物が出土した。

③には地下室(SU140)と井戸(SE57)が確認されるが、両遺構は重複し SU140 が新である。SU140 は上部が撹

乱され、開口部形状や室部天井部分の形態は不明である。坑底は隅丸長方形を呈し、規模は長軸（南北）196cm、短軸（東西）160cm、確認面からの深さは、最深で118cmを測る。掘り方の断面形は、東側立ち上がりが緩やかにハングする台形を呈す。本郷キャンパス内で検出される1類に分類される地下室[6]か。SE57は、南側は調査区外に拡がり、遺存する平面形は、東西116cm、南北100cmを測る不整円形を呈す。3層には瓦片を多く含む、しまりの弱い覆土が認められる。遺物は収納箱約1/2分が出土しているが、いずれも破片である。なおⅣ-41図1の瓦燈は、ほぼ完全な形で出土している。

(3) 18世紀後半(14図)

18世紀後半に比定された遺構は、18世紀前半と同じく14遺構と少ない。確認されたのは土坑11基、ピットが2基、性格不明の落ち込みが1基(SX39)である。

遺構の分布状況は散漫で、東西3ラインから7ラインの間にはSX39以外認められず、18世紀前半と同じような場所が空閑地であった可能性がある。またSD31のような地境溝は検出されなかったが、遺構は、調査区の東側に偏在している。また18世紀前半までは、大形の土坑は北側で確認される例が多かったが、18世紀後半は、調査区の南側に確認されるようになる。

土坑とした遺構には、芥溜(SK25)、採土坑(SK42)、瓦溜(SK158、SK171など)としての利用が考えられるものが確認される。SK25は、調査区北西部で検出され、大半が調査区外に延びているため形態、規模は不詳である。南壁は主軸②と直交する方向を示し、東西壁は逆ハの字状に拡がり北方へ延びる。確認できた最大規模は東西525cm、南北375cm、確認面からの深さ370cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、工具痕が顕著である。坑底はほぼ平坦であるが、工具痕とみられる凹凸が全体に拡がる。覆土の堆積状況から、廃棄と埋め戻しが、繰り返し行われたと推測される。遺物は、陶磁器・土器類を中心に遺物収納箱45箱が出土し、本地点でもっとも多い(Ⅳ-1～28図)。また、ヤマトシジミ、ハマグリを主体とする貝類を主体に、魚類、鳥類、哺乳類など動物遺体も出土している。以上のような遺物出土状況から、工学部1号館地点SK01（東京大学埋蔵文化財調査室 2005）のような大形廃棄土坑と推定される。SK25には焼土や火熱を受けた遺物が認められない事、出土した陶磁器類の様相を確認したところ、廃棄期間は1750～70年代前半と推定されることから、成瀬は、明和9年(1772)に焼失する西之御殿建築以前に利用されていた芥溜である可能性が高いとしている(研究編成瀬論考)。

D～E、10～11グリッドに位置するSK42の平面形は、南側が半円状に張り出した不整方形を呈し、東西794cm、南北650cm、確認面からの深さは190～236cmを測る。壁面、坑底には工具痕状の凹凸が顕著で、西壁から南壁は、緩やかな螺旋状に立ち上がる。北、南側ともに坑底付近には、ロームブロックを主体とする層がレンズ状に堆積し(Ⅲ-22図11～15層。以下、下層)、その上に遺物を比較的多く含む層が(Ⅲ-22図5～10層。以下、上層)がレンズ状に堆積している。上層からは東大編年Ⅵb～Ⅷa期に比定されるものが、下層からはⅣ～Ⅶ期に比定されるものが出土し、年代差がある事が確認されており、採土坑として掘削された後、ロームブロック主体層で埋められ、最終的に、廃棄土坑として埋め戻されたと推定される。遺物収納箱8箱分の遺物が出土しているが、うち7箱は上層から出土したものである。

本遺構からは、二次的な火熱を受けた輸入陶磁器がまとまって出土しているが(Ⅳ-36～38図)、SK42覆土中には焼土層が確認されておらず、本遺構を埋め戻す際の客土とともに持ち込まれた可能性が高い。この輸入陶磁器の中心となっているのは、碗・皿のような一般的な器種ではなく、硯屏、香炉、硯、水指、土瓶などであり、点茶道具や文房具などである(研究編湯沢論考)。隣接する法学部4号館地点においても、E8-2_SUから出土した元禄の火災一括資料の中に、茶道具と考えられる国産の碗がまとまって確認されており、本地点SK42から出土した輸入陶磁器の一群とともに、藩邸内で保管されていた茶道具が客土とともに両地点に持ち込まれた可能性も考えられる。

SK158、SK171は、ともに平面形が長方形を呈す大形土坑であり、覆土に大量の瓦を含むという共通点がある一方、深さと坑底の状況、主軸方向角、瓦の出土状況が異なるなどの違いも指摘される。SK158は深さ230cmを測り、坑底四周に柱穴を有す遺構であり、SK171は深さ110cmを測り、柱穴などはない素掘りの遺構である。主軸方向角を確認すると、SK158は概ね主軸②と、SK171は概ね主軸①と一致する。SK158から出土した瓦は、完形に近い桟瓦が主体であり、二次的な火熱を受けていない状態で廃棄されているものが大半である。ただし、漆喰が付着していたり、覆土中に漆喰ブロックが多く含まれていた状況から、使用済みの瓦が何らかの理由で廃棄された状況と推測される。一方、SK171から出土した瓦は、割れた熨斗瓦が主体であり、その多くが二次的な火熱を受け、大量の焼土ともに廃棄されていた。またSK171からは、瓦を固定していたと思われる釘も大量に出土している。

以上をまとめると、SK158 は元々上屋を有す施設であり、それが何らかの事情で廃絶される中、完形ないし半完形の瓦が廃棄された状況が推測される。さらに補足すると、本遺構北側に位置する SK42 の下層から出土した、京都・信楽系の掛花生（Ⅳ-38 図 60）と、同一個体と考えられる破片が SK158 から出土していることから、SK42 下層と同時期に埋められた可能性がある。一方 SK171 は、火災後の瓦礫処理施設として利用され、焼土とともに火熱を受けた瓦が廃棄されたと推測される。なおこの火災は、出土遺物の年代観から明和 9 年（1772）の火災（目黒行人坂火事）である可能性が高く、その当時、本地点を含む一帯に建築中であった西之御殿が、その火災で焼失したため、その後の火災瓦礫処理施設として利用された可能性もある。

SX39 は大半が西側調査区外に延び、またその上部は撹乱を受けていたため、平面形状は不明である。調査区内での平面形は不整形を呈し、南北最大 12.0m、東西最大 387cm、確認面からの深さは 50cm を測る。底面は比較的平坦で、直上には、しまりのある覆土（Ⅲ-79 図 2、3 層）が堆積している。覆土最上層（Ⅲ-79 図 1 層）には被熱した瓦、焼土粒が多量に含まれ、火災後の瓦礫廃棄の様相を示す。被熱瓦の多くは拳大に割って廃棄したと考えられ、その様相は SK171 出土の被災した瓦と類似する。

1 表で 18 世紀後半の本地点付近の状況を確認すると、最も大きな出来事が明和 8 年（1771）の西之御殿の建築開始と、翌明和 9 年（1772）のいわゆる目黒行人坂火事による、完成間近であった西之御殿焼失である。西之御殿を建てる以前に、その建築予定地にあった長屋群や、それに付随する施設などを撤去し、空閑地やヤブのような場所の整備も進められたと推測される。そして火災後は、火災瓦礫を処理し、新たに藩邸整備が進められたと思われる。以上の事から、18 世紀後半として検出された遺構の中には、西之御殿建築以前の遺構と、西之御殿焼失後の遺構とが存在すると思われる。しかし SK25 以外は、瓦以外の出土遺物が少なく、出土遺物の年代観から、それを区別する事は難しい。年代比定が可能であった遺構に限定すると、本地点付近一帯が西之御殿建築予定地となった際、建築前に存在していた SK25 のような大形土坑が埋め戻され、そして西之御殿焼失後の藩邸整備の中で、SK171 や SK41 には、火災の瓦礫処理として二次的な火熱を受けた瓦がまとめて廃棄されたのであろう。また焼失後、再建される事が無かった西之御殿跡地を利用して、SK42 のような採土坑が掘削されたと推測される。

（4）19 世紀（15 図）

19 世紀に比定された遺構は 10 基であり、江戸時代を通じて最も少ない。確認されたのは土坑 6 基、ピットが 4 基であり、ピット以外は、概ね 19 世紀前半に比定される。18 世紀後半のように、遺構が広く、薄く散見される状況ではなく、大きくは 4 つのブロック（①～④）として散見される。

①～③で確認された土坑は、いずれも方形土坑であり、SK190 以外は、坑底に柱穴が確認されたり、断面観察から柱痕の痕跡が確認され、本来は板枠が組まれていた可能性のある土坑と推測される（17 図）。ただし底板の痕跡が確認されたものはなく、抗底は地山（ローム土）が露出した状況であったと推測されるが、抗底にローム主体の貼床が確認されたり、抗底や壁面などが滞水の影響で変色している状況が確認されるものもある。遺構の主軸方向角を確認すると、SK190 以外は、いずれも主軸①を示す。以上のような共通点がある一方、規模を確認すると統一性はなく、また細部をみると違いが確認されることから、側壁に板枠が設置され、遺構の主軸方向角が南北軸（主軸①）である事が、①から③で検出された方形土坑に求められた必須条件であり、それ以外の規格性は無かった（あるいは、緩かった）のであろう。対して、この 2 点を満たしていない SK190 は別の目的で構築されたと考えられるが、この SK190 からは、三つ葉葵紋の軒丸瓦、本瓦、熨斗瓦などの溶姫御殿に関係する可能性のある廃棄資料が出土している。また SK143 からも、現在の赤門にも残る瓦と同じ紋の隅巴瓦（鬼瓦？）が出土している。これまでの加賀藩邸の調査では、三つ葉葵紋の瓦は御殿空間で見つかる例が大半であり、SK143 出土の隅巴瓦とあわせ、本地点と御殿空間との関係性が窺われる。

本地点の特徴として、1 遺構からの遺物出土量の少なさが挙げられる中、本段階の 6 基の土坑からは、いずれも遺物収納箱 1 箱分以上の遺物が出土している。また出土状態を確認すると、完形あるいは半完形のものが目立ち、中でも瀬戸・美濃系瓶の完形率が高いという特徴が指摘できる。堀内によると、東大構内遺跡では、19 世紀になると、それ以前と比較して徳利の出土比率が増加し、全く欠損なしに廃棄される徳利の数量が増加する事から、19 世紀には「通い徳利」システムルールが遵守されていない傾向にあった事が指摘されている（堀内 2005）。本地点のような御殿空間に近い場所であっても、いわゆるリサイクル瓶をリサイクルせず、日常的に廃棄していたということなのであろうか。

④で確認されたのは、土坑ではなく、柱穴列である。

遺物から年代比定が可能であったのは、SP64 と SP66 のみであるが、他 2 基は SP64、SP68 とほぼ同一線上に位置し、また SP80 は、掘り方形状や規模が両ピットと似ていたこともあり、一連の柱穴列と判断した。主軸方向角は、ほぼ主軸①と一致する。各ピットの平面形は方形、断面形は箱形を呈し、深さが 60cm から 92cm を測る、比較的深いピットである。周囲に対応する柱穴列が検出されなかった事から、塀列の可能性が指摘される。

なおこれより南側では、19 世紀代の遺構は一切確認されず、何らかの規制があった可能性がある。

確認してきたような遺構の分布状況や、検出された土坑や遺物の変化の要因は、本地点の利用が変化した事が推測されるが、その要因を 1 表から探ると、享和 2 年(1803)の「梅之御殿」の新築と、文政 8 年(1825)の「溶姫御殿」の建築開始が挙げられる。「梅之御殿」は、10 代藩主重教の正室、寿光院の居所として建てられた建物であるが、その建築に際して、内馬場にあった「厩」が本地点へと移設される。「溶姫御殿」は、11 代徳川将軍家斉の息女溶姫の入輿に伴い、新たに建設された「御住居」である。その建築に際し、本地点南側に位置する本郷五丁目、六丁目町屋を収公し、本地点南側の御殿空間は大きく整備される。事実、先に示した 10 図と 11 図を比較すると、本地点南側の御殿空間内の建物が増加し、詰人空間との間には囲障ができ、「埋御門」が作られるなど、本地点一帯の整備が進んだ事が判る。

3. 法学部 4 号館地点との比較

次に、本地点が加賀藩に組み入れられてからの周囲の状況を知るために、本地点東側に隣接する法学部 4 号館地点について、18 世紀代前半～ 19 世紀前半の主要な遺構や、遺物の検出状況を確認し、その上で本地点との様相差も確認してみた。なお法学部 4 号館地点の報告書では、遺構名の表記が「G5-3 号土坑」のように、検出されたグリッド(G5) - 番号(3 号)・遺構種別(土坑)と表記されているが、本稿では、現行に近づけ「G5-3_SK」のように表記した。

(1) 18 世紀前半(18 図上)

出土遺物の年代観から 18 世紀前半に比定される遺構は、報告書から 28 基確認された。遺構種別を確認すると、地下室、土坑、井戸、溝であり、地下室が 18 基で最も多い。報告書の中で指摘されているように、18 基の地下室は、南北 2 列の帯状に確認され、重複関係があるものも確認される。また地下室の大半は、本郷キャンパスで検出される地下室 1 類ないし 2 類に分類されるものである[6]。個々の地下室の規模や形態などについて詳細な報告は省くが、本地点の地下室とは、分布、検出状況、遺物量が大きく異なる。すなわち本地点の地下室は、ブロックで検出され、複数重複したりする状況は認められない。また遺物も、法学部 4 号館地点では、1 つの地下室から 10 数点から約 50 点の陶磁器類が出土し、その他に、瓦、石製品、金属製品、さらには動物遺体などが集中して廃棄された状況も確認されているとある。しかし、本地点では、SU381 以外は、遺物がまとまって出土する状況は確認されず、動物遺体に関しても、SU381 以外は出土していない。

地下室についで多く確認された土坑について比較すると、本地点で検出されたような方形土坑(G5-3_SK、H5-2_SK、K5-1_SK) と不整形土坑(D7-1_SK、B10-2_SK)が検出されているが、前者の土坑は遺物が少なく、後者の土坑は遺物が多く出土している。また、後者の土坑の遺物には、比較的完形の遺物が多く認められる。以上のような遺物の出土状況からは、前者のような方形土坑は、いわゆる芥溜とは異なる利用目的で作られた遺構であり、後者は、不要品を廃棄するために掘削された芥溜の可能性が指摘される。

井戸は 3 基(B3-3_SE、G6-4_SE、D8-7_SE)確認されているが、足掛け穴が確認されるような井戸はない。また G6-4_SE は、円形の掘り方外側に、方形の掘り方を有す井戸であり、何らかの付帯施設が伴う井戸ではないかと報告されている。本地点でも、当概期の井戸が 1 基(SE57)確認されているが、素掘りの井戸であり、付帯施設を有す井戸は確認されていない。

D11-1_SD は、法学部 4 号館地点の調査区南端で検出された、東西方向に延びる溝状遺構である。西側は調査区外へ延びるが、東側は緩やかな立ちがりが検出されている。旧図書館基礎で撹乱され、遺存状況は良くないが、幅は 80 ～ 94cm、深さは 22 ～ 36cm を測り、掘り方断面形は逆台形を呈す。溝底標高は 22.38m ～ 22.46m を測り、西から東へ緩やかに傾斜している。覆土上層には人工遺物を含まない貝層が確認され、埋没する過程で廃棄されたものと推測されている。本地点においても、調査区を南北に延びる SD31 が確認されているが、溝の北端部立ち上がりが確認されている。また、上層に貝殻を多く含む層が確認され、地境溝のような性格と推測されるなど、法学部 4 号館地点の D11-1_SD と共通する点が多い。遺構主軸も SD31 はほぼ南北軸を示し、遺構主軸が東西軸を示す D11-1_SD とほぼ直交した状況である事も確認された。

(2) 18 世紀後半(18 図下)

18 世紀後半に比定される遺構は 9 基確認され、18 世紀前半からは大きく減少し、確認された遺構も、東西に 7 基の柱穴が並ぶ柱穴列(青破線、B9-4_SB ～ F9-1_SP)と土坑であり、18 世紀前半とは大きく異なる。また、もう 1 つ大きく変化しているのが、遺構の分布状況である。18 世紀前半のように、遺構が帯状に分布するのではなく、大半が調査区中央付近に、重複する形で確認されている。その中には、長辺が 5m を超えるような、不整形ないし不整方形の大形土坑(E7-3_SK、E8-5_SK、E7-7_SK、E7-8_SK)も確認される。なお、これらのほか「不整形な落ち込み」(G7-7_SX、F7-3_SX)も確認されている。

東西に延びる柱穴列(B9-4_SB ～ F9-1_SP)は、主軸方向角が南北軸とほぼ同軸で、やや特殊な形態の柱穴 7 基からなる。報告書によると、南北に長軸を有す細長い長方形の掘方両端に、礎石が配置されたものである。北側の礎石の方が南側の礎石より大きく、土層観察で確認された柱痕も、北側は一辺約 25cm を測る方形の材であり、南側は一辺約 15cm を測る材であったという。このような構造から、北側に主柱、南側に支柱が立てられ、両柱に横木を渡し、組み立てられた塀と考えられると報告されている。本地点でも、よく似た構造の遺構が検出されているが(SB277)、遺物が出土しておらず、年代は不明であり、また単独で検出されている点は、B9-4_SB ～ F9-1_SP とは異なる。また、SB277 の主軸方向角は主軸②と同軸であり、検出場所も、B9-4_SB ～ F9-1_SP よりも北側に位置していることから、関連遺構とは考えにくい。

大形土坑(E7-3_SK、E8-5_SK、E7-7_SK、E7-8_SK)からは多量の遺物が出土し、最終的な廃絶状況は芥溜と報告されるが、各遺構から出土した陶磁器類の年代観を確認すると、少しずつ時期差があることが確認できる。以上のことから、明和 9 年の火災で西之御殿が焼失した後、18 世紀後葉から 19 世紀初めにかけて、法学部 4 号館地点は、繰り返し廃棄行為を行う事が可能な場所であった事が推測される。

本地点においては、西之御殿焼失後、法学部 4 号館地点のような大形廃棄土坑は確認されず、確認されたのは、火災瓦礫を廃棄した SK171 や SK41、SX39 のみであり、これらの遺構は、覆土の堆積状況や出土遺物の様相から、火災直後の一過性の利用であった可能性が高い。また、これら以外の 18 世紀後半の遺構も、繰り返し廃棄行為が行われた状況は確認できない。前述したように、本地点の東西 3 ラインから 7 ラインの間には SX39 以外認められず(14 図)、空きスペースとなっているにもかかわらず、法学部 4 号館地点のような大形廃棄土坑が設置されなかったのは、本地点の利用について、18 世紀後半に何かしらの規制があったと考えるのが自然であろう。しかし一方で SK42 のような採土坑を掘削し、採土という行為が行われたのは、当時、藩邸内で相当量の土が必要とされた為だと考えられるが、1 表をみると、寛政元年(1789)年 11 代藩主治脩の世子斉敬の「居宅」の建設があり、それが一因であった可能性もある。

調査区東端部分で確認された、性格不明の「不整形な落ち込み」(G7-7_SX、F7-3_SX)は、ともに平面形は不整形を呈し、掘り方は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは 30cm 弱と浅く、坑底が平坦にされていたとある。また、焼土塊や炭化物とともに、二次的な火熱を受けた桟瓦が多量に出土しており、この桟瓦の形態から、この火災は、明和 9 年(1772)の目黒行人坂の火災に伴うものであると報告されている(成瀬 1990)。以上のような 2 つの落ち込みの状況は、本地点の調査区西端で検出された SX39 と共通するものであり、明和 9 年の火災で焼失した「西之御殿」の火災瓦礫処理に際して、藩邸内の窪地の底面をフラットにして、火災瓦礫層を敷き込むような整地が行われたのであろうか。

18 世紀後半と一括りに見てきたが、前述したように西之御殿建築以前と以後で、その利用に大きな違いが確認される。すなわち西之御殿建築以前、本地点は SK25 のような大形の土坑が掘削可能な空閑地であり、一方、法学部 4 号館地点は、大形の土坑などが掘削可能な場所ではなく、西之御殿建築以前を描いたとされる、20 図 B のような長屋群が存在していた可能性が高い。それが西之御殿建築に際し、本地点 SK25 は埋め戻され、法学部 4 号館地点を含む一帯に拡がっていた長屋群や付帯施設は撤去されたのであろう。しかし西之御殿焼失後は、本地点の SX39 や、SK171、SK41、法学部 4 号館地点の東側落ち込みなどは、火災後の瓦礫処理に利用され、西之御殿自体は再建されることはなかった。そのような状況の中、本地点では、採土坑 SK42 が掘削され、法学部 4 号館地点は、「大形の廃棄土坑の掘削と、埋戻しを繰り返し行える場」となっていたと推測される。

(3) 19 世紀前半[7] (19 図)

19 世紀前半に比定される遺構は 7 基確認され、遺構数は 18 世紀後半から更に減少し、遺構種別と分布は大きく変わる。調査区北端でカマド(C2-1_SF)と井戸(C3-4_SE)、他に土坑が 3 基、ピットが 1 基確認される。

18 世紀後半で確認されたような大形の廃棄土坑は確

認されず、また遺物が大量に出土する遺構も確認されないなど、法学部4号館地点の利用が大きく変化した事が推測される。この要因は、本地点の19世紀の様相でも指摘した、享和2年(1803)の「梅之御殿」の建築と、文政8年(1825)の「溶姫御殿」の建築と無関係ではないと思われる。

4. 藩邸絵図面との照査

本節では、本地点付近一帯が、藩邸絵図面の中でどのように描かれ、利用されていたのかを確認してみた。また、藩邸絵図面の中でも、精度が高く、建物細部まで詳細に描かれている「上屋敷殿閣図」(尊経閣文庫所蔵)と「江戸御上屋敷絵図」(金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫)の2枚と、本地点および法学部4号館地点で検出された当該時期の遺構との照合を試みた。なお、各絵図面の特徴及び推定年代については、細川義の研究(細川 1990)を参考にした。また史料名後ろの括弧内には、史料所蔵先と、御殿下記念館地点報告書に掲載されている巻末写真番号を掲載した。

はじめに述べたように、藩邸絵図面と調査地点との照合は、QGISを用いて行っているが、全ての藩邸絵図面が、縮尺や角度などが正確ではないため、前述した精度の高い2枚の絵図面を基準として、本地点南側に位置する情報学環・福武ホール地点北側部分で検出された、町屋と加賀藩邸との地境溝(17世紀代、先手組屋敷と町屋との地境)の位置が、絵図面と整合するように補正し、配置した(20・21図。いずれも上が北。●が本地点、■が法学部4号館地点、緑三角が町屋と加賀藩邸との地境溝)。

Aは、「上屋敷殿閣図」(尊経閣文庫所蔵、『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点(以下、報告書4)』写真2)のトレース図である。本図の推定年代は、貞享4から元禄15年(1687～1702)が想定されている。本図には、ヘラ書きケイ線があり、1マスが1間(約180cm)四方に相当し、縮尺が600分の1となっている事が判る精度の高い絵図面である。西側を除く本地点周囲には、「足軽並」と役職が描かれた南北に連なる長屋群があり、本地点東端は、この長屋群の西端に僅かに重なるが、調査区の大半は、中山道に面した空白域に相当している。また法学部4号館地点は、「足軽並」と描かれた南側2棟部分に概ね相当する。

Bは、「前田家本郷御屋鋪図」(三井文庫所蔵、『報告書4』写真3)である。本図の推定年代は、1761～1771年が想定されている。ただし、元文4年(1739)に「出雲守様御屋鋪境御門」が作られる以前の形で描かれている事から、細川も部分的には18世紀前半に遡る可能性もあると指摘している[8]。

Bは精度がよくない図面であり、前述したような形でQGISデータ化を試みると、本地点周囲の南北に連なる長屋群が、全体的に北東方向に傾いたような状態となるが、長屋の配置や棟数などはAと変化はない。大きく異なるのは、本地点を含む中山道に面した北西部分である。本地点調査区西端付近に、「西ノ穴」と描かれた穴？があり、さらにそれを挟むように帯状の植栽？ or 土塁？のようなものが描かれていて(黄色地に黒いドット)、本地点の調査区北側部分は、この帯状に描かれた部分に概ね相当する。法学部4号館地点については、Aと変化はないようにみえる。

Cは、「西之御殿絵図」(金沢市立玉川図書館所蔵加越能文庫、『報告書4』写真33)である。「西之御殿」は、10代重教の隠居宅として明和8年(1771)に建築が開始され、明和9年(1772)、完成間近で焼失した御殿である。恐らく御殿範囲内にあった長屋群は、御殿の建築前に解体、撤去されたと推測される。御殿範囲外郭と、外郭に沿った建物や門が描かれただけの絵図面であるが、周囲の建物や中山道に張り出した部分との位置関係などから、藩邸内の、どの辺りまでが西之御殿へ変わったのかを推測する事は可能である。御殿の内部建物や、間取りは不明であり、遺構との照合は困難であるが、御殿東寄りの部分に「御表御殿廻リ并ニ諸役所溜リ等」、西寄り部分に「御広式御殿廻リ并部屋方大廊下等」と記されていることから、本地点と法学部4号館地点付近は奥向の空間であったと推測される。

Dは、「江戸御上屋敷図」(尊経閣文庫所蔵、『報告書4』写真4)である。本図の推定年代は、1772～1777年が想定されている。年代の上限は、Cの「西之御殿」の建設場所が大きく空いていることから、明和9年「西之御殿」焼失後の絵図面と思われる。西之御殿焼失後、本地点周囲の長屋群が新設されている状況が確認できるが、本地点南側や法学部4号館地点付近は、育徳園内の「御露地」と同色で彩色され、建物などは認められない。

Eは、「加藩本郷屋敷絵図」(石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション、『報告書4』写真8)である。本図の推定年代は、1792～1796年が想定されている。かなりデフォルメされた絵図面である。本地点を含む、中山道に張り出した部分は、南半分は黒い曲線で囲んだ中を緑色(？)で斑に彩色し、北半分は囲いのような表現はなく、緑色の長めの破線が描かれている。E図の注釈に緑色は「草はへたる所谷ノ類」とあるが、南側と北側は、同じ緑色で描かれているが、表現方法が異なることから、同

じ「緑地」でも、様子（利用？）が異っていた可能性がある。

Ｆは、「加藩江戸本郷屋敷総絵図」（石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション、『報告書４』写真10）である。本図の推定年代は、1792 ～ 1796年が想定されている。中山道に張り出した藩邸地境塀の中央付近に「御土蔵」、その北側には、柵のようなもので囲われた「竹ヤブ」「御ハタ」、南側には、コの字形に表現された緑地内に、「御露地役所」とあり、建物２棟（黄色い四角）と井戸（小さい黒丸）が描かれている。北側の「竹ヤブ」「御ハタ」は、Ｅ図の北半分の緑地がそのまま利用されていた可能性もある。本地点北側は「御ハタ」、南側はコの字形の緑地と「御露地役所」の部分に、法学部４号館地点は、西側はコの字形の緑地内、東側は空閑地（空白）であった可能性がある。

Ｇは、「前田家本郷屋敷略図」（金沢市立玉川図書館所蔵河野文庫、『報告書４』写真13）である。本図の推定年代は、1803 ～ 1806年が想定されている。御殿空間の北東隅付近に、10代藩主重教の正室寿光院の居所「梅之御殿」を造るため、その部分にあった「御厩」を、Ｆの「御露地役所」部分に移転した状況となっている。「御厩」の移転に伴い、本地点付近一帯も再整備されたようであり、中山道に張り出した部分北側の「ヤブ」は無くなっている。「ヤブ」南側の「御土蔵」はＦのままであるが、その南側の建物は１棟から２棟に増設され、形態も変わっている。移転されてきたという「御厩」は、南北に長軸を有す建物１棟（「役所」とあり）と、Ｌ字形の厩１棟から成り、その周囲が塀？で四角く囲われている。「御厩」北側の「御細工小屋」は、Ｆから存続している建物である。本地点の大部分と、法学部４号館地点の北西付近は「御厩」に、法学部４号館地点の南側は、「埋御門」前の空閑地か、「埋御門」の一部に相当する可能性がある。

Ｈは、「加藩江戸本郷屋敷総絵図」（石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション、『報告書４』写真15）である。本図の推定年代は、1807 ～ 1825年とされる。Ｇと同じく、本地点東側1/3と、法学部４号館地点の西側半分ほどは「御厩」が確認されるが、絵図の精度が異なるためなのか、「御厩」との位置関係が異なる。また厩の形状が正方形から長方形に変わり、厩が部屋の南側にも増設され、コの字形に配置され、部屋の中央付近には「モノオキ」「飼料所」「井戸」などの施設が確認できる。本地点北側には、柵で囲われた「竹ヤブ」が設置され、それに伴い「御土蔵」が藩邸地境塀沿いに少し移動し、その南側に「御露地役所」（黄色建物）が新設されている。

Ｉは、「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫、『報告書４』写真21）をトレースしたものである。本図の推定年代は1840 ～ 1845年とされ、Ａと同じく、加賀藩の藩邸絵図面の中で精度の高い絵図面である。3cm四方の朱の方眼が描かれ、これが絵図面上は10間（18m）四方に相当し、600分の１の縮尺で描かれていることがわかる。

本絵図面には、文政10年（1827）、徳川将軍家息女・溶姫の入輿に伴い、御住居を建築し、藩邸西側が大きく改変された様子が描かれている。御住居が育徳園の西側付近まで拡張し、新たに「埋御門」が建築されたのに伴い、本地点付近一帯にあった「厩」や長屋群が撤去された事がわかる。撤去後の本地点北側には、「緑地（竹ヤブ？）」と、「御住居附壱番」と書かれた長屋が、中央から南西付近は、「御露地役所」の前庭付近に、そして調査区南東付近は、埋御門から西へ延びる塀と、その南側、すなわち「御殿空間」の中に位置するようになる。法学部４号館地点は、調査区全体がほぼ「御殿空間」内に位置している。すなわち、調査区北側は「埋御門」に、南側は「埋御門」内側の空閑地に位置し、「番所」と「ノリモノ部屋」と書かれた建物がある。

Ｊは、「前田家本郷屋敷之図」（部分、金沢市立玉川図書館所蔵河野文庫、『報告書４』写真22）である。本図の推定年代は、1845 ～ 1851年とされる。Ｉとよく似るが、本地点南東付近の「埋御門」から「御露地役所」へ直線的に延びていた地境塀が、「埋御門」から「森川口御門」北側袖塀にとりつく形に変わっている。また塀の表現も、１本線から２本線に変化しているので、塀の付け替えや、作り替えが行われた可能性がある[9]。本地点北側の状況は変化がないようである。法学部４号館地点についても変化がないが、埋御門から東へ延びる育徳園北側囲障が、やはり１本線から２本線へと表現が変わっており、御殿空間と詰人空間の北側地境塀が、この頃には作り替えられていた可能性がある。

（1）上屋敷殿閣図との対比（22図）

22図は、本地点と法学部４号館地点の、18世紀前半に比定される遺構の検出状況と、当概期の絵図面である上屋敷殿閣図のトレース図（10図）を対比したものである（図面上が北）。上屋敷殿閣図は、藩邸全体が彩色され、利用状況に応じて建物が色分けされている。また、詰人空間の建物には、居住者の家格（身分）や間口間数が書かれており、その部分に、どのような身分の家臣が、どれだけのスペースを与えられていたのか知る事ができる。さらに長屋間の空間地（露地）の幅や、長屋建物の周囲の様子（塀で囲われた前庭の有無、井戸の位置など）も描かれている。

22図をみると、本地点の大半は、南北に並ぶ長屋群西側の空閑地に相当する事がわかる。ただし、調査区南東隅付近と中央付近は、南北に連なる長屋群の南から3棟目「足軽並・十間」と描かれた長屋建物(22図長屋C。以下、長屋C)の西端の1部屋に、調査区南東隅付近は、同じ長屋群の南から1棟目「足軽並・二十四間」と書かれた長屋建物(22図長屋A。以下、長屋A)の前庭部分に相当する可能性が高く、後述する法学部4号館地点と同じ長屋建物の前庭である事が明らかとなった。

法学部4号館地点は、前述した長屋Aに加え、その北側の「足軽並・二十四間」と描かれた長屋(22図長屋B。以下、長屋B)と、この東側に位置する「与力並・四間」と描かれた南北軸の長屋(22図長屋D。以下、長屋D)の西端にも相当する可能性がある。

前節で、18世紀前半、本地点で遺構がまとまって検出される場所が3箇所(22図①～③)ある事を指摘したが、②は、長屋Cの前庭部分に作られた地下室である可能性が高い。また③は、法学部4号館と同じ長屋Aの前庭部分か、あるいは近接して作られた地下室と井戸である可能性が高い。「近接して作られた」と書いたのは、この2基が、照合データ上では長屋前庭を囲う塀から僅かに飛び出した位置にあるためである。ただし絵図面の精度などを考慮すると、②と同じく、前庭に作られたものである可能性が高いように思われる。但し、そうであれば気になるのは井戸である。本絵図面に描かれた長屋付近にある井戸(絵図面中の橙色の丸)は、長屋と長屋と間の露地に描かれており、周囲の長屋居住者が、共同で利用するような井戸であったと推測される。しかし、③の井戸が前庭内に設置された井戸となると、長屋Aの居住者しか利用できない井戸という事になり、この絵図面に描かれた長屋付近の井戸とは、性格を異にする建物付きの井戸という事になるのであろうか。なお長屋Bにも、建物付きの井戸と推測されるものが1基確認できる(B3-3_SE)。

法学部4号館地点は、18世紀前半に比定される遺構の多くが、帯状に、南北2列確認されることを指摘していたが、帯状に拡がる遺構は、長屋Aと長屋Bの前庭部分に位置する可能性が高い。すなわち長屋Bの前庭には、2類の地下室(22図三角に「2」)が3基、1類の地下室(22図三角に「1」)が1基、方形土坑3基、井戸1基が設置され、長屋Aの前庭には、1類の地下室が8基、2類の地下室が2基、土坑1基、井戸1基が設置されていた可能性がある。長屋Aと長屋Bは同規模で、家格も同じ「足軽並」の長屋であるが、前庭の地下室と土坑の様子は異なるようである。すなわち長屋Bの前庭に設置された地下室は、概ね2類に分類される地下室であり、長屋Aの前庭に設置された地下室は、概ね1類に分類される地下室である。また長屋Bで確認された土坑は、方形土坑であり、遺物が余り出土していない。一方長屋Aには、方形土坑はなく、不整形土坑のみであり、そこからは魚骨も含む、多くの遺物が出土している。以上のような長屋Aと長屋Bの違いは、何を要因としたものであるのかは現段階では不明である。

法学部4号館地点の東端部分は、長屋Dに相当する可能性を指摘したが、この部分で検出されたのは、2類の地下室と方形土坑であり、この絵図面通りであれば、長屋Dの建物内に、両遺構が設置されていた事になり、その状況は考えにくい。法学部4号館地点の北西井戸(B3-3_SE)から、長屋Dの建物内に入ってしまう方形土坑(K5-1_SK)までを直線距離で測ると、約44mすなわち約24間を測り、建物に書かれた間数と一致することから、長屋Bの位置が、絵図面に描かれた位置よりも、東に位置していた可能性も考えられ、その仮定通りであれば、地下室も、方形土坑も、長屋Bの前庭に位置していた可能性が出てくる。ただし両遺構が、長屋Bと長屋Dの間の露地に作られた施設である可能性も否定できない。

本稿を執筆する中で、法学部4号館地点の調査区南端で検出された東西方向に延びる溝状遺構(D11-1_SD)と、本地点のSD31が直交する状況が確認されたが、絵図面と照合すると、これら2本の溝状遺構は、南北に連なる長屋群をL字形に取り囲むような状態であることが明らかとなった(22図灰色破線)。上屋敷殿閣図(10図)をみると、本地点を含む長屋群の南側には、塀や囲いのようなものが描かれておらず、育徳園(御殿空間)との間に明確な区別(境界)がない状況であることが判る。L字形に検出された本地点のSD31と法学部4号館地点のD11-1_SDが、育徳園との境界を示すものであった可能性もある。あるいは、中山道に面した木戸際門や追分口御門などへのルートを保持するための境界であったのであろうか。いずれにせよ、現状では推測の域を出ない。

(2)江戸御上屋敷絵図との対比(23図)

23図は、本地点と法学部4号館地点の、19世紀代に比定される遺構の検出状況と、当概期の絵図面である「江戸御上屋敷絵図」のトレース図(11図)を対比したものである。本地点の②とした部分の遺構以外は、緑樹帯？(ヤブ？)の中や、建物の空白域にほぼ照合され、②とした部分のSK87、SK92、SK190は「御住居附壱番」長屋の西側二室の前庭部分に構築された廃棄土坑に相当する

可能性がある。また SP220 は、位置的には、この長屋を囲う塀に伴うピットであった可能性もある。また前節で、④より南側には全く遺構が確認されず、なにかしらの規制があったのかもしれないと述べたが、絵図面との照合では、遺構が未確認の調査区南東部分は、御殿空間内の埋御門の西側、「森川口御門」から「埋御門」へ抜ける通路付近にあたり、空閑地であることが求められた事も推測される。

23 図「江戸御上屋敷絵図」との照合では、緑樹帯？の中に照合された本地点①の SK86、建物の空白域に照合された③の SK142、SK143 について、24 図「上中下屋敷絵図」（尊経閣文庫所蔵、『報告書 4 』写真 27）と照合すると、SK86 は「御守殿前三番御貸小屋」の前庭部分に造られた方形土坑である可能性が、SK142、SK143 は、「御守殿前壱番御貸小屋」の前庭部分に造られた方形土坑である可能性が確認できる。

「上中下屋敷絵図」の推定年代は、1863 ～ 1868 年とされ、慶応 4 年（1868）に焼失する本郷邸の最後の様子を伝えているとされる。安政 2 年（1855）の安政江戸地震で邸内全体が被害を受け、その後文久 2 年（1862）の参勤交代制緩和（隔年参勤から 3 年 1 勤に、および大名正室らの帰国許可）に伴って江戸詰人らの長屋が多数解体された状況と思われるが、本地点一帯も大きく変化している。本地点北側に位置していた「竹藪」は縮小し、「御住居附壱番」と書かれた長屋は消失している。本地点北側には、「御守殿前三番御貸小屋」と書かれた長屋が新設され、「御露地役所」は 90 度向きを替え、中山道に直交する建物になっている。またその東隣には、「御守殿前壱番御貸小屋」と書かれた長屋が新設されている。法学部 4 号館地点北側は、「埋御門」が南側へ移動し、規模もごく小さくなった事で空閑地となっている。また南側は、新設された「埋御門」と、「番所」らしき建物以外は見当たらない状況となっている。

法学部 4 号館地点で検出された 19 世紀代の遺構は、23 図、24 図の絵図面と照合すると、埋御門の北側空閑地か、埋御門南側に構築された遺構の可能性があるが、御殿空間、もしくは限りなく御殿空間に近い門の近くに、井戸、カマド、土坑などが構築されたとは考えにくく、両絵図面が描かれた時期の遺構ではない可能性がある。両絵図面が描かれる前後の藩邸絵図面とも照合を試みたが、いずれとも照合は困難であり、本地点東側に位置するアカデミックコモンズ地点の調査報告を待って再考したい。

小結

検出された遺構や遺物、文献史料や藩邸絵図面などから、本地点の様子が大きく変化する 6 つの転換点が確認できる。1. 天和 2 年の火災を契機に、先手組屋敷から加賀藩邸に組み入れられた時、2. 西之御殿の建築が進められ時、3. 明和 9 年、目黒行人坂の火事により、完成間近の西之御殿が消失した時、4.「御露地役所」ができた時、5.「梅之御殿」建設にともない、「御厩」が移転してきた時、6.「溶姫御殿」を造るため、御殿空間を整備した時である。

本地点が先手組屋敷であった 17 世紀代は、遺構数が最も多く、またその種類も豊富であったが、1 遺構からの遺物出土量は少なく、その大半は破片であった。17 世紀前半の先手組屋敷については、中山道両側の屋敷地をどのように利用していたのか、文献史料などでも明らかではないが、1 図にあるように、中山道を挟み東西に広大な敷地を有していた事は判る。広大な敷地の中、遺構の重複を繰り返す状況や、大量の芥などを一所に廃棄する状況は生じなかった可能性はある。しかし天和 3 年以降、加賀藩邸の詰人空間の一角に組み込まれた後は、調査地点を南北に延びる SD31 の東側に、長屋群などが確認される場所となるが、本地点で検出される遺構数や種類は減少する。遺構からの遺物量の少なさ故に年代比定ができない遺構が多いという事情はもちろんあるが、藩邸絵図面との照合で、本地点が、長屋群の一端に該当する程度であった事からこそ、隣接する法学部 4 号館地点のように、地下室や土坑などが帯状に検出される事はなかったと推測される。そして、藩邸絵図面で建物などが描かれていない本地点西から南側の空閑地には、次第に大形土坑 SK25 などが掘削されたのであろう。

18 世紀後半以降、藩邸全体の動きに連動して、本地点の様子も変わっていく。隣接する法学部 4 号館地点を含む中山道に面した一帯が、「西之御殿」の建設用地となった時、本地点では、18 世紀前半に構築された大形土坑 SK25 などの埋め戻しが、法学部 4 号館地点では、長屋群やその附属施設の撤去などが進められたと推測されるが、完成間近であった「西之御殿」が焼失した後は、火災瓦礫や火熱を受けた瓦などを受け入れる場所となり、本地点の SX39 や SK171、法学部 4 号館地点の G7-7_SX や F7-3_SX などを利用し、火災瓦礫の処理が進められたのである。その後の本地点は、「梅之御殿」の建設が決まるまで、SK42 以外の遺構は散発的に検出される状況であった事から、さほど利用されない（出来ない？）空閑であった状況が推測される。一方、法学

部4号館地点は、瓦礫処理を終えた後も、繰り返し廃棄が行われる場所として利用される状況が確認される。このような両地点の違いは、本地点の方が中山道に近い場所に位置し、「外界を意識する場所」であった事が影響しているのであろうか。あるいは、中山道に面した追分口門から、本地点南西部分に位置する木戸際門へ抜けるルートを確保する必要があったため、利用が回避されたとも考えられる。

藩邸絵図面からは、「梅之御殿」の建築が進められた際、本地点付近にあった「竹ヤブ」や「御ハタ」などの緑樹帯、「御露地役所」は撤去され、「梅之御殿」建築予定地にあった「御厩」が、本地点から法学部4号館地点付近に移築されるが、「御厩」に関連する遺構を照合するには至らなかった(10)。

「溶姫御殿」の建築が進められた際、中山道に面した一帯の整備も進められ、本地点付近一帯も、御殿用地の確保や「埋御門」の設置のため、「御厩」は撤去、「御露地役所」が整備され、新たに「御住居附」と書かれた長屋群が配置される。その長屋附帯施設として、本地点のSK87、SK92、SK190などの方形土坑が設置されたと考えられる。さらに、そのような御殿空間の整備に伴い、本地点の南側一部は、詰人空間から御殿空間に組み入れられる状況となり、結果、その部分には、19世紀前半の遺構が検出されない状況となったのであろう。

中山道に面する形で先手組屋敷の領地を買得した当初の目的が、研究編で宮崎が提示した史料にある「火除けのため」であったとすれば、藩邸の類焼防止や中山道への防災通路の確保を目的として、本地点を含む中山道に面する一帯には、建物や付帯施設などが造られなかった、あるいは必要最低限に限られた事も理解でき、本地点の特徴として挙げた「遺構の重複が少なく、御殿空間ではないのに関わらず、遺構から出土する遺物量が少ない」という事に繋がったと推測される。しかし、藩邸内の収容人数が増加する中、18世紀後半以降、「西之御殿」の建築用地となった事で、中山道に面したエリアも建築用地として利用される(利用可能な？)場所となったのではないだろうか？一方、本地点では、西之御殿焼失後、隣接する法学部4号館地点のような、大形廃棄土坑が継続的に造られる場所とはなっていない。中山道という当時のメインストリートに面した場所に、廃棄土坑を継続的に設置するのは難しかったとも考えられる。また、溶姫御殿の建築に伴い中山道側の整備が進み、御殿空間自体も北へ拡大される中、本地点の北側にも、「御住居附壱番長屋」のような溶姫御殿との関係性が高い建物が建てられる場所へと空間利用が変化し、再び大形の廃棄土坑などが造られる事が回避されたのではないだろうか。

文献史料や藩邸絵図面などで確認された変化が、本地点の遺構や遺物の検出状況の変化として全て確認できた訳ではないが、今回、改めて藩邸絵図面を見直し、隣接する法学部4号館地点の遺構や遺物の検出状況を検討し、今回の調査成果を合わせる事で、新たな知見も得られた。今後、本地点南側の情報学環･福武ホール地点や、法学部4号館地点と近接するアカデミックコモンズ地点の整理が進めば、今回気づかなった変化も含め、さらに大きな藩邸北西部の様子を知る手がかりが得られると期待したい。

本稿を草するに際し、宮崎勝美氏には文献史料や絵図面の判読などで多大なるご教授を頂いた。また香取祐一氏には、絵図面や遺構データのQGISデータ化に際して、全面的な協力を頂いた。末筆であるが記して感謝の意を表したい。

【註】

(1) 宮崎勝美氏は、天和3年(1683)12月、加賀藩邸北西部に隣接していた幕府先手鉄炮組屋敷の一部を、加賀藩が内々で買得していると指摘しており(研究編宮崎論考)、天和2年の大火後、中山道に面した藩邸西側部分の整備が進められる中、本地点付近も加賀藩邸内に組み込まれたと推測される。

(2) 宮崎勝美氏によると、拝領当初の先手組屋敷は、幕末期まで存続した中山道両側6997坪余りに、本多家譲渡分2万3273坪余りと、森川家屋敷1131坪、加賀藩譲渡分5000坪を合わせ約3万6000坪余りに及ぶものであったという。幕末期の例では、先手組屋敷の標準的な面積は、1組あたり7000～8000坪程度であり、それと比べると破格の広さであり、郡山藩本多家や加賀藩前田家に土地を譲渡することができたのも、この破格の広さ故とされている（研究編宮崎論考)。

(3) 安政3年(1856)に屋敷改が作成した『諸向地面取調書』によると、本郷森川宿は1131坪とある。明治6年(1873)「第四大区沽券地図」で森川家屋敷跡地を確認すると、駒込東片町5番(615坪)と6番(516坪)に分筆されているが、両番地を合計すると1131坪であり、森川氏屋敷地（森川宿）坪数と一致する。

(4) 宮崎勝美氏よりご教授をたまわった。

(5) 情報学環･福武ホール地点では、2006年度の発掘調査時に、本郷六丁目町屋との地境石組溝（東西溝・SD8）が検出されている。天和2年（1682）火災以前は、SD8の位置が先手組屋敷南端に照合されることから、この溝より北側で検出される、天和2年火災以前に比定される遺構は、先手組

屋敷に伴う遺構である可能性が高い。ただし情報学環・福武ホール地点は、整理段階であり、遺構種別、年代観については、報告書刊行時に見直しが行われる可能性もある。

(6) 成瀬は、本郷キャンパス内における地下室を、形態から５つのタイプに分類している。本調査で検出された１類と２類は、以下のような形態を呈するものである。

１類：入口部から直接室部へつながる地下室のうち、断面形は巾着形を呈し、床面の平面形は楕円形もしくは隅丸方形を呈す。天井高が低く、室内で大人が活動する際、腰を屈めなければならない規模のもの。

２類：入口部から直接室部へつながる地下室のうち、断面形が凸形を呈し、床面の平面形は方形、長方形、台形を呈す。天井高が低く、室内で大人が活動する際、腰を屈めなければならない規模のもの。

両タイプの地下室は、藩邸周縁部や詰人空間で見つかることが多いとされている（成瀬 1994）。

(7) C2-1_SF、E8-1_SG などは、出土遺物が小片であったり、出土量が少なかったりする事などの理由から、18 世紀後半から 19 世紀前半と幅のある年代観に比定されている。

(8) これまで加賀藩の藩邸絵図面は、18 世紀前半のものは未確認であったが、今回、整理を進める中、享保 16 年（1731）作とされる『江戸加賀藩上屋敷絵図』（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵文書データベースhttps://jmapps.ne.jp/amhr/det.html?data_id=42616）の存在が確認された。20 図 B とよく似た絵図面であり、本地点付近を確認すると、中山道に張り出した藩邸地境付近の画像が切れていて、全体は確認できない。しかし、B で「西ノ穴」と書かれているような、細長い円形状の線描と、その東側に「ヤブまたは土塁」を表現したような点描をかろうじて確認できる。さらにその周囲の長屋群の棟数や、配置状況も B と同じである。しかし一方で、本地点南側に、育徳園に直交する東西に延びる塀が描かれていたり、「此囲御附小屋之由」と描かれた付箋がなく、その範囲？のみが不整楕円形で示されているといった異なる点も指摘できる。

20 図 B については、細川も、部分的には 18 世紀前半に遡る可能性がある事を指摘しており（細川 1990）、今回確認された、享保 16 年（1731）作とされる「江戸加賀藩上屋敷絵図」を元図とし、加筆した絵図面の可能性も考えられる。

(9) 宮崎氏によると、詳細な藩邸絵図面では、一重の実線は基本的に板塀で、二重線は土塀、点線などはそれ以外の囲い、という描き分けがなされていたという事であり、本地点南側から育徳園北側の地境塀は、板塀から土塀に作り替えが行われた可能性が考えられる。

(10) 法学部４号館地点で検出された、坑底に２つの根石を伴う長方形柱穴からなる柱穴列（18図青破線）と良く似た柱穴列が、御殿下記念館地点のⅣ、Ⅴ期の面において複数確認されている（御殿下記念館地点付図）。報告によると、この柱列は「坂下御厩」の囲障であった可能性が高いとされており、藩邸絵図面で本地点や法学部４号館地点付近に描かれた「御厩」が、この「坂下御厩」から移築されたものであるならば、法学部４号館地点で検出されたこの柱列が、「御厩」の囲障である可能性が高いのではないかと考え検討を行った。法学部４号館地点で検出された柱穴は、根石の大きさや､深さなどから「主柱穴」の向きが北向きであったと推定されたが、絵図面に描かれた柱穴列の位置では、「主柱穴」の向きが南向きと推定され、「御厩」の囲障と照合するには至らなかった。別の段階の「御厩」に伴う囲障なのか、それとも「御厩」以外の囲障なのか、今後の課題としたい。

【参考文献】

東京大学埋蔵文化財調査室　2006『東京大学構内遺跡調査研究年報』6

テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部　2014『東京都文京区　本郷六丁目遺跡』

成瀬晃司　1994「江戸藩邸の地下空間－東京大学本郷構内の遺跡を例に－」『武家屋敷　空間と社会』山川出版社

成瀬晃司　2006「工学部 14 号館地点の空間構成」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書７東京大学本郷構内の遺跡工学部 14 号館地点』

細川　義　1990「加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』

堀内秀樹　2005「加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書６　東京大学本郷構内の遺跡　工学部１館地点』

宮崎勝美　2025「天和３年（1683）本郷森川宿先手組屋敷地の加賀藩への譲渡をめぐって」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 21　東京大学本郷構内の遺跡　法学政治学系総合教育棟地点』

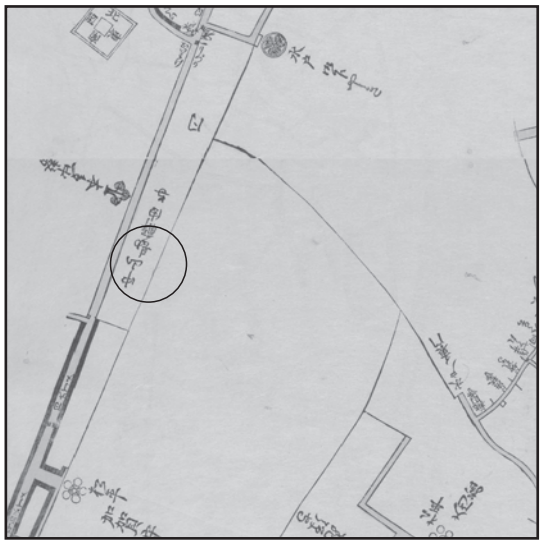
森下　徹　1990「育徳園」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』

湯沢　丈　2025「構内遺跡出土「茶道具」の検討　輸入陶磁を対象として」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 21　東京大学本郷構内の遺跡　法学政治学系総合教育棟地点』

1図　寛永19～20年（1642～1643）
「(江戸全図)」（抜粋）

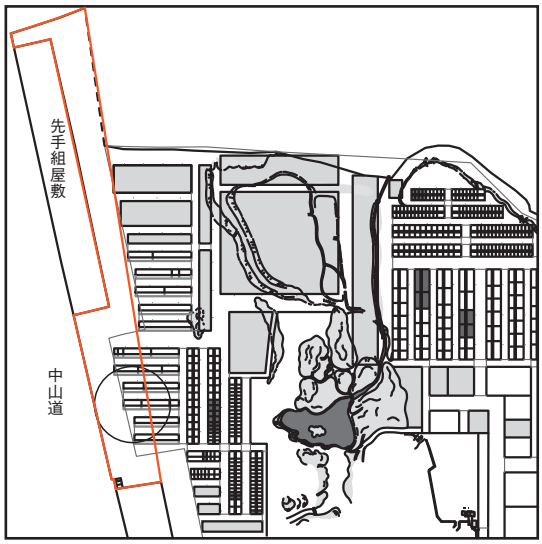
2図　明暦3年（1657）　江戸大絵図（抜粋）

3図　寛文11年（1671）
新板江戸外絵図（浅草・染井・小石川）（抜粋）



4図　延宝8年（1680）　江戸方角安見図鑑（抜粋）

5図　宝永4年（1707）　元禄江戸大絵図（抜粋）



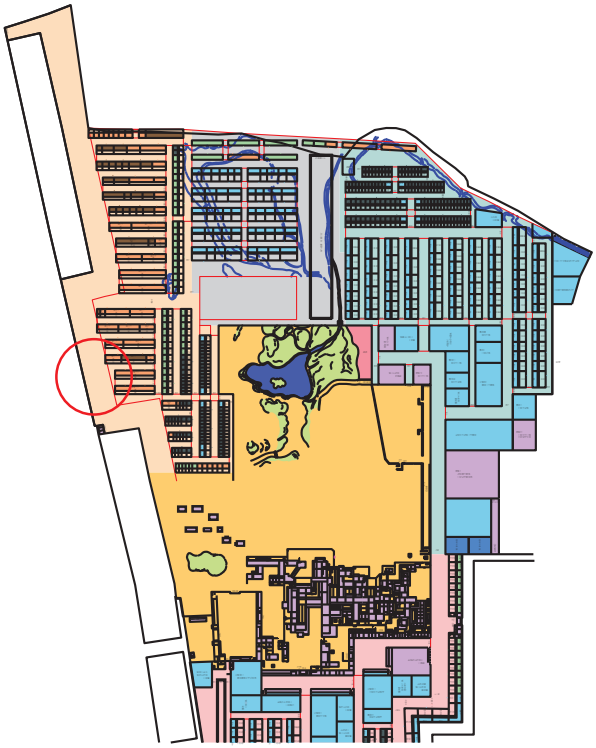
6図　元禄元年（1688）　武州本郷第図
トレース図に加筆（抜粋）

７図　延享－宝暦頃（1744－1763）
設彩江戸大絵図（抜粋）

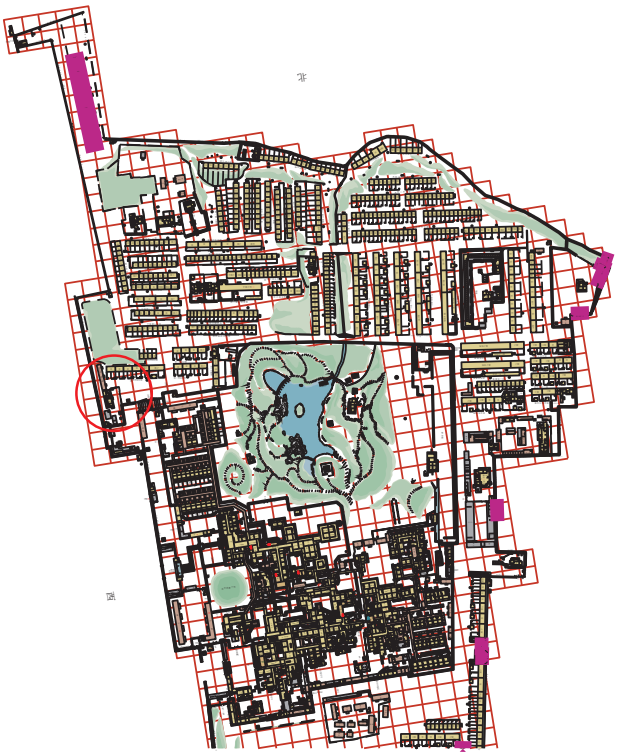
８図　慶応３年（1867）　慶応改正御江戸大絵図　（抜粋）

９図　江戸御上屋敷絵図と明治 16 年（1883）
本郷区本郷元富士町近傍（抜粋）から作成

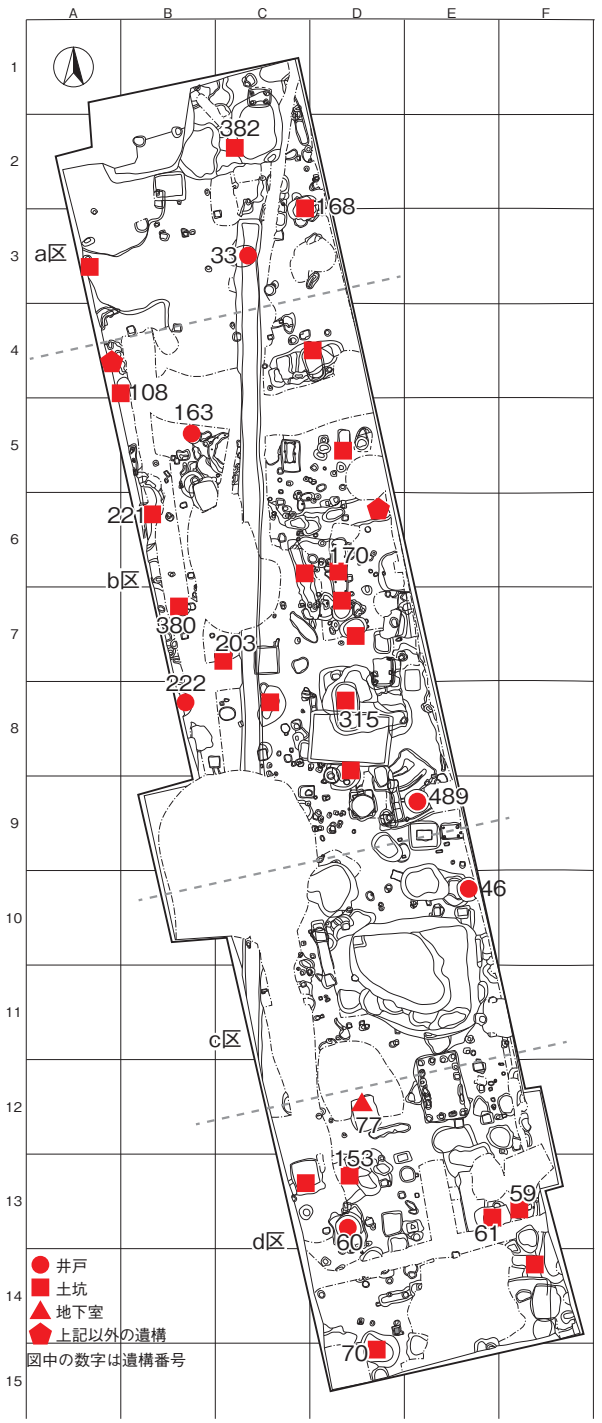
1 図　臼杵市教育委員会所蔵
2 図　柏書房『5 千分の 1 江戸 - 東京市街地図集成　1657（明暦 3）年～1895（明治 28）年』地図資料編纂会編
3 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1286188
4 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2575023
5 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2542440
6 図　前田育徳会所蔵
7 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/8369288
8 図　国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2543121



10 図　「上屋敷殿閣図」（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）トレース図に加筆



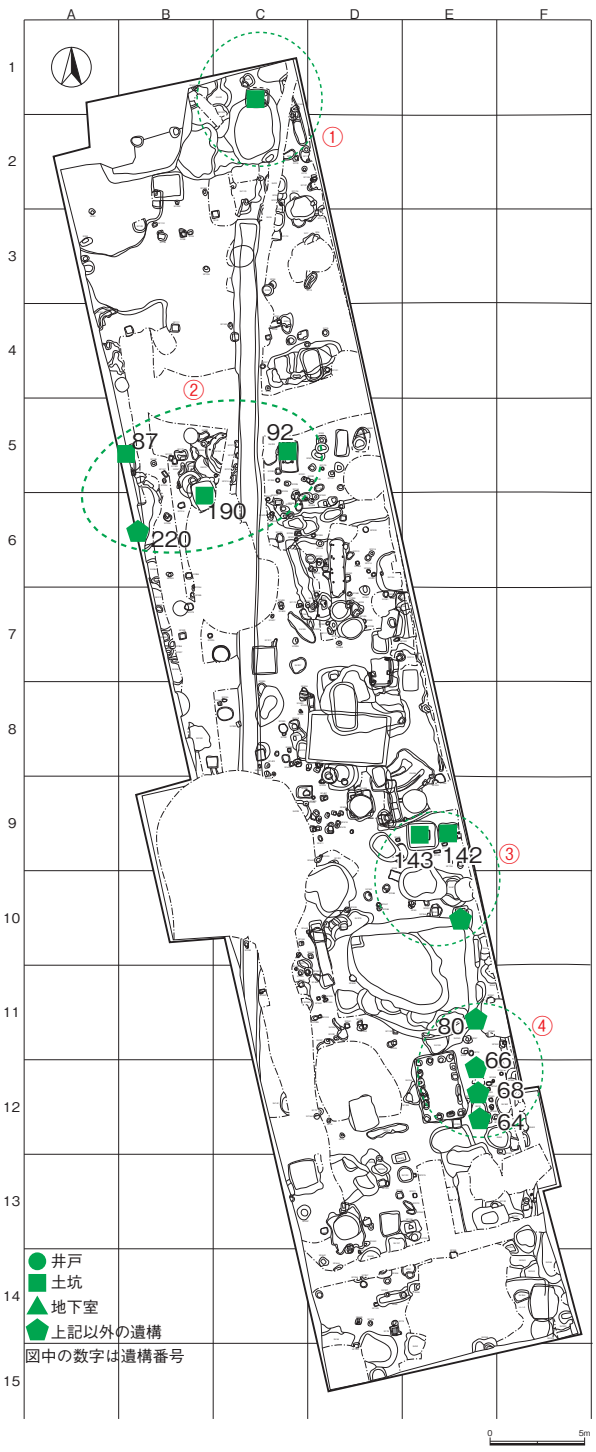
11 図　「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫）トレース図に加筆



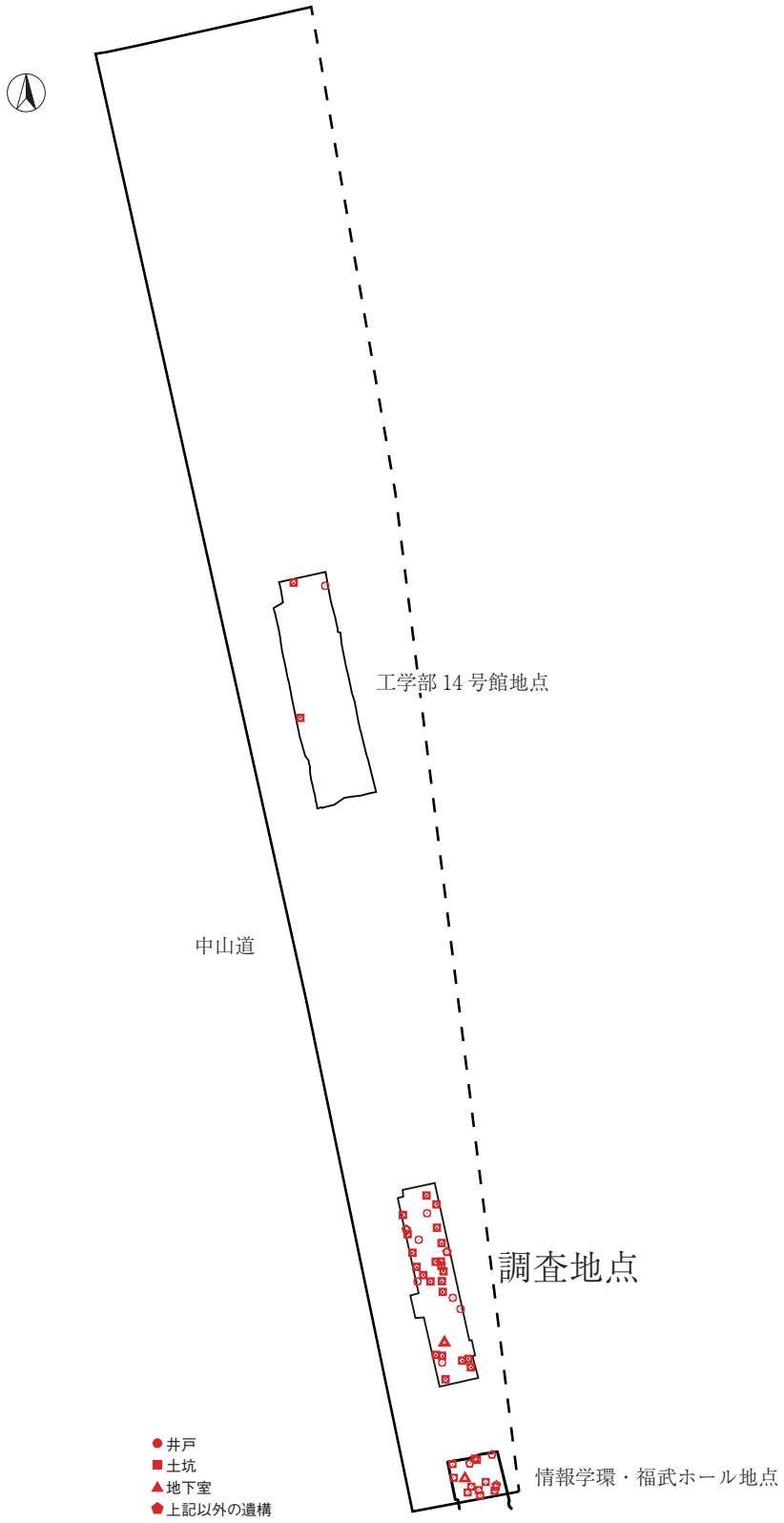
12図　17世紀

13図　18世紀前半

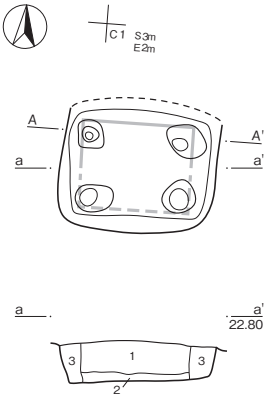
14図　18世紀後半



15図　19世紀

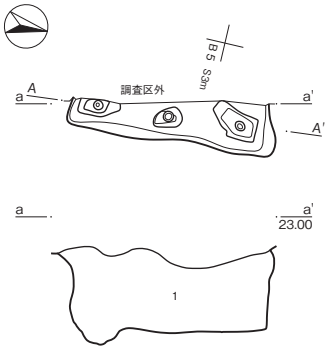


16 図　17 世紀代先手組屋敷 _ 遺構位置図（推定）

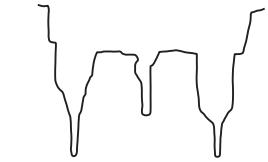


1 暗灰褐色土（炭化物少含、ローム粒微含、しまりやや弱）
2 暗褐色土（ローム粒含）
3 暗褐色土（ローム粒多含、しまり強）

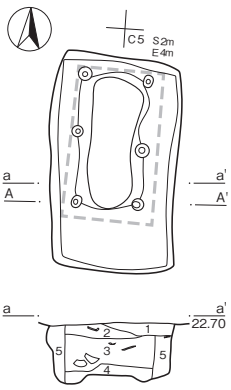
Ⅲ-25図 SK86



1 暗褐色土（灰褐色砂質粘土・焼土粒微含、粘性やや弱、しまり弱）



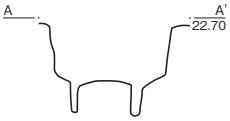
Ⅲ-26図 SK87



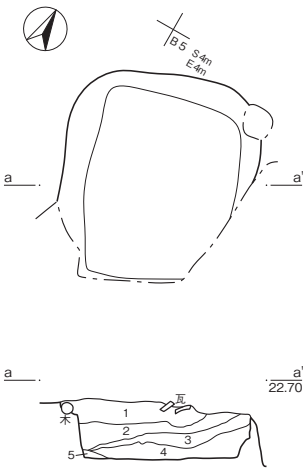
1 暗褐色土（ローム粒少含、しまりやや弱）
2 暗褐色土（ローム粒・炭化物微含、しまりやや弱）
3 暗灰褐色土（人工・自然遺物多含、ローム粒・炭化物含、しまり弱）
4 暗黄褐色土（ローム粒主体、しまりやや強）
5 暗褐色土（ローム粒極多含）

Ⅲ-25図 SK86

Ⅲ-26図 SK87

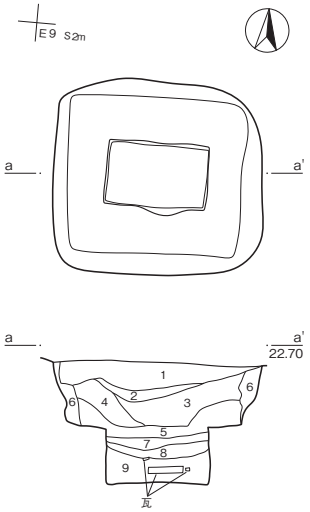


Ⅲ-27図 SK92



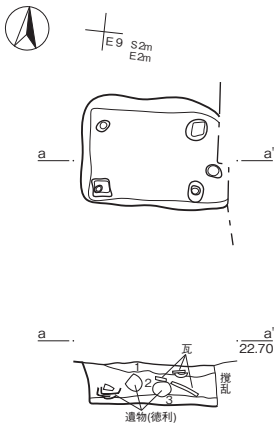
1 暗灰褐色土（ローム粒・玉砂利・炭化材・瓦片含）
2 暗褐色土（ローム粒少含、しまりやや弱）
3 暗褐色土（ローム粒多含、しまりやや弱）
4 暗褐色土（ローム粒少含、しまりやや弱）
5 褐色土（ローム粒極多含、しまり弱）

Ⅲ-39図 SK190



1 暗褐色土（ローム粒・ロームブロック・小石少含、焼土粒微含）
2 明灰褐色土（明灰白色粘土ブロックやや多含、ローム粒・炭化物少含、粘性やや強）
3 灰褐色土（ローム粒・ロームブロック・炭化物少含、焼土粒微含、粘性・しまりやや弱）
4 暗褐色土（ローム粒・ロームブロックやや多含、炭化物微含、粘性やや弱）
5 黒褐色土（ローム粒・ロームブロック・炭化物やや多含）
6 黄褐色土（ローム粒主体、ロームブロックやや多含、黒色土粒少含、粘性・しまりやや弱）
7 褐色土（ローム粒・黒色土粒やや多含、ロームブロック少含、粘性・しまりなし）
8 暗灰色土（黒色土粒多含、炭化物やや多含、ローム粒微含、粘性・しまりなし）
9 暗黄褐色土（ローム粒・黒色土粒・瓦片やや多含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-32図 SK143

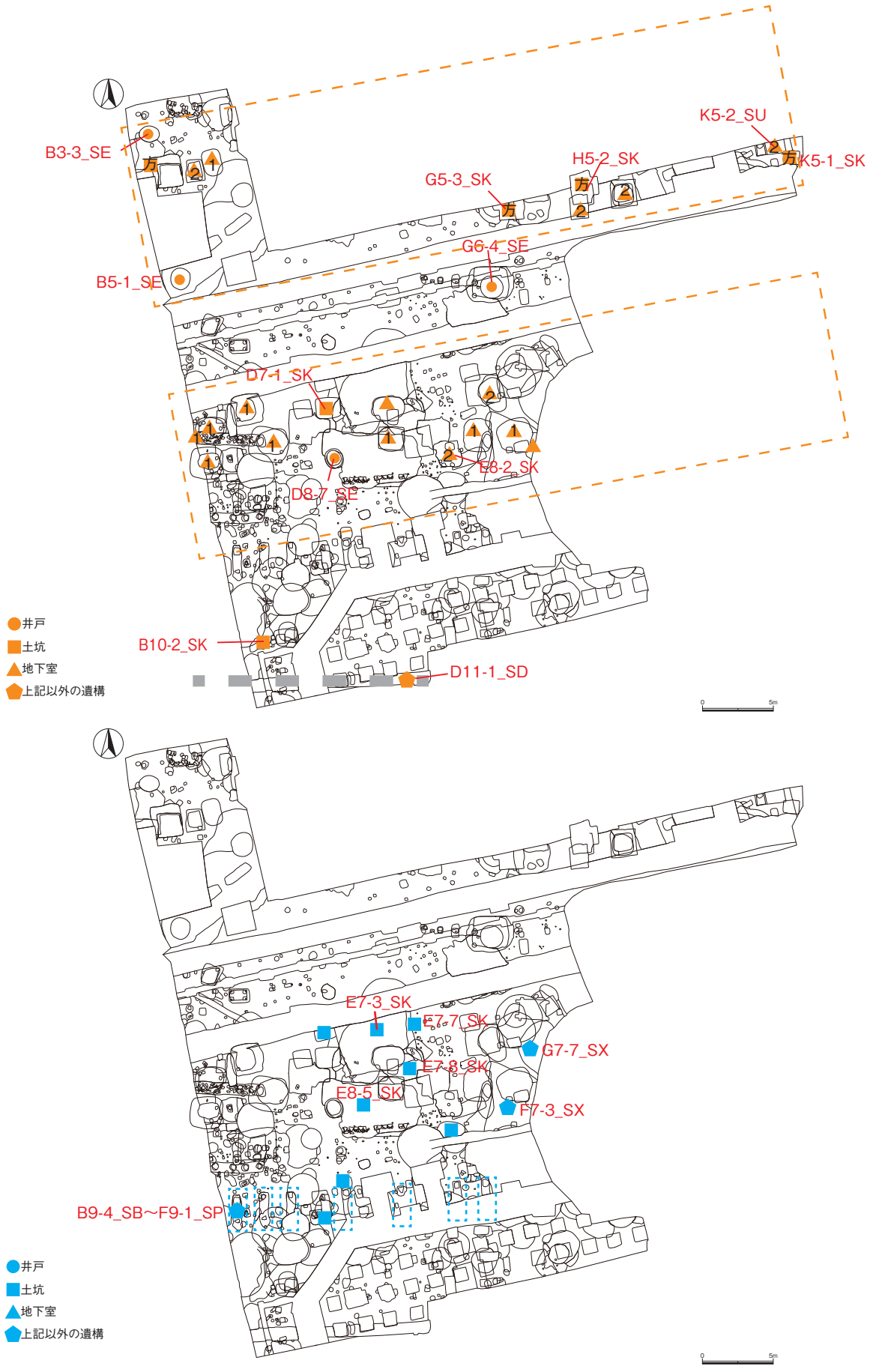


1 灰褐色土（ローム粒・ロームブロック・灰白色粘土ブロックやや多含、焼土粒・炭化物少含、しまりやや弱）
2 灰褐色土（ローム粒・炭化物・焼土粒少含、粘性・しまりなし）
3 黄褐色土（ローム主体、粘性やや強、しまりやや弱）

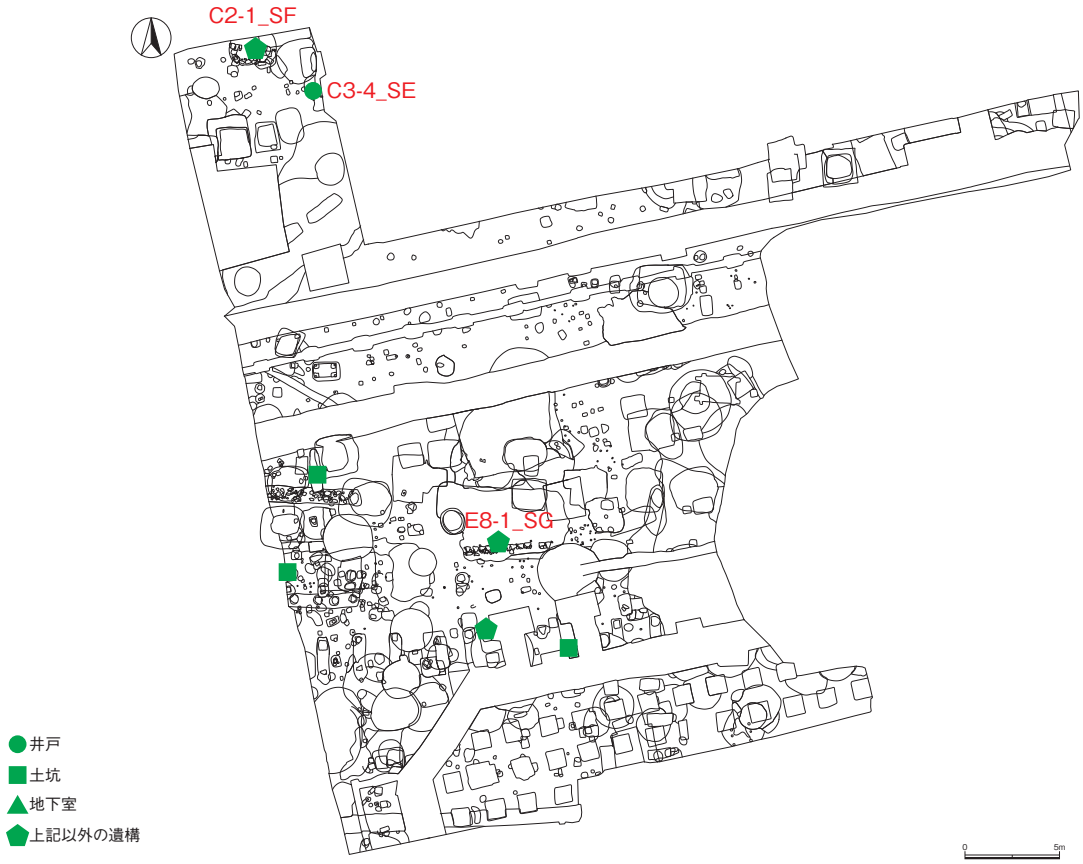
Ⅲ-31図 SK142

0 1m

17図 方形土坑

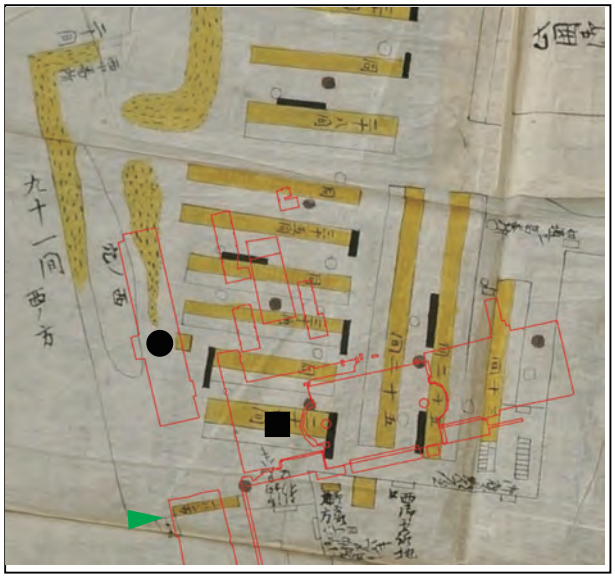


18 図　法学部４号館地点（上：18 世紀前半、下：18 世紀後半）



19 図　法学部 4 号館地点（19 世紀前半）

A. 上屋敷殿閣図（部分、尊経閣文庫所蔵をトレース）



B. 前田家本郷御屋鋪図（部分、三井文庫所蔵）

C. 西之御殿絵図（部分、金沢市立玉川図書館所蔵加越能文庫）

D. 江戸御上屋敷図（部分、尊経閣文庫所蔵）

E. 加藩本郷屋敷絵図（部分、石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション）

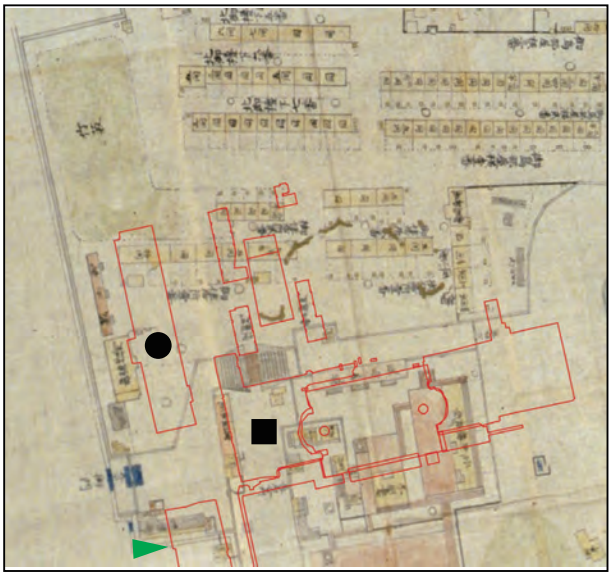
F. 加藩江戸本郷屋敷総絵図（部分、石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション）

20 図　藩邸絵図面からみた調査地点付近（1）

G. 前田家本郷屋敷略図（部分、金沢市立玉川図書館所蔵河野文庫）

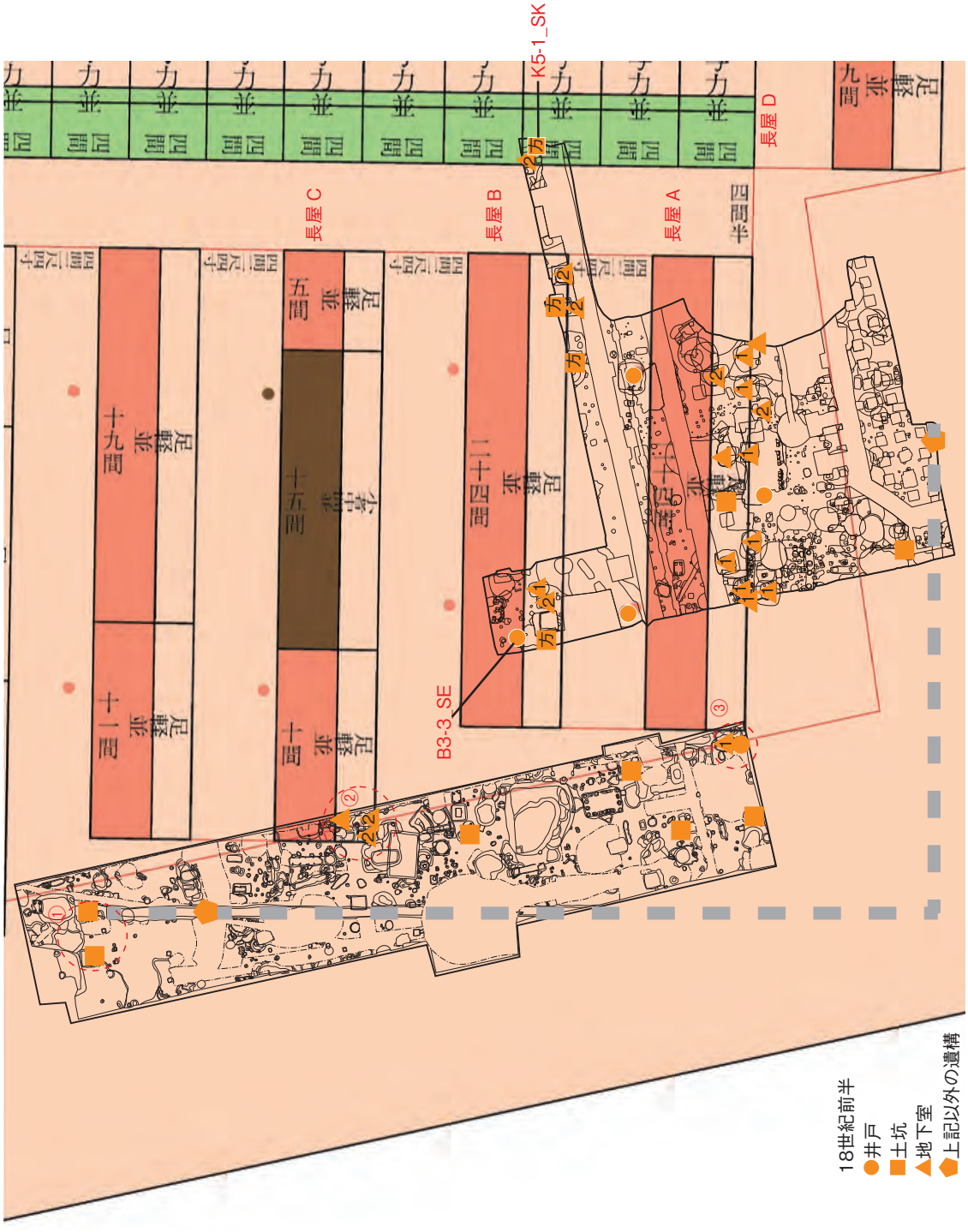
H. 加藩江戸本郷屋敷総絵図（部分、石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション）

I. 江戸御上屋敷絵図（部分、金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫をトレース）



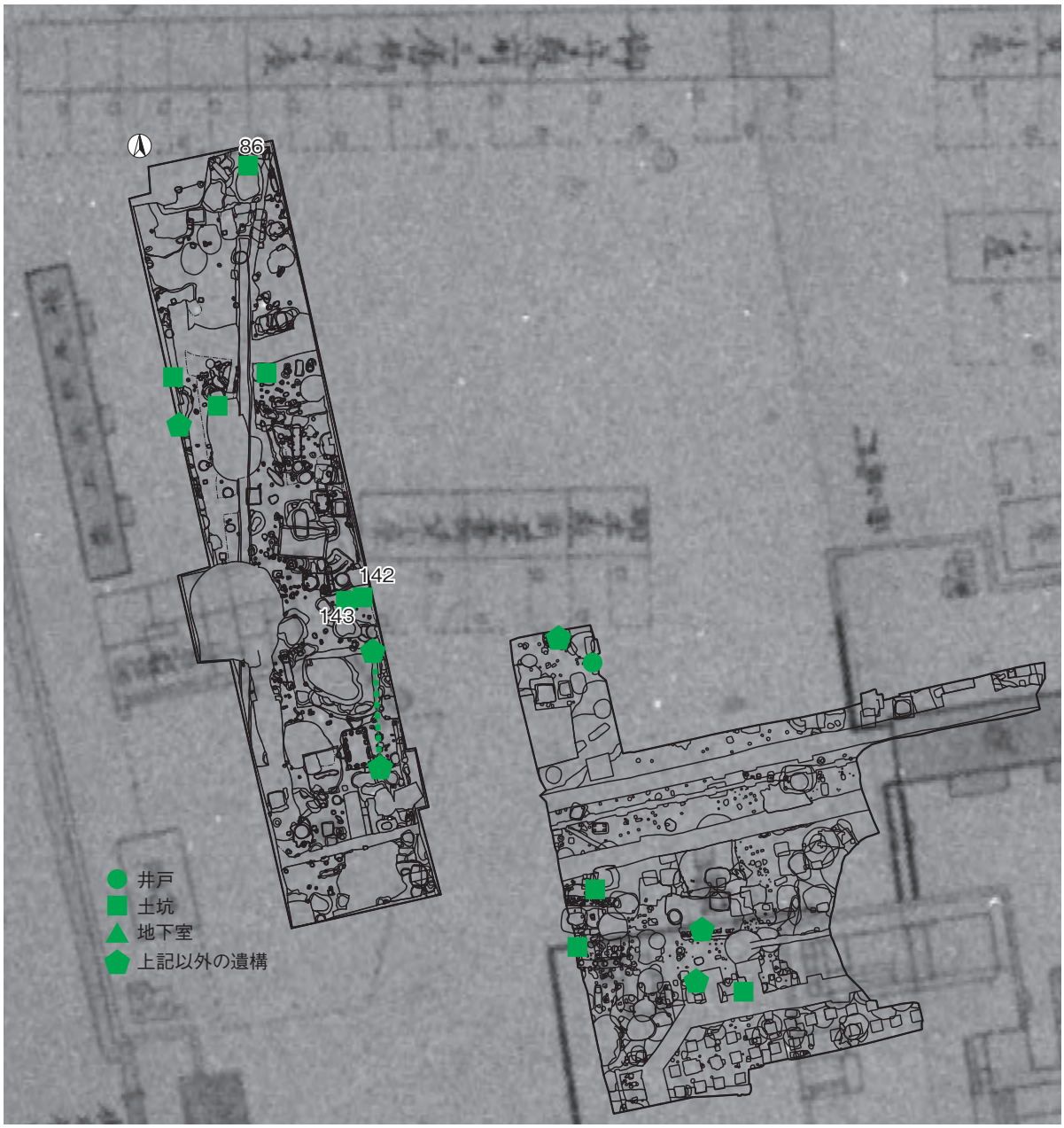
J. 前田家本郷屋敷之図（部分、金沢市立玉川図書館所蔵河野文庫）

21 図　藩邸絵図面からみた調査地点付近（2）



22図　上屋敷殿閣図との対比（S=1/600）

住居附二番
住居附一番
同
九間
五間
同
同
同
御住居附弐番
同
同
同
同
御住居附壱番
御住居
御住居
御住居



24 図　上中下屋敷絵図（尊経閣文庫所蔵）**との対比**（部分、加筆。S=1/600）

追補　加賀藩邸絵図面の補正について

香取　祐一

1. 使用した絵図面・地図について

加賀藩邸の絵図面は数多く残されており、本郷構内の遺跡調査・報告・研究を行うにあたって、多寡の差こそあれ、切り離せないものになっており、ほぼすべての近世期の報告に位置を比定させた記述がみられる。

これら絵図面のうち、藩邸全体が描かれ精度が高い絵図面として、「上屋敷殿閣図」と「江戸御上屋敷絵図」を照合に使用する。絵図面の詳細な分析については、すでに「山上会館･御殿下記念館地点　第3分冊　考察編」で述べられており、今回、特に加筆することはないため、概要を述べるのみである。

また、明治以降の詳細な当該区の地図は、明治9年(1876)の「明治東京全図」が嚆矢となる(1)この地図の測量方法についての詳細な記述は、管見の限り見当たらないが、新政府による新たな行政区分、地番が記載された縮尺6000分の1の大縮尺の地図である。その後、明治19年(1886)刊行の「東京実測全図」は、三角測量を駆使し作成され、同時期に作成された「五千分一東京図測量原図」と三角点を同じくするなど、密接な関連があると考えられる。また同様な図式の「東京実測全図」が、明治28年(1895)に作成されている(地図資料編纂会編 1986)。

1.1「上屋敷殿閣図」

現在確認されている最古の加賀藩邸絵図で、元禄元年(1688)の作成と考えられる「武州本郷邸図」は、約3mmの方眼の篦引きが施され、600分の1の縮尺で作成されている。「上屋敷殿閣図」はこの「武州本郷邸図」を元に作成されたと考えられ、「武州本郷邸図」では建設途中であった殿舎が完成しており、1687～1702年の作成とされる。建物、居住者の身分、地形区分が、彩色により区別されている(細川 1990)。今回使用した絵図面はこれをトレースしたものである。

1.2「江戸御上屋敷絵図」

本郷の加賀藩邸を描いたものの中で、最も精緻で詳細な絵図面である。天保後期の作成と考えられ、朱書きによる10間のメッシュが描かれ、一枡が約3cmであり、600分の1の縮尺で描かれる(細川 1990、宮崎 2008)。推定年代は文献史料にみられる建物の有無から、天保11～弘化元年(1840～1845)とされる。こちらも「上屋敷殿閣図」同様に豊かな彩色が施され、藩邸の様相をイメージさせる絵図面である。こちらも、この絵図面をトレースしたものを使用した。

1.3「五千分一東京図測量原図」

明治に入り外国からの新しい測量技術が導入され、三角測量を駆使し作成された。前述の「東京実測全図」が広範囲の図であるのに対し、皇居を中心に7.5km四方の範囲で作成された地図である。測量は明治9年(1876)から開始され、途中西南戦争による中断をはさみ、14年に再開され、フランス式「地図彩色」によりカラーで作成された。しかし軍制が明治17年(1884)にドイツ陸軍方式へと変更したことにより、製図版はドイツ式一色線図式で明治19年に発行された。のちの地図にみられる皇居内、軍事施設が空白になるなど、原図からの変更が行われている。

皇居内の富士見櫓を原点とし、明治5年(1872)には三角点13点が選点されたが、精度不足と判断され9年に三角点を26点に増設、補点を50余り選点し、測量されている(山口、師橋、清水 1984、一般財団法人日本地図センター 2011)。原図では家屋の使用用途、木造、レンガ・石製などの構造による分類や、上下水道、井戸、畑なども分類されており、往時の情景を想起させる地図となっている。

2. 補正について

GISソフトにより補正を行った(2)。補正の方法、用語については拙稿を参照願いたい(香取 2016、2025)。補正には主に井戸を使用した。地点名(本@)は、東京大学埋蔵文化財調査室の年報を参照願う(東京大学埋蔵文化財調査室 2025)。

以下、各図の補正について詳述する。

2.1.「上屋敷殿閣図」の補正点

合計14箇所の補正点(コントロールポイント)を使用した。大きく①～⑥のエリアに分かれる(1図)。

①は現在遺存している、東京大学外周に使用される石垣の角である(2図)。元禄期から現在まで変更を受けていないと考えられる(香取 2004)。

②は現在の薬学部エリアの調査で検出された遺構と絵図面を補正した(3図)。現在整理中であるが、薬学部総合研究棟地点(本66)のSE59と既報告である薬学部資料館地点(本28)のSE13、薬学部南館地点(本19)のSE94である(東京大学埋蔵文化財調査室 2021)。薬学部総合研究棟地点のSE59は18世紀代の遺物が検出されてい

るが、素掘りの井戸で、二箇所の上屋に伴うと考えられるビット状の付帯施設を有し、比較的古い様相を示している。井戸の存続期間を考慮すると、当該期に属すると考えられる。薬学部資料館地点のSE13は17世紀後半、17世紀末の帰属時期が推定されている。

③は現在の法学部・文学部を中心としたエリアである(4図)。文学部三号館地点(本2-2)のQ8-10・11号土抗、法学部4号館地点(本2-1)のG6-1号、4号土抗、同B5-1号土抗が絵図に該当すると考えられる。これらについては報告書内で考察が行われている。(堀内 1990)

④は現在の理学部を中心としたエリアである(5図)。理学部7号館地点(本5)では3号井戸、4号井戸が当該期の遺構と考えられている(山口、羽生、細川 1989)。未本報告ではあるが、2015年に行われた理学部1号館地点(本198)の調査で検出されたSE94は、絵図面での井戸に該当すると考えられている。(小川 2019)

⑤は病院地区のクリニカルリサーチセンターA棟(CRA)地点(本125)を中心としたエリアである(6図)。現在は未報告であるが、Ⅰ期SE11657、Ⅱ期16区のSE13088が絵図面での井戸に該当すると考えられる。

⑥は本郷構内南側の春日通りに近いエリアである。現在は東京大学の敷地ではないため、ともに東京大学埋蔵文化財調査室の調査ではないが、本郷台遺跡群第2地点(株式会社パスコ 2011)、第3地点(大成エンジニアリング株式会社 2017)で井戸が検出されている。第2地点ではB043、第3地点では001が、絵図面での井戸に該当すると考えられる。

これらの補正点でアフィン変換を行った。全体のRMSエラー(残差)は1.163mである。

2.2.「江戸御上屋敷絵図」の補正点

①～③のエリアの7箇所で補正を行った(8図)。前述の様に絵図面には10間間隔で、朱書きが施されている。トレース図の元となった写真は、カメラ撮影によるもので、一点透視方式による歪みを持ち、さらに絵図面自体の収縮や、写真のスキャン時にも、当然歪みが加わっていると考えられる。これらを平行投影にするための作業を行った。つまり10間間隔のメッシュが理論上のラインと一致するために、メッシュの交点1101箇所を、予め作成した理論上のメッシュへ変換を行った。

これらは理論上、交点に一致すると考えられるため、スプライン変換(ラバーシート)を行った。したがいRMSエラーは0mである。

アフィン変換では全体のRMSエラーは　0.724mで、相似多項式変換では1.149mであった。一般的にこういった絵図面の変換に良く用いられるアフィン変換で、0.724mと言う数値は非常に精度が高い図面と言える(9図)。

以下、各補正点について詳述する。

①の薬学部エリアで、2箇所の補正点を設定した。現在整理中で未報告であるが、薬学部総合研究棟地点(本66)のSE78が図面の井戸に該当すると考えられる。出土遺物から、SE78の最終廃絶期は明治と考えられる。薬学部資料館のSE9からは19世紀前半の遺物が出土し、絵図面の井戸に該当すると考えられる。

②は赤門に近いエリアである。現在は未報告であるが、伊藤国際学術研究センター地点(本93)で検出された建物址SB16が、絵図面の「土蔵」の基礎に該当すると考えられる。北西角を補正点とした。この土蔵は明治以降、東京大学に移管されてからも、明治41 年まで存続していたと考えられる(東京大学埋蔵文化財調査室 2012)

③は法学部・文学部・総合図書館を中心としたエリアで、4箇所を補正点とした。文学部3号館のS8-52号土抗は廃絶期が明治と考えられる(堀内 1990)。2013年度に調査が行われたアカデミックコモンズ地点(本146)では、井戸SE188、SE852が検出され、溶姫御殿期(1827～幕末)に帰属し、絵図面に該当すると考えられる(堀内 2017)。2006年に調査を行った情報学環・福武ホール地点(本78)では井戸SE239が検出され、絵図面での井戸に該当する可能性が指摘されている(大成 2008)。

これらの補正点でアフィン変換を行った。全体のRMSエラーは0.731mである。

2.3. 明治期の地図の補正点

明治以降の地図のうち、精度の高い地図は「五千分一東京図測量原図」と考えられるため、補正済みの「五千分一東京図測量原図」を基準に補正した。本稿では「五千分一東京図測量原図」の補正は行っていないが、すでに拙稿で補正を行っている(香取 2025「報告編　第Ⅳ章　まとめ」)。

【註】

(1)「明治東京全図」以前の地図として「明治二年東京全図」(国際日本文化研究センター所蔵、版本者　吉田屋文三郎)があるが、江戸時代の切り絵図に近い。

(2) 本稿では東京大学空間情報科学研究センターがサイトライセンスを取得している、Esri社ArcGIS　Proおよびオープンソース GISであるQGISを使用し、図版を作成した。

【参考文献】

一般財団法人日本地図センター　2011『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』

小川祐司　2019「第1部　第Ⅰ章　第1節　3.本郷198理学部1号館(HR115)・本郷206　理学部1号館(Ⅲ期)外構」『東京大学構内遺跡調査研究年報』11東京大学埋蔵文化財調査室

大成可乃　2008「第1部 情報学環・福武ホール地点(HJF06)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6東京大学埋蔵文化財調査室

香取祐一　2004「山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告　Ⅴ研究編・加賀藩本郷邸表長屋の変遷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4東京大学埋蔵文化財調査室

香取祐一　2016「GISを利用した明治初期の地形の復元とその可能性」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟A地点』研究編　東京大学埋蔵文化財調査室

香取祐一　2025「報告編　看護職員等宿舎ゴミ置き場地点　第Ⅳ章　まとめ」『東京大学構内遺跡調査研究年報』17東京大学埋蔵文化財調査室

株式会社パスコ　2011『B-92：東京都文京区　本郷台遺跡群第2地点』

大成エンジニアリング株式会社　2017『B-159：東京都文京区本郷台遺跡群第3地点』

地図資料編纂会編　1986『明治・大正日本都市地図集成』柏書房

角田真弓　1999「写された大名屋敷」『加賀殿再訪　東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学総合研究博物館

東京大学埋蔵文化財調査室　2012『東京大学構内遺跡調査研究年報』8東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室　2021『東京大学本郷構内の遺跡　薬学部南館地点　薬学部資料館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室　2025『東京大学構内遺跡調査研究年報』17東京大学埋蔵文化財調査室

細川　義　1990「第1章　第2節　加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』第3分冊　考察編　東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　1990「第三章江戸における井戸の有する二側面」『東京大学本郷構内の遺跡　法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室

堀内秀樹　2017「第2部　第Ⅰ章　第1節　4.　本郷146・168アカデミックコモンズ(HAC13)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10東京大学埋蔵文化財調査室

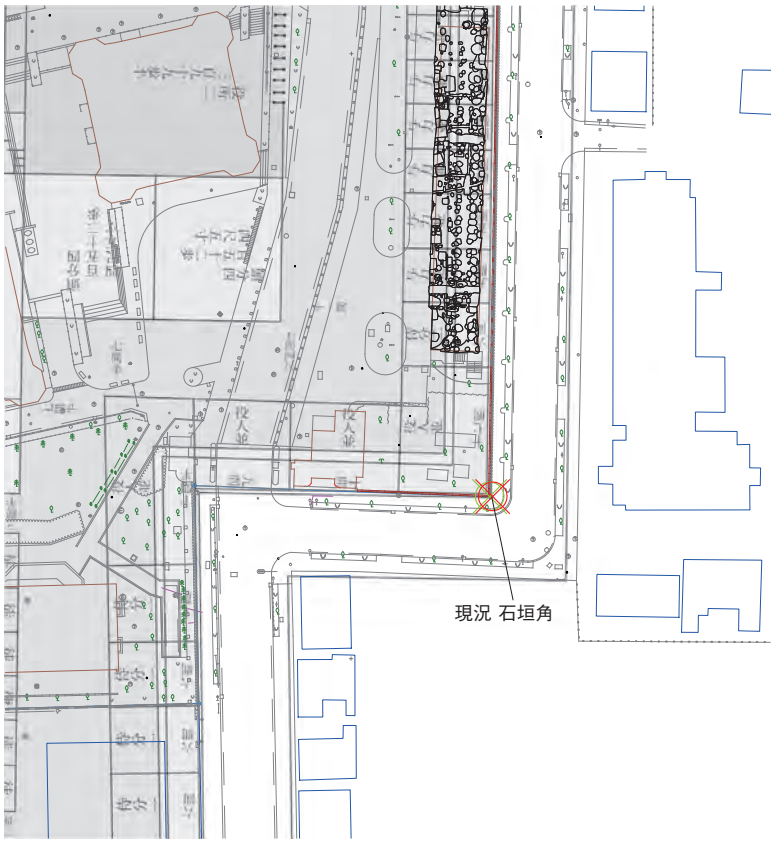
堀内秀樹　2019「報告編　懐徳門地点発掘調査報告　第Ⅴ章考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』11東京大学埋蔵文化財調査室

宮崎勝美　2008『大名屋敷と江戸遺跡』山川出版社

山口恵一郎・師橋辰夫・清水靖夫　1984「複製版(36面)解題」『参謀本部測量局五千分一東京図測量原図』一般財団法人日本地図センター

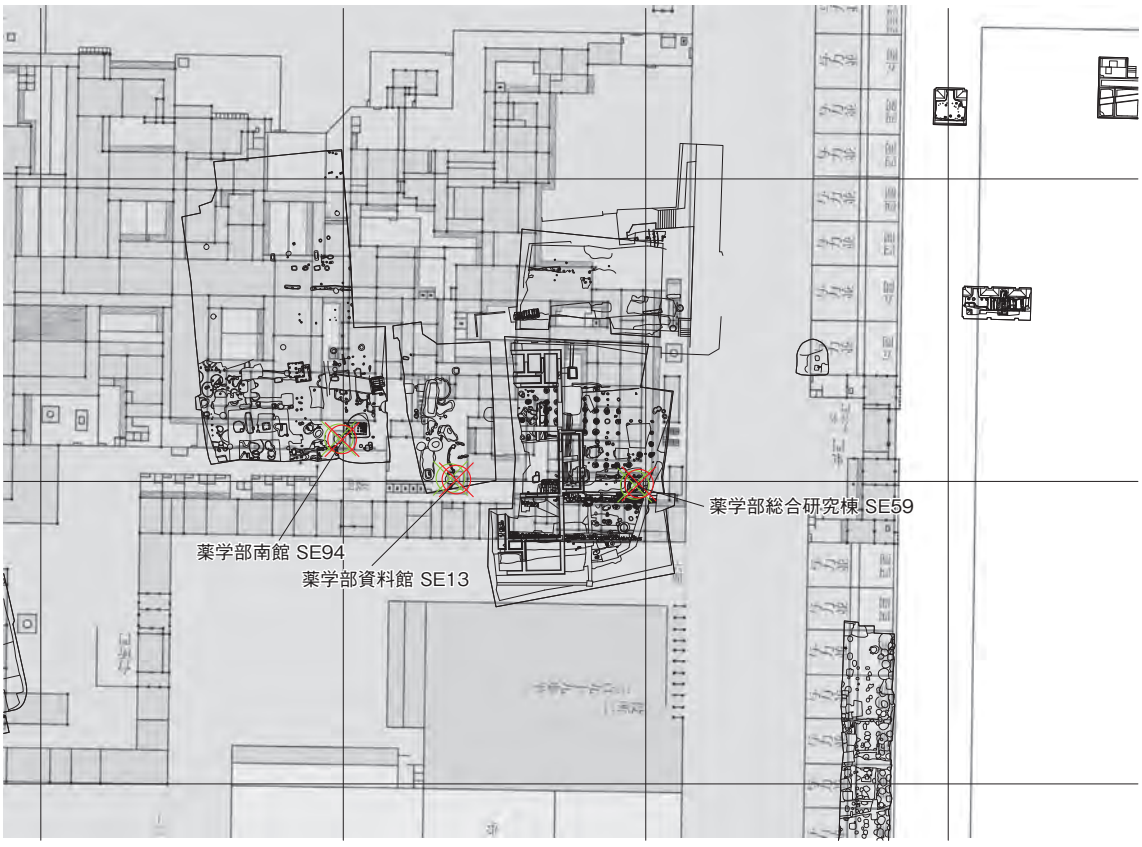
山口剛志・羽生淳子・細川　義　1989「第3節絵図面と考古資料との対比」『東京大学本郷構内の遺跡　理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室

1図　上屋敷殿閣図トレース（1687～1702）と補正点（1/5000）



上屋敷殿閣図の補正点　遺構の補正点

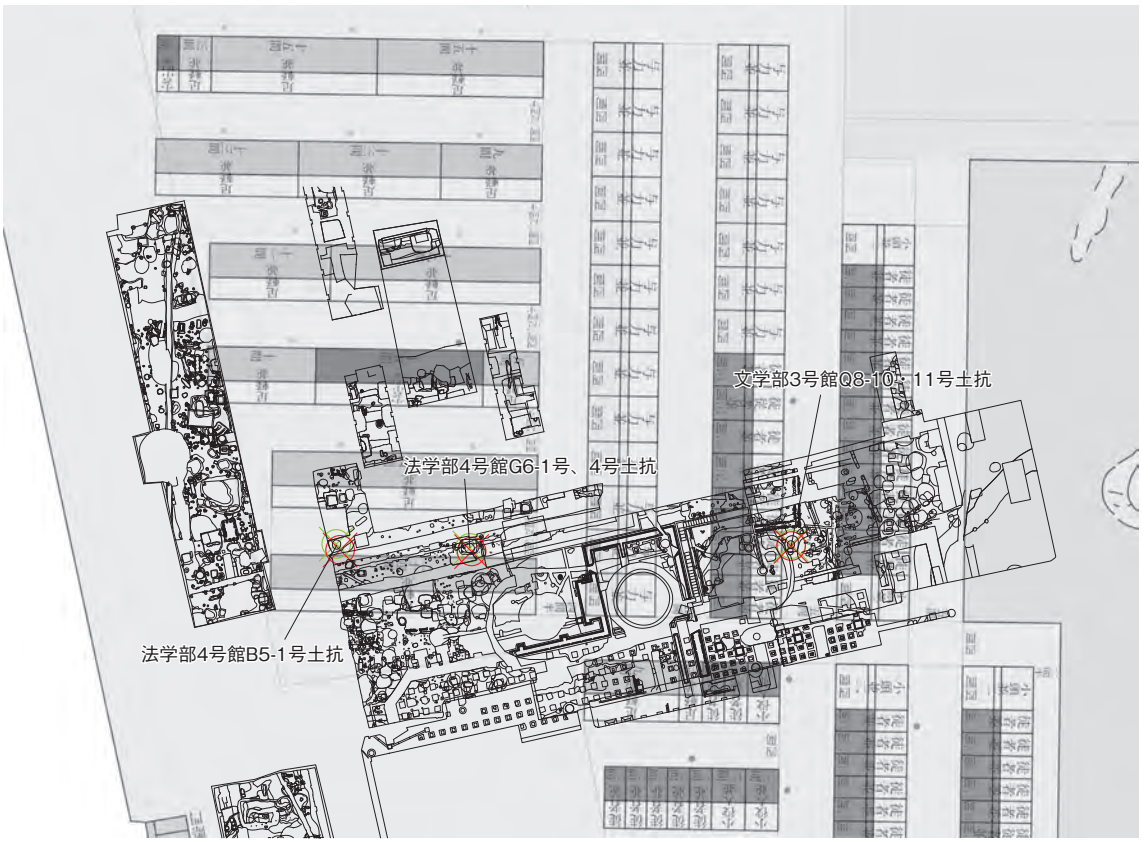
2図　上屋敷殿閣図と各補正点①(1/1250)



上屋敷殿閣図の補正点　遺構の補正点

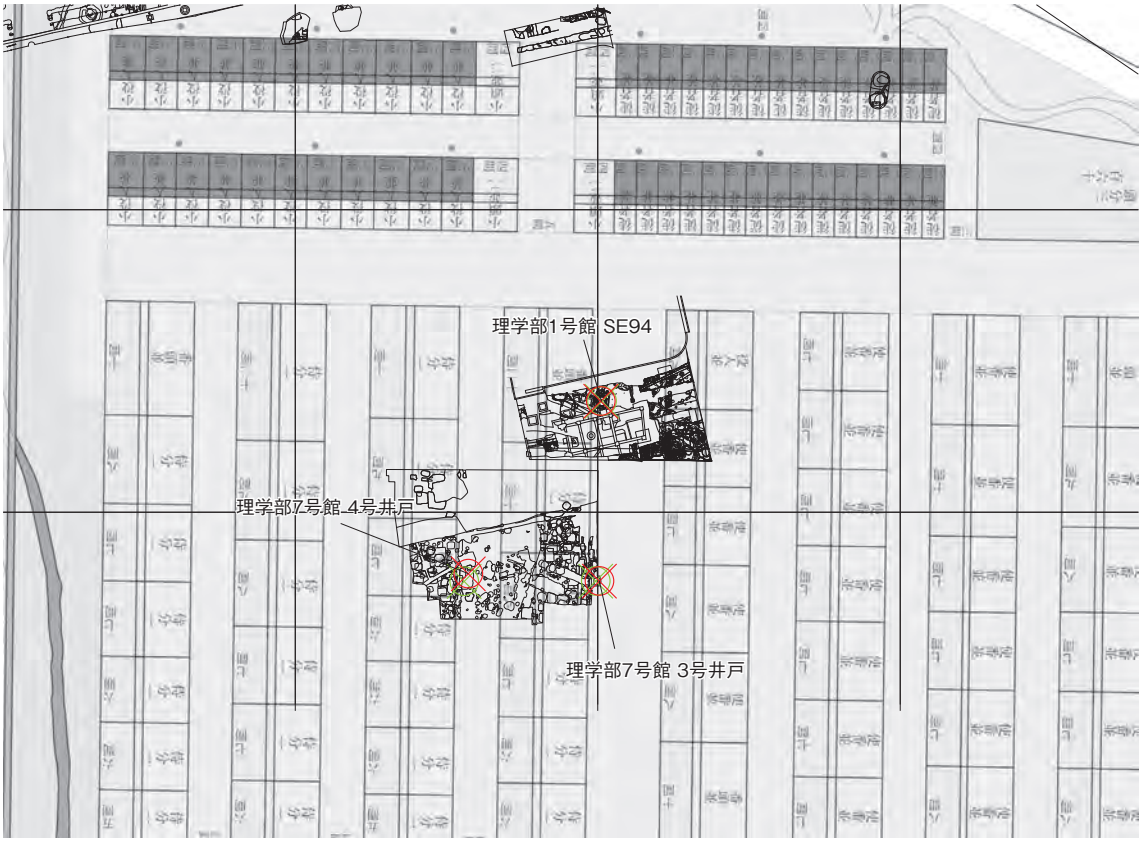
3図　上屋敷殿閣図と各補正点②(1/1250)

0　(S=1/1250)　50m



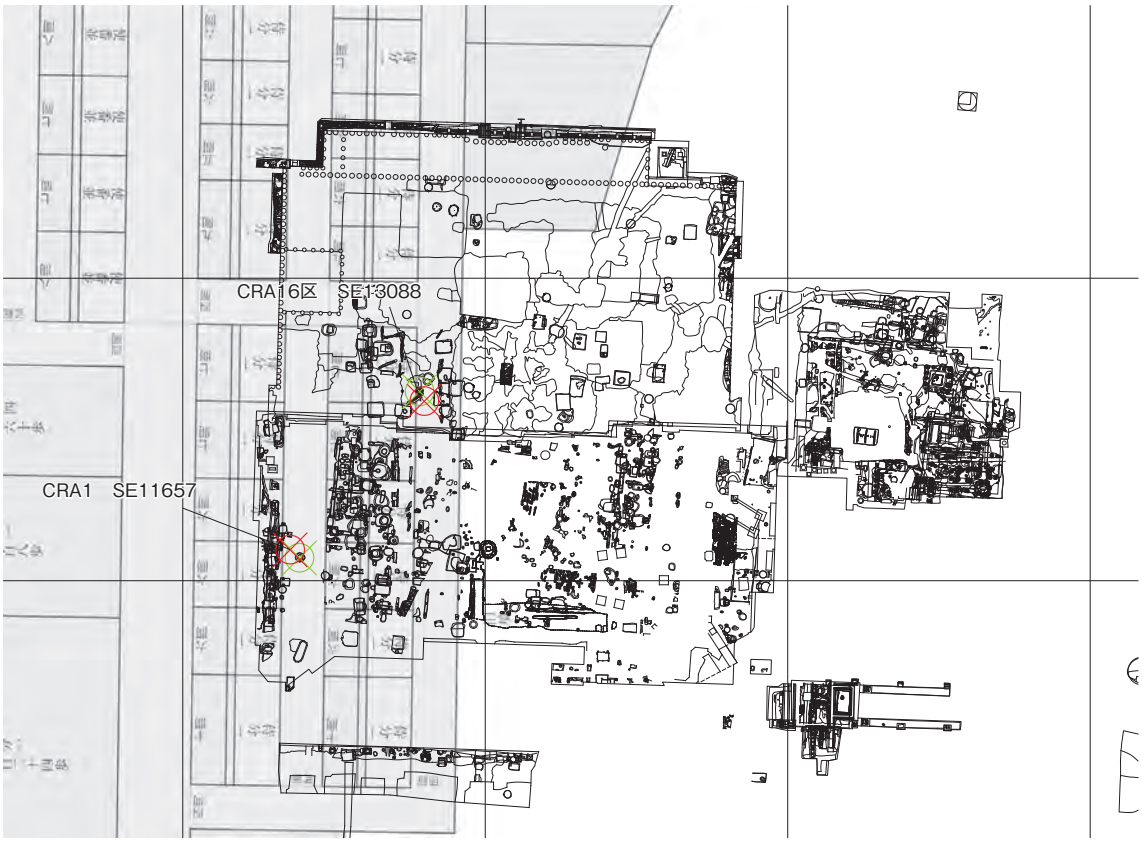
上屋敷殿閣図の補正点　遺構の補正点

4図　上屋敷殿閣図と各補正点③(1/1250)



上屋敷殿閣図の補正点　遺構の補正点

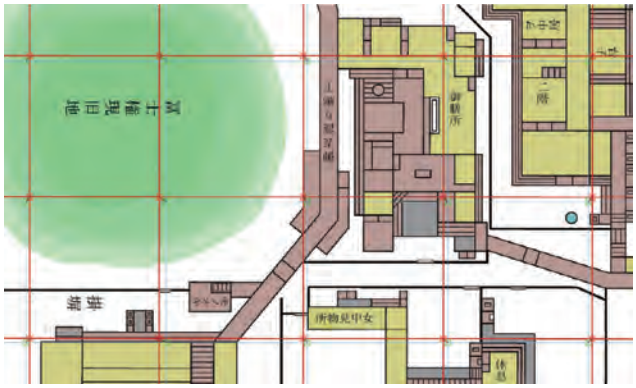
5図　上屋敷殿閣図と各補正点④(1/1250)



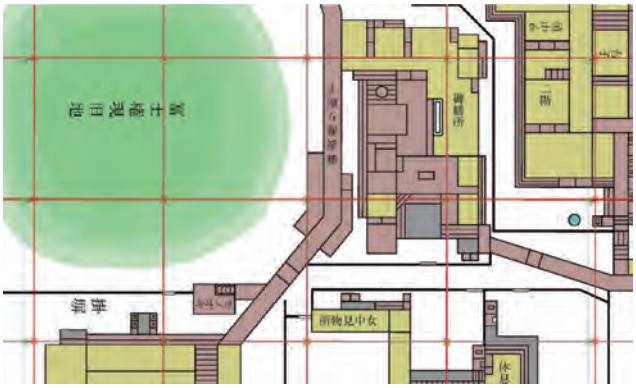
6図　上屋敷殿閣図と各補正点⑤(1/1250)

7図　上屋敷殿閣図と各補正点⑥(1/1250)

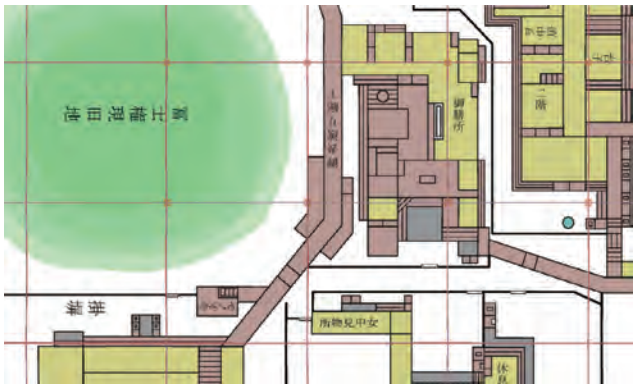
8図　江戸御上屋敷絵図（1840～1845）トレースと補正点（1/5000）



アフィン変換



相似多項式変換



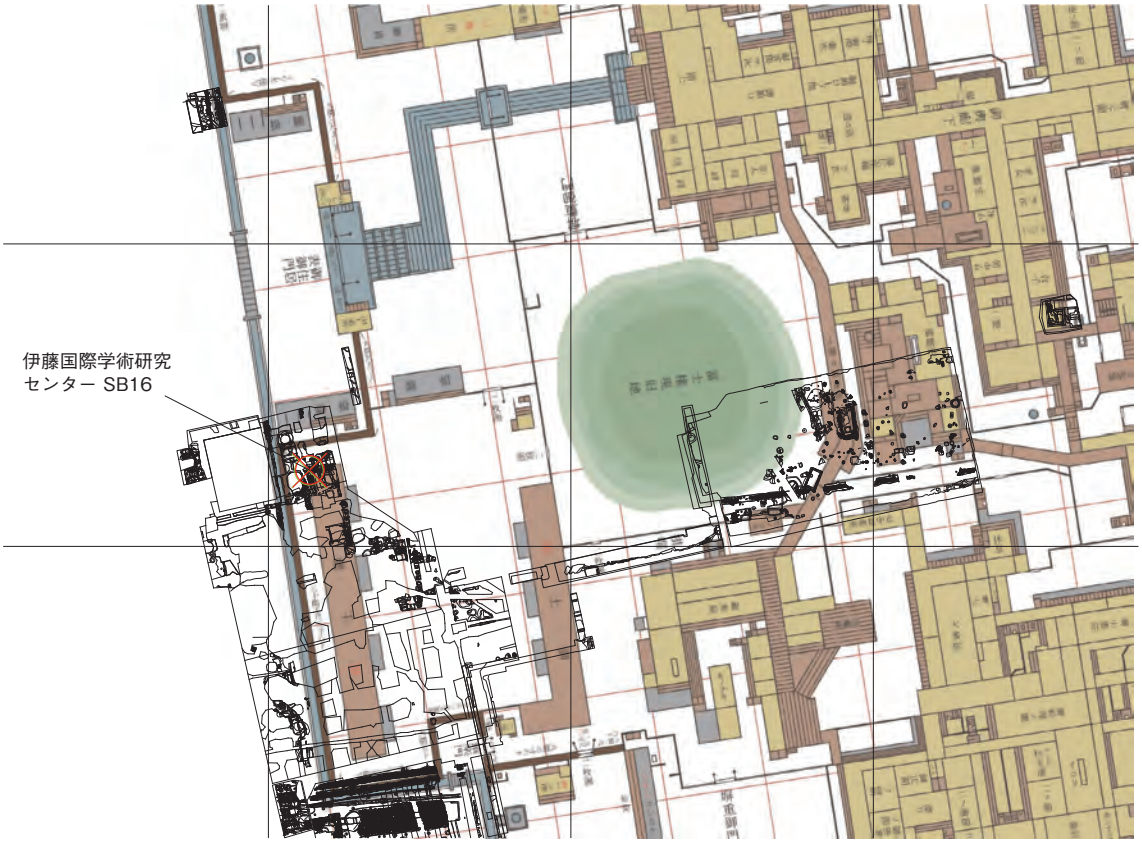
スプライン変換

江戸御上屋敷絵図トレースの交点　理論上のメッシュ交点

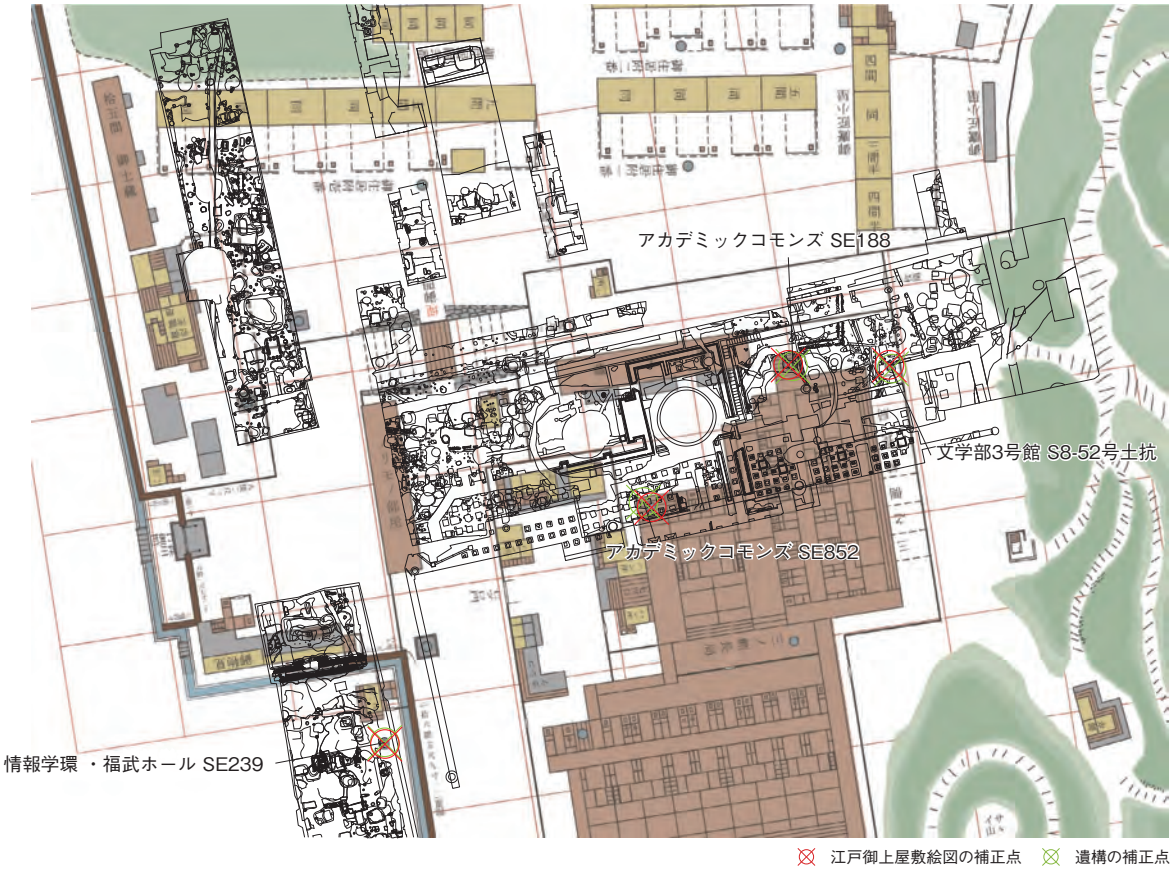
9図　江戸御上屋敷絵図トレースのメッシュと各変換モデル

江戸御上屋敷絵図の補正点　遺構の補正点

10図　江戸御上屋敷絵図と各補正点①(1/1250)



11図　江戸御上屋敷絵図と各補正点②(1/1250)



12図　江戸御上屋敷絵図と各補正点③(1/1250)

SK25 と「西ノ穴」

成瀬　晃司

はじめに

法学政治学系総合教育棟地点は、正門南側、本郷通り側囲障と構内道路間にあった植樹帯内に位置し、南北軸約 69m、東西軸約 14m を測る長方形調査区を呈する。本地点周辺の本郷キャンパス西側エリアは、本郷台地の尾根線付近にあたりキャンパス内で最も標高が高い一角であるが、尾根線をほぼ縦走する本郷通りは、東西方向に開く開析谷の影響を受け、緩やかな波状起伏を介してお茶の水方面へ延びている。そのため本郷三丁目交差点から北へ進むと緩やかに下り菊坂付近を境に上りに転じる。さらに北進すると赤門と正門の中間付近で最も高くなり、そこから農学部正門方面へ再び緩やかに下る。即ち正門南側に位置する本地点は南端付近で最も高く北に向けて徐々に下がる旧地形上に立地していることが判る。それを反映して、北西の一部（A・B2 ～ 5 グリッド）を除き表土下が直接ローム層まで削平され、ほとんどの遺構がローム面で検出されている。本稿で扱う SK25 も北西部にありながらローム面で検出され、本遺構の廃絶年代に関わる罹災遺物廃棄遺構（SX39 など）と層位的新旧関係を捉えることはできなかった。

SK25 は調査区北西端にて検出された大形遺構である（1 図）。遺構形状から調査範囲は遺構全体の一部にすぎず、大半は調査区外に及んでいることが想定される。それにも関わらず、人工遺物でコンテナ 75 箱（分類・接合後）など多量の遺物が廃棄されていた。

本稿では、本遺構出土陶磁器・土器から、廃棄年代の様相などを検討し、本郷邸における本遺構の位置と機能を考察したい。

1. SK25 の様相

既述した様に本遺構は大半が調査区外に延びているため形態、規模は不詳である（2 図）。重複する SP2、SP3 より旧く、SK26、SK383、SF488 より新しい。調査区内での平面形は不整四角形状で南壁は本郷通り軸（主軸②）と直交し、東西壁は逆ハの字状に拡がり北方へ延びる。確認面での規模は東西 5.25m、南北 3.75m 以上、確認面からの深さ 3.7m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、全体的に著しい工具痕が認められた。坑底は確認範囲内で東西 4m、南北 1.75m 以上（調査区北端までは 4,2m）を測り、工具痕による凹凸が全体に拡がるもののほぼ平坦に整形されている。限定的な調査範囲ではあるが、採土坑に観られる繰り返し掘削された様相は認められない。

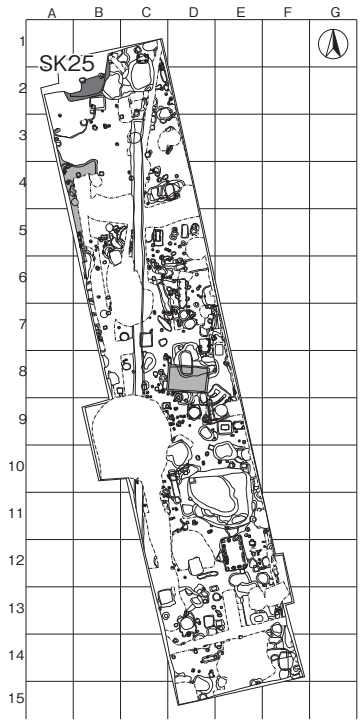
覆土は土層観察面で 18 層に区分される。坑底付近の 14 ～ 18 層はほぼ水平堆積を呈し、しまりが強い無遺物層である。その様相から掘削後に整地され一定期間開口していた可能性も考えられる。4 ～ 13 層は南から北へ緩やかに傾斜し、人工遺物、動物遺体を多量に含む。特に 4、6、10 層から動物遺体が多量に出土している。目視で取り上げたため詳細な組成は反映していないが、個体同定の結果、貝類ではヤマトシジミ、ハマグリが多く、魚類ではタイ科、ヒラメ、フグ科、鳥類ではガン族、カモ亜科、キジ科、ツル科、哺乳類ではネコ、イヌ、シカ（角）などが確認された（研究編阿部論考参照）。ヤマトシジミが貝類の 5 割強を占めることから、日常的な食物残滓の廃棄が想定される。2、3 層も人工遺物を包含するが、4 層以下に対して密度は低く層厚も増している。1 層は非常にしまりが強い無遺物層で、特に 2 層との境が硬化していることから埋め戻し時に転圧を伴う整地が行われたことを示している。即ち 3 ～ 1 層にかけての廃棄量の減少は、廃棄場所として終焉させる意識が働いていたと考えられる。

2. 出土遺物の様相と特徴

(1) 出土遺物の様相

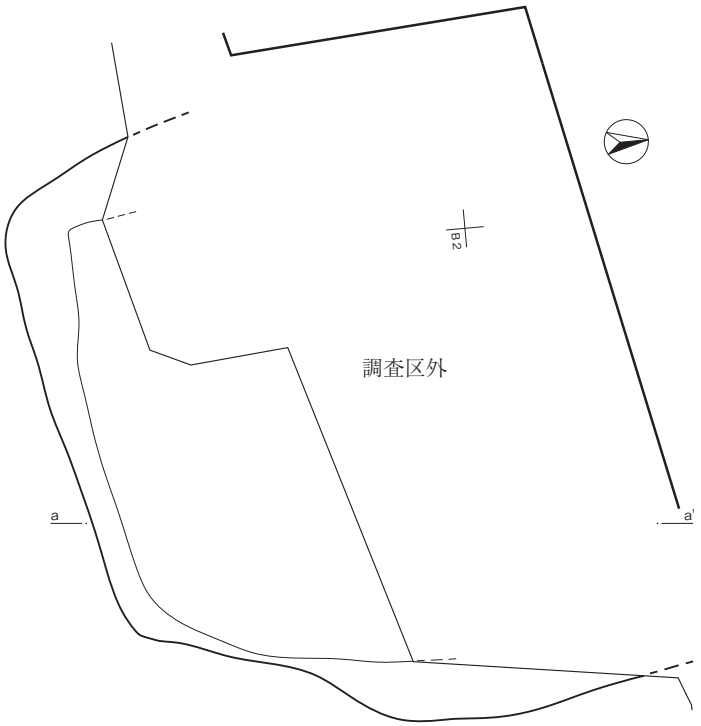
本遺構出土陶磁器・土器を推定される用途で大別し、それぞれ器種単位でまとめた（3 ～ 6 図）。以下に各器種及び小器種の様相について概観したい。なお慣用名右の括弧内英数字は東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器分類 Ver.4.1（東京大学埋蔵文化財調査室 1999、2016）による（以下、東大分類と略す）。

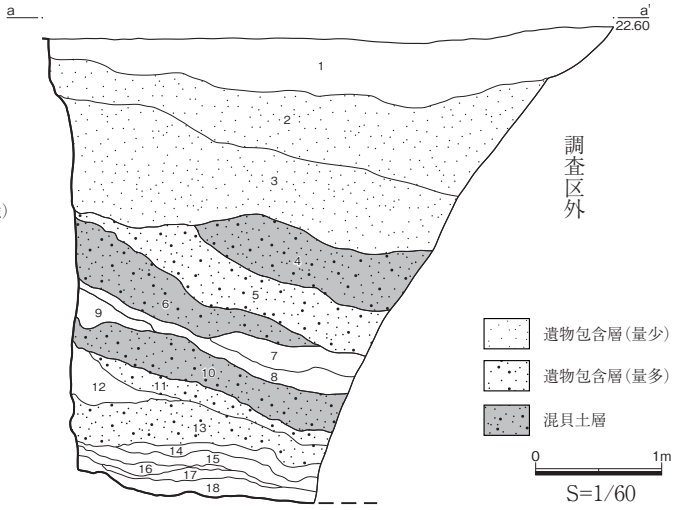
1 ～ 51 は食具類である。1 ～ 18 は肥前系磁器碗で、1 ～ 4 薄手半球碗（JB-1-f）、5 ～ 9 小丸碗（JB-1-j）、10 ～ 13 筒形碗（JB-1-l）、14、15 粗製量産碗（JB-1-g）、16 望料碗（JB-1-q）、17 小広東碗（JB-1-i）、18 朝顔形碗（JB-1-r）の蓋で高台状摘まみ脇に 2 段の稜線が巡るタイプである。19 ～ 30 は瀬戸・美濃系陶器碗で、19 ～ 22 灰釉丸碗（TC-1-c）、23 ～ 26 腰が張る有段碗（TC-1-f）、27 刷毛目碗（TC-1-s）、28 拳骨茶碗（TC-1-p）、29 腰錆碗（TC-1-u）、



S=1/800

1図　SK25の位置





S=1/60

1　暗褐色土　(ローム粒･焼土粒少含､しまり極強)
2　暗褐色土　(焼土粒･玉砂利含､しまりやや強)
3　暗褐色土　(炭化物･焼土粒多含､ローム粒･玉砂利少含､自然･人工遺物含､しまり強)
4　暗褐色土　(炭化物･自然遺物(アサリ)多含､ローム粒･焼土粒少含､しまり強)
5　暗褐色土　(ローム粒･炭化物･焼土粒含､遺物少含､しまり強)
6　暗褐色土　(ローム粒･炭化物･焼土粒･自然遺物(カイ)多含､しまりやや強)
7　暗褐色土　(ローム粒･焼土粒少含､炭化物微含､しまり強)
8　暗褐色土　(ローム粒･炭化物多含､しまり強)
9　褐色土　　(ロームブロック極多含､しまりやや強)
10　暗褐色土　(自然遺物(アサリ？)多含､炭化物含､焼土粒少含､しまりやや強)
11　暗褐色土　(ローム粒･炭化物多含､粘性やや弱､しまりやや強)
12　褐色土　　(ローム粒極多含､しまりやや強)
13　暗褐色土　(ローム粒多含､焼土粒･玉砂利少含､粘性やや弱､しまり強)
14　褐色土　　(ローム粒多含､粘性やや弱､しまり強)
15　暗褐色土　(ローム粒少含､炭化物･焼土粒微含､粘性やや弱､しまり強)
16　褐色土　　(ローム粒極多含､粘性やや弱､しまりやや強)
17　暗褐色土　(ローム粒多含､粘性弱､しまり極強)
18　暗褐色土　(ローム粒少含､粘性弱､しまり強)

2図　SK25の形態と覆土堆積状況

30 柳文碗(TC-1-g)である。31 ～ 33 は京都・信楽系陶器碗で、31 平碗(TD-1-h)、32 半球形碗(TD-1-b)、33 小杉茶碗(TD-1-d)である。34 ～ 42 は肥前系磁器皿で、34 見込み蛇ノ目釉剥ぎ底部無釉皿(JB-2-k)、35 見込み蛇ノ目釉剥ぎ高台施釉で高台径が小さい皿(JB-2-l)、36 見込み蛇ノ目釉剥ぎ高台施釉で高台径が大きい皿(JB-2-m)、37 見込みが深く口縁部が輪花を形成する皿(JB-2-f)、38 粗製量産皿(JB-2-g)、39 ～ 42 蛇ノ目凹形高台で高台高が低い皿(JB-2-j)である。43、44 は瀬戸・美濃系陶器皿で､43 灰釉摺絵皿(TC-2-e)､44 馬ノ目皿(TC-2-g)である。45 ～ 47 は鉢で、45、46 肥前系磁器鉢(JB-5-b)、47 口縁部に複数の凹みを有する瀬戸・美濃系灰釉鉢(TC-5-f)である。48 ～ 50 は坏で､48､49 肥前系磁器丸碗形(JB-6-a)、50 瀬戸・美濃系灰釉坏(TC-6)である。51 は肥前系輪高台猪口(JB-7-b)である。

52 ～ 58 は加熱・調理具類である。52 は瀬戸・美濃系灰釉片口鉢(TC-23-b)、53 は同捏ね鉢(TC-5-l)、54 は鍋(TZ-33-a)、55 は丸底ほうろく(DZ-47-a)、56 ～ 58 は土瓶で、56 鉄釉(TZ-34-e)、58 草文状のしのぎを施した鉄釉土瓶(TZ-34-l)である。

59 ～ 73 は貯蔵具類である。59 ～ 61 は瀬戸・美濃系灰釉瓶で、59 二合半拭き取り(TC-10-a)、60 五合(TC-

10-d)、61一升(TC-10-e)である。62は志戸呂系瓶(TF-10)、63は瀬戸・美濃系灰釉二耳壺(TC-15-f)、64は瀬戸・美濃系灰釉水甕(TC-15-c)、65は瀬戸・美濃系半胴甕(TC-15-a)、66は瀬戸・美濃系鉄釉水注(TC-27-a)、67～70は肥前系磁器蓋物で、67～69丸碗形(JB-13-a)である。71～73は塩壺で、71板作り成形「泉州麻生」印(DZ-51-i)、72板作り成形無印(DZ-51-ab)、73ロクロ成形無印(DZ-51-w)である。

74～79は火器・暖房具類である。74～77は火鉢で、74、75土師質丸火鉢(DZ-31-a)、76硬質瓦質丸火鉢(DZ-31-d)、77硬質瓦質筒形火鉢(DZ-31-j)、78は風炉(DZ-31-h)、79は手焙り(DZ-38)である。

80～89は照明具類である、80は瀬戸・美濃系油徳利(TC-41)、81～83は油皿で、81瀬戸・美濃系鉄釉皿(TC-2-o)、82土師質皿(DZ-2-b)、83施釉土師質皿(DZ-2-h)、84～87は油受け皿で、84瀬戸・美濃系無脚(TC-40-c)、85無釉土師質無脚(DZ-40-d)、86施釉土師質無脚(DZ-40-b)、87施釉土師質有脚(DZ-40-a)、88、89はひょうそくで、88無釉土師質(DZ-44-c)、89施釉土師質(DZ-44-b)である。

90、91は仏神具類で、90は肥前系磁器仏飯器(JB-8-c)、91は肥前系磁器御神酒徳利(JB-11-b)である。

92は文房具類で肥前系磁器水滴(JB-19)である。

93～97は化粧具類である。93は京都・信楽系合子(TD-18)、94は京都・信楽系段重(TD-13-b)、95は瀬戸・美濃系鬢水入れ(TC-25)、96は肥前系白磁紅皿(JB-6-e)、97は肥前系染付油壺(JB-12)である。

98～103は趣味・嗜好具類である。98、99は香炉・火入れで、98瀬戸・美濃系灰釉(TC-9-a)、99京都・信楽系(TD-9-a)である。98の口唇部には敲打痕が顕著で、喫煙具として使用されたことが窺われる。100、101は植木鉢で、100瀬戸・美濃系半胴甕(TC-15-a)の二次加工品、101瓦質(DZ-21-b)である。102、103は飼育具類で、102瀬戸・美濃系餌水入れ(TC-30)、103京都・信楽系柄杓形餌水入れ(TD-32)である。

104は生活関連具で、瀬戸・美濃系溲瓶(TC-28)である。

陶磁器・土器類ではこの他に人形・遊具・玩具類、瓦が出土している。他材質のうち金属製品では煙管、釘、金具類など、石製品では硯、砥石、火打石、印など、銭貨では寛永通宝足尾銭(寛保元年(1741))、寛永通宝四文銭11波(明和6年(1769))が認められる。

(2)器種組成

陶磁器・土器類は、報告編に掲載した通り、医学部附属病院外来診療棟地点報告書(東京大学埋蔵文化財調査室 2005)から採用した個体識別基準を用いて最少個体数集計を行った[1]。その結果、38器種634個体を数えた[2](7図)。器種別では碗の220個体(34.7%)が最も多く、皿・平鉢122個体(19.2%)、瓶79個体(12.5%)と続き、この3器種が突出した様相を示す。この影響を受けて続く上位器種は、油受け皿25個体、塩壺24個体、火鉢22個体、土瓶18個体、坏16個体、壺・甕16個体と組成比3%前後を示す。但し皿・平鉢には灯火具として使用された瀬戸・美濃系鉄釉皿(TC-2-o) 9点やかわらけ(DZ-2)の一部が含まれている点、瓶に関しては79個体のうち流通容器として搬入された可能性が高い瀬戸・美濃系灰釉瓶65個体、志戸呂系瓶12個体を合わせるとほぼ総個体数である点に留意する必要がある。

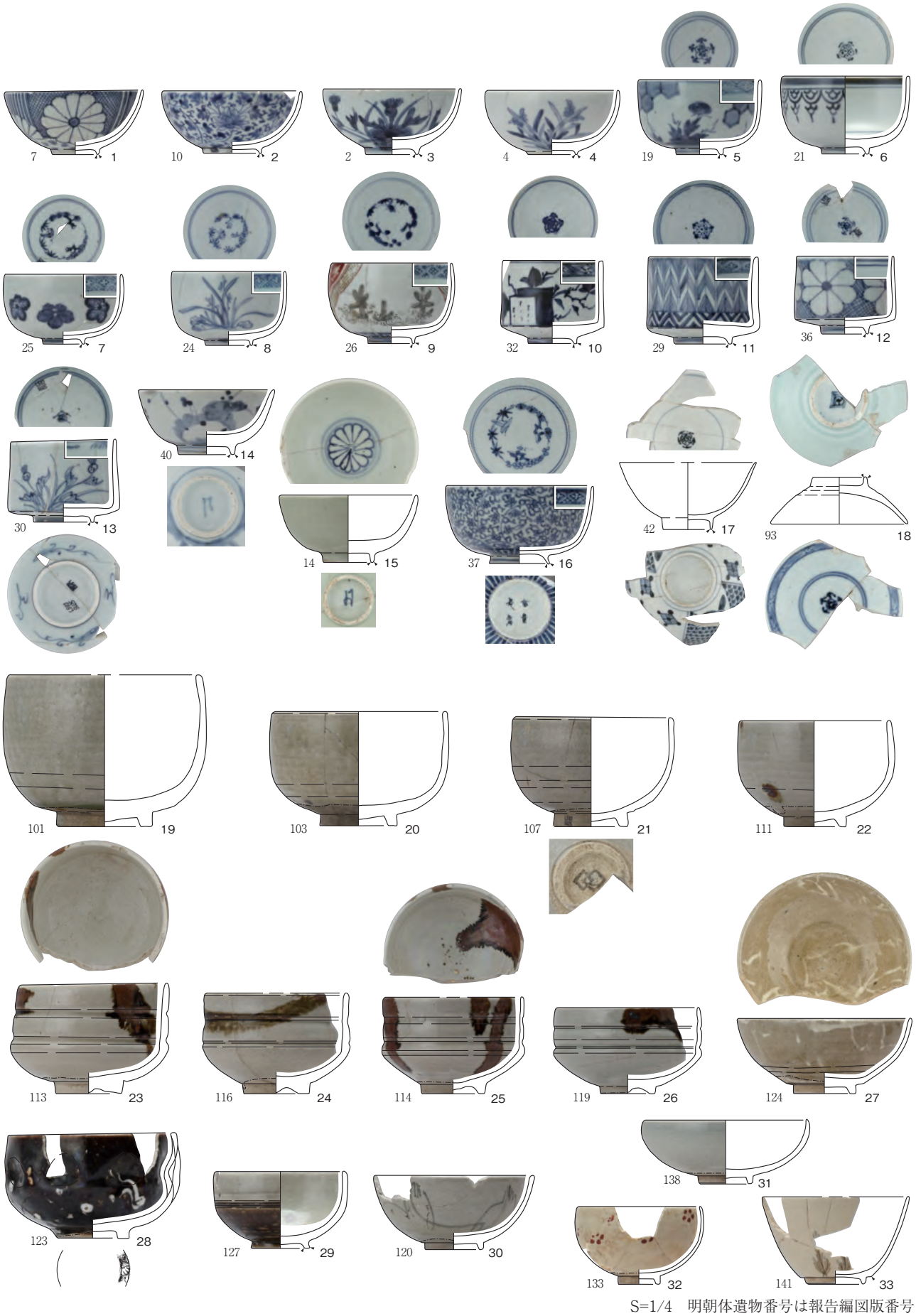
皿・平鉢122個体から、かわらけ(67個体)、瀬戸・美濃系鉄釉油皿(9個体)を除くと46個体で、碗個体数に対して2割程度の値でしかない。筆者は以前、医学部附属病院入院棟A地点で検出された天和2年(1682)火災時の焼土層(D面焼土)出土遺物組成の検討を行った(成瀬 2016)。調査地点は火災まで加賀藩邸内黒多門邸に比定される詰人空間で、居住者が日常生活で使用した陶磁器類が良好な状態で遺存していた。本資料の廃棄年代とは約100年の隔たりがあり、その間には器種の多様化、細分化が進んでいるが、基本食具の碗、皿・平鉢の組成比を比較するとD面焼土資料では碗：皿・平鉢は約1：2で、本遺構の2：1（油皿、かわらけを除くと5：1)とは明らかに異なり、碗の組成比が高いことが確認される。この要因については後述する大形遺構廃棄資料との比較から改めて検討を加えたい。

(3)年代的特徴

東大分類で示された器種・小器種の消長は、大成可乃によってまとめられた(大成 2011)。対象とした遺構は、堀内秀樹が東京大学本郷構内出土陶磁器・土器の編年(以下、東大編年)を構築した際に扱った遺構に(堀内1997)、それ以後の陶磁器・土器数量提示基礎資料が加えられた。いずれも加賀藩邸を中心とした本郷構内出土資料で、おおむね加賀藩邸内での陶磁器・土器の消長が反映された集成といえよう。

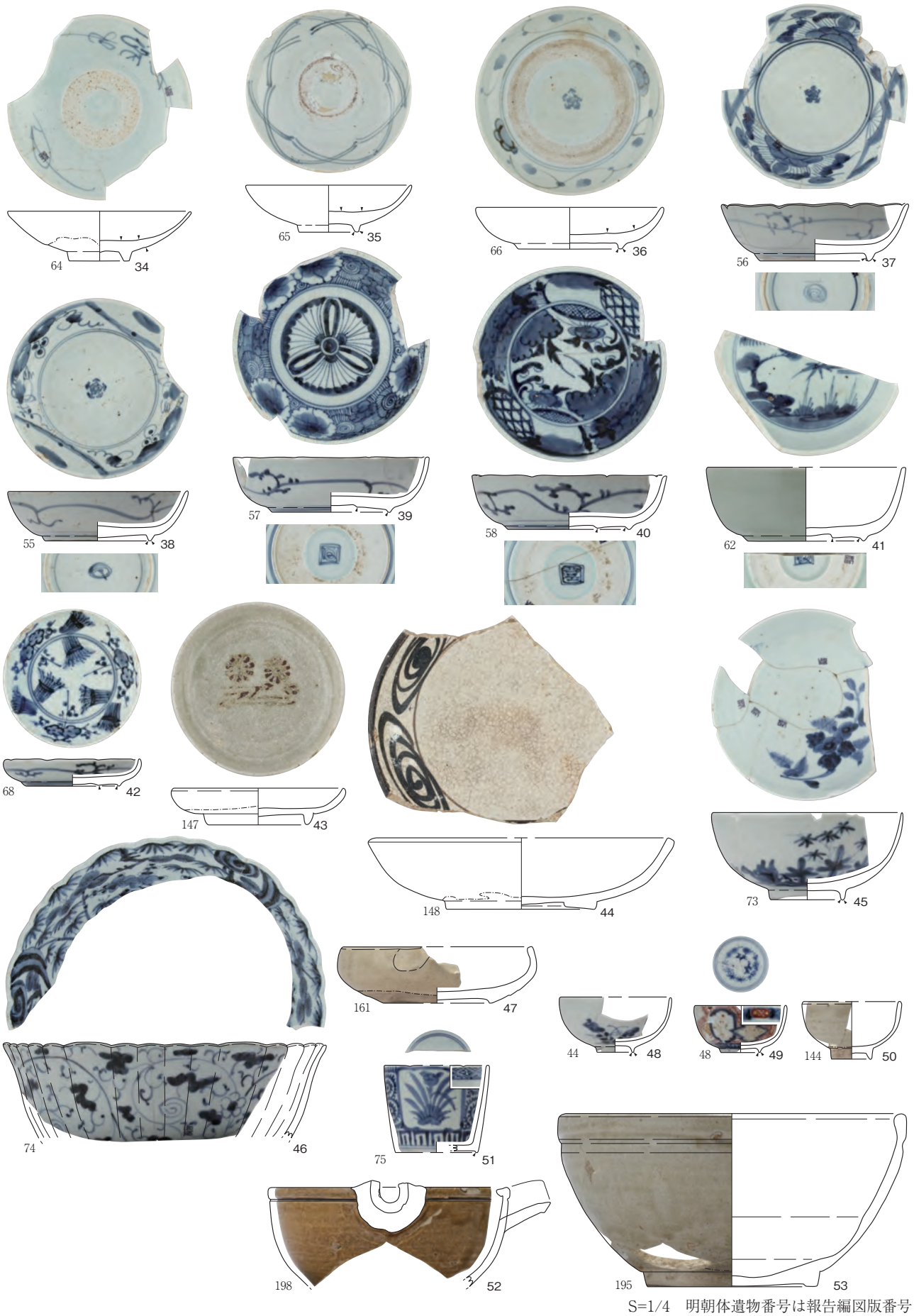
そこで、本遺構出土個体数の53.9%を占める碗、皿・平鉢から主要要素を示す肥前系磁器碗、肥前系磁器皿、瀬戸・美濃系陶器碗、京都・信楽系陶器碗の主要小器種を取り上げ、個々の出土ピークと組成から本資料の年代的特徴を考えたい。

肥前系磁器碗では104個体のうち、JB-1-fが29.8%、JB-1-jが28.8%、JB-1-lが19.2%と3種で約8割を占める(8



S=1/4　明朝体遺物番号は報告編図版番号

3図　SK25 出土主要陶磁器・土器（1）



S=1/4　明朝体遺物番号は報告編図版番号

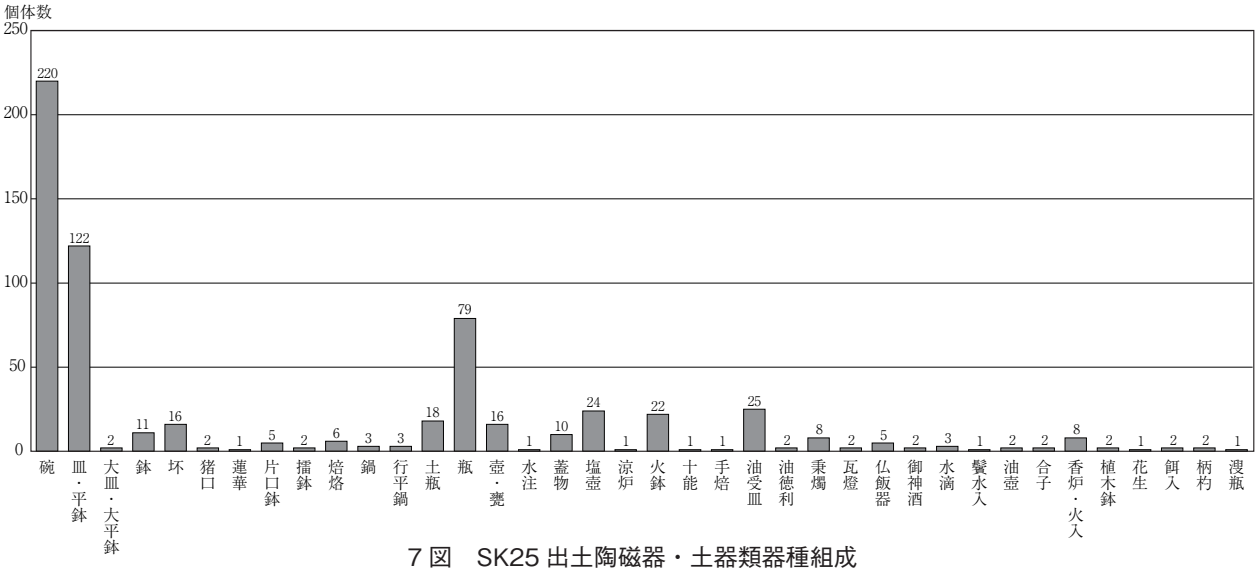
4 図　SK25 出土主要陶磁器・土器（2）

S=1/4　明朝体遺物番号は報告編図版番号

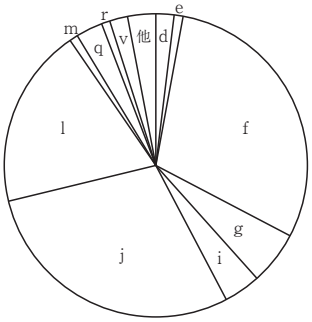
5図　SK25 出土主要陶磁器・土器（3）

S=1/4　明朝体遺物番号は報告編図版番号

6 図　SK25 出土主要陶磁器・土器（4）

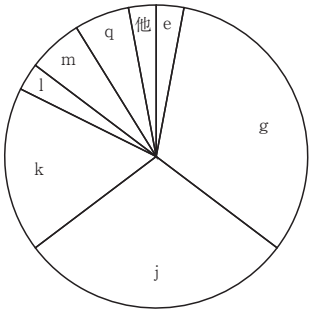


7図　SK25 出土陶磁器・土器類器種組成



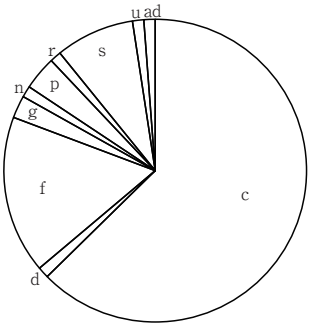
d:U 字状高台高　e:U 字状高台低　f: 薄手半球形
g: 粗製　i: 小広東　j: 小丸　l: 筒形　m: 広東
q: 望料　r: 朝顔形　v: 梅樹文

8図　肥前磁器碗小器種組成



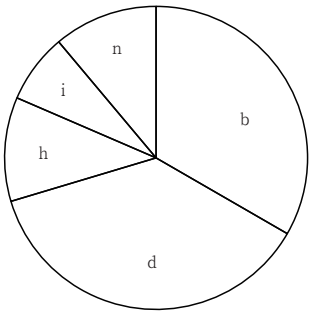
e:U 字状高台　g: 粗製　j: 蛇ノ目凹形高台低
k: 蛇ノ目釉剥（無釉）　l: 蛇ノ目釉剥（底部狭）
m: 蛇ノ目釉剥（底部広）　q: 口縁輪花・一枚絵

9図　肥前磁器皿小器種組成



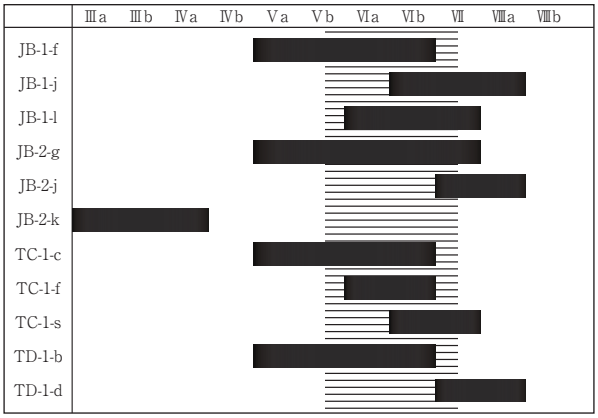
c: 灰釉　d: 御室　f: 腰張有段　g: 柳　n: 平
p: 拳骨　r: 鎧　s: 刷毛目　u: 腰錆　y: なら
ad: 筒掛分

10図　瀬戸・美濃陶器碗小器種組成

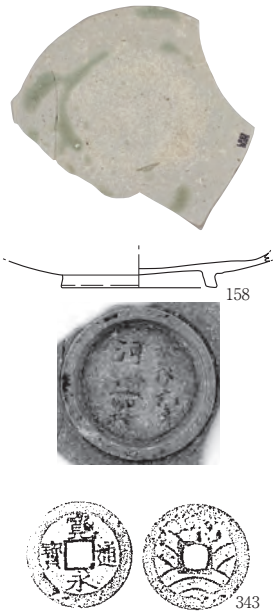


b: 半球　d: 小杉　h: 平　i: 半筒　n: 大福

11図　京都・信楽陶器碗小器種組成



12図　碗、皿・平鉢主要小器種のピーク



13図　実年代共伴資料

図)。これまでの本郷構内調査事例から、JB-1-f のピークは東大編年Ⅴ～Ⅵ期(以下、東大編年を略し@期と表記)、JB-1-j はⅥ b 期～Ⅶ a 期、JB-1-l はⅥ～Ⅶ期にある。

肥前系磁器皿では 34 個体のうち、粗製量産品の JB-2-g が 32.4%、JB-2-j が 29.4%、JB-2-k が 17.6%と 3 種で約 8 割を占める(9 図)。JB-2-g のピークはⅤ期～Ⅶ期、JB-2-j はⅦ期～Ⅷ a 期にあるが、Ⅴ b 期の指標陶磁器のひとつとして取り上げられている。JB-2-k はⅢ a 期～Ⅳ a 期である[3]。

瀬戸・美濃系陶器碗では 85 個体のうち、TC-1-c が 61.2 %、TC-1-f が 16.5 %、TC-1-s が 8.2 %と 3 種で 85.9%を占める(10 図)。TC-1-c のピークはⅤ期～Ⅵ期、TC-1-f はⅥ期にある。年代が下がるにつれて器高が低くなる傾向が看取され、3 図 26 は後出的様相を示す。TC-1-s のピークはⅥ b 期～Ⅶ期にあり、Ⅵ期までの製品には高台脇に水平のケズリが認められる。刷毛目は内外面打刷毛目から外面が渦状刷毛目に、さらに両面とも渦状刷毛目に変化する傾向が認められ、高台脇にケズリを有し、内外面打刷毛目が施された本出土資料は初現期(Ⅴ b 期～Ⅵ期)の製品に位置づけられる。

京都・信楽系陶器碗では 27 個体のうち、TD-1-d が 37.0%、TD-1-b が 33.3%と 2 種で約 7 割を占める(11 図)。TD-1-b のピークはⅤ期～Ⅵ期、TD-1-d はⅤ a 期から認められピークはⅦ期～Ⅷ a 期にある。体部に描かれた根引き松文は年代が下るにつれ矮小化するが、本遺構出土資料の松葉はかなり簡略化され、呉須は枝先に列点を付けた表現である。

上記主要小器種のピークをまとめると 12 図の状況を示す。上限はピーク期間が長くⅤ a 期から認められる 4 小器種を除くとⅥ a 期より小器種数の増加が認められる。一方下限はⅦ～Ⅷ a 期をピークとする小器種が認められるが、8 図に示したようにⅥ b 期の指標資料である JB-1-i の組成比が極めて低いことから、Ⅵ期には本遺構への廃棄行為が収束に向かったと考えられる。また本資料にはⅦ期の指標資料である広東碗(JB-1-m)が数破片認められるほか、明和 6 年～天明 8 年(1769 ～ 1788)鋳造とされる寛永通宝四文銭(11 波)、高台内に安永六年(1777)と墨書された瀬戸・美濃系灰釉皿が含まれているが(13 図)、層位的に出土位置が押さえられていないため、遺構確認面レベルでの混入の可能性がある。以上の様相から本遺構への遺物廃棄期間はⅥ a 期～Ⅶ期前半(1750 ～ 70 年代前半)と推定される。

3. 加賀藩邸内大形廃棄遺構との比較・検討

(1)先行研究

加賀藩邸内の廃棄遺構に関する先行研究には、工学部 1 号館地点(以下、工 1 地点) SK01 を扱った堀内の論考がある(堀内 2005)。堀内は廃棄行為が行われた遺構のうち「災害や不定期的な大がかりなイベントなどに伴って多量に廃棄物が出される一括廃棄を除き、藩邸内の日常的な生活の中で出されたモノの廃棄」に焦点を当て、廃絶された遺構の性格と廃棄遺物の年代観から、以下の特徴を示した。

・Ⅷ期の土坑は、遺物の包含率が他の時期と比べて高い傾向にある。
・Ⅵ期以前には地下室のように短期間に埋められるような性格の遺構から多くの遺物が出土している。
・当初目的が土取と推定できる土坑の遺物包含率の年代的違いは顕著である。

さらに「Ⅵ期までは廃棄されている遺構の種類が多いことや包含率が小さいことから、遺構を一度に埋め立てる際に土と伴って遺物が廃棄される」「Ⅷ期には遺構の種類も不定形の土坑が多く、遺物包含率が飛躍的に高くなることから、土取という行為が伴っていたかは別として、その当初からゴミ穴として使用することを想定した上で掘削が行われ、廃棄による埋め戻しが行われている」と「一定期間の使用」を目的とした様相への変化を指摘している。

堀内論考で扱われた工 1 地点 SK01 は、藩邸北辺部に位置する大形遺構で調査範囲内での平面形は不定形を呈し、規模は東西 12.5m、南北 6m 以上を測る。また底面にはテラスを有し、確認面からの深さは最大 5m を測る遺構である。出土陶磁器・土器類は 5202 個体を数え、その年代観(Ⅶ～Ⅷ a 期)と出土墨書資料の検討より、藩邸北半部のゴミ集積・処理を目的として一定期間(19 世紀前葉)使用された最終処分場所と位置づけている。

(2)本地点周辺の大形廃棄遺構

加賀藩邸北半部に位置する 18 世紀後葉以降の大形廃棄遺構には、工 1 地点 SK01 のほか、本地点に東隣する法学部 4 号館地点(以下、法 4 地点)の E7-3 号土坑、E8-5 号土坑が確認されている(14 図、東京大学遺跡調査室 1990)。以下にその概要を記すが、報告には陶磁器・土器類の数量提示がないため、報告書掲載資料による年代的様相を記すに止める。

E7-3 号土坑

平面形は不整形を呈し、南側で重複する E8-5 号土坑より旧く、重複する全ての地下室より新しい。規模は東

西最大 5.56m、南北 4.4m 以上、確認面からの深さ最深 1.2m を測る。坑底は凹凸が著しく部分的に段を有する。

遺物は最下層を除き覆土ほぼ全域に多量に含まれていた。碗・皿組成をみると、磁器碗は肥前系筒形碗、小丸碗、薄手半球碗、小広東碗、広東碗、陶器碗は瀬戸・美濃系灰釉碗、柳文碗、刷毛目碗(高台脇ケズリあり)、京都・信楽系小杉碗、磁器皿は肥前系粗製量産皿、蛇ノ目凹形高台皿(高台低)、見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿(高台広)で構成されている。

E8-5 号土坑

平面形は不整隅丸長方形を呈し、重複する E7-3 号土坑より新しい。規模は東西 7.1m、南北最大 4m を測る。坑底はテラス状の 3 段を構成し最深部で 1.4m を測る。

遺物は下層を除き覆土全域にわたり多量に含まれていた。碗・皿組成をみると、磁器碗は肥前系筒形碗、小丸碗、広東碗、陶器碗は瀬戸・美濃系灰釉碗、鎧碗、刷毛目碗(高台脇ケズリなし)、柳文碗、京都･信楽系小杉碗、磁器皿は肥前系粗製量産皿､蛇ノ目凹形高台皿(高台低)、蛇ノ目凹形高台皿(高台高)で構成される。

(3)主要小器種からみた大形廃棄遺構の変遷

上記の遺構に加え、本地点とは離れるが、藩邸東辺部に位置しⅥa 期の指標遺構である医学部附属病院外来診療棟地点(以下、外来地点) SK152 を加え、碗・皿組成を本遺構と比較する(1 表)。東大編年各段階の主要小器種は、Ⅴb 期:筒形碗(JB-1-l)、蛇ノ目凹形高台皿(高台低)(JB-2-j)、Ⅵa 期:小丸碗(JB-1-j)、望料碗(JB-1-q)、Ⅵb 期:小広東碗(JB-1-i)、Ⅶ期:広東碗(JB-1-m)、Ⅷa 期:端反碗(JB-1-n､JC-1-d)､蛇ノ目凹形高台皿(高台高) (JB-2-i)である。碗・皿主要小器種の動向を観ると、SK25 の碗は JB-1-f、l、j が主要組成で JB-1-i が散見される様相を呈す。外来地点 SK152 組成からの変化は JB-1-j・JB-1-l、JB-2-j 率の増加と JB-1-i の定着にある。法 4 地点 E7-3 号土坑では JB-1-i 率の増加、JB-1-m の定着に加え、打刷毛目で高台脇にケズリを有するタイプの TC-1-s が認められる。E7-3 号土坑より新しい E8-5 号土坑では小器種の組成差は認められないが、TC-1-s が渦刷毛目で高台脇ケズリなしに変化し、JB-2-i が含まれているなど後出的様相を示す。工 1 地点 SK01 では、肥前、瀬戸・美濃ともに磁器端反碗(JB-1-n、JC-1-d)が加わり、JB-2-i が定着する様相を示す。

このように各遺構への廃棄行為は段階的に場所を移動して行われ、藩邸縁辺部の空閑地を順次活用した様相が窺われる。

さて、これら近傍の廃棄遺構のうち工 1 地点 SK01 については藩邸内での位置及びその機能について堀内によって詳細な分析がなされているので、本稿では隣接する法 4 地点検出遺構との比較を中心に検討したい。

既述した様に法 4 地点には、SK25 から段階的に連続し、Ⅶ期に帰属する E7-3 号土坑、E8-5 号土坑があり、18 世紀後半の本地点周辺は、廃棄場としての意識が感じられる一角である。またその他に両地点には被災瓦が大量に廃棄された SX39､SK171(本地点)､F7-3 号遺構(法 4 地点)が存在する(14 図)。これらの遺構に廃棄された被災瓦は拳大程度に粉砕された点で共通し、同時期の瓦礫処理遺構と推定される。火災年代は SK171 に桟瓦や 18 世紀後葉の遺物が共伴すること、F7-3 号遺構は隣接するアカデミックコモンズ地点(以下、AC 地点)で検出された溶姫御殿(文政 9 年(1827) ～)以前の詰人空間新期に帰属する焼瓦層に連続することから、本地点を含む一帯で 10 代藩主重教の隠居所として明和 8 年(1771)に着工し､翌安永元年(1772)に焼失した「西之御殿」(14 図)の瓦礫処理遺構と考えられる。

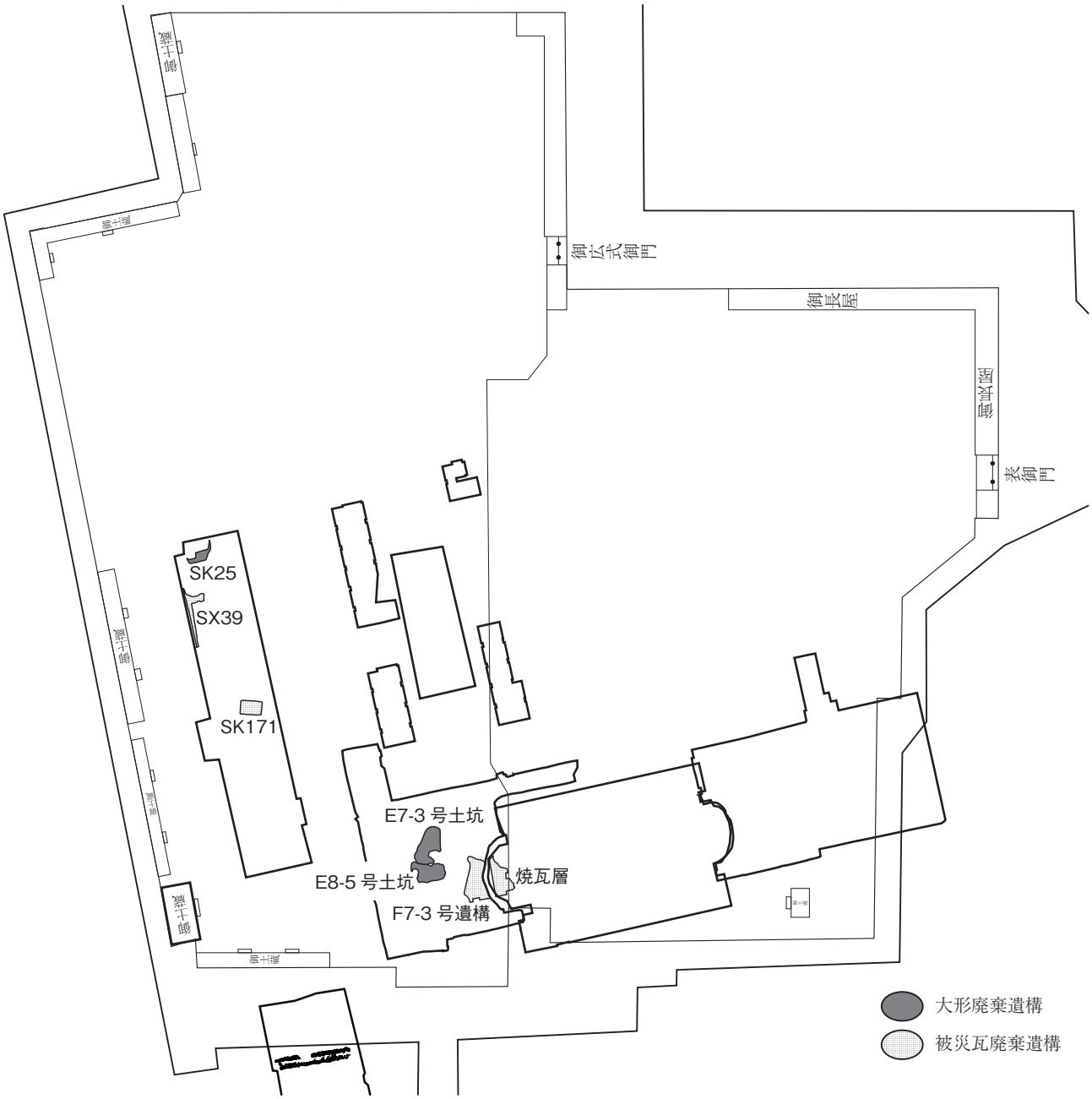
この実年代情報を踏まえて遺構変遷を整理すると、地下室群→ SK25 →被災瓦廃棄遺構(SX39、SK171、F7-3 号遺構) =《1772 年》→ E7-3 号土坑→ E8-5 号土坑への変遷が想定される。この遺構変遷と藩邸絵図の対比から、SK25 を取り巻く景観について検討したい。

4. 絵図、文献資料からみた本地点周辺の土地利用変遷

藩邸全体図は簡略されて描写された資料も多く、調査地点の正確な位置を対比させることは難しい。そこで以下に示す遺構との対比から本地点及び周辺地域の位置を比定し、各絵図から本地点周辺の土地利用変遷を導き、大形廃棄遺構が 18 世紀後半に集中した背景を検討したい(15、16 図)。また各絵図の特徴及び推定年代は細川義の研究成果を参考に(細川 1990)、一部私見を加えた。

a 図は現況図で、本地点の南に情報学環・福武ホール地点(78)、南東に西から法 4 地点(2-1)、AC 地点(146)、文学部 3 号館地点(2-2、以下、文 3 地点)、東に法学部 3 号館増築地点(99)が位置する。青丸は井戸を示し、法 4 地点 B5-1 号土坑(西)、C6-4 号土坑(東)、文 3 地点 Q8-11 号井戸に該当する。

b 図は「上屋敷殿閣図」(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)のトレース図である。本図の製作年代は貞享 4 ～元禄 15 年(1687 ～ 1702)が想定されている。本地点周辺部には長屋群があり、建物は彩色、庭は輪郭線で表記されている。また各長屋には井戸が付設され、西側の南北列では建物北側に、東側の東西列では庭部東側に描かれてい



14 図　大形廃棄遺構と西之御殿
（「西之御殿絵図」金沢市図書館近世史料館所蔵をトレース、S≒1/1,300）

調査地点	遺構名	碗												Ⅲ		東大編年段階
		JB						JC		TC			TD	JB		
		f	l	j	i	m	n	c	d	s1	s2	g	d	j	i	
外来	SK152	◎	○	○									△	△		Ⅵa
法 03	SK25	◎	◎	◎	○	△				○		△	◎	◎		
法 4	E7-3 号土坑	○	○	◎	◎	○				◎		○	◎	○		Ⅶ
法 4	E8-5 号土坑		○	◎		○					◎	○	◎	○	○	Ⅶ
工 1	SK01	△	○	◎	○	○	○	△	◎	○	○	○	◎	◎	○	Ⅷa

※TC-2-s の s1 は高台脇ケズリ有、s2 は無を示す。

1 表　18 世紀中葉以降の大形廃棄遺構主要碗・皿組成

る。本絵図には1間を示す1分方眼のヘラ書きがあり1/600スケールで描かれたことが判る。それを基準にa図の井戸を対比させたところ、法4地点では西側南北列南端の井戸、文3地点では東側東西列の中央に位置する井戸に比定させることができた(成瀬 1990)。長屋群西側の鏃状張り出し部には建物表記はなく、井戸を基準にした対比から本地点はその空閑地に比定される。この成果を基に、18世紀初頭～末の絵図7枚から本地点周辺の土地利用変遷を考えたい。

c図はb図で遺構対比に使用した「上屋敷殿閣図」である。図示したA～Gの7ブロックに着目し、本図以降の変遷を検討する。Aは東西方向に延びる南北列の長屋群で、北から桁行35間、35間、30間、30間、24間、24間の長屋が並ぶ。Bは南北方向に延びる東西列で西から桁行52間、52間の長屋が並ぶ。Cは西側に南北方向に延びる桁行36間の長屋が建つ。Dは朱書きで長方形区画が描かれる。Eは育徳園心字池から延びる流路東側に桁行49間の長屋が東西方向に8棟並ぶ。その棟数より八筋長屋と呼ばれている。Fには南北方向に延びる2棟の長屋があり、西が桁行52間、東が42間を測る。GはFに隣接する藩邸北東端部の区画で水色に彩色されている。凡例によれば水色は侍分を示すが、詳細は記載されていない。

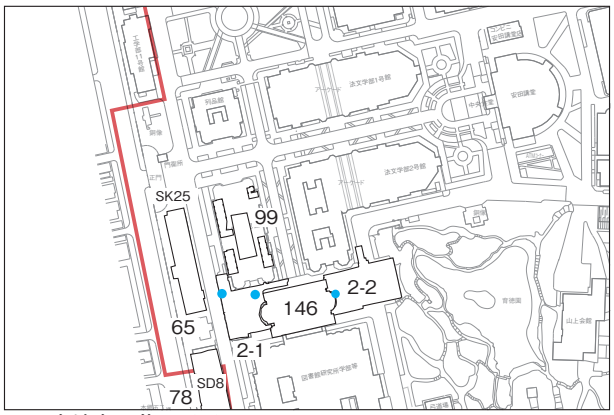
d図は「前田家本郷御屋鋪図」(三井文庫所蔵)の該当部である。Aはc図と同様6棟の長屋が描かれ桁行間数も同じだが、北から2棟は庭表記がなく、井戸の配置に変化(減少)が観られる。Bも間数に変化がないが、西側長屋の庭が建物西側に描かれ、A同様井戸の減少が観られる。Cは建物南に「御鷹部屋」と書かれ、桁行30間の建物の南に、鷹小屋と思われる細かく7区画に区切られた表記が、その東側にも8区画に区切られた同規模の表記が認められる。Dには「此囲御附小屋之由」と書かれた付箋が貼られている。付箋下は「割場支配水溜桶」の印があるのみで、本図作成時にはc図同様まだ明地だったことを示している。付箋には長方形区画とその西に長屋1棟、南に長屋2棟？が描かれている。Eの八筋長屋は育徳園心字池流路側の1棟が無くなり7棟に変化している。Fの長屋構成に変化はないが、やはりc図に対して井戸の減少が認められる。Gは「御居宅」と書かれ、南側に南北列の長屋が3棟描かれている。Hはc図の空閑地にあたるが、不整長楕円形区画に「西ノ穴」と書かれている。このような表記は本図全体を見渡してもここしか認められず、作者の意識が反映された結果と窺われる。本図は長屋軸に合わせると西側境界軸が大きくズレるなどかなりラフに描かれ正確な対比はできないが、SK25が「西ノ穴」に該当する可能性は高い。Iには東西方向に並ぶ厩(北30疋立、南20疋立)が描かれている。

本図の作成年代について細川は、記載された支藩官名の組合せから享保9～元文2年(1724～37)および寛延3～天明2年(1750～82)に絞られること[4]、付箋の「御附小屋」は藩主夫人として輿入れした女性の付き人小屋を指し、既述した支藩官名期間では、宝暦11年(1761)に10代藩主重教に輿入れした紀州藩徳川宗将女千間(寿光院)が該当することから、作成年代は1750～1761年と推定している。付箋下には本図の作成意図である「割場支配水溜桶」印のみが描かれ、絵図作成段階では、c図同様空閑地であることも合わせると、本図上限は支藩官名組合せ上限の寛延3年頃まで遡る可能性もある。

e図は「上屋敷総絵図」(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)の該当部である。Aは長屋が1棟に減少、桁行35間の記載から北側2棟のいずれかと推測される。その南には朱書きで「御居間方」と書かれた長屋が2棟追記されているが、その南は明地である。Bも西側の長屋が無くなり明地になっている。Cの長屋は桁行36間とd図から6間増大しているほかは大きな変化は認められない。Dは御附小屋と考えられる東西方向の長屋が5棟描かれている。Eの八筋長屋には再び8棟の長屋が描かれているが、東側4棟部分にFへ続く「御居宅」と書かれた朱書きの囲いが追記されている。Fは東側の桁行42間長屋区域がGに吸収されて無くなり桁行52間長屋1棟に減少し、その上にも朱書き区画が追記されている。Gの「御居宅」は西に拡張され、d図と比較すると表門の位置が南側へ移動している。朱書きとの関連が考えられる。Hはd図同様、不整長楕円形区画内に「穴」と書かれている。Iには大きな変化は認められない。

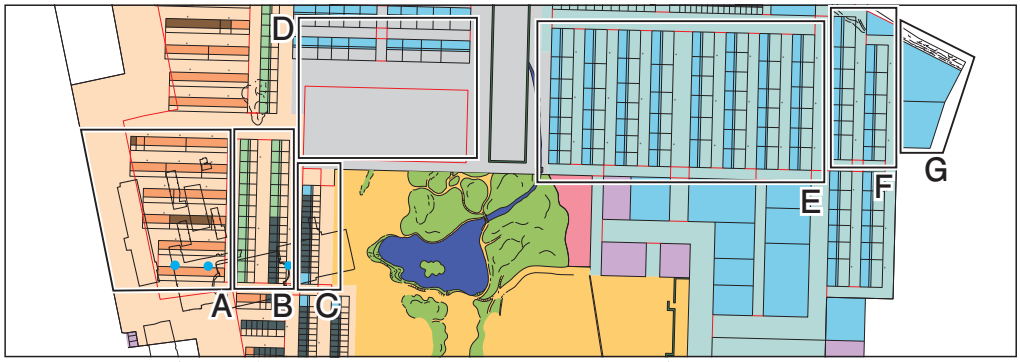
本図は「寛政十年仲秋写、前田」の添え書きから、寛政10年(1798)に写されたことが知られ、朱で藩邸内の変化が加筆されている。加筆以前の年代観について細川は、A、Bの変化を「西之御殿」建設に求め、焼失後の安永元年(1772)以降を上限に、Fの以下に示すf図への変化から、安永6年(1777)以前を下限と想定している。

f図は「江戸御上屋敷図」(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)の該当部である。B、C、E、Iにはe図からの変化は認められない。Aでは庭を有す2棟の長屋が描かれているが、e図からの具体的な変化は読み取りにくい。Dでは塀・柵と思われる長屋群を取り囲む範囲が明確に描かれ「此奥之内、何も引越御貸小屋」と記載されている。Fの桁行52間長屋は無くなり、Gから張り出した囲障が表現されている。H周辺は明地になっている。この

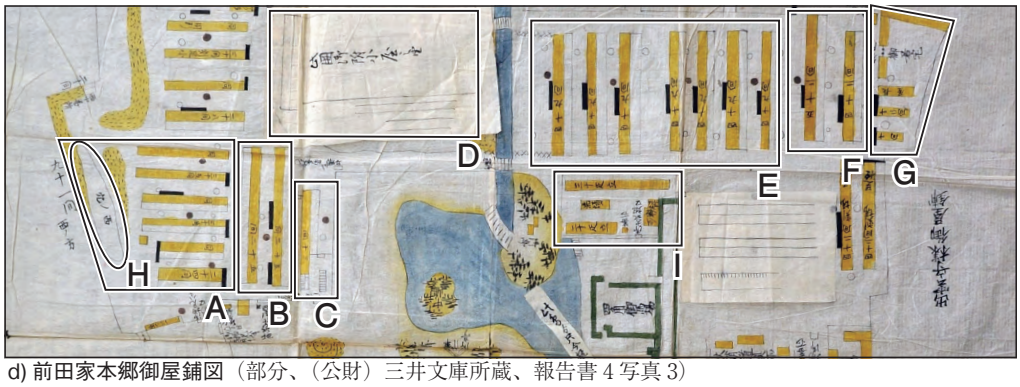


a) 調査地点と井戸（●）
65 本地点、2-1 法学部 4 号館、2-2 文学部 3 号館、78 情報学環・福武ホール、
99 法学部 3 号館増築、146 アカデミックコモンズ
※赤線は、藩邸外周復元線

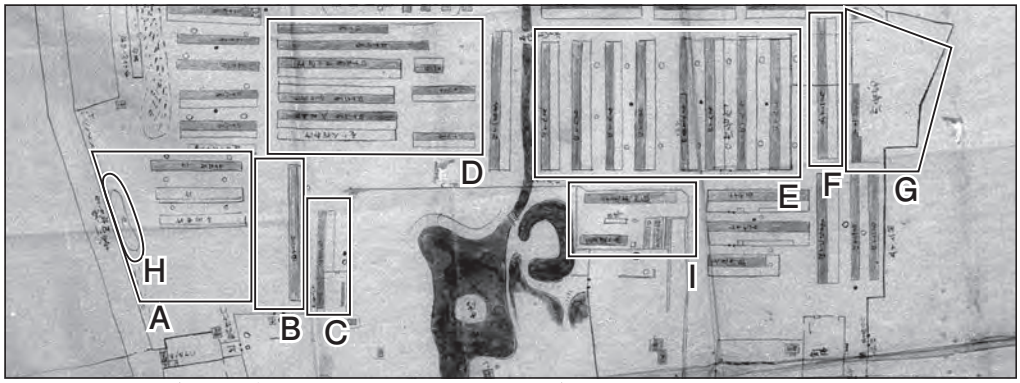
b)18 世紀前半の地下室・井戸分布と「上屋敷殿閣図」との対比



c) 上屋敷殿閣図（部分、尊経閣文庫所蔵をトレース、報告書 4 写真 2）

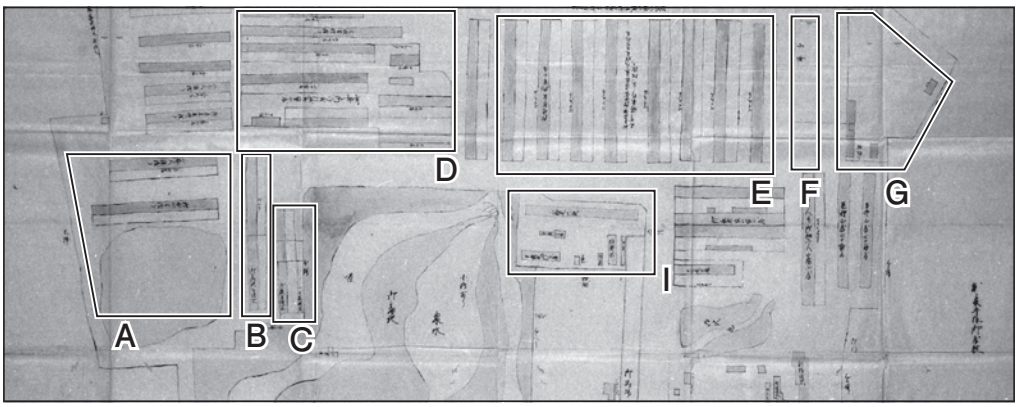


d) 前田家本郷御屋鋪図（部分、（公財）三井文庫所蔵、報告書 4 写真 3）

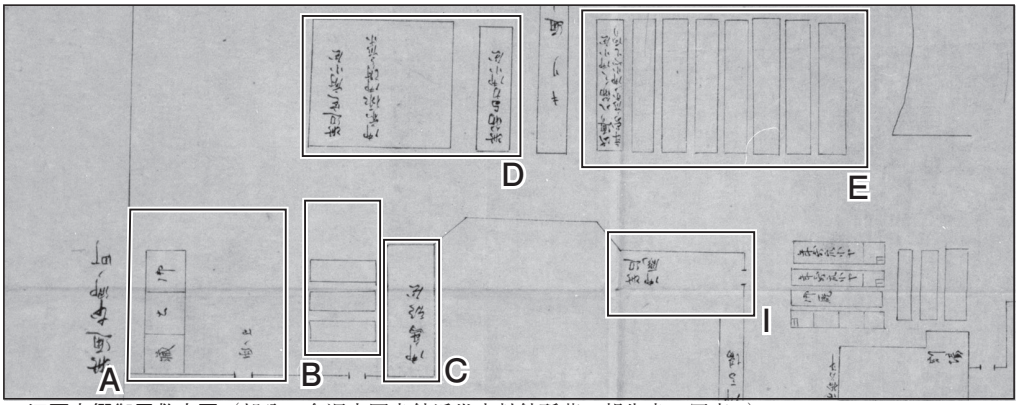


e) 上屋敷総絵図（部分、尊経閣文庫所蔵、報告書 4 写真 7）

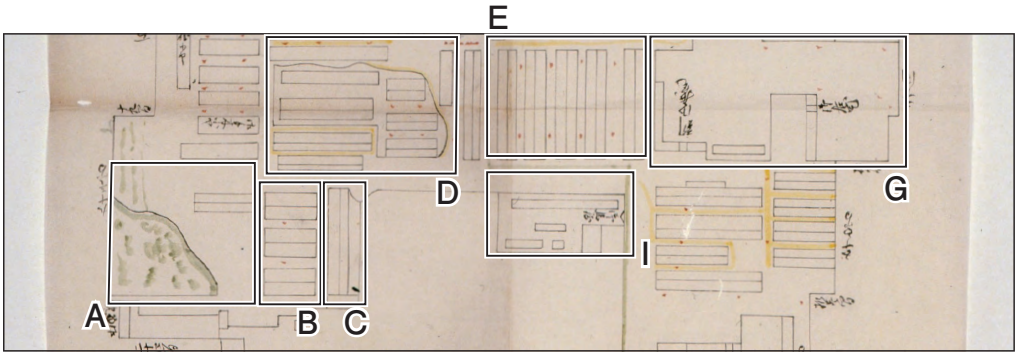
15 図　調査地点付近の絵図変遷（1）
報告書 4 は、『山上会館・御殿下記念館地点』第三分冊（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）を指す



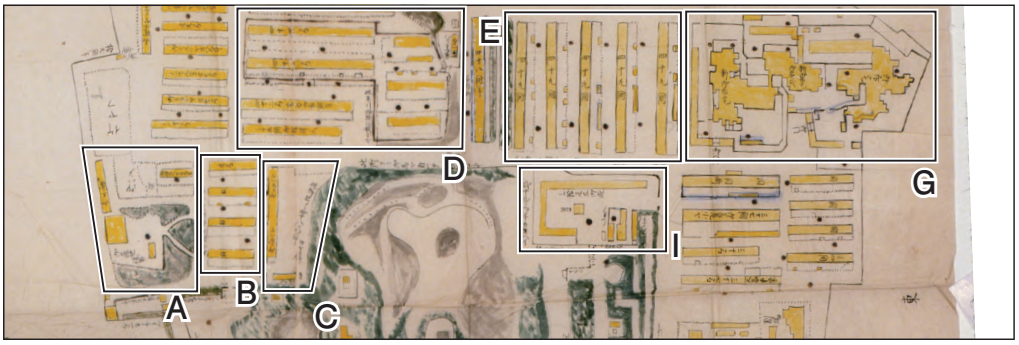
f) 江戸御上屋敷図（部分、（公財）前田育徳会所蔵尊経閣文庫、報告書 4 写真 4）



g) 江戸本郷御屋敷之図（部分、金沢市図書館近世史料館所蔵、報告書 4 写真 6）



h) 加藩本郷屋敷絵図（部分、石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション、報告書 4 写真 8）



i) 加藩江戸本郷屋敷総絵図（部分、石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション、報告書 4 写真 10）

16 図　調査地点付近の絵図変遷（2）

報告書 4 は、『山上会館・御殿下記念館地点』第三分冊（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）を指す

ように一見e図からの変化に乏しいが、Fの長屋が無くなっていることなどからe図より新しいと考えられる。本図には「右在京之内写之　安永六丁酉年暮春五月、高畠厚定」と書かれ、下限が安永6年(1777)であることが判る。

g図は「江戸本郷御屋敷之図」(金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵)の該当部である。かなり簡略化された絵図でF、G周辺は省略されているなど、位置関係の把握には注意を要する。Cの御鷹部屋、Eの八筋、Iの厩に変化がみられないが、Aには中山道側囲障付近に3区画された土蔵が描かれ、長屋が描かれていない。Bには新に南北列の長屋が3棟描かれている。Dは御附長屋と共に「此辺定府小屋」と併記されている。このようにA、Bに大きな変化が認められる。

h図は「加藩本郷屋敷絵図」(石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション)の該当部である。g図と比較すると、B、C、Iには大きな変化は認められないが、Aの囲障付近は明地に、その右上には長屋1棟が描かれ、f図に近い状況を呈している。Dにはf図同様長屋周囲に囲障が認められる。Eの八筋は5棟に減少し、Gの「御居宅」から西側の「新御居宅」まで一繋ぎで表現されている。この枠形状はe図E･Fの朱書き線とほぼ等しい。

本図は、Gに世子斉敬のために寛政元年(1789)に造営された「新御居宅」が描かれていることと[5]、支藩官名の組合せから、製作年代は1792～1796年に推定されている。

i図は「加藩江戸本郷屋敷総絵図」(石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション)の該当部である。C、D、E、Gには大きな変化は認められない。Aは比較的詳細に描かれ、囲障脇に「御土蔵」、「御露地役所」があるが、「竹ヤブ」「御ハタ」などの空閑地が大半を占めている。Bは南北列の長屋が1棟増築され4棟に変化する。Iは南北2列の厩舎が西側で連結し、逆コの字形に変化する。

この後享和2年(1802)の「梅之御殿」新営に伴い、Iの厩がAに移設される。梅之御殿竣工から逆算すると、1790年代後半には厩建設に関する作事が始まったと推定される。

5. SK25を巡る景観

前節の絵図土地利用変遷に基づいてSK25の立地景観を考えたい。c図、d図のA、B周辺には、天和3年に始まった藩邸再建で、足軽などの下級武士長屋が建設され、両図には大きな変化は認められない。絵図との対比から本地点は概ね長屋群の西端にかかると考えられる。本地点東辺部には袋状を呈した詰人空間タイプの地下室(成瀬1994)が分布する。これらは「上屋敷殿閣図」との対比から、概ね長屋の庭部分に位置することが確認でき、検出された地下室群がこの長屋群に帰属することを示している(15図b)。

地下室群出土遺物は、遺構廃絶後に廃棄場として再利用された事例も含め、出土陶磁器類に肥前系筒形碗(JB-1-l、Ⅴb期指標資料)、小丸碗(JB-1-j、Ⅵa期指標資料)を伴わず、地下室への廃棄行為は概ね1740年代で収束すると考えられる。この様相は同長屋群に比定される法4地点、文3地点でも看取される。また既述した様にSK25出土肥前系磁器碗の主要組成は、Ⅴb期～Ⅵa期の指標小器種である筒形碗･小丸碗と薄手碗で構成され、地下室群廃棄資料からほぼ断絶無く繋がっている様相が窺われ、地下室跡への廃棄が収束を迎える頃に掘削されたと考えられる。

e、f図では、A、Bの長屋はほとんど解体され、明地が拡がる。e図について細川は、Gの御居宅が西へ拡大していない、Fに長屋が存在する、Aに「御居間方」長屋が朱で加筆され元図にはない点から、f、g図より先行すると述べている。g図以降にBの南北列長屋が描かれていることからも、A・Bがd図→e図→f図→g図と変遷すると考えて問題ないだろう。

A・B・C周辺には、明和8年(1771)に西之御殿の建設が始まるが、14図から本地点は広敷の西寄りに比定され、広式範囲の北東に「御広式御門」が描かれていることから最奥部区域と推定される。西之御殿は翌安永元年(1772)に焼失したとされるが、その関連遺構として本地点SX39、SK171、法4地点F7-3号遺構、AC地点焼瓦層がある(14図)。SX39は本地点内にわずかに遺存した1面より検出された大形不定形遺構で、拳大程度に粉砕された多量の被災瓦が廃棄されていた。遺構深度は約50cmと浅く、被災瓦を利用して新たな硬化面を造成した印象を受ける。F7-3号遺構、AC地点焼瓦層も同様な状況と報告されている。一方SK171は長軸約4.4m、短軸約2.8m、深さ約1mを測る大形長方形土坑で、覆土全体にわたり混土瓦層を呈している。観察断面では大形破片を含む被熱瓦が半数程度を占め、西之御殿建設に伴って掘削された地下施設を埋め戻すために廃棄したと考えられる。

法4地点E7-3号土坑、E8-5号土坑はⅦ期の遺物が多量に廃棄された大形不定形土坑である。両遺構は重複関係にあり、報告書所見からE7-3号土坑が旧い。即ちE7-3号土坑からE8-5号土坑へとほぼ連続的に掘削、廃棄、埋積が繰り返され、西之御殿焼失後の明地を利用してこの一角が1780～90年代にかけて廃棄場所として利

用されていたことが窺われる。享和２年(1802)梅之御殿建設に伴いⅠに位置した厩が本区域に移設されるが、梅之御殿建設期間とそれに先立つ厩建設期間を考慮すると1790年代半ばを下限とみることができよう。

小結

以上の絵図、遺構変遷を踏まえて、SK25を取り巻く景観を考えたい。

ｄ図の「西ノ穴」、ｅ図の「穴」は位置、規模からSK25と推定される。ｅ図Ａ、Ｂの長屋減少を西之御殿火災に求めた細川の見解に従えば、この「穴」は西之御殿建設時も開口していたことになる。しかし冒頭でも述べたようにSK25覆土には焼土層は全く認められず、近接するSX39などへの廃棄状況を鑑みれば不自然である。また埋め戻し最終段階でゴミ廃棄が収束し、且つ最上層が敲き締められていた状況から、西之御殿建設に伴って最終埋め戻し及び整地が行われたと考えられる。従ってｄ図からｅ図への長屋の減少は周辺部土地利用の変更に由来すると推定され、Ａ、Ｂに全面的な変更が観られるｇ図以降が、西之御殿火災後を示していると考えたい。

西之御殿が焼失し厩が移築されるまでの1772～1790年代には、既述した西之御殿関連の瓦礫廃棄遺構とその後の日常的な廃棄遺構が存在するが、その分布は本地点からAC地点にかかる範囲にある。これを絵図に対比させるとＡに該当し、火災後に建設されたＢ長屋群の西側に拡がる明地(露地？)がゴミ集積場所として選定された。即ち、西之御殿が再建されなかったことによって、以前からの集積場所意識が働いた可能性がある。それも梅之御殿建設に伴う厩の移築により明地はなくなり、本周辺部のゴミ集積場所としての機能は、藩邸北辺部、即ち工学部１号館SK01に移行したと考えられる。

【註】

(1) 臨時遺跡調査室下で各々関連部局単位で運営していた「発掘調査報告書１～４」では、出土遺物数量提示方法は、破片数、重量、最少個体数など調査担当者の裁量で行われ、全体では統一されていなかった。また最少個体数の識別も堀内が述べているように『報告書４　医学部附属病院地点』では「個体の諸特徴から識別する個体数」(遺構や層などをサンプルユニットにする場合にメリットがあると思われる)を算出したが、『報告書５　医学部附属病院外来診療棟地点』からは「個体の底部中央など特定の部位をカウントする個体数」(サンプルユニットを遺跡、地域など広く求める場合にメリットがある方法と思われる)(堀内 2005)を採用した。その理由は、識別対象の数量が膨大であること(堀内 2022)及び加賀藩邸跡という一空間を単位とした消費個体数を求めることを目的としたことによる。

(2) 集計表に「0」で示したカウント対象資料を含めると、1器種増え39器種が確認された。

(3) 既述した入院棟Ａ地点Ｄ面焼土層でも主要小器種のひとつであるが、同時期の遺物が共伴しないことから、使用期間、生産地での動向に留意する必要がある。

(4) 富山藩邸には「出雲守様御屋敷」、大聖寺藩邸には「備後守様御屋敷」と書かれている。

(5) 斉教は寛政７年(1795)に急死し、翌８年(1796)に弟の斉広が入り「北御居宅」と改称された。

【引用参考文献】

岩渕令治　2004「江戸のゴミ処理再考」『国立歴史民俗博物館研究報告』118　pp.301-335

大成可乃　2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、pp.223-314　東京大学埋蔵文化財調査室

佐賀県立九州陶磁文化館　1986『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』肥前地区古窯跡調査報告書第３集　31pp

大貫浩子　2005「加賀藩邸内における陶磁器消費の諸相－SK01出土の遺物からみた19世紀前葉の様相－」『東京大学本郷構内の遺跡　工学部１号館地点』pp.162-181　東京大学埋蔵文化財調査室

杉森哲也　1990「第４節　梅之御殿」『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』第３分冊、pp.60-73

東京大学遺跡調査室　1990『法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書２

東京大学埋蔵文化財調査室　1990『東京大学本郷構内の遺跡山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４

東京大学埋蔵文化財調査室　1999「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』２別冊　130pp

東京大学埋蔵文化財調査室　2005『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書５

東京大学埋蔵文化財調査室　2016「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器分類の見直しの経緯」『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院入院棟Ａ地点』第２分冊　pp.252-268

成瀬晃司　1990「江戸藩邸内土地利用研究の一指針」『法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡』pp.813-831

成瀬晃司　1994「江戸藩邸の地下空間－東京大学本郷構内の遺跡を例に－」『武家屋敷－空間と社会－』宮崎勝美・吉田

伸之編、山川出版社 pp.93-121

成瀬晃司　2016「黒多門邸の研究」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編、pp.119-164　東京大学埋蔵文化財調査室

成瀬晃司　2017「奥女中の暮らし－情報学環・福武ホール地点 SK10 出土遺物の検討－」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ』pp.130-150　堀内秀樹・西秋良宏編　東京大学出版会

細川　義　1990「第 2 節　加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』第 3 分冊、pp.24-46

堀内秀樹　1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　pp.279-306　東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　2005「加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する考察」『東京大学本郷構内の遺跡　工学部 1 号館地点』pp.149-161　東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　2022「医科学研究所附属病院 A 棟地点出土一括資料の数量的分析」『東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）　医科学研究所附属病院 A 棟地点　研究編』pp.15-41　東京大学埋蔵文化財調査室

構内遺跡出土「茶道具」の検討

輸入陶磁を対象として

湯沢　丈

はじめに

法学政治学系総合教育棟の SK42（以下、法学 SK42 と略す）では、出土例の少ない生産地・器種の遺物がまとまって出土した。従来、法学 SK42 等出土の輸入陶磁は「茶道具」と評価されてきた。本稿では、その用途について検討したい。

1. これまでの評価と課題

医学部附属病院看護職員等宿舎地点 SK299（以下、看宿 SK299 と略す）では、出土頻度の低い生産地や器種がまとまって出土したため「茶道具」の可能性が指摘されてきた。今回報告される法学 SK42 出土資料も同様の文脈で扱われてきた。このように稀・特殊な遺物群の性格として「茶道具」が挙げられてきたが、具体的な性格の検討は以下の 2 点に限られる。

①生産地・器種の特殊性に言及。

②蔵帳と比較。

①については、江戸遺跡で出土する陶磁器の組成論的研究によって、おおよそ以下のような傾向が明らかとなった（成瀬・堀内 1990、森本 1991、井汲 1997、長佐古 2006）。生産地は、肥前系と瀬戸・美濃系で大部分が占められる。輸入磁器は 17 世紀までは一定数認められるが、その後、激減する。器種は、食器類が目立ち、中でも碗が高い割合を占めると森本は指摘した（森本 1991）。すなわち、国産の飲食器が江戸遺跡出土陶磁器の大半を占めるのである。本稿で取り上げる法学 SK42 や看宿 SK299 は後述するように対称的な構成である。そのため特に看宿 SK299 については「茶道具」と評価されてきた（大貫 2000、堀内 2010、成瀬 2013）。

②については、弘化 2 年（1845）または 3 年成立の『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』（以下、『蔵帳』と略す）との比較を堀内秀樹が行った（堀内 2013）。堀内は『蔵帳』から陶磁器を抽出し、以下の特徴を述べた。まず生産地について、輸入陶磁が国産陶磁の倍以上の数量である。次に器種では、茶碗・茶入・香炉・水指・壺・鉢・花入等が認められた。そして道具の性格は、茶道具･喫煙具･文房具等に偏在する。いずれも江戸遺跡で頻出する出土傾向と異なる。更に、法学 SK42 や看宿 SK299 出土資料は『蔵帳』記載の道具との類似が指摘でき、このような道具は藩邸における表向きの御道具として保管・管理されていた可能性と、「茶道具」の用途の可能性を挙げた（堀内 2013・2016）。

確かに生産地・器種の特殊性から、所有者・管理や用途について、通常とは異なる性格を想定するのは自然だが、その使用場面についての具体的な検討は、ほとんど行われてこなかった点が課題である。ちなみに中世考古学では、以前から小野正敏が、出土した「威信財」と御成や室礼に関する文献史料との比較を行っているが、近世では具体的な分析はほとんど認められない（小野 2003）。

なお、既に大貫浩子が看宿 SK299 出土の建盞等に関連して、寛永 6 年（1629）御成や伝世品に触れているが、遺物の紹介という出版上の都合で若干の言及に止まっている（大貫 2000）。

2. 出土資料

法学 SK42 出土資料の内、本報告書Ⅳ -36 ～ 38 図に掲載された遺物が、これまで「茶道具」の可能性が指摘されてきた。一部を図に抽出した（1 図）。その生産地・器種は以下の通りである。1・2 は白磁香炉である。胎土に隙間、釉表面には貫入が認められ、生産地は福建等の中国南方と考えられる。3 ～ 10 は竜泉窯産の青磁で、器種は 3 ～ 7 が香炉、8 は水滴、9・10 は硯屏と考えられる。3 の釉薬は青みを帯びており、耳には鳳凰または竜の装飾が施されるが、被熱のため不詳である。釉調が他より青みを帯びているため、生産年代が古い、または異なる生産地の可能性が考えられる。9・10 の硯屏の側面には、筒状の筆立てが 2 本ずつ認められる。11・12 は景徳鎮窯産の水注である。11 は瓢箪形の体部の下部に焼成前穿孔が認められ、いわゆる仙盞瓶に類する器形であろう。12 は外面に青磁釉が施されるが、内面には透明釉が施され、畳付は無釉である。底部中央には染付で角枠と年款が記され、当該箇所には透明釉が施される。13 は陶器で、国産のものより器壁が薄く、胎土は緻密、その断面は光沢を帯び、白色粒子（1 ～ 2mm）を含む。外面文様の凹みには灰白色の釉が溜まり、薄く透明釉を施したと考えられる。生産地は不明だが、注口が

あるため、日本では水注として扱われただろう。

看宿 SK299 では、次のような器種が出土した(2 図、東京大学埋蔵文化財調査室 2021)。1 ～ 9 は竜泉窯青磁である。器種は 1 ～ 3 は瓶、4 は箱形を呈すが全体像は不詳、5 は硯屏、6 ～ 8 香炉、9 は托である。1 はいわゆる砧形で、国内では花入として伝世する事例が複数認められる(例：「万声」(和泉市久保惣記念美術館所蔵)、「千声」(陽明文庫所蔵)等)。2 は不遊錫を持ち六角形を呈する。不遊錫を有する青磁瓶は、国内で花入として伝世する例が確認できる(例：「青磁桔梗口双耳花入」東京国立博物館所蔵、「青磁貼花牡丹文不遊錫耳瓶」出光美術館所蔵)。3 は琮形で、青磁瓶は国内では花入や水指として伝世する(例：尾張徳川家伝来、現在、東京国立博物館所蔵)。10 は建窯の碗、いわゆる建盞である。11 ～ 16 は朝鮮産で、16 は青磁、その他は陶器である。11 ～ 16 の器種は、殆どが碗であるが、13 は立ち上がりがゆるく、鉢の可能性がある。17 はドイツのいわゆるライン炻器、塩釉炻器水注である。胴部注口の下部には人面の貼付が認められる。その生産地や生産年代については櫻庭美咲と長久智子の論考がある(櫻庭 1999、長久 2019)。櫻庭はレーレン窯の可能性を指摘し、長久は 16 世紀後葉から 17 世紀前葉のヴェスターヴァルト製と推定した。また長久論考によると、柳川藩立花家には胴部の注口はないが、口縁下部に人面の貼り付けられた炻器が「水指」として伝来する。18 はベトナム産の甕である。口縁下を胎土で蓮弁状に成形する。類似する伝世品は 2 点確認できる(矢島 2023)。1 点目は、京都国立博物館所蔵品であり、京都の大沢家に水指として伝来した(茶道資料館 2002)。2 点目は根津美術館所蔵品である(根津美術館学芸部 2022)。

3. 性格の検討

3.1. 対象器種

「茶道具」の可能性が指摘された器種は、以下の通りである。一部、意味が重複するものもあるが列挙する。

・碗(天目・建盞等)
・花入(瓶)
・水指(甕)
・建水(水翻)
・水注
・硯屏
・水滴(水入)
・香炉(火入)

この中には、点茶以外の道具も含まれている。ただし、点茶以外の道具を含めて「茶道具」とする見解が広く見られる。例えば『原色茶道大辞典』によると、「茶道具」は装飾道具、点前道具、懐石道具、水屋道具、待合・露地道具の 5 種類に大別でき、「点前道具」には点茶だけでなく炭手前の道具も含まれる(井口・末・永島 1975)。

一方、出土資料の場合、懐石道具と他の食器等、一部は重複し、区別が極めて難しい。瓶を花入として用いるにしても茶事･喫茶以外の場で用いる場合もあるだろう。そのため本稿では「茶道具」ではなく、点茶道具等の表現を用いる。

また本来、遺物の使用痕等から用途を推察したいところだが、どちらの一括出土資料も被熱しており、器面の使用痕の観察による分析は極めて困難である。そのため、道具の使用される場面を文献史料上で探ってみる。なお史料に記載された道具の形態等は不詳であり、考古資料との比較には限界がある点には留意しておく必要がある。

3.2. 文献史料との比較

本稿では、かつて筆者が分析した金沢藩前田家の御成記を対象とする。

3.2.1. 対象史料

徳川将軍の金沢藩邸への式正御成は以下の通りである。

・元和 3 年(1617) 5 月 13 日　将軍秀忠(辰口邸)
・寛永 6 年(1629) 4 月 26 日　将軍家光(本郷邸)、同年同月 29 日　大御所秀忠(本郷邸)
・元禄 15 年(1702) 4 月 26 日　将軍綱吉(本郷邸)

筆者は各御成について、前田家側と幕府側の複数史料を確認し、史料から復原できる御成の全体像(道具と人物・時機・場所等)を提示してきた(湯沢 2022・2024・2025)。詳細は拙稿を参照されたい。

この内、道具について詳細に記された、寛永度御成記を対象とする。

3.2.2. 道具の抽出

1 ～ 8 表に、寛永御成記における上記器種の記述例をまとめた。

○碗・建盞・天目(1 表)

寛永御成記では 6 件確認された。ほとんどが前に茶器、後に茶杓・茶巾等が記され、点茶を想定して用意されている。なお 5 章でも触れるが、確実に茶を点てたのは御数寄屋だけであり、他所で点茶・喫茶したかは不明である。しかし次の 2 例は点茶道具としての用途を想定している可能性が比較的低いだろう。

まず№202「けんさん(建盞)の天目」の置かれた黒御

書院の他の棚には、鶴首茶入、骨吐壺も置かれたが、書や香道具も置かれている。また黒御書院は盃事が行われた空間であり、点茶道具としての用途を想定している可能性は低い。

次に№257「かうらいちやわん(高麗茶碗)」は筆濯ぎとして、御広間の書院床に硯・筆架・墨等と共に置かれており、文具として置かれている。御広間は献上や御能御覧が行われたので、これら文具を実際に用いた可能性は低いと考える。なお「筆濯ぎ」という名称は、いわゆる「遊撃呉器」を指す可能性、あるいは、その元となった文房具を指す可能性も考えられる。今後の課題としたい。

○花入・瓶・石菖鉢・砂物(2 表)

寛永御成記では 8 件確認された。花入や砂物として記される例が殆どである。「うすはた」と記されるものは金属の可能性が高いだろう。

また№234・239・243 は、燭台や香炉と共に、三幅一対の掛け物に各 1 つずつ置かれ、いわゆる三具足として用意されている。また№32 は将軍・大御所が実際に花を入れ、№71・195 は池坊作、№234・239・243 は松・竹の真、№249 は真が苔むしの木と、それぞれ記され、実際に花入・砂物として使用した可能性が高い。

○水指(3 表)

寛永御成記では 4 件確認された。いずれの「水指」も点茶道具としての用途を想定して用意されている。繰り返しになるが、御成記で点茶・喫茶の記載があるのは御数寄屋だけである。

○建水・水こぼし・骨吐(4 表)

寛永御成記では 4 件確認された。水指と同様、共に置かれる道具の組合せから、点茶道具としての用途を想定して用意されているが、№39 御数寄屋のもの以外は、使用されたか不明である。なお実際に使用したであろう№39 は陶器(伊賀焼)、№208・228 は金属(一部、銀)である。

○水注(5 表)

注口を持つ瓶を抽出した。寛永御成記では 1 件確認された。仙盞瓶と考えられる。御広間の書院床に文具と共に、花入として用意されたようである。

○硯屏(6 表)

寛永御成記では 2 件確認された。どちらも書院床に文房具と共に置かれる。材質は不明である。

○水入(7 表)

寛永御成記では 2 件確認された。硯屏と同様、書院床に文房具と共に置かれる。材質は磁器と金属が見られる。

○香炉(8 表)

寛永御成記では 18 件確認された。前後に火箸・香箸、香匙や香箱、沈箱が記され、共に香道具として置かれた例が多い。

3.2.3. 御成記上の傾向

寛永の御成記の記載をまとめると、以下の通りである(9 表)。

- 「建盞」「天目」「高麗」等の碗：ほとんどが点茶道具として用意。その他にも文房具として用意。高麗割高台、黄天目、三島、建盞等、いずれも輸入陶器の可能性が高い。
- 「花入」「薄端」「石菖鉢」「砂物」と記される瓶・鉢：花入や石菖鉢として、また燭台や香炉と共に三具足の 1 つとして用意。材質は金属が多い。金属製のものは輸入品が多いか。
- 「水指」：点茶道具として用意。材質は陶器(「伊賀」)と金属。陶器は伊賀焼、すなわち国産陶器である。
- 「水こぼし」「骨吐」：点茶道具の建水として用意。材質は陶器と金属。陶器は伊賀焼、すなわち国産陶器である。
- 「せんさびん(仙盞瓶カ)」：花入として用意。磁器製の水注か。
- 「硯屏」：文房具として用意。材質等不明。
- 「水入」：文房具として用意。材質は磁器(青磁)と金属。
- 「香炉」：御数寄屋を除く、殆どの空間に香道具として用意。材質は陶磁器(青磁･染付･「呉須」･「にしき染付」)と金属。「青地獅子」や「にしき(錦)染付」は輸入磁器か。鎖次之間・二階之上・白木之御書院御成之間・黒御書院御飾・御広間では、1 つの部屋に複数記されており、全てに香を焚いたとは考えにくい。

これまで「茶道具」と指摘されてきた器種の一部は点茶道具として御成で用意されていたことは確かだが、文房具としての用途も見られた。また御広間では、床に香炉以外にもうすはた(薄端)や「花瓶」、燭台(「鶴らうそく立」)が記され、単なる香炉ではなく、三具足の一部として飾られているのだろう。

また用意された部屋と、そこでの行為は以下の通りである。

・御数寄屋：膳・花・茶・炭
・御鎖之間：書を持ち出す
・（鎖次之間）：不記載
・二階ノ下だうこ（銅壺）の間：休息等か
・二階之上（二階座敷）：書を上覧
・御上り屋：不記載
・御せんちん（雪隠）：不記載
・白木之御書院御成之間：七五三膳・饗宴・献上か
・黒御書院御飾：盃事・下賜
・（御黒書院）次之間：不記載
・御広間：献上・御能御覧

この内、実際に将軍が滞在したと考えられるのは、御数寄屋・御鎖之間・二階之上（二階座敷）・二階ノ下・黒御書院・白木之御書院御成之間・御広間である。次之間での行為は史料上、確認できなかったが、控える場所として用いられた可能性が考えられる。

上り屋や雪隠は、万全を期して準備したと考えられるが、史料上、使用は確認されなかった。また実際に点茶・喫茶が史料上で確認できるのは「御数寄屋」だけであり、その他の部屋では盃事や下賜・献上等を行っており、将軍が文房具を用いたとは考えにくい。従って、香炉と御数寄屋以外の点茶道具・文房具等は、室内装飾として用いられたものと考えられる。

4. 法学 SK42 出土「茶道具」の性格

史料上、今回抽出した器種の内、碗・水指・建水については点茶の道具として用意されていた。その他は、香道具・文具、花入、また三具足として用意された。そして、いずれの用途の道具においても、一部は実際に使用されていたが、単に室内装飾として置かれていた可能性が高いものも複数認められた。

更に、法学 SK42 では硯屏 2 点と舟形水滴等、比較的文房具が多めであるが、一方の看宿 SK299 は、碗・甕（水指）といった点茶道具と考えられる遺物が多く含まれていた。この両者には道具の用途の中心が異なり、それぞれの保管形態の違いが出土状況に反映された可能性が考えられる。

おわりに

法学 SK42 等、これまで「茶道具」の可能性が指摘されてきた遺物には、点茶道具以外に、文房具、装飾品の器種が含まれていた。これらの内、点茶道具・香道具等は、器種本来の用途で使用されるが、一方で装飾として用いられた可能性もあった。従って、これら特殊な生産地・器種の遺物が出土した場合には、器種本来の用途だけでなく、装飾品としての使用も想定すべきだろう。

また文房具が比較的多めの法学 SK42 と、点茶道具が多めの SK299 の性格の違いに言及した。本稿では触れられなかったが、文学部 3 号館地点 E8-2 号土坑出土遺物についても、従来「茶道具」の可能性が指摘されてきたが、こちらは国産陶器で構成される。これらの位置付けについては、今後の課題とする。

謝辞

本稿執筆にあたり、ベトナム陶磁について矢島律子氏より、朝鮮陶磁については片山まび氏よりご助言を賜りました。その他にも各氏より助言をいただきました。御礼申し上げます。本稿で反映しきれなかった点については、今後の課題とします。

【参考文献】

井口海仙・末　宗広・永島福太郎監修　1975『原色茶道大辞典』淡交社

井汲隆夫　1997「江戸遺跡出土の磁器・陶器・炻器・土器器種組成：南山伏町遺跡を中心に」『南山伏町遺跡』：455-459、新宿区南山伏町遺跡調査団

大貫浩子　2000「東大構内遺跡出土の貿易陶磁について」『加賀殿再訪：東京大学本郷キャンパスの遺跡』（東京大学コレクション 10）：148-155、東京大学総合研究博物館

小野正敏　2003「威信財としての貿易陶磁と場：戦国期東国を例に」『戦国時代の考古学』：553-564、高志書院

櫻庭美咲　1999「江戸時代に舶載されたライン炻器製酒器についての一試論」『武蔵野美術大学研究紀要』30：101-114

東京大学埋蔵文化財調査室　2021『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院看護職員等宿舎 1 号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎 3 号棟地点（1）』（東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 15）東京大学埋蔵文化財調査室

茶道資料館　2002『東南アジアの茶道具：わび茶が伝えた名器』茶道資料館

長佐古真也　2006「流通②「関東・江戸」」『江戸時代のやきもの：生産と流通』：229-249、瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

長久智子　2019「近世日本におけるライン製塩釉炻器の流通と需要」『貿易陶磁研究』39：112-128

成瀬晃司　2013「罹災資料にみる大名藩邸の陶磁器諸相：天和 2 年・元禄 16 年の加賀・大聖寺・富山藩邸出土資料から」『江戸の武家地出土の肥前陶磁：罹災資料と初期色絵・鍋島・柿右衛門』（近世陶磁研究会資料 3）：120-193、近世陶磁研究会

成瀬晃司・堀内秀樹　1990「消費地遺跡における陶磁器の基礎

的操作と分析：東京大学構内遺跡病院地点出土資料を例に」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』（東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3）：821-860、東京大学医学部附属病院

根津美術館学芸部　2022『茶の美術：根津美術館新蔵品選』根津美術館

堀内秀樹　2010「都市江戸における貿易陶磁器の消費：江戸の需要とその背景」『都市江戸のやきもの』（江戸遺跡研究会大会発表要旨 23）：7-41、江戸遺跡研究会

堀内秀樹　2013「加賀藩邸の貿易陶磁器出土様相と「蔵帳」に記された陶磁器：『加賀前田家表御納戸御道具目録帳』を中心として」『貿易陶磁研究』33：59-74

堀内秀樹　2016「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル：加賀藩本郷邸の出土資料の分析から」『中近世陶磁器の考古学 2』：119-137、雄山閣

森本伊知郎　1991「江戸市中の物資流通と生活用具：遺跡出土の陶磁器から」『甦る江戸』：143-180、新人物往来社

矢島律子　2023「伝世ベトナム産白釉陶器について」『陶磁器と考古学：大橋康二先生喜寿記念論文集』：431-439、雄山閣

湯沢　丈　2022「前田邸御成記の分析：元和・寛永」『東京大学構内遺跡調査研究年報』15：107-184

湯沢　丈　2024「前田邸御成記の分析 2：元禄」『東京大学構内遺跡調査研究年報』16：83-111

湯沢　丈　2025「前田邸御成記の分析 3：元禄度幕府側史料と屋敷図」『東京大学構内遺跡調査研究年報』17：151-158

1表　碗・建盞・天目

No.	記載箇所	道具	用途	材質	場所等	詳細1	詳細2	備考
36	E-2	御茶碗、かうらいわりかうたい（高麗割高台）、宗前也	茶	陶器	御数寄屋之内	-	-	『蔵帳』7冊7番御長持17・9番御長持67番「高麗割香台茶碗」 前に茶入・袋、後に茶杓・茶筅が記載。
51	E-3	黄天目	茶	陶器	御鎖之間	桐ノ袋棚ノ上？	朱ノ台	前に茶入・袋・「朱ノ台」、後に茶巾・茶筅・茶杓が記載。
82	E-4	三島茶碗	茶	陶器	二階ノ下だうこ（銅壺）の間	右之方の棚？	-	前に寸切・袋、後に茶杓・茶巾が記載。
202	E-10	けんさん（建盞）の天目	茶	陶器	黒御書院御飾	左ノ次ノたな（棚）	唐の青貝盆（イ 台）ニのる	次に（同棚に）「唐の青貝盆」が記載。同盆に載せたか。
206	E-10	けんさん（建盞）ノ茶碗	茶	陶器	黒御書院御飾	左之棚	-	左之棚には骨吐の壺2，黒堆朱盆、染付香炉、香匙、火箸が記載。
257	E-12	筆すゝき（濯）、かうらいちやわん（高麗茶碗）	文具	陶器	御広間	同広間書院床	けんひやう（硯屏）左ニ（イ 硯之左ニ）	書前に硯屏・水入・瓦硯、後に筆架・丸墨が記載。

注：「No.」は拙稿表6に対応し、「イ」等は異本を示す。詳細は拙稿（湯沢2022）参照（以下、同様）。

2表　花入・瓶・石菖鉢・砂物

No.	記載箇所	道具	用途	材質	場所等	詳細1	詳細2	備考
32	E-2	かうし（柑子）口の御花入（ニ 但かねの物） （イ 竜耳　タテ九寸五分、香地（柑子カ）口金物）	花	金属	御数寄屋之内	御床（ニ うすいた（薄板）ニ）	-	『蔵帳』11冊46番御長持23番「銅柑子口花入」 （東 花入《御花菊》 柑子口古銅）
71	E-3	砂の物《金のはち（鉢）、池法（池坊カ）作》	花	金属	（イ ○鎖次之間）	書院右ノ方	-	
195	E-10	うすはた立花 池坊作	花	金属	黒御書院御飾	次ノ床	-	
207	E-10	石菖はち（鉢）	花	陶磁器？	黒御書院御飾	左之棚？	-	将軍御成時
234	E-12	うすはた、松の真	花	金属？	御広間	竜の前	卓子	（東 花瓶《花ハ池坊立ル》） 床に三幅一対（竜・鉄拐・虎）
239	E-12	花瓶 松（イ ノ）真	花	金属か陶磁器	御広間	てつかひ（鉄拐）の前？	-	床に三幅一対（竜・鉄拐・虎）
243	E-12	うすはた竹の真	花	金属？	御広間	虎の前	卓子	床に三幅一対（竜・鉄拐・虎）
249	E-12	砂ノ物、真こけむし（苔生カ）の木	花	不明	御広間	棚ノ下	卓	

3表　水指

No.	記載箇所	道具	用途	材質	場所等	詳細1	詳細2	備考
33	E-2	水指 伊賀焼、友ふた（蓋）	茶	陶器	御数寄屋之内	-	-	前に花入、後に茶入が記載。
56	E-3	かね（金カ）のつはの水指、口廻りニ紋有、友ふた（蓋）、取手雀	茶	金属	御鎖之間	同（中棚）下	-	柄杓、後に水こぼし・蓋置が記載。
86	E-4	伊賀焼ぬりふた（塗蓋）の水指	茶	陶器	二階ノ下だうこ（銅壺）の間	たうこ（銅壺）の内棚	下	（東 水指　信楽） 前に茶筅、後に蓋置が記載。
226	E-11	水指、金子	茶	金属	（黒御書院）次之間	-	-	前に釜・鐶（共に金子）、後に風呂（炉）・水こぼし（共に銀子）が記載。

4表　建水・水こぼし・骨吐

No.	記載箇所	道具	用途	材質	場所等	詳細1	詳細2	備考
39	E-2	水こほし いかやき（伊賀焼）	茶	陶器	御数寄屋之内	-	-	異本ニのみ記載 前に茶筅、後に茶が記載。
57	E-3	水こほし、金の物ゑふこ（餌籠）	茶	金属	御鎖之間	同（中棚）下？	-	（ニ かねゑふこの水さし） 前に水指、後に蓋置が記載。
208	E-10	ほねはき（骨吐）のつほ（壺）弐	茶	不明	黒御書院御飾	左之棚？	-	大御所の御成時。 後に堆朱盆、香炉が記載。
228	E-11	水こほし、銀子	茶	金属	（黒御書院）次之間	-	-	前に風呂（炉）（銀子）、後に柄杓立（銀子）が記載。

5表　水注

No.	記載箇所	道具	用途	材質	場所等	詳細1	詳細2	備考
266	E-12	せんさびん（仙盞瓶カ）《但口けんひやう（硯屏）のかた（方）へ、花石竹》	花	磁器？	御広間	同広間書院床	印篭ノ右	（ニ せんさんびん） 前に筆軸、墨留、堆朱の印籠・盆が記載。

6表　硯屏

No.	記載箇所	道具	用途	材質	場所等	詳細1	詳細2	備考
189	E-10	硯屏	文具	不明	黒御書院御飾	書院床	-	前に短尺（冊）、後に筆下・墨が記載。
254	E-12	硯屏（イ 硯）	文具	不明	御広間	同広間書院床	中	前に払子・喚鐘、後に水入・硯が記載。

7表　水入

No.	記載箇所	道具	用途	材質	場所等	詳細1	詳細2	備考
194	E-10	水入　青地人形	文具	磁器	黒御書院御飾	書院床	-	前に墨・筆軸・文鎮が記載。
255	E-12	さいの水入、金之物	文具	金属	御広間	同広間書院床	前	前に硯屏、後に硯が記載。

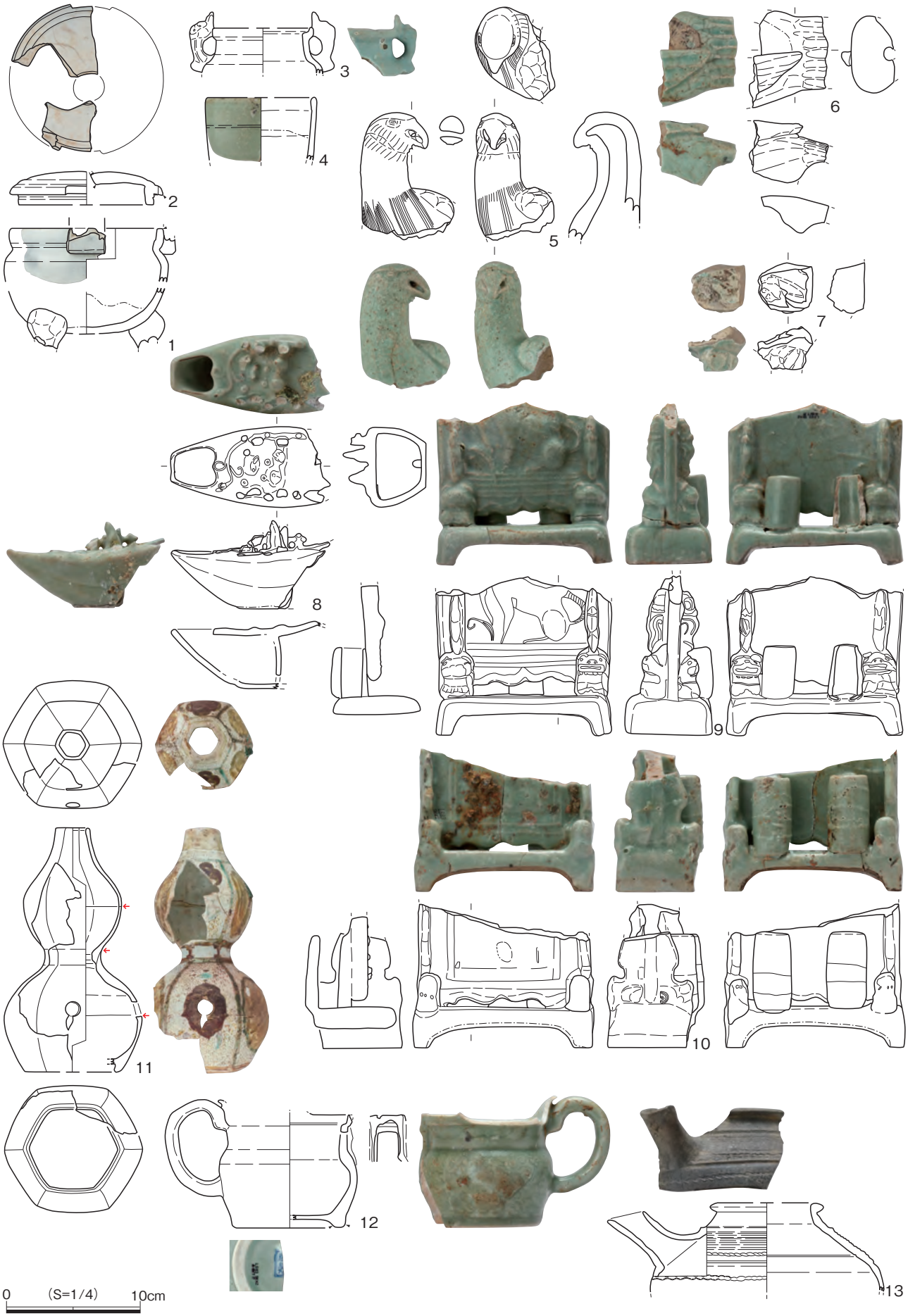
8表　香炉

No.	記載箇所	道具	用途	材質	場所等	詳細1	詳細2	備考
63	E-3	亀ノ香炉	香	金属か陶磁器	（イ 〇鎖次之間）	上段	利休ノ唐木ノしよく	26日。前に掛物・床が記載。
64	E-3	青地獅子香炉	香	磁器	（イ 〇鎖次之間）	上段	同所	29日。前に掛物・床が記載。 『蔵帳』8冊15番御長持60番「青磁獅子香炉」
66	E-3	もつかう（木瓜カ）の香炉	香	陶磁器？	（イ 〇鎖次之間）	-	地くれないの盃？	前に盃が記載。
68	E-3	染付ノ三ツ足の香炉	香	磁器	（イ 〇鎖次之間）	-	琉球物四方盆	前に四方盆、後に香箸が記載。
77	E-4	かね（金）の四方かうろ（香炉）、友ふた（蓋）すかし（透）有之	香	金属	二階ノ下だうこ（銅壺）の間	（三ツしたな蒔絵）上	-	前に「三ツしたな」が記載。
97	E-5	ごす（呉須）の四方かうろ（香炉）	香	磁器	二階之上	床	三ツしたな古キ物、蒔絵、上	前に「三ツしたな」、後に羽箒が記載。
102	E-5	丸きうは（姥）口の古（イ キ）染付のかうろ（香炉）	香	磁器	二階之上	左ノ上ノ棚（但少すちかへ（筋違）てはし（端）にあり）	唐のほり（彫）物、もつかう（木瓜）なりの盆	前に盆、後に香箸が記載。 『蔵帳』8冊14番御長持30番「染付姥口香炉」
114	E-7	にしき（錦）染付うは（姥）口のかうろ（香炉）	香	磁器	御上り屋	堆（イ 椎）朱ノ香（イ 青）盆（イ ニ）、ほり（彫）（イ 物）ふよふ（芙蓉？）	-	前に香盆、後に香箸が記載。 『蔵帳』8冊14番御長持30番「染付姥口香炉」
129	E-8	かうろ（香炉）　青地	香	磁器	御せんちん（雪隠）	-	-	前に褥、後に香箸が記載。
140	E-9	鴨之香炉	香	金属？	白木之御書院御成之間	から（唐）卓子ノ上	-	前に卓子が記載。
146	E-9	香炉染付	香	磁器	白木之御書院御成之間	-	-	堆朱盆、香箸、後に堆朱の盆・香箱が記載。
159	E-9	そめつけ（染付）ノ香炉	香	磁器	白木之御書院御成之間	并ノ棚	唐青貝ノ盆	前に青貝の盆、堆朱香合が記載。
168	E-9	孔雀之香炉	香	金属か陶磁器	白木之御書院御成之間	同間（次ノ間）	上之段棚	下棚に料紙・硯箱が記載。
176	E-9	香炉染付（イ ※御雪隠に記載）	香	磁器	白木之御書院御成之間	次ノ一間東ノ方ゑんかわ（縁側）	台子爰（イ 是）ニかさり（飾）　上之棚	前に台子、後に香箸が記載。
210	E-10	そめ（染）付（イ の）香炉	香	磁器	黒御書院御飾	左之棚？	黒キくる／＼の盆	前に堆朱盆、後に香匙・火箸が記載。
213	E-10	青地唐獅子（イ の）香炉	香	磁器	黒御書院御飾	あけまき（総角・揚巻）上ノ棚	-	（東 香炉　青磁獅子） 前に火箸、後に堆朱香箱・真鍮香箸が記載。
240	E-12	亀の香炉	香	金属？	御広間	てつかひ（鉄拐）の前？	-	前に花瓶、後に香箱が記載。
244	E-12	まかり香炉	香	不明	御広間	むかへハ左ノ方棚ノ中棚	-	後に沈箱が記載。

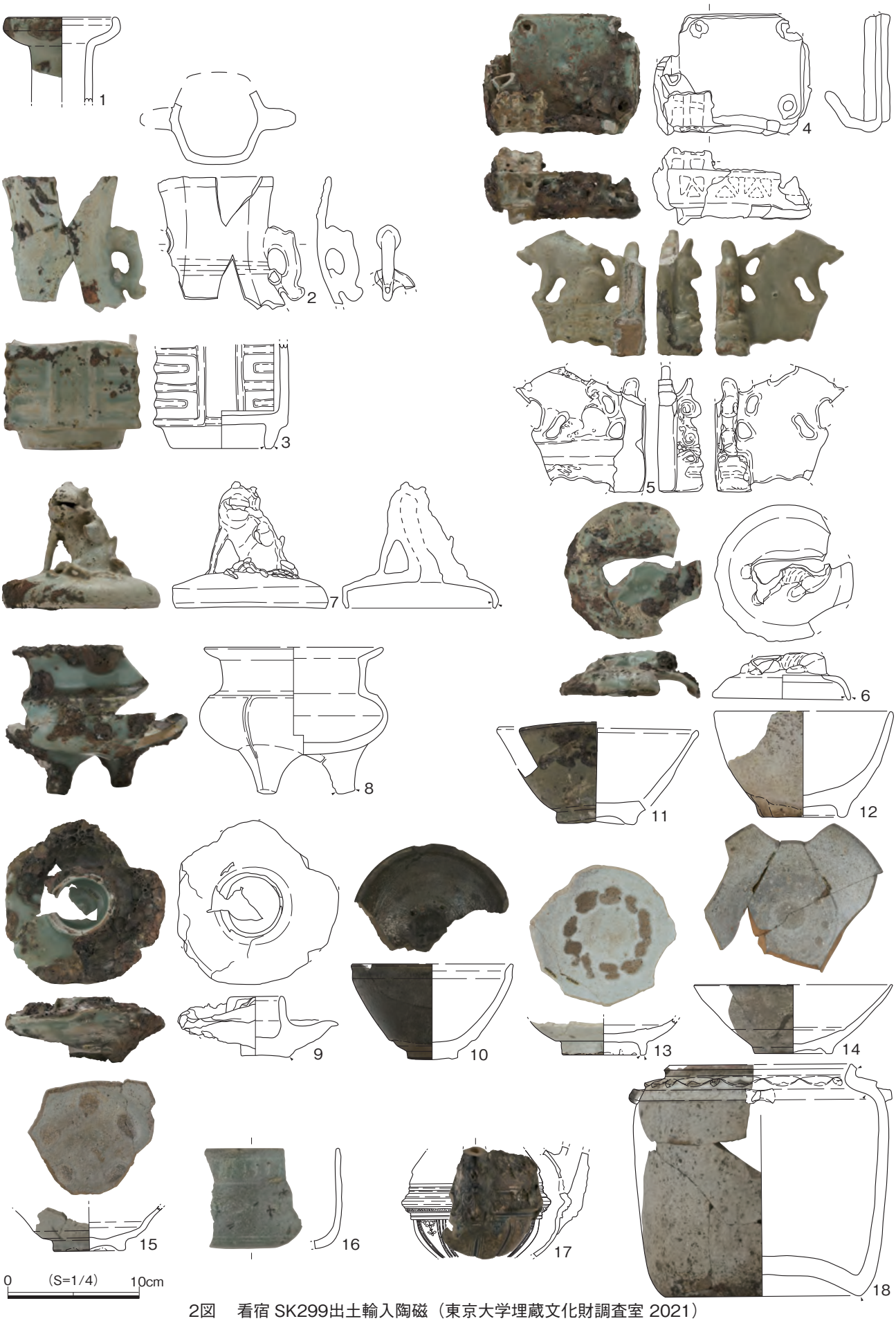
９表　寛永度御成記記載「茶道具」の整理

器種・記載	用途	材質	場所	件数
碗・建盞・天目	茶５、文具（筆濯）	陶器（建盞２、黄天目、高麗２、三島）	御数寄屋之内、御鎖之間、二階ノ下だうこ（銅壺）の間、黒御書院御飾２、御広間	6
花入・花瓶・石菖鉢・砂物・うすはた（薄端）	花（一部は三具足）	金属３、陶磁器	御数寄屋之内、（イ〇鎖次之間）、黒御書院御飾２、御広間４	8
水指	茶	陶器（伊賀焼２）、金属２	御数寄屋之内、御鎖之間、二階ノ下だうこの間、（黒御書院）次之間	4
水こぼし・骨吐	茶（建水）	陶器（伊賀焼）、金属	御数寄屋之内、御鎖之間、黒御書院御飾、（黒御書院）次之間	4
せんさびん（仙盞瓶カ）	花	磁器？	御広間（書院床に文具と共に記載）	1
硯屏	文具	不明	黒御書院御飾、御広間	2
水入	文具	磁器（青磁）、金属	黒御書院御飾、御広間	2
香炉	香	陶磁器（青磁３、染付６、錦染付、呉須）、金属	（イ〇鎖次之間）４、二階ノ下だうこの間、二階之上２、御上り屋、御せんちん（雪隠）、白木之御書院御成之間５、黒御書院御飾２、御広間２	18

注：複数認められたものは、用途・材質・場所ごとに件数を記した。



1図　法学SK42出土輸入陶磁



2図　看宿 SK299出土輸入陶磁（東京大学埋蔵文化財調査室 2021）

瓦資料の分析

石井　龍太

１、はじめに

都内遺跡からはしばしば莫大な数量の瓦資料が出土する。しかしそれらが持つ意味を正確に把握し、遺構・遺跡の解釈に繋げるには、良好な状態の資料群が得られる必要があるといえる。本調査区では良好な瓦溜りSK158が検出され、江戸近世瓦研究に資する内容の資料が豊富に得られている。ここでは資料の実見を踏まえ、生産・消費に大別してその意味するところを探ってみよう。

なお本遺跡の調査では、残念ながら出土したすべての瓦資料が回収されたわけではない。そのため接合も限定的にしか行われておらず、全形を確認できる資料は余りない。本稿の分析はそうした制約があることを踏まえた上で行うものである。

２、出土資料の分析

2-1. 生産

(1) 製作技法について

ここでは特に出土量の多かった桟瓦と、特徴的な痕跡が認められる丸瓦を取り上げ、製作技法について観てみよう。

〈丸瓦　Ⅳ-61 図〉

丸瓦は、長さから二種類に大別される。長い方（Ⅳ-61 図-24）は玉縁部が欠損しているため全長は不明だが、残存部から 380mm 以上あると推察される。短い方（Ⅳ-61 図-22，23）は 300mm 前後を測る。

丸瓦の凸面側には縦方向にナデ整形を施した痕跡が、玉縁には横方向にナデ整形した痕跡が認められる。何れも江戸遺跡出土丸瓦によく観られる整形痕跡である。また玉縁裏側には、指押しでついたと推察される幅 2cm ほどの大きな窪みが認められる。布目の転写を切っていることから、布からはがした後に付いた痕跡だと考えられる。整形に関わるひとつの特徴といえよう。なお筒部が長めの丸瓦には玉縁部が残っておらず、同様の痕跡が認められるかどうか不明である。

そして丸瓦の凸面には、筒部の長短に関わらず、両側縁に沿って細長く延びる変色部分が確認される。幅は 10 ～ 20mm、玉縁の段差から始まり、その付近に特に明瞭に残る。多くは前端部まで届かず、中には玉縁の段差付近のみ変色したものも認められる。軒丸瓦の筒部にも同様の痕跡が確認される。屋根に葺かれた時にこの部分のみ風化するとは考えにくく、焼成時の痕跡、おそらくは窯内で接触するかきわめて近くに置かれ、火の周りが不十分だった部位であろうと推察される。変色部分の幅は 10mm 前後を測り、丸瓦のうち、左右端部の幅は概ね同じ 10mm 前後であることから、焼成時に窯内で重なり合った痕跡である蓋然性は高い。

同様の変色部は他の種類の瓦にも認められる。平瓦、桟瓦の場合、特に前端部に帯状の変色部分が確認される例は多い。変色部分の幅と平瓦・桟瓦の厚みは何れも 20mm 弱であることが多く、丸瓦と同じく重ね焼きの痕跡だと推察される。こうした変色部の特徴を丹念に調べ集成することで、将来的には瓦の窯詰めの状況を復元できる可能性がある。さらに製作技法や刻印との対応関係から、整形を担う集団と焼成の担当者との関係性まで言及することが可能になるだろう。

〈桟瓦　Ⅳ-61，62 図〉

平瓦、桟瓦は一般に型を用いて粘土板から整形すると考えられており、SK158 出土瓦も同様だと考えられる。

桟瓦は、一般に製作技法の反映された痕跡が乏しいが、桟部・平部の切込部の整形、具体的には角部の何れにどの様に面取りが施されるかに注目すると、しばしば多様性が認められる。かつて筆者は東京大学本郷構内で検出された溶姫御殿出土桟瓦の分析を進める中で、平部、桟部の角切込に観られる面取りの組み合わせと瓦に記された刻印に一定の関係性が認められることを明らかにした（石井 2008：4）。切込部の面取りは葺き方に関わる特徴ではなく、純粋に生産者の差を反映するものと予想される。

ただ本地点出土桟瓦資料においては切込部の面取り組み合わせは均一であった。ほぼ未調整で、角は切断したのち特に整形せず、とがっている資料が多い。詳細は後述するが、本遺構からは多様な刻印が確認されていることから、この結果は少々意外であった。

(2) 刻印について

出土の傾向

江戸近世遺跡から出土する瓦資料には、しばしば刻印が記されている。刻印の種類は多岐に及び、瓦溜り等からまとまって出土する場合、刻印の種類は数十種類に及ぶことも珍しくない。ただしこうした場合、すべての刻

印が満遍なく出土することは稀で、数種類の刻印だけで過半数を占めることが多い。

SK158 出土瓦には 18 種類の刻印が確認される(1 図)。刻印ごとの出土比率を観ると、瓦の種類ごとに比率が異なる(表 1)。「〇源」は軒桟瓦だけに認められ(1 図 -4、Ⅳ -60 図 -18)、桟瓦、平瓦には観られない。「太」と表記される刻印は 4 種類確認される(太①:1 図 -7、太②:1 図 -8、太③:1 図 -9、太④:1 図 -2、10、23)が、平瓦か桟瓦か判別が難しい破片資料が含まれるものの、刻印ごとの器種の偏りは認められる。また表には挙げなかったが、丸瓦に確認される「丸に二つ引き」の刻印(1 図 -1)は他の器種には認められない。こうした特定の器種に偏るものもあれば、「やまに庄」のように軒桟瓦、桟瓦何れにも確認される刻印もある(1 図 -6、18、25 ～ 29)。ただし桟瓦で 2 割以上、軒桟瓦では 4 割を占めるが、平瓦には 1 点認められるのみであり、器種ごとの偏りは明瞭に認められる。

多様な刻印は、多様な供給先から瓦が持ち込まれたことを意味していると考えられる。集計で観るように、最大でも特定の刻印が 2 割を超えることは無く、独占といえる状況ではなかったようだ。創建時にではなく、その後の修復過程で多様化した可能性も考えなければならないが、耐久年数の長い瓦が新品に次々と差し替えられていくとは考えにくく、補修による差し替えがあったとしても創建時から多様であった可能性は高いといえる。

また器種ごとの比率の差は、生産集団それぞれから比率の異なる瓦が供給されていたことを示しているといえるだろう。一部には特定の器種のみに認められる刻印もあり、専業化していた可能性も検討されねばならない。他遺跡での出土状況を明らかにし、比較検討していく必要があるといえよう。

二重刻印

SK158 出土資料の中には、刻印が二重に押されたものがいくつも確認される。その意味するところは様々であると考えられる。種類ごとに分けて論じる。

＜同じ刻印が二重に押されたもの＞

二重に押されたもののうち、同じ刻印が同じ場所に二重に押されたものが出土している。「令」という刻印が押された資料のうち、前端部の上半に下半分が、下半に上半分が押された資料が確認される(1 図 -24)。最初の刻印が半分途切れてしまったため、改めて押したものと推察される。この資料は刻印としては失敗だが、特に修正されることなくそのまま焼成され、出荷されている。刻印を押すことができるほど可塑性があるならば簡単なナデ調整で修正できそうなものだが、修正されていないことから、刻印は丁寧とはいえない、乱雑な流れ作業でこなされていたと推察されよう。同様の事例は他の刻印でも確認され、「〇太」(1 図 -23)は切られている方の刻印の上半が切れており、上述の「令」と同じ理由から押し直したものと推察される。またこの二重刻印は切られている方が浅めであることから、最初の刻印が浅く不鮮明であったため、改めて押したものと推察される。

＜異なる刻印が二重に押されたもの＞

SK158 からは「長」と「やまに庄」という二種類の刻印が重なり合って押された資料が 5 点出土している(1 図 -25 ～ 29)。何れも「長」を「やまに庄」が切る順序で押されている。またこれ以外の刻印同士が切り合う例は無い。なおこれらとは別に「長」「やまに庄」のみが押された資料が桟瓦、軒桟瓦に多く出土していることから、重なり合った資料は例外的である。

異なる刻印がひとつの瓦に押される例はしばしば確認される(金子 1997 他)が、重なり合って押された刻印は、離して押され何れも判読できるようにした刻印とは分けて考えなければならないだろう。重なり合いの順序からして、これは「長」を押したものの改めて同じ場所に「やまに庄」を押し直したものと推察される。「長」と「やまに庄」の両方を示したいのなら同じ場所には押さないであろう。推察の域を出ないが、誤って押されてしまった刻印を打ち消す意味で、正しく押されるべき刻印を後から押し直したものと推察される。誤りを修正することなく、紛らわしくともそのまま押しているのは、上述した二重刻印と同じく乱雑な流れ作業が行われていたためであろうか。

そして、一つの資料に二つの刻印が押されていたということは、それぞれに異なる刻印が押されるはずであった瓦が、押し間違えるほど近隣に生渇きの状態であったことを示していると考えられる。刻印を押す作業場が共通であった、つまり同じ作業空間で、二つの異なる刻印が行き交っていたことになる。合わせて興味深いのは、「長」が押された軒桟瓦と「やまに庄」が押された軒桟瓦の瓦当文様が同笵関係にあるということである。これは異なる刻印を押された製品が、作業空間だけでなく製作用具も共有していたことを示している。

同じ場所で同じ道具を使っている生産集団は、一見ひとまとまりの集団であるように映る。しかしその内で複数の刻印が用いられているということは、場所と道具を共有する生産集団がさらに異なる規範によって細分化されていたことを示している。「長」も「やまに庄」も一見すると屋号を連想させるが、今回の分析資料においてはひとつの集団内でさらに細分化された小集団を表象し

ていると推察される。

上述の通り、本遺構から検出された平瓦、桟瓦の面取り組み合わせは刻印を超えて均一であり、これは生産者達が同様の技法を用いていたことを示唆し、場所と道具を共有する生産集団のあり方と矛盾しない。かつ刻印が押し直されていることから、この小集団は場所、道具を共有し、同様の技法を用いるにもかかわらず、あるいはそれ故に、互いに違いを主張する立場にあったことを示唆しているといえよう。

2-2. 消費

(1)軒桟瓦、軒平瓦の瓦当文様

SK158から出土した軒平部の瓦当文様は、軒桟瓦が20種類、軒平瓦が1種類、軒蟇羽瓦が1種類、軒平部のみのものが11種類確認される。このうち2種類を除く全てが「江戸式」(加藤1989、金子1996)に分類される。分類毎の出土比率を観ると、加藤晃氏の分類(加藤1989:44-46)の内、Ⅲ Kjが多く4割を占めている(表2)。それ以外はせいぜい一割程度であり、特定の同笵資料が多く観られるという点は同地点出土瓦の特徴と言えるだろう。とはいえ過半数というわけではなく、残り6割は何れも2割未満の少数ばかりである。

一方、「江戸式」以外に分類される瓦当文様2種(Ⅳ-60図-20、21)は、何れも「大坂式」(金子1996：148他)に分類される要素を備えながら「江戸式」の要素も備えており、いわゆる「江戸式」「大坂式」の折衷型(金子1996：155-156)と考えられる。ただしこの折衷型同士は異笵で、デザインも大きく異なる。SK158以外にも、本地点からはSK25、SK45、SU77といった遺構で「江戸式・大坂式折衷」文様を持つ資料が出土しているが、何れも異笵である。軒先を飾る瓦当文様は、全体的には多様なものが混在していたと考えられよう。

(2)規格

瓦の形態、大きさはしばしば瓦の葺き方と関わり、屋根景観を規定する大きな特徴といえる。SK158からは桟瓦、丸瓦、平瓦が出土しており、桟瓦が最も多い。出土比率から想定される屋根景観は桟瓦葺きであり、丸、平瓦が同じ屋根上に使われていたならば屋根の端部などに用いられた補助的なものだと考えられる。

丸瓦は、上述の通り380mm以上あるものと300mm前後のものとに大別される。ただ両者とも全幅や高さに差はなく、同じ屋根上に混ぜて葺くことも可能であるため、両者の差異を持って葺き方が異なる複数種類の屋根が存在したと断定することはできない。

出土した桟瓦資料のうち、全長、全幅、厚み、平部切込、桟部切込が計測できる資料を集成した。そして全幅、厚み、平部切込、桟部切込の計測値をX軸、全長の計測値をY軸として数値の対応関係を散布図にした(表3)。結果、出土資料は一定のまとまりをみせることが明らかになった。何れの資料も全長は250～270mm、全幅は約260～280mm、平部切込長さは20～30mm、桟部切込長さは110～120mmであり、どの部位も個体差は10～20mmの間にまとまる。出土資料に観る規格の斉一性は極めて高いと言えるだろう。なお「江戸式」同士は勿論、「江戸式」「大坂式」折衷型といった瓦当文様の異笵同士でも、確認される限り規格に差は認められない。

なおこうした規格の場合、きき足(葺いた際に屋根上に露出する部分)は、全長－(平部切込長さ＋桟部切込長さ)と計算されることから、

100mm≦きき足≦140mm

になると考えられる。

(3)加工

本地点から出土した瓦資料の中には、一部に打ち割りによる加工の痕跡を残すものが認められた。そしてその多くは、加工によって葺き方を変えようとする意図が認められるものであった。

桟部切込の深さが82mmながら、打ち割って112mmに加工した資料が確認される(Ⅳ-60図-14)。これは供給された瓦には規格のばらつきがあるものの、施工の段階で加工し、形態をそろえることで葺き方を統一させたことを示していると考えられる。また桟瓦には、前端部右角部を打ち欠いて角を落とした資料(Ⅳ-61図-27)が認められた。角を落とす理由は不明だが、特定部位で使用する、ないし特定の機能を果たすための加工なのであろう。例えば隣接して葺く瓦に僅かでも歪みがあることで角が干渉し、上手く葺き重ねることができない際の対処、といった状況が推察できる。

また梅鉢文の瓦当文様を持つ軒丸瓦資料にも、加工されたものが確認される(Ⅳ-59図-9)。筒部の端部を打ち欠いており、筒部の高さを低くすることで瓦当部を沈ませ、軒先の文様の揃いをよくしたのだろうか。

また桟瓦の桟部を打ち欠き、平瓦に加工した資料が出土している(Ⅳ-61図-25)。加工した理由は不明であるが、平瓦が不足したために補ったのだろうか。桟瓦屋根にも両端など一部に平瓦を使用することから、平瓦の需要を受けて製作された可能性は考えられる。桟瓦、平瓦何れも全長は270mm前後と等しいことから、桟部を打ち欠く加工だけで転用可能になるのであろう。

こうした資料はこれまでほとんど報告されることがなかったが、建築現場で瓦が加工される例は少なくなく、

近世においても実際に行われていたことを示す貴重な証拠だと言える。

3. まとめ

一括廃棄と推察される遺構から出土する瓦資料は、文様、規格といった点でしばしば高い斉一性を持つ。これは出土資料が同時期に同じ建物、あるいは近隣の建物に伴っていたことを示唆しているといえるだろう。SK158出土資料に観る規格性や、瓦当文様の偏りといった現象は、これら出土資料が同時期に限られた建物の屋根に用いられていたことを示唆していると考えられる。

桟瓦の持つ諸特徴のうち、屋根上での葺き方に関する特徴として、桟瓦の寸法と角部に設けられる切込の深さが挙げられるだろう。桟瓦は葺き足が少ないことから、形のゆがみや寸法の違いが大きく影響することとなる。筆者はかつて、全国の遺跡報告書から全長と平部切込の計測値が判明する桟瓦資料を集成し、「江戸式」「大坂式」「東海式」（金子 1996 他）に分類される桟瓦の規格がそれぞれ異なることを述べた（石井 2008：5-6）。具体的には

・江戸式軒桟瓦と、伴う桟瓦：全長：約 260mm 平部切込長：約 30mm 桟部切込長：約 80mm
・大坂式軒桟瓦と、伴う桟瓦：全長：約 310mm 平部切込長：約 40mm 桟部切込長：約 40mm
・東海式軒桟瓦と、伴う桟瓦：全長：約 280mm 平部切込長：約 45mm 桟部切込長：約 40mm

しかし先に出土瓦の規格の項で述べた通り、本地点では出土資料の規格は何れも桟部切込の長い「江戸式」に分類されることが明らかになった。中には、上述した通り、桟部切込の深さが 82mm ながら、打ち割って 112mm に加工した資料も確認される。桟部切込の深さが 82mm 規格の「江戸式」桟瓦は他の遺跡では一般的であり、ここにも供給されていたものの、30mm（一寸）深くしなければ他の桟瓦と規格が合わず、葺くことができなかったことを示す例といえよう。桟瓦葺きの厳密さをうかがわせる。

「江戸式」「大坂式」折衷型の瓦当文様を持つ資料が出土しているが完形資料は無く、全長や桟部切込の長さについては不明である。またこれら折衷型だけで屋根を葺けるほど大量に出土しているわけではなく、大多数の「江戸式」と混在して出土している。瓦当文様の違いはあまり意識されず、「江戸式」とともに屋根に葺かれていた可能性を考えなければならないだろう。ならば、「大坂式」の規格で作られた筒部資料が確認されていないことと合わせ、こうした折衷的要素を持つ資料は「江戸式」の規格で生産されていた可能性を考慮すべきかもしれない。何れにせよ、今後の資料蓄積を待って取り組むべき課題である。

4、おわりに

瓦の実見に基づき、その意味するところを考察してきた。刻印が瓦生産の何を語るのか、加工された瓦の具体的な使用法等、本稿で述べたいくつもの課題は、今後の資料蓄積と、目的意識のある調査検討を経て明らかにされていくことだろう。本稿は近世瓦研究の小さな一歩に過ぎない。

【引用・参考文献】

石井龍太　2008「溶姫御殿と幕末近世瓦～瓦文化と近世アジア世界～」『江戸遺跡研究会会報』No.112：2-8　江戸遺跡研究会

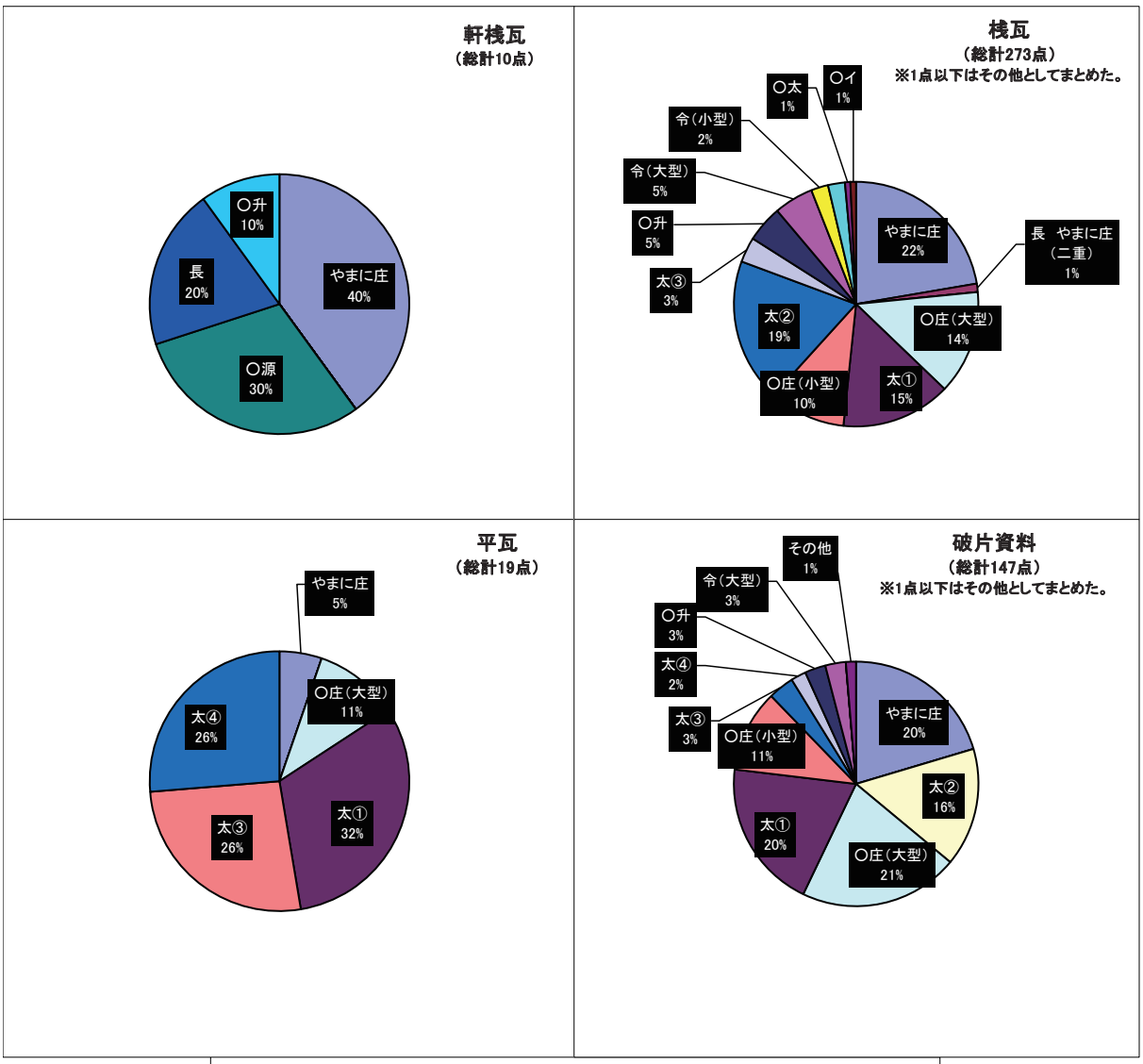
加藤　晃　1989「江戸時代の瓦における江戸式の展開」『史学研究集録』第 14 号：43-61　國學院大學日本史学専攻大学院会

加藤　晃　1992「江戸瓦の変遷　－加賀藩本郷邸出土の瓦について－」『國學院雑誌』第九十三巻第十二号：78-97　國學院大學

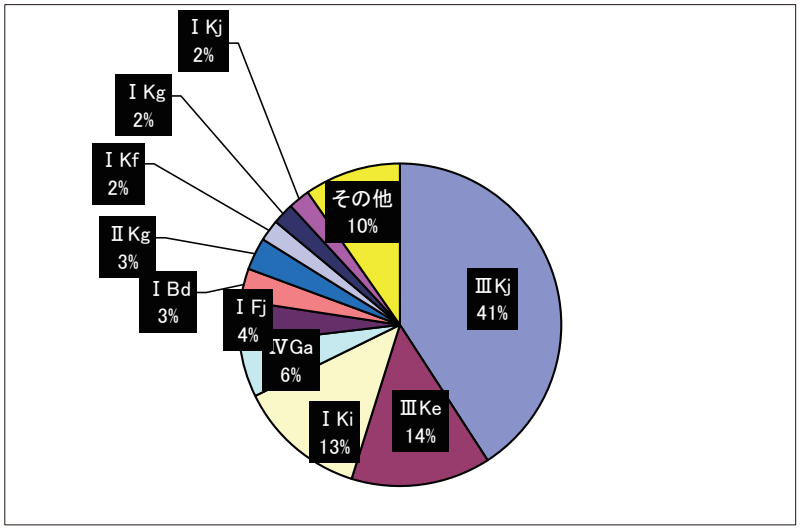
金子　智　1996「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」『古代』第 101 号：144-160　早稲田大学考古学会

金子　智　1997「近世瓦の刻印」『早稲田大学大学院文学研究科紀要第 4 分冊　日本史東洋史西洋史考古学』43 巻：77-87　早稲田大学大学院文学研究科

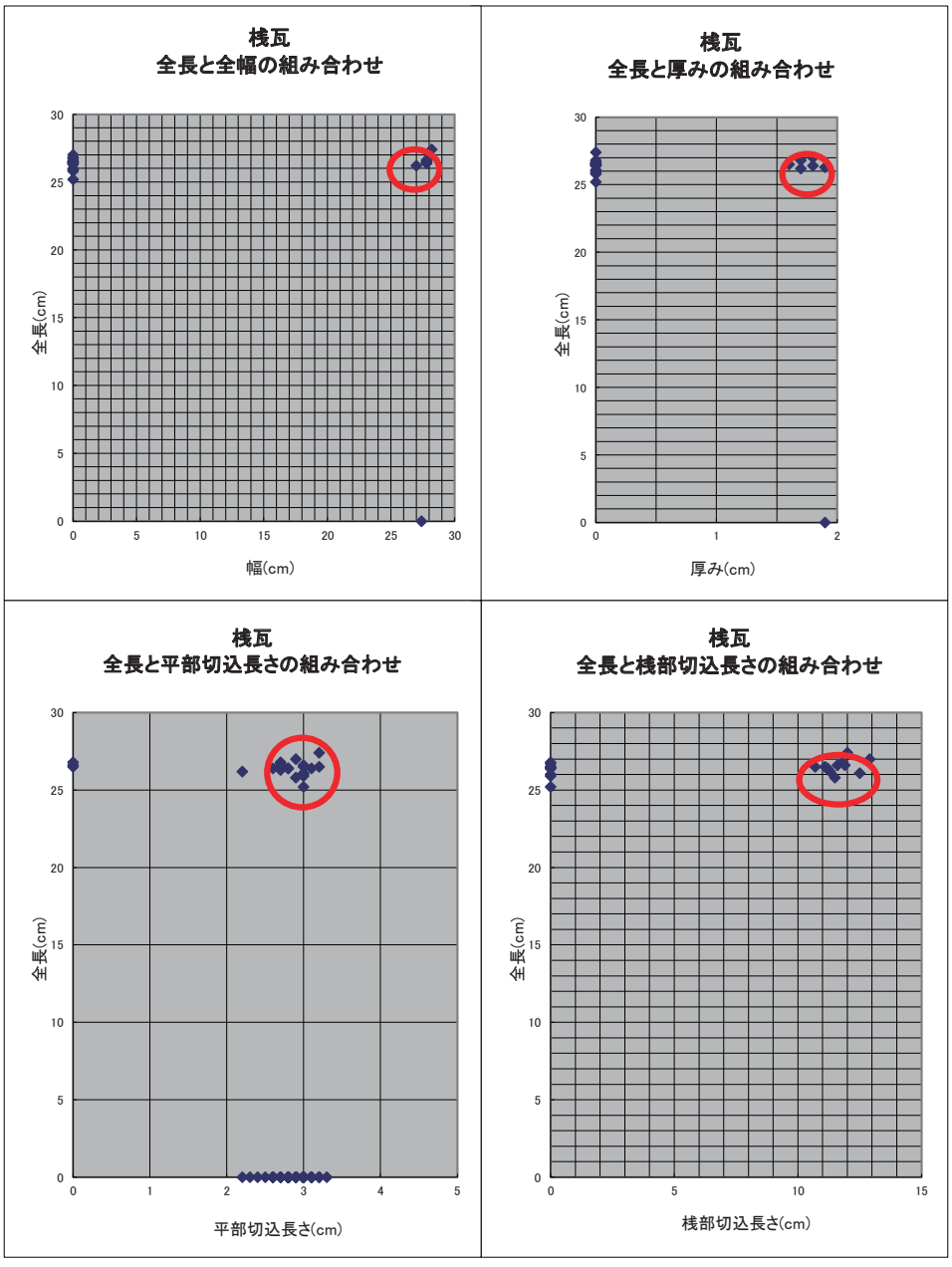
1図　出土瓦にみる刻印（1.丸瓦　2～3、平瓦　4～6、軒桟瓦　7～21、桟瓦　22～29、平瓦ないし桟瓦の二重刻印）



1表　出土瓦の刻印別出土比率



２表　軒桟瓦　総点数:93 点（※1 点以下は「その他」としてまとめた。）



３表　桟瓦規格計測表

法学政治学系総合教育棟地点出土動物遺体

阿部常樹・高橋怜土

はじめに

本調査地点の動物遺体は、現場にて調査者が目視できたものを任意で取り上げたものである（ピックアップ法）。結果、36 群の動物遺体が同定された。内訳は、貝類が 17 種、魚類が 9 群、鳥類が 5 群、哺乳類が 5 種であった（1・10 表）。以上のカテゴリーごとに報告をおこなう。なお、整理作業は阿部と高橋、そして、市川ここね（立正大学学生）でおこない、報告は、貝類と哺乳類を阿部が、魚類と鳥類を高橋がそれぞれ執筆した。

1．分析方法

1-1．貝類

貝種組成は最小個体数で提示する。なお、計数方法は以下のとおりである。巻貝類は基本的に殻高が 2 分の 1 以上残存している資料を計数対象とした。しかし、アワビ類など殻口部分が広くそれによって形状が笠・皿形の巻貝類は、殻頂部分が残存している資料を計数対象とした。二枚貝類は、殻頂部分の残存している資料を計数対象とし、それらを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数した。そして、そのうち多いほうを最小個体数とした。以上の計数対象以外の資料は、「破片」として一括して扱った。なお、各サンプルの分類群内において、計数対象資料が残存せず「破片」のみである場合は、一括して 1 個体として計数をおこなった。

1-2．脊椎動物

同定に際して、阿部所蔵の現生標本を用いた。また、松井（2008）、西本（2002・2003・2005 ～ 2009）なども参考にした。

まず、綱より下位まで同定可能な部位を「同定対象資料」として抽出した。綱より下位の同定が困難な部位は「同定対象外資料」として対象からはずした。なお、同定対象外資料には計数困難な細片も含まれており、表中では“○”もしくは“◎”、文中では“＋ α”と表記し、その上で計数はおこなわなかった。なお、破片数が比較的多い場合、“◎”を用いている。また、それ以外の「同定対象資料」の内、同定するための特徴的な部分が欠損しているために同定することのできなかった資料は「同定不可」と記載した。さらに、一致する現生標本が手許になく、調査期間の関係などから同定に到らなかった資料は「未同定」と記載した。一連の作業を経て、綱より下位まで同定できたものを「同定資料」とした。組成は破片数で提示する。なお、魚類の分析方法は樋泉（1999）に準拠する。

鳥類及び哺乳類のサイズ計測定義は、Driesch（1976）に基づく。

イヌの体高推定式は、山内（1958）を、イヌの齢査定は、歯の萌出時期に関して森（1930）、四肢骨骨端の閉鎖時期に関して浅利（2003）を用いた。

2．分析結果

2-1．貝類（2 表，PL.1 ～ 3）

17 種 656 個体が出土している。最も多いのはアカガイで 243 個体出土し、全体の 37.0％を占めている。次いで、ハマグリ（103 個体・15.7％）とサザエ（85 個体・13.0％）が多い。さらに、ヤマトシジミ（66 個体・10.1％）とマガキ（61 個体・9.3％）が比較的多く出土している。その他に、アサリ（30 個体・4.6％）、アカニシ（23 個体・3.5％）、サルボウ（8 個体・1.2％）、マダカアワビ、バイ（各 7 個体・1.1％）、メガイアワビ、クロアワビ、ナミマガシワ、ミルクイ（各 5 個体・0.8％）、イガイ、シオフキ、カガミガイ（各 1 個体・0.2％）が出土している。以下、遺構ごとに組成を概観する。ハマグリに関してはサイズによって料理の使い分け（桜井 1986）や、採集場所の違い（阿部 2003）が指摘されている。具体的に、殻長 50㎜を基準にそれ未満を「中小型」、以上を「大型」としている。そこで、以下、遺構ごとにそれらの有無や内包する割合などを定性的に記載した。

SK25　12 種 95 個体が出土している。最も多いのはヤマトシジミで 50 個体出土し、全体の 52.6％を占める。次いで、ハマグリが多く 23 個体出土し、24.2％を占める。その他に、サザエ（9 個体・9.5％）、マダカアワビ（3 個体・3.2％）、ミルクイ、アサリ（各 2 個体・2.1％）、メガイアワビ、クロアワビ、カガミガイ（各 1 個体・1.1％）、アカガイ（左殻 1 点・1.1％）、イガイ（右殻 1 点・1.1％）が出土している。なお、イガイとカガミガイは本遺構からしか出土していない。ハマグリは中小型と大型が混在している。

SD31　10 種 37 個体が出土している。最も多いのはマ

ガキで 18 個体出土し、全体の 48.6％を占める。次いで、サザエが多く 7 個体出土し、18.9％を占める。その他に、ナミマガシワ（左殻 3 点･8.1％）、アカニシ（2 個体･5.4％）、サルボウ（左殻 2 点･5.4％）、メガイアワビ、クロアワビ、マダカアワビ（各 1 個体・2.7％）、アカガイ（左殻 1 点・2.7％）、アサリ（右殻 1 点・2.7％）が出土している。

SE33　12 種 380 個体が出土している。最も多いのはアカガイで 236 個体出土し、全体の 62.1％を占める。なお、本調査地点で出土しているアカガイの 97％が本遺構に含まれる。次いで、ハマグリが多く 54 個体出土し、14.2％を占める。さらにマガキ（42 個体・11.1％）とサザエ（20 個体・5.3％）が比較的多い。その他に、ヤマトシジミ（10 個体･2.6％）、アカニシ（7 個体･1.8％）、アサリ（右殻 3 点・0.8％）、ナミマガシワ、サルボウ（各左殻 2 点・0.5％）、メガイアワビ（2 個体・0.5％）、クロアワビ、マダカアワビ（各 1 個体・0.3％）が出土している。ナミマガシワはカキ礁に着生する種類であることから、マガキを採集した際に混獲されたものと推測される。アサリも右殻 3 点と極めて少ないことから、カキ礁付近に漂着していたものでマガキを採集した際に混獲されたものの可能性もあろう。ハマグリは中小型と大型が混在している。

SU77　4 種 39 個体が出土している。最も多いのはアサリで 27 個体出土し、全体の 69.2％を占める。その他に、ハマグリ（9 個体・23.1％）、アカガイ（左殻 2 点・5.1％）、シオフキ（1 個体・2.6％）が出土している。なお、シオフキは本遺構からしか出土していない。ハマグリは中小型のみで構成されている。

SK92　10 種 41 個体が出土している。最も多いのはハマグリで 13 個体出土し、全体の 31.7％を占める。次いで、ヤマトシジミが 8 個体出土し、19.5％を占める。その他に、アカニシ、バイ、アカガイ（各 4 個体・9.8％）、サザエ（3 個体・7.3％）、クロアワビ（2 個体・4.9％）、メガイアワビ、マダカアワビ（各 1 個体･2.4％）、ミルクイ（左殻 1 点･2.4％）が出土している。ハマグリは中小型も含まれるものの、ほとんど大型のもので構成されている。

SU381　5 種 40 個体が出土している。最も多いのはサザエで 24 個体出土し、全体の 60.0％を占める。その他に、ハマグリ（9 個体・22.5％）、アカニシ、アサリ（各 3 個体・7.5％）、マダカアワビ（1 個体・2.5％）が出土している。ハマグリは大型のもののみで構成されている。

2-2. 魚類（3 表，PL.4・5）

調査地点全体で魚類遺体は、38 点＋ α 出土した。

そのうち、同定対象外とした資料は、9 点＋ α で、残りの 29 点が同定対象資料として抽出された。また、同定対象資料の中でも、同定不可とした資料は 4 点で、残りの 25 点が綱より下位まで同定することができた（同定資料）。なお、25 点中 15 点は、SU381 から出土している。

分析の結果、9 群が含まれていた。その内訳で最も多いのは、タイ科（マダイ、マダイ亜科含む）が 8 点出土しており、全体の 31% を占める。次いで、タラ科（マダラ含む）が 5 点出土しており、全体の 19% を占める。その他に、スズキ属（3 点・11%）、ヒラメ、フグ科、フサカサゴ科、カツオ（各 2 点･8%）、マグロ属、ボラ科（各 1 点･4%）が出土している。

なお、タラ科（マダラ含む）とスズキ属、フサカサゴ科、ボラ科は SU381 のみから出土している。

同定資料のうち、ヒラメ、フサカサゴ科、タイ科（マダイ含む）の 3 群には、刃物によると思われる切断面がみられる。切断面がみられる部位は、前頭骨、歯骨、方骨、主鰓蓋骨、腹椎、尾椎である。特に、SK121 出土のヒラメの腹椎は、椎体右側面の後側下部をより深く切断しており、五枚おろしや、おろした後に「あら」として使用するために椎体部分を分割した際に生じたものと推測される（阿部・畑山 2017）。

また、SU381 出土のタイ科の主鰓蓋骨と尾椎は、切断により上半分が欠損しており、いずれも身をおろした際のものと考えられる。

2-3. 鳥類（4 表，PL.6）

調査地点全体で鳥類遺体は、18 点出土した。全て同定対象資料である。同定対象資料の中でも、同定不可とした資料は 2 点で、残りの 16 点は綱より下位まで同定することができた（同定資料）。

分析の結果、5 群が含まれていた。その内訳で最も多いのは、カモ亜科で 7 点出土しており、全体の 44% を占める。次いで、キジ科（4 点・25%）、ガン族（3 点・15%）、ニワトリ？、ツル科（各 1 点･6%）が出土している。

なお、SK92 出土のカモ亜科の上腕骨 2 点は、同一個体のものである可能性が推測される。

そして、SK25 出土のツル科の右上腕骨（近位部分残存）には、近遠位 2 箇所に切断面がみられる。近位の切断面は、ツル科の体部から翼部を切り離した際のものと考えられる。それに対して遠位の切断面は、骨幹部分を骨細工の材料に用いるために切断した際に生じたものと推測される。また、尾側面（正面）の中位には切痕に加えて穿孔もみられる。残存部分の中位にみられる切痕は、遠位の切断面の前に骨幹部分の切断を試みた際のものと推測される。

2-4. 哺乳類（5 ～ 9 表，PL7 ～ 14）

調査地点全体で哺乳類遺体は、472 点＋ α が出土した。その内、同定対象外とした資料は、31 点＋ α で、残りの 441 点が同定対象資料として抽出された。また、同定対象資料の中でも、同定不可とした資料は 12 点で、残りの 429 点が綱より下位まで同定することができた（同定資料）。

分析の結果、5 種が含まれていた。その内訳で最も多いのは、イヌで 351 点出土しており、全体の 82％を占める。次いで、ネコが多く 71 点出土し、16.6％を占める。その他に、シカ 5 点（1.2％）、ヒト、ウマ（各 1 点）が出土している。なお、シカは全て角で人為的加工がみられる。また、全て SK25 から出土している。ヒトは SK108 から左・下顎第 1 大臼歯、ウマは SX119 から右・上顎第 1 後臼歯が出土しているのみである。

イヌとネコは、全身、もしくはその一部であるが、同一個体のもの、もしくは推定されるものがまとまって出土している。そこで、最小個体数でも組成を示す。調査地点全体では、21 体分が出土している。最も多いのは、イヌで 12 体分出土し、全体の 57.1％を占める。次いで、シカが多く 5 体分で 9.5% を占める。その他に、ネコ（2 体分･9.5％）、ヒト、ウマ（1 体分･4.8％）が出土している。

以下、5 点以上出土している遺構に限定して哺乳類の出土状況を概観する。

SK25（5 表，PL.7 ～ 9）：本遺構からは 100 点が出土している。その内、2 点が同定対象外、7 点が同定不可であった。同定資料 91 点の内、イヌが 16 点で 3 体分、ネコが 70 点で 2 体分、そして人為的加工のみられる鹿角が 5 点である。

イヌは、頭蓋骨から第 3 頸椎までと右寛骨、踵骨、第 2 ～ 4 中足骨が同一個体と考えられる成獣（A）、左右下顎骨を同一個体とする成獣（B）、そして、骨端部分の閉鎖（癒合）の終わっていない左橈骨と左大腿骨を同一個体とする幼獣（C）に分かれる。

A は、右寛骨を除いて、全ての部位がほぼ完存である。頭蓋骨の形状はスピッツなどのスタンダードな犬種のものに近似している（芝田 2019 を参照）。左下顎骨の形状も同様であるが、下顎底に対して、第 2 後臼歯歯槽付近から下顎枝までがやや強く上に傾いている。頭蓋骨と下顎骨の全長から体高は 48cm～ 50cmと推定される。現生での分類では中型で、日本犬種では紀州（46 ～ 52cm）、北海道（46 ～ 56cm）、甲斐（46 ～ 58cm）がそれにあたる。

B は、左右下顎骨である。永久歯の萌出は完了している。サイズはやや小さい。第 1 後臼歯歯槽から後側が上に傾く。そのため、歯列において、第 4 後臼歯舌側後半分と第 1 後臼歯頬側前端が重なる。さらに、下顎体は頬側にやや膨らみ、底面に対して上面が頬側にやや広がっている。以上の形態的特徴は、ポメラニアンやチャウチャウなど吻部の短い、所謂丸顔の犬種にみられる（芝田 2019 を参照）。

ネコは成獣 2 体分が出土している。1 体（D）はほぼ全身が出土している。残存する尾椎から長尾であったことが推測される。もう 1 体（E）は右橈骨と右尺骨のみが出土している。

鹿角は 5 点出土している。4 点（F・H ～ J）は分岐部分で、1 点（G）は第 1 分枝部分である。前者は道具の材料に用いられる主幹・分枝部分を切り落とした際、後者は道具として分枝部分を加工する段階で長さなどの調整のために切り落としたものと推測される。ほとんどのものは、シカの死体から切り離す、もしくは落角していたものを拾うなどして手に入れたものを用いたものと推測されるが、資料 J のみ由来が異なる。資料 J の表面は、他の鹿角資料に比べても摩耗が顕著である。また、近位断面には釘の一部と思われる金属が差し込まれている。おそらく、他の道具（刀掛けなど）に用いていたものを、別の道具を作成する際に転用したものと推測される。

SK45（6 表，PL.10）：本遺構からは 43 点＋ α が出土している。“＋ α ”としたものが同定対象外にあたり、それ以外は、イヌ 1 体分にあたる。イヌはほぼ全身の部位が出土している。同定対象外資料は破片資料であるが、おそらくイヌの一部であろう。

上顎・下顎骨共に全て永久歯の萌出が完了している。右下顎骨全長（2）から体高 47cm、右大腿骨の全長から体高 48cmとそれぞれ推定された。現生での分類では中型で、日本犬種では紀州（46 ～ 52cm）、北海道（46 ～ 56cm）、甲斐（46 ～ 58cm）がそれにあたる。

下顎骨の全体のプロポーションは、SK25 の成獣 A のものと極めて近似している。なお、咬筋窩はやや深い。また、犬歯の前縁と第 3 切歯歯冠全体が摩耗し象牙質が露出している。同様に近世江戸遺跡から出土するイヌ遺体のなかには下顎犬歯の前方において抉ったような溝状の縦の摩耗がみられるものがある（猪熊・阿部 2020）。江戸市中で生活していたイヌは、人の食べ残しなどを食していたことが想定される。人の食べ残しであれば、硬いものや嚙み切ることが難しいものは少なく、結果、顎が退化し、噛み合わせの悪い歯列になったものと推測される（阿部 2023）。

右橈骨は前位に縦に溝がみられ、後位の粗面も非常に発達しており、筋肉質な個体であったものと推測される。

右踵骨の関節部分の背面右側に骨増殖がみられる。右

足首に炎症などがあったことが推測される。

SK61・121 ／ SK121（7表，PL.11・12）：本遺構群からはSK61・121として9点、SK121として27点で合計36点が出土している。すべて、イヌのものであり、後述するが、SK61とSK121あわせて最小で2体分が出土している。

まず、SK121からはイヌ2体分が出土している。少なくとも1体分は、全ての部位が出土しているわけではないが､全身から偏りなく出土している。重複(2点出土)している部位は、頭蓋骨、第5頸椎、第6頸椎である。なお、上顎骨部分は1体分であり、2体分出ている頭頂骨周辺との対応関係は不明である。2体分出土している頭頂骨周辺部分は、矢状及び冠状縫合の癒合が完了しているものと完了していないものとなっている。サイズはほぼ同じである。また、外矢状稜が未発達など形態的な特徴も似ている。第5頸椎と第6頸椎は共に、前後椎頭が未癒合であり、サイズもほぼ同じである。以上からこの2体は、齢差は多少あるものの、似たような形態のものと推測される。

上顎及び下顎骨は、全て永久歯が萌出を完了していることから生後7か月以降と推測される。四肢骨では左大腿骨が、近位端部が欠損しているものの、遠位端部が残存しており、端部は未癒合である。なお、遠位骨端線は生後6か月から12か月の間に消滅するとされている。これらが同一個体のものであるならば少なくとも1体は生後7か月から12か月であることが推測される。

第6頸椎1点の後側椎頭に人為的傷がみられる。この傷は、横位についており、さらにキズを境に下側がわずかに出っ張るように段差が認められる。上面から観察すると、その傷と一致するように、右後関節突起がわずかに切断されている。第6と第7頸椎の椎間に上面から刃物を入れた際のものと推測される。また、きれいに椎間で切断されていることから、刀の試し切りなどの結果ではなく、死後に解体などを目的におこなわれたことが推測される。例えば、食べられた可能性も想起される。なお、頭蓋骨(A)の右頭頂骨に1か所であるが刀傷がみられる。

SK61・121としてさらに1体分が取り上げられている。出土部位は頭蓋骨の内、左上顎骨破片(犬歯後側～第2前臼歯歯槽)、右頬骨突起・後頭骨付近破片、そして、左下顎骨、環椎、軸椎、左肩甲骨、左橈骨など前肢より前に偏りがみられる。これらの出土部位を、SK121として取り上げられた各部位と併せても最小で3体以上にならないことから、SK121で出土している2体と同一個体であると推測される。特に、左下顎骨は、SK121より出土している右下顎骨とサイズ及び形状共に極めて近似している。さらに、左下顎骨は、第1後臼歯歯槽にあたる下顎体頬側に2条の重複する人為的な傷が横位にみられ、SK121より出土している頭蓋骨や第6頸椎に人為的な傷がみられる点との共通性を指摘できる。なお、左上顎骨と左下顎骨は共に永久歯の萌出が完了している。

右下顎骨全長(2)から体高44cmと推定された。現生での分類では小型であるが、より中型に近い。日本犬種では小型の柴(36～40cm)より大きく、中型の紀州(46～52cm)、北海道(46～56cm)、甲斐(46～58cm)よりも小さい。

SP151（8表，PL.13・14）：本遺構からは276点が出土している。その内、28点が同定対象外である。それ以外は、イヌ1体分にあたる。部位もほぼ全身のものが出土している。同定対象外資料は破片資料であるが、おそらくイヌの一部であろう。

下顎骨の歯の萌出状況からは、生後4か月と推測される。四肢骨の骨端で癒合しているのは、左右の尺骨遠位端であるが骨端線は残る。遠位骨端線が消滅するのは、生後6か月～12か月とされている。また、寛骨は腸骨、坐骨、恥骨に分離した状態であり、これらの癒合時期は生後4～6か月とされている。四肢骨の癒合時期からも生後4か月程と推測される。

【参考文献】

浅利昌男　2003『新・犬と猫の解剖セミナー―基礎と臨床―』Inter Zoo

阿部常樹　2003「近世遺跡出土の貝類遺体とその採集方法について」『奈和』第41号　奈和同人会

2023「納戸町遺跡出土動物遺体」『新宿区納戸町遺跡Ⅲ』公益財団法人東京都教育支援機構　東京都埋蔵文化財センター

阿部常樹・畑山智史 2017「第八章 食生活」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ』東京大学総合研究博物館

猪熊花那子・阿部常樹　2020「四谷一丁目遺跡出土の爬虫類・哺乳類遺体」『新宿区四谷一丁目遺跡　第3分冊　史料・分析編』公益財団法人　東京都スポーツ文化事業団　東京都埋蔵文化財センター

桜井準也　1986「貝類･魚類の大きさとその分布について」『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会

芝田英行　2019『イヌの頭蓋骨図鑑―43品種の形態と各部計測値―』NextPublishing Authors Press

樋泉岳二　1999「魚類」西本豊弘･松井章編『考古学と動物学』

同成社
西本豊弘　2002「哺乳動物骨格図集(1)」『動物考古学』第 19 号　動物考古学研究会
2003「哺乳動物骨格図集(2)」『動物考古学』第 20 号　動物考古学研究会
2005「動物骨格図集(3)」『動物考古学』第 22 号　動物考古学研究会
2006「動物骨格図集(4)」『動物考古学』第 23 号　動物考古学研究会
2007「動物骨格図集(5)」『動物考古学』第 24 号　動物考古学研究会
2008「動物骨格図集(6)」『動物考古学』第 25 号　動物考古学研究会
2009「動物骨格図集(7)」『動物考古学』第 29 号　動物考古学研究会
松井　章　2008『動物考古学』京都大学学術出版会
森　忠男　1930「本邦産雑種成犬ニ於ケル歯牙形態及ビ其ノ二代歯列発生ノ時期ニ就テ」『日本歯科学会誌』23
山内忠平　1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第 7 号　鹿児島大学農学部
Driesch(1976) A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology

1表　法学政治学系総合教育棟地点出土動物遺体種名表

軟体動物門　Phylum MOLLUSCA
- 腹足綱 Class Gastropoda
  - 古腹足目 Order Vetigastropda
    - ミミガイ科 Family Haliotidae
      - メガイアワビ *Halitotis gigantea*
      - マダカアワビ　*Haliotis madaka*
      - クロアワビ *Haliotis discus discus*
    - サザエ科 Family Turbinidae
      - サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*
  - 新腹足目 Order Neogastropoda
    - アクキガイ科 Family Muricidae
      - アカニシ *Rapana venosa*
    - エゾバイ科 Family Buccinidae
      - バイ *Babyronia japonica*
- 二枚貝綱 Class Bivalvia
  - フネガイ目　Order Arcida
    - フネガイ科 Family Arcidae
      - アカガイ *Scapharca broughtonii*
      - サルボウ *Scapharca kagoshimensis*
  - イガイ目 Order Mytiloida
    - イガイ科 Family Mytilidae
      - イガイ *Mytilus corsucus*
  - カキ目 Order Ostreoida
    - ナミマガシワ科 Family Anomiidae
      - ナミマガシワ *Anomia chinensis*
    - イタボガキ科 Family Ostreidae
      - マガキ *Crassostrea gigas*
  - マルスダレガイ目 Order Veneroida
    - バカガイ科 Family Mactridae
      - シオフキガイ *Mactra veneriformis*
      - ミルクイ　*Tresus keenae*
    - シジミ科 Family Cobicalidae
      - ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*
    - マルスダレガイ科 Family Veneridae
      - カガミガイ *Phacosoma japonicum*
      - アサリ *Ruditapes philippinarum*
      - ハマグリ　*Meretrix lusoria*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA
- 硬骨魚綱　Class Osteihthyes
  - タラ目 Order Gadiformes
    - タラ科 Family Gadidae
      - マダラ *Gadus macrocephalus*
  - カサゴ目 Order Scorpaeniformes
    - フサカサゴ科 Family Scorpaenidae
      - 属種不明 gen. et sp. indet.
  - スズキ目 Order Perciformes
    - スズキ科 Family Serranidae
      - スズキ属 *Lateolabrax* sp.
    - タイ科 Family Sparidae
      - マダイ亜科 Subfamily Pagrinae
        - マダイ *Pagrus major*
    - サバ科 Family Scombridae
      - カツオ　*Katsuwonus pelamis*
      - マグロ属 *Thunnus* sp.
  - ボラ目 Order Mugiliformes
    - ボラ科 Family Mugilida
      - 属種不明 gen. et sp. indet.
  - カレイ目 Order Pleuronectiformes
    - ヒラメ科　Family　Paralichthyidae
      - ヒラメ　*Paralichtys　olivaceus*
  - フグ目 Order Tetraodontiformes
    - フグ科　Family Tetraodonidae
      - 属種不明 gen. et sp. indet.
- 鳥綱　Class　Aves
  - キジ目　Order Galliformes
    - キジ科　Family Phasianidae
      - キジ *Phasianus versicolor*
      - ニワトリ？　*Gallus gallus var.domesticus ?*
      - 属種不明 gen. et sp. indet.
  - カモ目　Order Anseriformes
    - カモ科　Family Anatidae
      - ガン族 Tribe Anserini
        - 属種不明 gen. et sp. indet.
      - カモ亜科 Subfamily Anatinae
        - 属種不明 gen. et sp. indet.
  - ツル目　Order Gruiformes
    - ツル科　Family Gruiae
      - 属種不明 gen. et sp. indet.
- 哺乳綱　Class　Mammalia
  - 霊長目　Order Primate
    - ヒト科　Family Hominidae
      - ヒト　*Homo sapiens*
  - 食肉目　Order Carnivora
    - ネコ科　Family Felidae
      - イエネコ　*Felis silvestris catus*
    - イヌ科　Family Canidae
      - イヌ　*Canis familiaris*
  - 偶蹄目　Order Artiodactyla
    - シカ科 Family Cervidae
      - ニホンジカ *Cervus nippon*
  - 奇蹄目　Order Perissodactyla
    - ウマ科　Family Equidae
      - ウマ　*Equus caballus*

2表　出土貝類遺体組成表

遺構	層位など	メガイアワビ	クロアワビ	マダカアワビ	サザエ		アカニシ	バイ	アカガイ		サルボウ		イガイ	ナミマガシワ	マガキ		シオフキ		ミルクイ		ヤマトシジミ		カガミガイ		アサリ		ハマグリ		最小個体数
					殻	蓋			左	右	左	右	右	左	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
SK25		1	1	3	3	9	1		1				1						1	2	45	50	1	1	1	2	23	17	95
SK22					1																								1
SD31		1	1	1	7	1	2		1		2			3	17	18									1			37
SE33	一括	1	1		11	2	3		84	96	2			2	17	41					4	3				3	26	26	191
SE33	1層								1	2					5	1													7
SE33	5層	1		1	9	3	4		148	138											6	5					20	28	197
SE33	【全体】	2	1	1	20	5	7		233	236	2			2	22	42					10	8				3	46	54	380
SK42	上下層一括				2																								2
SK42	南側上層				1																								1
SK42	南側下層				1																								1
SK42	【全体】				4																								4
SE46					1		1																						2
SK47					1																								1
SK58					1			2	F																				4
SE60					4	1														1									5
SU77									2								1	1							27	16	5	9	39
SK92		1	2	1	3	2	4	4	4	3									1		4	8					10	13	41
SK121					1																								1
SK140					1		1																						2
SK143					2																								2
SK158									1																				1
SK168					4		1																						5
SK191					3																								3
SU381				1	24		3																		1	3	3	9	40
SE489									1	1																			1
1層																				1									1
表土					4		3	1			4	3								1					1				14
攪乱					1	1									1	1					1							1	4
地点全体		5	5	7	85	19	23	7	243	240	8	3	1	5	40	61	1	1	2	5	60	66	1	1	30	25	87	103	
最小個体数		5	5	7	85		23	7	243		8		1	5	61		1		5		66		1		30		103		656
出土率		0.8%	0.8%	1.1%	13.0%		3.5%	1.1%	37.0%		1.2%		0.2%	0.8%	9.3%		0.2%		0.8%		10.1%		0.2%		4.6%		15.7%		

F:破片のみ(計数対象資料なし)

3表　出土魚類遺体一覧

遺構名	層位等	綱	綱より下位	部位	左右	数	備考
SK25		硬骨魚	タイ科	尾椎		1	椎体部分にイヌの咬痕あり。
SK25		硬骨魚	ヒラメ	前鰓蓋骨	左	1	
SK25		硬骨魚	フグ科	前上顎骨	右	1	
SK25		硬骨魚	フグ科	前上顎骨	右	1	
SK25		硬骨魚	同定不可	擬鎖骨		1	下半部のみ
SK25		硬骨魚	同定対象外	—		3	破片2，肋骨1
SK45		硬骨魚	マダイ	前頭骨		1	残存状態はあまりよくない。
SK87		硬骨魚	マダイ亜科	歯骨	左	1	前端欠損。
SK108		硬骨魚	カツオ	尾椎		1	
SK121		硬骨魚	ヒラメ	腹椎		1	右側面に切断面あり。特に後側下部をより深く切断。前側椎頭にもわずかに切断痕が見られる。
SK191		硬骨魚	マダイ亜科	歯骨	左	1	マダイ
SP245		硬骨魚	同定不可	椎骨		1	マグロ属？尾椎？
SU366		硬骨魚	マダイ	前頭骨		○	破片資料
SU381		硬骨魚	タラ科	副蝶形骨		1	
SU381		硬骨魚	タラ科	後側頭骨	右	1	
SU381		硬骨魚	タラ科	主上顎骨	右	1	関節の一部と遠位部分が欠損。マダラ標本近似。
SU381		硬骨魚	タラ科	角骨	右	1	
SU381		硬骨魚	マダラ	腹椎		1	
SU381		硬骨魚	フサカサゴ科	歯骨	右	1	関節部分(先端)が切断。サイズは大きめ。
SU381		硬骨魚	フサカサゴ科	方骨	右	1	遠位に切断面有
SU381		硬骨魚	スズキ属	主上顎骨	右	1	
SU381		硬骨魚	スズキ属	方骨	右	1	スズキ現生標本より大きめ。
SU381		硬骨魚	スズキ属？	前鰓蓋骨？	左	1	
SU381		硬骨魚	マダイ	前頭骨		1	右側残存。矢上方向に切断。
SU381		硬骨魚	タイ科	主鰓蓋骨	右	1	切断により上半分が欠損。
SU381		硬骨魚	タイ科	尾椎		1	切断により上半分が欠損。両側面の前後にわずかに切断面あり。
SU381		硬骨魚	ボラ科	主鰓蓋骨	左	1	関節周辺のみ
SU381		硬骨魚	カツオ	尾椎		1	
SU381		硬骨魚	同定不可	主上顎骨	右	1	関節部分が欠損。フサカサゴ科？
SU381		硬骨魚	同定不可	擬鎖骨	左	1	
SU381		硬骨魚	同定対象外	間鰓蓋骨	左	1	
SU381		硬骨魚	同定対象外	上擬鎖骨	左	1	
SU381		硬骨魚	同定対象外	—		1	破片資料
SU381		硬骨魚	同定対象外			3	破片資料
SU381		硬骨魚	同定対象外	—		○	破片資料
—	1層	硬骨魚	マグロ属	尾椎		1	
合計						38	

4表　出土鳥類遺体一覧

遺構名	綱より下位	部位	左右	数	備考	GL	Bp	Bd
SK25	キジ科	足根中足骨	左	1	遠位欠損。♂。野生種。キジ及びヤマドリ標本とほぼ同大。			
SK25	ニワトリ？	脛足根骨	左	1	骨幹部分のみ残存。ニワトリ[名古屋コーチン]標本とほぼ同大。			
SK25	ガン族	橈骨	右	1	近位端部欠損。遠位外側に削り(切断面)。			
SK25	ガン族？	尺骨	右	1	近位から中位と遠位端の一部欠損。			
SK25	カモ亜科	手根中手骨	左	1	両端部欠損。オナガガモ標本と同大。			
SK25	カモ亜科	手根中手骨	右	1	近位端部欠損。オナガガモ標本と同大。			
SK25	ツル科	上腕骨	右	1	近位部分残存。気孔のほぼ直下(遠位)と後縁のほぼ直下(遠位)にそれぞれ長軸に対してほぼ直行(横位)する切断面を有する。そのため、気孔より上(近位)の近位端部も欠損。尾側面の窩腹側脚の直下(遠位)にも25㎜程の横位の切痕があり、その切痕の背側には径5㎜程の穿孔を伴っている。サイズからタンチョウか？		45±	
SK92	カモ亜科	上腕骨	左	1	近位のみ残存。本遺構出土右上腕骨のと同大。		19.3	
SK92	カモ亜科	上腕骨	右	1	ほぼ完存。遠位端部に切断面有。オナガガモ標本と同大。	92.5	19.1	
SK92	カモ亜科	大腿骨	左	1	近位端部欠損			
SK143	キジ科	手根中手骨	右	1	キジ標本と同大。			
SK143	キジ科	足根中足骨	左	1	遠位端部欠損。♀。キジ標本と同大。			
SK190	カモ亜科	上腕骨	左	1	ほぼ完存。遠位端部一部欠損。オナガガモ標本よりやや大きい。	93.6	20.2	
SU381	キジ科	尺骨	右	1	近位から中位が欠損。キジ標本と同大。			28.2
SU381	ガン族	上腕骨	左	1	近位から中位が欠損。遠位端部に近い骨幹外側に切痕有。			
SU381	同定不可	脛足根骨	左	1	骨幹部分のみ残存。キジ標本に近いサイズ。			
SU381	同定不可	四肢骨		1	骨幹部分のみ。脛足根骨？			
SP374	カモ亜科	手根中手骨	左	1	小型。近位欠損。			
合計				18				

計測値単位:㎜

5表　SK25出土哺乳類遺体一覧（1）

綱より下位	部位	左右	数	同一	備考
イヌ	頭蓋骨		1	A	右頭頂骨の一部と右頬骨弓に欠損がある。ほぼ完存。(××××P×234M12)※左右共に。全長(A-Pr:193.0㎜, Pr-B:173.5㎜)
イヌ	上顎犬歯	右	1	A	歯根部分欠損。
イヌ	下顎骨	左	1	A	完存。頭蓋骨と同一。(××××P×234M12×)全長(Id-Goc(1):139.5㎜, id-mid(2):141.0mm)
イヌ	環椎		1	A	完存。頭蓋骨と同一。
イヌ	軸椎		1	A	完存。頭蓋骨と同一。
イヌ	第3頸椎		1	A	完存。頭蓋骨と同一。
イヌ	寛骨	右	1	A？	腸骨部分
イヌ	踵骨	右	1	A？	
イヌ	第2中足骨	右	1	A？	
イヌ	第3中足骨	右	1	A？	
イヌ	第4中足骨	右	1	A？	
イヌ	上顎犬歯	左	1	B	
イヌ	下顎骨	左	1	B	下顎体部分のみ残存。右と同一。(I123CP123×M123)M1から下顎体がやや上に傾く(角度が上がる)。やや小型か。
イヌ	下顎骨	右	1	B	下顎体部分のみ残存。左と同一。(I123CP×2●4M12×)
イヌ	橈骨	右	1	C	幼獣。遠位部分。遠位端部未癒合。
イヌ	大腿骨	左	1	C	幼獣。両端部未癒合。両端部無での全長:66.7㎜
シカ	角	右	1	F	角坐～第1分岐にかけて残存。きわめて大型(角坐長径58㎜)。主幹の外側に切痕が見られる。主幹及び分岐共に遠位部分の残存状態が悪いため切断有無は不明。
シカ	角	右	1	G	第1分枝近位部分。近遠位共に切断面を有する。全長23㎜。
シカ	角	右	1	H	第2分岐部分。遠位の両枝とも切断面を有する。主幹の方は内側に縦の切断面も有する。縦に切断後、横に縦の切断面まで切断。近位は残存状態が悪く切断面の有無は確認できず。
シカ	角	右	1	I	第3分岐部分。近位及び遠位両枝それぞれ切断面を有する。全長45㎜。
シカ	角	右	1	J	第2分岐部分。近位及び遠位両枝それぞれに切断面を有する。第2分枝の切断面は縦に切断され近位切断面と垂直に交わる。近位切断面に釘の一部が残る。主幹切断面は内側より何回か切断を試みた跡が見られる。外側の縁の角が削られている。さらに切断面外側の5㎜下に平行に切痕が見られる。全体的に他の鹿角資料に比べて摩耗が顕著。

●歯脱落後、歯槽埋没

5表　SK25出土哺乳類遺体一覧（２）

綱より下位	部位	左右	数	同一	備考
ネコ	頭蓋骨		1	D	左右上顎、脳頭蓋・後頭骨部分などが残存。左(CP234×)右(CP234M)
ネコ	下顎犬歯	左	1	D	歯根部分が形成途上。
ネコ	下顎骨	左	1	D	(×××CP34M)M頬側歯槽の歯周症による退縮が顕著。下顎枝部分が欠損。
ネコ	下顎骨	右	1	D	(×××CP34M)M頬側歯槽の歯周症による退縮が顕著。下顎枝部分が欠損。
ネコ	軸椎		1	D	完存。
ネコ	頸椎		6	D	内ほぼ完存4点。2点椎体部分のみ。
ネコ	胸椎		7	D	内ほぼ完存5点。2点椎体部分のみ。※他椎弓部分3片含む。
ネコ	腰椎		8	D	内ほぼ完存2点。6点椎体部分のみ。※他椎弓部分3片含む。
ネコ	仙骨		1	D	第1及び第2仙椎部分のみ。
ネコ	尾椎		7	D	
ネコ	上腕骨	左	1	D	ほぼ完存。
ネコ	上腕骨	右	1	D	骨幹及び遠位端の一部が欠損。
ネコ	橈骨	左	1	D	完存。
ネコ	橈骨	右	1	D	骨幹の一部が欠損。
ネコ	尺骨	左	1	D	骨幹の一部欠損。
ネコ	尺骨	右	1	D	近位端残存。
ネコ	第2中手骨	左	1	D	
ネコ	第2中手骨	右	1	D	
ネコ	第3中手骨	左	1	D	
ネコ	第4中手骨	左	1	D	
ネコ	第4中手骨	右	1	D	
ネコ	第5中手骨	左	1	D	
ネコ	寛骨	左	1	D	寛骨臼周辺と腸骨の一部が残存。
ネコ	寛骨	右	1	D	坐骨部分破片。
ネコ	大腿骨	左	1	D	骨幹の一部欠損。
ネコ	大腿骨	右	1	D	骨頭及び大転子部分
ネコ	脛骨	左	1	D	完存。
ネコ	腓骨	左	1	D	近位端部欠損。
ネコ	距骨	左	1	D	完存。
ネコ	踵骨	左	1	D	完存。
ネコ	第2中足骨	左	1	D	
ネコ	第3中足骨	左	1	D	
ネコ	第4中足骨	左	1	D	
ネコ	第4中足骨	右	1	D?	
ネコ	中手／足骨		1	D?	近位端部欠損。
ネコ	基節骨		1	D	
ネコ	肋骨		8	D	内関節部分4
ネコ	橈骨	右	1	E	ほぼ完存。右尺骨と同一個体。
ネコ	尺骨	右	1	E	ほぼ完存。右橈骨と同一個体。
同定不可	大腿骨		1	A？	骨頭部分のみ。
同定不可	四肢骨		5	C?	幼獣。骨幹部分破片。イヌorネコ？
同定不可	四肢骨		1	C?	骨幹部分。大腿骨遠位？イヌ幼獣？
同定対象外	肋骨		1	ー	骨幹部分。ネコ？
同定対象外	肋骨		1	A？	イヌ？
合計			100		

6表　SK45出土哺乳類遺体一覧

綱より下位	部位	左右	数	備考
イヌ	頭蓋骨		1	前頭骨，頭頂骨，頭蓋底(蝶形骨)，左右上顎骨[左:(P4M12)，右:(M×2)]が残存。
イヌ	上顎犬歯	左	1	
イヌ	上顎犬歯	右	1	歯冠部分欠損。
イヌ	上顎第3前臼歯	右	1	前半部欠損。
イヌ	上顎第4前臼歯	右	1	
イヌ	下顎骨	左	1	P4～M2までの下顎体部分。(×M1×)
イヌ	下顎骨	右	1	(I××3CP×●34M123)Cの前縁とI3歯冠全体が摩耗し象牙質が露出。全長(Id-Goc(1):135.1㎜，id-mid(2):136.5mm)
イヌ	環椎		1	右環椎翼が欠損。
イヌ	軸椎		1	歯突起欠損
イヌ	軸椎		1	ほぼ完存。
イヌ	第3頸椎		1	ほぼ完存。
イヌ	第4頸椎		1	ほぼ完存。
イヌ	第5頸椎		1	ほぼ完存。
イヌ	第7頸椎		1	左右前関節突起欠損。
イヌ	胸椎		6	椎体部分4，椎弓部分2
イヌ	第1腰椎		1	椎弓部分欠損。
イヌ	腰椎		3	椎弓部分1，椎体部分2
イヌ	肩甲骨	左	1	関節部分とその近位が残存。
イヌ	肩甲骨	右	1	関節部分とその近位が残存。
イヌ	上腕骨	右	1	近位欠損。
イヌ	橈骨	右	1	骨幹部分のみ残存。
イヌ	尺骨	右	1	近位のみ残存。
イヌ	中間橈側手根骨	右	1	ほぼ完存。
イヌ	第3中手骨	左	1	遠位欠損。
イヌ	大腿骨	左	1	骨頭背面が欠損している他はほぼ完存。全長:169.6㎜
イヌ	脛骨	右	1	近位欠損。
イヌ	距骨	右	1	完存。
イヌ	踵骨	右	1	関節部分の背面右側に骨増殖が見られる。
イヌ	第3中足骨	右	1	
イヌ	第4中足骨	右	1	
イヌ	肋骨		5	骨幹部分のみ残存。
イヌ	肋骨		1	関節付近のみ。
同定対象外	ー		◎	破片資料
合計			43	

●歯脱落後、歯槽埋没

7表　SK61・121出土哺乳類遺体一覧

遺構名	綱より下位	部位	左右	数	備考
SK061・121	イヌ	頭蓋骨		1	右頬骨突起・後頭骨付近破片3
SK061・121	イヌ	上顎骨	左	1	第2前臼歯付近顎体部分。(×P×2)
SK061・121	イヌ	下顎骨	右	1	M1付近下顎底が欠損。M1歯槽の下顎体頬側に横位の人為的傷が2条重複する形であり。(×××CP×●34M12×)全長(Id-Goc(1):126.2㎜, id-mid(2):125.4mm)
SK061・121	イヌ	環椎		1	左関節部分
SK061・121	イヌ	軸椎		1	
SK061・121	イヌ	肩甲骨	左	1	関節部分(近位)及び遠位欠損。
SK061・121	イヌ	橈骨	左	1	骨幹部分のみ残存。
SK061・121	イヌ	基節骨		1	
SK061・121	イヌ？	肩甲骨		1	肩甲棘部分
SK121	イヌ	頭蓋骨		1	頭蓋骨後半部(頭頂骨)及び前頭骨部分。矢状及び冠状縫合はほぼ癒合済み。頭頂骨右側面に切痕有。
SK121	イヌ	頭蓋骨		1	前頭骨及び後頭骨部分。矢状及び冠状縫合が未癒合。
SK121	イヌ	上顎骨	左	1	第3前臼歯より後ろの歯槽及び頬骨側頭突起。(P×4M×2)
SK121	イヌ	上顎骨	右	1	第4前臼歯より後ろの歯槽及び頬骨側頭突起。(P4M1×)
SK121	イヌ	下顎骨	右	1	切歯歯槽と筋突起の一部が欠損。(CP1●34M12×)C前縁がやや摩耗。
SK121	イヌ	環椎		1	完存。
SK121	イヌ	軸椎		1	ほぼ完存。
SK121	イヌ	第3頸椎		1	ほぼ完存。前後椎頭共に未癒合。
SK121	イヌ	第4頸椎		1	ほぼ完存。前後椎頭共に未癒合。
SK121	イヌ	第5頸椎		2	ほぼ完存。前後椎頭共に未癒合。
SK121	イヌ	第6頸椎		2	ほぼ完存。前後椎頭共に未癒合。1点、後側椎頭に切痕及び右後関節突起に切断面を有する。上面から観察すると2つの切痕の位置は一致する。
SK121	イヌ	胸椎		3	1点椎弓部分のみ。2点共に椎頭部分未癒合。
SK121	イヌ	第2腰椎		1	ほぼ完存。前後椎頭共に未癒合。
SK121	イヌ	第3腰椎		1	ほぼ完存。前後椎頭共に未癒合。
SK121	イヌ	寛骨	左	1	恥骨部分欠損。腸骨稜、坐骨結節及び坐骨弓縁未癒合。
SK121	イヌ	大腿骨	左	1	近位欠損。遠位端部未癒合。
SK121	イヌ	距骨	左	1	完存。
SK121	イヌ	第2中足骨	左	1	完存。
SK121	イヌ	第3中足骨	左	1	近位端部及び遠位欠損
SK121	イヌ	第4中足骨	左	1	完存。
SK121	イヌ	第5中足骨	左	1	完存。
SK121	イヌ	肋骨		2	中位から遠位が欠損。
合計				36	

●歯脱落後、歯槽埋没

8表　SP151出土哺乳類遺体一覧(1)

綱より下位	部位	左右	数	備考
イヌ	頭蓋骨		1	切歯骨、右上顎骨の上面などが欠損。L(cdm×34M1)R(×dm×34M1)※左右共にM1は舌側先端が萌出。C・P4・M2は歯槽内に形成が確認。生後4か月程
イヌ	下顎骨	左	1	切歯歯槽の一部が欠損。(×××cdm234)※I3，C ，M1・2は歯槽内に埋伏。M1は一部、顎外に萌出。
イヌ	下顎骨	右	1	筋突起と切歯歯槽の一部が欠損。(×××cdm234)※I3，C ，M1・2は歯槽内に埋伏。M1は一部、顎外に萌出。
イヌ	環椎		1	ほぼ完存。
イヌ	軸椎		1	椎体前後共に未癒合。歯突起尖有。
イヌ	第3頸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第4頸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第5頸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第6頸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第7頸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第1胸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第2～9胸椎		8	1点を除いて椎弓と椎体は未癒合。前後椎頭も未癒合。[完存:1，椎弓のみ・椎体のみ:各8]
イヌ	第10胸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第11胸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第12胸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第13胸椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第2腰椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第3腰椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第4腰椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第5腰椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第6腰椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	第7腰椎		1	椎頭前後共に未癒合。
イヌ	椎体・椎頭部分		48	
イヌ	仙骨		1	第1～第3仙椎。第1と第2仙椎は癒合済み。第3仙椎未癒合。近位椎頭未癒合(椎頭自体は有り)。
イヌ	尾椎		7	
イヌ	肩甲骨	左	1	近位端部未癒合。
イヌ	肩甲骨	右	1	関節上結節癒合、骨端線残る。
イヌ	上腕骨	左	1	両端部未癒合。両端部有。
イヌ	上腕骨	右	1	両端部未癒合。両端部有。
イヌ	橈骨	左	1	両端部未癒合。両端部有。
イヌ	橈骨	右	1	両端部のみ。骨幹とは未癒合。※骨幹は無い。
イヌ	尺骨	左	1	近位端未癒合。遠位端部癒合済み、骨端線わずかに残る。
イヌ	尺骨	右	1	近位端未癒合。近位端部有。遠位端部癒合済み、骨端線わずかに残る。
イヌ	中間橈側手根骨	左	1	完存。
イヌ	中間橈側手根骨	右	1	完存。
イヌ	尺側手根骨	左	1	完存。
イヌ	副手根骨	左	1	完存。
イヌ	副手根骨	右	1	完存。
イヌ	第2手根骨	左	1	完存。
イヌ	第3手根骨	左	1	完存。
イヌ	第4手根骨	左	1	完存。
イヌ	第1中手骨	左	1	完存。
イヌ	第1中手骨	右	1	完存。
イヌ	第2中手骨	左	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第3中手骨	左	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第4中手骨	左	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第5中手骨	左	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第2中手骨	右	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第3中手骨	右	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第4中手骨	右	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第5中手骨	右	1	遠位端部未癒合。
イヌ	陰茎骨		1	遠位欠損。
イヌ	寛骨	左	1	腸骨・坐骨・恥骨未癒合＋端部未癒合。
イヌ	寛骨	右	1	腸骨・坐骨・恥骨未癒合＋端部未癒合。
イヌ	大腿骨	左	1	両端部未癒合。骨頭部分と遠位端部有。
イヌ	大腿骨	右	1	両端部未癒合。骨頭部分と遠位端部有。
イヌ	脛骨	左	1	両端部未癒合。両端部有。
イヌ	腓骨	右	1	骨幹部分のみ。

8表　SP151出土哺乳類遺体一覧(2)

綱より下位	部位	左右	数	備考
イヌ	膝蓋骨	左	1	完存。
イヌ	膝蓋骨	右	1	完存。
イヌ	距骨	左	1	完存。
イヌ	距骨	右	1	完存。
イヌ	踵骨	右	1	完存。踵骨隆起未癒合。
イヌ	中心足根骨	左	1	完存。
イヌ	中心足根骨	右	1	完存。
イヌ	第1足根骨	右	1	完存。
イヌ	第3足根骨	左	1	完存。
イヌ	第3足根骨	右	1	完存。
イヌ	第4足根骨	右	1	完存。
イヌ	第2中足骨	左	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第3中足骨	左	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第4中足骨	左	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第2中足骨	右	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第3中足骨	右	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第4中足骨	右	1	遠位端部未癒合。
イヌ	第5中足骨	右	1	遠位欠損。
イヌ	中手／足骨遠位端部		12	
イヌ	基節骨		12	完存。但し近位端未癒合。
イヌ	基節骨・近位端部		9	
イヌ	中節骨		6	
イヌ	末節骨		5	
イヌ	肋骨	左	14	
イヌ	肋骨	右	11	
イヌ	肋骨	—	43	遠位端片17，骨幹部分片26
同定対象外	ー		28	破片資料。イヌの一部。
合計			276	

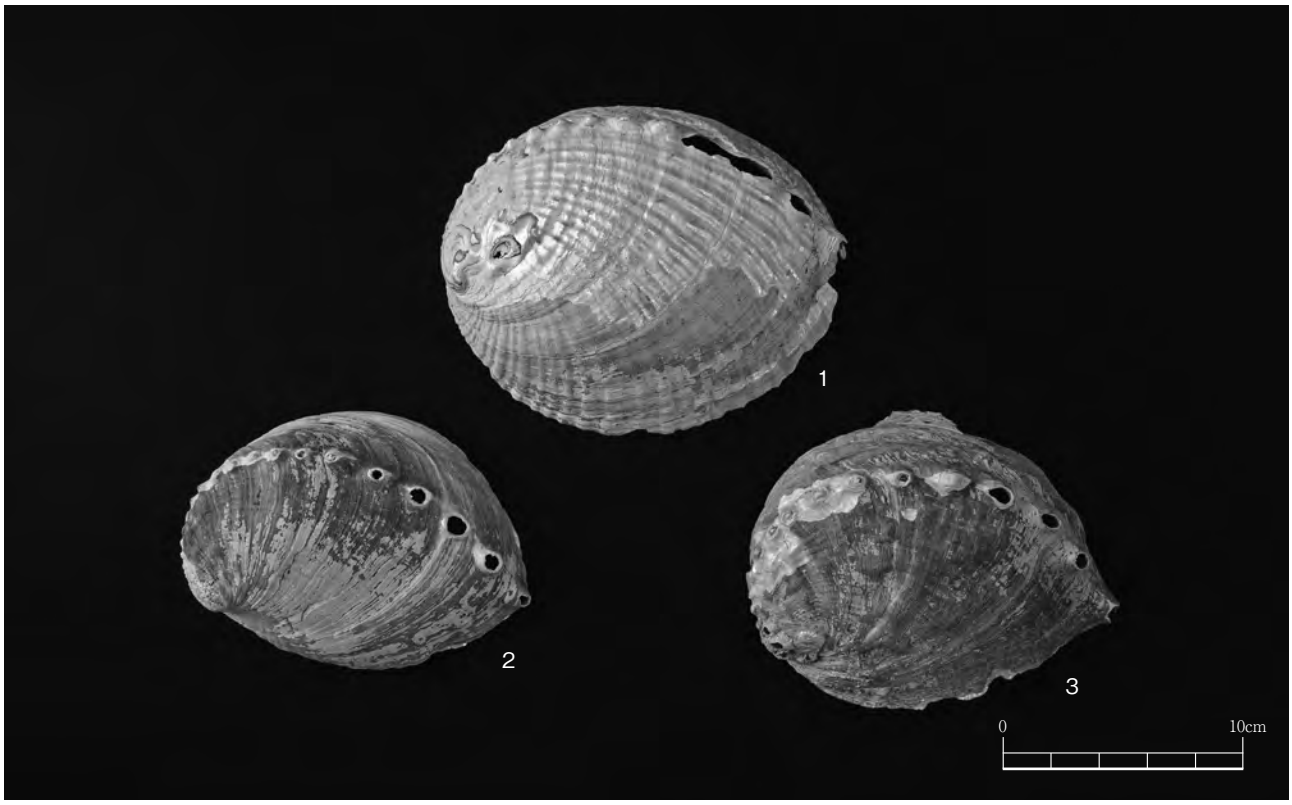
9表　主要遺構以外出土哺乳類遺体一覧

遺構名	層位	綱より下位	部位	左右	数	備考
SD31		イヌ	上腕骨	右	1	両端部未癒合。
SK58		イヌ	第3頸椎		1	左椎弓部分
SK108		ヒト	下顎第1大臼歯	左	1	歯冠部分。
SX119		ウマ	上顎第1後臼歯	右	1	咬合面及び歯根部分欠損。
SK191		イヌ	大腿骨	右	1	中位～遠位欠損。骨頭及び大転子部分未癒合。
SU381		同定不可	四肢骨		3	骨幹破片
SU381		同定不可	上腕骨	右	1	幼獣。近位端部未癒合。近位端部欠損。イヌ？
—	1層	イヌ	橈骨	左	1	骨幹部分のみ残存。骨折後治癒した跡有。
表土		イヌ	頸椎		1	椎弓の一部。
表土		イヌ	尺骨	左	1	中位～遠位欠損。肘頭部分癒合済みであるが骨端線残る。
表土		イヌ	大腿骨	右	1	大転子欠損。骨頭(近位)及び遠位端未癒合。
表土		ネコ	上腕骨	左	1	完存。
撹乱		イヌ	第6腰椎		1	椎頭前後共に未癒合。
撹乱		同定対象外	肋骨		1	骨幹部分のみ残存。イヌ？
撹乱		同定不可	頭蓋骨		1	内胞部分。イヌ？

10表　法学政治学系総合教育棟地点出土動物遺体出土一覧

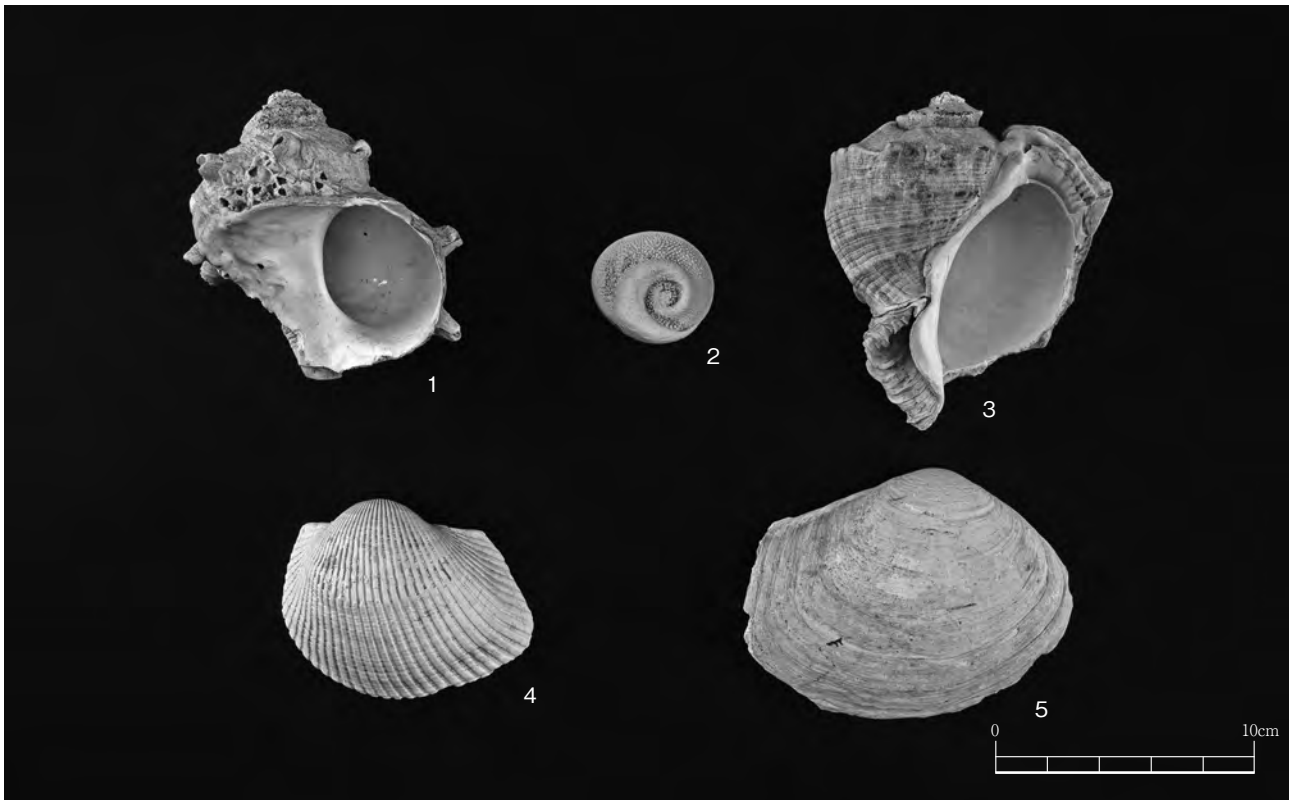
出土位置	貝類	魚類	鳥類	哺乳類
SK22	サザエ[1]			
SK25	ヤマトシジミ[50], ハマグリ[23], サザエ[9], マダカアワビ[3], ミルクイ, アサリ[各2], メガイアワビ, クロアワビ, アカニシ, アカガイ, イガイ, カガミガイ[各1]	タイ科(1), ヒラメ(1), フグ科(2), 同定不可(1), 同定対象外(3)	キジ科(1), ニワトリ？(1), ガン族(2), カモ亜科(2), ツル科(1)	ネコ(70)[2], イヌ(16)[3], シカ(6), 同定不可(7), 同定対象外(2)
SD31	マガキ[41], ハマグリ[26], サザエ[7], アカニシ, サルボウ, ナミマガシワ[各2], ヤマトシジミ[4], アサリ[3], メガイアワビ, クロアワビ, マダカアワビ, アカガイ[各1]			イヌ(1)
SE33	アカガイ[236], ハマグリ[54], マガキ[42], サザエ[20], ヤマトシジミ[10], アカニシ[7], アサリ[3], メガイアワビ, サルボウ, ナミマガシワ[各2], クロアワビ, マダカアワビ[各1],			
SK42	サザエ[4]			
SK45		マダイ(1)		イヌ(43)[1]
SE46	サザエ, アカニシ[各1]			
SK47	サザエ[1]			
SK58	バイ[2], サザエ, アカガイ[各1]			イヌ(1)
SE60	サザエ[4], ミルクイ[1]			
SU77	アサリ[27], ハマグリ[9], アカガイ[2], シオフキ[1]			
SK87		マダイ亜科(1)		
SK92	ハマグリ[13], ヤマトシジミ[8], アカニシ, バイガイ, アカガイ[各4], サザエ[3], クロアワビ[2], メガイアワビ, マダカアワビ, ミルクイ[各1]		カモ亜科(3)	
SK108		カツオ(1)		ヒト(1)
SK61・121	サザエ[1]※SK121	ヒラメ(1)※SK121		イヌ(36)[2]
SX119				ウマ(1)
SK140	サザエ, アカニシ[各1]			
SK143	サザエ[2]		キジ科(2)	
SP151				イヌ(248)[1] 同定対象外(28)
SK158	アカガイ[1]			
SK168	サザエ[4], アカニシ[1]			
SK190			カモ亜科(1)	
SK191	サザエ[3]	マダイ亜科(1)		イヌ(1)
SP245		同定不可(1)		
SU366		マダイ(1)		
SP374			カモ亜科(1)	
SU381	サザエ[24], ハマグリ[9], アカニシ, アサリ[各3], マダカアワビ[1]	タラ科[マダラ](5), フサカサゴ科(2), スズキ属(3), タイ科[マダイ](3), ボラ科(1), カツオ(1), 同定不可(2), 同定対象外(7＋α)	キジ科(1), ガン族(1), 同定不可(2)	同定不可(4)
SE489	アカガイ[1]			
1層	ミルクイ[1]	マグロ属(1)		イヌ(1)
撹乱	サザエ, マガキ, ヤマトシジミ, ハマグリ[各1]			イヌ(1), 同定不可(1), 同定対象外(1)
表土	サザエ, サルボウ[各4], アカニシ[3], バイガイ, ミルクイ, ハマグリ[各1]			イヌ(3)[1], ネコ(1)

[]:最小個体数, ():破片数



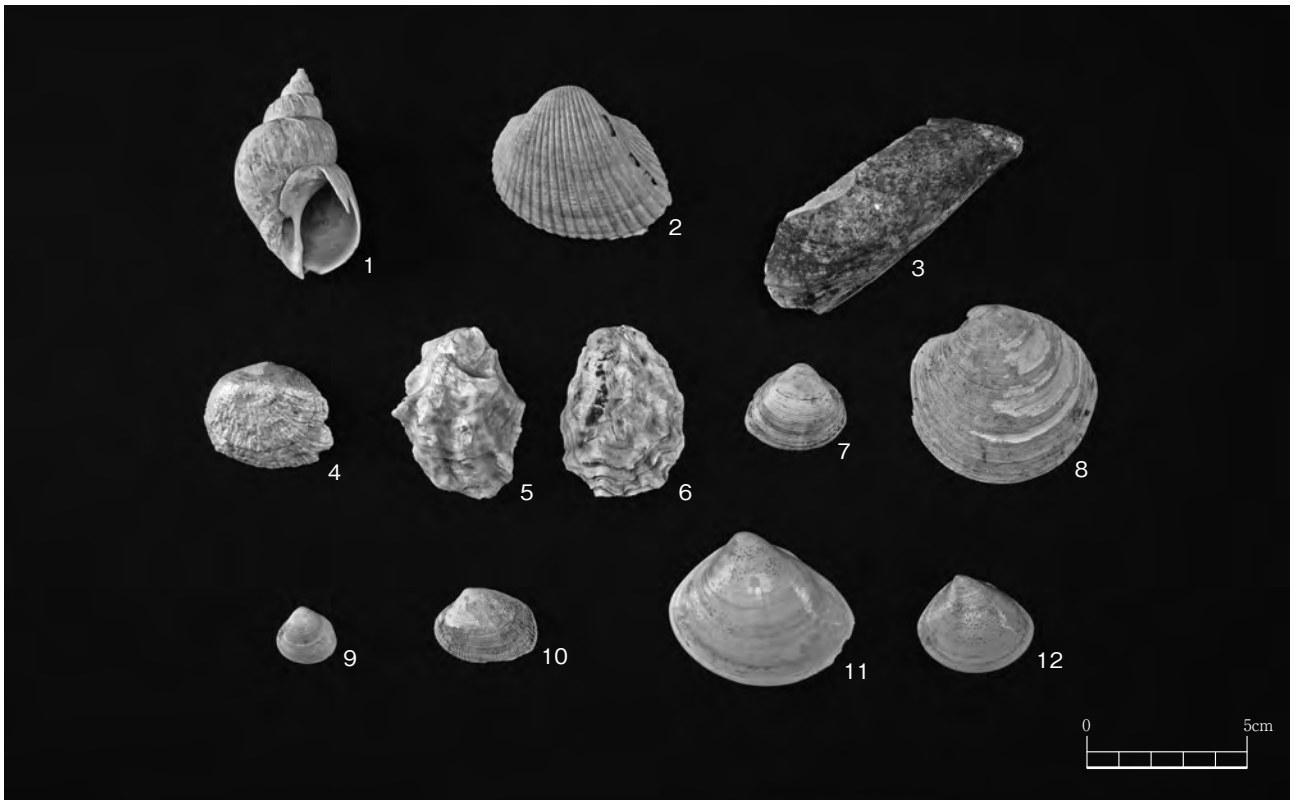
PL.1　貝類遺体（1）
1．メガイアワビ　2．クロアワビ　3．マダカアワビ

※すべて SK92



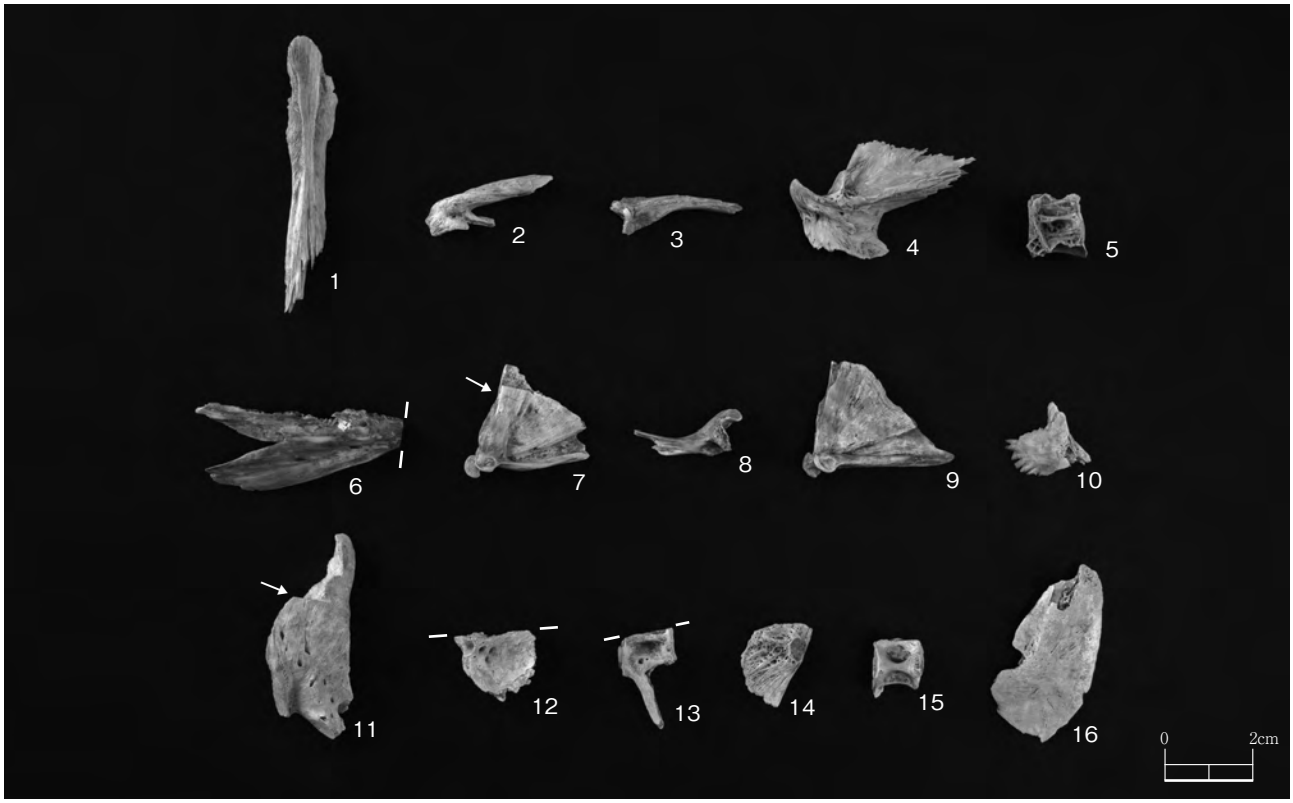
PL.2　貝類遺体（2）
1・2．サザエ（1.殻，2.蓋）　3．アカニシ　4．アカガイ・左殻　5．ミルクイ・右殻

※5のみ SK25、その他は SE33



PL.3　貝類遺体（3）

1. バイ　2. サルボウ・左殻　3. イガイ・右殻　4. ナミマガシワ・左殻
5・6. マガキ（5. 左殻，6. 右殻）　7. シオフキ・右殻　8. カガミガイ・左殻
9. ヤマトシジミ・左殻　10. アサリ・左殻　11・12. ハマグリ・左殻
※ 1．SK92，2・4 ～ 6・9・11・12．SE33　3・8．SK25　7・10．SU77



PL.4　魚類遺体（SU381 出土）

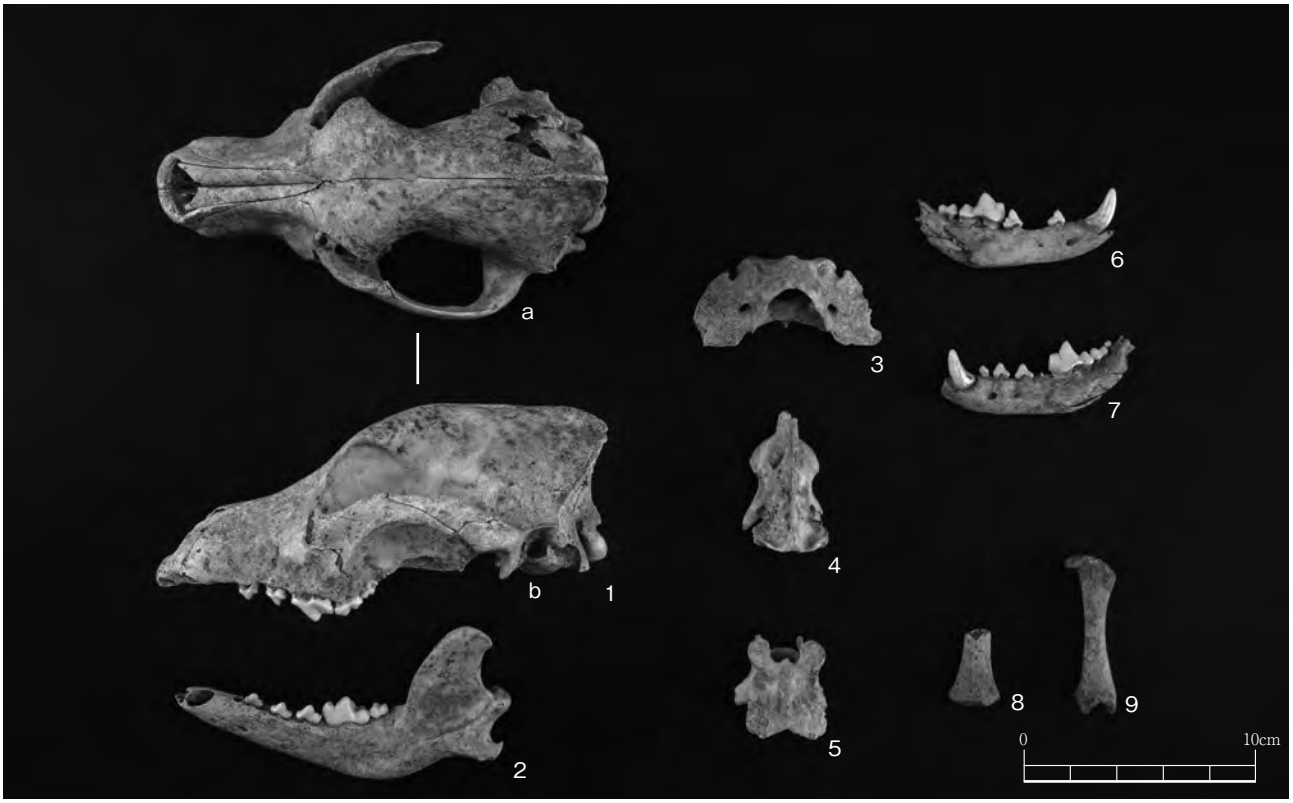
1 ～ 5. タラ科（1. 副蝶形骨，2. 右後側頭骨，3. 右主上顎骨，4. 右角骨，5. マダラ腹椎）
6・7. フサカサゴ科（6. 右歯骨，7. 右方骨）　8 ～ 10. スズキ属（8. 右主上顎骨，9. 右方骨，10. 前鰓蓋骨？）
11. マダイ・前頭骨　12・13. タイ科（12. 右主鰓蓋骨，13. 尾椎）
14. ボラ科・左主鰓蓋骨　15. カツオ・尾椎　16. 同定対象・左間鰓蓋骨（— —：切断面，→：切断箇所）

PL.5　魚類遺体（SU381 以外の遺構出土）

1. タイ科・尾椎（a. 右側面　b. 正面　c. 側面）　2. ヒラメ・左前鰓蓋骨　　3・4. フグ科・右前上顎骨　5. マダイ・前頭骨
6. マダイ亜科・左歯骨　7. カツオ・尾椎　8. ヒラメ・腹椎　9. マダイ亜科・左歯骨　10. マグロ属・尾椎
※1 ～ 4.SK25　5.SK45　6.SK87　7.SK108　8.SK121　9.SK191　10.1 層（— —：切断面, →: 咬痕）

PL.6　鳥類遺体

1. ツル科・右上腕骨　2 ～ 4. カモ亜科・上腕骨（2・4. 右，3. 左）　5. ガン族・左上腕骨　6. ガン族？・右尺骨
7. キジ科・右尺骨　8. ガン族・右橈骨（a. 腹面　b. 背面）　9・10. カモ亜科・左手根中手骨　11. カモ亜科・右手根中手骨
12. カモ亜科・左大腿骨　13. キジ科・右手根中手骨　14・15. キジ科・左足根中足骨　16. ニワトリ？・左脛足根骨
※1・6・8・10・11・15・16.SK25　2・3・12.SK92　4.SK190　5・7.SU381　9.SP374　13.SK143



PL.7　出土哺乳類遺体（1）SK25　イヌ

1. 頭蓋骨（a. 上面観，b. 左側面観）　2. 左下顎骨　3. 環椎　4. 軸椎　5. 第 3 頸椎　6・7. 下顎骨（6. 右，7. 左）　8. 右橈骨
9. 左大腿骨

※1 ～ 5：資料群 A，6・7：資料群 B，8・9 資料群 C

PL.8　出土哺乳類遺体（2）SK25　鹿角

1. 資料 F（角坐～第 1 分岐）　2. 資料 H（第 2 分岐）3. 資料 I（第 3 分岐）　4. 資料 G（第 1 分枝近位）
5. 資料 J（第 2 分岐：a. 内側面観，b. 正面観，c. 底面観）

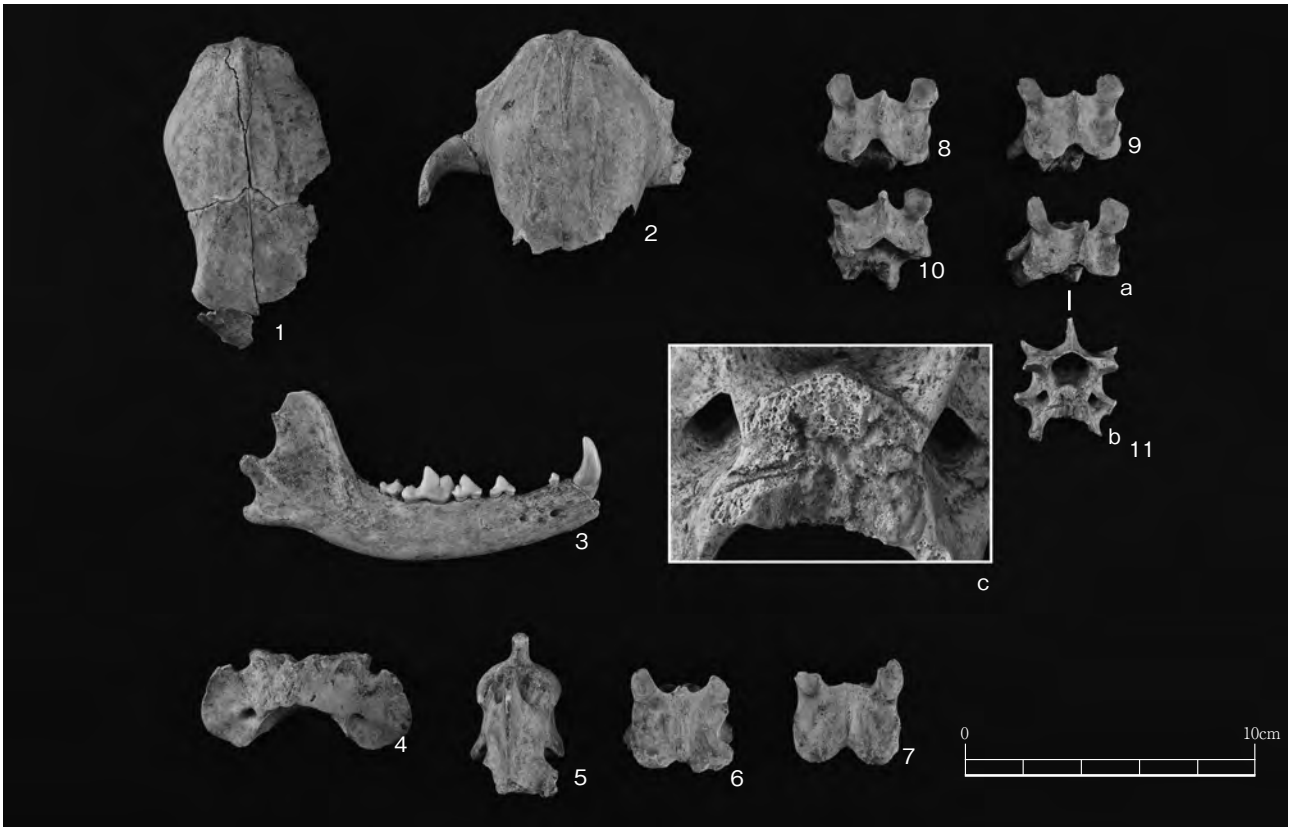
※全て右角

PL.9　出土哺乳類遺体（3）SK25　ネコ／ヒト，ウマなど

1 ～ 13. ネコ：SK25 資料群 D（1・2. 下顎骨［1. 右，2. 左］，3. 左上腕骨，4. 左橈骨，5. 左脛骨，6. 仙骨，7 ～ 13. 尾椎），
14・15. ネコ：SK25 資料群 E（14. 右尺骨，15. 右橈骨），16. ウマ・右上顎第 1 後臼歯：SX119，
17. ヒト・左下顎第 1 大臼歯：SK108，18. 同定不可（イヌ幼獣？）・右上腕骨：SU381

PL.10　出土哺乳類遺体（4）SK45　イヌ

1・2. 頭蓋骨（1. 左上顎骨，2. 頭蓋底［底面観］）　3・8. 下顎骨（3. 左，8. 右）　4. 右上腕骨　5. 右踵骨　6. 左大腿骨
7. 右脛骨　9. 軸椎　10. 右橈骨

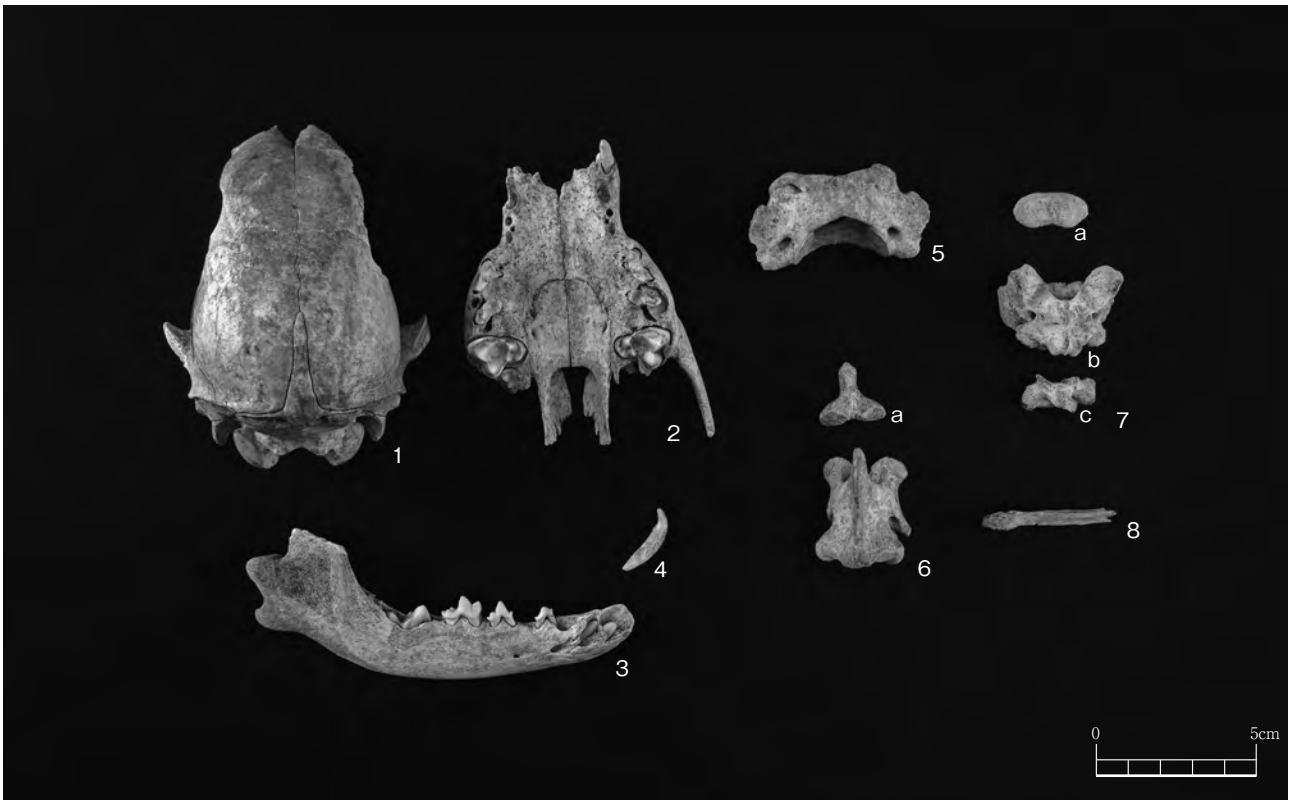


PL.11　出土哺乳類遺体（5）SK121　イヌ

1・2. 頭蓋骨・上面観　3. 右下顎骨　4. 環椎　5. 軸椎　6. 第 3 頸椎　7. 第 4 頸椎　8・9. 第 5 頸椎
10・11. 第 6 頸椎（11a. 上面観，b. 後面観，c. 後面観・人為的傷部分拡大）

PL.12　出土哺乳類遺体（6）SK61・121　イヌ　右下顎骨

b. 人為的傷部分拡大　　※a の囲い部分



PL.13　出土哺乳類遺体（7）SP151　イヌ　頭部

1・2. 頭蓋骨（1. 脳頭蓋・上面観，2. 上顎骨・底面観）　3. 右下顎骨　4. 右下顎乳犬歯　5. 環椎　6. 軸椎（a. 歯突起部分）
7. 仙骨（a. 近位椎頭，b. 第 1・2 仙椎，c. 第 3 仙椎）8. 陰茎骨

PL.14　出土哺乳類遺体（8）SP151　イヌ　四肢骨

1. 右肩甲骨　2. 左上腕骨（a. 近位端，b. 骨幹，c. 遠位端）　3. 左橈骨（a. 近位端，b. 骨幹，c. 遠位端）4. 左尺骨
5. 左寛骨（a. 腸骨，b. 坐骨，c. 恥骨）　6. 左大腿骨（a. 骨頭，b. 骨幹，c. 遠位端）　7. 左脛骨（a. 近位端，b. 骨幹，c. 遠位端）

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき　ほうがくせいじがくけいそうごうきょういくとうちてん
書名	東京大学本郷構内の遺跡　法学政治学系総合教育棟地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書
シリーズ番号	21
編著者名	大成可乃（編著）、成瀬晃司、大貫浩子、香取祐一、湯沢　丈、宮崎勝美、石井龍太、阿部常樹、高橋玲土
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒 153-8904 東京都目黒区駒場 4 － 6 － 1　駒場リサーチキャンパス内 TEL：03 － 5452 － 5103
発行年月日	2025 年 12 月 19 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき 東京大学本郷構内の遺跡 ほうがくせいじがくけい 法学政治学系 そうごうきょういくとうちてん 総合教育棟地点	とうきょうと　ぶんきょうく 東京都　文京区 ほんごう 本郷 7ちょうめ 3ばん 1ごう 7丁目 3番 1号	13105	47	35° 42′ 44″	139° 45′ 35″	2003/2/17 ～ 2003/4/18	946㎡	東京大学法学政治学系総合教育棟新営に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷構内の遺跡 法学政治学系 総合教育棟地点	大名屋敷 武家屋敷	近世	建物址 2 基､溝 3 基、井戸 7 基、土坑 109 基、小穴 311 基、地下室 7 基、など	陶磁器･土器、人形･玩具、瓦、金属製品、銭貨、石製品、ガラス製品、貝骨製品	先手組屋敷に伴うと推定される 17 世紀前半代の遺構を確認。 1760 年代の本郷邸全体図とされる「前田家本郷御屋鋪図」(三井文庫所蔵）に描かれた、「西ノ穴」に対応すると推測される大形土坑 SK25 を検出。

要　約	本地点は、天和 2 年（1682）の火災を契機として、それ以前は東京大学本郷構内の遺跡工学部 14 号館地点と同じ先手組屋敷に、以後は加賀藩邸に帰属する事が文献史料調査によって明らかとなった。よって今回検出された 17 世紀前半代の遺物が出土した遺構は、先手組屋敷に伴う可能性が高い。 検出された全遺構 460 基のうち、18 世紀代に比定される遺構が最も多く、本地点では、当概期の利用が最も活発であった事が推測される。 最も多く確認された小穴の大半は、18 世紀後半から 19 世紀代に比定されるものであるが、その多くは単独で検出され、重複するものは僅かであった。以上の事から、17 世紀代、先手組屋敷であった頃は、建築物が建つような空間あるいは利用状況にはなかった可能性があり、また、加賀藩邸に取り込まれてからも、建物のスクラップアンドビルドが繰り返される場所ではなく、建物密度も余り高くない空間であった事が推測される。

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 21

東京大学本郷構内の遺跡

法学政治学系総合教育棟地点

2025 年 12 月 19 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 － 6 － 1
https://www.aru.u-tokyo.ac.jp

印　刷　明誠企画株式会社

附図　法学政治学系総合教育棟地点　全体図(S=1/150)